宗典部

第十五卷

BL Tripitaka. Japanese. 1929
1411 Showa shinshu kokuyaku
T8J3 Daizokyo
1929
v.39

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂

國譯大藏經

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
v.39

昭和新纂 國譯大藏經 宗典部 第十五卷

華嚴經探玄記第二 目次

卷第七……一
卷第八……九二
卷第九……一七八
卷第十……二四三
卷第十一……三〇四
卷第十二……三八〇
卷第十三……四六〇

華嚴經探玄記 第二

宗典部
第十五卷

【一】當品以下三品は第五會にして前會の解行を廻向して眞正に向ふ大願を明す。今は序説のうち諸佛序なり初に名を釋す。

【喜足天】梵には兜率、具には都史多、譯しては知足といふ、新には喜足といふ。

【二】當品の來意を明す。

【無爲】生空所顯の無爲眞如の理性

【三】當品の宗趣を明す。

華嚴經探玄記　卷第七　第五廻向を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

（一）如來昇兜率天宮一切寶殿品第十九。自下は第五會を明す。四門は上に同じ。名を釋する中に、會の名とは、處に約すれば、兜率天會と名け、主に約すれば、金剛幢會と名く。法に約すれば、十廻向會と名く。品の名は、如來とは佛の法界の身を明し、昇とは是れ機に赴きて用を起し、兜率とは是れ所赴の所なり、三義をもて名を題す。又、此喜足天に赴くとは、世間の行滿を表すが故なり。一切寶とは、攝行の多門を表す。貴ぶべきは交飾するが故なり。

（二）二に來意とは、初に會の來ることとは、前の十廻向の問に答へんが爲の故に。又、前は解行を明し、今は大願を起す。若し願を起さずんば、恐らくは無爲を證せんことを。故に次に來れり。又、前の解行を廻して、眞諦に向ふが故なり。二に品の來ることとは、將に說法せんと欲して、先づ所依の處を辨ずるが故に明すなり。又、前の會既に終り、後に赴くの始の故に、先づ此を辨ず。

（三）三に宗趣とは、先に會の宗は、亦は人法、主伴、教義有り、各體相用あること、前に準じて知んぬべし。又、大願廻向無盡の行を以て、此會の宗と爲す、下に至りて當に辨ず

べし。品の宗とは、謂はく天王の、稱法界の器殿を嚴るを、能感と爲し、如來の、遍法界の身雲を以て、能應と爲す。感應契ひて動ずること無く、寂を動ずること無くして繁興する、緣起の具德を、此品の宗と爲す。

(四)四に文を釋すとは、此會の三品、初の二は序分、後の一は正說なり。何が故に、後の進趣無しとならば、前の解行を攝して、總じて地に趣くの、方便と爲すを以て、廻向の當體は、自ら是れ勝進なり、是故に無きなり。此經の上下に、此例四有り。一は行滿入位の際に約す。賢首の、信滿を總じて、入位の方便と爲すが如し。二は比滿入證の際に約す。此廻向品の初僧祇の滿を、總じて入地の方便と爲すが如し。三は功用の滿に、無功用の際に入るに約す。第八地の初に、總じて前の七地を攝して、方便と爲すが如し、此れ二僧祇の滿なり。四に因位成滿の際に約す。第十地の初に、前の九地を攝して、入方便と爲すが如し、此は三祇の滿處に約して、攝するなり。餘は同位相接して、即ち別して方便有るが故に、一例に非ず。前の序の中に就きて、二品二序の差別、前に同じく異を辨ず。

(五)初品の中に七有り、初に、本會圓に現ず。二には、動ぜずして此に昇る。三には、天王、處を嚴る。四には、佛を迎へて供を設く。五には、佛の勝德を覩る。六には、天王の散請。七には、請を受けて益を成ず。初は謂はく、前の十方覺樹、普光、忉利、夜摩等の說法の會有り。並に皆、未だ散ぜずして此に昇り、所說彼と同時なり。是故に、横に十方に遍く、竪に八會に通じ、同時に前後無礙にして說く。餘義は前の說に同じ。

【四】以下本文を釋す。

【五】正しく當品を釋す。初に文を分つ。

【前に…辨ず】本記五、二右、同六、二右に、初に請佛序、次に讚佛序等といひ、二義を辨異するを指す。

【十方覺…夜摩等】本經の初、二、三、四會をいふ。

【六】以下、第三を說きて、第二の科段を略するは知り難き故なり。

【處を嚴る云云】經の「時に彼天王」等の下。

【即於の下】經の「即ち殿上」等をいふ。

【以無量の下】經の「無量の莊嚴の具を以て」等の文をいふ。

【前の中】器世間の莊嚴。

【前の中】外事の莊嚴。

【前の中】色相の莊嚴。

(六)第三に、處を嚴る中に二あり。先に一方の嚴を明し、二に十方の嚴を結會す。前の中に二あり。初に遙に佛を見るとは、勝緣を視ることを明し、二に即於の下は、勝座を嚴ることを顯す中に於て、先に總じて顯し、後に以無量の下は、別して辨ず。前の中に、此座は是れ、實德の所成なるを以て、是故に十三種の圓滿の相有り。一は自相なり。謂はく寶座具德の故に。二は因相なり。謂はく宿善所生の故に。三は不壞相なり。佛の護念の故に。四は勝相なり。多因の所生の故に。五は眞淨の相なり。佛の淨法より起るが故に。六は共相なり。衆生共に嚴り、同じく受用するが故に。七は具德の相、八は離惡の相、九は微妙の相なり。觀じて厭ふこと無きが故に。十は出世の相。十一は無礙の相。十二は同相なり。謂はく、相、同じく、世間に在りて、緣集成の故に。十三は無盡の相なり。謂はく、衆生を見るとも、盡すこと能はず、亦是れ甚深の相なり、唯佛の境の故なり。第二に、別して顯す中に、初の一句は標、二に所謂の下は、正しく顯す。中に於て二有り、先に器世間の莊嚴を辨じ、後に百萬億諸天神の下は、衆生世間の莊嚴を辨ず。此中に、亦分つに、智正覺の義有り。前の中に亦二あり。先に外事の嚴、後に百萬億神力從り下は、內法の嚴を明す。前の中に二あり。先に色相の嚴、後に百萬億大蓋幢一切寶鈴の下は、音聲の嚴なり。前の中に四あり。初に雜事の嚴、五十二種有り。第二に、百萬億大海月の下は、別事の嚴なり。中に於て、寶の二十一種と、香王の十八種と、雲雨の二十一種と有り。第三に、百萬億天寶幢の下は、重ねて雜嚴を明すに、二十九種有り。第四に、天雜寶衣の下は、重

【第一に音聲云云】色用莊嚴の下を釋し終り、第二に音聲莊嚴を釋す、經の「百萬億の天の蓋幢の」等の文を指す。

【第二に內法嚴云云】以上、外相の莊嚴を釋し、次に內の莊嚴の文を釋す。

【七】以上、器世間の文終りて、次に衆生世間の文を釋す。經の「一百萬億の諸天神王」等の下。

ねて別事の嚴を明す。中に於て、衣幢に各十種あり。第二に、音聲の嚴の中に、四十二句有り。二に分つ。先に業音に十種有り、後に妙音の下は、法音を明す。中に於て二あり。先に總じて、三寶の功德を歎じ、後に別して、十住の菩薩の功德を嘆ず。前の中に三あり。初の十句は、佛寶の功德を嘆ず。二に、數一切菩薩の下の四句は、菩薩僧寶の功德を嘆ず。三に數深法の下の八句は、法寶成益の功德を嘆ず。二に別して十住の功德を歎ず、是れ正位に、因行を攝するを以ての故に。知んぬべし。外嚴竟んぬ。第二に、內法の嚴とは、亦是れ上來は莊嚴なり。今、嚴を辨じ已りて、勝德を出生する、座の德用を顯す。中に於て、三十一句を三に分つ。初の十三句は、信進念定慧等の、雜行を出す。淨解脫は是れ不思解脫なり。二に十一句有り、十度の行を出す。中に於て、末句は十度を結ぶこと、知んぬべし。三に普入の下の七句は、三業の大用を、出すことを明す。此は是れ、師子座の三業、依正無礙なるを以ての故に。器世間の嚴竟んぬ。

(七)第二に、衆生世間の莊嚴の中に、亦二あり。先に五十八衆有り、外相の嚴にして、後に菩薩を出す。淨願の下は內法の嚴なり。前の中に二あり。先の四十四は、人天衆の嚴を顯し、後の十四は、菩薩衆の嚴を辨ず。前の人天衆の中に、先の十五は、欲界の人天、八部等なり。後の二十九は、色界の天等なり。然るに、餘處に四禪の中に於て、各三天有りと說く。此に各四とは、皆一は是れ總、餘の三は是れ別の故なり。謂はく、初禪の中は梵の眷屬天、二禪の中は光天、三禪の中は淨天、四禪は密身天なり。此は各是れ、總

【八】第四に佛を迎へ供養をなす文を釋す。經の「爾時、兜率陀天王」等の下。

【第二に勝進云云】自分の供を明し、次に勝進の供を釋す。經の「佛の神力の故」等の文の下なり。

の故に不同なり。又、四禪の中の小密身は、餘處に說きて福愛天と名く。無量の密身は是れ福生天、密果は是れ果實天、亦廣果と名く。第四禪天は身行斷じ、出入の息無きを以ての故に、但に密と名く。次に五淨居天なり。後に更に百萬億の種種の天と云ふは、應に是れ無色界の天なるべし。旣に名を顯はさず、或は一切に通ず。第二に、菩薩衆の中に、初の十は、本位の名に依りて、德用を顯し、後の四は、天の名を以て說く。此上は並に是れ、海印の中の、自在業別の實德なり。人法無礙、依正混融するを以ての故に、然ることを致すなり。第三に、內法とは、亦是れ、上來は莊嚴なり。今は是嚴り已りて德を成じ、勝用を爲すに堪へたり。二十句の法門行り、行相は知んぬべし、上來は一方の嚴座竟んぬ。第二に如此世界は、十方無盡の世界の、敷座を結通す、知んぬべし。上來、十方の天王、主伴の座を嚴り竟んぬ。

(八)第四に、佛を迎へて供を興す中に、二あり。先に出で迎へて、自分の供を興す。二に佛神力の下は、勝進の供を說く。前の中に二あり。初に諸天、天供を興す。中に於て、先に十種の供を雨らし、後に身從りて業を出すは、總じて讚德を合す。二に不可數の下は、菩薩出世間の供を、興すことを明す。第二に、勝進の供の中に、亦二あり。先に諸天、天の供を興し、後に菩薩、出世の供を興す。前の中に四あり。初に佛力、天をして、親て希ひ自ら慶ばしむ。二に阿僧祇の下は、衣に華等を盛り、佛に詣でて、奉散し供養す。三に億那由の下は、佛の行處に於て、虛空を莊嚴す、中に於て十種あり。初の一は總、餘の九は

【二に菩薩出世の供云云】經の「不可說億那由陀…三界を離れ」等の下

【供佛を辨ずる中に九種】一、寶蓋。二、華帳。三、寶衣。四、雜寶鈴網。五、堅固香。六、妙寶高座。七、寶幢。八、寶殿。九、寶華。

【二一の中…各五義】蓋供にては下の如し、餘の供にては、供佛の一義第四に在り。

【八事の雲供】經の「一切の堅固の香の雲…莊嚴具雲」等の八をいふ。

別なり。別の中に、一一に各、初は勝心を起し、後に妙供を興す、知んぬべし。四に無數億の下は、身從り供を出す、路に在りて佛に供するの八句は、知んぬべし。二に菩薩、出世の供を興す中に、三あり、初に意業從り供を出す。二は身業從り供を出す。三には語業をもて、佛を歎ず。初の中に二あり。先に總じて供の事を顯し、後に一切寶蓋の下は、別して供佛を明す。前の中に二あり。先に標す。謂はく、離三界は供の分齊を標し、從眞法生は、供の所因を標す。下は釋の中に、先に分齊を釋す、離惑を以ての故に。慈普きが故に、智深きが故に。唯佛のみ能く知るが故に、三界を離る。下は所因を釋す。四因從り生ずるが故に、眞實法生と名く。一は、堅信、是れ加行智。二は、不思善は是れ正證智。三は、變化は是れ後得智。四は、眞法は是れ所證の理なり。既に此從り起りて、還りて稱性平等の故に、無行の法印を以てす。之れ印の定むる所なり。下は別して供佛を辨ずる中に、九種あり、一一の中に各五義有り。一は供事を擧げ、二は法界に遍くして、眞性に稱ふことを明し、三は用て佛に供す、四は天に過ぎて勝るるを顯す、五は因を出す。又亦、初の四は是れ、上の總の中の分齊、後の一は是れ、上の所因なり。高座供の中に於て、心境、佛に等しとは、理を證りて、佛に同ずることを明す。此に依りて座を起ち、座をして亦佛境に同ぜしむ。此菩薩、並に是普賢の極位、因果同等なるを以ての故に。餘は準じて知んぬべし。二に身業供の中に、身從り八事の雲供を出す、知んぬべし。三に無量菩薩の下は、語業供養にして、佛の法身の、無邊の功德を歎ず、知んぬべし。

【九】第五に佛の勝德を觀る文を釋す。經の「爾時、一切諸の天」等の下。

【二に顯現如來の下】經の「如來の無上…顯現し」等の文。

【令一切の下】經の「一切衆生をして…せしむ」の文。

【悉能の…益す】初地以上は眞無漏を得、十重障を斷じ十眞如を證す。

【三に以正覺の下】經の「正覺の眼を」等の文。

(九)第五に、佛の勝德を觀る中に、二あり、初に大衆、佛の法界身雲を觀る。二に爾時如來の下は、佛此身雲を現ずるの意を明す。前の中に亦二あり。初に法界身の、無邊の德用を見る。二に爾時諸天見如來身の下は、佛の身光、妙用無盡なるを、見ることを明す。前の中に、然も此所現所見の佛の法界身は、豈限量有らんや。今且く下の結文に依り、分ちて十門と爲す、中に於て二あり。先に十門の德を顯し、後に如是正念の下は、十門の名を結す。前の中に、此十門を辨じて、卽ち十段と爲す。然るに、後の結に望むるに、少き次第ならず。初從り淸淨善根に至る來は、超えて第十の、見佛示現不可思議自在神力門を明す。中に於て、先は能見の人を擧げ、後は所見の佛身を顯す、無量とは正しく、法界無限量の身を顯し、前の一切世界の菩提樹下に、現ぜざること無きを顯すなり。不思議足とは、前の不離覺樹昇天等を顯す。文の中に門有り。初に、妙用は生を益す。二に周遍の下は、德普く物を利す。三に嚴飾の下は、用深くして攝せしむ。四に當所の下は、機に應じて濟ふことを成ず。二に顯現如來の下は、却りて第一に、大衆如是正念如來門を明すを辨ず。中に於て二あり。先に如來自らの勝德を、現ずることを明す。謂はく、大福、大智、大定、及び體遍なり。二に令一切の下は、廣く衆生を益す。中に於て三あり。初に地前を益し、二に悉能の下は、地上を益す。三に一切法實の下は、益して果をして滿さしむ。三に以正覺の下は、第二の觀察正覺門を明す。中に於て二あり。先に自覺成滿を明す。二に謂はく、初に俗諦の境を覺り、後に於不退の下は、眞諦の境を覺る。二に敎化一切の下

【四に示現色身の下】經の「色身の不可思議…示現し」等の文。

は、覺他成滿を明す。四に示現色身の下は、第三の入智慧淵門を明す。中に於て、色身は是れ起智の所依なり。下は智相を顯すに四有り。初に衆生を觀ずるの智。二に善解の下は、佛の十力等を知るの智を明す。三に住一切の下は、法門を知るの智。四は悉能の下は、智淵海を成ずることを明す。五に如來日の下は、第四の入功德海門を明す。中に於て四の功德有り。一は寂用無礙の德なり。謂はく、機を照して、日沒せず、恆に佛の寂滅に住す。二に於我我所の下は、大行無染の德を明す。三に在大衆の下は、大智無著の德を明す。四に以大悲の下は、大悲攝化の德を明す。中に於て、初は化事を擧げ、悉善分別の下は、化の意を明す。謂はく、衆生の爲めに、菩薩の智信等の行を分別し、正覺を成ぜしむ。彼方去來の下は、如來の意業を明す。中に於て二あり。初に三際を照し、以て生を攝す。後に、佛の大慈の心を出し、佛の悲を顯す。爾らずんば、豈佛慈心の内に在らんや。六に佛身無量の下は、第七の正知如來門を明す。中に於て、初に如來の身業二業を辨じ、二に於普於十の下は、十方に遍くして、物を化す。七に佛智慧月の下は、第五の至虛空慧門を明す。下の文に云はく、「菩薩清涼の月、畢竟空に遊ぶ」とは、此中に、佛月の空に遊ぶを顯すが故なり。中に於て二あり。初に照空無礙の慧を明す。先に眞を照し、次に慧心の下は俗を照す。後に一切世間の下は、俗を會して眞を顯す。二に順衆生の下は、益物無著の慧なり。中に於て三あり。初に現身含受が益、解了の下は無著を明す。二に隨順の下は、拔苦與樂の益、未曾の下は無著なり、三に正觀の下は、善利益を成ぜしむ、永離の下は

無著なり。八に放光明網の下は、第八の觀察如來淨業相好門を明す。中に於て二あり。初に佛光照現、二に令一切衆の下は、衆、光を尋ねて、佛の十方淨業相好を見ることを明す。此中に二あり。初に佛の自相の業を見る、謂はく、先に佛の十方刹に於て、現ずる所の相好を見、後に菩薩所行の下は、佛の淨業を見る。謂はく、先に自利の淨業を見、善分別の下は、利他の淨業なり。二に成就の下は、佛を見て、能く他の相好を成ず。謂はく、先に能成、後に皆令成就の下は、所成なり。九に自在法王の下は、却りて第六の知衆生福田門を明す。中に於て二あり。先に總じて顯し、後に別して顯す。總の中に、初に如來の福田勝相を照現し、後に勝義を釋し顯す。智に依りて、緣生ずるを以ての故に、勝なり。二に別の中に、如來の十種の功德、世の福田と爲ることを顯す、一は身智遍世の德、二は無礙天網の下は、勝福臨機の德なり。此二は是れ田の體狀なり。田と爲りて福を生ずるの義、世間に在るを以ての故に、皆世間と云ふ。自下は益物成德を明し、田の勝用を顯す。三は無上導師の下は、導師巧引の德を明す。無畏乘は是れ、導師の遊處なり。四に一切世の下は、醫王善療の德を明す。初に惑障を治し、次に善能の下は、苦報を離れしめ、後に隨其の下は、惡業を離れしむ。五に隨其所應現佛の下は、應に隨ひて身を現じ、善を增すの德なり。六に一切衆生の下は、迷を覺し、怖を安んずるの德なり。七に如來最勝の下は、智王開曉の德なり。八に無量功德の下は、因圓果淨の德なり。中に於て、初の句は果を標し、業行の下は、因圓を顯す。謂はく、因の時、世に於て修する所の業行は、但能く世間

【六弊】淨心を覆蔽するものに六あり。一、慳貪。二、破戒。三、瞋恚。四、懈怠。五、散亂。六、愚癡。

の報を感示し、及び慧到岸成佛の時、前の行等をして、皆悉く淸淨ならしむ、染を出づるを以ての故に。九に能滿の下は、能く世願を滿さしむるの德なり。十に示世の下は、能く世友と爲るの德なり。是故に、佛を名けて勝福田と爲す。十には光明淸淨の下は、却りて第九の正知法身普照十方門を明す。中に於て七あり。初に行障を照除す、六弊の中に、初を擧ぐるなり。二に悉令の下は、其行願を淨くす。三に等觀の下は、染を破し、淨を生ずるの德なり。中に於て等觀は、佛智の普照に等し。起淨業は對治を修せしむ。降魔は染緣を殄し、滅惑は染因を除く。生力は是れ所成の德なり。謂はく、十力なり。四に一切世間の下は、癡を破し、智を授く。前は四住を破し、此は無明を滅す。初に癡を破し、法燈の下は智を授く。五に如來智の下は、怨を離れ、願を滿さしむ。六に最勝の下は、緣と爲りて、善を生ず。初に總、少修の下は別なり。謂はく、佛の田勝るるを以ての故に、少しく供養を修して、大功德を獲、衆生を無盡智地に置く。是故に、德大は、上の果報無量を顯し、智地は上の具足淸淨を顯す。七に喜の德難を除く。謂はく、善は心に由りて起る。心旣に佛を見て喜を生ず。喜心の中に、善を生ずること廣大なり、是故に三惡八難を除くなり。上來は十門を別して辨じ竟んぬ。自下第二に、總じて名を結す。但し此佛德は、旣に圓融無礙同一法界の身なり。是故に、此結は皆通別有り。如是正念如來とは、通じて論ぜば、總じて上の諸の功德を具するを、名けて如來と爲す。此大業は、是の如きの如來に於て、心を專らにして、想に住するを、如是正念と名くることを明す。別して論ぜば、

此は上の第二門を結す。二には通じて論ぜば、上の諸々の功徳を、總じて正覺と名く、照察せざること無きを以ての故に。案、此に於て慮を攝し、照達するが故に。如是觀察正覺と名くることを明す。別して論ぜば、此は上の第三門を結す。三には通じて論ぜば、上の佛の諸徳は、總じて是れ、智慧の濁ならざること無し。明照すること、暗無きを以ての故に。案、此に於て智慧相應するを、如是入と名くることを明す。別して論ぜば、此は上の第四門を結す。四には通じて論ぜば、上の佛の諸々の功徳は、總じて是れ功徳の大海なり。此業智契合するを入と名くることを明す。別して論ぜば、此は上の第五門を結す。五には通じて論ぜば、上の佛の諸徳を、總じて虚空智慧と名く、鑒照を以て、慧と名くるときは、則ち慧は性に稱ひ、一味無限無礙なるを、空と名く。此業智、共際に達到するを、如是至と名くることを明す。別して論ぜば、此門は超えて上の第七門を結す。六には通じて論ぜば、上の諸徳を具するの佛を、名けて衆生の福田と爲す。此れ能く勝福を生ずるに、堪ふるを以ての故に。案、此を了達するを、如是知と名く。別して論ぜば、超えて上の第九門を結す。七には通じて論ぜば、上の諸徳を具するを、名けて如來と爲す。皆諦理從り來るを以ての故に。案、知は解しつべし。別して論ぜば、却りて上の第六門を結す。八には通じて論ぜば、上の徳、皆是れ佛果淨業の相好にあらざること無し、案、觀は知んぬべし。別して論ぜば、此は上の第八門を結す。九には通じて論ぜば、上の徳、皆是れ大功徳の法にして、而も佛身を成ぜざること無く、明照普く十方に遍ぜずといふこと無し。案、知は

【自下第二に云云】以下、佛の光明の妙用を見る文、即ち經の「爾時、諸天如來の身を」等諸の下を指す。

【又觀自在の下】經の「又自在の神力を觀て」等の文。

【顯現阿僧祇の下】經の「阿僧祇億那由…顯現し」等の文。

【無盡中生】經の「無盡なる自在の中」等の文。

【五に顯現】經の「不可思議なる…顯現し」の文。

解しつべし。別して論ぜば、超えて上の第十門を結す。十には通じて論ぜば、上の德、皆是れ如來不思議の、自在神力ならずといふこと無し。別して論ぜば、却りて上の第一門を結す。又此上の十門は、應に六相を以て融攝して、之を取るの理、方に顯るべきのみ。

自下第二に、衆、佛身の光明の、妙用を見ることを明す。中に於て三有り。初に佛の毛孔より、光を出すの用を見るに、十句有り。初は本、餘の九は是れ光の中の事なり、并に法門は知んぬべし。二に爾時、諸天復見の下は、佛の身從り、光用を出すを、見ることを明す。三に又觀自在の下は、佛の神力、益物の用を見る。初に身光の中に就きて、二有り、光に雜色の光を出すを見、後に又佛身の下は、妙寶光を出す。前の中に七句あり。一は光法界を照す。二に示現の下は、光現じて法を說く。三に顯現阿僧祇の下は、光奇嚴を現す。無盡中生とは、不窮盡の義を釋す。四に悉普照の下は、光中の刹の內に、佛出でて、生を益することを現ず。五に顯現の下は、多くの化身を現ず。六に普照無量の下は、照すこと法界を窮む。七に持一切の下は、光の起る意を明す。下に光の因を出す。謂はく、平等眞如は、是れ佛の所住、彼從り生ずるなり。二に、身より妙寶光を出す中に、二有り。先に光を出して、因を嘆ずるに三有り。一は功德、二は大願、三は不放逸なり。後は出生無量顯光の用なり。三に佛の神力を、見ることを明す。益生の中に二あり。初に通じて衆生を益し、二に於一切の下は、廣く菩薩を益す。上來は、大衆、佛の法界身雲を觀ずること竟はんぬ。

【自下第二に云云】經の「爾時如來、大慈悲を」等の文を釋す。
【如來顯現の下】經の「如來は是の如き」等の文。

自下第二に、佛、此身雲を現ずるの、意を明す。中に於て二有り。一は此身雲を現ずるは、衆生を益せんが爲にして、隨ひて正行せしむ。二に如來顯現の下は、衆生をして、佛の無邊自在の勝德を知らしむ。前の中に、大悲普覆は、佛の現德の心を明し、智慧莊嚴は、所示現の德を顯す。謂はく、上の文の所現の德を牒擧するは、皆是れ大智莊嚴なることを以て、顯すが故なり。欲令の下は、正しく所爲を顯す。中に於て三あり。先に位の漸次に隨ひて益す、六句有り。即ち是れ信等の六位の益なり。果位の中に於て、深法を得るは、是れ大涅槃にして、具慧光は是れ大菩提なり、餘は知んぬべし。二に滿足の下は、行の漸次に隨ひて益す。中に於て亦六あり。一は求果の心堅し。二は不壞法性の下は、法に於て觀解す。三は滿足の下は、解に依りて行を起す。四は成就清淨の下は、行成じて入證す。五は具足修の下は、證滿じ德備はるを、普賢の行と名くることを明す。六は、成就如來の下は、因圓得果なり。三に遠離の下は、義の差別に隨ひて益す。中に於て三あり。一は、邪魔を遠ざけて、正智願を得せしむ。二は、常に佛を見て、大智斷を得せしむ。三は、常に佛に依りて法を得、樂に入らしむ。二に衆をして佛の無邊の德の中に、是の如き等の類の、無數の淨善を現ずるを知らしむ。總じて上の文の所現の德を牒す。皆是れ佛の淨善根の、相なるを以ての故に。調衆生は、總じて其意を擧ぐ、云何が德を現ずるを調生と爲るや。謂はく、悉く佛の功德海を知らしむ。正しく所爲を顯すに二有り。初に別して辨じ、後に總じて結す。別の中に五あり。一に、佛德の備ることを知らしむ。二に、如

【一〇】第六に、兜率天王、佛を敬請する下。經の「爾時、兜率天」等の文を釋す。

【一一】第七に、佛受請して、成益を明す下。經の「爾時世尊、佛の莊嚴」等の文を釋す。

【一二】二に如此の下】經の「此四天下の……如く」等の文を指す。

來の下は用廣し。三に本所の下は果極、四に成就法王の下は智圓、五に成就最勝の下は、德深きなり。謂はく、體淨く德齊くして、相嚴麗なり。二に一切劫の下は、德の無盡なるを結す。別說して、周きこと難きを以ての故に、總じて通結す。

〔一〇〕第六に、天王敬請の中に、善來とは、佛、法界の德を具して、不動にして來るが故に。巧に機に應じて來るが故に、理に順じて來ることを明すなり。

〔一一〕第七に、佛受請成益の中に、二有り。初に昇殿の益、後に爾時世尊の下は、昇座の益なり。前の中に二あり。先に請を受け、殿に昇る。後に爾時の下は、其益相を明す。前の中に二あり。先に此界の殿に昇る。無邊の相海は、是れ佛の莊嚴、天王をして喜ばしむる等は、正しく受請の意を明す。即ち昇殿等は、機緣契合するを明すなり。二に如此の下は、十方の昇殿圓滿を結會す。二に益相の中に、三あり。初に頓處の益の十句は、知んぬべし。二に爾時の下は、天王得定の益を明す。中に於て、初に不亂正念は正しく得定を明す。下は定に依りて、善を增す。增善に四有り。一は進心、二は喜心、三は菩提心、四は總持なり。三は天王をして、自らの宿善を憶はしむ。佛を歎じて、處の益を顯す中に二あり。先は此界なり。謂はく、前の夜摩十佛の前の、十如來を歎ずるは、漸く深遠なること、前に過ぐることを、寄顯するが故なり。理實には、一切の諸佛に通ず。後に十方を結す。第二昇座の益の中に二あり。先に此界の昇、後に十方の昇なり。前の中に二あり。先に昇座、後に益相なり。益相の中に二あり。先に法の益なり。謂はく、初に、現に三世の佛の身に

【一】當品は、第五會の序說の中、讃佛の序なり。初に名を釋す。

【二】以下、當品の文を釋す。

同じ。二に、機に應じて法を說く。三に、法身の無著を明す。下に事の益を明し及び結するは、並に知んぬべし。

(一)兜率天宮菩薩雲集讃佛品第二十。初に名を釋すとは、如來將に、妙法を說かんとするに、必ず英徒、影のごとくに赴き、電のごとく速に、雲のごとくに臻り、虛空に遍滿して、法界に集り、各妙偈を以て、佛の實德を嘆ずることを明すが故に、以て名と爲す。又、天宮は是れ處なり、菩薩は人を顯す。雲集は是れ身業自在にして、讃佛は是れ語業の功德なり、身語處に約して、用以て題名す。餘の來意及び宗は、並に前の釋に同じ、但し菩薩の德を歎じ、及び光の益を加ふるを異と爲す。四に、釋文の中に、四行り。

(二)一は衆を集め、二は光を放ち、三は衆を歎じ、四は佛を歎ず。初の衆を集むる內に、先は此界の集、後は十方の集なり。前の中に三あり。初に本位を擧げ、二に一一菩薩の下は、集り來るを明し、三に以正直の下は、德を顯す。初の中に、佛力は集の所因なるを顯し、十方等は分量を顯す。國を堅固と名くることは、所依の行成じて、壞し難きことを表顯するが故なり。佛と菩薩と同じく、幢と名くることは、廻向の善巧の因果、獨り摧伏より出づるを表す故なり。寶網覆身は、德の備ることを表す、放光は用の廣きなり。三に、德を歎ずる中に、二あり。初に其行德を嘆ず。中に於て二あり。先に自行、後に一切衆生の下は、利他の行なり。謂はく、十地已還等の一切衆生は、同時に此菩薩身に於て、念念に觀見し、別別の法門皆新新に引攝す、故に觀無厭足と云ふ。二に此菩薩の下は、所得の法

【三】第二に放光を明す下。經の「爾時、世尊兩膝より」等の文を釋す。

門を顯す。中に於て、初には總、後に所謂の下は、別に十種の法門有り。一は身の遍遊、二は智、理を見る、三は多身の遍、四は入果の用、五は得果の智、六は巧便の光、七は廣く辨じ、八は深く持す、九は法界を見る、十は虛空を盡す。應に六相を以て、融攝すべきこと、思準すべし。

(三)第二に、放光の中、兩膝より放つは、前の足指に過ぎて、行漸く勝ることを、表すが故なり。又、膝は屈申進趣の用有り、廻向の因果の、進昇の相を表すが故なり。中に於て四あり。一は出處、二は光の數、三は所照、四は緣見なり。謂はく、因時の同行、果時に感會するが故に見るなり。第三に、樂德を歎ずる中に、二あり。先に別して歎じ、後に總結す。前の中に二あり。先に所樂を明す。謂はく、佛の不思議解脫の用を樂ふなり。二に所得を明す。中に於て五有り。一は法界身を得、二に得無礙の下は、法界心を得ることを明す。中に於て四有り。一は三昧心、二は無著心、三は無礙心、四は離垢心なり。寶心は是れ證心の故に、能く垢を離る。三は得佛無量の下は、佛力を得ることを顯す。初は標、決定の下は釋顯するなり。四に得諸の下は、得佛の證を明す。初に標、入深の下は釋なり。謂はく、入深智は是れ能證の底、淨法身等は所證の底なり。五に得一切の下は、佛智を得ることを明す。中に於て十句あり。初の句は總じて標し、下の九は別して釋するなり。中に於て、一は、智は理に依りて起るが故に。妙趣生と云ふなり。二は、智起りて開明す。三は金剛の大智を成ず。四は金剛喩定、微細の惑を破す。上來は本智にして、下は後智を

【四】以下、金剛幢等の十菩薩、偈を以て諸佛を讃ずる下。經の「爾時金剛幢」等の文を釋す。

【佛色聲…示す】佛の示現相は眼見耳聞の色聲に非ず無に即して有を現ずるをいふ。

明す。五は攝生の智、六は自在の智、七に無著の智、八は照俗の智なり。初は學數に名け、終は究竟に名く。九は、善住の下は、照眞の智なり。後に成就の下は、總じて無盡を結す。是等は並に是れ、究竟位の中の菩薩にして、佛と同一法界なり。是故に、皆佛の所得を得と云ふなり。但し因門に就き說きて菩薩と爲すのみ。

(四)四に偈をもて、佛を嘆ずる中に、十段あり。初に金剛幢は、別說の人を標す。此菩薩を以て、先首と爲すことは、是會の主なるに由るが故に。承力は說の所依を顯す、普觀の四意、前會の釋に同じ。十頌は、佛の寂用無礙の德を歎ず、中に於て五に分つ。初の二は、佛は生滅無くして、現有なるを示すことを明す。初の頌は正しく辨ず。中に於て、初の半は無生滅、下半は現有、後の頌は寄對して、深きを彰す。謂はく、上半は劣に寄せて、深きを顯す。謂はく、寂に即するの用は、思の境に非ず、是故に難思なり。下半は勝に就きて、妙を顯す、既に思に非ずんば、是れ誰が境界ぞ。謂はく、彼智還りて是れ、佛智及び普賢位滿の智なり。境は佛の境に稱ひ、智は要ず佛智、方に盡すを以ての故に、深きことを明す。二に二頌有り。佛、色聲に非ずして、現有を示すことを明す。亦初の頌は正しく辨じ、後の頌は寄顯なり。上半は亦劣に寄せて深きを彰す。謂はく、凡小及び地前を、劣智と名く。下半は勝に就きて妙を顯す。謂はく、地上の證智、能く佛の本と爲るを、本業智と名く。十地位滿を成就と名くるは、則ち普賢の智なり。又、成就は亦是れ、佛智なり。三に二頌有り。佛、來去無くして、現有を示すことを明す。初の頌は、正しく辨じ、後の

【五】第二に堅固幢菩薩の偈を釋す

【下は…結す】經の「是の如く…究竟せん」の一偈。

頌は、深廣なるを顯す。謂はく、此れ則ち、無來去の來去なり、身諸刹に遍く、語廣くして、説妙に、意恬に寂に住す。又上の三句は廣を顯し、下の一句は深を顯す。四に二頌有り。佛智不動にして、現の用を示すことを明す。亦初の頌は正しく辨ず。上の二句は入證、下の二句は現用なり。後の頌は深廣なるを顯す、上半は深、下半は廣なり。五に、後の二頌は修を勸め、益を辨ず。初の頌は修を勸め、後の頌は見の益を辨ず。

(五)第二に、佛心の堅きを觀ずるを以て、堅固幢と名く。十偈を三に分つ。初の七は、佛の勝徳を歎じ、次の二は、修の趣入を勸め、後の一は、見聞の益を結す。初の中に五あり。先づ二偈は體用情に超ゆるを明す。謂はく、初の一は體深、次の半は用廣、下半は超情なり。二に二偈有り、徳深にして、近くを勸むるを明す。初の偈は徳深にして、上半は深法を説き、下半は淨身を起す。謂はく、佛の淨身、萬行の因緣に隨順して、起ることを明す。謂はく、本性を因と爲し、所修を緣と爲す。何が故に、此徳を顯すとならば、緣に從ひて起り、是れ成ずべき法なることを明す。後の偈は、求を勸む、義理便なるが故に。三に一偈は、佛を嘆じて、他をして廣からしむ。益徳は、謂はく、淨心常心供は、成佛せしむ。四に一偈は佛を歎じて、觀をして行徳を増さしむ。初の句は徳を增し、二は行を長じ、三は惑を離れ、四は觀を結す。五に一頌は、大人觀解の徳を歎ず。謂はく、究竟法性の佛子、方に解了するが故に。勸修の中に、初の偈は、欲を起して、道を求むることを勸む。後の偈は、報恩徹近を勸む。下は益を結す、上半は結歎す。謂はく、見佛は上の佛徳を結し、

【六】第三に勇猛幢菩薩の文を釋す

【七】第四に夜光幢菩薩の文を釋す

聞佛法は上の導師所說等の法を結し、下半は益を顯す。

(六)第三に、智力勇健にして、佛海の原を盡すを、勇猛幢と名く。十偈を二に分つ。初の七は佛を歎じ、修行の勝緣と爲す。後の三は、佛の自在の德を顯す。前の中に、初の一は、佛は見難し、要ず淨信心を具して、因と爲し、佛力を緣と爲して、方に佛を見ることを、得ることを明す。細色には佛は以て見難きに合するが故に。二に見の盡し難きを明す。謂はく、要ず普賢の猛智を以て、方に源底を盡す。三に佛の成じ難きを明す。謂はく、要ず圓淨の心海は、十地の出生する所なるに依る。四に佛法に遇ひ難くして、得れば便ち垢を離るることを明す。五に佛は逢ひ難し、見れば能く惑を滅することを明す。六に聞信、成じ難し、要ず善友に由ることを明す。七に校量、勝るるを顯す。若し一人を化して、佛德に信入せしむれば、上施を過ぐ。下は佛德を顯すが中に、一は德圓、二は用廣、三は體寂なり。

(七)第四に、生死の夜に於て、智光を現曜するを以て、夜光幢と名く。十偈を三に分つ。初の一は、佛の用の廣きを歎ず、十方普見なるが故に。次の七は佛の用の深きを明す、理に融じて起るが故に。後の二は、雙べて深廣を結す、崖底無きが故に。用深の中に、初の一は、體一無一の故に、多を現ず。二は、無二にして二は、莊嚴を現ずることを明す。三は、一二雙融の德、無盡なることを明す。謂はく、空を體に喩へ、幻を用に喩ふ。上は此佛を歎じ、下は餘佛を顯す。四は體に依りて用を起す。五は用相、功無し。「攝論」に云はく、

【摩尼…成ず】六欲天の上、皆この鼓あり、天衆の意に隨ひて鳴るも、天鼓無心なり。今諸佛菩薩の、任運自在なる、妙業の用に譬ふ。

「摩尼天鼓の、思ふこと無くして、自らの事を成ずるが如し。是の如く分別せずして、種種の事成ず」と。六に體用無礙を明す。謂はく、體に卽して用を成ず、體を失はざるが故に、不壞法性と云ふ。用に卽して常に體なり。而も用を廢せざるが故に、不著法界と云ふ。是故に、理に著せざるに由るが故に、恆に用を廢せず。性を壞せざるに由るが故に、用は寂ならずといふこと無きが故なり。七は雙融自在なり。上半は體に約して絕待なり。謂はく、化と非化と、俱に不可得なり。下半は緣に約して、現化非化を示現す。又上の二句は標、下の二句は、次の如く釋すること、知んぬべし。又釋すらく、此は眞に依りて、化を起すことを明す、二門を作りて釋す。一は開の義、二は融合なり。初の中に、眞應に各く二義有り。眞の中に、一は不變の義なり、謂はく、化を現ずと雖も、常に湛然たり、初の句は之を顯す。二は隨緣の義なり。謂はく、自性を守らずして、現應せざること無きが故に、亦非非化と云ふ。二に化の中に、一は無體卽空の義なり、謂はく、緣を攬りて、性無きが故に、諸法無化と云ふ。二は從緣幻有の義なり。故に示現有化と云ふ。二に、融合に亦二義有り。一は別合、二は通融なり。初の中に、眞の中の隨緣は、則ち不變なるに由るが故に。是故に亦は眞、亦は不眞にして、非眞不非眞なるを、名けて眞法身と爲す。化中の體、空なるときは、則ち幻有なるが故に。是故に亦は化、亦は不化にして、非化非不化なるを、名けて佛の化身と爲す。二は通融なり、謂はく、眞の不變に由りて、化體の空を顯す。此は是れ、眞は無ならず、化は有ならず、以て法身、化用無きにあらずと爲す。化

【八】第五に智幢菩薩の文を釋す。

中の空の義、有るを以ての故に。又、眞の隨緣に由りて、化の幻有を顯す。此は是れ、化無きにあらず、眞有るにあらず、以て化身、眞理無きにあらずと爲す。眞中の隨緣の義有るを以ての故に。又、隨緣の幻有、不變の體空に、異らざるに由るが故に。是故に、現化紛然として、未だ嘗て寂ならずんばあらず。眞性湛然として、嘗て化ならずといふこと無く、眞化鎔融して、一無礙清淨法界と爲る、之を思うて見つべし。下の二偈は雙べて結する中に、初は上の體深くして底無く、廣くして崖無きを結す。後は上の用を結す、上は深を顯し、下は廣を彰す。

(八)第五に、深慧無礙を智幢と名く。十偈を三に分つ。初の四は、佛の德用無限なるを歎じ、次の四は、佛の一異無礙なるを歎じ、後の二は、佛の生滅自在なるを歎ず。前の中に初の二は、用の無限なるを顯し、後の二は、德の無窮なるを明す。前の中に、先に應用の器を辨ず。謂はく、無礙智、及び無限の悲を具して、之を修行すれば普ねく十方に於て、常に諸佛を見る。此現の如來、彼大機の所に於て、時として蹔くも隱るること無し、然も五義有り。一は、一身圓に應ずるが故に、十方見と云ふ。二は一身即一切なるが故に、見一切佛と云ふ。三は、此用未だ曾て、蹔くも歇まざることを明すが故に、常見と云ふ。四は、此用未だ曾て、寂ならずといふことあらざるを顯すが故に、無來處と云ふ。五は所說復深きことを彰すが故に、法亦無著と云ふ、下は德の無窮なり。謂はく、前の所現の一切の身において、彼一一の身、各法界無盡の德を攝す。是故に、不思劫に於て、彼一身の德を

【九】第六に寶幢菩薩の文を釋す。

【八識心・明し】謂ふる、相宗に於て說く八識の相なく、無相即相にして有無無礙なるを佛心の義と爲するのみ。

說くとも、尙盡すべからず、況んや餘の一切の身をや。三世の衆生等とは、校量して多を顯す。二に一異無礙を歎ずる中に、初の一は法說なり。謂はく、無二の法界融ずるが故に不可思議なり。何となれば、謂はく、無二を思ふべからず、多身を現ずるを以ての故に。多身を思ふべからず、未だ曾て異ること有らざるが故に。一多を思ふべからず、兩法、無きを以ての故に。俱非を思ふべからず、體用宛然たるを以ての故に。是れ圓融にして測量し難し。次の一は喩況、次の一は法合なり。下の一は、非一異を釋す、並に知んぬべし。三に生滅自在の中に、初の一は、不生滅にして生滅を現ずることを明し、後の一は、所現の生滅、還りて則ち不生滅なるを明す。

（九）第六に、照理貴ぶべきが故に、寶幢と名く。十偈を二に分つ。初の三は、佛の身心の自在なるを歎じ、後の七は、佛の出世自在なるを歎ず。前の中に、初の二は身を明す、一は無量にして量を現じ、二は無處にして處に遍し。下の一は自ら心を明し、上の句は、八識心王無きことを明し、次の句は、心所有無きことを明し、下の半は體法を結す。「智論」に云はく、「佛地に心心法有ること無し」と。問ふ、「若し法身に約せば、上に說くが如くなるべし、受用身に約すれば心法無し、豈佛をして、非情類に同ぜしむべけんや。」答ふ、「若し初教に依らば、佛地に具に、淸淨の八識、及び二十一の心所有り、設ひ無しと言ふも、但染識無きなり、淨無しと謂ふには非ず。又、智勝るるに由りて、但有智と云ふ、識無しと謂ふには非ず。若し終教に依らば、唯一の圓智、內に眞如を證し、外に外用を起す。亦、

【釋迦の…明す】此は、化身即ち體の業用なる邊に約して、不出生といふ。

【今惟ふに…非ず】時と處の緣に隨ひて、化現する佛は實の如來に非ざるの意。

心王心數の異、及び八識の差別無きが故に。梁の『攝論』に「佛果は唯如如及び如如智、獨り存するが故なり」と。若し頓教に約すれば、始覺は則ち本覺に同じ、始覺の異無きを以ての故に、遂に此智を合せて、當相則ち是れ如にして、智相も亦盡きたり、唯一の妙理は、言を離れ慮を絶するを、佛果と爲すなり。若し圓教に約すれば、既に理智混融し、法界を擧げて倶に智と爲し、十を說きて無盡を顯す。是故に、此智未だ嘗て、法界に即せざるなり、之を思準せよ。後の七の中に、初の四は此佛を明し、後の三は餘の佛に通す。前の中に、初の二は、佛、益の爲に、世に出づれども、而も則ち出づる無きことを明す。謂はく、初の一は、出でざれば損有ることを明す。次の半は、出世の益を明し、下半は實には、出づること無きを顯す。「諸法無行經」に云はく、「如來は出世せず、亦衆生を度せず。衆生強ひて、佛と作りて衆生を度すと分別す」と。解して云はく、此釋迦の身、出世の時、則ち常に出づる無きことを明す、別に法身に約して謂ふには非ず。下の二は、不出世の所由を釋す。謂はく、凡そ佛出を論ずるに、皆時處に於てす。今惟ふに此二は、倶に等覺に非ず、是故に、出に即して出づること無し。下は衆生の機熟するを明す。自ら心内に於て、佛日の出づるを見るも、然も佛自ら覺りて、本淨日には非ず。下は餘佛を顯するが中に、初の一は法說にして、正しく顯す。上半は前の出を牒し、此は、佛の出世は、則ち出の義無し。謂はく、前の衆生の心所見の佛は、並に是れ虛妄にして、有ること無きが故に、言語斷なり。下半は正しく、三世の佛出に類す。理亦同じく然なり。次の一は喩

【一〇】第七に精進幢菩薩の文を釋す

【法身の體…明す】如來の法身は分別思慮及び計量を絶したるをいふ。

況なり。上半は、佛出は則ち出無きに喩ふ。謂はく、破闇を日出と名く、日出づれば闇已に無し、闇無きは、日出づるに非ず、是故に、出は則ち非出なり。下半は不出にして出なるに喩ふ、出は但名のみ有り。下の一は法合なり。上半は出則無出に合す。下半は無出にして出なるに合す。出は但名のみ有り、是故に、彼不出に異らず。

【一〇】第七に、妙理を勤觀するを、精進幢と名く。十偈を二に分つ。初の一は汎く諸佛を擧げ、德同じくして應異るを標し、後の九は正しく此佛を歎ず。前の中に、身同は是れ法身同なり、義は是れ功德同なり。下半は應異なるも、亦是れ用同なり。文の意は、理實には、諸佛の體德齊同なり。所有る異は、皆應に隨ひて現ず、此同等の功德なり。無性の「攝論」に云ふが如し。「法身の中の、所依の意樂作事に於て、差別の功德無し」とは、則ち是れ一切の佛の、平等の性を開示し逮得す。所依無別とは、一切皆清淨智に依るが故に。意樂無差別とは、一切皆利益安樂にして、一切有情勝意樂有るが故に。作業無差別とは、一切皆受用變化、利他の事を作すが故に。後の九の中に二有り。初の三は略して釋し、後の六は廣く顯すなり。前の中に、初の一は、境の義の深廣なるを明し、上の義同を釋す。二は、身は是れ根境の內外に非ざることを明し、上の身同を釋す。三は、機に隨ひて見異る有り、上の應別を釋す。下の六偈は、廣く顯すが中に、初の一は法身の體、分數に非ざることを明す。先に法說、後に喩に約す。橫計するの我は、本より所有無きが如し。縱ひ四智五眼の思も亦及ばず、無物なるを以ての故に。此は妄計の情有理無は、聖智の境に非ざることを

擧げて、以て法身の理有情無の、下位の測に非ざることを況す。二に、次に一は體に依りて、相を現ずることを明し、次の一は、緣に應じて用を見る。次の一は用成の益を明し、後の一は用の廣大を顯す。

【二】第八に離垢幢菩薩の文を釋す

（二）第八に、淨慧は實を照し、染障已に除くを、離垢幢と名く。十偈を四に分つ。初の三は、佛の身智淨なるを歎ず、中に於て、先の一は淨智の、世を益するを歎じ、後の二は身淨を歎ず。一は佛應は眞なるを顯し、二は眞に依りて應を現ず。二に、次の二は、三業淨を歎ず。初の一は意業淨なり。謂はく、名德高しと雖も、而も心常に安んず。後の一は、身語なり、知んぬべし。三に、次の三は融攝淨なり。一は照理、二は現事、三は融顯無礙なり。器世間は則ち是れ、智正覺なるを以ての故に、即是身と云ふ。此身は無性にして、復則ち眞諦の故に、則是最勝と云ふ。最勝は是れ、勝義の理の故なり。下半は無礙の人を釋し顯す、是上の融攝相卽等なり、彼を知るが故に、無礙智と名く。四に、後の一は離妄淨なり。一は境智を泯す。謂はく、菩提は是れ能照の佛、法は是れ所照の寂の故に、無得なり。後の一は三際を絕す、謂はく、三時に於て前の智諦を求むるに、竟に得ること無きが故に、彼倒を離る。

【三】第九に眞實幢菩薩の文を釋す

（三）第九に、佛の應身は、即ち眞に同じと了するが故に、眞實幢と名く。十偈を二に分つ、初の二は、佛の無方の大用を明す。先の一は、所應の處を明し、後の一は、所現の身の八相の用を明す。下の八は、用を會して體に同ず。中に於て初の二は、思見に約して會す。

先の一は用を徴し、後の一は體に同ず。二に、次の一は身土に約す。上半は用を擧げ、下半は體を會す。三に、次の一は化用に約して會す、知んぬべし。四に、次の二は佛德に約して會す。初の句は涅槃の德を標し、次の句は菩提の德を標す。下半は次の如く釋す、知んぬべし。次の中に、上半は神力の德を擧げ、下半は總じて無所有を會す。五に、後の二は、佛の因果に約して會す。初の一は、因果を牒し擧ぐ。謂はく、佛往昔に、唯心の道理を知りて、明かに諸法を解するに、悉く皆是の如く不可得なるが故に、是故に速かに正覺を成ず。此に由りて佛果平等離言同一の眞體を明す。後の一は正しく會して體を顯す、知んぬべし。

【一三】第十に法幢菩薩の文を釋す。

（一三）第十に、善く成佛の法を解するが故に、法幢と名く。十偈を四に分つ。初の二は、佛に近づく益を明す、先の一は總擧、後の一は釋成なり。上半は損を擧げ、益を顯す。下半は益を彰し、損に異す。二に次の三は、佛の所に於て、發心する利益を明す。先の一は總擧、二は釋成、三は校量して勝を顯す。謂はく、發菩提心の方便を知らず、猶供養に非ず、若し能く一念も、菩提心を發すときは、則ち是れ最上法の供養なり。三に、次の二は佛の所に於て、法を聞くの利益を明す。中に於て、一は、聞くに由るが故に因を求む、二は、聞くに由るが故に果を得、四に、後の三は、佛の所に於て、解を生ずるの、利益を明す。中に於て初の二は、損を擧げ益を顯す。一は標、二は釋なり。謂はく、過去無量劫に、是法を知らざるに由り、既に成佛せず、今時縱ひ未來際劫を盡すとも、若し是成佛の法を知

【上の十菩薩…知るべし】總結の文の中、初に百偈の六相を示し、後に結通の有無を明す。

【一】當品は兜率天に於ける、十廻向會の第三にして、正しく十廻向行を說く一段なり。初に品名を釋す。

【二】當品の來意を明す。

【三】當品の宗趣を明す。

らずば、終に亦成せず。下の一は益を彰し損を異にす。上半は理境の法を擧げ、下半は智行法の益を成ず。

上の十菩薩の百偈は、佛を歎じ、或は總じて一と爲す、融會して一法界の佛と爲すを以ての故に。或は別なり、十佛百門の德、差別するを以ての故に。或は同なり、百偈は、佛德を顯すに非ざること、無きを以ての故に。或は異なり、門門の相別なるを以ての故に。或は成なり、此德佛果を緣じて、立つるに由るが故に。或は壞なり、各自法に住して、本より不作の故に。之を準思せよ。又此偈は、後に應に十方世界を、結通すること有るべし。但し前の諸菩薩、各普觀十方と云ふと爲せば、則ち已に顯現するが故に、更に論ぜず、前の會等の處、皆此に準じて知るべし。

(一)金剛幢菩薩廻向品第二十一。名を釋すとは、德成じて壞する無きを喩へて金剛と號け、獨り世間を出づるを、幢を擧げて以て表す。此中は卽ち金剛を以て幢と爲す。菩薩は是れ人にして、彼の德を有つ者なり、有財釋なり。己が善根を廻して三處に向ふ、此は是れ行、德、法なり。謂はく、剛幢の廻向にして、依主釋なり。亦有財に通じ、又持業にも通ず、人法相卽するを以ての故に。但し人に寄せて法を顯すを以ての故に、雙べ擧ぐるのみ。此れ卽ち、德に從へて名を標し、人に依りて法を顯すが故なり。

(二)二に來意とは、序分旣に彰る、正宗宜く顯すべきが故に、次に來るなり。

(三)三に宗趣とは、十種の大行を、三處に廻向するを、此品の宗と爲す。又、無邊の行海を

【四】文を釋するに、初に分交、後に三昧分を釋す。
【異ならざる云云】人法異らざるをいふ。
【加行定…明智】今、十地内は總じてこれ見道修道の加行にして、此法を說かんとして明智定に入る。
【明得明增】[illegible]の位には、明得定、[illegible]の位には、明增定に依て修す。
【「地論」…如し】此は[illegible]智に約していふ。
【[illegible]】[illegible]所知障を斷じ、[illegible]を除く。
【大乘光明三昧】全閻浮提[illegible]所入の[illegible]定。
【父若…云云】以

以て、無崖の大願に隨順し、普賢法界の德用を成就するを、此宗趣と爲す。下の文に顯すに、之を引くが如し。

(四)四に、釋文の中に、六分有り、一は三昧分、二は加分、三は起分、四は本分、五は說分、六は證成分なり。行に隨ひて、別して頌するを以ての故に、偈頌分無し、下の地品に同じ。初の中に、何が故に入定するとならば、亦六意有り、前に同じ、文を釋する中に三有り。先に入定の人を標す、金剛の法を說かんが爲の故に、高出の法の故に、異ならざるを入と名く。二に力を承く。三に正しく所入を顯す。菩薩とは人を標し、法に別す、果定に非ざることを簡ぶ。明智とは、汎く論ずるに四義有り。一は、初に加行定なり。謂はく、是れ證智の明の故に、明智と云ふ。明得、明增等の如し。二は根本智定に約す。本智は理を證し、無明等を破するを、名けて明智と爲す、大乘光明三昧の如し。「地論」に釋す「光明とは、無明を對治するが故に」と。三に後得智定に約す、明了の所緣の故に、明智と名く。四は自在智定に約す。謂はく、普賢の圓智、朗かに法界を照すが故に、明智と名く。鏡光、顯藥珠の、十佛世界等を照すが如し。此中の智は是れ體、明は是れ用なり。又、若は三乘、位に寄せて言はば、此中は唯初の定なり。若し圓融の自德に約して論ぜば、本後の二智定を具す。若し圓教に約して顯さば、唯し、後門に約す。三昧は此には等持と云ふ、前に釋するが如し。

(五)第二に、加分の中に、三有り。初は總じて能加を顯し、二は加の所爲を辨ず。三は正し

下料簡するなり。

【若し剛幢…具す】金剛幢菩薩已に根本、後得の二智を證得したまふをいふ。

【五】第二に加分を釋す。經の「正受に入り」等の文の下。

【二に加の所爲云云】經の「菩薩をして清淨」等の二十二句をいふ。

【十無畏智】本經第三十九の中に說

く加の相を顯す。前の中に亦五有り。一は諸佛の現身を明す。謂はく、十方百萬等散居し、相去ること前に同じ、之に準ぜよ。又、多佛の加することは、重法を增す、同を顯すこと亦前の如し。二に同名なるは、四意有り、前に同じ。三に告嘆して定を得、四に善男子の下は、得定の所依を明す。謂はく、十方の佛、自ら說きて、加を作して、此定を得せしむ、五は又、盧舍那の下は、彼佛自ら加を作すの所由を釋す、四句有り。一は、舍那の宿願力に由るが故に、我をして加を作さしむ。二は、舍那現在の神力相感に由りて、同じく加す。三は、剛幢の智淨の上に由りて感ず、是故に加を作す。四に諸の菩薩の善根、機熟して、應に此法を聞くべきに由りて、諸佛の加を感ず。是故に、幢は此定に入ることを得。又、前の十住の中には、但自らの善根力有りて、諸の菩薩の力無し。十行の中には、諸の菩薩の力有りて、自らの善力無し。此中に、具することは、位の相漸く增し、前後影略することを顯すが故なり。四の中に、初の二は果力、後の二は因力なり。何が故に、此四力を須ふとならば、初力は法根深く、久遠に德を積みて、成ずることを顯す。二は、德成じ、現在に動發して、機を扣く。此二は佛化主の力なり。三は助化の力、四は機感の力なり。

二に加の所爲を辨ずる中に、二十二句有り。初の十は所成を標し、後の十二は、所依を明す。初の中に、欲令菩薩の字は、下の諸句に通ず。十句を三に分つ。初の四は諸菩薩をして、智德圓なるを得せしむ。一は十無畏智、緣に於て懼るること無し。二は、四十無礙

く。

【四十無礙智】法無礙解、義無礙解、詞無礙解、樂說無礙解に各各十義を具し、說法自在の德を有す。

智、常に說きて斷ぜず。三は、入緣起法界、相卽自在智。四は、因智をして果に入らしめ、圓極なる廣心を成ずることを顯す、是れ大悲なり。次の三は、諸菩薩をして、福德を滿ぜしむ。一は、善根廣多なるを明し、二は、善く染を離るることを明す。謂はく、無漏の故に、白淨と名く。三は、善甚深を明す、謂はく、普法界に入る。又、重重無盡を顯す、一一の門の中に、一切の門を攝するを、普門と名くるが故に、此普門に乘じて、深法界に入る。是故に具德窮盡する無し。後の三は、諸の菩薩をして、起用自在ならしむ。一は、佛境を現じて、以て機根を持せしむ。又有本には、三に諸根智力を得せしむ。謂はく、佛境を分別して以て機根を持するに作れり。又有る本には善根に作れり。謂はく、彼善根を持して、增長せしむるなり。此等の德事を成ぜんが爲に、是故に加す。二に、所作を明す中に、十二句有り、二に分つ。初の三は、正しく所作を明す。謂はく、廣く正法を說く。一は總じて多門を顯し、下は別して辨ず。初の句は持成就を明す、則ち起說の方便なり。後の句は、正しく所說を顯す。十向圓備するが故に、具足と云ふ。下の九は、說の所爲を顯すに、三に分つ、初の三は位に約す。一は地前を攝し、二は地上を安じ、三は佛果を紹ぐ。次の三は、修に約す。一は、十向の大願を開發せしめ。二は、說きて實際廻向に入らしめ。三は、廣大法界に廻向することを知らしむ。次の三は、人に約す、一は薄根の者をして、喜を生ぜしむ。又、廻向は是れ、一切の菩薩、同じく修する所なるを以ての故に、悉く歡喜す。二は、此廻向は是れ、一切の佛の、同じく修する所なるが故に、勸めて修

【第三に加相云云】經の一善男子、汝當に一等の文。

【一は他力の說】金剛幢、盧舍那及び十方の諸佛の加被を蒙り十廻向法を說く。

【亦は是れ果力…緣力】果人之に加する故に果力、說主に力を與へて說かしむる故に增上緣力といふ。

【二に意加】經の「爾時、諸佛は…智慧を與へ」等の文の下。

【說の智を與授す】四無礙解は、說法の要なる故に之を與ふ。

せしむることを明す。三は、因行を結成す。謂はく、行を了因と爲す、能く性を顯すが故に、護持と名く。又釋す。前の十は、諸の菩薩の、自利の行を成じ、後の十二は、諸の菩薩の、利他の行を成じ、然も亦互に通ず。又、皆初は總、後は別なり、同異成壞は、『地論』に準じて、應に知るべし。

第三に、加相の中に三有り。先に語業の加、次に意加、後に身加なり。初の語加の中に九句あり。汝此法を說けとは是れ總、餘は是れ別なり。此說法に二種有り。一は他力の說、亦は是れ果力、亦は是れ增上緣力なり、經の承佛力說の如くなるが故に。二に自力、說に堪ふ、亦は是れ因位の力、亦は是れ因緣力なり、是故に此法は、自他因果親疏融合するを以て、方に說くこと有るを得るなり。自力の八の中に、初の三は、有作の淨法力を明す。一は總なり。謂はく、既に佛家に住す、理宜く法を宣べて、以て家業を行ずべし。下は別なり。一は無漏の功德を長じ、二は總持の智慧に入る、故に佛家に在り。次の二句は、無作の淨法力なり。一は佛の常身を證し、二は法の眞性を照す。後の三は、身の淨力を顯す。一は、自淨等は是れ二乘、同じく盡さず、二は、住壞等は、是れ菩薩盡す、三は、住無礙等は是れ佛盡す。此は是れ地前なるに、而も佛盡すと云ふことは、是れ圓教普賢の位の攝なること、前後に說くが如し。二に、意加に二あり。先に正加、後に何加の意を釋す。前の中に十句あり。初の一は總、餘の九は別なり。別の中に、初の三は說の智を與授す。一は句身を分別す。是れ辭無礙なり。二は無留礙、是れ業說無礙なり。三は無礙法明、法

義の二無礙を與ふ。次の三は、同化三業の智を與へ、三輪を以て佛の成化に同ぜしむる故に知るべし。後の三は說法儀式智を與ふ。一は說法の時、心に偏黨無し、但し利益の爲ならしむるが故に、向福智と云ふなり。二は諸法に觸對して、皆能く巧便勝解を發生す。三は、緣に對して正しく說きて、窮盡有ること無し。又、初は是れ說の心、次は說の解、後は說の行なり。一切處は是れ頓說、不斷は是れ常說なり。偏加及び身加、並に起分を釋すること、並に前の釋の如し。

(六)第四に、本分の中に、先に大衆に警告す。下は正しく顯すに、二有り。先に體を明し、後に相を顯す。前の中に二有り。先に總じて標し、二に悉普の下は、別して不思を辨ず。大願とは總じて標起す。謂はく、期求するを願と名け、深廣なるを大と名け、分量を出過するを、不思議と名く。此は是れ普賢の自體、無障礙の願にして、盡法界無限の德用を具す。下の此品の所說の如し。諸德總じて、此一の大願の句の內に在り、故に不思議と云ふ。總說は爾りと雖も、別して論ずるに十有り。一は所期不思なり。謂はく、要ず無上大菩提を得。二は忍苦不思なり。謂はく、世間の惡道等の苦、多劫を經て受くとも、能く此願を壞すること有ること無し。三は受惱不思なり。謂はく、恩に背きて、菩薩を惱害する、難化の衆生に於ても、初の如くにして攝化の大願轉ぜず。四は難壞不思なり。謂はく、天魔二乘の異說、能く此願を壞して、而も化に從はざること有ること無し。五は廣の故に不思なり。謂はく、法界、衆生界等を盡す、十盡の句に說くが如し。六は深の故に不思にし

【法義の二無礙】法無礙解と義無礙解をいふ。一は能詮の教に於て滯る所なく、一は所詮の義理を知りて滯ることなきをいふ。

【三輪】神足、說法、記心輪の三。

【偏加】經の「何を以て…萬根力の故に」の文。

【身加】經の「爾時諸佛…已りし時」の文。

【起分】經の「彼菩薩、即ち定より起ち」の文。

【六】以下、本說分にて、十廻向の相を說く下なり。經の「佛子、是菩薩」等の文を釋す。

て、法性に契同す、性起の願の如し。七は攝徳不思なり。當體に具に法界無限の、大功徳海を攝す。八は出生不思なり。謂はく、此大願に依りて、一切の波羅蜜行を出生し、窮盡すべからざること、猶し大海の寶を出して、盡ること無きが如し。九は大用不思なり。謂はく、大願宿に成じて、巧辨の事無し、滅定に聲を聞きて、願力をもて起つ等の如し。十は逆順不思なり。謂はく、大願普く應じ、類機益を成ずるに、逆順多端にして下位の測るところに非ず。然るに此大願、實德無盡なれども、則に依りて十を辨ず、並に下の說分の中に顯すが如し。下は別なり、普救等は利他の廣大を明し、擧三世等は自利の廣大を顯す、各前の十義を具すること、知んぬべし。又此中の初は、是れ觀相、次は大善、後は不怯弱なり。六決定の中に三有り、餘義は前の釋に同じ。

二は顯相の中に二あり。先は數を擧げて、勝れたるを顯す。謂はく、三世同じく說くことは、法要の勝れたるを顯す。二に名を列ねて、勝れたるを顯す。先に名を列ね、後に三世同說を引きて、勝れたるを顯すなり。列名とは、十廻向の義に、略して五門を作る。一は釋名、二は義相、三は體性、四は位を定む、五は行法の差別なり。初に名を釋すとは、先に總名を釋す。一周の圓數は、則に依りて十を說く、廻向は是れ義、即ち帶數釋なり。然るに廻向に三有り。初に理に約すとは、相を捨つるを廻と曰ひ、理に入るを向と名く。二に利生に約すとは、理を得て證せさるを廻と曰ひ、大悲隨うて有りて、生を救ふを向と名く。三は菩提に約すとは、所修の善根、三有二乘を願はざるを、廻と名け、正しく

【滅定に…如し】入定前發願して、爾所の時を經て定より起つべしと、この期願に由て、自然に聲を聞き定より起ち事を成ずる如きをいふ。

【逆顯不思】三毒に値ひて、三德を成ずる如きをいふ

【下は別なり】經の一悉く普く一等の下。

【二は顯相の中云云】經の「佛子、何等をか…廻向と爲す」等の文。

【初に…立つ】十廻向釋に五、初に名を釋す。

【三輪を…名く】施の三輪とは、施者、受者、施物をいひ、此三を泯亡して二空成じ、二空を動ぜずして人法を假立し、檳行を成ず、是れ眞實處なり。
【四門】諸法實有の執見、又は斷無を執するをいふ。
【第二に…思へ】二に十廻向の義相を明す。

無上菩提に趣くを向と曰ふ。二に別名とは、菩薩の善根、諸の衆生の煩惱業苦を濟ふを、救と名け、菩提を得せしむるを、護と名く。救護を成ずと雖も、然も衆生に於て、照性平等の故に、離相と名く。又、救は是れ大悲、離は是れ大智なり。又初は是れ廣大等心、後は是れ不顚倒心、廻向は是れ行なり、謂はく、善根を以て廻向して、此の如きの救生離相の行を、成ずるが故に廻向と名く、所向に從うて名を立つ。二は、三寶に於て不壞信を得、此善根を以て、廻向を成ず、此は、能廻の行體に約して、名と爲す。三は、三世の佛の、所作の廻向を學するを、等諸佛と名け、所學に從ひて名を立つ、能所の廻に通ず。四は、菩薩善根をして、一切處に至らしめ、而して又一切處に於て廻向す、能所に通じて名を立つ。五は、自所成の無盡功德の藏を以て、廻向を成ず、能廻向の行に從うて名と爲す。六は、施は三輪を絕するを、順平等と名く。此亦是れ、能廻の行なり。又、堅固善根と名くることは、三不堅を捨てて、三堅に順成するが故に名く。七は、善根等の心を以て、以て衆生を順益す、能所に名を立つ。八は、善根、如に合して、廻向を成ずるを以て、所依を名と爲す。九は、相縛を爲さず、見に於て著せず、作用自在の故に、解脫と名く、不思解脫等の如し、亦能所合して目く。十は、性に稱うて用を起す。謂はく、法界の善根を以て法界に廻向す、當法に名を立つ。

第二に、義相を顯すとは、二有り、先は別、後は通なり。別の中に前の七は、事に隨ひて行じ、後の三は理に稱ひて行ず。前の中に、初の一は、悲智不住にして行本を明し、次

【起信論】義記下末九右、信成就發心の中に三を明す

の四は行相を明す。中に於て初の一は、起行の心堅し。二は、佛に約して廣を辨す。三は、法に約して遍を顯す。四は、德に約して多を顯す。下の二は行成を明す。一は智行成、二は悲行成なり。後の三の中に、一は正しく理と合し、體の深廣なるを顯す。二は、體に依りて、無方の大用を起すことを明す。三は、體用無礙、圓明自在なるを顯す。二に通じて論ずるに、一一の中に皆、三種の迴向有り。謂はく、善根を以て衆生に迴向し、菩提に迴向し、實際に迴向す。此に各二義あるが故に、迴向を成ず。且く衆生に二とは、一は、菩薩の善根は、必ず衆生に依りて、成ずるに由る、是れ衆生の分なり、是故に、法爾に還りて衆生に向ふ。二は、汎く既に是れ、菩薩は、必ず度生の爲なり、是れ救生の具の故に、理須らく彼に向ふべし。爾らずんば、即ち二乘の自度に同じて、是れ菩薩に非ず。二は、菩提に二とは、一は、菩薩の善根は、大菩提に依りて成ず、彼從り流るるが故に、是れ彼の分なるが故に、法爾に彼に歸す。二は、汎くは是れ菩薩の意、必ず無上菩提を求むるが爲に、是故に、家法は大菩提に向ふ。三は、實際に二とは、一は菩薩の善根は、緣成無性なり、眞に依りて成ず。彼從り流るるが故に、是れ眞の物、法爾として彼に向ふ。二は、汎くは是れ菩薩は、必ず眞を證するが爲に、無明に背くが故に、二空を照すが故に。問ふ、『何が故に、此三迴向を須ふるや。』答ふ、『此三に多義有り、略して論ずるに、十種有り。』一は、菩提心に、三心有るに約するが故に。『起信論』に云はく、『菩提心に三有り。一は直心。正しく眞如の法を念ずるが故に。二は深心。樂ひて一切の諸の善行を修するが故に。

三は大悲心。一切の苦の衆生を、救拔するが故に」と。二は、菩薩の三聚戒を、成ずるに約するが故に。謂はく、律儀過を離れ、實際に向ふなり。攝善は廣く修して、菩提に向ひ、攝生は大悲をもて衆生に向ふ。是故に『法集經』に云はく、「若し菩薩、三聚廻向の心を捨つれば、菩薩、應に共に住すべからず」と。三は二行を成ずるに約す。實際向は煩惱の行を護り、餘の二は二乘の行を護る。四は二利の行を成ずるに約す。向實は自利、向衆生は利他、向菩提は二利に通ず。又釋す。菩提は自利、衆生は利他、實際は倶非なり。五は、三德三身を成ずるに約す。因位の三行に因りて、三德を成ず。實際に向へば斷德を成じ、菩提に向へば智德を成じ、衆生に向へば恩德を成ず、三身は、次の如く知んぬべし。六は、悲智を成ずるに約す。智の中に、理を照し事を顯すを二に分つ、故に三有るなり。七は、唯悲に約す。謂はく、何が故に菩提に向ふや。衆生の爲の故に。何が故に生の爲にするや。彼即眞なれども、知らざるを以ての故に。八は智に約す。謂はく、衆生の染相盡くるを見るが故に、即ち是れ實際の染相不壞なり。是故に、生の爲に授くるに、佛智を以てするが故に、菩提に向ふ。九は無礙に約す。謂はく、菩提の智、理性に證同す。衆生の染相、即眞にして異ること無し。是故に、一に向へば即ち三に向ふなり。十は圓明に約す。謂はく、三法圓融して各法界を攝し、具德自在なり、一切の法門相即相入して無礙なること之を思へ。

第三に、體性を明すとは、二有り、先は總、後は別なり。總の中に三有り。一は、所依

【三聚戒】攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒。

【實際】眞如法性をいふ、これ諸法の際極なればなり。

【第三に…説く】三に十廻向行の體性を明し、四に位を定む。

【第五に…如し】第五に行法の差別今直顯と寄顯の二別に約す。【七】以上第四の本分を明し終り、次に第五の說分を明す。

に約して、明智三昧を以て體と爲す。二は、本分の中の大願を以て、體と爲す。三は、具に論ずるに、六法有りて性と爲す。一は定、二は智、三は願、四は悲、五は所依の法界、六は通慧作用、不思解脫等を倂せて、性と爲す。二は別して體を辨ず。下の說分の處に、位に隨ひて之を顯す。第四に位を定むとは、此は解行位の終、第一僧祇の滿に當る。佛性論一に依るに、此位の滿に至りて、方に不退の位と名く。瑜伽一に依るに、此中に猶自ら地獄の中に墮つ。有が說かく、此は猶資糧の位に屬す、迴向の後に於て、別に四善根を說きて、加行と爲すを以ての故に。有が說かく、此は二位に通ず、第十の迴向の中に於て、加行を攝するを以ての故に。有が說かく、此は總の加行なり、住心已還は、前の二善根の位に屬し、滿心已還を、後の二善根の位に屬するを以ての故なり。上は總じて初教に約して說く。有が說かく、十住の初は、卽ち位不退なり、況んや此に至るをや。又、三賢の菩薩、能く佛國に遊生す、況んや惡道に墮つるをや。又、三賢は總じて聖に趣くに、方便と爲し、資糧加行の近遠を分たず、此は終教に約す。頓教は一切の行位、倶に不可說なり。又、此下の文に準ずるに、此位の中に於て、一切の位を攝し、普賢の行を具す。是故に位滿卽ち是れ因圓なり。此は圓教普賢の位に約して說く。第五に、行法の差別とは、二有り、一は實位に約す、普賢の行相なり。二は寄法に約す、差別の行相なり、並に下の說分の中に、辨ずるが如し。

(七)第五に、說分の中に但し大迴向の位に、二分有り。一は果分。不可說に當る、此に論ず

【瓔珞…辨ず】經中に四十二位、賢聖の階位、因果行相等を說けり。

【二は唯…如し】、普賢自體の行は、普周自在、圓融無盡にして、森羅の諸法卽入せざるなきをいふ。

【八】正しく十廻向を釋するに、初に文を分ち、次に十行の一一を釋す

【初廻の釋云云】第一に、救護衆生廻向の文を釋す。

る所に非ず。二は因分。說に隨ふに四有り。一は唯位相に約す、始終敎に說くが如し。『瓔珞本業經』等に辨ず。二は唯自體に約す。普賢大廻向の行の如し、諸位に依らず。三は行體を以て、位門階差に從へて說く、此下の文の如く、廻向を分ちて十門と爲す者是なり。四は、位門を以て、行體圓融なるに隨ひて說く、下の一一の位の中に、一切の位を攝するが如し。第十に、卽ち究竟法界因圓滿に至る者是なり。今此文の中に、正しく後の二を辨じ、兼て前の二を攝す。亦內に果分を攝すること、準思せよ。

(八)文の中に二有り。先に一方に十廻向を說くことを辨じ、後に十方所說の、一切無盡の十廻向を結通す。前の中に亦二有り。先に正說し、後に動地等は、說の益を明す。前の中に十向を說くを、卽ち十段と爲す。一一に各二有り。先に長行、後に偈頌なり。長行に各二有り、初は位行、後は位果なり、亦具せざる者有り、文に至りて之を知れ。諸位の行に各三有り。初に標起、二に釋顯、三に名を結す。初廻の釋の中に二有り。先に行體を擧ぐ。謂はく、此菩薩所行の、六度四無量等の諸行善根を、擬して將に廻向せんとす、其文は知んぬべし。二に、修善根已下は、正しく廻向を明す。中に於て二有り。初に衆生、及び菩提に廻向して、救護衆生を明し、後に救菩薩如是廻向亦無著の下は、實際に廻向して、離衆生の相を明す。前の中に四有り。初に、衆生の利養安樂の爲に、廻向を作すことを明す。中に於て三有り。初に總標、二に以此所修の下は、別して辨じ、三に佛子の下は結す。別の中に二有り。先に善根を以て、三惡道を濟ふを、救と名け。二は復作是念の下

【一は現苦を抜き】現在受くる苦惱、病患、打擲、繫縛等。

【二は煩惱…除かしむ】現在のみならず、現當遠近等の煩惱を解脫せしむ。

【業障】十惡業等の諸の不善業。

【六は所知…習を斷ず】智障は斷じ難きを以て、使と習とを分ちて示す、因みに今使とは種子を指し、兼ねては現行を含めていふ。

【三は…釋する中】經の「何を以ての故に、我明淨圓」等の文の下。

は、苦を抜き、善に置くを、護と名く。又初に、苦を離れしむるを、安樂と名け、後に善を修せしむるを、利益と名く。中に於て十句有り。一は現苦を抜き、二は煩惱障を除かしめ、三は業障を離る、是故に怖無し。四は菩提に至らしめ、五は涅槃を得せしめ、六は所知障の使を斷ぜしめ、七は所知障の習を斷ぜしめ、八は如理智を得せしめ、九は如量智を得せしめ、十は理量無礙智を得せしむ。三に佛子の下は、總結して一切智を得せしむ。

第二に佛子此菩薩の下は、怨惡の衆生に於て、深悲を調練し、惱を受けて迴向す。中に於て五有り。初は怨の衆生に於て、悲心を調練し、二は惡の衆生に於て、悲心を調練し、三に何以故の下は、理を以て練行の、所由を釋成す。四に菩薩如是觀の下は、調練の行成じ、悲念轉增す。五に菩薩以諸善迴向時の下は、正しく善根を以て、迴向して益を成ず。初の中に二有り。先に菩薩の平等觀心を明すに、標徵釋有り。二に若衆生境惡の下は、怨境に對して、以て心を練るに、法喩合有り。一切重業の下は、惡の衆生に於て、悲心を調練す。中に於て亦二有り。初に總じて惡境に於て、心動亂せず、法喩合有り。合の中に二有り。先に本心を動ぜざることを明し、二に正意の下は、饒益を失はず。前の中に惱を被り、大を退して小を學ぶを、散亂と名く。二に一切衆生の下は、別して惡類に於て饒益するを捨てず。中に於て五種の衆生有り。一は多惡に於て嫌はず。二は難化に於て捨てず、三は單有の下は、邪願に於て轉ぜず。四は若見の下は、無信に於て棄てず。五は若與の下は、瞋を攝して惱無し。三は理を以て釋する中に、先に徵し、後に釋す。徵の意は

【四に菩薩…下】經の「菩薩摩訶薩是の如く諸の善根」等の下。

悪人何の幸ぞ、恩に背きて救を蒙むる。菩薩、何事ぞ、惱を被りて仍ち救ふや。下は釋の中に、先に總釋す。謂はく、菩薩の大智、理を見るに由りて、能く惡を計らず、大智有るに由りて、人の惡を救ふに堪へたり。日に二義有るが如し。一は、生盲は日無しと謗ると雖も、計念無し。二は亦捨てずして、還りて謗人を照す、菩薩の智日も亦爾り、故に乃至調伏一切衆生と云ふ。二に別して釋するに二有り。初に本の大志を念じ、調伏の行を成ず、亦二有り。初に反りて六事を擧ぐ。謂はく、既に本志は一衆生等の爲にせず、豈小違に遇ひて本志に乖かん。二に順顯に亦六事有り、知んぬべし。謂はく、方に大事を成ぜんとす、理應に違を受けて、彼惡人を救ふべし。二に重ねて大心を現じ、以て調行を成ず。中に於て、初句は是れ總なり。謂はく、此菩提心の體、尊貴すべきが故に寶と名く。是故に、設ひ違惱有るも、此心を存護せんが爲に、理應に轉ずること無かるべし。下は別の中に六句有り。一は勢力の義。謂はく、能く如來の境を生ず、是故に名けて彼境力と爲す。二は普遍の義の故に、廣大と云ふ。三は甚深の義の故に、平等と云ふ。四は離垢の義の故に、無懈怠と云ふ。五は希有の義の故に、修難得と云ふ。六は最勝の義の故に、與佛等と云ふ。此大心理、此の如く惡人を救ふべきが爲の故に、是故に菩薩、行をして增せしむ。四に菩薩如是觀の下は、調練の行成じ、悲をして增長せしむるを結す。中に於て、如是觀善は、前の行解を牒す。信心淨とは、前の所解の道理に於て、信心決定するなり。下は此決定に依りて、悲をして增長せしむ。謂はく、悲行虛からざるが故に、非但口言と言ふ。

此悲心は是れ總、於諸衆生の下の九心は、是れ別なり。一は、歡樂饒益、二は、片疑濁無きが故に、明淨と云ふ。三は、己を屈して、物に就くが故に、柔軟と云ふ。四は、憐愍の情懇なるが故に慈心と云ふ。五は、慈念深徹するが故に、愛念と云ふ。六は、攝して、已が菩提法の中に、同ぜしむるが故に、攝取と云ふ。七は、大行を授與するが故に、饒益と云ふ。八は、涅槃を得せしむるが故に、安樂と云ふ。九は、菩提を得せしむるが故に、最勝と云ふ。前の思擇行解力に由るが故に、諸の衆生に於て、此等の心を生ず。是故に、此に依りて以て、廻向を成ず。五は善根を調練するに、正しく廻向を以てす。中に於て、先に善根を擧ぐ。謂はく、彼菩薩、勝心に依りて、正しく善根を以て廻向する時、是誓念を作さく「直我昔本の善根をして、衆生に廻向せしむるのみに非ず、若し我目前の、衆生に廻向する所有の功德、及び衆生の爲に、菩提に廻向する所有の功德、復此功德を將て衆生に廻向し、是の如きの淸淨趣等を得せしめん」と。此要誓を以て、諸の善根を送りて、衆生の所に至らしむるなり。中に於て二有り。先は衆生に廻向し、法器と成らしめ、二は復作念の下は、得法を成滿せしむ。前の中に二有り。初に法器の身を得せしむ。謂はく、淨趣は是れ修行の處なり、淨生は是れ修行の身、餘は是れ行の緣にして、具に盡すべからず。二に常得の下は、法器の心を得せしむるに二有り。先に過に於て染せざらしむ。謂はく、身尊貴なりと雖も、心錯邈ならず、淨趣に居すと雖も、而も染に迷はざるが故に分別趣と云ふ。二に思量の下は、德に於て求を起す、知んぬべし。二に得法を滿ぜしむる

【十藏】十無盡藏品の初に明せり。

【第三に菩薩云云】經の「此菩薩摩訶薩は」等の下。

中に、二有り。先に佛を見て信を得、二は法を聞きて行を持つ。法行の中に於て二有り。初に自分の行德を成ぜしむ。七財とは『涅槃經』に依るに、信と戒と、慚と愧と、聞と、施と慧とを、七と爲す。即ち十藏の中の、前の七是なり。二に修學一切の下は、勝進の德を成ぜしむ。中に於て三有り。初に自利の德をして滿ぜしむ。二に於一切の下は、利他の滿を成ずるに、三業有り、知んぬべし。三は令一切の下は、佛果究竟を成ず。

第三に、菩薩復念衆生造作從り下は、受苦の衆生に於て、深厚の大悲を以て、苦に代りて、廻向することを明す。中に於て七有り、初は總じて苦の生に於て、念を起して代りて救ふ。中に於て二有り。初に衆生の罪業受苦を念じ、二に我當於彼の下は、念を起して、代りて救ふ。中に於て二有り。先に總じて擧ぐ。苦を以ての故に心退せず等とは、悲心を調練し、深厚にして倦むこと無し。二に何以故の下は、代救の意を釋顯す。中に於て先に徵す。意の云はく、他の諸の衆生、自ら苦惱を受く。菩薩に於て、何の益有りてか、代りて受けんと欲する。下は釋の中に二有り。初に自らの本願を滿ぜんが爲に、是故に代りて救ふ。謂はく、菩薩初從り大いに誓ひて、自らの身命を捨つるは、只衆生の離苦得樂の爲にして、更に餘爲無し。是故に、衆生は皆是れ、菩薩所荷の擔なり。是の如く同體の本願を滿ぜんが爲に、是故に彼苦は是れ、菩薩の憂ふる所なり。下の度脫一切等は、其所作を顯す。謂はく、苦の因果を救ふなり。二に衆生常爲の下は、其迷謬を愍むが爲に、代り救ひて倦むこと無し。中に於て三有り。初は癡愛は是れ、苦の因なることを標し、二は染著

の下は、愛に依りて苦を受くることを明し、三に隨諸の下は、癡に依りて苦を受くることを明す。中に於て、隨魔は是れ癡、邪に從ひて佛を疑ふ。是れ癡は正に背く。此は善因無きなり。出世の道を得ずとは、菩提を得ざることを明し、安隱を見ずとは、涅槃を得ざることを明す、此は善果無きなり。常馳等は、恆に苦果を受くることを明す。二に菩薩見衆生の下は、自の所作廻向救儀を標す。中に於て三有り。初は總じて擧ぐ、前の衆生受苦悲見廻向の如し。二は以大廻の下は、正しく行儀を顯すに三句有り。初は以大廻等は、自らの大心を盡す。此に四義有り。一は稱法界の善根を以て、一衆生に廻向す、餘の一一の衆生も亦爾り。二は一一の衆生の爲に、無量劫に於て、苦を受けて倦むこと無し。三は要ず一一の衆生をして、先に無上菩提を得せしむ。四は然も衆生と、及び廻向の行とに於て、能所を見ず、同一法界平等無二なる、是を大廻向廻向と名く。二に三世の菩薩の所作に順同す。謂はく、三世の菩薩、所應作の廻向、我も亦彼の如くに作さん。三は極至の敎に順ず。謂はく、圓教所說の普賢廻向の如く、我當に彼敎に順じて作すべし。三は令一切の下は、廻向に因りて、所得有らしむることを明す。三復作是念我當爲令の下は、自の廻向、救所成の益を標す。中に於て三句有り。初ば智王の住處は是れ涅槃なり。二は一切智心を得せしむ、是れ菩提なり。三は拔出等は、生死を離れしむ。謂はく、拔濟顚等は、分段の苦を出で、度生死流は、變易の苦を出づるなり。四に復作是念我當爲一切の下は、既に上の益を見て 志を建て、正しく其獄苦に代らんと、欲することを明す。中に於て四有り。

初は總じて標擧す。二は我當爲一切の下は、志を建て、一切處に於て苦に代らんと欲す。三は我當於一一の下は、一切の時に於て、苦に代ることを明す。四に何以故の下は、代苦の意を釋す。問ふ、「自作し自受す、云何が、菩薩、能く代ることを得んや。」答ふ、「此中の菩薩の、衆生の苦に代るに、通じて論ずるに六義有り。一は謂はく、苦の事を以て、自ら要す其願行を増すが故に、『瑜珈』の第四十九に云はく、「問ふ、「菩薩、勝解行地從り隨ひて淨勝意樂地に入るの時、云何んが、諸の惡趣等を超過する。」答ふ、「是諸の菩薩、世間の淸淨靜慮に依止し、勝解行地に於て、已に善く菩提の資糧を積集す、前に說くが如く、百一十の苦の諸の有情の類に於て、哀愍を修習して、餘の思惟無し。此修習を因緣と爲すに由るが故に、彼色類の諸の有情の所に於て、哀愍の意樂、及び悲の意樂を得。是因緣に由りて、惡趣の諸の有情を利せんが爲の故に、誓ひて惡趣に居すること、已が舍宅の如くならんと、是誓を作して言はく、我若し唯是の如きの處所に住し、能く無上正等菩提を證せんに、亦能く一切有情の苦を除かんが爲の故に、一切有情の諸の惡趣の業を忍受せんと、淨意樂を以て悉く自身に彼に代らんと願ひ、苦の異熟果を領受す。畢竟して一切の惡業をして、永く現行せず、一切の善業をして、常に現行せしむるが爲の故に。心に正願を發す、彼是の如きの世間淸淨の靜慮を修習するは、悲願力に由るが故に。一切の惡趣、諸の煩惱品、所有の麤重、自らの所依に於て、皆除遣することを得。此斷に由るが故に、菩薩久しからずして、轉依を獲得し、諸の惡趣、所有の惡行に於て、

【二に苦業…約す】是は苦等上業となりて苦等の事を合うす、實に代りて受苦するに非ず。

畢竟じて作さず、諸の惡趣に於て、決定して往かず。此菩薩に齊しきを、説きて超過一切惡趣と名け。亦超過勝解行地と名け、亦已入淨勝意樂地と名く」と。解して云はく、淨勝意樂地は是れ初地、地前に於て此悲願を起し、惡趣の業を斷ずるに由りて、即ち初地に入り、彼有情に於て、未だ必ずしも實に代らず、此は初教に依りて辨ず。二に菩薩の留難同事に約す。有苦の身を受けて、苦の衆生に同じ、其が爲に法を説き、法を聞きて苦を免れしむるが故に、代ると名く。三は設ひ衆生有りて、無間等の業を造作せんと欲するに、菩薩化して、止むれども從はざれば、遂に其命を斷ず。彼命を斷ずるに由りて菩薩、自ら惡趣の苦報を受け、彼をして無間の大苦を、免るることを得せしむ、此も亦代ると名く。此は梁の『攝論』の、第十一に依りて辨ず。此上の二の釋は、終教に依る。四は菩薩初從り、正しく生の爲に、苦を受くることを願ひ、此願を作し已りて證位に至り、願成じて自在なるに由りて、常に惡趣に處して、救ひて衆生に代る、地藏菩薩等、及び觀世音菩薩等の如し。五は菩薩、此願眞如に契同す、諸衆生の苦も亦悉く眞如性にして、即ち是れ眞如なるに由り、如に同ずるの願を以て、還りて衆に即ち眞如の苦に至る、眞如道に依りて、亦代ると名く。此は同體の願力に約す。六は普賢法界を以て身と爲し、一切衆生皆是法界なるに由りて、即ち衆生の受苦は、常に是れ普賢の苦に。代ると名く。今此經文は、後の三釋に屬す、是れ境前なりと雖も、是れ普賢の因の位に、是菩薩に能く代るなり。問ふ、若し爾らば何が故に猶受苦の衆生有るや。答ふ、此事不爾なり、若し受苦をして利益有らし

むれば、則ち菩薩の受けしむるも、亦名けて代と爲す、此密益にして、常の人の所知に非ざるが故に、難ずべからず。」又釋すらく。業苦に二有るに由る。謂はく定と不定となり、得報も亦爾り。彼不定報は、二の緣力に由りて、是れ亦轉ずべし。一は因力に因る。謂はく、彼衆生增上の作意力なり。二は緣力に由る。謂はく、外緣增勝の境力に由る。今、菩薩は、不定報に於て、勝緣力と爲る所、及び彼をして增上の作意を發さしむるが故に、彼報をして、輕有り脫有らしむ。五に菩薩復作是念我當の下は、誠言を明し、志を表し、物の爲に、虛からざることを顯す。中に於て三有り。初は誠言は物の爲にす、總標別釋有り。謂はく、衆生の苦を見るに因りて、發心して救はんと爲す、此言若し虛ならば、即ち本より發心せず、心此に因りて發す。是故に言行虛からず。二に不、求尊の下は、自爲ならざることを彰す。亦初に總じて辨じ、次に何以故の下は釋成し、後に菩薩明見の下は、不爲を結す。三に但欲の下は、其所爲を結す。六に菩薩復作是念我當以諸善根の下は正しく善根を以て、首の如く廻向し、利樂を得せしむることを明す。中に於て二有り。先に樂を得せしめ、後に利を成ぜしむ。前の中に、初に種種の樂を得るは、是れ總標なり。下は別なり。十句有り、一に佛果窮極するを、究竟と名け、二に利潤崖無きを、饒益と名け、三に餘人に超過するを、不共と名け、四に無爲にして常安なるを、寂靜と名け、五に離過清淨なるを無染と名け、六に緣壞すること能はざるを、無動と名け、七に稱性廣多なるを、無量と名け、八に性の變易無きを、不死不轉と名け、九に常恒無盡なるを、不滅

【第四に菩薩云云】四に無念廻向。經の「菩薩摩訶薩は諸の善根」等の下。【孤標の大志】他に比類なき大志。經に「唯我一人の志のみ獨にして侶無く」といふを指す。

と名く。此は是れ、大涅槃の樂なり。十には慧の自在を明すを、一切智と名く、此は此れ大菩提覺知の樂なり。『解節經』に依るに、亦五の樂有り。一は出家の樂、家難を解脱するが故に。二は遠離の樂、欲を斷じて、初禪を得るを以ての故に。三は寂靜の樂、二禪を首と爲し、覺觀息むが故に。四は菩提の樂、法に於て、實の如く、覺るが故に。五は涅槃の樂、化を息め無餘に入るが故に。二は我當爲作調御の下は、利益を成ぜしむ。中に於て十句有り。初の六は佛を擧ぐ、一は歸、二は臣、三は明、四は炬、五は趣、六は離及び解法なり。並に上に同じきを以ての故に、之を略するのみ。七は深理を解せしめ、八は智行は度を成じ、九は福行をもて果を求め、十は涅槃に向はしむ、故に示彼岸と云ふなり。七は菩薩以是無量の下は、行は實に益を成ずるを明す。中に於て十句有り。初の一は前の廻向を牒し、次の二は、下は生苦を救ひ、上は佛意に順ず。次の二は正を得て邪を捨て、次の二は惡を遠ざけ、善に近づき、次の二は淨を成じ染を滅す。後に具足の下は、總じて結するなり。

第四に、菩薩以善根正廻向已下は、孤標の大志、普く衆生の爲に、無念に廻向することを明す。中に於て三有り。先に己が大志を標し、二に念求無きことを明し、三に至極廻向を明す。初の中に先に結前、作是念の下は起後なり。中に於て二有り。先づ喩に二有り。初に一日多照の喩、二に日照業成の喩、後に菩薩亦如是の下は、法合なり。中に於て二有り。初に獨志の廣益を明し、初の喩に合す。二に欲爲の下は、正しく益の事を成じ、後の

【第二大段に云云】以下は、隨衆生の相を明す、これ上の救護衆生の義に翻ず。

喩に合す。中に於て十句有り、知んぬべし。二に菩薩復作是の下は、無念求なり。中に於て二有り、先に返擧す。謂はく、善の衆生に於て、恩を求むるを、念ずること無く、惡の衆生に於て、捨離するを、念ずること無し。後に但勸の下は、順顯するなり。謂はく、初に令得樂果攝少の下は、善因を成ぜしむ。謂はく、少善根を以て、大菩提の果を廻救するが故に、廻向廣大と名く、此は悲深きを顯す。縱ひ少善をしても、亦方便を以て廣廻向を成ぜしむ。三に若諸善根の下は、正しく至極廻向を明す。謂はく、善として極めざること無く、向として極めざること無し。中に於て二有り。先に至極の善根を擧ぐ。初は返擧す。謂はく、若し我が善根、實に生を益すること能はずんば、我も亦彼の善を修せず。亦廻向を作さずと。下は順顯するなり。謂はく、我善根、實に能く生を益するを以て、是故に廻するのみ。此は徹到廻向を明す。二に令一切衆生の下は、廻成至極を明す、法等に著せず、妄を捨てしむ、以衆生性等は、眞に入ることを明す、此は亦是れ、衆生をして實際に入らしむるなり。

第二大段に、菩薩如是廻向亦無所著の下は、離衆生の相を明す。即ち是れ實際廻向なり。中に於て二有り。初に會相入實を明し、二に隨方便智の下は、依實起用を明す。亦是れ初に無廻を明し、後に廻せざること無きを明す。前の中に二有り。初に、前の廻向衆生を會して、實際に入ることを明し、二に、修行清淨の下は、前の廻向菩提を會して、實際に入ることを明す。前の中に三有り。初に正しく顯し、二に但欲の下は、疑を釋し、三に以

【三個…三煩惱】心個を皮、想個を肉、見個を心煩惱に配している。

如是の下は、總じて結するなり。初の中に亦三有り。初に妄相を離れ、二に不住心願の下は、妄想を離るることを明し、三に不著の下は、假名を離るることを明す。諸經の中に、多くは此三に約して、離妄を明すなり。初の中に三有り。先に前の大悲救護の衆生を會し二に不求の下は、前の悲心を、怨惡等に於て、調練するを會し、三に不取衆生相の下は、前の代苦等の行を會す。初の中に二有り。先は能廻の行を會す。謂はく、能廻有ることを見ず、三句有り。一は總じて無著を顯す、二は離性、三は離相なり。二に廻向の下は、所向の衆生を會す。謂はく、所向有ることを見ず、能所兩ながら絶し、平等なり。中に於て初に總じて、衆生の業果、倶妄なることを顯す。是を以て菩薩は著せず。下は別して之を顯す。不取五陰は是れ有に住せず、不壞五陰は是れ、無に住せず。此上は、衆生の報果に於て著せず。不取妄業とは、衆生の業因に於て著せず。二に前の調心を會する中に、報を背恩等所起の嫌恨等に於て、求むることを爲さず。虚妄因緣の下は釋なり。謂はく、因空たるが故に生せず、緣空の故に起らず、報空の故に住せず、大悲、惱を忍ぶを堅固と名く、空の故に之に住せず。恩報等を求むるは、是れ虚妄の法、亦空の故に住せず。三に代苦を會する中に、不取衆生相とは、代る所の衆生の空を明すが故に、代無し。不分別世界とは、所受の苦處を明す。是上の文の、於一切刹一切地獄等、空の故に代る處無し。謂はく、諸業非淨世界平等なりと見るが故に、不分別と云ふ。上に妄相を離れ竟んぬ。二に妄想を離るる中に、三個は即ち是れ、皮肉心の三煩惱なり。三ながら、相想倶に空なるを以て、皆

【薩婆若】梵に(Sarvajña)一切智と譯す。

亦絕と名く、故に不著語言道と云ふなり。二に疑を釋する中に、疑ひて云はく、若し衆生皆空なれば、廻向も亦離る。菩薩、何に因りてか、廻向を作す。釋の中に五有り。初の句は總釋なり。衆生をして、此生の空無廻實の法を解らしめんが爲に、是故に廻向す、廻有りと謂ふには非ず、此は『淨名經』に「衆生の爲に斯の如きの法を說く、是れ則ち眞の慈」といふに同じ。二に觀察等とは、別して所向の衆生、平等なりと觀じて、廻向を作す。三に法界印等は、別して能廻の善根、稱性の廻向を顯す。初に理を以て行を印し、後に行性は染を離るるが故に、離欲等と云ふなり。四に解一切の下は、能所無二同一法界にして、廻無くして廻することを明す。五に轉疑に云はく、若し是の如きの廻向、諸の衆生に於て、何の增損する所ぞ。釋すらく、此無二の廻向は、德に於て生せず、惑に於て滅せず。何を以ての故に。皆卽空にして、眞性に同ずるを以ての故に、故に不生等と云ふなり。三に以如是の下は、總じて平等廻を結するなり。二に修行淸淨の下は、前の廻向菩提を會して、以て實際に入る。中に於て三有り。初に牒して前の行を擧ぐ、修對治は是れ出世の因なり。善根向出世は、正しく是れ前の廻向菩提なり。二に於善根の下は、正しく會して實に入る。中に於て、初の句は總じて標擧す。不作二相とは、善根の業は是れ因の所向、出世薩婆若は是れ、果の隨相を二と爲し、緣を會して性に歸す、平等不二の故なり。下は別して之を顯す、先に因果の不卽不離を明す、倶に有無を離るるが故に。不二と名く。後に願智業の下は、有無を離るるの因果、性に稱ひ皆明淨なることを明す。明淨の性

【九】以下重頌を釋するに初に意を敍す。經の「爾時、金剛幢」等の下。

殊らざるが故に、不二と名く。此等は並に『淨名經』の、布施迴向一切智を二と爲し、布施の性は則ち是れ迴向一切智の性は、是れ入不二法門と名くるに同じ。三に捨離の下は、觀の益を明す。初に散動を離るるの益、離惰慢等は惑染を離るるの益なり。上來入實竟んぬ。自下第二に、實に依りて用を起す。中に於て三有り。初に總標なり。謂はく、寂に於て滯らず、實に即して用を起すを、隨方便智と名く。二に令一切衆生の下は、正しく所作を明す。謂はく、衆生をして此即眞の脱を得せしむ。不著法性とは、寂に滯らざるなり。稱性の善根の故に、無量等と云ふなり。無業報出業報とは、理に依りて事を起し、以て無功の大用を、成ずることを明し、業果亡びざることを明すなり。三に觀の益を結す。離惡は是れ離過の益、佛讃は是れ成善の益なり。又離惡は超下の益、佛讃は顯上の益なり。佛子の下は、第三に總じて名を結す。

(九)第二に、重頌の中に二有り。先に意を敍し、後に正しく頌す。初の中に、承佛力は、說の所依を顯し、觀十方は說の分齊を明す。謂はく、十方に同じく說くが故なり。及一切衆は、說の所爲を彰し、觀法界は所說の理を顯し、入深句義は教義の玄なるを明し、大悲普覆は說の心廣きを辨じ、護持等は、所傳の益を明す。謂はく、此法をして流行せしむ。即是佛種不斷入一切佛等は、所入の益を顯し、出生等は、所出の益を明し、善能分別等は、機に應ずるに、法を以てすることを彰す。謂はく、分別心は是れ、欲を知るなり。過去の善は是れ根を知るなり。知時不失は是れ、機熟して法を授くるは、時を失はざるなり。具

【下は正しく六六偈頌を釋す。】

足等は、所見の說法の身を明す。謂はく、内に法身を具し、外に色身を現ず、此は是れ、法門の身有るが故なり。

下は正しく偈頌の中に、四句を以て頌と爲す、二十八偈有りて二に分つ。初の五頌は、總じて殊勝を嘆ず、前の文を頌するに非ず。二に十方一切の下は、別して前の文を頌す。初の中二に分つ。初の二頌は、大心は物の爲に、方に此藏に入ることを明す。中に於て六心有り。初の二句は廣心を明し、二に堅心、三に常求等は是れ勝心、四に淨心、五に敬養心、六に深心、解法は是れ智、生を救ふは是れ悲なり。彼能善入等とは、行を結して位に入る、此六種の殊勝の大心を具して、方に能く此廻向の藏に入る、是故に此藏を極殊勝と爲す。二に三頌有り、大力は生の爲に、方に此地に入ることを明す。亦六力有り。中に於て、初の一頌の中に、三力、生を救ふ。一は猛勤の力、二は淨智の力、三は堅忍の力なり。常於の下の一句は、正しく救生を結す。二の一頌の中に、二力は生を益す。初に淨信の力なり。謂はく、無等は是れ信なり、心安は是れ信心安固なり、喜淨は信相を釋顯す。二に大堪力は、謂はく、苦を受け、荷載するが故に大地の如し。下の句は益生の爲なるを結す。三に不退菩行の下の三句は、大悲力の救生を明す。初の二句は悲行を舉げ、常業の一句は、救生の爲なることを結す。上來總じて、大力救生能入の行を明す。下の彼人速入等は、行の大位を結す。謂はく、彼大力を具して、方に能く速に、此の如きの廻向大無礙地に入る、是故に、此地を極殊勝等と爲す。

第二に、正しく前の文を頌する中に、三有り。初に三偈有り、前の所迴の行體を頌す。中に於て初の一偈は、前の四等の行を頌す。謂はく、普く衆生を攝して心安住するは、通じて四心を具するなり。修迴向とは、行の廻向に堪ふることを明す。後の二偈は、六度の行を頌す。二に十方一切世界中の下の十偈は、前の救護衆生は即ち是れ、衆生及び菩提に迴向することを頌す、七に分つ。初の二偈は、前の利樂衆生迴向を頌す。

一は安樂を頌し、二は利益を頌す。二に一偈有り、前の代苦迴向を頌す。三に一偈有り、前の迴向の意を頌す。謂はく、五欲の爲にせず、但生の爲に佛を求む。四に二偈有り。悲智行迴向を頌す。初は是れ智及び行、後は是れ悲及び行なり。謂はく、違緣安生は是れ悲なり、此は猶是れ、前の違緣の行なり。五に除滅の下の二偈は、離衆心迴向を頌す。猶是れ前の、惡衆生に於て瞋心害を起さず。六に菩薩不曾の下の一頌は、不著五蘊三界迴向を明す。七に出佛の下に一頌有り、菩薩の攝生行願を總結す。三に菩薩一切心安住の下の十偈は、離衆生相を頌す。即ち實際迴向を二に分つ。初の三は、前の會相入實を頌す。初の二は三業堅實を明し、後の一は三業の正理を明す、故に佛をして喜ばしむるなり。後の七偈は、前の依實起用を頌す。中に於て四有り。初の一頌は、身業の勝行を明す。二に四頌有り、意業の勝行を明す。中に於て、一は正思、二は堅實、三は行堅、四は行滿なり。三に一頌有り、語業の勝行を明す。謂はく、言に著せず、語を違へざるが故なり。四に末後の一頌は、行の、理に順ずることを結し、佛をして歡喜せしむ。

【一〇】以下、第二不壞廻向の文を釋す。

【理に老比丘…如し】行道多く老比丘形をなすは、順行の所作なる時も、逆行の用なる時もあるなり。

（一〇）第二に、不壞廻向の中に二有り、先に長行、後に偈頌なり。前の中に亦二有り、先に位行、後に位果なり。前の中に三有り。謂はく、標、釋、結なり。釋の中に三有り、先に所廻の行體を擧げ、二に菩薩如是等善根の下は、正しく廻向を辨じ、三に菩薩如是善根廻向欲度一切の下は、廻向の益相を明す。初の中に二有り。先に不壞信を明し、二に佛子菩薩安住の下は、不壞の信に依りて、善根を生長することを明す。前の不壞信の中に十句有り、三に分つ。初の三は、三寶の境に於て不壞信を得、先に佛、次に僧、後に法なり。二に四句有り、所修の行に於て、不壞信を得。中に於て、一は、正法を護るを信じて、決定して行を成じ、二は、衆生に廻向するを信じて、決定して益せしめ、三は、所修の善根、理に順じて淨に向ふを信ず。文に標と釋と有り。四に、信所行廻向の行にして、直心等は釋す。三は三句有り、難知の境に於て、不壞信を得。一は說法の師、夜叉の如しと信ず。說法は亦佛の想を起す。次に縱ひ逆行を見るとも、法を重ずるが德の故に、自らの信を壞せず。二に佛果の作用を信ず、逆順は知り難し、現に老比丘と爲る等の如し。三は菩薩の善巧を信ず、逆行魔術の事を示現すること、婬女を現ずる等の如し、此れ並に知り難くして、而も能く堅く信ずるが故なり。二に、生長善根の中に三有り。初に前の信の境を牒し、種生の善根を明す。中に於て、初に前の不壞信を牒す、於諸佛の下は生善に對するを明す、中に於て、聲聞等は亦是れ僧寶の攝、衆生は是れ前の愛眼の所觀、所利の境なり。如是無量境とは、通じて前の所信の多境を結す、後境に於て、信を壞せざるに由

【第二に正廻向云云】釋の中、第二に正しく廻向を辨ず。

るが故に、種生じて此無量の善根を得。二に分別の下は、此善根に依りて、復大心を増し、以て善根を生ずることを明す。亦先に善根を牒す。謂はく、前の所生の善根を分別思惟し、心をして勇鋭にして、其大心を増さしむ。復善根を生ず。謂はく、前の三寶等に於て、所生の善根を分別するに由るが故に、菩提心をして長養せしむるなり。前の衆生の境に於て、所生の善を分別するに由るが故に、大慈を修習するなり。此二心增廣なるに由るが故に、此に依て復更に、諸の善根を生ずるが故に、所生善根と云ふなり。三に廣修の下は、此大心に依りて、復大行を増し、以て善根を生ずることを明す。中に於て二有り。初に阿含の行を成ず。先に前の慈心に依り、大悲等の觀の行を起し、後に佛の所學等を學び、善根心に依りて、佛所學の行を起す。此悲智二行に、一切の淨善根を攝生するに依る。二に證理行を明す。先は智に依りて理を證り、功德を集め、後は悲、慧施に依りて功德を修す。又釋すらく、前の阿含の行は、是れ加行の中に、善根を攝して實に入る、是れ正證の中に、功德の行を集む。大慧施等は、是れ、後得の内に功德を修す、行體竟んぬ。

第二に、正廻向の中に二有り。初に菩提及び衆生に廻向し、二に觀無生性の下は、實際廻向を明す。前の中に亦二有り。初に正しく前の善根の廻向を以てし、二に菩薩善根廻向已下は、廻向所生の勝根を以て、復將に廻向せんとすることを明す。前の中に亦二有り。初に正しく廻向し、後に菩薩如是精勤の下は、結成す。前の中に十句有り。初に廻向の一切智は、總じて所求の菩提を標す。常見佛の下の九句は、廻向、因行を成ず。中に於て初

【二に前の廻向云云】二に所修の勝果を明す下、經の「[illegible]、善根を廻向し已り」等の文、

の五句は、行の所依を成ず。一は常に佛を見、二は善友に近づき、三は菩薩同會す。此三は行縁を成じ、次の一句は行因を成ず。謂はく、薩婆若を念ず、是れ上の所向の一切智なり。次の一句は行法を攝す。謂はく、佛と與に處するに於ては、佛の教法を受け、佛の滅後に於て、佛の遺法を護る。自下の四句は所成の行なり。初の一は、利他の行を成ず。謂はく、願ひて能く有に處し、生を益して、常に出世の向を離れず。次の三は、自利の行を成ず、一は師を供するの行、二は理を照すの行、三は願を滿ずるの行なり。二に、結成の中に三有り。初に上の所廻善根を結す。謂はく、無量の善は是れ、前の信所生の善根に依り、積集長養等は是れ、前の菩提心等の、所生の善根に依る。二に正念等の下は、能廻の智を結す。謂はく、諦慮をもて觀照するに、廻向の道理、義眞實なるが故に、是故に廻向す。三に以威儀の下は、正しく威儀を攝し、以て廻向を成ず。

二に、前の廻向所得の勝報に依り、復更に廻向す。中に於て、初に起行を牒し、總じて所廻を擧ぐ。令我の下は、正しく所廻向なり。中に於て、初に佛を供養し、二に供養の所爲を明し、三に供の分齊を結し、四に能供の心を辨ず。初の中に二有り。先に現の佛に供し、後に舍利を供す。初の中に、先に所供の佛を擧ぐ。於諸如來の下は、正しく供を興すことを明す。中に於て三有り。先は總なり。謂はく、如佛所應とは、佛境界所應の供に稱ひて、以て供養することを明す。謂はく、遍法界等は、知るべからざるが故に、但如佛所應と云ふ。二に以阿僧祇の下は、別して供を顯すに、六十七句の阿僧祇の供具有り。三に

【二に此諸云云】經の「此諸の最勝の般涅槃」等の文の下。

以如是等上妙の下は、常供を總結す。二に此諸最勝の下は、舍利を供するを明す。二に欲令の下は、供の所爲を明すに、三有り。一は衆生を益せんが爲に、是故に佛に供す。中に於て三句有り。一は、衆生をして、此殊勝の供養を見せしめ、讃喜愛樂して、善根を生長するが故に、攝取と云ふ、是れ菩薩、衆生の善を攝するには非ず。二は、善に依りて苦を離れ、菩提心を發さしむ。三は菩提心に依りて行を起し、自嚴世表に超出す。二に示現の下に二句有り。佛德を重んずるが爲に、是故に供を興す。一は佛の希遇の爲に。二は佛の供力を滿せんが爲に。謂はく、佛に於て此大勝供養を興すは、如來の威力圓滿を顯さんが爲なり。三は、淸淨の下の二句は、自心、佛に於て信樂し、至りて重んずるが爲に、是故に供を興す。一は、佛德を信重するが爲に、二は、佛法を愛護せんが爲なり。謂はく、此勝供を興し、人をして佛を、敬重せしむるが故なり。三に無盡の下は、供の分齊を結す。謂はく、窮盡せざるなり。四に、諸佛成就の下は、能供の行心を辨ず。中に於て十句有り。一は、初に卽ち退せず。二は、中に卽ち休むこと無し、三は、終に未だ曾て懈らず、四に、三時に普く無間なるを、不壞廣大と名く。五に、情名利等を異求すること無し、故に無著と云ふ。六に、亦彼念無きが故に、無心想と云ふ。七に、都て現求すること無きが故に、無染無依止と云ふ。八に、所生の善根に於て、亦著を生せず、故に不味著と云ふ。九に、既に現の名利を求めず、復善果を味せず、如何が行を成ぜん。謂はく、佛、眞實の法門は、彼所作の業を印す。十は心淨く平等にして、佛の境界に稱ふが故に、住佛所作と云ふ。

【第二に實際迴向云云】次に實際迴向を明す下。經の「無生の性と等」の文。

【自下第二に云云】以下、實際迴向を明す。第二に、終成の行を明す文を釋す。

第二に、實際迴向の中に二有り。初に始修、二に菩薩如是捨離の下は、終成を明す。前の中に二有り。初に稱實迴向を明し、二に以此善の下は、迴向の益相を明す。前の中七句は迴向なり。初の一句は、加行智觀を明す。謂はく、無生の境を觀じて、能迴の心を即するは、能所の寂滅を明し、受持等は佛果の說に、順ずることを明す。二に、觀平等法性の一句は、正體、實際に證入することを明す。三に、入無行の下の四句は、後智の修行觀を明す。中に於て、一は證を起し、行を起すことを明し、二は功は有に隨ふの行、三は有に處して染を離るるの行、四は二行無礙の行なり。後の一句は、總結して悉く迴す。二に、以此善根の下は、益相を明す。中に於て八句四對有り。初の句は有を厭ふ心堅きが故に、壞すべからず。二に求果の心徹するが故に、不退と云ふ。三に自行亂れず、四に化他して著せず、五は自行廣大、六は化行堅固、七は因行圓滿、八は果德窮滿なるが故に、究竟等と云ふ。自下第二に、終成の行の中に、初に前を牒し後を起す。觀察平等の下は、正しく入法の行を顯す。中に於て二有り。先に無礙の行を明し、後に如是菩薩の下は、攝行迴向を明す。前の中に二有り。初の十句は、解法至深を明し、二に分別菩薩の下は、無礙の行を起すことを明す。前の中に初の句は、總じて諸法の理事無礙を觀ず、故に平等と云ふ。謂はく、等理の事は、理源に窮徹す、故に深入と云ふ。等事の理は、該事際を盡す、故に亦深と云ふ。雙融無際、智解底を窮むるが故に、深入と云ふ。下の九句は、別して顯す。一は業の無體を明し、二は報暫は因に酬ゆ、三は諸行主無し、四は緣生屬する無し、

【一は業の無體云云】經の「業は幻の如く、業報は電」等の句を指す。

【下は無礙云云】經の「一切菩薩の行相」等の文を指す。

五は正行有に似たり、六は無著法眼生とは、菩薩の行、影の如きの所由を釋す。謂はく世の眼瞳所現の影像の如く、今此も亦爾り、法眼に依りて現ずるなり。七は既に無作法眼の、所作に由るが故に、是故に其性は恆に寂なり。八は有爲を會して、無爲に同ずるが故に、入と云ふ。九は雙離無二の故に、解如實性と云ふ。『涅槃』に云はく「明と無明と愚者は二と謂ひ、智者は其性不二なりと了達す。不二の性、即ち是れ實性なり」とは、此の謂ひなり。下は、無礙の行を起すことを明す。中に於て四句有り。初に理事無礙の行を明す。謂はく、前の不二の法を解するに由るが故に、行相を分別して相に著せず。二は、二利無礙の行なり。謂はく、同事は他を利して捨てず、自淨を自利と爲す。三は、障盡、斷に離るるが故に、礙著無きことを結す。四は、解行淨きに由るが故に、諸佛護念し、外緣勝れたり、遠愚癡は内行增なり。自下第二に、攝行廻を成ずるに、三有り。初は則ち事を壞せずして、明かに理を見るは、事を以て理に即し、壞を待たざるが故に。二に菩薩の下は、理を礙へずして、巧に事を現ずることを明す。壞を待たざるの事なるを以て、存するを礙へざるが故に。是の如く無礙にして、方に法性に於て彼岸に到る。三に了法廻向は、謂はく、如理の智、以て、佛地の大智に向ふは、諸餘の善根をして、皆理に稱ひて、成ぜしむるが故に、心淨と云ふなり。是故に、此廻終日廻して、而も廻無きが故に、行無所行と云ふなり。

自下第三大段に、廻向の益相を明すに、四有り。先は度生の爲の益なり。中に於て、初

【摩訶薩の下】位果を明す下。初の「上來諸菩薩」此の位行已に安住」等の文を釋す。

【二】次に偈頌を明す。

に佛種を増さしめ、諸の業苦を滅す。後に一切衆生得の下は、果智を成じて、諸の煩惱を滅せしむ。二に究竟の下は、成菩提の益を明し、三に得平等の下は、實際の益を結す。四に摩訶薩の下は、總じて廻向の、趣果を成ずるの益を結す。上來、別辨竟んぬ。佛子の下は、第三に名を結す、上來、位行訖んぬ。摩訶薩の下は、第二に位果を明す。中に於て、初の十句は別して顯し、後の一句は總じて結す。前の中に初の一は、見佛の益、二に得法の益、下の八は、成行の益なり。三に普ねく衆生に於て、利物の心成ず、四に癡を捨てて法に入り、自利の解成ず。上來は自分の行を成ず、下は勝進を明す。五に諸の如來等を得、魔邪の行立つことを明す。六に具足生貴等は、正行の本を具することを明す。謂はく、出世間の心を、生貴と爲すなり。又、佛の正法從り生ずるが故なり。七に得無畏智等は、大智內に發ることを明す。八に於一切法等は、智起りて實を照す、上來は智正覺世間の智を成ず。九に於一切刹の下は、器世間の智を成ず。十に智慧具の下は、衆生世間の智を成ず。下の一句は總結なり、知んぬべし。

〔二〕第二に偈頌、總じて二十五頌行り、四に分つ。初の二は、前の所廻の行體を頌す。二は一切上妙の下の九頌半は、前の廻向衆生、及び菩提を頌す。中に於て四に分つ。初の四は、前の、廻向に因て勝報を得、諸佛を供養するを頌す。二に善分別の下の二は、前の供佛の所爲は、衆生を益するが爲なるを頌す。三に一切諸佛の下の二頌半は、前の供佛舍利を頌す。四に菩薩善知の下の一頌は、前の供佛廻向の行を頌す。三に勝妙智の下の七頌半は、

【二二】第三に等諸佛廻向の文を釋す。經の「佛子、何等をか」等の文の下。

【二三】正釋の中、第二に正しく廻向するの文を釋す。

【二境】經に好惡色といふ、これ違順の二境なり。

前の實際廻向を頌す。中に於て四に分つ。初の三頌は、觀理隨緣の行を明す。一半は自利、一半は利他なり。二に觀衆生心の下の二頌は、推緣入實の行を明す。三に分別所有の下の一頌半は、雙融無礙の行を明す。四に方便廻向の下の一頌は、行成の相を結することを明す。四菩薩一心の下の六は、前の廻向の益相を、結するを頌す。中に於て初の一は、上諸佛を念ず。『十地論』に云はく、「佛の所得の如く、我亦當に得べきを、名けて念佛と爲す」と。二は下衆生を救ふ、三は正法を守護す、四は有に處して著を離る、五は法を攝し生を離る、六は德圓にして相を離る、各一頌に顯なり、知んぬべし。

〔二二〕第三に、等諸佛廻向の中に、亦二有り。謂はく、長行及び偈なり。前の中に亦二有り、初に位行、後に位果なり。前の中に三有り、謂はく、標、釋、結なり。釋の中に三有り、初に所學の廻向の意を標擧す、即ち釋名なり。二に此菩薩修行時の下は、正しく廻向するを顯す。三に是の如く摩訶薩は、諸の善根を以て正しく廻向し已りて、終身を成就するの下は、廻向所成の益を明す。

〔二三〕第二に、正しく廻向する中に二有り、初に衆生菩提の廻向、後に復作是念、如徃過去の下は、實際廻向を明す。前の中に亦二有り。初に、事に因り、行を以て廻向す。後に摩訶薩著在家の下は、緣に隨ひ、善を攝して廻向す。前の中に三有り。初に事に因るの行を擧げ、二に正しく廻向を以てす。三に摩訶薩、大願を以て、行を攝取す時の下は、益相を結成す。初の中は、謂はく、二境に於て三淨心を得。一に違順の二境に於て、憎愛の結を離

【三昧の樂】佛常恆に定中にありて出入なきも、隨宜方便を以て出入したまふも常に湛然たり。
【大悲の樂】圓無量心を以て抜苦與樂し、利濟無盡なるをいふ。
【園觀】園林宮殿樓閣。
【解脱の樂】一切の物礙を遠離し自在通融にして所作任運なるをいふ。
【十通】離世間品に說けり。

るることを得。二に既に此結を離れ、喜樂壞すること無し。三に既に結情を離れ、身をして調暢し、輕安適悅ならしむ。既に此樂因を得て卽ち廻向す。二に正しく自樂を以て廻向する中に三有り。初に佛に廻向し、二に菩薩に廻向し、三に衆生に廻向す。初の中に自らの得樂を明すの時、廻向して諸佛を供せんと念欲す。是故に、先に諸佛の自樂を牒する故に、諸佛雖有淨妙快樂と云ふ。下は十句有り、正しく諸佛所得の樂を顯ず。問ふ『諸佛、德滿じ、樂圓なり、何んが佛の得樂を願ふことを須んや。設ひ佛德を願ふとも、豈佛を增益せんや。答ふ『人間の香華を須ふるは、孝情を表して供養するが爲なり、此菩薩、如來を愛敬するを以て、是故に自らの所得の樂を廻して、以て佛に向ふなり。十の中に、初の一は總なり。謂はく、佛得は我が測量に非ざる、佛の所作の樂を願ふ。餘の九は別して顯す、皆不思議なり。一は三昧の樂、是れ佛自德の所依なり。謂はく、出入遊適の故なり。二に大悲の樂、是れ佛の化德の本なり。謂はく、生死に處すること園觀に遊ぶが如し。三に解脱の樂、是れ佛の不思議解脱にして、下の不思議品の說に、十種の樂有るが如し。謂はく、離礙自在の故に、樂と稱するなり。四に神足の樂、是れ佛の通用自在の故に、樂と云ふ、十通等の如し。五に尊重の樂、是れ佛の勝德にして、獨出無比の故に、樂と云ふ。勝樂人に被むるを覆如來と名く。六に無量力の樂、是れ佛の十力、智用自在なるを、力と名け樂と名く、上來は是れ大菩提の樂、下は是れ大涅槃の樂なり。七は離覺の樂、是れ佛の涅槃、覺觀を離るるが故に。『涅槃經』に云はく「諸の覺觀を離るるを、名けて涅槃と

【不捨…等といふ】經の「大莊嚴を捨てず…善根を守護し」等の文をいふ。

爲す」と。八に不變の樂、是れ變易生死盡るが故なり。九に不壞の樂、是れ佛德圓常の樂にして、略して三事を擧ぐ、一は佛德無礙にして、能く障へしむること無し、二は定に在ざること無く、能く亂さしむること無し、三は知不知無きの二行を、能く二ならしむること無し、故に不壞と云ふなり。又、此九種、攝して四と爲す、初の一は三昧の樂、二は大悲の樂、次の四は大智の樂と名け、後の三を寂滅の樂と名く。二に廻向菩薩の中に十句有り、二に分つ。初に自德を成せしめ、二に能令の下は、化德を成ぜしむ。前の中に六有り。初は、信位の百四十願を得せしめ、二は、十住の正解直心に入らしめ、三は、十行波羅蜜の行を修せしめ、四は、十廻向等の大菩提心に住せしめ、五は初地已上、求智佛心を成じて、不退轉を修せしめ、六は、八地上無功用の行を、得せしむるが故に、不捨大誓等護菩提等と云ふ。二は、利他の德を成ぜしむる中に、初に化して、地前の行を成ぜしめ、二に安住の下は、化して地上の行を成ぜしめ、三に得諸の下は、化して八地上の德を得せしめ、四に證薩婆若は、化して果を成ぜしむ。三に廻向衆生の中に、初に結前生後、次に正廻向なり。中に於て二有り。初に菩薩自力の廻向衆生を明し、二に如佛の下は、諸佛の廻向衆生に、同ずることを稱ふ。前の中に十句の廻向有り。初の一は、廻して佛を見、法を聞き、僧に近づかしむ。次の三は、廻して三寶を念ぜしめ、餘の六は、廻して行を起さしむ。五に、不離佛は是れ、善人に近づく、六に、佛に於て淨信を起さしめ、七に、分別して解を生ぜしめ、八に、行を起して德を成ぜしめ、九に、淨通の因を成ぜしめ、十に、

【三は益相を云云】經の「菩薩摩訶薩の行ずる所の善根」等の文にして、此下の釋文六説あり前五は古説、後一は自義なり。

【光統師】元魏の慧光律師。

【遠法師】淨影寺の慧遠。

【範法師】玄範法師。

【正法師】至相寺智正法師。

疑惑を永く盡さしむ。二に、佛の益生に同ずる中に、先は總じて佛に同じ、二に令一切の下は、別して其相を顯す。中に於て十事有り。初の五は苦を離れしむ、謂はく、四惡趣及び諸の難處を出づ。後に摩訶薩の下の五は、善に住せしむ。初は地前の行を成ずるに三句有り。一は發心、二は長心、三は離障常樂なり。下は地上の行を成じ、令一切生究竟等は、果德を成ず。

三は益相を結歎する中に、以諸大願攝取行等とは、此文の意見難し。諸德をして釋すること、各同じからざらしむることを致す。光統師の云はく、「此は上の三道究竟の義を結す。行等行とは、樂ひて佛と與に、證道の行を成ずることを結す、積聚等とは、樂ひて菩薩と與に、助道行を成ずることを結す。長養等とは、樂ひて衆生と與に、不住道行を成ずることを結す」と。遠法師の云はく、「證心、理に遊ぶを行と名け、一は一切を備ふるを、等行と名け、助道漸く滿ずるを、名けて積聚と爲す。一一の行の中に、一切の行を具するを、等積聚と名け、不住漸增を名けて、長養と爲す。一一の門の中に、備に一切を攝するを、等長養と名く」と。範法師の云はく、「但一行を起すを、之を名けて行と爲し、衆多の行を總ぶるを、名けて積聚と爲す、增進、前に勝るを、名けて長養と爲す。猶是れ前の行の異名顯なるのみ。菩薩の所行の行、既に無量にして、備に擧ぐべからず、但等しく之を云ふが故に、皆等と云ふなり」と。正法師の云はく、「善根とは施等の善なり、以諸大願攝取とは、願大なるが故に行大なり。行とは二利の行なり、等行とは、等しく一切行

【辨法師】　慈恩寺靈辨法師。

【今更に釋す云云】以下、自義を述す。

【上來第一に云云】二に隨緣攝善廻向の下。經の「菩薩摩訶薩、若し在家」等の文を釋す。

を行ず、積聚とは行を積み、位を成ずるの德なり。積聚とは、一切の德を成ず。長養とは、行從り、行を生ず、等長養とは、一切の行を生ずるなり」と。辨法師の云はく、「行とは是れ、佛願樂位の中に於て、行ずる所なり。菩薩大願を以て、彼行を攝同するが故に、等行と云ふ。積聚とは是れ、佛の功用の位に、修積聚するなり。菩薩も修を同ずるを、等積聚と名く。長養とは是れ、佛の無功用の位の修なり。菩薩も修を同ずるを、「等長養」と名く。是故に上に云はく、佛の廻向の如く一切を開化す、菩薩の廻向も亦復是の如しとは、此の謂なり」と。今更に釋す。菩薩所有の善根は、皆大願廻向の力を以ての故に、此善根をして、攝して勝行を成ぜしむ、諸行齊く行ずるが故に、等行と云ふ。又願力に由りて、此善根所成の諸行を攝して、散失せざらしむるが故に、積聚と云ひ、行斷に積むこと有るが故に、等積聚と云ふ。又、願力に由りて、此善根の積む所の業行を攝す。復諸行を生ずるを、名けて長養と爲す、一一の行、一切の諸行を生ずるを、等長養と名く。是故に皆願力に由りて、此善根をして、皆悉く廣大に、具足し充滿せしむるなり。

上來第一に、事の行に因りて、以て廻向を成じ竟んぬ。自下第二に、隨緣起行し、以て廻向を成ず。又釋す。亦上來は、是れ菩提の爲に、衆生に廻向す、是故に結して長養等と云ふなり。自下は衆生の爲に菩提に廻向す、是故に結して、今集むる等の善、皆廻向すと云ふことを得るなり。中に於て三有り。初に大悲隨願廻向を明し、二に復作念乃至小大の下は、大悲深重廻向を明し、三に如是菩薩の下は、三世廻向を總結す。初の中に、先に別

【二に大悲深重云云】以下は、隨縁攝善に廻向の第二大悲深重廻向の文なり、經に「菩薩摩訶薩、復是念を作さく」等の下。

して顯し、後に是爲の下は、總じて結するなり。別の中に三有り。初に悲の故に、染に隨へども、巧智汙さるること無きを明す。二に摩訶薩の下は、正念現前し、動ずれば道と合す。三に摩訶薩以如是の下は、諸の群品に於て、廣く利樂を、成ずることを明す。中に於て三有り。先に總じて擧ぐ、二に無量諸願の下は、別して饒益を成ず。中に於て、初に饒益の行を辨じ、二に除滅の下は、所成の益を明す。先に障を除き、法を念ぜしめ、後に修習の下は、行を成じて地に入る、三に令一切の下は、別に安樂を成ず。謂はく、離苦等なり。

二に大悲深重廻向なり。謂はく、乃至畜生等の苦を、皆救拔するなり。中に於て二有り。初に生を救ひ、離畜生趣の下は、苦果を離れて、廻向の益を成ずることを明す。前の中に、初に苦因を離れしめ、離畜生趣の下は、苦果を離れて、永く苦海を度ることを明す、是れ總なり。謂はく、衆苦繁多にして、深廣なること海の如し。苦受とは、三受の中に苦受を取る。苦陰とは、惡趣の五陰、苦覺とは、内從り發す。覺觀を以て、苦と爲す。此上は皆是れ麤重の苦にして、增上の大苦と名く。下は細苦を明す。苦行とは是れ行苦、亦是れ苦を以て業行と爲す。苦藏とは、身心、苦を攝して衆多蘊積す。苦根とは謂はく、惑業は苦處に生ず、又、苦を以て依と爲し、苦を根本と爲す。又、欲界の二禪已來を苦根と爲す。苦舍とは謂はく、苦を以て自ら覆ふが故に、舍と云ふ。又釋す。苦受は是れ受陰、苦陰は是れ色陰、苦覺は是れ想陰、增上の大苦は是れ識陰、苦行は是れ行陰なり。通じて論ずれ

【如是…廻向の中】或はいふ、二の字、總結の上に在るべきか、卽ち菩提衆生の二廻向を結する文なるべきなり

【九世】過現未の三世に、各各三世を具するをいふ。

【第二に實際云云】已に衆生菩提廻向を明し終り、以下の第二に實際廻向の文を釋す。經の「復是念を作さく彼過去一等の下。

ば、一切有流の蘊を苦藏と爲し、苦因能生を根と爲し、苦果自ら陰るを舍と爲す。小乘は實苦と爲し、初教は卽空を苦と爲す。經に云はく、「五受陰洞に達し、空にして所起無きを、苦の義と爲す」と。終教は卽ち眞如を苦の義と爲し、頓教は絕言是れ苦、圓教は法界に通じ、一切の法門を具するを、苦と爲す。如是等の下は總じて結す。二に廻向の中に二有り。初に生の爲に廻向し、及び生を敎へて、是の如きの菩提の境界に、廻向せしむ。二に正念の下は、廻して二利の行を成ず。先に自行を成じ、後に修如來の下は、利他の行を成ず。十事五對有り。一は慈悲の遍、二は樂を得て善を守らしめ、三は正を究めて邪を遠ざけしめ、四は深に入りて、淺を出でしめ、五は因を具し、果に住せしむ、文皆見つべし。三に如是菩薩の下は、總じて三世の善根、皆悉く廻向することを結す。問ふ、未來の善根未だ有らず、何を以てか廻向する。答ふ、二義有り、一は、今逆に大願を起すを以て、未來の善根を廻向し、亦修成の時、卽ち菩提に向ひ、更に廻向を待たず、故に廻すべきなり。二に圓教の宗に依るに、九世の中の三の現は、是れ有なり、是故に廻向も亦、三際に通ずる故なり。

第二に、實際廻向の中に二有り、初に三世の佛の廻向を學し、後に摩訶薩學三世の下は、結歎して勝を顯す。前の中に二有り。初に過去の佛の行を學し、後に現未を例同す。前の中に亦二有り。初に過去の菩薩の所行を擧げ、如彼の下は、己が善根を以て彼廻向に同ず。前の中に二有り。先に彼善根を擧げて菩提に廻向し、二に而無所著の下は、彼菩薩、離相

の行を修することを明す。中に於て二有り。初に妄を離れて眞を樂ふなり。謂はく、蘊入界を離れて、世法に住せず、是れ十八界なり。二に知法如空の下は、行、眞際を窮むる中に二有り。一は總じて空際を窮む。謂はく、五趣を超越するが故に、非趣岸と云ふ。又眞源に至りて、更に所趣無きが故に、非趣と云ふなり。二に照解の下は、別して三性、三無性を照すに約す。中に於て、初に所執無相を明すが中に、先に實を照し相を捨て、一切諸の下は、正しく無相に契ふことを明す。謂はく、法相自ら無し、何れの處か虛と說かん、淨の趣くべき無く、染の壞すべき無き故なり。二に無有自性の下は緣起無性を明すが中に先に法無性を顯し、於一念中の下は、正しく無性の眞理に、契ふことを明す。三に常樂の下は、圓成の具德、以て佛果を成ずることを明す。二に己が善を以て、彼に同じて廻向す。如彼過去は、佛を擧げて己に類す。我亦如是とは、己を彰して佛に同ず、彼過去の諸佛の所行の行法に於て、始樂心を起し、終證心を起す。又、彼行法理法に於けるが故に、樂證と云ふなり。然るに、是の如きの離相の法の中に於て、發心修習して、而も亦諸法の相に違はず。所以は何んとなれば、所有の起法は、悉く幻等の如くなるを以て、是故に、此有は無を礙へず。又既に此有は、無を礙へざるが故に、眞に於て如實修入無し。初に喩を擧げて法を顯し、悉分別等は、法を稱して喩に同ず。唯如來地等は、果の因に異ることを簡びて、廻向の所趣を明すなり。下は二に、過去を以て、現未に例同することを明す、知んぬべし。二に殊勝を結嘆する中に、先に三世の諸佛菩薩の、殊勝廻向を擧ぐ、我亦如

【一四】正釋三段の中第三に廻向所成の益を明す下、經の「是の如く菩薩摩訶薩は、諸の善」等の文の釋す。

【一五】以上位行を明し終り、次に位果の文を釋す。經の「菩薩は…深く」等の文。

是とは、己を彼が勝に同ず。第一の下は顯勝の相を結す、二十句有り。初の十句は形對に約して勝を辨ず。一は、凡を過ぐるを、第一と名け、二は、小に越ゆるを、勝と名け、三は、因に超ゆるを、最勝と名け、四は、獨出の故に上と名け、五は、加過すること無きが故に、無上と名け、六は與齊無きが故に、無等と名け、七は至極無二の故に、無等而等と云ふなり。八は、相似して比すること無し、九は待對無し、十は德重くして尊ぶべし。下の十は自體に約して勝を顯す、一は體微、二は稱實、三は理正、四は攝德、五は大用、六は離障、七は具善、八は淨行、九は離過、十は捨染なり。上來、正廻向竟んぬ。

(一四)自下第三に廻向成益を明すに、中に於て二有り。先に前の廻向に因りて、淨の三業を成じ、二に三業を淨むるに因りて、兩作を淨ならしむ。初に總じて淨を顯し、住菩薩の下は、別して淨行を明す。中に於て二有り。初に無所得住を明し、二に入一切法空の下は、理に入りて著を捨つることを明す。先に空を觀じ、無著分別の下は、有を了して礙ること無し。謂はく、空有無礙にして、心に住著すること無き故なり。三に、佛子の下は、名を結す、知んぬべし。上來位行を竟んぬ。

(一五)自下第二に位果を明す。内に此一位を得て、十種の勝德を成ず。一は深く佛門に入り、二は佛果の德に隨き、三は智、理に入り、四は惡業を離れず、五は巧に住著無く、六は理に入ること轉深く、七は大誓願を成じ、八は佛性を照解し、九は巧に諸法を知り、十は無著受生す。

【一六】偈頌を釋す

【一七】以下第四に至一切處廻向の文を釋す。經の一佛子何等をか…第四の至一切處」等の下。

【初の中に二】初に衆生及び菩提の廻向を明すに、初に略して明す文の下。

（一六）第二に偈頌の中に、二十四偈有り、六に分つ。初の一は、上の標意釋名を頌す。二に次の二は、上の廻向佛樂を頌す。三は、一切世間の下の十一は、上の廻向衆生令成佛を頌す。中に於て三有り。初の四偈は、隨喜と及び樂を以て、衆生に廻向す。二は、菩薩修此廻向の時の下の四偈は、同佛廻向利益衆生を明す。三に菩薩所修諸行業の下の三偈は、正念廻向安樂衆生を明す。四に十方無量の下の四偈は、上の廻向菩提を頌す。五は心不稱量の下の二偈は、上の廻向實際を頌す。初の偈は法際に達し、後の偈は想原を盡す。謂はく、想無性を知るを、度一切想と名く、亦想を壞せず、想必ず無性なるを以て、壞を待たざる故に。亦無想を壞せず、無性ならざること、無きを以ての故に。是の如く衆生の想、有を離れ無を離るることを了知す。六は下に四偈有り、利益を嘆ずるを頌す。中に於て初の一偈は、三業淨を頌し、次の二は、學三世佛廻向を頌す。後の一偈は、勝を歎ずるに七慧有り、知んぬべし。

（一七）第四に、至一切處廻向の中に、亦長行と偈頌とあり。前の中に亦二あり。初は位行、後は位果なり。前の中に亦三あり、謂はく、標釋結なり。釋の中に三あり。初に衆生及び菩提に廻向し、二に摩訶薩如是善根廻向了無所有の下は、實際に廻向す。三に摩訶薩如是善根廻向令衆生の下は、利益を結歎す。初の中に三あり。初に善根を以て、廻して三寶に供し、二に如是莊嚴の下は、供の所爲を明し、正しく廻向を顯す。三に譬如無我の下は、彼善根の攝德勝用を辨ず。初の中に二あり。先に略して明し、後に摩訶薩復作是念の下は、

【二に廣く顯す云云】經の「菩薩摩訶薩は復是念を作さく此善根」等の下。

廣く顯す。前の中に三あり、初は法、次は喩、後は合なり。初の中に、如是廻向は總なり、以て德力を標擧す。至一切は共相を指顯す。謂はく、一切處は是れ所至、善根は是れ能至、能至の故に力と名く、此れ廻向に由るが故に、然らしむるなり。喩の中の實際無處不至は、略して十處を論じ、以て無盡を顯す。此は理を以て、行に喩ふる故なり。一切有とは、是れ三有、二十五有等なり、餘は並に知んぬべし。合の中に二あり。初に總じて、三世の佛を供することを顯し、二に過去の下は、別して三世を、供することを顯す。先に過去の佛をして、本願の所作、悉く成滿するを得せしむ。次に當來の佛をして、速に佛事を具せしむ。後に虛空の下は、現在の佛及び大衆に於て、皆悉く供養すとは、此菩薩、普く彼を供することを明す。諸天の如しとは、諸天の所作、念に隨ひて措辦するが如く、菩薩一念の普遍も、亦爾なり、供の自在を顯すなり。廣大の下は、供を成ずるの所由を顯す。謂はく、己が廣大福智の、廻向の力を以ての故に、諸佛に於て上の供を成ぜしむるのみ。

二に廣く顯すが中に二あり。先に一切界に於て、現在の佛を供し、二に復作是念の下は、一切劫に於て、三世の佛を供す。前の中に三あり。初は初供の佛を擧げ、二に摩訶薩の下は、供養を興すことを明し、三に以此一切の下は、正しく深心を以て廻向す。初の中に二あり。先に一切界の佛、後に彼有菩薩の下は、菩薩有りて、佛の所作に同ずることを明す。謂はく、所供の佛に二種有り。一は實報の佛、二は依報の菩薩にして、能く十方に於て處佛を示現す。此二は倶に是れ、現在の佛の故に、是故に倶に現在の所供に收むるが故に、

【二に如是…得しむ】供の所爲を明す。下、經の「是の如く莊嚴して、一切の」等の文を釋す。

之を論ず。文に十句有り。一は所解深し、二は化現廣し、三は身の普遍、四は法原を證し、五は佛體に同じ、六は巧に圓に應ず、七は理從り起り、八は體の堅固、九は持用久し、十は德從り生ず。二に供養を興すが中に、現の佛を供し、及び滅後に於て、象塔を供す。三に以此の下は、深心廻向を明す。中に於て十心有り。謂はく、如何が廻向する。以一心等とは、以は是れ用なり、一一の心の下に、應に皆廻向の字有るべし、但し文家は、略を存して、初後に安くなり、中は則ち準知せよ。一は情專注す、二は念散ぜず、三は緣阻むに非ず、四は深く崇敬し、五は喜樂の行、六は留滯せず、七は染著せず、八は無能の行、亦是れ所爲を離る、九は質直は害を離る、十は正しく涅槃に順ず。自下第二に、一切劫に於て、三世の佛を供す。中に於て二あり。初に所供の田を舉ぐ。謂はく、多時多佛の相は、報身を嚴り、理は法身及び多樂を嚴るなり。二に我以已下は、正しく廻向して供を興す。謂はく、前の善根十心迴向に由りて、重ねて此供を成ず。中に於て初に十供有り。一は香、二は華、三は鬘、四は塗、五は秣、六は衣、七は寶、八は燈、九は嚴具、十は摩尼なり。又、此十の內、各香蓋等の二十門有り、故に二百を成ず。中に於て一一に復、各阿僧祇の欄楯等の十門有り、故に二千門を成ず、各の阿僧祇を、前の二重に倂せて、總じて二千二百一十門有り、皆不可說と云ひ、或は無分齊等と云ふ。又釋す。初は佛の正報に供し、後に於一一境の下は、佛の依果を嚴るを明す。

二に如是莊嚴の下は、供の所爲を明す。中に於て二あり。初に總じて所爲を顯す。謂は

【三に譬如…護法なり】此下、彼善根の攝德攝用を辨ずる一段なり。

【八】以上、衆生及び菩提に廻向することを明す一段の釋終り、次に實際廻向を明す下なり。經の「菩薩摩訶薩は是の如く善根を」等の文を釋す。

【中に於て三あり…云】初は理法界を成じ、後に事法界を成じ、中は事理無礙法界なり、而も實際廻向は理性に歸するのみならず、三門混融して一を擧ぐれば全盡その中に收まることを示す。

く、衆生をして生死を出でて、佛地に至らしむ。二に於諸の下は、別して辨ずるに三有り。初は化を成じ行を滿ぜしむ。中に於て法明は是れ化法、教化等は是れ化行、無量心は是れ、化心の廣法、無所至は是れ化、功用を絶す、出善は是れ化所成の德なり。二に令生覩佛の下は、自らの德の、圓なることを成ぜしむ。中に於て見佛は是れ行緣、安住等は是れ所成、普入等は是れ行成、入理善根等は是れ行成じて果に趣くなり。三に令生因此の下は、因成じて果を得せしむ。三に譬如の下は、至一切處の善根の、攝德勝用を明す。中に於て、先に喩、後に合なり。初に喩を擧げて法を顯す。我善亦爾とは、法の喩に同ずるを顯す、此れ亦理を以て行に喩ふ。謂はく、此善根既に、無我の「一切處」に遍きが如し、是故に彼法を攝取し、以て己が行を增す。文に二十句有り、初の十二は自利の行を攝成し、後の八句は、利他の行を攝成す。前の中に初の三は、三寶を恭順することを攝成す、四は行を成じ、五は解を成じ、六は佛通を攝して、自善を成ず、七は化德を攝して、行心を成じ、八は內德を攝して、理解を成じ、九は巧便を攝して、果用を示し、十は果用を攝して、興供を成じ、十一は剎を攝して嚴と爲し、十二には劫を攝して修を爲す。下は利他を明す。一は物の爲に身を現ず、次の二は化、德を成ぜしむ。一は行滿、二は圓德なり。次の四は、器に稱ひて化益す。一は根に應じて化し、二は時に赴きて益なり。三は身を現じて調し、四は己を解せしむ。後の一は護法なり。

（二八）自下第二に實際廻向なり。中に於て三有り。初の一は事を盡して、理に歸することを明す

し、二に事を礙へずして理を顯し、理を礙へずして事を成ず。三に理泯じて事用有り、上の三義、混同し一際なるに由る、是故に理を泯じて唯事なり。未だ嘗て事にして理に非ず、事を盡して唯理なり、未だ嘗て、理にして事に非ざるのみ。良に以て事虛にして、理を攬りて、理ならざるの事無く、理實に緣に應じて、事を礙ふるの理無し。故に此三門は、或は有を破し空を顯すに、有は未だ嘗て損せず。空に依りて有を立つるに、有は未だ始より存せず、是故に、理に約して隱れず、顯れず、事に約して存せず壞せず、之を思ひて知んぬべし。初段の中に、如是迴向は前を牒す、了無所有は總じて、實際に入ることを明す、下は別して之を顯すに二有り、先に所取を離れ、後に能取を離る。謂はく、因中に果を計し、果の內に、因を計せざるが故に、業中不取等と云ふなり。又釋すらく、業空にして、能く報を生ずることを見ず、報空にして、業從り生ずることを見ざる故なり。上は離妄を明し、下は入眞を明す。勝善は是れ理善なり、遠離の下は緣相を明す、謂はく、散を離れ善を修するなり。所取空なりと照すを以ての故に、情有の諸法に於て信入せず、彼妄法の有を求めて、自性を見ず、而も是れ成就せり。下は釋顯す、作者壞者は、皆不可得なるを以て、此は成壞倶に離るることを明す。下は能取亦空なりと明す。所取空なりと知るを以ての故に、是故に能取も亦見者無し等と解了するなり。論に云はく「能取、所取を離るるは、方に是れ眞空なり」とは、此謂なり。上來は、第一に事を盡して、理に歸し竟んぬ。自下第二に、理事無礙にして、立つことを明すとは、漸く純熟なるを以て、事還りて存す。

【此れ縁起は：地と爲す】これ本經の衆因縁地を釋す因みに第八阿梨耶を地といふは、これ依他法縁起の根本にして一切の種子を攝藏し、諸法を出生せしむる故に名く。

【一九】第三に利益を結嘆する下、經の「菩薩摩訶薩は：一切の刹を淨めしめ」等の文を釋す。

謂はく、理に達して事の存するを礙へず、方に是れ圓滿の解なり。何が故に、存するを礙へざる。因縁地を得るを以ての故に。此れ縁起は、本識を地と爲すことを解す。如何が復理を照すや。謂はく、即ち此因縁地の處に於て、如來藏、法身際等を見る。如何が理事無礙なることを得る。照すこと等觀なるを以ての故なり。又何が故に、此事の理に同じくして、存するを礙へざる。世間は化の如しと解するを以ての故に、是故に化事は理に同じて現ず。明達衆生等とは、理事混融し、全攝無礙なるを明すが故に、一法無二と云ふ。又、此事、既に理と、無二なるに由るが故に、此事業は捨つべからず。下は重れて釋し顯す。謂はく、事を盡して理を顯すに、然も事損せざるが故に、與有爲等と云ふ。理を泯じて事を現し、然も理隱れざるが故に、與無爲等と云ふ。此れ即ち事を損せずして、盡く理を顯し、理を隱さずして而も理事を泯ず、是故に爲と無爲と二も無く不二も無きが故なり。

自下第三に、理泯じて事を成ずることを明す。中に於て、初に總じて理を觀じて、事行を起すことを明す。二に精勤の下は、別して稱理の事、大行を起すに約す、三有り。初に智行を成じ、二に以虛空の下は、福行を成じ、三に得離癡の下は、二行を雙結す、上來は實際廻向を竟んぬ。

〔一九〕自下第三に利益を結す、中に於て二あり。先に益生を結成す、中に具て十有り。一は器世間を淨めしめ、二は智正覺を得、三は能く衆生世間を化し、四は大總持を得、五は世の福田と爲り、六は生の爲に福寶を採り、七は世の爲に慧日を出し、八は善は法界に滿ち、

【一〇】位果を辨ず

【一一】長行終りて以下、偈頌を釋す

九は衆生を救ひ、十は淨徳を成ぜしむ。二に摩訶薩の下は、自徳を結成す。中に於て十句あり。初の一は總なり。謂はく、諸行を成就して、能く佛因と爲すを、如來性と名く、堅心攝成を守と名け、持と名く。下は別して所成の果徳を顯し、各因を對辨す、故に皆性と云ふ。性とは因なり。一は佛果化物の因を成じ、二は淨刹の因、三は佛地の業用無盡の故に、不壞と云ひ、彼因を成ぜしむるが故に、性と云ふ。四は量智の因を成じ、五は理智の因、六は身通の因、七は語辨の因、八は涅槃の因、九は菩提の因なり。上の二は意業なり。是名の下は、第三に名を結す。

〔一〇〕上來は第一に位行を明し竟んぬ。自下第二に位果を辨ず。謂はく、此位成じ已りて、是の如きの果を得。下の十地の中の調柔攝報等の果に同じ。中に於て三あり。初に總じて顯す。謂はく、上の位成を牒するが故に、安住と云ふなり。能一切等を以て、其勝能を辨ず。二に別して所得を顯す。謂はく、至一切處善根廻向を以ての故に、是故に此至一切の果を得、十有り。初の三は三業の遍を明し、次の三は業用の遍なり。初は身に依りて通を起し、二は意に依りて法を知り、三に口に依りて辯説す。下は四に用の自在を顯す。一は器世間に於て自在なり。二は衆生に於てし、三は劫に於てし、四は念に於てす。三に佛子の下は、所能を總結す。謂はく、一切の善根を以て、各實際の如く、一切處に至りて、倶に廻向するが故に、此位を成ずるなり。

〔一一〕第二に偈頌總持の中に、四句をもて頌を成ずるに十一頌有り、三に分つ、初の七は、廻

【三二】第五に、無盡功德藏迴向の文を釋す、經の「何等をか…第五の無盡功德」等の下、

【六六】初の中に此菩薩悔過等の義を辨するに八門を以て釋す。

向衆生、及び菩提を頌す。中に於て二あり。初の四は、行眞に隨うて、普く迴向することを明し、後の二は、諸佛に同じて、迴向を學することを明す。二に、未曾の下の三は、迴向實際を頌す。三に、如是の下の一偈は、迴向所成の果を明す。

(三二)第五に、無盡功德藏迴向なり。中に於て、長行の內に亦二あり。初に位行、後に位果なり。初の中に亦三あり。謂はく、標、釋、結なり。釋の中に五あり。初に所迴の行體を明し。二に、摩訶薩以此善根皆悉迴行の下は、迴向菩提及び衆生を明す。三に、摩訶薩以如是等無等等の下は、迴向實際を明す。四に、摩訶薩如是善根迴向已得無盡の下は、前の迴向に依りて、更に善根を生じて、復將に迴向せんとすることを明す。五に、摩訶薩如是迴向時の下は、行德を結成す。初の中に、此菩薩、悔過を修し、三事を行ずるとは、今略して、通じて悔過等の義を辨ずるに、八門を作る。一は開合を明さば、諸の聖教の中に、種種の開合ありて、或は八重と作す。一は佛を恭敬し、二は佛德を讚じ、三は佛を禮し、四は懺悔、五は勸請、六は隨喜、七は迴向、八は發願なり。『文殊師利所問禮佛法經』の說の如し。或は七と爲し、禮佛を以て合して稱す。或は六と爲し、總じて供養無し。或は五と爲し、發願を以て迴向に同ず。『十住論』の說の如し。或は四と爲し、禮佛を除く。或は三と爲す、『智論』に云ふが如し。菩薩、晝の三時と夜の三時とに、各三事を行ず。謂はく、懺悔、勸請、隨喜なり。此三事を行ずれば、功德無量にして、轉た佛に近づくことを得。或は二なり、但罪障を懺悔し、善根を迴向す。『普賢經』の說の如し。今此く五事に依りて

【禮佛…如し】第四名號品の處内禮佛章に、三業禮あり。七等とは孔目章に七種禮を明す。一、成過禮。二、相似禮。三、敬德禮。四、滅過禮。五、廻向衆生禮。六、廻向菩提禮。七、廻向實際禮。【或は方等…禮悔す】初は方等經、次は佛名經、後は智度論に依る。【理觀…滅す】遺教經の意。

釋す。二に相を釋すとは、禮佛に三有り、或は七等なり、上の禮佛儀式章に辨ずるが如し。二に懺悔とは罪に二種有り、一は違教の遮罪、還りて教に依りて、作法のごとく悔ゆれば、以て除滅す。二は違理の性罪、行を起して悔ゆれば滅す。此に二種有り。一は事に隨ひて懺を行ず。或は方等に呪を誦す等、教と相應す。或は苦の極、萬五千佛名等を禮し、彼聖教に應じて、或は晝夜六時、慇懃に禮悔す。經に多く或は大乘を讀誦すれば、重きを轉じて輕く受く等と載するを以て、是の如く、如來の功德を讚嘆するに非ざるも、亦大いに罪を滅し福を生ず。二には理觀に依りて滅す。謂はく、諸法の空を觀ずるに、罪相不可得にして、消滅せざること無し、經に云ふが如し、「若し除滅を求めんと欲せば、端坐して實相を觀ぜよ」等となり。又、下の小相品の說の如し、亦是れ其事なり。此門、義亦通ずるを以て遮性の兩罪を滅す。問ふ、『正法を受持し、及び先罪を悔ゆるが如き、此罪滅すと爲んや、滅せずと爲んや。』答ふ『亦は滅、亦は不滅と說くことを得、法を持ち、及び悔ゆるに由り、重をして輕く受けしむ。重を受けざるを以て、是故に滅と名く。然るに輕を受くるが故に、亦是れ不滅なり、故に新翻の『金剛般若經論』に說きて云はく、「十惡業の如し、法を持ち、及び悔ゆるに由りて、惡趣に生ぜざるを、拔根滅と名く」と。然るに現身に於て、輕く苦報を受く、亦不失と言ふ、故に彼に說如來品を引きて云はく、「若し復人有りて、此經を受持し、乃至演說せば、是人現在に、或は惡夢を作し、或は重疾に遭ひ、或は驅逼せられ、強ひて遠行せしめ、罵辱鞭打し、乃至命を殞す、所有る惡業咸な消除することを

【止作分別】止惡作善にして、上の五を分別す。今行相に就いて、業實通論すれば俱止俱作、約業爲論して懺悔除障といふ。

得」と。『大集經』も亦、此說に同じ。三に勸請とは、『智論』に說かく、「諸佛を勸請するに二有り、謂はく、初に成道するの時、轉法輪を勸請し、般涅槃の時、久住世間を勸請す。諸佛を知り、自ら時を知ると雖も、然も福を生ずるが故に、須らく勸請すべし」と。又『地藏菩薩經』に準ずるに、三時に勸む。勸を加へて菩薩速かに正覺を成すと。四に隨喜とは、『智論』及び『十住論』に準ずるに、三位有り。一に、十方一切の諸佛の、所有の已成の無量功德に通し、二に十方界の菩薩聲聞等、所有の現在に修する一切の功德、三には下人天凡夫の善根に至り、上の三位に於て皆悉く深心して、隨喜を生じ、無量の善根を獲。五には迴向に亦三あり。謂はく、衆生と菩提と、及び實際となり、廣くは上に辨ずるが如し。三は止作分別とは、或は五倶に止なり、倶は障を離るるが故に。或は五倶に作、勝行を發すが故に。或は懺悔して障を止め、餘は勝善を成す。四は所障分別とは、禮佛は我慢障を除き、懺悔は惡業障を除き、勸請は謗法障を除き、隨喜は嫉妬障を除き、迴向は異求障を除き、又、樂世有障を除く。五は生善分別とは、禮敬は勝福を生じ、勸請は勝慧を生ず。隨喜は福慧に通じ、迴向は前の二行に通じて、所修を增長せしむ。又、迴向攝持の力に由るが故に、此をして三界二乘に趣せざらしむ。六は次第分別とは、初に佛を禮敬するは、滅罪の主とし、及び生福の緣を求むる故に、先に禮す。二に、佛の勝緣に依りて、罪を滅ぼし、淨器なることを得せしむるが故に、次に懺悔す。三に此淨器に依りて、悕心をもて法を請ず。四に他の勝行に於て、己に私に喜を生じ、攝して自行に

【何】一本上に作る。

【初に行體云云】所廻の行體を明す下、次に分交して正しく釋す。

同ず。五に前の所成を廻して、以て菩提に向ふを、方に一因と爲すが故なり、七に得果の差別とは、果に二種有り。一は別果なり。謂はく、禮佛は尊貴の果を得、懺悔は障を除き、依正の果を具足することを得、勸請は正慧の果を得、隨喜は大眷屬並に大福、及び大財等の果を得、廻向は邪果を離るることを得。謂はく、常に佛世に遇ひ、常に能く修行して、退せざる等なり。二は通果なり。並に皆遠く無上菩提を得。八は教に約して異を顯さば、若し小乘に約せば、五行皆實宗の中に、亦之を尙ばず、初教は即空、以て五行を成じ、終教は如に即して成じ、頓教は絶言を五と爲し、圓教は內法界無盡の一一の行の中に、一切の行を攝して、各無盡なるを五行と爲す。

初に、行體の文の中に七有り。一は悔過善、二は隨喜善、三は於諸如來の下は、禮供善を明す。四は勸請善、五は入法善なり、中に於て四慧あり。初に聞慧、二に憶念、是れ思慧、三に說の如くに行ず、是は修慧、四に入不思は、是は證智所有の善根なり。六は重ねて隨喜善を明す、何が故に明すとならば、善を攝すること、多きを以ての故に。『大品經』の隨喜品に依るに、問ふ、初發心の菩薩の功德、乃至一生補處の菩薩の功德に於て、隨喜心を起して、幾許の福德を得るや。佛の言はく、四天下の國土は、稱りて斤兩を知るべし、乃至三千大千の國土は、皆稱りて斤兩を知るべし、是隨喜心の福德は、稱量すべからず。又、三千大千世界の國土の、中に滿てらん海水を、一の毛髮に收め、破して百分と爲し、一分の渧を以て、海水を取りて、渧の數を知るべくとも、是隨喜心の福德は、

【三】二に廻向菩提衆生を明す下、經の「菩薩摩訶薩は此の諸の」等の文を釋す。

數へ知るべからず。文の中に三あり。先に、佛菩薩の、善根に於て隨喜す。謂はく、此菩薩、增上の深心に由りて、彼善を隨喜す。是故に心をして、彼善を攝せしむる故に、菩已安住彼善と云ふ。二に三世の下は、諸佛所度の衆生の善根に於て、心隨喜を生ず。三に三世の下は、總じて結す。三世の佛の因果の位の、所有の善根を、皆悉く隨喜す。七に彼諸如來の下は、餘の善根を修するに四有り、一は說法善、二は念佛善、三は因位善なり。謂はく、菩薩の道法は、是れ自己の境界なり。四は果位善なり。上來は、所廻の行體を辨じ竟んぬ。

（三）自下は第二に、廻向菩提及び衆生を明す。中に於て、此善根を以て、皆悉く廻向すとは、是れ總じて廻向を擧ぐ。下は別して之を顯すに、三有り。初に前の善根を牒し、二に、如此善根盡過去の下は、正しく廻向を明す。三に如是摩訶薩善根廻向の下は、廻向を結す。前の中に十二句有り。一には前の善根に於て、若し初に修する時の、所得の功德なり。二には、若し進んで學する時の、所獲の善根を、皆悉く廻向して、諸刹等を莊らんとす。三には若し久しく功德を集むる時、四には、若し深く彼善根を觀察する時、五には、彼善根に於て、歡悦を生ずる時、六には、而も彼善根、若し具に備る時、七には彼善根を成ずる時、八には彼善根に依りて、淨行を成ずる時、九には諦に依りて、證を得る時、十には彼善根を思擇する時、十一には、領納任持するの時、十二には自ら宜に廻向して、志を標して守持する時、此等の時に於て皆善根を發生し、普く前に廻向せんとす。

【自下第二に云云】二に正しく廻向を明す下。經の「此の如き等の善根は「過去の際」一等の文を釋す。初に菩薩廻求の事嚴を明す文の釋なり。

自下第二に、正しく廻向を明す。謂はく、此菩薩は、善根廻向を以て、三世の佛刹を莊嚴し、衆生をして淨ならしむ。即ち是れ廻向菩提及び衆生なり。汎く嚴土を論ずるに、三種の淨有り。一は處所淨、二は住處衆生淨、三は法門流布淨なり、亦受用淨とも名く。今此文は、内に此三義を具す。初に、菩薩廻求の事嚴を明し、二に摩訶薩復如是廻向の下は、求人寶莊嚴を明し、三に摩訶薩以善根方便廻向の下は、受用淨を明す。前の中に三有り。初は別して三世の佛刹異嚴を顯し、二に總攝して、用を以て諸の世界を嚴り、三に所嚴の刹の分齊を顯す。初の中に三あり。先に過去の佛土を嚴ることを辨じ、二に未來の佛土を嚴り、三に現在の佛土を嚴る。初に過去を嚴る中に、如此善根といは、前の所修を牒す。過去際を盡すに、時の長きことを明すなり。一切佛界は處の廣きを彰し、無量行起は因の多きを顯す。佛知菩薩識は、人に約して深きを顯す。應衆生等は、土の應機を明し、如來所持等は、佛の淨識所現を明す。淨因所成は、此は是れ主圓淨なり。普賢等は、廣因の所起を明す、是れ眷屬圓淨なり。彼世界若有等は、是佛土を顯す、此中に於て正覺を成ずるを以ての故に。二に未來の土を莊嚴する中に、二あり。先に土嚴を明すに、四有り。一は處廣、二は時長、三は一切諸佛の下は、土因の淨なるを明し、四は雜寶の下は、土果の嚴を明す。二に摩訶薩の下は、菩薩修因の行を明すに、五有り。一は淨法を解し、二は持ちて忘れず、三は法に依りて行を起し、四は證定に入る、上は是れ因圓なり。五は佛の慧光、照して果滿を攝成ず、是故に土をして圓淨なることを得せしむ。三は如未來の下

【自下第二に云云】正しく廻向を明す中、二に人寶の莊嚴を求むる下なり。經の「一菩薩…其修する所の一切の佛刹」等の文を釋す。

【六念の…無し】化教の六念、即ち念佛法僧戒捨天のうち、戒天の二なきをいふ。

は、現在の土を嚴ることを明す。中に於て、初に未來に類同す。種種の下は別して嚴相を顯す。種種は是れ嚴の多、淨具足は是れ離垢の相、德普は是れ利益廣なり。色香等の七は、別して嚴を顯す。隨善知識等の下は、用以て一切の香等の十三種を莊嚴す。二に以如是等の下は、上の三世の刹の嚴を總攝し、用て已が界を嚴る。中に於て三あり。先に總、次に別、後に結なり。別の中に、二十七句有り。此等は皆是れ、三世の諸佛、異刹の莊嚴にして、用て總じて已が世界を嚴る。三に如是莊嚴於一世界の下は、所嚴の分齊を顯すに、二有り。初に三世の莊嚴を以て、一界を嚴り、二に一を以て多に類し、皆三世を盡し、略して九種の佛刹莊嚴を論ず。上來は事嚴竟んぬ。

自下第二に、菩薩人の寶、後刹を莊嚴することを求む、即ち住處衆生淨の故に、淨土と名くるなり。文の中に三有り。初に總じて、廻求の人寶の充滿を明し、二に此諸の下は、別して嚴相を顯し、三に於一佛刹少分の下は、所嚴の分齊を結す。別の中に二あり。初に人德滿刹を明し、後に充滿の下は、成嚴の相を顯す。前に菩薩の德を辨ずるに、二重有り。初に菩薩の行修具足を明し、後に悉從の下は、諸菩薩の德用圓備を顯す。前の中に二あり。先に別して顯し、後に總じて結す。前の中に二あり。初に福慧勝能の行を顯し、後に成就殊特の下は、善根心志の行を明す。前の中に二あり。初に福慧、二利を成ず。中に於て、先に福慧を擧げ、善能等は利他を成じ、入深等は自利を成ず。二に成就念佛の下は、福智は、勝德を生ずることを明す。六念の内に於て、略して戒天の二念無し。此は是

【自下第二に云云】智の「悉く無量の法門より生れ」等の下。

【二に成就云云】經の「大智一切智の…成就して」等の下。

れ福行なり。法日の下は、智行を明す。中に於て、初に廣智普照、次に深智、玄に入ることを顯す。謂はく、無所有從り生ずるは、深相を釋顯す、智は理に依りて、起るが故に深なり。下は生德を明す。謂はく、智從り力無畏等の、一切の淨德を生ずるが故に、出生等と云ふなり。二に善根心志の行の中に、初に善根を成ず。謂はく、眞理に即するの善を成ずるを、殊特と名く、垢染斯に盡るが故に、清淨と云ふ。下に過ぐるを、最勝と名け、上に出するを增上と名く。二に建立の下は大志の行を顯す。先に行本を擧ぐ。謂はく、大菩提心なり。後に淨魔業の下は、行の勝能を辨ず、五句あり。一は魔業を淨め、二は物機を了し、三は法容を照し、四は四倒を捨て、五は無明を滅す。下は結す。修諸善とは、上の善根を結するなり。滿大願とは、上の菩提心願を結するなり。二に成就如是の下は、總じて多德を結す、知んぬべし。

自下第二に、菩薩の德用圓備を明す中に、三あり。初に悉從法門生とは、總じて勝德の所成を顯す。下は別して顯し、後に成就如是の下は結なり。別の中に、二あり。初に自分の德、二に隨順の下は、勝進の德を明す。初の中に三あり。初に善根の德用を明し、二に得菩提の下は、大智の德用を明し、三に於諸菩薩の下は、三昧の德用を明す。初の中に、勝善は是れ德なり、常作等は用を顯す。智用の中に就きて、三あり。初は是れ智德の用を明す。先に智體を擧ぐ。謂はく、癡闇無きが故に、是れ明なり。一身等は用を顯す。二に成就の下は、是れ大智の德用なり。初に智德分別法界は、是れ智用なり。三に遍遊の下は、

【自下第二に云云】經の「三世の諸佛の善根に隨順し」等の下。

【法華】第二譬喩品の初。

【嚴の下】經の「世界に充滿し」等の文。

是れ淨智の德用、遊初心淨は是れ智體淨なり。謂はく、無功用の故に空の如し。悉離分別は是れ妙用廣なり。三に三昧德用の中に、初に所得の三昧を顯す。謂はく、觸用深廣なるを、不思議と名く。下は德用を彰すに、三有り。一に巧便趣果の用、二に住俱了正の用、三に說法無礙の用なり。上來は自分竟んぬ。自下第二に攝他入佛境界を明す。中に於て十句あり、二に分つ。初の六は、上佛德の德を攝す、二に勝勝の下の四は、妙用無方の德を明す。前の六の中に、一は佛の四智に同じ、二は佛の所證を照し、三は佛の所見を得う、四は佛の圓音を演べ、五は佛と德を同じうすることを得、諸佛の法是れなり。六は無上佛境を得とは、是れ佛果の位を說す。二に、下は妙用を明す。四の中に、一は頓現無礙、二は攝法無礙、三は心智應用、四は實に稱ひて說法す。此の四の中に、前の一は身業、次の二は意業、後の一は語業なり、知んぬべし。隨自の下は德を顯し、多非器を顯す。非器とは、人質非器を顯すが故に、「佛を未だ信ぜざると名けば、苦惱を以て大質と爲す」と、道に此の句は總、自の下は別して顯す、六句有り。一は凡人は劫に淪つ、二は邊意は教を誹る、と、三は理に違ひて作す、四は邪見相續く、謂はく、苦惱とは苦惱の果なり、苦惱とは諸苦惱の趣、五は相に重を積くるなり。左は慳貪纏垢。謂はく、纏網を離へず、又纏垢を念はず。六は業を並めて道に堕す。下は三に所成の分齊を辨す、三有り。初に一段の內、一の小分の德に約す。後に此の如きの十種の大苦の器有りて之を滿す。二に正明す。初に一衆の內、後の一一の小劫、前段の如きの十種の大苦の器有りて、惡く滿つ。三に明に

【自下第三に受用云云】經の「菩薩摩訶薩、諸の善根を以て」等の文の下。

【實教の法輪】別教、一乘の無盡の法輪、如來常恒に轉じて息まず、十方に遍說するをいふ。

【三四】釋の中、第三に實際廻向を明す下、經の一菩薩摩訶薩是の如き等の無等一等といへる文を釋す。

【總報】若し人間に生るれば、彼此共に同一人界の生を受く、これ總報にして、各人の壽命、容貌の好醜等に別あるを別報といふ。

一刹の中に、是の如きの多十の大數、重重の菩薩有りて、虛空法界等の世界に類するに、皆亦是の如きの菩薩充滿す。

　自下第三に受用嚴淨を明す、亦是れ法流嚴淨なり。中に於て十事有り。一に刹に向ひて嚴らしむ、前に辨ずるが如し。二に菩薩をして滿さしむ、亦前の如し。三に佛を現ぜしむ。四に所求の果法有り。五に能求の大願有り。六に行法出要、七に所化の機をして、淨ならしむ。八に彼界に於て、常に佛を見ることを得せしむ。九に佛をして常に住せしむ。十に實教の法輪を轉ず、權教に非ざるを以ての故に、不退轉と云ふなり。上來は正しく廻向し、嚴を成じ竟んぬ。下は第三に、廻向所成を結す、五句有り、知んぬべし。

〔三四〕第三に實際廻向なり、中に於て三あり。初に正しく實際に廻向し、二に入實成益を辨じ、三に行成の相を結す。初の中に六句有り。初に前を牒して後を起す。二に心淨等は、前の成行に因る。謂はく、前の廻向に由りて大極果に趣く。是故に心をして、極淨なること空の若く、安固なること地の如くならしむ。三に入不思の下は、正しく入實を明す。謂はく、能所を絕無して、廻向有るを、不思と名くるなり。四に樂觀等は、能所無き所由を釋顯す。五に無盡等は、謂はく、能所無くんば、稱性の功德を成ず。六に平等順等は、明かに無盡の所由を釋顯す。二に摩訶薩の下は、入實を明し、離妄の益を成ず、十對有り。初對は能廻の妄を離る。次の不妄取佛等の三對は、所向の妄を離ることを明す。次に不取業等の二對は、廻向の業果を離るることを明す。初對は總報の業果を離れ、後對は別報

【次に不取有等】第八對以下を釋す

【今更に釋す】正しく第十對を釋す
【能く佛境云云】初は能所等に約し次に因果相に約していふ。

の業果を離る。上來は有を離る。次の不壞等は無を離るることを明す、空に卽して存することを、礙へざるを以ての故に、是故に壞せず。又、性は自ら眞に卽するが故に、壞することを待たず。次に不取有等は、有無雙離を明す。有を取らざれば、是れ有執を遣り、有を壞せざれば、是れ無執を遣るを以てなり。次に生死非雜等は、背向の相を離るることを明す。法の生死の相を、離るるを以ての故に、雜亂に非ず、亦涅槃の相を離るるが故に、寂靜に非ず。今謂はく、文意只此の如し、然るに古德に多釋有り。遠法師の云はく、汎く釋するに二有り。一は破相に就きて解す、生死の體空を解するが故に、雜亂に非ず、涅槃も亦如なるが故に、寂靜に非ず。二に寂用の解、生死の體寂なりと解するが故に、雜亂に非ず。何んとなれば、是れ體近を空と說く。是れ深く說くときは、則ち不空なり。如來藏は是れ大般涅槃、能く大義を建て、妙用繁興して、所として爲さざること無きが故に、寂靜に非ず。然るに、後の義に依るに、此二は佛の境、佛の所行の道なるを、境界道と名く。生死涅槃の法は、定相無きが故に、無法と曰ふ。諸聖同依なるが故に、同止と名くと。衍法師の云はく、「緣を以て實に就けば、生死は雜亂に非ず、實を以て緣に從へば、涅槃は寂靜に非ず」と。辯法師の云はく、「如來の境界道とは、此れ有に非ず無に非ず、眞佛は是れ佛の證智の行處なる故に、境道と云ふなり」と。非他作無法同止とは、自心眞佛の故に、他の作に非ず、唯佛智の依の故に、法の同止無しと。今更に釋す。此第十對は、廻向の行、果の相を離るることを明す。謂はく、能く佛境に趣くの道は、此道無性卽空の故に、他の

【佛果に…冥同し】果は因を待ちて立つ。今既に果に入る、因道つて泯し果立する能はず、非因非果即ち眞實の果にしてこれ性海に同ずるなり。

【五】以下は前の迴向に依りて生ぜる善根を更に迴向するを明す一段なり。經文は知るべし。

作に非ず。佛果に趣至し、性海に冥同して、能依の智、所依の理と同處にして、止まることと無し、故に無法同止と云ふ。又因相絶するが故に、道は他の作に非ず、果相離るるが故に、法同止する無し。下は行成を結することを明す。中に於て二あり。先に上の修入行成を結し、後に離諸の下は、上の行縁相成を結す、知んぬべし。

〔二十〕第四に、前の所得の無盡善根に依りて、復將に迴向せんとする中に、三有り。初に所得の無盡善根を顯し、二に以如是等の下は、正しく將に迴向せんとす、三に眼終不見の下は、其盆相を明す。初の中に十句あり。初の句は是れ總なり。前の迴向に由りて、已に此無盡の善根を得。常念の下の九句は、別して辨ず。一は、前に學三世諸佛を念じ、迴向して土を嚴るに由りて、是故に無盡の善根を發生す。二に、前の願求人寶嚴土に因りて、無盡の善を生ずるが故に、喩虚空と云ふなり。三に、前の嚴土に因りて、諸刹をして淨ならしめて、生ずる所の善根なり。四に、前の迴向、求めて衆生を淨むるに因りて、生ずる所の善根なり。五に、前の實際迴向の中の、隱顯法界に因りて、得る所の善根なり。六は、前の心淨きこと空の如く、動ぜざること地の如き等に因りて、得る所の善根なり。七に、前の如來境界の道を解するは、他作に非ざる等に因りて、得る所の善根なり。八に、前の虚妄取にあらざる等、菩薩の淨業を成ずるに因りて、得る所の善根なり。九に總じて結するなり。前の嚴土等の行、皆三世に通ずるに因りて、得る所の善根なり。自下は第二に、正しく前の善を以て、復迴向する中に、先に總じて迴向の能を標す。以とは前の善根至極の

【二六】所成の行德を明す文を釋す。經の「菩薩摩訶薩は…此廻向の威力」等の下。

廻向を用ふるが故に、能く性に稱ひ、衆生を度脱す。下は別して顯すに、十句有り。一は度せんが爲の故に、衆生界に入る、體空を知るが故に、衆生を見ず、廻向して、此無障礙の德を求むるが故に、廻向と名く。二は壽命無し、三は自在の我無し、四は人無し。富伽羅は、舊には義に翻じて人と爲す。今正しく名翻して、數取趣と爲す。數數諸趣を取りて、受生するを以ての故に。上の四は生空に約し、下は法空に約す。五は、法の是非無きを以ての故に、忿諍を離る。六は、緣生實ならず、七は理實著無し、八は土の體無の故に、染無きを知る。九は行の、緣に從るが故に、堅固無し。十は境の、唯心に達するが故に、空無なり。自下第三に、益相を辨ずるが中に、三あり。初は理の益を見る。中に於て九句あり。初の五句は、離相を明し、後に攝物來の下の四句は、實を得。二に、此菩薩の下は、成德の益を明す。中に於て、上は佛果を趣する中に、佛因を具し、下は衆生を攝す。三に、彼菩薩の下は、妙用の益なり。中に於て寶幢は是れ用體、次に嚴土、後に攝生は用相を顯はす。上來、第四段竟んぬ。

(二六)自下は第五に、前の廻向に由りて、成ずる所の行德を明す。願力故とは、前に由りて後を起すなり、十句有り。一は行勝れて倫無し、二は行堅くして壞する無し、三は位高くして魔を伏す、四は德を成じて退せず、五は本の願明を滿ず、六は心廣、七は用速、八は深智、九は顯智、十は菩提心の力、法界に廻向す。上來は別して釋すること竟んぬ。下は第三に名を結すること、知んぬべし、上來位行竟んぬ。

【一七】以上、位行を釋し終りて、次に位果を釋するなり。經の一菩薩摩訶薩…復十種の…等の文。

【聞思修證】聞慧、思慧、修慧と證智を具會するをいふ。

【一八】以下偈頌を釋す。

（一七）自下第三に此位果を明す。此位を得るが故に、復斯果を得、三有り。先に數を擧げ、次に列釋し、後に結す。釋の中に、十の內皆、先に藏の名を列ね、後に其義を釋す。一は佛藏を見る、二は法、三は念、四は慧、五は義、六は願、七は德、八は智、九は辯、十は果なり。又此十の中に、初の六は自利の行、一は佛を見、五は法を知る。五の中に、初は理法を知り、二は敎を聞持し、三は文敎を解し、四は意趣を悟り、五は法實を證す。亦是れ聞思修證なり。次の三は利他の行、一は功德身を以て應じ、二は意業を以て曉悟し、三は語業を以て辯說す。後の一は、行成の果を攝す。謂はく、此迴向の力に由りて、菩薩の行をして、速に圓滿することを得せしむ。是故に職を受けて、成佛することを得。後に佛子の下は結なり。

（一八）第二に偈頌總持の中に、二十五偈有り、五に分つ。初の一偈は、前の行體攝遍等を、頌する中に、但隨喜の行德を頌す。二に三世の下の九偈は、前の迴向菩提、及び衆生を頌す。中に於て三有り。初の四は、上の莊嚴三世佛刹を頌す。一は佛嚴を擧し、二は法嚴を擧し、三は所嚴を顯し、四は結して佛嚴に同ず。二に、復聞佛子の下の四は、上の菩薩人寶莊土を頌す。中に於て初の一は、上の法門の中の生を頌す。次の一は業勝具身口を頌す。後の二は、勝德を歎ず、亦是れ意業勝なり。未曾想念等は、是れ上の文の、淸淨不雜等なり。三に一偈は、上の受用淨を頌す、亦是れ法流淨なり。生をして成佛し、佛法を具せしむるが故に、佛土と名くるなり。三に十方の下は二偈有り。超えて前の、第五の所成の德

を、結するを頌す。中に於て初の二句は、上の威、衆魔を摂するを頌す。次の句は、上の一切世間所不能壊を頌す。次の句の決定修等は、上の行無倫匹を頌す。次の句は上の大願成滿、次の句、廻向功徳等は、上の成就不退の功徳を頌す。次の二句は、通じて所成の徳深く、報廣きことを頌す。四に善能観の下に五偈有り、上の第三の、實際廻向を頌す。中に於て初の一は、上の正向實際を頌し、兼ねて成益の中の、不妄取業報を頌す。餘の四は、並に成益を頌す。次の二句は、無色心の有無を明す、即ち上の不著意業、及び果報を頌す。次の二句は、上の不取有爲、及び無爲を頌す。次の一偈は、上の不壊因果不取有無等を頌す。一切衆生の下の、一偈と三句とは、上の生死非雜亂を頌す。後の一句の、佛刹亦如是とは、亦上の涅槃非寂靜を頌して、世法の卒如に類同することを得、故に亦如是と云ふなり。五に菩薩如是知の下に、八偈有り。上の第四の、前の生善に依りて、復將に廻向せんとするを頌す。中に於て初の一は、上の所得の、十種の無量善根を頌し、次の二偈は、上の前の善根を以て、正しく十種の廻向を成ずることを頌し、次の五偈は、上の廻向の益相を頌す。中に於て初の二は、妄見已に滅す、棄等は是れ、上の鬪諍に不染の佛刹等を見ず、後の三偈は、上の不見異相衆生を頌す。謂はく、衆生と刹と性にして有無を離れ、等しく異ること無きなり。第五の廻向竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第七

【一】種大行の第六迴向行の文を釋す。

【二】釋の中、初に行所依の身を明す文を釋す。

【三】二に相を辨ずる云云】七寶を辨ずるに、初に輪寶の文、初に慧行の果報を辨く、

華嚴經探玄記卷第八

此れ迴向品を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

(一)第六に、隨順一切堅固善根迴向なり。長行の內に於て亦二あり。謂はく、位行と位果となり。位行の中に亦三あり。謂はく、標、釋、結なり。釋の中に三有り。初に行所依の身、二に淨諸業障の下は、身に依りて、行を起すことを明す。三に摩訶薩若能以此善根迴向の下は、行所成の益を辨ず。

(二)初に行所依の身とは、轉輪聖王の身に依りて、施行を起すに、四の意有り。一は、在家は是れ能施の位なり。二は、七寶の施すべき有り。三は捨し難きを、能く捨するを明す。四は、攝化して取て、餘に違ふこと無し。文の中に二あり。先に王統攝自在の德を顯し、後に此摩訶薩の下は、王の正報殊倫の德を辨ず。前の中、輪王の七寶を成就する義に、略して三門を作る。初に名を顯さば、下の文に云はく、一は金輪寶を勝自在と名け、二は、象寶を名けて、靑山と曰ふ。三は、紺馬寶を勇疾風と名く。四は、神珠寶を光藏雲と名く。五は主藏臣寶を、名けて大財と曰ふ。六は、王女寶を淨妙德と名く。七に主兵臣寶を離垢眼と名く、是七寶を得て、閻浮提に於て、轉輪聖王と作る。

(三)二に相を辨ずるに、先づ輪寶を辨ぜば、「涅槃經」に依るに、頂生王は十五日に於て、

高樓に處在して沐浴受齋するに、卽ち東方に於て金輪有り、千輻の轂輞具足し、工匠の造に非ず。我當に之を試むべし。左の手を以て此金輪を擎げ、右の手をもつて香爐を執り、右膝を地に著けて、發願して言はく「若し是輪寶にして虛からざれば、過去の轉輪聖王の如く、所行の道に去るべし」と。是誓を作し已りて、是金輪寶、飛んで虛空に昇り、四天下に遍じ已りて還り來り、王の左の手に住在せり。『倶舍論』に依るに、「但し贍浮提に輪王の出づること有り、福力を以ての故に、帝釋宮の內地をして、熱ならしむ。帝釋卽ち輪王の、出づること有ることを知りて、宮門を守らしむ。五百の夜叉、一輪寶を扶し、下つて輪王に應ず。輪寶を得るを以ての故に、輪王と曰ふ」と。又小論の說有り「輪王未だ出でざるに、此輪寶等、鐵圍山の間に在り。諸の大力の鬼神守護す。輪王亦出づれば、卽ち送りて王の所に至る。是故に先に住處有り」と。若し此經に准ぜば、上の文に云はく、「譬へば轉輪王の、勝七寶を成就するが如し。彼從來する所無し」と。明かに知んぬ、倶業力に由りて所起し、別の來處無きことを。然るに此輪に四種有り。一は鐵輪、二百五十の輻あり。二は銅輪、五百の輻あり。三は銀輪、七百五十の輻あり。四は金輪、千輻あり。『菩薩本行經』には「輪に千輻有り。縱廣四十里、周匝百二十里なり。王行かんと欲するの時、輪前に在りて導く。賓伏せざる者は、金輪自然に空上に在りて旋り、自然に降伏し、兵仗を用ひず」と。二は象寶とは、七支地に至り、六牙成滿すること、白蓮華の如く、行くこと疾きこと風の如し、王其上に乘りて、一念の頃に四天下に周し。三は馬寶、其色

紺炎、髦尾は金色なり。行くこと騁𨂴せざれども、迅きこと疾風に踰えたり。遠きを致して疲れず、乘れる者安豫なり。四方に巡遊して、主の意を失はず、一念の頃に四天下を遍す。四は神珠寶「『涅槃經』に依るに「王宮の内に於て、自然に摩尼珠有り。大さ人の髀の如く、能く闇中に於て、一由旬を照す。此珠の力の故に、天雨の滴ること、車軸の如くなることを爲せども、能く蓋覆を作すこと一由旬にして、此大雨を遮り此珠を下り過さしめず」と『觀佛三昧經』の說に依るに、是れ金翅鳥の心なりと。『智論』に依るに、是れ佛舍利なり。末法の後に於て、變じて摩尼珠と作ると。又『賢愚經』に依るに、三品有り。上なる者は高幢の頭に置き、王、香を燒きて請ずれば、王の意に隨ひて、諸の財寶及び飮食等を雨らし、八十由旬に滿つ。中なる者は四十由旬を雨らす。下なる者は、二十由旬を雨らす。其光、常に明かなり。及び雨を遮るも亦爾りと。又『菩薩本行經』の中には、珠寶晝夜に、常に千六百里を照すと。又眞諦三藏の云はく「如意珠に三種有り。一は如意珠、能く人の意に隨ひ、所欲のもの心に從ふ。二は淸水珠、濁水をして、變じて淸からしむ。三は吐金珠、自ら三品有り。一は下品にして、一兩の金を投じて、千倍を得。二は中品にして、一兩の金を投じて、萬倍を得。三は上品にして、一兩の金を投じて、無量倍を得」と。五は主藏臣寶なり。『倶舍』に依るに「主藏臣の報、眼根力を得、能く一切地中の伏藏を見る。手を以て海寶を攪るに、五指に隨ひて現ず」と。又『菩薩本行經』に「典藏の臣、王の意に金銀七寶、衣被飮食を須ひんと欲して、其兩手を披くに、七寶財產一切

【相似の七寶】一、劍寶。二、皮寶。三、床寶。四、園寶。五、屋舍寶。六、衣寶。七、足所用寶。

の所須、意の所欲に隨ひて、手中より出でて、盡くること有ること無し」と。六に兵寶なり。伏せざるの處に、平らぐることを計るの論を立てて、斯に伏せざる無し。又『菩薩本行經』に、典兵臣寶は、王の意に百千萬の兵を得んと欲ふに、自然にして至ると。七には玉女寶、長からず短からず、黑からず白からず、身の諸の毛孔より栴檀香を出す。其目は一由旬を視る、耳に聞き鼻に齅ぐことも亦爾なり。其舌、面を覆ひ、手を以て王の衣に觸れて、即ち王の身の安樂病患を知り、亦王の心を知る。此女寶は、蓮華より化生す。又『菩薩本行經』に依るに、女香潔にして優曇華の如し。王の意に清涼を得んと欲するの時、身自然に冷かなり。王、溫かなるを得んと欲する時は、身自然に溫かなり。聲は梵聲の如く、常に王をして喜ばしむ。

三に諸門とは、五重有り。初の一は麁報に約す。謂はく、彼寶有りて能く、四十里の雨等を遮る。是相似の七寶は『薩遮尼經』の如し云云。二は細報に約す。謂はく、寶蓋なり。金輪王の七寶は、前に辨ずるが如し。三は行緣に約す。謂はく、菩薩輪王の七寶等の物は、皆是れ菩薩の淨業の起す所、菩薩の修行の所用と爲すに堪ふ。唯五義有り。一は、菩薩をして、愛染を生ぜざらしむ。二は、施行をして成ぜしむ。三は、乞者の意を滿さしむ。四は、乞者をして、發心修行せしむ。五は、衆生を教化せしむるに、堪ふるが故に。『智論』の十二に云はく、「寶に三種有り、一は人中の寶。能く物を雨らす、輪王寶等の如し。二は、天寶。能く語を解して、喚ばしむる等なり。三は、菩薩の寶。能く法を說きて、衆生等を

【波羅蜜を金輪】戒波羅蜜を轂、般若を輻、餘の精進を莊飾となして輪寶を成ず。

【淨是無上】此下珠寶の二字を缺くか、然らざれば一寶なし、考ふべし。

【三】二に身に依て行を起す文を釋す。初に略して行事を標する下經の「諸の業障」等の文

化する故なり。四は深報に約す。謂はく、圓教世界性等の如し、已上は萬子に有り。已去は輪王所有の寶等にして、白淨寶網轉輪聖王の如し、錠光頗梨珠有り。十佛刹塵數の世界海を照す。一恆河沙の金轉輪王の善根を以て生ずる所、是の如き等なり。五は行德に約す、下の經に云ふが如し、波羅蜜を金輪、諸通を象寶と爲し、神足を馬寶と爲し、淨慧無上殊妙の行を、女寶と爲す。四攝を寶藏臣方便、主兵寶は無上轉輪王なり。今此文の中は、後の三門の所說に據る。無盡法界の中に於て、普賢の無邊の行海を、成ずるを以ての故に。後に此摩訶薩の下は、正報の殊倫を明す。那羅延、此には堅牢力と云ふ。『倶舍』に依るに、能く一大千界の風輪を持すと、是れ那羅延の量なり。『涅槃經』に依れば、象量知んぬべし。

(三)二に、身に依りて行を起す中に、三あり。初に略して行事を標し、二に摩訶薩如是諸善根廻向已作如是念の下は、廣く行相を顯す。三に摩訶薩以此善根廻向時の下は、行極まりて眞に契ふ。前の二は即ち是れ、菩提樂生廻向なり。後の一は即ち是れ實際廻向なり。又、前の二は是れ、廣大廻向、後の一は、甚深廻向なり。初の中に三有り。先に略して七十の事の、所施の物を標す。飲食從り床座に至る十、住處從り蓋に至る十二、幢從り眼に至る十三、耳從り完に至る十四、心從り瓜に至る十五、法の爲に火を投ずる從り、身を以て佛を覆ふに至る十六、身を以て一切に施す從り、悉く能く捨離するに至る七十と爲す。中に於て、內施、外施、內外施有り。又、財法の無畏有りて、命に代へて殘を救ふは、是れ無畏施なり。殺を

救ふに二有り。所殺に望めば、是れ無畏なり。能殺に望めば、五戒を持たしむる等は、是れ法施なり。普く佛名を告ぐるも、亦是れ法施なり。又釋す。此等既に、並に是れ法門なり。是故に俱に、三施に通ずるなり。又此は並に是れ、無盡法界大緣起門、普賢無礙自在の行なり。是等の、若しは內、若しは外、情非情の物、及び法門の行を以て、盡く以て一衆生に施與す。一衆生の如く、一切も亦爾なり。一世界一微塵の處に於て、一切衆生に施す。一切塵處も皆亦是の如し、一世界の如く、虛空法界等の、一切世界の處も、皆亦是の如く、頓に大施を成じ、一刹那に於て、卽ち是の如きの法界世界に遍く、此施行を行ず。是の如く念念に前後際を盡す。一切の諸劫、一切の刹那も皆亦是の如し。此一菩薩、法界に滿つる身を以て、備さに是の如きの、無邊の大施を起すに、仍ち純雜の門別なること有り。若し純ら施眼門を以て、看るに約せば、卽ち上の如く、一切處、一切時、一切物、一切田に唯眼を施し、畢竟じて所餘の諸門を見ず。何を以ての故に。餘門は現ぜずして、虛空の如きの故に。卽ち此一門、法界に遍きが故に、施眼の初際を見ず。亦施眼の後際を見ず、始終無きを以ての故に。餘門も亦爾り。其純雜に隨ふこと、皆悉く同じからず、之に准思すべし。二に、若諸衆生の下は、田に對して、施を成ずることを明す。三に、作如是念の下は、施の所爲を顯す中に、八句有り。有人解して云はく、此攝取は佛果の三堅にして、是れ菩提に廻向すと。今謂はく、此文は猶菩薩の攝取を辨じ、法界の依正に稱ふ。此堅固善根門の內に在りて、勝行の緣を具せしめ、轉た更に、法界に稱ふの行を成ずる

【第二に廣く六云】次に廣く行相を顯す文の下。經の一菩薩摩訶薩一等の文。是の初に七十門を七段となし、今は初の十事を明す下なり。

【禪悅食】第六識禪定を資得し、心神を悦豫せしめ、諸根を長養ふをいふ。

【念食】記憶して忘れず、心に持して養し、身を增長するをいふ。

【解脫食】聖道を修し、身心を潤益し、善根を長養せしむるをいふ。

【法喜食】聞法して法を了解し、心に喜び色身を滋長するをいふ。

【摶食】梵には、(Pindapata)といひ、摶り丸めて食するをいふ。

ことを得。勝人は是れ國中の人、眷屬は是れ己が眷屬なり。餘文は見つべし。

第二に廣く行相を顯す中に、二有り。初には別して、向前の七十門の大施の行を顯し、別して廻向を明し、後に此摩訶薩以如是等の下は、總じて所爲の大喜廻向を結す。前の中、七十門に開有り合有り、文に至りて當に辨ずべし。

初に施食の内に二あり。先に自施の心、過を離るることを明し、後に以此悲施の下は、正しく此施食の善根を以て、衆生に廻向することを明す。但以法食とは『阿含經』に依るに、出世間の食に五種有り。一は禪悅食、二は佛食、三は念食、四は解脫食、五は法喜食なり。永離摶食とは、『阿含』に、「世間の食に四種有り。謂はく、段と思と觸と識となり。」衆生を化せんが爲に。現に摶食を受くとは、衆生をして化身の佛と成らしむ。『攝論』に云はく、「施主の善を生ぜんが爲なり。但如來の食時、諸天爲に施を受くるは、諸の衆生をして、實佛を得せしむるが故に手を以て食に觸るることを示現す」と。食を施すに五果を獲。謂はく、常命色力安無礙辯を得。又『瑜伽』に云はく、「飲食を施して能く大力を感ず」と。問ふ、「若し貧にして多食無しとも、頗し大施行を、成ずるを得ること有りや不や。」答ふ、「有り。」『大乘方便經』の上の卷に云ふが如し、「若し貧窮の家に生れ、是菩薩乃至乞食の、若は一の摶食を得て、持用して僧に施し、若しは一人に施して、以て愧と爲さず、應に是念を作すべし。佛の所說の如く、心增廣大にして、財を以て施すに勝る。我財は施は少しと雖も、一切の意願を以てす、是善根は一切智を成じて、諸の衆生をして、悉く

く資手を得せしむること、猶し如來の、是緣を以ての故に、施或は禪定福處を具足するが如し。是を菩薩、方便を行ずと名く。」と。

飲を施すが中に、廻向の內に淨法愛を得るは、是れ法喜食なり。法身柔軟は、是れ解脫食なり。三昧調心は是れ禪悅食なり。味を施すが中に、先に所施を擧げ、二に善根廻向なり、中に於て、上味の相を得。甘露充滿とは、是れ佛の三十二相の中の、上味相なり。「經」に云はく「如來の大牙に、復甘露泉有り。但食口に入れば悉く甘露と爲る」と。下は諸廻向の中に、悉く事を以て法に同じ、相似相類して廻向を成ず。三に是爲の下は、名を結す。乘を施すは、是れ步むに代るの喜びを得せしむ。衣を施すは、形を弊ふの喜を得せしむ。「瑜伽」に「衣服を施して、能く妙色を感ず」と。又若し能く新に衣を作りて、持用を成じて佛に供ふるに、二種有り。一は暫く獻じて便ち取るも、無量の福を得。二は時分を作りて施すも、亦大福を得。今日午時に衣を以て佛に施し、直に明日の午時に至るが如し。若し中間に取れば、即ち是れ佛物を取るなり、期限の滿つるに至りて取れば、失無くして福有り。華を施すは、供養の喜を得せしむ。又華は人をして喜ばしむ。自身を施すとは「智論」の第十三の如し。達羅摩菩薩は外道に施すに、諸大行りて自施せしめて、福外道に勝ること無量なり。彼に具に說くが如し。鬘嚴飾の喜に二種有り。一は華を貫きて環と作して、頭上に置く。二は線を以て華を穿ち、身上に絡ふ、西國には此を尙ぶなり。施は端正の報あり。香も亦供養すれば、戒德氛氳たり。故に香に同じ。塗香も亦身

【住處支〔六六〕】次の十事を明す下經に九段あり、象馬を合す。

を嚴る。床座は、安穩ならしむるの喜あり、上は是れ初の十なり。住處及び房舍を施すも、亦安穩ならしむる喜あり。燈明を施すは、闇を破せしむる喜、近くは好色の報を得せしめ、遠くは衆生をして、佛の慧光を得せしむ。『瑜伽』に「諸の燈明を施して、能く淨眼を感ず」と。又『燃燈功德經』の中に、燈を燒きて供養して大いに罪を滅し、福を生ず。願を發さしめて、言はく「願くは能く、大海を以て油と爲し、須彌を炷と爲して、大明燈を燃し、佛刹海に遍くして、供養すること休ふこと無けん。又願くは、法性を以て油と爲し、大智を炷と爲し、大悲の燈を燃し、普く世間を曜かさん」と。故に『經』に云はく「淨信心を炷と爲し、慈悲を香油と爲し、正念を寶器と爲し、徧曜世燈を燃さん」と。湯藥を施すは、病を除きて、自ら喜ばしむ。近くは無病なることを得。薄俱羅比丘の、昔五不死者の如し。遠くは藥樹王の身を得。又藥王の子の如く、手疾病に觸るるに、皆愈えざる無く、死して後其燒く處の灰土を取るに、亦能く疾を除く、身疾速に除く、心の病も亦遣る。器を施すことは、盛貯を得しむる喜、車を施すことは、運載を得しむるの喜、亦是れ代步なり『瑜伽』に「車乘を施して、能く快樂を感ず」と。中に於て三有り。先づ五種の福田を列ね、次に十種の寶車を列ね、後に田に隨ひて施を成じ、善を以て迴向す。此中に五田を施すに、即ち五段と爲す。初は佛及び塔に施すに、二種の流類の迴向有り。一は田に約する相似迴向なり、文の如し。衆生をして乃至云ふ、諸の如來の無礙解脫、一切種智等を得せしむと。二に所施物に約する相似の迴向なり、衆生をして大乘等を攝取

せしむ。餘文の中に、亦施心に約する廻向有り。謂はく、歡喜心施は、亦即ち隨ひて廻向等を發すこと、並に通ず、之に準ぜよ。二は、菩薩及び善知識に、施して廻向す。三は、三世の佛の大衆、僧寶に施して廻向す。四は、聲聞緣覺に施して廻向す。五は、一切の福田に施して廻向す。菩薩の十種道とは、十度の行乘、又は十地の道なり。

四輪の義、略して三門を作る。初に相を辨ぜば、一は正國輪に住す。『莊嚴論』の第六に云はく、四種の不放逸輪有り。一は勝土輪なり。土勝に五の因緣有り。一は求め易し。謂はく、四事の供身得難からざるが故に。二は善護。謂はく、國土、法の如くなれば、惡人盜賊侵すことを得ざるが故に。三は善地。謂はく、處所調利なれば、疫癘無きが故に。四は善伴。謂はく、同戒同見を、伴侶と爲すが故に。五は善寂。謂はく、晝日喧きこと無く、夜は聲を絕つが故に。二は善人輪なり。善人に亦五の因緣を具す。一は多聞にして、阿含を成就するが故に。二は見諦して、聖果を得るが故に。三は巧に說きて、能く法を分別するが故に。四は憐愍して利を貪らざるが故に。五は不退にして、疲倦無きが故に。三は自正輪なり。亦五の因緣を具す。一は善緣、妙法を緣と爲すが故に。二は善聚、福智具足するが故に。三は善修、上觀の諸行相應の時、修するが故に。四は善說、利を求むること無きが故に。五は善出、所有の上法、恭敬修の故に。四は先福輪なり。先福に亦五の因緣を具す。一は可樂、勝土に住するを、因と爲すに由るが故に。二は正遇、善人に值ふを因と爲すに由る。三は無障。四は三昧。五は智慧なり。此三は自らの正輪を以て因と爲

す」と。

第二に難を除くとは『成實論』に依るに、四輪は八難を除き正國輪に住す。彼論には住善處輪と名く。謂はく、中國に生れて、五難を除く。謂はく、三塗と北洲と長壽天となり。依正士輪は、彼に依善人輪と名く。謂はく、佛世に値うて、佛前佛後の難を除く。平等願輪は、彼を自發正願と名く。謂はく、正見は世智辯聰の難を除く。本功德輪は、彼に宿殖善根と名け、生盲聾暗啞を除く。前の五は是れ惡處の難、第六は是れ惡時の難、第七は是れ惡因の難、第八は是れ惡果の難なり。第三に德を成ずとは、四の中に、初の二は是れ外緣、後の二は是れ內因なり。謂はく、願は是れ智因、德は是れ福因なり。菩薩無邊の淨行は、皆此因緣に賴りて、德成滿す。上は通じて、三乘教に約して辨ず。又正國は眞如法性の土なり。正士は般若の正觀なり。功德施等は、五度の行なり。平等の願は菩薩の十種の大願なり。此は終教に約して辨ず。又、正國は即ち十佛の國土海、正士は即ち十佛の正報、功德は即ち性起の功德、願は即ち普賢の願海なり。此は圓教の、同一無盡大法界緣起に約する故なり。

象馬の二施は、合して以て迴向す。床座を施すが中に、前の所施は、是は汎爾の床座なり。今此は是れ、聖王所坐の座なるが故に、不同なり。三種世間は壞する能はざる所とは、辨法師釋すらく、地前は願樂世間なり。初地より七に至るを、功用世間と名け、八地より等覺に至るは、無功用世間なり。佛の殊勝の座を得せしむ。因位の三種の無常世間は、壞

【第二十に云云】以下經第十八の初にして、先づ寶蓋莊嚴を說く。

【寶積…如く】維摩經佛國品の所說にて諸の寶蓋合して一蓋となることを述ぶ、就いて見るべし。

【地前の光得等】光得定、光增定、印順定、無間定、此定力に依て、煖頂等の四善根法を修す。

する能はざる所なりと。衍師の云はく、是れ三災壞せずと。今釋すらく、應に是れ過未等の三世の爲に、遷壞せられざるべきを以て、三相も亦得たり。是れ法性に稱ふの座なるを以ての故に、經に云はく「諸法の空を座と爲す」と。

第二十に蓋を施す中に、寶積所持の如來合蓋の如く、遍く三千を覆ふは、攝化の境を明すなり。又『菩薩本行經』に、佛鬱單羅國に在りて、熱を渉りて行くに、牧羊の人有り、即ち淨心を以て、草を編んで蓋を作り、佛に覆ひて隨ひて行くに、佛便ち微咲したまふ、阿難故を問ふ。佛言はく「此人草蓋をもて我を覆ふ、十三劫の中に地獄に墮ちず。天上と人間に生じては、便ち七寶の蓋有りて、隨ひて上を覆ふ、後に出家するを得て辟支佛と成り、幢幡合施す。亦是幢の上に幡を懸け、俱に施すべし。』と。『百縁經』に、佛出世の時、長者の子有り、波多迦と名く。生れ已りて、空中に一の大幡有り、遍く城上に覆ひ、行くに隨ひて之を覆ふ。佛に値ひて出家し、阿羅漢を得。阿難故を問ふ。佛答ふ、昔毘婆尸佛滅して後、七寶の塔を起す。時に一人有り、塔に於て會を設け、一の長幡を作りて、塔上に懸著し、發願して去るに、九十一劫、惡道に墮ちず。所生の處に隨ひて、幡常に上を蔭す、今我を見ることを得たりと。寶藏を開きて施す中に、十六智寶を得しむとは、小乘に依るに、八忍八智を十六と爲す。辨師の云はく、地前の光得等の四定、地上の大乘光明等の四定は、各自分と勝進と有りて十六と爲る。此に依りて『一乘智』に、十六智寶と爲す。下の釋に、三昧正受究竟して、智慧の寶を增廣すと云ふを以てなりと。又有人

【佛地の四智】佛地に至りて顯現する、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智にして、佛果の極位作用自在、一智の處に三智の德あるをいふ。

釋すらく、佛地の四智は、智ごとに各四有りて、十六と爲る。果位自在なるを以て、互に融通するを得と。

莊嚴具を施す中に、百福具好とは『涅槃』に依るに、菩薩身を修むる、不殺戒の十善に、五種の心有り。謂はく、下中上、上中、上上なり。乃至正見も亦復是の如し。是五十心を、初發心具足と名け、終に成ずるに五十心有り。是の如きの百心を、百福具足と名け、此百福を以て、共に一好を成ずる故に、百福具好面自莊嚴と云ふ。又『瑜伽』の決擇の中に依るに、百福行とは、謂はく、十不善業道を離れ、小分は殺生を離れ、乃至小分は邪見を離る、是初の十行、多分は殺生を離れ。乃至多分は邪見を離るるを、第二の十行と名く。若し全の離殺生、乃至全の離邪見は、第三の十行と名く。若し小時の離殺生、乃至小時の離邪見を、第四の十行と名く。若し多時の離殺生、乃至多時の離邪見は、第五の十行と名く。若し盡壽の離殺生、乃至盡壽の離邪見を、第六の十行と名く。若し自の離殺生、乃至自の離邪見は、第七の十行と名く。若し勸他の不殺生、乃至勸他の不邪見は、第八の十行と名く。若し稱揚讚述の不殺生、乃至讚述の不邪見は、第九の十行と名く。若し離殺生を見、乃至離邪見の者を見て、慶悦大喜するを、第十の十行と名く。又叡法師の法華の疏の中に依るに、十善を本と爲す。一善は九善を以て莊嚴するを、名けて百福と爲す。何の聖教に出づるやを知らず。冠珠を施す中に、施を以て心に熏じ、更に勝進して、大施を成ぜしむるが故に、向增上と云ふ。此施念に因りて、慧をして深からしむ、施の中の正理を

【無見頂相】頂成肉髻相をいふ。頂の肉隆起して髻形をなすをいふ。

【毘楞伽】具さには釋迦毘楞伽(Śakrabhilagnamaṇiratna)即ち寶玉の名

見るが故に、修慧と云ふ。又、施の作意に因りて、捨根を成ぜしむ。謂はく、究竟大捨なり。施の作意に因りて、慧をして廣く覺らしむ。餘の一切の行廻向の中に、令得無見頂相とは、是れ佛の三十二相の中の、無見頂相なり。佛の勝出して、更に過ぐること無きを標する故なり。摩尼寶冠とは、文殊師利の頭上の天冠の如し、是れ毘楞伽寶の所成、首楞三昧の所起なり。中に於て、常に無量の佛刹、及び諸佛の身を現じて、獄囚の苦を救ふ。大悲菩薩等の如しとは、此等の菩薩此門に主當して、一切處一切時に於て、常に此行を行ず。餘の下の諸門所引の菩薩も、皆亦是の如し。

身死因に代るとは、是れ身命を捨つ。前の財施に比ぶるに、極めて超過せり。『菩薩本行經』の中の如し。過去に五百の長者の子有り。各珍寶冠馬車乘衣被飲食を出し、乞ふに隨ひて悉く與ふ。一りの貧人有り、五百の長者の子を見て、問うて言はく、『汝等施を爲して、何等の願をか求むるや』。答ふ、『佛道を求めんと欲す』。又問ふ、『何をか佛道と謂ふ』。答ふ、の中に廣く佛德を歎ず。貧人聞き已りて自ら念ずらく、『我今此論を習學して、廣く一切を度せんと欲するも、加加復貧窮にして、財の施を行ずべき無し。當に己が身を持ちて、用ひて惠施すべし』と。念じ已りて塚を索めて身に塗り、塚の間に臥す。『我今、身を以て一切に施與す。若し血肉頭目髓腦を須ひて、悉く以て之を與へ、是功德を持つて、用ひて佛道を求め、廣く一切を度せん』と。是願を作し已るに、時に應じて、三千大千世界、而も大いに震動し、諸天惶怖す。帝釋、天眼をもつて、菩薩の臥して塚間に在りて、身を以

【退し】後退するの意。
【他の與に針を貫き云云】釋迦、失明の比丘の爲に、針に絲を徹すがごときをいふ。

て布施するを見、下り來りて試みんと欲し、化して衆狗鳥獸と作り、來りて噉いて食はんと欲す、菩薩來りて身を噉んと欲すること有るを見て、心便ち歡喜し、退轉傾動の意有ること無し。天帝形を復し、所求を讀問すらく、「輪王帝釋梵王を求めんと爲るや。」答へて言はく、「爾らず、唯佛道を求め、廣く衆生を度せん。」と、帝釋諸天同じく讃ずらく、「善い哉。」と。菩薩に語りて言はく、「汝此勇猛、彼五百の菩薩の所施に過ぐること、百千億倍不可計倍にして、當に先づ作佛すべし。」時の貧人とは、今の我是なり。五百の長者子は、今此彌勒等の五百の菩薩是なり。我精進勇猛なるを以ての故に、諸の菩薩の所作の功德に超えて、先に成佛す。」と。連膚、頂髮及び髻、明珠を施すとは、二事有り。一は、頭皮連髮を割剝して施す。二は西國の貴種に依るに、皆初生の時に、刀をもつて頂に皮を開き、一の神珠を内れ、藥をもて封じて著け已りて、珠皮の内に有り。今、人乞ふこと有れば、刀を執りて開き施す。梵言には周羅、此には頂髮なり。

第三十に施眼の中に『瑜伽』の三十九に依るに、菩薩の内施に二有り。一は、總じて菩薩の身を求むるに、施して僕使と作る、三の意有り。一は、速證菩提の爲に、二は、衆生利益安樂の爲に、三は、布施波羅蜜多速かに圓滿する爲の故に。二は別して、眼、手足、頭目、支節、血肉、筋骨、乃至髓を求むる者には、其所欲に隨ひて一切施與す。又『智論』の十四に、舍利弗六十劫に、菩薩の道を行じて、施河を度せんと欲するに、眼を乞ふに逢ひて退し、彼岸に到らず。廻向の内に、衆生をして、十種の眼を得せしむ。又他の與に、

針を貫き、道を示すが如き、並に是れ施眼の用なり。亦應に是の如く廻向して後に、漸く能く總じて捨すべし。耳鼻を施し用ふるも、亦準じて應に同なるべし。面門とは、有人の解すらく、是れ口なりと。光統の云はく、鼻下の當柱を、面門と爲すと。豈鼻を施すを以て、口端正なることを得んや。牙齒を施す中に、象王とは『十輪經』の說の如し。又『智論』の第十四に云はく「象王の牙を施すが如し、是れ法身の菩薩なり」と。又云はく「法身の菩薩、身を變じて鳥と作り、獼猴及び象の與に親友と爲り、仁敎を存し、以て人獸等を化することを引く。舌を施す中に亦施用有り、頭を施す中に『菩薩本行經』に、月光王、頭を捨てて婆羅門に與へんと欲す。諸臣、王を諫むらく、王の身は是れ、我等一切の人の共有なり。一の妙寶を、衆人共に有するが如し、豈一人獨自に、用ふることを得んやと。王婆羅門に語らく『汝何んが屛處に索めざる。汝今少く去れ、我臣を安慰せん。』と。臣に語りて言はく『此れ我に於て宿怨有り。今若し償はずんば、更に何の時にか還し去らん。』と。後に臣を去け婆羅門を喚ぶ。『汝林中に於て我を待て。』と。後に至りて彼をして其頭を斷取せしむ。遂に王の髮を以て、樹に繫け、刀を下して之を斫るに、誤つて樹枝を斷る、婆羅門の『己に斬り竟んぬ。』と謂ひて、卽ち歡喜を生ず、諸天の力を以て、王の身首全き等を見せしめず。樹神、婆羅門を呵嘖す。婆羅門謂はく『眞に頭を斷ち、怨心解くことを得たり。』と、卽便ち還り去る。

手と足と合施するは、問ふ『若し菩薩、身の支節等を施して、一切の所求皆施すと爲ん

や、施さざる時有りと爲んや。「答ふ『瑜伽』三十九に云はく、「若し諸の菩薩、所行の施に於て意樂淸淨にして、無量の利衆生の事、正に現在前すること有るを見ては、設ひ來りて自身の支節を求むること有りとも、應に施與すべからず。彼菩薩は、施の意樂に於て、淸淨なることを、得せしめんが爲の故に、須らく現前の利衆生の事を捨てて、身分を施すべし。若し魔の天衆、幷に魔の所使の衆生來りて、菩薩の身分支節を乞ふにも、施與すべからず、其魔、惡心をもつて彼を恐れしめ、當に上品の罪を獲べきが故に。癡狂の人來りて、菩薩の身分支節を求むること有りとも、施與すべからず。彼自性心に住せざる故に、義利の爲に乞ひ求めざるが故に其心狂亂して、自在ならざるが故に容に種種の浮妄の言說有り、是故に身分を施すべからず。上の所說を除きて、來りて菩薩の身分支節を求めば、其所欲に隨ひて悉く皆施與すべし。是を菩薩は內に於て施すべく、及び施さずと名くるなり。

身を壞し血を出し、及び髓肉をも合施するは『智論』の第十四の中に、月光太子は、城を出でて癩人を見、癩人に問うて言はく、「治すべきや不や。」癩の言はく、「治すべし。但藥は得難し。」謂はく、「生れてより來、瞋らざる人の血髓を須ひて藥に和して之を塗れば卽ち差ゆ。」と。菩薩自ら惟ふに、生れてより來、瞋有ることを省ず。卽ち血髓を出して彼を救ひ、差えしめ、願くは法身を得て、其心病を差やさんと。此は肉を施す、是れ第四十なり。五藏の中の心は別に施し、腸腎肝肺の四藏は同施す。又『智論』の十四に、「施に三

【練指供養】梵網經の輕戒の中、燒身燒臂燒指の行を修する等をいふ。

【虔闍】一本に虔闍に作る。

種の施有り。飲食等を下施と爲し、衣服珍寶を中施と爲し、頭目支體等を上施と爲す」と、廣く釋迦の本行を引く。此三施の事、彼に說くが如し。

支節諸骨同じく施すに、皮を施すことは『智論』の十六の中に、毒龍は一日夜戒を受くるが如し。五色の皮を剝がれて、己を忍びて之を施す。又金剛脇鹿王とは、『菩薩本緣集經』の第四の中に、菩薩往世に、畜生の中に墮して、鹿身と爲るに、兩の脇は金色なり。背は瑠璃に似て、餘身は雜斑し、種別に名け難し。蹄は硨磲の如く、角は金精の如し。其身の莊嚴は七寶藏の如く、身色の光炎あること、日の初て出づるが如し。諸の群鹿の爲に饒益を作す。大暴河に於て、人の溺れんと欲するを見て、身を投げて之を救ふに、其人請ふことを得て後、遂に恩に背きて王に告ぐ。兵を將ゐて鹿を殺し、皮を取らんと欲す。王及び兵を將ゐて至り、鹿の兩臂を指示して俱に落す。王は恩に背くを知り、心を責して鹿を禮し、過を謝して去る。廣くは彼に說くが如し。手足指を施す中に、練指供養等有るが如く、亦是れ其類なり。

第五十に、連肉爪を施すとは、亦法を求めて施すなり。法の爲に火中に投ず。七仞とは、一仞は七尺なり、七七四十九尺の火坑なり。法の爲に苦を受くる者は、勇健王の如しとは、『菩薩本行經』に、過去に王有り、虔闍那謝梨と名く。一偈を求めんが爲に、身を剜きて千燈と爲す。後に帝釋の問に因り、誓を立てて心を矢し、遂に還りて平復す。所求の一偈に言はく、「帝者も皆盡き、高者も亦墮す。合會すれば離るること有り、生るる者は死有り」と、

【提婆達多品の說】釋迦の因位、王位を捨て法華を習學する因緣あり。

【三種の戒】攝律儀、攝善法、攝衆生戒。

【黃門】男形を具足せざるもの。

【半擇迦】梵に又般茶迦(Paṇḍaka)といふ、譯して黃門不男といひ、男根の不具者をいふ

王は偈を聞きて喜び、其所苦を忘れ、勅して國人を擧げて、皆書誦せしむ云云。法の爲に國を捨つる等は、法華提婆達多品の說等の如し。斷殺等を教ふるは、是れ無畏施なり。其命を施すを以ての故に、一切に過ぐるなり。『智論』に、「世間に貴ぶ所、各唯己が命なり、價直有ること無し」と。五戒等は、能殺に望めば是れ法施にして、所殺に望めば、是れ無畏なり。三種の戒とは、是れ律儀等の三聚戒なり。毀形の苦を救ふことも、亦是れ無畏施なり。『倶舍論』に、黃門、五百頭の牛の毀形を救ふの事有り。此善根力を以ての故に、男形具足す、是は其現報なり。文の中の肆の字は、是れ恣なり。

具足無上丈夫正法とは、『涅槃經』に依るに、「男女を問ふこと莫く、四相の義を具すれば、卽ち丈夫と名く。謂はく、自正と、他を正すと、能く問に隨ひて答へ、善く因緣の義を解するとなり。若し此四種の相の義を具せずんば、男子と曰ふと雖も、丈夫と名けず。女は以て上に反すれば、卽ち丈夫と名く」と。又云はく、「是女人と雖も、能く自身に佛性有りと信ずれば、卽ち是れ丈夫なり。若し男子有りて、自身の佛性を知らざる者は、我彼人を、猶是れ女人と說く」と。又、七丈夫趣とは、四說有り。一は世間に依る。『瑜伽』の中に依るに、丈夫に七義有り。一は長壽久住、二は妙色端嚴、三は無病少惱、四は僕に非ず女に非ず、半擇迦に非ず。五は智慧猛利、六は發言威肅、七は大宗業有り。此七法を具するを、名けて丈夫と爲す。亦趣有るが故に。二は小乘に依るに、亦七丈夫有り、卽ち七賢聖なり。一は隨信行の人、二は隨法行、三は信解脫、四は見到、五は身證、六は慧解脫、七は倶解

【三果】預流果、一來果、不還果。

【滅盡…身證と爲す】第三果の人、滅盡定を得る時、證得するは身にあるを身證不還ともいふ

脱なり。他を信じて得度するを、信行と名け、他に從ひて信ぜざるを、法行と名く。鈍根の三果は、是れ隨信行の所得なり。果を信じ縛を離るるを、信解脱と名く。利根の三果は、是れ隨法行の所至の故に、見到と名く。滅盡正受は、法の涅槃に似て、身と合するが故に、名けて身證と爲す。障に二種有り。一は煩惱障、二は解脱障なり。但煩惱障を離るるを、慧解脱と名け、二障並に除くを、倶解脱と名く。三は大乘に依るに「瑜伽」に七地有り。亦是れ賢聖丈夫の、遊履する所なるが故に、趣と名くるなり。一は種性地、二は勝解行地、三は淨勝意樂地、四は行正行地、五は決定地、六は決定行地、七は到究竟地なり。初の二は是れ地前、次の一は是れ初地、次の一は二地より第七に至り、次の一は第八地、次の一は第九地、末後は是れ第十地なり。及び佛地合説す。因果倶に究竟するを以てなり。四は「瓔珞本業」等に依るに、亦七位有り。一は十信、二は十住、三は十行、四は十廻向、五は十地、六は等覺、七は妙覺なり。佛の出世を歎するは、是れ法寶なり」上の普莊嚴童子讃佛の偈に、「聲は普く世界に遍すといふが如し。又「悲華」の中の如し、釋迦は往大悲菩薩の行を作し、諸國に遍じて、大聲をもって敎へて言はく、「如來出世したまふ。如來の出世は甚だ遇ふこと難しと爲す」等と。

世大地の中に、如來及び塔、菩薩知識並に父母等は、是れ恩田にして亦敬田なり。聖僧二乘は、是れ德田にして、亦敬田なり。餘の乞者是貧人等は、是れ悲田にして亦苦田なり。此等は皆能く、福を生ずるが故に、福田と名く、喩に從ひて名と爲す。又四句有り。自ら

是れ敬にして、悲に非ざる有り、佛等の如し。自ら是れ悲にして、敬に非ざる有り、貧苦の衆生等の如し。自ら亦悲亦敬なる有り、貧病羅漢等の如し。自ら悲に非ず敬に非ざる有り。上を除きて所餘等なり。『智論』の十四に云はく「若し隣愍施は、謂はく、貧窮下賤及び諸の畜生に於てし、二に恭敬施は、謂はく、佛及び法身の菩薩等に於てし、三は憐愍恭敬施は、謂はく、老病貧窮の阿羅漢辟支等に於てす。」問ふ、「悲敬の二田は、何者か勝ると爲す。」答ふ、「三義有り。一は若し境に約して、彼が現苦を救ふに就かば、心に約して大悲行を増し、利他行の本と爲す。即ち悲田を勝れたりと爲す。是故に『像法決疑經』の中に、乃至佛菩薩聲聞に施す衆生は、人の畜生に、一口の飲食を施すに如かず等と。二は若し境に約して、恩深く徳厚きに就かば、心に約して法を領し智を増し、自利の行源と爲す。即ち敬田を勝れたりと爲す。是故に『校量功德經』の中に、畜生に施すに、百倍等の校量を得」と。又『甚希有經』に「七寶等の供を以て、四洲に滿し、四果の聖人、及び滅度の後に、極廣塔を起すものに施すは、麪麥等の佛塔を造る、功德には如かず。乃至算數譬喩も比する等に非ず」と。又『大品』の中に「天帝の云はく、我舍利を供せんと欲せざるに非ず、但舍利は、般若の中より出づ。是故に寧ろ般若を供養せんとなり」と。三は若し二利齊均に約せば、悲智雙擧して、即ち二田平等なり。淨名に云ふが如し「一分を難勝如來に施し、一分を最下の乞人に施す。猶し如來福田の想の如し、分別する所無く、大悲に等し」とは、此謂なり。問ふ「等しく是を敬する中に、父母の恩田の如きは、聖僧の德

【龍女…如し】法華提婆品中、娑竭羅龍王女、年八歳なる者、寶珠を獻ずる因緣を指す。

田と勝劣云何ん。」答ふ、「『校量經』に、乃至百の羅漢を供養すとも、一の生身の父母を供養するに及ばずと云ふが如し。又『阿含經』の中に、父母を供養する功德は、一生補處の菩薩を、供養する功德と齊等なりと。」問ふ、「等しく是れ恩田なり。師僧と父母と勝劣云何ん。」答ふ、「『舍利弗問經』に、在家の人は、父母の恩は大なり、師僧の恩は次なり、出家の人は、師僧の恩は大なり、父母の恩は次なり、師は在家に於て、敎授の力劣れるを以て、出家は此に反す。又、師僧は法身を生育するを以て、法身は畢竟盡くること無し。父母の、生身を生育する恩は、七世に及ぶと。」問ふ、「等しく是れ德田なり、供養の差別なれば、勝劣あるは云何ん。」答ふ、「『三寶經』に、別に五百の羅漢を請するは、僧次の一の凡夫僧に如かずといふが如し。」問ふ、「施に三事有り。一は田、二は物、三は心なり、此三勝劣云何ん。」答ふ、「四句有り。一は自ら田は劣にして、心等は勝るゝ有り。[illegible]毘王の、尼乾が塔を讚歎し、塔遂に出現する等の如し。二に田勝れて心物は劣なり。童子の、土を佛鉢の中に施すが如し、戲弄の故に心は劣し。田勝るゝに由るが故に、轉輪王と作ることを得。三は田と心と勝れて、物は劣なり。『智論』第九の中の、老母、米潘を以て佛に施し、十五劫人天の福を受くることを得、後に辟支佛を得たるが如し。人有りて、佛の妄語なりと疑ふ。佛、舌を以て面に覆ひ、用て彼の疑を決して云はく、尼拘子の小きで、大樹を生ずる等といへるを引く。四に三事俱に勝る。龍女の、寶珠を獻じて、速に成佛する等の如し。今此中の菩薩は、悲心と悲智と圓容に約し。勝物の事施を施せば法界を窮め、勝田を帶ぶれば、凡聖

【舍利】梵語なり譯して骨身といふも、凡骨と區別せん爲に、梵音を存す。全身舍利は多寶佛、碎身舍利は釋迦なり。

盡く十方に施す。是故に此中の三事性盡く深くして底無く、三事殊特に勝れて比無く、三事廣大に遍じて崖無く、三事相融して、倶に無礙なり。』

又『倶舍論』に、問ふ『支提塔に施すに、此中に能受用無し、云何が福を成ずるや。』答ふ『福業に二種有り。一は棄捨類を爲す。若し捨物に由りて、此福業生ずることを得。二には受用、類を爲す。若し所捨の物を受用するに由りて、此福業生ず。若し支提を施すには、捨類の福有りて、受用類の福無し。類は是れ因の義なり。』問ふ『若し受用せずんば、云何が福有らん。』答ふ『若し福は要ず利他に由りて、福を成ずることを得ば、慈心三昧及び正見等を修する、皆應に福無かるべし。慈心等の觀中の如し、能く受用し及び他を利益すること無しと雖も、無量の福生ずること有り、自心從り起る。今此文の中に、前は佛に施すに、殿堂を造るは、受用して福を生じ、後に塔に施すは、是れ棄捨して福を生ずるなり。舍利とは正音は設利羅と名け、此には身と云ふ。謂はく、是れ如來、或は全身、或は碎身なり。塔とは、正音には窣堵波と名け、訛りて偸婆と名く。更に訛りて、單に塔と名くるなり。此に翻じて、歸宗の所と爲すなり。『長阿含經』に依るに、四人に應に塔を起すべし。一は佛、二は辟支、三は聲聞、四は輪王なりと。眞諦三藏は『十二因緣經』を引きて、八人に應に塔を起すべしと。一は如來露盤、八重已上なり、是れ佛塔なり。二は菩薩、七盤なり。三は緣覺、六盤なり。四は羅漢、五盤なり。五は那含、四盤なり。六は斯陀含、三盤なり。七は須陀洹、二盤なり。八は輪王、一盤なり。若し見て禮することを得ず、梁

塔に非ざるを以ての故に。又『僧祇律』に依るに、凡僧有りて亦塔を起す。謂はく、持律の法師、營事の比丘、德望の比丘には、應に塔を起すべし。既に聖人に非ざれば、總じて露盤無し。仍りて屏處に在らしむ。若し違へば罪を結ぶと。此等の文に准ずるに、今方に師の爲に塔を造り、廣く露盤を起すこと有らば、直現人に罪を得るのみに非ず、亦乃ち彼の先亡を累す、深く悲しむべし。又汎く塔を造ることを論ずるに、六意有り。一は人の勝るることを表す爲に。二は他をして淨信を生ぜしむるが爲に。三は心を標して在ること有らしめ、四は供養して福を生ぜしめ、五は報恩行の畢と爲す。六は福を生じて罪を滅す。問ふ、佛塔を造るが如き、幾の福を得る。答ふ、二有り。一は近く梵福を得。『俱舍』の中に依るに梵福を得るに七種有り。一は此地は未だ支提を造らず。中に於て作る。二は僧伽藍を立つ、三は僧巳に散ずるを能く和す、四は四無量を修す、五は父母の死命に代る、六は自ら出家し人を敎へて出家せしむ。七は法輪を建立す。若し人、上の七業の中に於て、隨ひて一業を作さば、梵光音天の、喜樂の報を受くることと、一劫なるが如し。其梵福の量とは、諸の衆生の共業に感ぜる、一三千大千世界の業を用て、一梵福の量と爲す。二は、遠く苦際を盡し、生死の苦を脫することを得るが故に『無上依經』に、佛、舍利を供すること、芥子の如し等と、皆悉く究竟して生死の苦を脫るることを得。『大悲經』には、亦同じく僮僕を施すは、其をして勞に代らしむ。又自身を捨て、彼が爲に給使する、是れ同事の攝なり。是れ自身を以て、塔と作し蓋と作す。如來を瞻仰して孝を致し供養す、

【又身を云云】第七の十事を釋す。

是を第六十門と爲すなり。

又、身を衆生に施して奴僕と爲る。是れ躬ら勞苦に代るなり。又、自身を以て諸佛に給して奉じ、報恩の行を爲す等なり。國土及び王位を施すとは、問ふ、「惡人有りて、此王位を乞ひ、衆生を惱害せんと欲するが如し、豈施與することを得んや。」答ふ、「菩薩は此を見て亦施與せず。『瑜伽』の三十九の如し「若し上品は衆生を逼惱し、暴惡の業を行じて、來りて、王位を求むるもの有らんも、終に施與せず」と。施嚴飾大城とは、前は通じて國土を施し、此文は別して、王の所都の處を施す。大城は自ら居し、餘の小城に異るが故なり。寶女は即ち侍人爲り、是れ二物合說するに非ず。問ふ『此寶女等は、是れ化作と爲んや、是れ實報と爲んや。」答ふ、「是れ實報なり。經に云はく、「皆是れ菩薩の淨業の果報にして、用て布施す」と。又下の法界品の中に、皆是れ往昔、善根の願を同うするなり、妙德女等の如きが故に若能納我甘心受此苦と云ふ。又寶華女等の如し、是故に之を施す、皆悔を生ぜず。問ふ、「『瑜伽』に云はく、「若し衆生有り、來りて種種能く戲樂を引き、能く無義を引き所施の物を求めば、施與すべからず」と。今此寶女、既に彼に貪染を生ず、云何が施與するや。」答ふ、「此中に三義有るが故に、是故に之を施す。一は菩薩、彼に益有りて染無きを觀じ、方に乃ち施與す。若し染の過有るときは、則ち之を施さず。二は此女既に實に是れ、菩薩同行の眷屬なり。是故に前の人をして施して、貪染を生ぜしめず。三は此女能く法門を以て、彼を利益すること有り、是故に之を施す。若し上の三義に反ずれば、則ち施すべ

からず。『攝論』の中に、利益有りて染汚有り、利益無くして染汚無し、染汚有りて利益無し。此三は菩薩行ぜず。利有りて染汚無し、菩薩乃ち行ず。『瑜伽』は前の三に約し、此文は後の一に攝るが故に、相違せざるなり。

妻妾男女を施す、此亦合論す。如須達拏とは、此には善愛と云ひ、或は好愛と云ふ。『太子經』に、具に、妻子を施す等を說くが如し。現莊嚴王は、即ち『大王莊嚴經』の中に、妻子を施す等と說く。又『菩薩本緣經』の中に、一切施王の子は、王の上戰の象を施して、怨國の人に與ふ。王臣同じく瞋りて、王子を雪山に擯く。山中に二子を施し已りて、天帝化し來り、從ひて妾を乞ひ、還王子より寄ることを得。後に更に眼を乞ふ、王子拜せんと欲す。乞者之を止め、且に還汝より寄れ、我即ち取るべし、汝更に人に施すを得ざれと。王子の言はく、我今何ぞ兩物の寄を受くるを得んと。廣くは彼に說くが如し。

問ふ「此中の所施の妻子等は、是れ實報と爲ん、是れ化作と爲ん。又復乞者、亦是れ實とや爲ん、亦是れ化とや爲ん。」答ふ「此に三義有り。一は上品に約するに、但に實にして施す。一切施王の、兒を施して、婆羅門に與ふるが如し。婆羅門鞭打して將ゐ去る。一樹の下に至り、更に之を打たんと欲す。樹神手をもつて、婆羅門に擬す。婆羅門即ち倒る。神彼命を斷じ、王子を奪ひ、送りて還さんと欲す。王子、神に告げて請ふ。之を害すること勿れ。我若し再び還らば、我父王をして、檀行を足らざらしめ、即ち不孝の子と爲らんと。神遂に之を放つ。解して云はく、此に准するに、妻兒亦是れ同じく菩薩の行を修する

【我今…得ん】經に「我今一身なり、云何が一日に連ねて二寄を受けん」云云とあり。

【檀行】布施の行

人なり。尙須らく自ら身命を捨つべし、豈苦を辭して退くこと有らんや。二に中品に約するに、互に實化有りて、亦布施を行ず。『賢愚經』の如し。佛、昔、王と爲る、毘沙門有り、夜叉と作りて詣り、王に從ひて妻子を索め食す。食し訖りて爲に偈を說きて云はく、一切の行は無常なり。生者は皆苦有り。五陰は空無相にして、我、我所有ること無しと。此偈を說き已りて、本形に復し、妻子猶存す。此則ち妻子は是れ實なり、乞者は是れ化なり。『淨名經』の中は、多くは是れ、不思議解脫に住する菩薩なり、餘の小菩薩を調練して、其行德を增せんが爲の故に、此乞人と作り、此菩薩の妻子の愛を破し盡さんと欲す。是故に前に對して、之を食する人を示現す。『攝論』の中に、毘荷陀王は兒を捨てて婆羅門に與ふ、是れ他を逼惱する事なり。此兒は是れ化作なり、是故に惱無し。解して云はく、此乞者は是れ實、兒は是れ化なり。菩薩方便を以て、婆羅門の願を滿し、怨心をして盡さしむるが爲に、是化を作すなり。又菩薩化して女色と爲りて、貪愛の者に施すが如きは、調して欲事を離れしむるなり。三は下品に約するに、俱に實に施さず。『瑜伽』の三十九に、「菩薩は、自らの妻子と奴婢と、僕使と親戚と眷屬とに於て、若し其に、正言を以て曉喩して、其をして歡喜せしめずんば、終に強逼して、其をして憂惱せしめ、來り求むる者に施さず。復先づ正言を以て曉喩して其をして歡喜せしめ、樂欲の心を生ずと雖も、而も怨家惡友、藥叉羅刹、凶暴の業の者に施與せず。妻子の形容軟弱なる、族姓の男女を以て、來り求むる者に施して、奴婢と作さしめず」と。解して云はく、此は軟根の初心に據りて、

【般遮于瑟】（Pañcavarsika）五年毎に設くる大齋會なり一切の人を容受して遮遣せざれば義譯して無遮會ともいふ。

【第二大段云云】既に七十行を明す下終りて、次に菩薩の生喜迴向の文を釋す。

說くなり。又若し兩ながら倶に是れ化なるときは、則ち互に無義利の故に、此句無けん。

家宅を施すは、衆をして住處を得て喜ばしむ。

園林を施すは遊びて、歡喜することを得せしむ。設大施會とは、是れ無遮の大會なり。種種皆施す。謂はく、物を限らず時を局らず、衆を遮らず、前も無く後も無く、等しく一切を施すが故なり。下の香牙園處に、大會を設くる等の如し。梵には般遮于瑟と名く。此れ無遮の大會なり。施一切資生具者とは、是れ第七十門なり。別に諸門を擧くこと、盡すべからざるを以ての故に、是故に末後に總じて、一切資生の具に就きて、而も大施を成す。

上來大門に隨ふに七十有り。若し更に細論せば、所施の物の中、種種同じからず。光統師に依れば、一百二十有り。次に廣ずれば八萬四千有り。何となれば、謂はく、百二十事の中に、皆十善業有りて、施を行ずるが故に、一千二百と成る。七施の法を以て、之に乘ずれば、八千四百と成る。一一の行の中に、十種迴向を具するが故に、八萬四千の施行の門と成る。七施の法とは、隨相に六有り、入理に復一ありて、即ち七と爲るなり。隨相に六とは、心に三種有り、即ち三時喜等なり。事に三種有り、即ち施者と受者と、及び財物等なり。入理に三有り。謂はく、三事空を照す、一寂の理なり。又釋す。七聖財を以て、之に乘ずるも亦得たり。一の施行に八萬四千有るが如く、餘の一一の行、皆亦是の如し。

若し廣說の行相は、無量にして、說くべからず。

第二大段に、此摩訶薩以如是の下は、總じて所爲を結す。生喜迴向の、中に於て、四有

り。初には行の所爲を結す。二に行來求者の下は、行成じて、失無きことを顯す。三に菩薩爾時の下は、度行失無くして大喜を生ず。四に摩訶薩善根の下は、所成の善行を以て、用ひて將に廻向せんとす。初の中に二あり。先に行に約して意を結す。二に以大悲の下は、心に約して意を顯す。「瑜伽」の三十九に、又「諸の菩薩、「諸の有怨に於ては、慈意樂を以て、慧施を行ず。諸の有苦に於ては、悲意樂を以て、慧施を行ず。諸の有德に於ては、喜意樂を以て、慧施を行ず。諸の有恩に於ては、親善同意して、捨意樂を以て、慧施を行ず。當に知るべし、亦菩薩の巧慧、布施を行ずと名く」と。建立如來論とは、上に云はく、諸佛の本行を受持し、諸佛の本行を顯現すと。行の如く能く說くが故に、立論と云ふ。誓言を立つるに由りて、生をして佛善を斷ぜざらしむるなり。下は行を成じて、失無きことを顯す中に、二あり。初に三事行を成じて、失無きことを明す。中に於て初に、乞者の意に稱ひて、悕意の失を離るることを明す。二に施心悔ゆる無くして、權念の失を離る。三に捨一切等は、施物の廣多なるを明して、匱乏の失を離る。三に於諸衆生の下は重ねて釋成す。初は上の施心を釋す。視ること一子の如くなるは悲心の深きなり。是我善知識とは、其恩を荷ふなり。初の心に由るが故に、大悲を長養す。後の心に由るが故に、喜心を長養す。但に上の二心に由りて、悲喜をして壞せざらしむ。此悲喜に依りて、廣く大施心を行ずるなり。下は上を釋す。物豐に求めを遂げ、意に稱ひて欣悅するを以てなり。問うて云はく、何んが菩薩、乞ふを見て喜を生じ、財に於て染無きや。答ふ、施行熟す

るを以ての故に、慳障盡くるが故に。』『何者か慳障なる。』『瑜伽』三十九に云はく、又諸の菩薩は慳障及び對治に於て、實の如く了知す。慳障に四有り。一は先より未だ串習せず。二は施物尠闕なり。三は上妙の物に耽著す。四は當來の財果を具足するを欣樂す。一は若し諸の菩薩は、現に種種の施すべき財物有らんに、乞者現前すれども、而も施心發らずんば、即ち正慧を以て、我施に於て、先より未だ串習せざる過失ありと知りて、決定して我先世より施に於て、未だ曾て串習せざれば、今財有りて乞者現前すれども、而も施心發らざることを致すと知る。若し今世に於て施さずんば、復來世も定んで施行に背く。是故に菩薩、力を勵して、思擇して、而も慧施を行ず。二は乞者現前すれども、財物少きに由りて、施心發らずんば、正慧を以て通達せよ。我は我宿業に、過失有るに由るが故に、或は現世に、他に繋屬するに由るが故に、我をして現に飢渴等の苦を受けしめて、一切衆生を饒益することを能はず。設令施を行じて乃し殞歿するに至れども、猶最勝と爲す。況んや菜葉の、以て活命すべき有るをやと。是故に苦を忍びて、而も慧施を行ず。三は、乞者現前するに、施すべき物の妙なるに由りて、施心發らずんば、即ち正慧を以て通達せよ。是れ我に耽著の過失あり、我今苦を施すに、妄りに樂想を生ず。此顚倒に由りて、當來の苦を生ぜんと。是故に菩薩、力を勵して施を行ず。四は、若し菩薩施し已りて、當來の大財利の果を欣樂して、無上菩提を求めずんば、即ち正慧等を以て、正しく是れ邪果の果の、過失なりと通達し、彼諸行を觀ずるに、皆念に滅し、受用する所の果、速疾に滅盡し、

速疾に離散すと。是故に彼邪果を樂むことを見るの施行を滅して、無上菩提に廻向す。
問ふ、『此經の中に准ずるに、諸の大菩薩の財寶は無盡にして、悲心も復廣し、如何が世間猶貧苦の衆生の類有るや。』答ふ、『攝論』の偈に依るに、業障なると、善を礙すると、見ると、現ずると、及び惡憎すると、他を害せんことを厭ふ、彼衆生には、菩薩の施を感ぜしめずと。此に五義有り。一は、菩薩、衆生貧なるときは、惡業を作らざるあり、富むときは即ち惡業を作すと見る。二は、衆生貧なるときは、福を修すること有り、富むときは即ち善を障ふ。三は、衆生貧なるときは、即ち生死を厭ふ心現前す、富むときは、即ち厭はざるあり。四は衆生貧なるときは即ち慈善なり、富むときは即ち他人を憎惡す。五は、衆生貧なるときは、即ち衆生の命を害する能はず、富むときは即ち他の命を損害す。菩薩は、此五種の義を見るに由りて、衆生をして百千萬劫、常に貧窮にして、惡業を作し生死に沈著せざらしむ。衆生をして、一刹那に於て富ましめ、放逸にして惡を作し、四惡趣に墮せしめず。是故に『瑜伽』の中に、諸の有情に於て、安樂有りて利益無きは、菩薩も亦作さずと。第三慶喜の文に二あり。初に勝喜、神を資く。『丈夫行論』の中に、菩薩の喜樂は、世間及び彼二乘の、涅槃の樂に過ぐと。此中には但、世間に望めて超過す。後に摩訶薩の下は、喜に因りて心を增す。五句は知んぬべし。第四善根廻向の中に、十句五對有り。一は苦の因果を離れしめ、二は樂の因果を得せしむ。上の二對は各先は因、後は果なり。三は境と心と、四は心と行と、五は分と滿となり。上來、廣く行相を顯し、即ち衆

【自下は云云】第三に實際迴向を明す文の釋。經の「菩薩摩訶薩は此善根を以て迴向す」等の下。

生と菩提とに迴向し竟んぬ。

自下は第三に、行極りて眞に契ふことを明す。即ち實際迴向なり。又前は行の廣大なることを明し、此下は行の甚深なるを彰す。中に於て二有り。初は行心無念なることを顯し、總じて迴向して縛著無きことを明す。二に摩訶薩の下は、境に於て無染なることを明し、別して迴向して縛著無きことを顯す。前の中に、是の如く迴向する時、前の行を牒す。身等に於て縛著せずとは、總じて能迴向の三業の、無念にして迴向を成ずることを明す。下は別して無念の相を顯す。中に於て二あり。初には我法等の想無きことを明し、後には業報等の念無きことを明す。前の中に初の九句は、無我の想を明し、禪頭とは、古人の云はく、此には見一切生、有形有體と名く。今更に三藏法師に問ふに、云はく、此には翻じて生者と名くと。二に無有想の下は、十句五對にして無法の想を明す。一は有無の法想を離る。二は三世流轉の法想を離る。三は常無常の想を離る。四は三界非三界の想を離る。五は亦想を離れ無想を離る。上は能緣の自體、無想なることを明す。下は能緣の業用、無念なることを明す。謂はく、想念の爲に、纏されざるを、無縛著と名く。遊空無礙にして、迴向を成ずるが故に、無著解脫心迴向と云ふ。中に於て思、及び思の標は、意業に約す。因及び業報は、身語業に約す。又業は假業に約し、思は業體に約す。是の如く無心無心にして、前の如きの大施迴向を作す。自下は境に於て、染無きことを明し、別して迴向を明す。中に於て四あり。初には別して無著を明す。二は摩訶薩若於の下は、別して無縛を明

す。三は若於此法而不縛の下は、別して解脱心を明す。四は摩訶薩以此一切善根の下は、別して廻向を明す。初の中に、如是廻向時とは、將に別釋せんと欲するに、前に作る所の大廻向の時の如く、常に縁念すること無し。是故に、今更に重ねて、總じて之を牒す。下は別して無著を顯す。中に於て、内は是れ六根、外は是れ六塵、縁は是れ能縁、境は是れ所縁なり、餘は知んぬべし。二は無縛の中に、先に前を牒す。無著とは、前に依りて後を起すなり。謂はく、心の境に染するを、名けて著と爲し、境の心を纏ふを、縛と爲す。楞伽に云はく、心は境界を縛すと。覺想智隨轉とは、此謂なり。境に貪著すること、深きに由りてなり。是故に心は境に縛せられて、自在なることを得ず、今は皆無し。五蘊の上に於て、各三義有り。一には不縛色とは、是は總じて無縛を顯す。不縛色取とは、別して凡夫の、五蘊を執取するに約す。不縛色滅とは、別して聖人の無取五蘊に約す。又不縛取とは、有に縛せられざるなり。不縛滅とは、無に縛せられざるなり。倶に著無く、所縛を爲さず。下は解脱心を明す。中に於て三あり。初に標なり。謂はく、前を牒して、後に起す。於此法とは、上の五蘊有無の法に於てす。本より彼法、本自ら縛無く、性本、解脱す。今に始めて脱するに非ずと、了するに由るが故に、亦無有解脱と云ふ。次に徴、下は釋なり。先に別して、前の有法の中に於て、性脱の所由を釋す。謂はく、此有法は即ち生滅等無き故に、性は自ら脱す。後に菩薩如是見法の下は、別して前の無法の中に於て、性脱の所由を釋す。見法則非法言説故は、前の有法は、即ち性自ら無きを牒す。非法

【四】本文を釋する中、第三に、行所成の益を辨ずる文の下。經の「菩薩摩訶薩、若し能く此善根」等を釋す。

爲法とは後を起す、無に於て而も亦性離す。無に住せざるを以ての故に、有を礙へざるなり。前は則ち有は有ならざるが故に、有に於て解脱す。此は則ち無は無ならざるが故に、無に於て解脱す。業を壞せざるに由るが故に、修行を具す。空に滯らざるが故に、二乘同じからず。是故に退せずして、一切智を求む、餘の句は見つべし。四は、別して迴向を釋す。先は總なり。謂はく、種智に向ふ。敎化衆生の下は、別して顯す。先に問起し、後は答顯す、十句有り。皆是れ衆生を敎化して、此等の事を成ずるが故に、迴向と名く、知んぬべし。上來實際迴向竟んぬ。總じて是れ大段第二に、身に依りて行を起すこと竟んぬ。

(四)自下は第三に、行所成の益を辨ず。中に於て二有り。初は正しく迴向を成ずる時、因果に順同する益なり。句別に九有り。初の二は佛寶法寶に順同す。次の二は因智果智に同ず、次の二は隨事心境に同ず。謂はく、義は是れ境の義なり。次の二は入理心境に同ず、後の一は淸淨法界に順同す。二に自下迴向を明し已りて、後に自他をして、法に入れしむる益なり。中に於て亦九句あり。初の句は利他の益、餘の八は自行の益なり。謂はく、法に循ひて而も了ずるが故に、違失無し。又眞空をも捨てず、緣有にも違はず、空有無礙なるが故に、法力具足と云ふなり。佛子の下は名を結す、上來位行竟んぬ。自下は第二に當位所成の果を明す。句別に十有り。一には、外に佛護を蒙り、二は内に堅法を得、三は上に佛智を修す。四は善く所詮を解す。五は理性を照達す。六は堅固の善を得。七は所聞を滿足す。八は行法、堅に順じて、不可壞なることを得。九は堅固の願を得。十は法に於

【五】以下、偈頌を釋す。

て自在なり。又此十種は、前の行德に望めて、解釋すること知んぬべし。

第二大段、偈頌の中に二あり。先に偈を說くの因緣を序し、後は正しく偈を顯す。前の中に、佛力を承けて、說を起すの所依を明す。下は、依力所成を辨ずるに、十句有り。一は十方を觀じて、十方同じく說くことを顯す。二は大衆を觀じて、說の所被を明す。三は法界を觀じて、所說の義を明す。四は深入等は、能說の敎を顯す。五には修無量等は、說を起すの心を顯す。六には覺悟等は、開覺する說の智を明す。七には入佛功德は、佛の說く德を得ることを明す。八には逮得等は、佛の說く身を得ることを明す。九に分別等は、根を了じ時に應ずることを明す。十には隨順法身等は、眞に依りて應を起し、應起りて眞に順ずることを明す。是故に說に卽して、而も常に不說なり。正しく偈頌の中に、四句あり。願を成ずるに四十一偈有り。但位行を頌して、位果を頌せず。中に於て三に分つ。初に五偈は、上の行所依の身を頌す。二に菩薩具行布施の下に、三十偈半有り。上の依身所起の行を頌す。後に隨順思惟の下の五偈半は、上の行所成の德を頌す。第二の所起の行の中に就て、初の十九偈は上の、略して行事を標し、及び廣く行相を辨ずることを頌す。卽ち是れ衆生及び菩提に廻向す。七十門の施巧に於て、略して盡く說かす。菩薩觀察一切法の下の十一偈半は、上の行極契眞を頌す、卽ち實際廻向なり。中に於て初の二偈は、上の總じて無念廻向を明すことを頌す。次に心不分別の下の七偈半は、別して上の有に於て著せずして、而も性自ら解脫することを頌す。後に雖復推求の下の二偈は、別して上

【六】十廻向の第七、等心隨順一切衆生廻向を明す下の初に所修の善根を明せる文を釋す。

【一】[illegible]

【六】[illegible]

の、無に於て住せずして、而も自ら解脱するを頌す。餘は見るべからず。

(六)第七の等心隨順一切衆生廻向は、長行の内に於て亦二有り。初は位行、後は位果なり。初の中に亦三あり。謂はく、標と釋と結なり。釋の中に就きて三を分つ。初には、所修の行相を擧ぐることを明す。二には摩訶薩離垢清淨菩提心の下は、攝して將に廻向せんとす。三には摩訶薩行如是廻向勝出の下は廻所成の益を明す。初の中に二あり。初に所修の善根を明し、二に摩訶薩行如是等の下は、修に因りて、德を成ずることを明す。前には行體を明し、後には行用を明す。前の中の三十句の、初の十は、直に善の體を說き、次の十は境に約して、以て善根を明し、後の十は十度の行に約して、以て善根を明す。光統の云はく、初の十は行、自の中を出で、次の十は起すこと緣從り發るなり。後の十は功成ずること已に在り。初の中の增長三品の善とは、二義有り。一は三品各別なり。各別に增長して、倶に廣からしむる等なり。二は一の善根に於て、始めて修して薰じ、初に種を成ずる時を、下品を增すと名け。種從り現を生じて、更に增長せしむるを、中品を增すと名け、重ねて種を熏成するを、上品を增すと名く。又釋すらく、隨事の行を起すを、下品を增すと名け、行は理に入りて成ぜしむるを、中品を增すと名け、理に依りて行を起して、理に稱ひて廣大ならしむるを、上品を增すと名く。無量等の下は、皆是れ上品の善の中の差別なり。四は行德一に非ざれば、無量善と名く。五は各法界に等しきを、名けて廣善と爲す。六は緣に隨ひて同じからざるを、種種善と名く。七は體淨くして濁り

【下は第二に云云】第二の「乃至隨所已是の如き等の德生」等の下。

難し。八は妙用思ひ難し。九は數は窮むべからず。十には際畔を絶す。下の十は、境に約する中に、一には因を佛境に求めて、所生得の善なり。二は法境を求むるに因る。三は僧行を學するに因る。四は善友を求むるに因る。上の四境に依りて、善根を生起す。五は業生を縁じて境と爲して、悲善根を生ず。六は悲智をして相導かしむるを、方便境と名く。七は倶に開して眞に契ふを、復妙境と名く。八は自利の善を内と名く。九は化他の善を外と名く。十は、總じて多門を結するを、無量功德と名く。各〻善根を生ずるが故に。後の十は、十度の行境、所生の善根に約す。初の六は知んぬべし。七には、方便して、巧に衆生の心器を知る。八は大願をもつて、諸〻の淨功德を積集す。九は念力度の業用、十は大智普被なり。

下は第二に、所成の德を明す。中に、乃至隨所已とは、前を牒して後を起すなり。則能の下は、正しく所成を明す、中に於て二あり。先に總じて德の圓備を明し、後に普能の下は、作業の差別を明す。初の中に二あり。先に自分の德を成ずるに、二有り。自利の中の初は忍、二に善意等は戒、三に永離等は慧なり。堅固等は、三行の、法器を成ずることを結す。普密等は是れ利他なり。後に常爲の下は、勝進の德を成ずる中に、先に佛の守護に由りて善を生じ、願を滿じて後に、深く佛を樂ふに由りて、心佛に等しきことを得。二には、作業等の中に二あり。先に上は佛を供する業なり。謂はく、供行、理に順ずるなり。不求等は過を離るるなり。二に一切善根の下は、下生を救ふ業を明す。中に於て二あり。初に

【七】以下は、菩提心收攝の善根を說きて、廻向する一段の釋なり。經の「菩薩摩訶薩は離垢清淨」等の下。

【自下は第二に云云】經の「復是念を作く、此の如きの善根」等の次の下。

化他の德備る。二に於生死中の下は、化他の行具することを成ず。中に於て三あり。初は生死を出でて、菩提の大智に安ぜしむ。二に普示の下は、塵染を捨てて、大淨功德を得せしむ。三に令一切衆生の下は、總じて所益を結す。上來は、廻する所の行を明し竟んぬ。

(七)自下は第二に、攝して將に廻向せんとす。中に於て四あり。初は菩提心に約して、善根を收攝す。二に摩訶薩復作是念如此善根若有果報の下は、前の善根を以て、廻して行具することを成ず。謂はく、之を修行せしむる時、諸緣闕けずして、本期の願に稱ひて、大行を成ず。三に以此善根念念廻向の下は、此れ行に依りて、起る所の善根を以て、衆生に廻向して、菩提を得せしむ。四に修行如是廻向時不著業の下は、行の檢まりて眞に契ひ、行に所行無く、廻に所廻無きことを明す。前は則ち衆生と菩提の廻向にして、此は則ち實際廻向なり。又、前は則ち智を以て悲に從へて、廣大廻向を成じ、後は則ち悲を以て智に從へて、甚深廻向を成ず。初の中に先に、大心所攝の善根を標擧す。作是念の下は、所攝善根の相を顯す。中に於て十句あり。前の五は心體に約して善を起し、後の五は心の業用に約して善を成ず。前の菩提心の中に、初の一は總、後の四は別なり。一は自分の始、二は自分の終、三は勝進の始、四は勝進の終なり。業用の中に、初の一は、此心大悲を以て本と爲し、物を愍みて善を起す。次の二は衆生の爲の故に、佛果の智を求む。一は始、二は終、後の二は彼因を集起す。一は行廣くして法界に稱ふが故に。二は行堅くして退せざるが故に。自下は第二に、前の善根を廻して、以て行具することを成ず。中に於て、先づ總

じて要期を舉ぐ。謂はく、此菩提心所攝の善根は、若し決定して、果有りて虛からずんば、我當に未來劫を盡して、菩薩の行を行じて、衆生を捨てず等と。此に二意有り。一は此善根を以て、我が意願の如く、生を益する果を成ずるが故に。二は此善根所得の依果を以て、我をして修行して、衆生を攝せしむる時、缺闕くる所無し。是故に我能く未來際を盡して、菩薩の行を修す。此文は後の意を取る。二に令無數世界の下は、別して所成の行、具することを顯す。中に於て二あり。初は廻して資財施行を成じ、二に復次の下は、生財施行を成ぜしむ。問ふ、何んが廻向して、餘行を成ぜしめずして、而も亦此慧施の行を成ずるや。答ふ、此中の菩薩は、衆生を益する爲に、菩薩の行を行ず。此に由りて施行に具に三義有り。一は財等は、現に益して、苦を離るることを得せしむ。二は施に因りて攝して、法に入りて行を成ぜしむ。三は所生の善を以て、廻して衆生に施す。餘行は具せざる故に、唯此のみなり。初の資財施の中に、四有り。一は資財廣し、十一事有るが故に。二は乞者の廣きことを明す、一切衆生の故に。三は施心廣きことを明す。四は施時廣し、未來を盡すが故に。施心の中に就きて、十一有り。初は、怨に於て簡ばざるを平等心と名く。二は、親に於て著せざるを、無偏心と名く。三は、世名の爲にせず。四は、情樂強きに非ざるが故に、無悩と名く。五は、施し已りて、慶を稱する故に、中悔無し。六は、菩提を注想す。七は、無明を雜へざる故に、清淨と云ふ。八は、情に異念無きが故に、一向と云ふ。九は、大悲現前す。十は、調して有爲を離る。十一は、作して無爲に入る。第二

【第三に衆生云云】以下、衆生廻向を明す一段の釋なり。經の「菩薩摩訶薩は、此善根を以て念念」等の下。

に生財施の中に三あり。初の財廣に亦十事有り。婆羅馬王とは、三藏の說かく、正音は、具には婆羅訶と云ひ、此には雲馬と名く。謂はく、空雲に遊行して、迅疾に躡ふること無し、因りて以て名と爲すと。又云はく、大海の內に一の洲有り、跋陀羅と名く。此馬常に其中に居す、每恆に聲を出して云はく、誰か海を出でんと欲する、我當に之を送るべしと。此れ是龍馬なるべし。然も慈心有り、或は菩薩の化する所なり。二に、修習の下は、時處に約し、人に對して、施行廣大なるを明す。三に、摩訶薩復作是念の下は、施心の純淨なるを明す、十四種の心有り。一は、施因に著せず。二は、施果を求めず。三は、空に遊びて繫を離る。四は、寬遍普く被る。五は、理と相應す。上の五は是れ入理の心なり。六は、巧に施して生を攝す。七は、等く施して偏無し。八は、身命を計らず。九は、慳結已に破るるを、善調心と名く。十は、定心にして物を利す。十一には、生に於て慳まず。上の六は、是れ攝生の心なり。後の三は是れ求果の心なり。十二には、果を求めて捨てざるを、安住等と名く。十三には、觀解して法を照す。十四には、佛果に趣入す。又前の五は、有爲の心を離れ、次の六は、衆生の心を攝し、後の三は、佛果の心を求む。又前の五は、煩惱を護る。次の六は二乘の狹心を護る。後の三は二乘の小心を護る。又前の五は是れ直心、次の六は大悲心、後の三は是れ深心なり。上來は廻成行具竟んぬ。

第三に衆生に廻向して、菩提を得せしむ、此れ即ち是れ捨施なり。「智論」の十四に云はく、「施に二種有り。一は世間の人は財を捨てて捨施すること能はず。二は出世間の人は、

【自下は第四に云云】以下は實際廻

能く財を捨て、能く捨施す」と。此中の文長くして分齊見難し。但一一の句各是れ一行なり。亦別に分つべからず。今且く遠法師に依りて、分ちて二分と爲す。初は慈心廻向を明す。二に如是菩薩憐愍已下は、悲心廻向を明す。前の中に、總じて一百十七句有りて、二に分つ。初の八十句は、衆生に廻向して、因を修して果に趣かしむ。二に令衆生詣諸佛所聞法の下の三十七句は、衆生に廻向して因圓果滿ならしむ。又は前は自分を明し、後は勝進を明すべし。前の中に六行り。初は、善趣の賢首位の行を修せしむ。二は、令得不可壞正直之心の下は、種性位の中の修行を成ぜしむ。三は、令具足菩薩無量清淨の下は、解行位の中の、修行を成ぜしむ。四は、令成就清淨平等施の下は、十地位の中に、十度等の行を修せしむ。五は、令修平等行具諸善の下は、等覺位の中に於て、修行せしむ。六は、令顯現一切嚴淨の下は、佛果を成ぜしむる行等なり。二に勝進行にして、因圓果滿の中に四有り。一は衆生をして、種性位に於て、行因圓滿ならしむ。二は令於諸法中得離虛妄の下は、解行位の中の、因行圓滿ならしむ。三は令悉得菩薩の下は、十地位の中の、因行圓滿ならしむ。四は令得薩婆若成等の下は、成佛果滿を明す。上來、慈心廻向竟はんぬ。第二に悲心廻向の中に、三有り。初には惑業を離れて、苦行を成ぜしむ。二に令衆生安住の下は、喧を離れて靜を得て、平等心の行を成ぜしむ。二に以如是等の下は、總じて廻向利益の相を結すること、知んぬべし。上來、廣大廻向竟んぬ。

自下は第四に甚深廻向を明す。卽ち實際廻向なり。中に於て二あり。初に事を會して理

向を明す下の釋なり。經の「菩薩摩訶薩は、是の如き廻向を修行」等の文

【八】以下は第三に廻向の益を明す文を釋す。經の「菩薩……一切を勝出し」等の下。

に同じ、廻は即ち無廻なることを明す。後に摩訶薩如是廻時作如是の下は、理に依りて事を起し、無廻にして廻を作すことを明す。又、初は即ち有を離れ、後は即ち無を離る。又、初は是れ自行、如に同じ、後は則ち他をして、亦同ならしむ。又、初は正しく是れ實際廻向、後は是れ廻向の所爲なり。前の中に、修行如是廻向時とは、前の廣大を牒す。下は甚深を顯すに、十句五對有り。一は己が業報に約す、因果の一對なり。二は自の正報に約す、身財の一對なり。三は依報に約す、方處の一對なり。四は所化の衆生に約す、有無の一對なり。五は所廻の行法に約す、總別の一對なり。皆不著と云ふは、無分別なり。皆廻向と云ふは、上の廣大廻向の時を明す。常に是の如く著せざれば、恆に後廻向行事を作すが故に、亦彼廻向無きにあらず。下は修廻の所爲を明す。如是廻時とは、前の甚深の廻を牒す。下は所爲を顯すに五句有り。初の二句は標、次の二句は釋、後の一は位を歎ず。初の中に、一は佛智は是れ菩提なり。二に、淨心は是れ涅槃なり。三は、初の句を釋し、四は、心淨を釋す。佛家は是れ位なり。上來、廻向の行を明し竟んぬ。

(八)自下は大段第三に、廻向の益を明す。即ち是れ此行所成の廣大の德なり。中に於て四有り。一には、因德の廣大なることを成ず。二には摩訶薩作行時成就の下は、成果の德を明し、三には摩訶薩如是行廻不違の下は、違を會する自在の德を成ずることを明す。四には摩訶薩得平等業の下は、違盡きて平等の德を得ることを明す。又初の一は、是れ現成の德、第二は是れ當成の德、此二は因果の一對なり。三は是れ相を會し、四は是れ

【初の二】初に勝出無壞讃歎不盡の二を明す文。
【下の八】經の「普く一切の諸の菩薩の行を行じ」等以下の文。
【自下は第二云云】經の「菩薩摩訶薩は、菩薩の行」等の下。

實を得。此二は攝法の一對なり。初の中に十句あり。初の二は總じて歎じて勝を顯す。下の八は別して勝相を顯す。一には、行廣の勝、二には、以少の下は普見の勝、三には、悉得の下は持辯の勝、四は於念念の下は現生の勝、五には、又於念念の下は嚴土の勝、六には、令不可說の下は益生の勝、七には、得無礙の下は聞法の勝、八には、住無所有の下は、神足の勝なり。此德用に准ずるに、若し圓敎の諸位に相攝するに非ずんば、何ぞ地前に、是の如きの無等の德、有ることを得んや。

自下は第二に、成果の德有ることを明す。中に於て三あり。先に現を牒して當に況す。二には、懸かに當相を辨ず、三には、當を擧げて現を結す。初に現を牒して、當に況するは、結前生後なり。謂はく、前の因德尙も無盡なりと結す。況んや當成の果位、豈量るべけんや。二に所謂の下は懸かに、當成の果德の狀を辨ずるに、自ら別に十有り。初の六は果相圓なり、後の四は果德滿なり。果相の中に、初の二は嚴土攝生淨、次の二は正報總別淨なり。謂はく、根は是れ眼等の根なり。下の二は、是れ主伴圓なり。淨蓋幢は是れ主淨なり。後の四は是れ、德滿の中に、初の二は、行圓に證極りて法に入るは、是れ證なり。後の二は是れ願滿自在なり。皆清淨と言ふは、染として盡さずといふこと無し。平等とは、理として證せずといふこと無きなり。此等は並に是れ、此位の中の廻向力に由るが故に、此菩薩をして、當に是の如きの佛果の德を成ぜしむ。三に摩訶薩の下は、當を擧げて現を結す。謂はく、得淨法門は是れ、體の離染を得、莊嚴は是れ德相圓備なり。此

【自下は第三に云云】以下は違相を融會する自在の德を明す文を釋す。經の「菩薩摩訶薩は、是の如く廻向を行じ」等の文。

【遠公の云はく云云】此下、淨影と辨師と二義を擧げ、次に自義を述す。

【第二刹那の思】對後生思を引生する意。

【思の體…業迹】對後生思は種、種子を熏成するは業迹なり。

は是れ現に得る所なり。

自下は第三に、會違自在を明す。中に於て三十句あり、十五對と爲し二に分つ。初の七對は、緣起の事を融じて、違相斯に盡さしむることを明す。次に一對有り、理事互に融じて、倶に無障礙なり。後の七對は、緣を會して實に就き、理融じて違ふ無きことを顯す。此は亦是れ、法の漸次を顯すなり。前の中に、初は此れ廻向の行、佛刹を淨めんが爲の故に、不違利と云ふ。生を安んぜんが爲の故に、亦違はず。二は、衆生をして、刹に依りて行を起して、刹と業と違はざらしむ。三は、業、心に依りて起りて、王數違せず。又、思は是れ業の體、本識の心に熏するが故に違はざるなり。四は、業は境に託して成ずれば、思と境と違はず。是れ唯心所現の境なるを以ての故に、心境と云ふ。五は、業所感の果なれば、則ち緣と報と違はず。六は、業と業迹と、正助違ふこと無し。遠公の云はく、前惑等の心起る業の所依を、名けて業迹と爲す。辨の云はく、方便造作を業と名け、根本正道を迹と名く。今釋す。謂はく、決定の思は是れ、口業の遊履する所の處を、名けて業迹と爲す。又釋すらく、初刹那の思を道と爲して、第二刹那の思を引轉するを、當體と爲す、道は卽ち迹なり。又釋すらく、思の體を業と爲し、熏じて本識在りて、種子を成ずるを、業迹と爲す。又釋すらく、思を業と爲す。業に諸道の果報を感ずる、功能有るを、業道と爲す、道は卽ち迹なり。七は法體と相と、能所不違なり。謂はく、總業等は、既に是れ有爲なり。必ず四相を具す。上來は二の不違有り。一には、各緣起して相資け相輔ずるに

【九】以上は位行の文を終り、次に位果を明す文を釋す。「菩薩摩訶薩、經の此廻向を成就し已れば」等の下。

由るが故に、相違を離る。二は、既に各相依るに、互に自性無し。自性無きが故に、其れ誰か相違せん。次の一は、理事雙融に約して、以て無違を明す。謂はく、法生不違性とは、緣生即ち無性なるを以ての故に。性不違性とは、無住の本に依りて、一切の法を立つ。又初は假名を壞せずして、以て實相を說く。後は眞際を動ぜずして、諸法を建立す。下の七は、理融に約して無違を明す。謂はく、刹と衆生と、相異るに似たりと雖も、平等の理は、此彼殊らざるが故に無違なり。餘句は知んぬべし。

自下は第四に、違盡平等を得。中に於て二あり。初の十句は、平等を得ることを明す。前の違相盡くるに由るが故に、此平等稱性の事を得。謂はく、業報等の十なり。後に得見佛の下の十句は、行位究竟を成ずるを得たり。並に知んぬべし。佛子の下は名を結す。上來は位行竟んぬ。

(九)自下は第二に、位果を明す中に十六句有り。二二を一と爲し、攝して八對と爲す。一には染果を斷ず。謂はく、魔怨を伏して惡緣を止むるなり。欲刺を拔くとは、惡因を斷ずるなり。二は入證の果なり。謂はく、無生道とは修證の因なり。到無二とは、正しく性を證するなり。謂はく、理は能所を絕するが故に、無二なり。智は彼法に契ふが故に、到と云ふなり。三に得無量の下は、成益生果なり。謂はく、道法、生を救ふは、神通の化物なり。四に常樂の下は、寂用無礙の果なり。五に悉能の下は、行願廣大の果を明す。六に分別の下は、智通殊勝の果なり。先は智、後は通なり。七に得無礙の下は、見聞自在の果

【一二】以上、長行釋を終りて、次に偈頌を釋す。

【一二】十廻向の中第八に如相廻向の文を釋す。

【上下】前の七と後の二廻向をいふ

を明す。八に修諸の下は、行修具足の果なり、下の結は知んぬべし。

(一一)第二に偈頌の中に、二十一の偈有り。三に分つ。初の半は、上の行相を頌し、中間の諸偈は、上の廻向を頌す。末後の一偈は、上の勝益を頌す。廻向を頌する中に就きて、三あり。初の三偈は、上の廻成行具を頌す。二に以此の下の六偈は、上の因行生善を頌し、衆生に廻向して、菩提を得せしむ。三に深入の下の十偈半は、上の實際廻向を頌す。中に於て二あり。初の三偈半は、上の不著諸等、自行同如を頌し、二に菩薩觀察の下の七偈は、上の令他入實を頌す。後の一は、總を結歎すること、知んぬべし。

(一二)第八に如相廻向は、理に同ずる善根は、是れ如の相なり。理に稱ひて而も廻するを、如相廻向と名く。此れ上下と何の別といはば、謂はく、前の七は、事を會して、理に向ふを明し、此第八は、事盡きて、理現ずることを明す。是故に、行事倶に是れ如相にして廻向す。後の第九は、理に從ひて用を起すことを明す。第十は、用は體に同ず、體に同じて而も用を明す、故に法界廻向と云ふなり。長行の内に亦二あり。初の位行の中に、亦三あり、標と釋と結となり。釋の中に亦三あり。初には行體を擧げ、二に摩訶薩以如是等善根廻向欲令の下は、正に將て廻向せんとす。三に摩訶薩如是廻向時の下は、廻所成の德を明す。初の中に、先に三十句有りて、差別の善根を擧ぐ。末後の一句は、一觀を結成す。前の中、初の十句は、所修の善根を顯す。二に慧眼の下の十句は、善根を長養して、更に增廣せしむるを明す。三に摩訶薩の下の十句は、善根の差別具德を結歎す。初の中に、先の

「下は長養善根を明す、論の一性根清淨にして悉く能く」等の文。

二句は、觀成入理の善を明す。初の句は標、下は釋顯なるなり。謂はく、離癡は智を釋し、正念は念を釋し、堅固は安住を釋し、不退は不動を釋す。此は是れ、正念は止を成じ、離癡は觀を成ず。止觀雙べ運びて、無礙現前す、故に成就等と云ふなり。後に得大乘の下は、隨事の大行を明し、以て善根を集む。八種の心に依りて、善根を集むること有り。一には、深心に依りて、以て善根を起す。先づ心の能を擧ぐ。謂はく、心は理に依りて起るが故に、勇無畏なり、此猛心に依りて、二善根を起す。一には、廣多無盡、二には、稱理勝妙なり。三には、白淨法に依りて、同體の大悲心を起すなり。四は、直心に正しく、諸佛を念ずることを明す。五は、廻向心、理に稱ひて轉ぜず。六は、求道心に依りて、巧に堅善を出す。七は、正念心に依りて、一切の善を出す。八は、巧慧心に依りて、廻して利他を成ず。下は長養善根を明すに、十句あり。初の慧眼觀察善根は、卽ち實なり。是故に此善根をして、增長せしむ、此は是れ長養善根の所由なり。下は長ずる所の善根を明す。中に於て初の句は、總じて顯し、下の八は別して辨ず。一には、善根の分齊不同なることを明すが故に、分別等と名く。二には、德を備へて缺くること無きが故に、具足と云ふ。三には、體は衆過を離る。四は、唯菩提に住す、凡小同じからざるが故に、一向と云ふ。五は、修して增せしめ、六は、思惟して廣ならしむ。七は、修行の所成、八は、實に稱ひて廣く說くなり。自下は第三に、差別を結歎す。中に於て、此善根の多能異德を明す、故に廻向を成ずるに堪ふ。十の中に、一は種種門とは、通遊すること一に非ず。種種境と

【二三】正しく釋する中、第二に正しく、廻向を明す文の釋、經の「菩薩摩訶薩は是の如き等の善根」等の下。

は、所緣不同なり。種種相とは、體狀區分せり。種種事とは、緣成ずるに各異るなり。種種分別とは、分齊雜らず。無量行とは旗等多種なり。語言道とは、此善根は是れ、無量の言教の所行の處なり。出生等とは、此善に依りて、能く多の分別智を生ず。修行等とは、諸善互に嚴る。悉能等とは、倶に佛果に趣く。下は一觀を結成す。甚深を顯すが中に、謂はく、是の如きの多門種種行りと雖も、然も皆一味にして、眞性に同ずるが故に、無二と云ふ。一切智境とは、謂はく、此同性の善は、唯佛智のみ能く知る。又釋すらく、此同性の善は、佛と成るに堪へたり、故に是彼境なり。此れ則ち前の諸門は、無差別の差別なるが故に、多門有り。此れ則ち差別の無差別なるが故に、唯し一味にして、佛果に歸す。上は廻する所の善根の行體を擧げ竟んぬ。

〔二三〕自下は、二に用の廻向なり。中に於て四有り。一には自行を成ずるに因りて、以て廻向を修す。二に復次の下は、事に因りて行を起して、復廻向を修す。三に摩訶薩善根如是廻向不著世の下は、前の二廻向、無廻の相を明す。前の二は是れ、衆生と菩提との廻向にして、此は是れ實際廻向なり。四に如法門の下は、稱性純熟自在廻向を明す。又、前の二は、是れ廣大廻向、次の一は、是れ甚深廻向、後の一は、是れ深廣廻向なり。初に同ずるの善根なるを以て、稱眞の廻向を成ず、如の相を釋成するなり。初の中に二あり。先は前の善根を以て、廻して自行を成じ、後に如爲己身の下は、正しく衆生に向ふ。前の中に二あり。初は廻して法身三業の行を成じ、二に得離癡の下は、廻して嚴佛淨土の行を成ず。

【下は利他の行】經の「衆生を任持し」等の文の下。

【化生不息】衆生を化益して、息まざるなり。

【自下は第二に云云】經の「嚴淨の智を得て……一切普く持す」の文の下。

前の中に三あり。初は身業の行を成じ、二には口業の行を成じ、三には意業の行を成ず。意業の行の中に三あり。初には心に依りて、自行の德を成ずることを明し、二に任持の下は、利他の德を成じ、三に具足の下の一句は、總じて所成を結す。初の中に、七種の心に依りて、七勝行を成ず。一には無礙心に依りて、清淨の行を成ず。謂はく、洞理無礙にして、行をして淨ならしむるなり。二には大施心に依りて、財施行を成じ、衆生の意を滿たすなり。三には照法心に依りて、法施の行を成ず。四には、不壞心に依りて、求佛智堅の行を成ず。五には、菩薩心に依りて、照一切法の行を成ず。六には、念佛心に依りて、三昧の行を成ず。七には、正直心に依りて、離染の行を成ず。下は利他の行を明す中に、句別に亦七あり。初に化行を成ず。謂はく、機を攝して失はざるを、任持と名く。充滿一切は、是れ廣く化するなり。而無休息は、是れ常に化するなり。次の二句は、化行の所依を明す。一には、化は佛智に同ずるが故に、安住と云ふなり。二は、定に依りて用を起す。勝德に趣くを以ての故に、得深三昧と云ふ。次の二句は、攝化の處を明す。一は廣遊、二は遍住なり。次の一句は化事を成ず、故に化生不息と云ふなり。後の一句は化智を成ず。謂はく、方便の慧を成ずるなり。下の一句は、總じて所成を結す。謂はく、自他の行慧を具足し成就し、深廣にして離り難きが故に不思なり。

自下は、二に淨土の行を明す。先に別して、六對有ることを顯す。初の中に、離礙は是れ體、分別は是れ用なり。謂はく、分別を離れて、而も分別するなり。二に一念嚴土は、

是れ用廣きなり。諸の通慧は、是れ用の所依なり。三に入實法は、是れ體深きなり。示現等は是れ用廣きなり。四に一見一切は、是れ用無礙なり。究竟等は是れ、用の所依なり。謂はく、一切を持して、壞せしめざるなり。五に以菩薩具嚴とは、是れ德體なり、顯現調生は、是れ用相なり。六に、一佛世界等は、是れ體廣きなり。得究竟等は、是れ用持するなり。下は總じて所嚴の土に、衆生を滿さしむることを結す。謂はく、本、土を嚴ることは、只生を攝せんが爲に廻向す。分別持智とは、是れ總じて上來の廻向持智の旨を結するなり。上來、自行を成じ竟んぬ。廻向して衆生を救はんと、欲するが爲の故に、先に自行を本と爲し、方に長劫に衆生を攝するに、堪ふることを辨ずるなり。自下は第二に、正しく衆生を廻向す。中に於て、先に自を擧げて他に例し、前を結して後を生ずるなり。下は正しく廻向を顯すに、二有り。初に廻して、障を出さしむるに六句あり。初の三は三障を出す。謂はく、一には報障を離れ、二には業障を離れ、三には煩惱障を離る。後の三は治行を成ず。初の一は離煩惱に對し、二には離業に對し、三は離苦に對すること、知んぬべし。下は德を成ぜしむ。如大雲雨とは、五義有り。一には普遍の故に、二には滋潤の故に、三には能く雨を出す、四には雨能く塵炎を滅す。五には雨能く卉木を生す。廻向の大願も亦、五義を具すこと知んぬべし。下は別して所成を顯すに、九句有り。初の二は成行なり。一は過を離るゝを淨と名く。二は善を生ずるを明と名く。次の二は入證せしむ。一には入證方便なり。謂はく、如來藏を觀じて、忘失せざらしむるを、護受持と名く。二は

【自下は第二に云云】經の「復次に菩薩摩訶薩、若は樂ふべき」等の下

【具菩提】具足可樂無上菩提の文をいふ。

正證成就の故に、住淨法界と云ふ。次の二は德を成ぜしむ。一は心自在の德を成じ、二は身をして自在ならしむるの德、後の三は三善根を成ず。一には無癡善、二には無貪の故に、攝淨と名く。三には無瞋善なり。

自下は第二に、事に因りて行を起し、復迴向を修す。前は巳に自行迴向を成じ、今は更に因事迴向を成ず。故に復次と云ふなり。中に於て三あり。初には事に因りて行を起し、二に摩訶薩如是迴向の下は、正に將て迴向せんとす。三は如是摩訶薩の下は、迴所成の益を明す。初の中に二あり。先に勝事を見るに因る。二には、境に隨ひて行を起すに、三行り。初には所成の德行を明すに、法、喩、合有り。謂はく、所見の事に隨ひて、彼に託して行を成ず。故に修巧方便等と云ふ。既に可樂の事を見て、即ち實義を樂求すること、有る等是なり。二に巧妙の下は、行の勝用を明す。三に如善根等は、行の同體を結す。二に正將迴向衆生の中に、皆可樂を得せしむるは、前に可樂の境を見るに由りて、遂に可樂の善を起し、衆生に迴向して、可樂の德を成ぜしむ。此は是れ巧便の用なるのみ。中に於て三あり。初に未だ法に入らざる者をば、法に入ることを得せしむ。此は地前に在り。二に令菩薩の下は、已に法に入る者を、地に入ることを得せしむ。此は地上に在り。三に具菩提の下は、已に地を得る者に、終に果を得せしむ。初の中に七句あり。初の中に、但佛を見て、體性を取らざるのみに非ず。亦乃し衆生を見ても、亦取らざるが故に、亦復如是と云ふなり。又釋すらく、佛を見ること、法の如くならしむ。佛に於て著せず、法性を取

【下は地上の行云云】經の「一切菩薩をして、悉く」等の下。
【下は八地已上云云】經の「現在佛の所」等の下。
【下は地滿じて云云】經の「無上菩提を具足」等の下。
【自下は第三云云】經の「是の如く菩薩摩訶薩は、善根を長養して」等の下。

らざるは、法を見るとも著せざるなり。無數衆生等は、僧に於て著すること無し。故に清淨と云ふ。維摩經に云はく「佛に著して求めず、法に著して求めず、衆に著して求めず」と、此に同じ。二に佛意に稱ふの傳と作らしむ。三に國淨かにして、可樂ならしむ。四には、所求の法の處を樂む。五には、出世の法を樂ましむ。六には樂持して忘れず。七には、正慧の法明を得。下は地上の行を明すが中に、初の二句は、初地の財法兩施の行を成す。二に得三昧の下は、二地已去の功用位の行を明す。一には深定を得、二には總持を得、三には記智を得、四には勝通を得。上は是れ自の德、下は化の德を明す。五には廣說、六には巧說、七には化心なり。謂はく、悲是なり。八には、常に化して息まず。九には廣く化す。謂はく、多時多處に於てするなり。下は八地已上の無功用の位の行を明す。中に於て初には、現の佛の勸に由りて、寂を捨て修を起すことを得るを、巧方便と名く。二は、理に稱ひて行を起すを、深方便と名く。三に永離の下は、八地には寂無きを以ての故に、佛菩提等を愛する、貪心を捨つることを明す。故に下の離欲深解等は、對治の行成ずるを明す。四に具足の下は、八地に無生觀に入ることを明す。五に九地の中に、機に稱ひて、法を說くを無謬と名く。六に十地の中の、法金剛無間道現前することを得るを、成滿と名け、後經の菩提等の障を滅するが故に、滅障道法と云ふ。下は地滿じて佛果を成ずるを明すこと、知んぬべし。自下は第三の廻所成の益を明す。謂はく、因事起行の廻向力に由るが故に、自の善根、轉た更に增多ならしむるを、名けて長養と爲す。得淨の下は、別して顯すに、十

【自下は第三に云云】第三に實際廻向を明す文の釋なり、經の一菩薩摩訶薩、是の如く廻向して」等の下。

【前の中に四】常に無著なるを明すに四あり、初三は正しく離著を明し第四は離著の益を明す。

【所取……起らず】離著の相を明す。

句有り。初には、内に明慧を增し、二には外に善友護る。此は是れ解を生ずるの益なり。三には、佛慧、心を照す。四には、癡闇の障盡く。上の二は是れ斷障の益なり。五には、法を修して智に入る。是れ證法の益なり。六には善學の下は、後智を起すの益なり。七には、一切善根の下は、大願の益なり。八には、一切菩薩の下は、福原を盡すの益なり。九に成就の下は、智堅を成ずるの益なり。十に明解の下は、解廣の益を顯す。上は因事廻向竟んぬ。

自下は第三に、前の二廻向は、所廻無きことを明す、即ち實際廻向なり。此上の諸の廻向實際と、此と何の別といはば、上は皆相を攝して體に歸し、此中には、相を攝して相に歸するが故に異るなり。中に於て二有り。先に行に約して辨じ、後に如是の下は、心に約して顯す。前の中に二あり。先に此廻向は、即ち常に無著なることを明す。二に觀甚深の下は、無著なるを以て、而も廻向を成ずることを明す。前の中に四あり。初には、有に著せず。謂はく、上の嚴土攝生に於て、倶に著せざるが故に、是故に不著界等と云ふなり。心無依とは、所取無相なることを明す。寂然不亂とは、能取起らず。正念法とは、妙に能所を絕し、正理相應することを明す。『起信論』に云はく「正念に住すとは、當に唯心にして、外の境界無しと知るべし」と、此れの謂なり。二に具足の下は、無に於て著せず、起行を礙へずして、無分別智なるを、無選擇と名く。廻向に違はざるは、是れ起行を礙へざるなり。正法に違はざるは、是れ入理を礙へざるなり。三は不壞佛相の下は、雙べて有無

【下は無著云云】經の「一切義及び種種行」等の下。

【下は別して顯す】經の「寂滅を觀察して」等の下。

【自下は第二に云云】經の「是の如く菩薩…恐怖なき心」等の下。

【自下は第四に云云】第四に得性純

を離るることを明す。初に不壞佛相は、無に著せず。等しく三世を觀ずとは、有に著せず。此は所證無著に約す。了衆生空は、是れ有に著せざるなり。無所依は是れ、無に住せざるなり、謂はく、無に於て住著せざるなり。此れ悲境不著に約す。是れ則ち、如來は空と觀じて、而も敬養を失はず。衆生は寂なりと了して、而も攝化を失はずとは、此れの謂なり。四に順如來の下は、離著の益を明すに、三有り。初には正しく漸至の益を解し、二に如實分別の下は、智慧周圓の益なり。三に未曾の下は、寂用俱行の益を明すに、法、喩、合有り、知んぬべし。下は無著なるを以て、而も廻向觀を、成ずることを明す。上は深法を以て實智を生ず。謂はく、有無に著せざるの智なり。此實智に依りて而も廻向を成ず。下は別して顯す。初には、理事無礙止觀俱融廻向を明す。二には、前の無礙を以て、自行廻向を成ず、三には、攝取の下は、化を成じ福を行ずる廻向なり。上は行に約し竟んぬ。自下は第二に心に約して、八種の心有ることを辨ず。一には怯弱せざる心をもつて、佛法に廻向す。二には、廣大の心をもつて、廻向して衆生を淨む。三には、無顚倒の心をもつて、廻して利を求せず、四には、無餘心をもつて、廻して境に染せず。五には、離世心をもつて、廻して出世するを得。六には、無著心をもつて、廻して萬行を成ず。七には、見法心をもつて、廻して趣果佛道を成ずる是れなり。八には、厭離有爲心をもつて、廻して眞善を生ず。上來は實際廻向竟んぬ。

自下は第四に、純熟自在深廣廻向を明す。中に於て廣く如相廻向を明す。眞如の義を

熟自在廻向を明す文を釋す。經の、「一切の如の法門の一切の道」等の下。

【又不變を云云】第二の釋は、終教已上の通談なるを以て何教を指さず。

【或は二なり】瑜伽論、唯識論の思想、信論の意を以て示す。

【安立非安立】依言、離言眞如の異名。

【空、不空眞如】染法を離れて明鏡の如きを空眞如、一切の淨法を具すること、鏡に萬象を具するが如きを不空眞如といふ。

【三無性眞如…無性眞如】唯識論所說の三無性、即ち相、生、勝義の三性に依て立つ。

【善法眞如…無記法眞如】眞如、善、不善、無記の三法に隨ひて、善、不善、無記等の三となるをいふ。

釋するに、四門を作る。一には釋名とは、不壞を眞と曰ひ、無異を如と稱す。前は則ち四相に遷さるるに非ず、後は則ち體は差別無し、此は始教に約す。又、不變を眞と曰ひ、順緣を如と稱す。前の義に由るが故に、有爲法と一に非ず。後の義に由るが故に、有爲法と異るに非ず。二義合して一法と爲るを、名けて眞如と曰ふ。二に種類とは、或は唯一味なり。謂はく、實に約せば、差別無きが故に。或は二なり。謂はく、安立諦眞如と、非安立眞如となり。又、二空所顯を二と名く。即ち生空所顯の眞如と、法空所顯の眞如となり。又二あり。謂はく、空眞如と不空眞如となり。染法にも染せられざるを、空と名け、性功德を具するを、不空と名く。或は三なり。謂はく、三無性に約せば、即ち無相眞如と、無生如と無性如等となり。又、善法眞如と不善法如と、無記法如と有り。「雜集論」に出づ。此は法に約して辨ずるなり。或は七なり。「顯揚論」に云はく、「一には、流轉眞如なり。謂はく、諸行流轉の實性を思惟す。二には、實相眞如なり。謂はく、諸法は二我性無しと思惟す。三には唯識眞如なり。謂はく、諸法唯識の性を思惟す。四には、安立眞如なり。謂はく、染汚の法體、苦諦を思惟す。五には、邪行眞如なり。謂はく、染法の因、集諦を思惟す。六には、清淨眞如なり。謂はく、淨法の體、滅諦を思惟す。七には正行眞如なり。謂はく、清淨の行、道諦を思惟す」と。或は十眞如なり。謂はく、十地の中の、所證の眞如に約するに、十重有る等なり。或は百門なり。謂はく、十十無盡なり。圓通無礙法門に應ず。或は一切法に通ず。三に德相を明さば、一には、依持の用を成ず。謂はく、染淨

【觀境を成ず】眞如を以て、所證所則となすをいふ。

【但違順…なり】染淨の二法、眞如平等の體に於て順逆あるを以て、其旨を釋す。

法依持して立つ。二には、觀境を成ず。謂はく、入證の用なり。三には『起信論』に依るに、三大有り。一は體大なり。謂はく、眞如平等にして增減せざるが故に。二には相大なり。無量の性功德を具足するが故に。三には用大なり。能く一切世間、出世間の善因果を成ずるが故に。問ふ、「不善等の法は、既に眞の用に非ず。適に如の體を離るべし。」答ふ、「眞に違するに由るが故に、眞に離れず。眞に違するに由るが故に、如の用に非ず。此論の意は、諸の善法は、眞に順ずるを以ての故に、並に是れ眞の用なり。」問ふ、「經に說かく、『如來藏は一切世間を興造すること、猶し伎兒の種種の伎術等を作すが如し』と。此に準ずるに、染法も亦是れ所造なり。何を以て非と言ふや。」答ふ、「理實には、染淨倶に是れ所持にして、建立することを得。但違順異にして同じからざるなり。何となれば、施行の三事空なりと觀じて、施福寬大なること、虛空に等しからしむるが如し。若し罪體、空なりと觀ずるときは、則ち罪障をして滅せしむ。何を以て亦罪をして、廣大ならしめざる。是に知んぬ。罪は眞に違ふ。如に入るときは則ち滅す。善は眞に順ず、如に入るときは、則ち廣なるが故に、齊からざるなり。此れ則ち、遍く染淨を興すに、順用にして違に非ず。此上は皆終教に約して說く。又別しては、隨緣は一切法に通ず、總じては是れ眞用なり。帝釋殺網を具して、重重無盡なり。自在に圓融して、相に卽して會するを待たず。性に卽して隨ふを待たず。此百門に明す所の如きは、圓教に約して顯すのみ。四には、教に約して顯さば、眞如に二門有り。一乘の眞如と、三乘の眞如となり。一乘に亦二門あり。一に

【諸事】孔目章に理事に作る。或は諸の字は、事事無礙法界の窮極を顯すか。

【同教…義同じ】機の修入に約して三乘を能同とし、一乘を所同とす。而も三と一と差別すと見るが故に、智廻向といふ。

【眞如は二空に及ばず】彼論の本意は、人法二空を說くに在り、故に知る、眞如は本相の一分なるを。

【上と爲す】孔目章には「二空を上と爲す」といふ。

【今初教の中云云】これ終教を簡ぶ。彼法性、眞實妙有

は、別教なり。謂はく、圓通の諸事、統含無盡なること、因陀羅網及び微細等の如し、廣くは此百句の如の中に說くがごとし。二には同教とは、即ち三乘と義同じ。但し智廻向に由るが故に、一乘の攝に入る。二に、三乘の眞如に亦二門有り。一には、頓教は維摩の、直に嘿して以て玄意を顯すが如き者是なり。此如は教義を絕して、相想倶に及ばず。『大般若經』の、那伽室利分に說くが如し。二には漸教とは、略して三門有り。一には終、二には始、三には世間の所知なり。初の終教の中に、復二種有り。一には、始は三十二の菩薩、不二の法門を顯すが如き者是なり。二に、終は即ち、文殊所顯の不二とは是なり。此始終兩門は、並に無分別の教義、空有の二門を具す。二には、始教の中に亦二あり。一には、始は『百法論』の六無爲、一切法に屬して攝するが如く、人法二空を顯す。眞如は二空に及ばずと、知ることを得、上と爲す。此門は分別無分別の教義に通ず。二に終とは維摩の、迦栴延の爲に、不生不滅は是れ、無常の義等と說き、又『金剛般若』の、微塵は即ち微塵に非ず等と、又『對法論』に、六無爲を開きて八と爲し、即ち三種の眞如を、無爲に屬して攝するが如き、眞如を知ることを得、無爲は上なることを成ず。此初教の始終は、並に分別無分別の教義に通ず。無分別義とは、謂はく、眞如を證す。無分別教とは、謂はく、言無分別の境を比觀して、大乘の言教を悟るが故に。分別の教義とは、謂はく、教義即空なるが故に。今初教の中の眞如は、倶に是れ空の義にして、終教に同じからざるなり。三に、世間所知の眞實とは、復二種有り。一に始は、謂はく、人天の正善根、及び愚

なるに同じからざるをいふ。

【人天の正善根云云】是法二乘を始門に分するは、彼畢竟じて未だ三界を出でず且つ法數とし眞如を說かざるが故に、世間に相從して說く。門

【二に終とは云云】我等修目、眞如を談ずれども、そは世間分別思惟の分齊にして、眞もの如の正體に觸れず故に中邊論下を引きてその分齊を示す。

【此文の中…竟んぬ】以下は文の標釋す。初に總句を標ずるに、一に一相門に約し、次に無盡門に約す。

【此れ梵語に…言ふべし】此下、梵漢分別して、文を解す。

【彼一切の法云云】以下、正しく經文を釋す。

法二乘等は、眞實の性に入れて攝するが故に、『中邊論』に云はく、「世間所知の眞實は、眞實性に入れて攝す」と。彼論文に准ずるに、世間は唯虛誑妄語等を除き、餘は並に眞實に入る。是れ菩提の遠方便と許すに由るが故に。二に終とは、故に『論』に云はく、「一切の法は但名のみ有り。謂はく、名を分別し名を思惟し、知ることを得、遠方便の法に同じからず」と。此義は唯二種の十名の中に局れり。是れ大乘の近方便と爲すが故に、眞如とは乃至流れて十名に在れども、理壞すべからざるが故に、同じく是れ眞如なり。

此文の中に於て大數に百句有るべし。文を檢するに、一句を缺く。初の一句は是れ總なり。餘は皆是れ別なり。總の中に、眞性不異を如と名け、自體妙軌を法と稱し、通智遊入を門と曰ふ。又是れ生滅門に同じからざるが故に、門と名くるなり。至一切道とは、具分齊を顯す。謂はく、理は衆行に遍きことを明す。無量無邊善根廻向とは、行は如理に適きことを明す。謂はく、如に稱ひて而も廻向を成ず。又釋すらく、理實には、眞如は一切の道にして、無量無邊差別の法に遍し、彼諸法に卽して、如の法門と爲す。眞如は衆異の法門に於て、而も體をして顯現せしむ。門は乃ち多道なるが故に、通一切等と云ふ。今廣く百門に就きて、十十無盡を明す。此れ則ち一切の法は、是れ眞如の門なるが故に、如法門と云ふなり。此れ梵語に順ずるが故に、是れ倒せり。義は正しく應に、如は一切の道に遍くして、無量無邊と言ふべし。彼一切の法は、是れ如の法門なるが故に、如法門と云ふ、此は是れ標なり。遍一切等は、釋顯するなり。謂はく、一切道とは、道は是れ門たり。復

【下は別して六云】此ゟ一一の句中に三義あり。と、初に一相門に約し、次に如相門に約し、後に無盡門に約す

【此別の中六云】此下、翻譯不同の異を辨ずるに、古説の三を擧げ、

く、眞如を顯すを以ての故に。善根廻向とは、謂はく、如に同ずる普遍の善根を以て、異門に隨ひて、廻向を成ずることを明す。下は別して顯す。一一の句の中に、皆三義有り。一には如如とは、如理を標擧す。謂はく、彼眞如に如ず。二に善根亦爾とは、善を擧げて如に同ず。三に廻向等とは、如に同ずる善根を以て、廻して如に同ずるの益を成ず。是故に、所廻の善根と、及び所向の衆生とは、並に所成の益相、倶に是れ眞如にして、而も所成有り。又、此三の中に、初には如を釋し、二には如の相を顯し、三は廻向を釋す。故に如相廻向と名くるなり。又初には、如の體を辨じ、二に相、三には用なり。即ち是れ眞如の三大なり。下の一一の句、皆亦是の如し。

此別の中に於て、翻經法師は分ちて十分と爲す。謂はく、初の十は、賢首位の中の如を明し、二の十は、十住の中の如を明し、三の十は、十行位の中の如を明し、四の十は、十廻向位の中の如を明し、五の十は、淨心地の中の如を明し、六の十は、行迹地の中の如を明し、七の十は、決定地の中の如を明し、八の十は、究竟地の中の如を明し、九の十は、等覺位の中の如を明し、十の末後の十は、佛地の中の如を明すと。此等の分文、亦未だ其當なるを見ず。又靈裕法師、北臺の意法師、順法師等、各分ちて十と作すこと、各各く不同なり。然も文等に於て、並に皆顯せざるが故に之を敍べず。遠法師の云はく、此等は何れも異して眞諦を離し、今且く之を言はん。初の十句は地前の所行に約就して如を辨じ、後の八十八は、初地の上の所行に就きて、如を辨ずと。此判も亦難あり。今謂は

【過去非同云云】下は顯に隨ひて別釋す。初は大乘眞俗絶の説、小乘の三世實有の執を破するに約し、自ら三世即空如の義を成ず。

【裕法師云云】演空等は裕の説、緣起の事に就て、三世空如を明す。

【遠法師云云】淨影等は遠の説。理事相望して、以て如の義を成ず。

【炬法師云云】北

く、諸門各是れ一法なり。並に眞如の、體相用を收め盡す。亦相從して、科して分段を爲るべからず。中に於て、諸門の眞如は、皆體、緣に從ひて異れり。謂はく、性如は相如等に非ず。善根の、如に同ずる、亦門に隨ひて別なり。是故に性如の善根は、是れ相如の善根等に非ず。異門に從へば、體は用を起すこと亦異なり。是故に性門の趣向は、無性にして、相門の趣向は實相等なり。下の諸門皆之に准知せよ。

過去非同等とは、相州大範法師の云はく、「此は小乘の三世の執を破す。謂はく、彼は過去は有なりと爲すと執す。若し是れ有ならば、便ち現在に同ぜん。今既に滅無なるが故に、非同と云ふ。未來非故と言ふは、小乘は亦未來の有法の現在に流至するを執す。若し爾らば應に是れ故法なるべし。今既に未來は緣未だ至らざる故に、畢竟無法の故に、故に非ずと云ふ。現在非異とは、彼現在は決定して、是れ有なりと執す。今明す、緣を待ちて假合す。之を推するときは則ち無なるが故に、過未の無なるに異ならず。故に非異と云ふ」と。裕法師の云はく、「過去非同とは、集起すれども而も集起無し。非故とは、轉謝すれども、而も轉謝に非ず。非異とは、相別なれども、而も相別なるに非ず。發起[illegible]とは、過去を礙するなり。除滅生死とは、未來に同ずるなり。清淨生とは、似にして異に非ざるなり」と。遠法師の云はく、「過法は無常なり、同じく盡滅に歸す。理に於て本無なるが故に、非同と曰ふ。來法は宿に生じて、本性の有に非ざるが故に非故と曰ふ。現法は皆空なるが故に、非異と曰ふ。此を三非と名く、之を以て如と爲す」と。炬法師云はく、「過去非同とは、

纂の智炬の説。理の所在に約して、以て三世の如と爲す。

【英法師云云】普濟寺の道英説。證如の行用に約して非同非故非異を釋し、更に過現未を釋す。

如の體を明す、過去に在りと雖も、而も遷滅に非ざれば、無に同じからず。未來非故とは、現在復集起すと雖も、而も起相無く、已起の處、故に非ざるなりと明す。現在非異とは、現在に在りと雖も、而も形處無く、過未に異ならず」と。英法師云はく、「過去の滅法と無と相似たり、之を名けて同と爲す。今は如に依りて、新なる行願を起すこと、彼無に同じからざることを明すが故に、非同と曰ふ。謝落の故業、當報を方に受く、之を名けて故と爲す。今、如を證して、彼故業を捨することを明すが故に、非故と云ふ。現に業結を造ること、過未に同じからざる、之を名けて異と爲す。今に業結、本より造起すること無く、畢竟清淨と觀ず、故に非異と云ふ。發起新新等は、過去を釋し、除滅等は未來を釋す。清淨等は、現在を釋するなり」と。今更に釋すらく、汎く三世の法を論ずるに、二門在り。一には性空門、二には成有門なり。性空とは、謂はく、過去已に滅するが故に、空なり、現在は住せざる故に空なり。今此文の内は、成有門に約す。謂はく、前念の法は是れ、過去に滅し、能く後念の法を引起し、生ぜしむるを以て、是故に過去は、同一法に非ず、唯し斷滅するなり。後念は是れ前念の家なり、未來前念に滅するに由りて、此後念として、生ぜしむと雖も、然も今、前念の法の、傳へて後念に至るべき無きが故に、未來非故と云ふなり。是故に前念の中の舊法、今後は無きなり。現在の法を前念に望むるに、未來に同じ、後念に望むれば過去に同ずるが故に、非異と云ふ。是故に前念の謝滅は、同盡に非ずと雖も、然も無法にして後に至り、後念前に續く。前に依りて起ると雖も、然も法新にし

【一三】廻向所成の德を擧げて結す。

【一四】位行を釋し終りて、以下は位果を明す文を釋す

て故に非ず。是故に廻向の中に、新新の菩提心を發起すとは、前念同に非ずして、後念をして續起せしむるを以て、菩提心をして、斷ぜざらしむるなり。後念非故に由る、所以に念念新新にして、菩提心をして、常ならざらしむるなり。除死淨生とは、願心の作業、文意此の如し、之を思うて見つべし。又、現在念念成正覺とは、謂はく、現在も亦平等なりと、了達するが故に。理を見るを覺と名く。上來の四段は、總じて是れ、第二に正廻向竟んぬ。

(一三)自下第三に、廻所成の德を結す。如是廻時とは、前を牒して後を起すなり。謂はく、前の善根同如廻向なるに由りて、是故に一切法即ち平等にして、利用あることを得るなり。十句を左に分つ。初の二は處に約す。一は、即ち等しくして、體を成す。二は、即ち等しくして、中に於て法輪を轉ず。二に、次の二は人に約す。一には菩薩は即ち等しくして、彼顯を出す。謂はく、一切智處を趣すは、是れ菩薩たり。二は多佛を覩と、體は異らず。三に、次の二は法に約す。一は法性に約し、二は法相に約す。又一には眞、二には俗なり。四に、次の二は行に約す。一は菩薩の行、二に佛行なり。五に、後の二は德に約す。一は佛體等に約し、二は佛用等に約す。是名の下は、名を結すること知んぬべし。上來は位行竟んぬ。

(一四)自下は第二に、位果を明す中に、十果を得。一には、佛法の果を得。謂はく、得無邊淨法門とは、法を證することと多なり深なり、是れ佛體を得るなり。爲人雄とは、成佛の相な

【一五】以下、偈頌を釋す。

【一六】以下、第九の無縛無著解脫心廻向の文を釋す。初に名を釋し、次に來意、三に法體を明し、四に文を釋するなり。

り。無畏吼とは、佛說を得るなり。成就菩薩とは、佛の所化を得るなり。不休息とは、佛化の時を得るなり。又、初に法を讃すること深し。二は成人高し。三は化益廣し。四は化時常なり。此上は是れ總句、下の九句は別を顯す。一には、佛の圓身を得、二には、佛の圓音を得、三には、佛の圓力を得、四には、佛の圓法を得。謂はく、衆生に超出するが故に、勝と云ひ、而も即ち機に趣くが故に、示現一切と云ふなり。五は、佛の圓通を得、六は佛の圓用を得。謂はく、不思議解脫是れなり。七には、佛の圓定を得、八には、佛の圓辯を得、九には、佛の圓覺を得。謂はく、現佛等は衆生を覺するなり。下は結なり。

（一五）第二に偈頌の中に、二十九頌を五に分つ。初の二は、前の行體を頌し、二に菩薩思惟の下の四は、廻向衆生と、及び菩提を頌す。三は、以此の下の二は、實際廻向を頌す。四に深樂の下の十六は、純熟無礙自在廻向を頌す。上の百門に於て、略して頌し盡さず、又次第せざるなり。中に於て初の七は、正しく前の、純熟同如廻向を頌し、後の九は、兼ねて後の位果を頌す。之を思うて見つべし。五に末後の五偈は、廻所成の德を頌す、知んぬべし。

（一六）第九の廻向は、四門に作りて分別す。初に名を釋すとは、此無縛無著解脫心廻向は、無等の大行に約して、名を立つ。無縛著に六種有り。一は、凡を離るるに由るが故に、生死に縛せられず。小を出づるを以ての故に、涅槃に著せず。二に六識の取を離れ、外境に縛せられず。第七の執を離れ、內に於て著せず。三は現行の縛を離れ、種子の著無し。四は

【一七】以下、正しく文を釋す。

取有の縛ならず、執受の著にあらず。五は惑障の縛無く、智障の著無し。六は驅使の縛無く、習氣の著を絕す、故に無縛無著と名く。此は行體を明す。解脫は是れ、其用無礙にして、但諸障を脫離するに非ず、此は是れ行用なり。心とは是れ行體なり。用所依の心なり。謂はく、菩薩大智の心は、是れ善根の所依なり。此心中所攝の善根を以て、皆用ひて將に廻向せんとす。普賢深廣の德を成ずるが故に以て名と爲す。此は能趣に從ひて名を立つ。問ふ、下の文に、亦無縛無著解脫身等、所攝の善根有りて、亦廻向を成ず。何が故に名を標するに、唯心に就きて立つるや。答ふ、理實には餘に通ず。但彼下の文は、千門の中なり。此無縛無著解脫は、心内の百門廻向の文處に廣く辨ず。餘は並に准通せよ。是故に、此廣處に就きて、名と爲す。二に通前とは、前は相を會して體に從ふ。今は體に依りて用を起し、純熟自在を顯すが故に此位を成ず。三に法體は普賢の三業、無邊自在甚深廣大の無礙の大用を以て、此位法と爲す。

（一七）門に文を釋せば、長行の中に就きて、亦二あり。初は位行、後は彼果なり。前の中、釋の内に一千門の釋有りて、二に分つ。初に無縛無著解脫心は、内の百門廣く釋す、餘の九百門は准例して通釋せよ。前の中に就きて、百門の内、復二に分つ。初の二十門は、能廻の行體を顯じ、餘の八十門は、所向の行用を顯す。前の中に就きて、亦二あり。初の十は、不輕心を以て、善根を攝す。二に常樂の下の十は、積集長養して、擬して將に廻向せんとす。前の中に初の一心は、是れ總じて辨じ、餘の九心は、是れ別して顯す。別の中

に、總に准じて具に言はば、應に生死を出づる善根に於て、輕心を生ぜずと云ふべし。故に不輕出生死心と云ふ、下は皆此に准ぜよ。何が故に輕んぜざるといはば、二義有り。一には、佛果從り流るるを以ての故に。二には、無上大菩提を、成ずるに堪へたり。『法華經』の中の、乃至一小音も、皆已に佛道を成ず等の如く、尼俱陀子の小果大なる等の如く、上の賢首品の中、塔等を掃き、善く佛果中の端光嚴等を成ずるが如し、故に輕んずべからず。問ふ、理應に更に、勝妙の善根有るべし、何が故に下に一の合掌等に約して、不輕を明すや。答ふ、此最微少なるは、世人の輕んずる所なり。菩薩の攝は、下此に至つて尙爾も輕んぜず、況んや餘の一切をや。故に此等に約して辨ずるなり。別の中に、一には離惡、二には攝善、三には廣修、餘は知んぬべし。二に、積集の中の十句は、初の一は、總じて前の諸の善根を、輕んぜざるに由るが故に、是故に常に集めて彼善を攝受す。下の九句は別なり、一には、攝して明を失はざらしむ。二には、契合し相應するが故に、安住と云ふ。三には、思念斷ぜず。四には、巧に更に增せしむるを、長養と名く。五には、深心を以て、彼善根を汚さず、故に不著と云ふ。六には、純ら正心を以て、彼を成ずるが故に、其正等と云ふ。七には、過失の簡擲すべき無きが故に、不選擇と云ふ。又亦善斯に收むること有るが故に、不選と云ふなり。八には、佛果を成ずるに堪ふるが故に、隨順と云ふ。九は、能く佛果を得るが故に、得自在と云ふ。前の句は順に佛果に向ふ、此句は正しく佛果を得。所廻の善を擧げ竟んぬ。

【一八】以下、正しく廻向を明す文を釋す。

〔一八〕自下は第二に、正廻向の中に、二あり。初の六十門は、廣大廻向を明す。二に從不妄世間の下の二十門は、甚深廻向を明し、深廣無礙なるを、大廻向と爲す。又亦初は是れ、菩提と衆生との廻向なり、後は是れ實際廻向なり。前の中に六十門有り。內に廣く、普賢自在の德用を顯す。中に於て初の一門は、是れ總なり。謂はく、無縛無著解脫心は、是れ能廻の心なり。復善根とは、復前の所攝の諸善根、廻向其是等は正に是れ所向なり。問ふ、『此中廻向衆生を、言はざることは何ぞや。答ふ、『但普賢の三業を成就せしむれば、方に能く盡く、衆生界を窮めて、攝化するなり、是故に亦是れ廻向衆生等なり。下は別して、普賢の三業の德用を顯す。中に於て、但一一の門を知れば、皆法界自在の德用を攝す。或は理、或は行、或は智、或は境、或は自利の行、或は化衆生、或は歸、或は用、或は因、或は果、或は人、或は法、皆各總じて一切法を攝す、故に相從ひて、別に科すべからず。分量に二を分つ。初の二十四門は、普賢の因位究竟を顯す。二に從於一一境界の下の三十五門は、普賢の果位究竟を顯す。普賢門の內、因果に通ずるを以ての故に、此二門有るなり。又釋すらく、前は自分に約し、後は勝進なり、二分無礙なるは是れ、普賢の德なるを以ての故に。前の中に亦二あり。初の十四門は、普賢自在の三業を明し、二に復作是念の下の十門は、普賢廣大の三業を明す。前の中に初の一は、是れ行所依なり。謂はく、勇進に由りて、行德をして成ぜしむ。下は所成の德を明す。初の四門は、總持無礙を明す、是れ意業自在なり。次の六は力用無礙にして、是れ身業自在なり。次の一は圓音無礙を明す、

【第二に廣大の三業云云】經の「菩薩摩訶薩、復是念を作さく」の下。

【自下は第二云云】以上、普賢の因位究竟の文を釋し、次に果位究竟を明す文を釋す。

是れ語業自在なり。後の二門は、衆生世間と器世間とに於て、自在なり。第二に廣大の三業を明す中に、十門ありて四に分つ。初の三門は、普賢廣大の身業を明す。一には說聲遍、二には持所說、三には說無休なり。次の二門は、廣大の語業を明す。一は體、二は用なり。次の二門は、廣大の意業を明す。一には因智、二には果智、後の三は通じて、三業を結す。一は三業の廣勤を明し、二は身語の深廣を明し、三は意業の攝法を明す。上來普賢の因竟んぬ。

自下は第二に普賢の果德を明すに、三十五門有り。相に隨ひて三に分つ。初の十門は、普賢攝法廣大の德を得ることを明し、二に、於一念頃悉能の下の十五門は、攝法自在を明し、三に妙智知色微細の下の十門は、普賢微細の智を明す。又初は是れ、一重半漫知法、二は、相卽想入重重知法、三は、微細容持甚深知法にして、此は亦是れ、漸次の相なり。前の中、一には巧智自在を方便王と名け、二には、無明住地盡くるを、離癡法王と名け、三には、慧の行法を照すを、法明と名け、四は巧に所化を成ずるを、名けて方便と爲す。中に於て十を列ぬ。如是等の下は、總じて無盡を結す。問ふ、「前段には普賢の因を明す、何が故に、彼中に亦佛行有り、此中には果を明す。何が故に亦、菩薩の行有るや。」答ふ、『辨公釋すらく、前は果を擧げて因を顯し、此は因を擧げて果を顯すと。又云はく、菩薩の修行は、佛と等しきを、普賢の行と名け、佛大行を行ずるを、名けて普賢の行と爲す。』今更に釋すらく、「經」に云はく、「佛道を得て、法輪を轉ずと雖も、涅槃に入りて而も、菩

【自下の十五門云】〔㊁經の「一念の一に於て」等の下〕

薩の道を捨てず」と。是菩薩の行は、謂はく、因滿じ果用を成じ、果を得て因を捨てず。又因果二位は即入無礙なるを以て、各法界を收む。謂はく、因は法界を窮め、果を具するなり。果は法界を攝して、因を含むなり。五には、身業は見て喜ばしめ、六には、語淨口業を知り、七は一切法を知る智、八には、佛の法身の自の體相用を得、九は圓滿根を得。根に三義有り。一には、生後の義に謂はく、出生無盡なり。二には、成法の義。謂はく、根器、法を領し、限量無きが故に、所出所領に約して說く。及び自體差別に、十五種を得ぬ、知んぬべし。十は無盡の神力を得。中に於て、初の一句は總、後の十句は別なり。此等の力に依りて、普賢の行を修するなり。

自下の十五門は、重重の攝法無礙自在を明す。中に於て、初の一は無礙の身智なり、謂はく、身能く外に遍くして、內に智を含容し、無生に入りて大行を生ず。二は如來の家に生じて、法界行智を修す。三は普眼を以て、自在法界を見る故に、於一毛道等と云ふなり。一毛に容るるの路を、名けて毛道と爲す。中に於て三法圓滿す。一には、一切の剎を容るるは、事に約し、二には、一切法界は理に約し、三には、究竟容界は、事に盡きて容す。何が故に爾るや。謂はく、二義有り。一は、法性融通するを以て、事は理に隨ひて融するが故に。二には、緣起相由りて無礙なるを以て、即入容持自在なるが故に。此に同體と異體と有り、上に准じて之を思へ。四に入劫智自在なり。謂はく、長短無礙なり。五に身業自在なり。謂はく、一身をして即ち多ならしめ、多の內に各容る。六に見佛聞法自在な

【自下の十門云云】經の「菩薩の行を具し」等の下。

り。謂はく、佛に著せず法を倒せず。七に入世界自在智なり。謂はく、廻動し轉變するに、智に隨ひて無礙なり。八に知想自在智なり。謂はく、一切法は皆是れ想念の中に、而も成立するが故に、是故に、一切悉く是れ想なり。中に於て三有り。初の一句は是れ總、二に三十八種所知の想を列ぬ。三に如是の下は、能知の德を顯す。先づ離障の德を明し、後に一切如來の下は、知心所成の德を明すこと、知んぬべし。九は知心自在智なり。謂はく、諸心相入と、及び業依心異となり。十は知處自在智なり。謂はく、一は即ち一切等なり。十一には知業自在智、十二には知法自在智、十三には知語自在智なり。謂はく、無礙の淨耳を得。十四には得知根說法智、十五には知根自在智なり。上來の十五は、並に是れ一中一切にして、了知するのみ。

自下の十門は、普賢の微細智自在を明す。初の一は、知世間法微細智を明す。中に於て三有り。初の一句は、總じて能知の智を擧げ、二に十一種微細の法を列ぬ。衍法師云はく、「所知の事、幽微なるを以ての故に、能知の智微細なり」と。辨公の云はく、「此等は並に知り難し、故に微細と名く」と。今上下の經文に准ずるに、一法の中に於て、一切の法有り。頭を齊うして、炳然として同時に顯現す、是れ微細の義なり。三に如是の下は、能知の德を明す。二には、知衆生微細智なり。初には十種の所知を列ね、後には能知の德を結す。三に知菩薩行德微細智なり。謂はく、初發意を擧げて一切菩薩を等取するなり。二十二種の、所知微細を列ぬるなり。四に知菩薩位德大用智なり。先づ四十二種の所知を列ぬ。初の十

【一九】廣大廻向を明す下終りて、今第二に甚深廻向を明す。文を釋す。經の「皆悉く廻向して世間及び」等の二十句あり。

一は、行位の成滿を明し、生兜率天の下は、位滿大用を明す。謂はく、八相等なり。二に如是の下は、能知の德を明す。謂はく、普賢自在の行德を成ず。五に知衆生性智なり。先づ十種の所知を列ね、後に如是の下は、能知の德なり。六に知世界智なり。初の一は總なり。次に二十種を列ぬるに、別して三世間自在有り。後に如是の下は、能知の德を結す。又此等を皆、微細智と云ふは、是れ智を、境に從へて名くるなり。又此微細は、智の中に在るが故に、智は即ち細なり。七は知法界智なり。先づ所知を擧ぐ。一は總、十は別、後に能智の德を結す。八に知入劫智微細なり。初の一句は總、無量の下は、別して十種を列ね、後に如是の下は、能知の德を結す。十種の心を成ずること、知んぬべし。九に知法智微細なり。先に十種の微細法智を列ね、後に如是の下は、能知と成德とを結す。前の中の法義に、四重有り。一は法體の具德、二には一切即一等は、法用相即を明し、三には入非法等は、理事相即を明す。四には入方便無餘は、是は體用善巧なり。十には知無餘智微細なり。先に十種の所知を列ね、後に如是の下は、能知の德を結す。皆出生とは謂はく、量智は理に從ひて起るを、出生と名く。知んぬ、盡きざること無きことを、無餘と名く。此門は亦是れ總結なり、故に知無餘と云ふなり。上來、廣大廻向竟んぬ。

(一九)自下は第二に、甚深廻向を明す中に、二十句の中、皆兩兩合して擧ぐ。總じて十對と爲す。一には、世と世法と假實相對す。二には菩提と菩薩と因分一對なり。三には體用一對にして、行は是れ體、出生死は是れ用なり。梁の「攝論」に云はく、「依他性を分別する

【自下は第二に云云】經の「菩薩摩訶薩は、是の如く廻向す」等の文。

に於て、菩薩所行の行と、及び行道とを見ず」と、此れ之の謂なり。四に人法、五に生熟謂とは、是れ根熟するなり。六に行願、七に自他、八に施受、九に因果、十に境智なり。此等は此れ、上の廣大廻向の中の諸事なり。廣大自在の徳を成ずと雖も、而も彼法に於て、妄執して取ること無し、是故に皆、不虚妄取と云ふなり。上來、百門竟んぬ。

自下は第二に、餘の九百に類する中に、十種の章門を列ぬ。初の一は、前の百門所屬を結し、餘の九は次第して、後の九百を結す。謂はく、無縛無著心所攝の善根の如き、此百門廻向を成ず。無縛無著解脫の身所攝の善根も、亦是の如く廻向す。餘は皆之に准ぜよ。十の中、初の三は是れ三業、次の二は業報、次の二は染淨土なり。謂はく、世間は染、是れ化處なり。次の二は根業なり。謂はく、衆生は是れ所化なり、法は是れ法藥なり。下の一は正智なり。此十は皆是れ、無礙自在にして善根を生じ、用て廻向を成じ、普賢の徳を具す。是故に皆、無縛無著解脫故と云ふなり。初の一に、善根如是廻向を置き、餘は略して准せしむ、皆具有すべきこと、應に知んぬべし。上來の廣略、總じて一千門の大廻向竟んぬ。自下は第三に、彼果を明す中に二有り。初に行果、後に位果なり、前の中に十句有り。初の三は因、三世の佛菩薩廻向の行なり。四には正教を得。五には正法を滿ず。謂はく、法を證するなり。六は等境界なり。謂はく、衆生を悲境と爲す。七には同善根、八には等所作なり。謂はく、大悲の地は是れ所作なり。『論』に梵住と名く。九には同一境、謂はく眞諦なり。十には不違等、多を礙へざるなり。上來、釋すること竟んぬ。佛子の下

【二〇】位行を明す下終りて、次に位果を明す文を釋す。經の一菩薩摩訶薩は此の迴向に安住し等の下。

【二一】以下、偈頌を釋す。

は、行を結す、位行竟んぬ。

（二十）第三に位果を明すに、中に於て十二句あり、二種の果を得。一には現成の果、二には將生の果なり。現成に亦二あり。初に得位果、二には行勝果なり。初の二句は、此の二果を標す。一切衆生の下は、初の果を釋す。二に普現の下の三句は、行勝果を釋す。一は實行勝、二は巧化勝、三は圓音勝なり。三に摩訶薩の下の六句は、將生果を明す、亦二あり。初は外に眷屬果を得。後は、不退行等なり。一は内に德果を成ずることを得るに、五句有り。一は成法器の德、二は淨行の德、三は因圓の德、四は果用の德、五は因果無礙の德なり。

（二十一）第三に偈頌の中に五十一頌有り、三に分つ。初の三偈は、所習の行儀を頌す。二に所作の下の四十四偈は、廣く觀行を頌す、略して迴向を頌せず。三に過去一切の下の四偈は、前所成の果を頌す。前の二の四十四の中に就きて、初の一は、普賢の因位究竟を頌し、餘は因圓果滿を頌す。中に於て、初の普賢無量劫生の一偈は、知世間種種行を頌し、次の一は知衆生種種智を頌し、次の一偈は知世界智を頌し、次の一は知心心智を頌し、次の一は知根智を頌し、次の一は知法界智を頌す。次の三は入法界智と、及び知三世智慢等を頌し、次の十方世界諸佛の下の二十七は、菩薩の行位、大用を成滿することを頌す。中に於て、初の一は總じて頌し、次の一は住兜率天を頌し、次の一は入胎を頌す。是れ微細の故に、胎中に八相を具するなり。次の二は初生を頌し、次の四は七歩と四顧と、師吼と放光とを

【三二】次に第十の法界等無量廻向を明す文を釋す。初に釋名、次に來意、三に法體、四に正しく文を釋す。

【因する】大疏に内の字に作る、佳し。

【三三】正しく文を釋す、

頌す。各一頌あり、知んぬべし。次の一は在宮と、及び出家とを頌し、次の五は坐道場と、降魔と成覺とを頌し、次の五は轉法輪を頌し、次の三は般涅槃を頌す。又餘趣所現の自在を顯す。次の一は、此菩薩善根廻向を結し、次の三は、廻向大果の行儀を頌す。上來は位用覺んぬ。次に有數無數の下の四偈は、入劫と及び刹と、並に所行の行とを頌す。次の二は出生無餘智を頌し、次の一は衆生性微細智を頌す。下の四は、彼果分を頌する中に、初の二頌は行果、後の二は、位果なること知んぬべし。

（三二）第十廻向の中に亦四門を作る。初に名を釋せば、法界等無量廻向は、法に從ひて名を立つるに、其四義有り。一には所廻の行法に約す。謂はく、法施の行を以て、廻向を成ずるが故に、法界等と名くるなり。二は所廻の行體に約す。謂はく、所廻の行體は、廣大無邊にして、法界に等し。三には能廻の智に約し、四には所廻の德に約す。謂はく、法界に稱ふの大智を以て、廻は法界に等しきの善根、向は法界に因するの大用の故に、名を立つるなり。此れ則ち位滿至極なるが故に、標するに法界の稱を以てす。二に來意は、前には依體起用を明し、此は體用無礙を明す。圓極自在の故に、次いで來るなり。三には法體とは、法施を以て廣く、普賢自在大善巧の德を成ず。是は此れ法なり。

（三三）四に文を釋する中に、長行の内に亦二あり。位行と位果となり。行の中に三あり。標と釋と結となり。釋の中に三あり。初には行體を擧げ、二に摩訶薩於彼善根廻向の下は、正しく廻向を明す。三に如是廻向時の下は、廻所成の德を明す。前の中に、初には所成の

行を擧げ、二に摩訶薩の下は、長養善根を明す。又前は自分、後は勝進なり。又、前は利他、後は自利の行なり。前の中の十句、初の一句は總じて、法師位を得ることを明す。第二十地の受位分に、離垢三昧を得て、垢染斯に盡き、受職位滿し、內に決定を得て、其心首に灌ぎ、外相に顯彰するが如し、故に繫頂と云ふ。法を喩に從へて、稱して離垢繒と名く。但其繒を、其頂に繫ぐこと有るは、即ち知んぬ。彼人離垢法を得、受位成滿することを。此位を得るに由りて、方に能く雲雨說法し、廣く群生を益するが故に、大法師の記を受くと云ふ。又『樹偈』の中の、大慧等の十地菩薩は、佛手の灌頂神力を得るが故に、能く自在に說法するが如き、此に同じ。然るに受職に三有り。一は喩に約す、輪王太子の受位等の如し。二は理行に約す、內心に理を證し、其智頂に灌ぐが如し。三は位事に約するに、五重有り。一は信行の滿に約す。賢首品に說くが如し。二は住滿に約す、上の灌頂住、及び下の海幢比丘頂上の佛の、說法の事に示するが如し。三は行位に約す、十行の滿ずる處、入因陀羅微細法界等に說くが如し。四は善巧位に約す、此位に說くが如し。五には證位に約す、第十地に說くが如し。此五重の內、隨ひて一を成ずる處、必ず理行を具す。內に相應するが故に、又此五の中、但一位滿ずれば、即ち因圓究竟して、更に餘を待たず。又若し一を得れば、即ち餘位を得。又總じて是れ、一法界の受職なり。門に隨ひて差別すれば、五位同じからず。法體融通して各攝無礙なり、此は圓教の宗に約して說く。若し餘教の中には、此事に通ぜず、之を思準せよ。下の九は、別して法師の德を顯す。初の一句

【經】法華經。

【伏】大疏には伏に作る。

は、法師の德立することを明す。能廣法施とは、辯慧竭くること無し。成大慈悲とは、施心無盡を顯すなり。安立等とは、施所成の益なり。謂はく、大心を得せしめ、大行を成ずるは、方に是れ法施なるが故に。『經』に云はく「若し小乘を以て化せば、我則ち慳貪に墮す。又法施は財に過ぐること、百千億倍乃至不可說分にして、其比に非ざるなり」と。『丈夫行論』に云云。古德の云はく、夫れ法施とは、一は則ち之を發すに、智慧を以てすれば、生解の妙方と爲る。二は則ち之を化するに、多人を以てすれば、津濟の弘躅と作る。三は則ち超行の本と爲る。寔に倚伏の良詮なり。四は入聖の階と爲り、引導の要路と標す。故に此經の中に、人に託して以て道を弘むるに、多く法師の勝德を歎ず。行に寄せて以て法を表するに、每に普賢を引きて、末篇と爲す。故に知んぬ、法施を究竟の道と爲し、智慧を滿足の極と爲す。自利利他の功の朽ちざるは、其れ唯法施なり。二に饒益等とは、常施を明す。謂はく、菩提心を以て善根を長じ、廣く衆生を益して、休息せざるなり。三は師の名を建つ。謂はく、教授の師と作りて、成佛の道を示す。四は之を照すに、法日を以てす。前は師、此は法なり。故に法師と名く。即ち授くる所の行法なり。五には、法師の心を顯す。謂はく、等心は是れ偏無きの心、廣大心不倒心となり。等く是れ常心ならしめんと欲す。六は增長等は、化業を增すを明す。謂はく、善根は是れ福なり。七には爲衆生等は、之を導くことを明し、探寶は所示の正路なり。八は利他を以て先と爲し、諸行を修する故に、慈悲法師と爲らんことを得。九は化して事を更へしむ。諸餘の善友は己に局らず。是

【二〇】以下は正しく廻向の行相を明す文を釋す。初に廣大廻向の文を釋す。

れ無著法師は、善財の知識の如く、更に餘人を示して、求めしむる者是なり。下は第一に、長養善根を明すに、六句有り。一には、此法施に依りて、善く佛果の心を攝取す。二には、彼岸に徹到す。三には、法施に依りて、善く金剛の菩提心を修す。四には、大願を成ず。五には、善友に依りて、意を正して法を求む。六には、果の境に了達す。是故に前の法施をして、更に復增廣ならしむるなり。行體竟んぬ。

（二）自下は第二に正しく廻向を明す。中に於て亦二あり。初には善根を以て、廣大廻向を成ず。後に安立法界の下は、此深廻向を成ず。前は則ち衆生と菩提との廻向、後は則ち實際廻向なり。前の中の廣大に、十五門有り。初の一門は、彼善根廻向を以て、佛を見、自他の梵行を修す。中に於て三あり。初は善根廻向の念、三世の佛菩薩の行に同ずるを以て、奇特の想を起す。二に得是想故の下は、想に依りて佛を見ることを明す。三は諸佛菩薩の下は、佛に依りて、行を起すことを明す。中に於て三あり。初は他の爲に自行を修す。二は自を以て他を化する行なり。三に何以の下は、佛化以て自に轉ずることを釋す。初の中に二十句有り。初の十は自境を明し、後の十は上に順ず。前の中に、初の五は染を離る。一は總じて顯し、二は惟を成し、三は、處佛具る、四は性濁を離れ、五には煩惱垢無し。下の五は正法なり。一は行を守る心堅し。二は外緣境せず。三は上乘心に順ず。四は下異求無し、故に無依と云ふなり。五には、理に稱ひて平等なるが故に、所有無し。後の十は、上に順ずる中に、一は執著せざるを、無何と名く。二は爲に拘せられざるを、無礙と名く。

三は戒相を取らず。又戒取を離る。四は物心を將護するを、無諍と名く。又先制に非ざるにあらず、更に造立せず。五は失として擇ぶべき無し。六は契合し相應するが故に、安住と云ふ。七は二乘に過ぐ。八は情專なるが故に、動ぜず。九は散ぜず。十は瞋を離る。皆離染の極なり、故に梵と云ふなり。自下は自化他の行に、十二句あり。初の一は、自を擧げて他に例す。修習の下は、別して令他所成を顯す。一は始修、二は行具、三は失無く、四は執せず、五は理を照し、六は我を離れ、七は惑を離れ、八は犯を離れ、九は無慚を離れ、十は心決定を持し、十一に强ひて悔を生ぜず。下の三、釋成する中に二あり。初には反釋し、後には順釋す。前の中に、何以故とは、徵問して云はく、此中の菩薩の行已に滿ず、何が故に但法を說き人を化し、梵行を修せしめずして、自ら修するや。下に釋して、若し自ら修せずして、他をして修せしめば、是處有ること無しと。十句有り、知んぬべし。「攝論」に云はく、「若し自ら邪行に住せば、設ひ他の非を正さんと欲すれども、是人終に他の過失を制止すること能はず。後に何以故の下は、順釋する中に、先に徵問して云はく、既に自ら修せずんば、他を教ふることを得ず。若は卽ち他を教へて修習するを得と爲んや。下は釋の中に、先づ總じて釋す。自ら說の如く離倒を行じ、能く離倒を說きて人に授くれば、言行相應す、故に實語實行と云ふ。下は三業を淨め、染を離れ障を滅する益を明す。下は別して釋す。自ら行じ他を教ふるに五句あり。一は直、二は忍、三は疑を離れ、四は信、五は堅法にして、是れ執持の法なり。善根如是廻向は、上の廻を結する

なり。

第二の復次は、廻向して諸法を得せしむることを明す。中に於て十句あり。一には、法門を得せしむ。謂はく、能く法を證し、能く邪論を摧く。二に悉得三世の下は、法海を得せしむ。先に總じて標す、於一一の下は、別して十種の法界を顯す。一には、生法は是れ、立宗の相、二には、方便は是れ因喩等、功に宗法を成ず、三には、語言法は是れ、方言の則に隨ふ。四には、施設は是れ名を施し、義及び隨理の章業に於て、義を立つること、前後次第に成ずる等なり。五には、文教、軌を成じ、又教則を安布す。六には、言に由りて義を顯し、說授する儀式なり。七には、所說通解を門と曰ふ、又は諸宗の法門なり。八には、人をして開解せしむるを、入と名く。九には、宗義分明にして、解をして決定ならしむ。十には、宗を結し究竟して、義を處じ安立するを、住法と名く。所得無盡法は、總じて所得を結するなり。三に得無畏法の下は、法辯を得せしむ。四に得不退の下は、法明を得せしむ。五に得法界自無量身の下は、法身を得せしむ、六に法住を得、七に法實を得るが故に、決定法と云ふ。八は多法を要す。九は行法に住す。十には內證に向ふ。如是廻向の下は、成果を結するなり。第三の復次の下は、二利の行、圓なるを明す。初の十は自行圓なり、謂はく、法界と等しき、無量の佛等を見ること、知るべし。復作是念の下は、復衆生をして、已に同せしむるが故に、如我無異と云ふ。十一句の等は、無異を顯すなり。第四の復次の下は、行、法界に稱ふことを明すに、亦十句有り。初は、智は理に依りて起

るが故に、亦性に同じく無邊なり。法界莊嚴衆生とは三義有り。一には、此法界に依るに、衆生成ずることを得るが故に、莊嚴と云ふ。二には、衆生は即ち、法界に同なるを以て、衆生をして即ち清淨ならしむるなり、故に莊嚴と云ふ。三には、衆生は同じく、大法界緣起門の中に在りて、法界を攝するを以ての故に、衆生をして德を具せしむるなり。

第五の復次の下は、佛を見、法を解することを明す。中に於て三あり。先は總、二には十句有り、佛を見て行を成ず。三には十句有り法界を解す。初の一は、隨緣して變ぜず、故に生ずること無し。二には、性を守らざるが故に。三に不二の故に。四に是れ能依に非ず。五は妄、染すること能はず。六は是れ所緣に非ず、故に相を離る。七は是れ能緣に非ず、故に寂靜なり。八には一切處に滿じ、一切處に非ざるが故に無處と云ふ。九は流に隨へども去らず、染現すれども集まらず。又、染を捨つれども去らず。淨、現ずれども集まらず。十は諸位の中に在りて、性不改なるが故に、不壞と云ひ、法界を照達するを、同じく解と名く。

第六の復次の下は、衆生をして法師を成ぜしむ。中に於て二十種の法師を成ぜしめ、衆生をして成佛せしめ、及び大菩薩を法師と爲すなり。二十句の中に各二あり。皆先づ法師の名を標し、後には義を釋し顯す、亦是れ所作なり。是れ同類廻向なるを以ての故に、是れ法施善根廻向は、法師等を成ぜしむるなり。『法華』の法師品の中に云云。『大菩薩藏經』の法師品に云云。『仁王經』に、十三種の法師有り。謂はく、十二住と及び佛と是なり。又、

【辯積法師】同法師因緣、發揮に文を揭ぐ。
【那羅延法師】寶積經七十七富樓那會所說。
【他摩室利法師】寶積經七十八所說
【莊嚴論】同論第十三。
【第七に云云】無分選擇行を明す下
【第八に云云】無著の大行を行ずるを明す下。
【第九に云云】正しく悕望の大行を明す下。

十方界に於て、佛滅度の後、如來の正法を守護し受持して廣宣流布し、開化して絕えざらしむるを、法師と爲すなり。辯積法師と及び那羅延法師、他摩室利法師等の如き、竝に其人に由りて、佛法をして再び興して、久しく世間に住せしむる等、此を持正法法師と爲すなり。覺諸魔事とは、『莊嚴論』の中に、魔詐りて神通を現じ、羅漢の形と作りて、諸の比丘を惑亂するに、愚なるものは皆歸伏す。多聞の比丘有り、阿毘達磨石を以て之を磨くに、假金遂に露る、即ち之を呵嘖し、餘の愚人は此法師を怒る。後に果して方に知ること有るが如し」と云云。第七に摩訶薩の下は、無分選擇行を明す。不選擇とは是れ、分別せざるなり。又、作す所の諸事、皆性に稱ひて生無きを以て、簡擇すべきこと無きが故に不選擇と云ふ。文の中の十句は、法を成ず。是れ所成の果法なり、餘の句は知んぬべし。第八に摩訶薩の下は、無著の大行を、成ずることを明す。中に於て二あり。先に無著を明して、欲せざる所を簡ぶ。二に但欲の下は、所願樂爲に、大行を成ずることを明す。前の中に十八句あり。初の十七は煩惱を離れて、世間に著せず。後の一は二乘を離れて、小果に著せず。毒心迴向とは、沙彌の迴向して、龍と作る等の如し。壞善根迴向とは、魔王等に迴向し、及び大力の王と作りて、三寶を滅する等、此は德を無するなり。二に大行を成ぜんと欲する中に、九句あり。謂はく、自他普賢の大行を成ずるが故に迴向す。第九に、摩訶薩如是平等心の下は、正しく大行を悕望することを明す。中に四有り、初の十句は、輪迴の心を明す。二に令一切衆生の下は、四十二門に迴向して、自他の大行を成ぜんことを悕

【第十の復次云云】法音語業を得せしむる下。

【第十一の復次云云】法身を得せしむる下。

【第十二の復次云云】無邊の大行を成ずるを明す下。

欲す。中に於て、緣起を分別して、法化の生を得とは、謂はく、分別に由りて、彼法生じて智心を起すが故に從法化生と云ふなり。此等は並に是れ、普賢の大行なり。三には離染を明す。初に標、何以故の下は、離染を釋成す。四に如是迴向時の下は、向の利益を結す。第十の復次の下は、迴向して衆生をして、法音の語業を得せしむ。初の一は是れ總、餘の三十二句は是れ別なり。並に是れ佛の圓音具德の類、知んぬべし。第十一の復次の下は、衆生に迴向して、法身を得せしむる中に、三あり。初の十は、十身の行體を得せしめ、二に摩訶薩の下の十は、十身の行相を得せしむ。一には、映じて徹せざること無きを、明淨身と名く。二に、中に於て普く五道の衆生を現ずるに、體闇障無きを、離濁身と名く。三に因圓にして果滿するを、究竟身と名く。四は、淨德內に充つるを、清淨身と名く。五は煩惱障盡くるを、離塵身と名く。六は、所知障盡くるを、離種種塵と名く。七は、習氣亦亡ぶを、離垢身と名く。八は、常光恒に照すを、光明身と名く。九は、一一の身の上に、各十蓮華藏塵數の相好有るを、可樂身と名く。十は、形法界に充ち、色十方に遍して、虛通不障なるを、無礙身と名く。三に、以如是の下は、十身の勝用を明す。初は總なり。示現衆生菩薩行の下の十句は、別して用相を顯す。下の一句は、迴向の所成を結す。

第十二の復次の下は、無邊の大行を、成ずることを明す、中に於て、初は身遍く行を起して、能益の緣と爲す。見者不空の下は、正しく所成の益を明す。一には發心せしむ。二

【第十三の復次云云】佛刹を莊嚴せしむる下。

【第十四に如是云云】迴向の大意を結成する下。

は不壞心、三は行を廣くす、四は悲を具して物を化し、五は佛を見て、善を修し、六は生を安んじて法に住せしむ。法輪を得るは開慧なり。法門は是れ思なり。菩薩の行を行ずるは、是れ修なり。七に入衆生の下の十一句は、照法の源を明すが故に入と云ひ、略して十一を擧ぐるも、實には卽ち無盡なり。是れ迴を結すと爲す。第十三の復次の下は、廻して嚴土を成ず、中に於て二あり。初に、同體の嚴を明すに二有り。先に法界に同じ、二に、互に相攝して最正覺を得るは、已成佛を顯す、是佛土を彰すのみ。二に彼一一刹の下は、別相嚴なり。中に於て十事の嚴有り。一には寶嚴、二には香、三は華、四は鬘、五は塗香、六は抹香、七は衣、八は蓋、九は幡、十は幢なり。初の寶嚴の中に就きて三あり。先づ能嚴の差別を辨じ、二に復如是念の下は、所嚴の分齊を顯し、三に是時の下は結す。初の中に百事嚴有り。內に初め座褥より及び樂器に至るまで、八十三事の外法有り。莊嚴寶身已下の十七事は、內法莊嚴を明す。謂はく、三業六根等なり。寶趣とは直趣なり。又是れ志趣高遠なり。餘は知んぬべし。良に以れば依正無礙にして、互に嚴りて嚴を顯すなり。初には寶嚴は竟んぬ。二には如寶嚴の下は、寶を擧げ餘の九門を例するに、各百事有り。一千種の莊嚴と成ることを、准知せしむるが故に、亦復如是と云ふなり。第十四に、如是摩訶薩の下は、迴向の大意を結することを明す。中に於て三あり。初の一句は、長養善根と爲す。謂はく、此嚴大迴向の力に由るが故に、善根をして增長せしむ、是故に迴向す。二に一句有り、佛刹を嚴淨せんが爲の故に、是故に迴向す。三には二十句有り、衆生をし

【第十五に云云】衆生をして、證法起說せしむるを明す下。

【一五】第十廻向所成の法益を明す文を釋す、經の一一菩薩摩訶薩是の如く廻向」等の下。

て、清淨平等ならしめんが爲に是故に廻向す。此一句は是れ總、下の十九は是れ別にして、衆生をして皆平等に、二嚴の淨德圓備することを、得せしめんが爲なり。摩訶薩の下は、平等を結し、清淨を結すること知んぬべし。第十五に、摩訶薩復作是念の下は、衆生をして法を證し、說を起さしむることを明す。中に於て三あり。初には、法を證せしむ。謂はく、之を得るを證と言ひ、所證深廣なるを無量法海と名く。二に於一一の下は、證に依りて智を起す、三に令衆生の下は、智に依りて、說を起すことを明すに、十句有り。一には、敎を善からしめ、二には、義を持せしめ、三には、果辯に同じ、四には、佛身に同じ、五には、說法の心、六には、說の智を得、七には、說處遍し、八には無間說、九には樂求せしむ、十には、說を喜ばしむ。上來は衆生菩提廻向竟んぬ。自下は第二に實際廻向を明す。下の地品の、安住の言に准ずるに、此文も當に是れ、淨治廻向の行なるべきのみ。二十八句あり。初の十は三業と五陰と、三科と內と外とに約し、相に卽して眞に同ずるが故に法界に廻す。內は謂はく正報、外は是れ依報なり。餘の十八は行に約し事に約す。同じく法界に會するが故に廻向を說く。上來は正廻向竟んぬ。

(一五)自下は第三大段に、廻所成の益を明す。謂はく、三業等皆法界に同ずるに由るが故に、是故に、法界に等しき無量の清淨の三業等に、安住することを得るなり。十句の中に初の六句は、平等の三業の、法界攝化を明し、後の四は、廣大の三業を明す。調伏安善は知んぬべし。上來は釋竟んぬ。佛子の下は名を結す、上來、位行竟んぬ。

【二六】以上、位行の釋終りて、次に位果を釋す。四果の中、初後は普賢門、中間の二は舍那門に約す。

【下は說云云】第十五兜率天上の、十廻向會說法の益を明す下なり。

【自下は第六云云】本會の證成を說く下。

（二六）自下は第二に位果を明す。謂はく、此位滿ずるに、四種の果を成ず。一は普賢の行願成滿の果を得、二は嚴淨法界佛刹の果、三は證理圓滿成佛の果、四は普賢廣智德用の果なり。初の二は文の如し。三に具足成就の下は、第三果を明す。中に於て三句あり。一は、理智深く佛體を證得す。二は、現身に成佛して位を得。三に、悉得の下の十二句は、佛の量智自在の德を、得ることを明すこと、知んぬべし。四に得無邊滿足の下は、第四果を明す。中に於て十句有り。一には、普賢眼を得、二は、普賢耳を得、三は、普賢量智を得、四は、普賢淸淨を得、五は、普賢理智を得、六は普賢語業、七は普賢光、八は、普賢速成の業果を得、九は、普賢、淨に生ぜしむるを得、十に具足の下は、普賢究竟彼岸を得、上來正說し竟んぬ。

下は說の益を明す。謂はく、地を動じ信を生じ、供を興し行を表す。文の中に、初は動地、後は興供なり。供の中に先に外供、二に天身の下は、內供なり。上來は總じて是れ、一世間の中に、此大廻向法を說き竟んぬ。二に如此の下は、十方法界等の世界を明す中、亦此說に同じ、是故に合して一切會を成ずるなり。中に於て、一切四天の下は、此世界の中の、百億の四天下を明すなり。上來は一說一切說にして、總じて說分を明し竟んぬ。自下は第六に、證成分を明す。中に於て、先に此界の中の說を說き、後は十方界を證す。前の中に二あり。先づ來到して說を歎じ、二に我等の下は、彼此に同ずることを述ぶ、證成竟んぬ。

【二七】長行釋終りて、次に偈頌を釋す。

【此は…故なり】十廻向は一乘に約し、十地は三乘に約する意。

（二七）第二に、偈頌の中に二あり。先づ序意は知んぬべし。後に正しく頌する中に、九十四偈を四に分つ。初の十四偈は、前の行體を頌する中、初の一行は、法師位を得ることを頌し、餘は法師の德を頌す。二に、菩薩法施の下の六十八偈は、前の廣大廻向を頌す。三に、譬如如如の下の二偈は、甚深廻向を頌す。四に、如是殊勝の下の十偈は、結歎して勝を顯す。

第二の廣大廻向の中に就きて、任放の辨才說は、次を待たざることを顯す。言辭斷ぜず、普賢の行德無礙自在なり。中に於て、麤に分ちて八と爲す。初の八は、前の菩薩の自行殊勝を頌す。二に十方一切無量の下の八偈は、嚴土攝生の行を頌す。三に一切佛子の下の四偈は、上の得佛自在の果を頌す。四に菩薩能於一念の下の十二偈は、一切處に一切の佛を、供することを明す。五に無量無邊一切諸劫の下の六偈は、一切時に於て、一切の佛を供することを明す。六に悉能覺悟一切法界の下の十五偈は、一切の供を以て、一切の佛を供することを明す。七に安住普賢の下の十三偈は、普賢の行を攝して、悉く以て廻向することとを頌す。八に身口諸業の下の二偈は、上の廻向所成の德を頌す。餘の文は知んぬべし。

問ふ、『此經の上下に、多く普賢の行願を說き、此品の內、之を說くこと最も廣し。何が故に、地に入り覺りて、言に涉らざるや。』答ふ、『此は一乘に約し、地は三乘に約する故なり。』問ふ、『一乘豈地上無からんや、三乘豈地前無からんや。何ぞ齊しく顯さざる。』答ふ、『理實には是れ齊し、但地前は一乘を顯すに便なり。地上は三乘を攝するに便なるが故に、是說を作す。』何んが是れ便なる。謂はく、地前の劣位に、卽ち普賢を得るは、位、自在

を顯すに、之れ便なるが故に。若し地上の勝位に於ては、普賢自在の相を得ること、顯ならず。餘意は下に當に、別して辨ずべし。第五會竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第八

【一】以下は、第六會にて、他化自在天宮說法なる十地會なり。今釋するに四門を分つ、先づ初に釋名す。因みに、以下の文中、論とは天親の作なる、十地經論を指すことを知るべし。

【漸備一切智德經】一卷、西晉の竺法護、本經の十地品を譯せしものをいふ。

【十住經】六卷、秦の羅什等譯す。

【二】當會品の來意を明す。

【入證成果】顯了に差別の因果に約するも、平等の因果を含むや知るべし。

華嚴經探玄記 卷第九 第六會

魏國西寺沙門法藏述す

(一)十地品第二十二之一。將に此文を釋せんとするに、四門あり、前に同じ。初に、釋名に亦二あり。先に會の名を釋せば、他化天會は、處に約して名と爲す。謂はく、他は樂具を化作して、自ら受用することを得るは、己が力に非ざることを顯す。入地所證の眞如は、緣に由りて造るに非ざることを、表すが故に名くるなり。二に品の名とは、此品の名に四種有り。一は、別本には『漸備一切智德經』と名く。二に、下の文には、集一切智智法門品と名く。此二は功能に就きて名を立つ。謂はく、十地の因行は、能く一切の佛の智德を集生す。然も十德漸く增するが故に、漸備と云ふ。三に、更に別釋の一本には、『十住經』と名く。四は、此中には十地と名く。此二は義に約し、帶數に稱を受く。謂はく、十は是れ一周の圓數なり。地は是れ義に就き、喩に約して名と爲す。謂はく、佛智を生成して、住持するが故なり。餘の、總別の名を釋する等は、下の本分の中に辨ず。

(二)二に來意の中に亦二あり。先づ會の來意とは、前は是れ阿含の行を滿じ、次は入證成果を明す、義の次第の故に、是故に、來れり。二に品の來ることは、前には比を廻して、證に向ふを明し、今は廻し已りて、證を得ることを明す、行虛からざることを顯す故に、

【顯法の次第】初二三地は世間に寄せ、四五六七は出世に寄せ、八地以上は出世間を出づるをいふ。
【前の諸位】通じては十位、別しては九十廻向。
【問ふ…是なり】初は證深比淺問答
【問ふ…辨ぜり】次に顯教不同問答なり。

次に來るなり。又、前は比位に約して、普賢圓滿の行德を寄顯し、今は證位に約して、三乘差別の行德を寄顯す。顯法の次第の故に、次に來れり。是故に、前の諸位の內には、皆悉く廣く、普賢自在の德を顯し、此地上に於ては、絕えて其名無きことは、是れ此事なり。豈地前は深廣にして、證地は反つて劣なるべけんや。但是れ寄顯の不同の故なり。問ふ、「宜く應に證地は是れ深なれば、普德に顯同すべし。地前は位淺し、應に三乘に顯ずべし。何ぞ爾らざるや。」答ふ「此中の文の意は、教相の不同を顯さんが爲の故に、爾るなり。謂はく、若し地上に於て、普賢の德を得れば、則ち三乘教と便ち別ならず。今明す。若し是三乘の行位は、則ち地前に於て、實に自在ならず。此一乘は則ち、是の如くならざるが故に、彼地前に於て、則便ち自在にして、普賢の德を得ることを顯す。是故に、若し此普賢の地前に准じて、地上を取らば、其地上の行相甚深なり。甚深なること、此說の如くに非ず。此れ即ち下の普賢行品是なり。若し此三乘諸地の行相に准じて、地前を取らば、其地前の行は、甚だ極めて麤淺なり。前の說に同じからず。即ち是れ「瑜伽」の菩薩地の內の、十二位の中の初の二是なり。問ふ「何が故に齊しからざるや。」謂はく、一乘は、地前には普賢の德有り。一乘は地上にも亦普賢の行有り。普賢行品に說くが如く、三乘の地上の德も、此品に說くが如し。三乘地前の行は、文の中に、何が故に說かざるや。」答ふ「此經は一乘を宗として明すが故に、是故に、一乘の行は廣く論じ、三乘の位は、略して辨ぜり。」又釋すらく、一乘の十地は、甚深なるを以ての故に、三乘等を通攝して、總じて十地

【三】宗趣を明す

【生了因果】生因所生、了因所了をいふ。

【別して…有り】法門の流出するに位體より位相に至る、次第顯著なるを述す。

【根本後得等】加行智を等す。

【二障】分別、倶生の二。

【五には云云】以下六門は法に寄せて、諸地差別の位を顯成するに、五六七は行位に、八九十は寄法に約す。

【十度】十波羅蜜の行。

【十は報現に約す】論經三、二四左に初地は多く閻浮提の王、第二地は轉輪王、第十は摩醯修羅王と作ると。

と爲す。仍ち六相陀羅尼門を以て、融じて無盡を顯して、普賢十地自在の義を成ず。地前は則ち未だ是の如くなること能はず。但直に普賢を顯すが故に、地上に同じからず。

(三)三に、宗趣とは亦二あり、先に會の宗を明さば、謂はく、人に約すれば、化主及び助化有りて、各體相用有り、並に性起及び修生に通ずること、知んぬべし。法に約せば、生了因果及び差別平等の二種の因果有り。亦是れ修生本有の因果なり。亦教事及び義理に體相用有り、前に進じて知んぬべし。但し性起に通ずるを、異と爲す、餘義は准知せよ。二に品の宗とは、此品は總に約せば、正しく十地の證行を以て宗と爲す。別して說くに、十義有り。一には、本に約せば、唯是れ果海不可說の性なり。二には、所證に約せば、是れ離垢眞如なり。三には、智に約せば、謂はく、根本後得等の三智なり。四には、斷に約せば、謂はく、二障の種現を離る。五には、所修に約せば、初地の修は願行、二地は戒行、三は禪行、四は道品行、五は諦行、六は緣生の行、七は菩提分行、八は淨土行、九は說法行、十は受位行なり。六には、修成に約せば、四行有り。謂はく、初地は信樂行、二は戒行、三は定行、四已上は、總じて是れ慧行なり。慧行の中に四五六は、是れ二乘の慧、七地已去は是れ菩薩の慧なり。七に位に約せば、二位有り。謂はく、證位と阿含位となり。是は十地の位なるが故なり。八に、寄乘法に約せば、謂はく、初二三地は、世間に寄す、是れ一人天乘なり。四五六七地は、出世間に寄す、是れ三乘なり。八地已上は出出世間、是れ一乘の法なり。故に諸乘を以て此地の法と爲すなり。九は寄位の行に約せば、謂はく、十地

【四】以下、正しく本文を釋す。初に十一品を料簡し、次に十一地品を料簡す。

【問ふ…明す】初前會に對して別なるを問答す。

【流】衆生を六道に漂流せしむる故に煩惱をいふ。

【問ふ…故なり】次に序品有無問答の中、初は位體に就き、次は說相に就いて答ふ。

【五】別して當品を料簡す。

に於ては、檀等の十度の行を成ず。十は報現に約せば、十王の事相あり。餘義は下に當に、別して辨ずべし。

(四)四に文を釋せば、亦二あり。先に料簡し、後に文を解す。初に料簡とは、今此會の中に十一品有り。問ふ「此會は前の二三四五の會と、何の別かあるや」。答ふ「五の別有り。一は前は流、此は無流なり。二は前は末、此は本なり、三は前は不共、謂はく、是れ普賢の德の故に、此は共と爲す。謂はく、此十地は三乘人天等に通じて、共に採るが故に。『地論』に云はく、亦能く人天道の行を、生成することを知んぬべし。四に前は但因行を論じ、此會は果に通ずるが故に。五には、前は比位、此は證位を明す」。問ふ「此會は何が故に、昇天、集衆等の序無きや」。答ふ「此會は證法無二を表するが爲に事相を以て、其玄趣を標すべからず。此は則ち前は麤、後は細なるが故に。二は地前に、一乘別教普賢の法を攝するが爲の故に、昇天集衆有りて、勝方に寄くを表す。地上の寄位は、三乘に同じきが故に、彼自在の相を隱し、餘經に同じて說く。此れ則ち、前は細、後は麤の故なり」。此文を二に分つ。初の九品は、緣修の因果を明し、後の二品は、性德の因果を辨ず。初の中に亦二あり。先の六品は、因位の德滿ずるを顯し、後の三品は、果位の德現ずることを明す。前の中に就きて亦二あり。先に十地の一品は、其證位を顯し、後の五品は、位中の行用を明す。

(五)前の中に二あり。先に長行散說し、後に偈頌總攝す。前の中に亦二あり。先に所說の十地を明し、後に他方の菩薩來りて、此說を證す。前の中に亦二あり。先に此界所說の十地

【一と言ふは云云】以下、正しく是れ增數展轉して無盡なるべし。

【既に殊…異なり】教證既に殊る、正流通の三分も亦序別異なるをいふ。

地を顯し、後に十方無盡世界所說の十地を結す。前の此方の所說の中に就きて、或は總じて一と爲し、或は分ちて二と爲し、或は三四五乃至十に於てす。或は四十八段と爲す。一と言ふは、謂はく、總じて是れ、一の十地の法門なり。二と言ふは、初に正しく十地を說き、後に動地雨華等は、感瑞顯實を明す。或は三とは、謂はく、序、正、流通なり。此中の辨ずる所の要は、唯教證なり。既に殊にして、三分も亦異なり。教に就きて三は、初より起分に至る、是れ其由序なり、正說を起發するを以ての故に。二は本分已去は、是れ其正宗なり。中に於て、後に廣有り略有りと雖も、同じく地法を說くを判じて正宗と爲す。三は地利益分の下は、法力感の益を辨じ、判じて流通と爲す。二に證に就きて、三とは、初の一は序分にして、判じて由序と爲す、二は三昧分、是れ證にして、正宗なり。此定に入るに因りて、正しく實證を顯すが故に。『地論』に云はく、「此三昧は是れ法體なり」と。三に流通の義、釋するに二類有り。一は己が德を以て、流して信地に被らしむるを、說きて流通と爲す。若し此義に從はば、加分已去皆是れ流通なり、自の所得を說いて、信行の菩薩をして、地に證入せしむるを以ての故に。二に法の利益流れて、末代に及ぶことを顯す。若し此義に從はば、即ち地利益分は、方に是れ流通なり。今、前の義に據りて說くなり。或は四と爲すは、正說の内に於て自ら分ちて二と爲す。先は是れ法說して地を顯し、後に影像分は、喩に寄せて地を彰す。教と證とは、前に準ずるが故に、四と爲すなり。或は五と爲すとは、後の結證偈頌を幷せて、前に怙へて五と爲す。或は六と爲すとは、行に

隨ひて以て分つ。初より起分に至るは、是れ起化の由、物の信を生ずる爲なり。二に、本分の中に、略して地法を說き、其殊勝を歎じて、衆の樂欲を起す。三に、請分の中に、地を彰すに、言を出して、正解を生ぜしむ。四に、說分の中に、廣く修相を明して、物をして行を起さしむ。五に、影像分の中に、喩に寄せて德を顯す。六に、地利益分の中に、德成じて實を證し、感化斯に現ずることを明す、故に『地論』に云はく、「得法力を以て、大地動ず」等と。或は七と爲すとは、初より請ずるに至るを、卽ち六分と爲し、說分は十に通ずるを、總じて第七と爲す。或は八と爲すとは、後の地利益分を分つに、前に異るが故に、八有るなり。或は九とは、影像分を分ちて第八と爲し、利益分を第九と爲す。或は十は其偈頌を增す。

此十の次第は其三義有り。一は化相に約き、通じて起說と爲す。二は化意に約き、通じて顯證と爲す。三は宗要に隨ひて、前後雙べて辨ず。初に起說とは、如來將に說かんとして、先に時處に相を現じ、衆を集む、發起の所說は、之を以て序と爲す。由序說に興る、將に衆の爲に說く。時に金剛藏默して三昧に入り、己自ら證して、能く衆の爲に說くことを顯す。又、加を受くる爲の故に。次に第二に、三昧分を明す。三昧に入るに由りて、十方の諸佛は讚歎して力を與ふるが故に。次に第三に、其加分を明す。既に勸め力を得、衆の爲に說かんと欲す。但、定は無言說なれば、宜く寂從り起つべきが故に。次に第四に、其起分を明す、定從り起ち已りて、略して地相を宣ぶ、後の廣說を起すが故に。次に第五

【二に顯證云云】初に大小の科に分ち、十段の顯證を辨定す。前は化相、今は化意に就て辨ず。

に、其本分を明す。然るに彼本の中に、略して地の名を說き、廣く分別せず。大衆渴仰して、名を聞き義を欲し、相與に啓請するが故に。次に第六に、其請分を明す。衆は既に請じ已りて、正しく爲に廣く陳ぶるが故に。次に第七に、其說分を彰す。乃至十地を通じて、亦說と名く。法說解し難し、宜く喩を以て顯すべきが故に。次に第八に、地の影像分を明す。說は既に竟るが爲に、宜く法の勝益を顯すべし、信を勸めて、傳通するが故に。次に第九に、地の利益分を明す、既に長行散說す。宜く偈を以て總攝して、受持し易からしむるが故に。次に第十に偈頌を明す。二に顯證とは、化を爲すの意、宗として證を顯さんが爲なり。中に於て初の分は證を顯す由序なり、後の九は、正しく證を顯すの相なり。九の中に前の三は、相に就きて證を顯し、次の四は、說に就きて證を顯す。次の一は、益に就きて證を顯し、後の一は、重ねて證の德を述す。前の三の中に、初の三昧分は、人に寄りて證を顯し、二に加分は、加に因りて以て、得證の相を顯す。『地論』に云はく「何を以ての故に加するや。大乘光明三昧の法を得るに由るが故に」と。三に出に寄せて寂を顯す、說かば必ず宜しく起つべし、即ち所入の寂滅離言を顯すが故に、『地論』に云はく、「定は言說無し、是故に起つべし」と。次の四の中に、初の本分は、略說して證を顯す。二に請分は相を拂ひて寂を顯す。說と及び影像とは、相に寄せて德を表し、說分は修に寄せて德を表す。地の影像分は、喩を借りて德を顯し、地の利益分は、所攝化に就きて、地の利益を顯す。故に『地論』に云はく、「得法力を以て、地を動かし華を雨らす」等と。偈

【或は四十八と爲す】初に正しく論の料を述し、次に問答して妨難を防ぐ。

頌は知んぬべし。三に宗要に隨ひて、諸教雙べて辨ずとは、初の一は、是れ其由序、後の九は、正しく諸教の相を顯す。中に於て初の一は、三昧に入りて、正しく證するを顯示し、後の八は次第に言を起し、教を顯すを明すことと、初門に辨ずるに同じ。又、地に隨ひて同じからず。分つて十と爲すべし。或は四十八と爲すとは、初地と第十とは、各八分、二地は二分、三と四、九とは各四分、五と六とは各三分、七地は五分、八地は七分の故に、合して四十八と爲るなり。問ふ『論』に、初地の所攝に、八分有りと言ふは、序分等の如し、是れ十地が家の序なり。何が故に論主判じて、初地に入れ收むるや。答ふ『地論』の料分に、四の例有りて攝す。一は後を以て前を攝するの例にして、前の序等は、後の初地に近きを以て、是故に後の初地を以て、前の序等を攝す。是を以て名けて、初地の所攝と爲す、而も實には、序等は十地に屬して、唯初に非ざるなり。二に前を以て後を攝するの例にして、影像分と地利益分とは、前の法雲地に近きを以て、是故に前を以て後を攝して、法雲の所攝とす。而るに實には、彼二は十地に屬して、唯法雲のみに非ず。三に當相分文の例なり、謂はく、前後に攝するに非ず、中間の諸地の如し。或は二分三分等は、皆當相の攝なり。四に地に該收するを顯すの例なり。謂はく、十地は是れ陀羅尼法を顯す。是故に諸地の文を分つに、改勢廣興、隱顯前却して、即ち一一の地に皆四十八分有るなり。序分等の如き、既に入れて初地の所攝に屬す。即ち知んぬ、亦第二地の攝に屬することを得。餘の地は例して然なり。餘の地の料分は、初に於て總じて有り、是の如く准

【六】當品の文を釋するに七門を以てす。
【八分】一、序分。二、三昧分。三、加分。四、起分。五、本分。六、請分。七、説分。八、校量勝分。初に序分の三、初に智正覺世間。
【有人】菩提流支をいふ。
【他化等…無きが故に】二に器世間の文を釋す。
【他化天】具さに他化自在天といふ。欲界六天の第六なり。

知するに、十種の地の内に、總じて四百八十分有り、知んぬべし。

(六)二に文を解すとは、初地八分の文處の分齊は、『論』に准じて知んぬべし。序分の中に就きて、三世間有り。初に智正覺、二に器世間、三に衆生世間なり。或は四に分つ、一は時、二は主、三は處、四は衆なり。彼論經の中に、論主別に釋を爲り、此品一部別に行はる、是故に此經の初の、如是我聞を取りて、此品の首に致む。又彼中に第二七日と言ふは、經の初の始成正覺の文を取る。今此中に無きことは、經の初に有るを以ての故に。同じく是れ一部の故に。既に經の初の始成は、則ち是れ論經の二七なり。明かに知んぬ、華嚴一部は、總じて是れ、第二七日同時の説なることを。若し爾らずんば、此品の初に、何ぞ別に二七の言を安かざるや。豈此品の初に彼文を脱せんや。是故に當に知るべし、有人の意に、華嚴の十地已前の諸會は、是れ初七日の説なり、唯十地品のみ第二七日の説と爲すと判ずることは、恐らくは文に順ぜざるなり。又地論主は、初七日は但思惟行、因緣行、自受法樂にして、元より未だ説法せずと釋す。是故に初時及び勝處の説と名く。故に知んぬ、初七は説に非ざることを。爾時とは、即ち是れ二七の時、時の勝るを顯すなり。佛三德六義を具するを以て、世に於て獨り尊し、故に世尊と名く。即ち梵には、婆伽婆と名く、義前の釋に同じ、此れ主勝なり。

他化等とは、處の勝る故に、法勝ることを顯す。三重の勝有り。一は他化天勝。下の五天に簡ぶ。二は王宮に在りて、餘の天宮に勝る。三は摩尼寶殿は、餘殿に勝る。問ふ、

【與大菩薩云云】以下三に衆生世間を顯す文の釋なり：經の「一大菩薩衆と倶に來りて集會せり」の文の下。

【地前に別なり】今小菩薩を簡ぶ。

「欲頂高出するは、法勝を表すといはば、色界は彌勝る、何が彼に在らざるや。答ふ、「地論」に云はく、「此處感果の故に」と。謂はく、機感此に在り、是故に此に說く。感は是れ能感の機なり、果は是れ如來、機に赴き、欲に酬ゆるの相なり。又釋すらく、所證の眞理は、自作に非ざることを表すが故に、他化に寄せて顯すなり。又上の二界は是れ難地にして、修行の身に非ざるが故に、彼に在らず。修行の身は、要ず是れ欲界なり。他化は寂極なれば、法勝を寄顯するが故に、此に在り。又、第七地は報果の位にして、此天王に在りて、十地の法を攝すること、寬きを寄顯するが故に。何となれば、第七地は、是れ、菩薩位なるを以ての故に、上の一乘を攝す。是れ出世の位なるが故に、下の二乘を攝す、此十地は通じて、五乘を攝することを、表す故なり。又、此天の寶殿は、「密嚴經」に准ずるに、此他化天の摩尼寶殿は、是れ十地の菩薩の常に遊處する所なり。又「大乘同性經」一に准ずるに、此處に報佛の淨土有り。又上の兜率の莊嚴に准ずるに、此殿は亦更に彼に過ぐるが故に、虛空法界と等し。然も行德圓滿純一無雜を表すが故に、摩尼寶を以て之を顯すのみ。是故に、此天處に五義有り。一は凡處、二は七地の菩薩處、三は十地の菩薩處、四は佛處、五は圓通して、前の諸處を具す、障礙無きが故に。

與大菩薩の下は、衆生世間を顯す。中に於て五有り。一は其人を簡定す。二は其人の德を歎ず。三は德者の名を列ぬ。四は名者の數を結す。五は衆中の上首を標す。初の中に、論經に准ずるに四有り。一は大を簡びて小に異す。謂はく、地前に別なり。二は住を簡び

【三は始…異す】始を簡去し終を簡取す。

【正教輪】佛の三輪の一、教誡輪のこと。佛口業を以て他を教誡し修行せしむるをいふ。神通輪は知るべし。

【記心輪】三輪の一。他の心を識別する佛の意業の用をいふ。

て退に異す。謂はく、七地已還に別なり。三は始を簡びて終に異す。謂はく、十地の初心等に別なり。故に彼に、皆一生得阿耨菩提等と云ふ、此文は略なり。亦可し、於阿耨等は是れ、此終位なり、不退は即ち是れ、住に簡び退に異す。四は新に簡び舊に異す。亦是れ主を簡び客に異す。中に於て諸義、並に前の釋に同じ。二は、德を歎ずる中に、二あり。先に別、後に如是の下は總なり。菩薩の功德は、頓に顯すべからざるを以ての故に、先に別して歎ず。別に能く盡すに非ざるが故に、須らく總結すべし。前の中に亦二あり。先は略、後は廣なり。菩薩の德は廣くして、以て頓に彰し難きを以ての故に、先は略して歎ず。略は能く周きに非ざるが故に須らく廣く顯すべし。前の中に二あり。先に自分の行滿ずるを明す。謂はく、菩薩の二智は、眞俗に證遊するを、行處と名く。彼際を窮盡して、因位に成滿するを、悉自在と名く。後に勝進行なり。謂はく、佛慧の入處有り。是れ果位所得の圓智は、如に契ふを、名けて入處と爲す。此菩薩に勝進の慧を以て、亦隨いて入ることを得るを明す、故に悉皆得入と云ふ。前は是れ自分成、已位に在る故に、自在と云ふ。此は勝進仰成、纔に得入と云ふ。二に善能の下は、廣く歎ずる中に、二有り。先に十一句は、自分の德を歎じ、後の一切菩薩無作の下の八句は、勝進の德を歎ず。前の中に二有り。初の五句は、行修具足を明し、後の六は德用圓備を明す。前の中に二あり。初の二句は利他の行を明す。一は正教輪、二は神通輪なり、等とは、記心輪を等取す。二に具足の下の三句は、自利の行を明す。一は具願は是れ起行心なり。二は正起行にして、修は三際に通

【長時修】四修の一。三大僧祇の劫を經て倦むなき修行をいふ。【無餘修】四修の一。福德智慧を圓具して、修すなきをいふ。【無間修】四修の一。精進勇猛、刹那も廢せざるをいふ。【八定】色界の四禪定と無色界の四空定をいふ。【八解脫】八背捨といふ。三界の煩惱の繫縛を脫する八種の禪定。【三三昧】空、無相、無願三昧。【六通】一、神境智證通（神足通）二、天眼智證通。三、天耳智證通。四、他心智證通。五、宿命智證通。六、漏盡智證通。【三明】一、宿命明。二、天眼明。三、漏盡明。【三慧】聞、思、修の三。一は經教を

ずるを、一切世と名け、各多劫を盡すを、一切劫と名く。此は是れ長時修なり。然も諸利に遍きが故に、一切國と云ふ、此は是れ無餘修なり。又、前は是れ一切時、此は是れ一切處なり。常修とは是れ無間修なり。三に具足菩薩の下は、修所成の德を明す。謂はく、福智成滿の故に、具足と云ふなり。二は德用圓備の中に二あり。初の三は、利他の勝能を歎ず。一に能饒益とは、總じて所作の益相を擧ぐ。謂はく、衆生をして、出離の門を修せしむ。二に能到等とは、菩薩功業の際を窮盡するを明し、能化の智岸に到ることを顯す。三に能令等とは、所化の益相を成ずることを明す。生死は是れ苦果、道は是れ集因、涅槃は是れ滅果なり、門は是れ道の因なり。了因能く斷ずるを以ての故に、門と云ふなり。後の三は自利の德を歎ず。一は行修成勝なり。謂はく、化他は自行を圓ぜず。二は衆德圓滿す。禪は謂はく、四禪なり。定は謂はく、八定なり。解脫は謂はく、八解脫なり。三昧は謂はく、三三昧なり。通は謂はく、六通なり。明は謂はく、三明なり。慧は謂はく、三慧なり。又此菩薩は、既に並に悉く是れ一生補處なり。下の文の中に准ずるに、十禪定、十解脫は謂はく、不思議等の百千等の十三昧、十神通、十明、十慧皆悉く無盡なり。三に諸所施等とは、妙用自在を顯す。謂はく、前の通慧に依りて、所作功に現ずるが故に、善能示現と云ふなり。

第二勝進の中の八句の、初の四は殊勝の三業、修行を攝することを明し、後に其功の下の門は、廣大の三業、備さに諸德を具することを歎ず。前の中に初に身業の勝を歎ず。無

見聞せるより生じ、二は理を思惟せしより生じ、三は禪定を修せしより生ぜしもの。

【一生補處】一轉生すれば佛位を補ふ位をいふ。

【意生身】Manomaya 初地以上の菩薩の身にて、衆生濟度の爲に意の如く受生し得る身

【何が故に云云】以下論文を引き之を釋す。

作と言ふは無功用なり。謂はく、無功の大用は、即ち是れ、種類俱生無作行の意生身なり。二に於一念の下は、語業の勝を歎ず。謂はく、攝法上首請轉法輪なり。三に受持の下は、意業の勝を歎ず。謂はく、正法を持する、大心俱なり。四に常能修の下は、攝修所行を明す。謂はく、前の三業修に依りて、菩薩の諸の勝行の事を起す。二に後の四の中に、初は廣大の身業を歎ず、普賢の身の、遍く諸刹に現ずるが如し。二に其音の下は、廣大の語業を歎ず。三に其心の下は、廣大の意業を歎ず。四に一切菩薩の下は、備具の諸德を明す。上來は別歎し竟んぬ。如是の下は總じて無盡を結す。三に列名の中に、同じく藏と名くることは、謂はく「地法は衆德を含攝し、生果を出す用有るを表す故なり。故に「論」に云はく「亦能く人天を生成する道行なり」と。解脫月一人を藏と名けざることは、受法の機、清涼の器なるを表す故なり。四に如是等の下は、數を結す。論經に依るに、此中に第五の所從來の處有り。謂はく、種種の佛土なり。此中に無きことは、前に已に、他方世界より來集すと云ふが故に、此に繁せず。五に金剛藏を上首と爲すとは、會主を標顯するなり。金剛に略して二義有り。一は、是れ利の義なり。「論」に云はく、「一切の煩惱は壞し難し、此法は能く破す」と。二に是れ堅の義なり。「論」に云はく「善根堅實なること猶し金剛の如きが故に、異名をもつて說かず」と。下は藏の義を釋す「何が故に金剛藏と名く」とは、此間の意に云はく、藏の中に金剛有るが故に、金剛藏と名くとや爲ん、是れ金剛を以て藏と爲すが故に、金剛藏と名くとや爲ん。「答へて云はく「藏は即ち堅と名くと

【如孕在藏】論文に「如懷孕在藏」といふを釋す。

【七】第二に三昧分を釋す。

【又論經…爲す】初は體相に約し、後は功德に約していふ。

【別境】一切の心と共に起るに非ず各各別別の境に對して起る心所なり所樂の境に對しては欲の心所生る如きこれなり。

は、此は金剛を以て藏と爲す、是藏の中に金剛有るに非ざることを顯す。「其猶樹藏とは、此は是れ堅は是れ藏を喩顯す。謂はく、樹心堅密にして、而も生長の功能有るが故に。下に合して、人天の道行等を生成すと云ふ、是れ堅藏を釋するなり。如孕在藏とは、此は能破而も是れ藏たることを喩ふ。謂はく、子能く胎を破して出づるなり。力最大とは、此喩に合するなり。餘義は別集の『十地論』の疏の中に、釋するが如し。

(七)第二に三昧分の内の、六句分別す。一に名を釋せば、梵語の正音には、三摩地と名け、此には等持と云ふ、義は前の釋に同じ。大智慧とは、業用に從ひて名と爲す。謂はく、此定の中に、無漏の聖智慧光を發起して、能く無明を破するが故に、此名を立つ。謂はく、此定、智と倶なり。即ち此の如きの不散亂の無漏智を以て、十地の體と爲す。又正體を智慧と名け、後智を光明と名く。又論經に、大乘光明と名くとは、謂はく、此に無我の慧は、二乘に過ぐるが故に、大乘と名け、無明を破するが故に、光明と名く。此れ則ち地前に過ぐるなり。又此慧は能く、諸行を運轉し、佛果に至らしむるが故に。名けて乘と爲すとは、功能に約して名を立つ。『唯識論』の第九に云はく「大乘光明定は、謂はく、此は能く大乘の理教行果を照了する、智光明を發すが故に」と。二に體性とは、別境の五の中に、無漏の慧と倶なる定數を以て、性と爲す。又三法を以て體と爲す。一は定、二は慧、三は眞如なり。是故に爲と無爲とを性と爲す、能所證を具するを以ての故に。三に業用とは、二有り。一には謂はく、此定に依りて、能く諸佛の三業の加被を受く。二に

は、此定に依りて、後得智を發し十地を宣說す、以て機感に趣き、佛の本願を滿すを、其業用と爲す。四は種類を明すとは、謂はく、此地上の諸菩薩等の、所得の三昧は、復多門なりと雖も、統論するに四種あり。一は大乘光明三昧、二は集福德王三昧、三は賢護三昧、四は首楞嚴三昧、此には翻じて健行定と名く。謂はく、十地の菩薩を、名けて健士と爲し、健士の所行の故に、健行と名く。又、初二三地は初定を得、四五六地は第二を得、七八九地は第三を得、十地及び佛は第四を得。廣く此定を釋すること、諸本の「攝論」の如し。應に撿すべし　五に入定の意を明すとは、五の意有り。一は加を受く、二は根を審にす、三は法を證る、四は深を表す。「論」に云はく、「此法は思量の境界に非ざることを顯示す」と。謂はく、地前の、未だ眞を證せずして、法は但正しく思量して、而も能く說くこと有るに、同じきに非ず。此一文の中には、後の二義を顯すなり。五は儀軌を成ずとは、謂はく、諸聖の說法は、皆悉く定に入る。佛の將に法華大品を說かんとして、皆先づ定に入るが如し。豈如來は定に在らざること有るべけんや。故に知んぬ、說法の儀式は皆爾なり。此經の諸會、式を爲すこと大いに同じ。六に文を釋せば、一は入定の人を標す、是れ上首の故に。二には入所依を明す。謂はく、仰ぎて佛力を稟くるを、承佛威神と名く。三に正しく入定を明す。謂はく、果定を簡びて菩薩と名く。大智等は前の釋に同じ。問ふ、「既に是れ菩薩の定なり、何が故に佛力を承くるや。」答ふ、「四義有り。一は、化を推すに、佛に在るが爲の故に、現に力を承く。二は、實は自ら得と雖も、佛の勝人に對して、自在なる

【八】第三に加分を釋するに三。初に加を作すの所因を明す。

を得ず。縱ひ極小の事も、亦須く仰ぎて承くべし、佛の加に非ずんば、一法の事として成ずることを得ること無きを以ての故に。三は分に證得すと雖も、窮滿するは佛に在るが故に承くるなり。四は佛既に世に出でて、汎く弟子をして、造作する所有らしむるに、皆其に力を與ふる故に、須らく承くべし。

（八）第三に加分の中に三有り。初は總じて加を作すの所因を明す。二は加の所爲を顯す。三は正しく加の相を辨ず。初の中に二有り。先に加を作すことを明し、後に所因を擧ぐ。前の中に二あり。先に、現身に名を同じくし、後に同く讃じて加を顯す。前の中に五句あり。一は處の遠近、二は、佛の頭數、皆前の會に倍すること、知んぬべし。三に、身を現じて、衆をして見せしめ、以て信心を生ず。四は、名を同じうして主ならしめ、以て勇悅を增さしむ。五は、十方の同きを結す。二に同く讃ずる中に、四句あり。一は其得定を讃じ、二は已が佛數を顯し、三は已が名同じきを彰し、四は正しく加を作すことを辨ず。第二に、加を作す。所因を釋する中に、三句あり。一は舍那往願の力、二は現在の威力、此二は是れ緣力なり、亦は是れ果力、亦は是れ他力なり。三に汝有等は是れ因力、亦是れ自力なり。謂はく、自他の因緣因果等、合して方に此十地の法を、成ずることを得。第二に、論釋の中に二あり。先に前を釋し、後に後を生ず。前の中に四あり。一は多佛の加を釋すること知んぬべし。二に同名の加を釋す。中に於て四有り。一は同き本願を徵して釋す。二は、願は多を顯すを徵して釋す。謂はく、舍那の本願は多佛をして同じく、加せしむるなり。

【是法體】論文に「此三昧是れ法體」といふを指す。

【又是の下】論文に「又是菩薩、諸の如來、已が名を同ずるを聞已りて踊悅を增すが故に」といふを指す。

【三に何故不言の下】論文に「何が故に過無量世界と言はざる」といふを指す。

三は法古今に通ずるの釋なり。謂はく、此は是れ、同諸同説の法なるが故に、是法體と云ふなり。然るに二の釋有り。一は即ち彼十億塵數の諸佛の過去も、亦曾て同じく剛藏菩薩と作りて、加を受けて此十地の法門を説く。今正覺を成ずる、亦此門に在るが故に、説處有れば、即ち能加す。是れ彼佛の本願なり。謂はく、此剛藏菩薩は、當に成佛すべき時も、亦此事に同じと、此釋は論文に順ず。二には舍那佛に約して釋す。謂はく、舍那は本、菩薩の行を行ぜし時、一の舍那佛の所を見るに、能加の諸佛を、同じく金剛と名け加して地法を説く。舍那は今正覺を成ず、本願今成ずるが故に。彼能加の佛も亦金剛と名く、故に不異名と云ふなりと。此釋は經文に順ず、『經』に、舍那の本願の故に、諸佛に加せしむと、云ふを以てなり。『涅槃經』に、「往昔此處に佛有り、釋迦と名く、侍者を舍利弗目連と名け、大利益有り、我此に因りて願を興すが故に、今亦之に同じく、此に在りて法を説く」と云ふが如き是類なり。四に又是の下は、同名增踊を明して釋す、知んぬべし。三に何故不言の下は、十億の數を釋するに三句あり。一は通を徴して多を顯すを釋す。謂はく、若し直に無量を擧ぐるに、或は十億塵數に至らざるべし、言總にして定むること無きを以ての故に。下の文の多百千等に同じ。又釋す。前の會の、百萬の佛刹塵數の諸佛と、此中の十億とは、百萬を以て一億と爲すが故に、是故に方便して漸次に、以て多佛を顯す。若し直に無量と言はば、則ち方便に乖くが故に、言はざるなり。又釋す。此に多佛を顯すことは、十數を以て則と爲し、以て無盡を顯すが故に、多佛と云ふ。若し直に無量ならば、但

【二は何故…下】論文に「何が故に定んで十億佛土と言ふ」といへるを指す。

【第四に…四あり】今家の釋意は、本經を以て論經を釋す。

【九】二に加の所爲を釋す。經の「一切菩薩の」等の文。初に經に依りて略して科す。

【前の中云云】後に論に依りて廣く釋す。

【初の中…有り】經の「一切の菩薩の不可思議なる智慧地に入らしめんが故に」等の下。

【般若論經】般若論上の五丁に「此地に三地有り。謂はく、信行地、淨心地、如來地なり」と。

【下の文】論二の五左。

一重の無量を得て、是れ重重無盡に非ず、是故に十數は無量より多し。二は何故定言の下は、定んで數同じきを徴して釋す。三に此經の下は、則と爲すこと、大同なるの釋なり。第四に彼佛の下は、加を作すことを釋するに四あり。一に先作是願とは、本願の加を釋し、二に今後自加とは、現在の威神の加を釋し、三に後餘佛加とは、後に簡びて前に異す。謂はく、此は並に是れ舍那の力加にして、是れ餘佛に非ず、餘佛の加は、後の文處に在りて辨ず。四に故言等は、經を擧げて結す。後を生起する中に「何が故に加する、此法を說かんが爲に」とは、後の所爲を生ず。謂はく、此地法を說くが故なり。復云何加とは、後の加相を生ず。文は後に在りて遠きを以て、是故に擧げず。下の文に對顯せり。

(九)第二に加の所爲を釋する中に、二十句の文あり。二利に依りて分つに、初の十は他に共ずるの自利なり。後の十は、自に共するの利他なり。二利の行、相融相攝して、同じく地の中に在るを以て、本後二智の處に具足す。今文義の差別を、寄顯するを以ての故に、二の別を分つ。前の中に、論主は四門を作りて解釋す。一は總釋して本を顯し、二は本に依りて末を開き、三は末を會して、本に歸することを明し、四は本末無礙を顯す。初の中に、總じて地法の緣起を論ずるに、六義有り。一は、一切の菩薩是れ信行地とは、所被の機を擧ぐ。謂はく、地前の菩薩は未だ眞如を證せず。但信心に依りて、習行を起すが故に。無著の『般若論經』の中、亦此名に同じ。問ふ、「若し唯地前は是れ所爲ならば、何が故に下の文に、解脫月、衆の請を歎ずる中に、此衆に五種の阿含淨、四種の證淨有りといひ、

【外凡】未だ眞證を得ざる位を内外に分ち、似解を得たるを内凡といひ、之に反するを外凡といふ。

【强き】一本微に作る。

【偏に就きて釋す】信行地に就きて釋する意。

【四位】資糧、加行、通達、修習の四位。

【彼に收める】信行地に收める意。

【不思…名く】論文に「不可思議佛の法とは是れ出世間道品」といふを指す。

【智品…屬なり】十波羅蜜の行は、出世間智行の眷屬なる意。

又下の大衆請の中に、十力淨心と爲すや。『論』に釋して云はく、「未入地の者に淨心を得せしめ、已入地の者には、十力を得せしむ」と。又下の文の、轉生時の益に約するも、亦外凡に通ず。此等の文に據るに、即ち外凡及び地上に通ず、何が内凡迴向等の位に局らんや。』答ふ。「二の釋有り。一は、理實には是れ通ず。誠に所說の如し。但今は論主、敎力の益强き處に就きて釋す。何となれば、謂はく、地上の菩薩は、設ひ敎を得ずとも、亦能く自ら進んで、敎義を假ること微なり。外凡の人は、設ひ敎を蒙らしむとも、未だ敎に依りて、即ち地に入らしむる能はず。敎益は亦弱し。唯信行地のみ、敎を得て便ち進むが故に。外凡の、敎を闕きて進まざるに異るが故に、地上に異にして、敎の義を假ること强きが故に、偏に就きて釋す。無著の論に「此位の菩薩は、初地に入らんと欲して、先に敎授敎誡を求む」とは、是れ此義なり。二に初地の加行位の如き、既に信行地と名く。即ち諸地の前は、倶に加行位を皆信行と名く。『攝論』の中の、意言無分別の觀は、四位に通ずるを以て、故に知んぬ、地上にも亦有り。外凡の遠位の如き、亦通じて彼に收める。然るに親しく内位に入りて現證するに據るが故に、此に約して辨ぜり。』二に、「不思議の佛法を、出世間道品に名くとは、此は是れ所得の法なり。然るに二の釋有り。一は因に約す。謂はく、十地の法體は、是れ出世間無流の法にして、心言路絕を不思議と名く。通じて佛果を生ずるが故に、名けて道と爲す。下に、大聖道と云ふは、是れ彼因なるが故に。十位の品類差別を、品と名く。又、道は是れ智品、是れ檀等の行眷屬なり。二は果に約す。謂はく、佛

【餘の論】倶舍、婆沙、雜心論等。
【初め…終】初とは見智、後とは智證をいふ。
【四に欲宣云云】論經に說といふ、本經に欲宣といふ、今其同を知らしめんとし、先に本文、次に論文を出して過成す。

果所得の法なり、故に佛法と名く。下位の圖度に非ざるを、不思議と名く。地上の菩薩をして、分に此法を證せしむるを、出世間道品と名け、地智の遊ぶ所を道と曰ひ、分に證して未だ圓ならざるを、品と名く。三に「明とは見智得證」とは『般若經』の悉知悉見、『楞伽』の中の聖智、聖見、聖慧眼、及び餘の論の眼智、明覺等皆此類なり。創めて觸むるを見と名け、委く照すを智と名く。智照此に非ざるが故に、名けて得と爲し、轉に實して契合するが故に、復證と名く。初の二は觀解、後の二は行契、各初は始、後は終なること、知んぬべし。四に欲宣とは『論』に云はく、「說とは、中に於て分別す」と。此能所證の得法の中に於て、言を以て十位の差別を分析し、地行の優劣巧慧等の異を明す故なり。五に「入とは、信業得證」とは、謂はく、地前の信業は、遠く入の義有り。地上の得證は、現に究入を成ず。通じて入の義を論ぜば、必ず後從り此に至るが故に、始終を具するなり。亦信は始、業は終、得は始、證は終なり。六は「智慧地とは、謂はく、十地の智、本分の中に說くが如し」とは、謂はく、此證理の地智に、佛果を生成し、住持する等の用有るを、地と名く。始め歡喜より終法雲に至るまで、本分の中に顯すこと、知んぬべし。此上の六義は、融合無礙にして、教及び能に通じ、證及び智に通じ、人及び法に通じ、因及び果に通じ、混通無礙にして、總じて一團と爲すを、十地の法と名く。若し之を後に展ぶれば、種種の差別皆悉く、此總句の中より出づ、是故に此を名けて、根本入と爲す。上來は總釋して本を顯し竟んぬ。

【自下第二…竟んぬ】二に本に依て末を開く。

【答ふ「十地云云】二釋の中、初は但行布門に約し、後は圓融の行布に約す。

【十地の…放つ】地前を說くの意これ地前を以て十地阿含分と爲す。

【初の一…名く】經の「一切の善根を攝す」の一句。

【二は…釋す】經の「善く一切の佛法」の一句。

【三に…釋す】經の「廣法智の故に」の句。

【四に…顯す】經の「決定して諸法」の句。

【化他…教む】論に「菩薩衆生を教化する即ち是れ自ら佛法を成ず」等と。論文は譯人の下に在るも、今は教化入の下に屬して釋す。

【五に見位智云云】

自下第二に依本開末するに、分つて九句を成ず。中に於て四位あり。謂はく、願樂位、見位、修位、究竟位なり。初の四は、地前の願樂位に寄在す。次の一は初地に寄せ、次の三は修位に寄せ、後の一は究竟位を明す。問ふ、此中に正しく、十地の法を說くと爲す。何が故に乃し地前及び佛を說くや。答ふ、「十地の前に、下を起すの功有り、後に上を成ずるの義有ることを、顯すが爲なり。又釋すらく、十地の證智に由りて、阿含の光を放つ。是故に地前は是れ、此十地阿含分の攝なり。此地智は、果海に依りて成ずるに由るが故に佛果有るは上の不思の佛法、及び下の鳥跡所依の空等、並に是れ共事なり。初の中に、初の一は聞慧修の善根に約して、攝一切と名く。二は思慧の始は、道理を簡擇することを明す。「論」の中の智方便とは、善分別を釋するなり、道品は佛法を釋するなり。三に思慧の終は、謂はく、思に因りて廣く知る。彼彼義は、諸法を釋し、種種知は、廣知を釋す。四に修慧を明す。疑無ければ、立教信說ずべきが故に、決定說と云ふ。謂はく、修は二利に通ず。今は利他の菩薩に據る。化他は即ち是れ、自ら佛法を成ずる故に、「自利に入れて收む」「論」の中に、所思の義に隨ふとは、是れ上の思慧の所思なり。名字具足は、是れ聞慧の所持の故に、決定して說くなり。上來は信樂を顯す、自下は得證を辨ず。五に見位智は、謂はく、地前の加行位の終に、唯識無境の義を觀ずるに由りて、無間定に依りて、雙べて彼能所取空なりと印す。彼增上の力は、識の中の本性無流を引起し、大智照を生起し、法界に遍滿するを、名けて初地に、眞見道に入ると爲す。「論」の中の一切法平等智は、無分

經の「無分別智もて」等の一句。

【加行位…由りて】四が行位の終、忍世第一法の中、四如實智觀を取りていふ。

【論の中…智】論に「於一切法平等智、見道時中善淨故」の文をいふ。

【唯識論】同論九の十一丁。

【今辨ずるに四句】見相二分に就て四句を作る。

【六に修道位云云】經の「一切世間の法も…故に」の句。

【地地別に…故に】今此位に於て所知障を斷ずる意を明す。

【七には修位を明す】經の「出世間の善根」等の句。

【八には十地云云】經の「不可思議なる智力」等の句。

【法雲に契入云云】第十地を明し、維摩經の問疾品を引證す。

別智を釋す。謂はく、初地に於て、正しく眞如を證し、能所の二相無きが故に、平等と云ふ、「唯識論」の中に、或は有智無境と云ふは、眞は相を絶するを以ての故に。或は雙泯と云ふは、境智の相如なるを以ての故に。今辨ずるに四句あり、皆得て之に準知すべし。見道時中善淨とは、善淨不雜を釋す。謂はく、二我の分別隨眠を離る。此文に善分別とは、是れ彼不雜の義なり。謂はく、煩惱を離るるが故に、分と名け、永に斷ぜしむるを、善と名く。此れ無間道の中の、斷障の義なり。又釋すらく、善淨不雜は、是れ解脫道の中に、彼無爲清淨を證するの義なり、故に不雜と云ふ。此に善分別とは、是れ無爲を顯證するの義なり。又釋すらく、無分別は是れ根本智、善分別は是れ後得智にして、勝進道の中の起行の義なり。六に修道位を明すが中に、地地別に一の無明を斷ずるが故に、煩惱障に於て、亦永に伏離するが故に、世法不染と云ひ、不放逸入と名く。魔法は是れ世法なり。七には修位を明すが中に、智行轉た進むを、地地轉入と名く。謂はく、無流の善根の、永く一切の三不善法を離るるが故に清淨と云ふ。無貪等とは、無瞋無癡を等取するなり。「復善根有り、能く出世間道品の因と爲る」とは、是れ諸地の中の、加行の善根なり。八には十地の學窮まるを、菩薩盡入と名く。下の大盡分の中に、第十地の菩薩は、如來の十種祕密の智に入ることを明す。祕隱深密にして測知すべきこと難きを以ての故に不思議と名け、法雲に契入するを彼智力を得と名く。淨名を歎じて「諸佛の祕藏は、入ることを得ざること無し」と云ふが如き、此之謂なり。九には究竟位は、因道既に圓かに、佛果斯

【九には…名く】經の「一切智人の」等の一句。
【自下第三…故なり】三に會末歸本を明す。
【是諸入云云】論に九入を明し了りて、「是諸入は智の義の差別を校量せん爲に」等といふなり。
【第四に…知れ】四に本末無礙を明す。「論文云一切の所說十句の中、皆六種差別相門有り」等といふ下。
【謂はく定執…等】下は無盡緣起自在を反顯す。
【定執の見】總別同異の別を立つるの妄見。
【一は末…有り】萬像繁興すれども眞體一味なり。故に起にして不起、不起にして起なる意知るべし。
【相望するに…有り】緣起現前の諸法を相望するに、

に剋することを明す、果原を窮滿するを、佛盡入と名く。『論』の中の入智とは得の字を釋するなり。上來第二に、依本開末竟んぬ。

自下第三に會末歸本なり。是諸入と言ふことは、上の九入を牒す。爲校量等とは、其無別の別を顯す。謂はく、地上乃至佛地に寄せて、地智差別の次第轉勝の相を校量す。根本入の中にも、亦此の如き等の、行布の次第、決定して差別すと、謂はんとには非ず。是故に末を融じ本に歸して、無二を顯す。前は本に依りて末を起して、無別の別を明し、今は末を會して本に歸し、別にして別無きを明す故なり。

第四に本末無礙を明すとは、謂はく、六根の總別無礙を明す故なり。此六相の義を釋するに、六門を作る。一は教興の意を明す。謂はく、定執の見を破して、以て緣起圓融の法を顯す。此理現前すれば、一切の惑障は、一滅一切滅なり。行位は一成一切成なり等。二に種類とは、自にあらず他生にあらず等の四句、及び不有不無等の四句、並に不生等の八不十不等、皆悉く事を會して理に入る、是れ此流類なり。但彼等理に入れば、以て一寂に順ず。今此理に入れば、彼事を圓融して、便ち相即相入して、普賢の法を成ず、斯左有有るのみ。三に所出を明さば、此文出づること、下の經の第四の大願の中に在りて、經家自說す。是れ論主率意にして作るに非ず。四に建立を明すとは、何が故に唯六にして、多ならず少ならずといはば、謂はく、汎く緣起の法を論ずるに、要ず三門有り。一は、末は本に依る、起不起有り。二は、彼所起の末、既に本を帶ぶ。是故に相望するに、同有り

同一理體の故に同事事別なるが故に異なり。

【三に…爲す】前の二を雙釋して、以て法界緣起の體相を顯す。

【事…辨定す】論文を引きて釋す。

【別依本云云】これ論文中の難解の意を遠釋す。

【增相とは…顯す】論の「異相とは增相の故に」の文を釋す。

【緣成…顯す】論の「成相とは略說の故に」の文を釋す。

【緣散じて…辨ず】論の「壞相とは廣說の故に」の文を釋す。

【五に…勸む】論に「餘の一切の十句中、義に隨ひて類知せよ」の文を指す。

異有り。三に彼本を帶するの末は、旣に本に收むることを爲す。是故に當體に存有り。壞有り。若し此三を具せざれば、緣起を成ぜず。三が中に各二の故に、但唯六なり。五に問答決擇とは、二有り。初に逆は謂はく、總に非ず別に非ず等、各各五相に形奪し、諸相皆盡くるが故なり。二に順は謂はく、亦は總、亦は別等、各各順じて、相成就する等、思准して之を作れ。六に文を釋するに五有り。一は法に約して數を擧ぐ。謂はく、所說の法の中に於て、六種の相等有り。二は敎の義を辨定す。此に言說解釋とは、是れ敎を定む。謂はく、此中に於て、此六相の言說を安んじて、爲に經文を解釋せんと欲す。應に此意を知るべし。又釋すらく、此中に六相を釋するは、是れ此處の經文に非ず。但是れ論主解釋の意なること應に知るべしと。除事事謂陰界入等とは、此は其義を辨定す。謂はく、道理に約して融通を說く。是れ陰等の事相の中に、辨ずるに非ざるが故に之を除簡す。三に列名は知んぬべし。四に釋相の中に、別依本とは、總に依りて、別を開くことを明す。滿彼本とは、還りて能く總を成ず。謂はく、要らず本に依るの別は、方に能く本を滿ずる故なり。增相とは是れ、前の九入の漸增の相にして、以て異を顯すなり。緣成和合は、略言標顯するなり。緣散じて作す無ければ廣く因緣辨ず。如世界成壞とは、喩を擧げて以て顯す。謂はく、百億の四天下、合して一娑婆界を成ずるが如き、略言標顯するを成と爲す。若し分別して廣く說かば、百億の差別あり。一娑婆をして依住する所無からしむるが故に壞と爲す。五に除一切等とは、一切處を勸む、准類して之を知れ。

【一〇】初に論に依りて總句の意を述す。經の「如實に菩薩の十第」等の下。
【始者云云】下、論文の釋意を述す
【又此論…知れ】後に通じて教證を辨ず。
【字義二藏】論二の五丁に字藏成就義藏成就を說くをいふ。

（一〇）第二に自に共ずる利他の中に、十種の始終とは、經本に略して始終の總句無し。始者信欲親近等とは、此は求法の初を明す。信に非ずんば求めず、欲に非ずんば能はず、苦を忍び法を求むることは、內に信欲を起すに由る。是故に外に能く善友に親近するを、得法の方便と爲すなり。終者念持諸地とは、此は法を得て忘れず、所受を憶念し。任持して、失はざることを明す。所持は是れ何ん、謂はく、諸地の法なり。理實には、此二は通じて諸地に在り。下の十句は皆、始終と名くるを以ての故に。若し位に寄せて分たば、始は地前に在り、終は地上に在り。上の入の中の信樂は地前、得證は地上なるに同じ、復有阿含及證、如是次第、依初相應知とは、更に一翻を以て、始終の義を釋す。始は阿含に配し、終は證得に配す。次の如く配釋すること、前に同じく應に知るべし。故に初相と云ふは、前の始終の相を指すなり。阿含は正音に阿笈摩と名け、古くは翻じて淨教と名く。又譯して來と名く。此言教は、煩惱無き人の邊より來るを以てなり。今譯して傳と名くるは、謂はく、此聖言は是れ、三世の佛の同じく說く所、但古今の諸佛相傳へて說く、新翻の作に非ざるが故に、傳と名く。又、此論に依るに、上下の文の內、阿含及び證に、總じて九重有り。一は行教相對す。音聲の言教を、名けて阿含と爲し、一切の功德を說きて、以て證と爲す。猶し下に、說中の字義二藏のごとき是なり。二は位に約して相對す。解行已前は、教に依りて修行するを、名けて阿含と爲し、初地已上は之を說きて證と爲す。猶し下の解脫月の第二請の中に、衆を歎ずるごとき是なり。謂はく、地前に聞思修等を起すを、阿含

【緣照の解】如を證する、眞照の智を簡ぶ、今は修行解智の分齊なり。

【世間修：曰ふ】上の敎證は尙ほ世間智の所知の邊なるをいふ。

【法性は…爲す】本有の性體、今正しく顯現するをいふ。

【下の文】第四地調柔果の中の文。

【八は自分勝進云云】以上の二利具足是れ菩薩の自分にして、これを證といひ、進んで佛敎を受くるを阿含といふ。

【下の文】論一の廿五丁。

淨と名け、初地已上の一切の行德を、通じて證淨と名く。三に修成相對す。一切の地の中の聞思修、報生の識智と、此等の四心緣照の解を、名けて阿含と曰ひ、眞智言を出す、之を以て證と爲す。故に下の『論』に言はく、「聞思修等は、是れ則ち可說なり。可說を以ての故に、名けて阿含と曰ふ、地智は文を離る、之を名けて證と爲す」と。四は眞僞相對なり。一切の地の中に、眞僞合修するを、名けて阿含と曰ひ、僞を捨て眞に契ふを、之を名けて證と爲す、猶し下の所明の義說の二大のごとし。說大は阿含方便修なり、義大は是れ證行成なり。五は相實相對なり。世間修の中に、彼證相を得るを、名けて阿含と曰ひ、本實相に契ふを、之を名けて證と爲す。猶し下に說く所の、增上の妙法光明法門のごとし、增上は是れ證、光明は是れ敎なり。六は體德相對なり。彼離相所成の行の中に就きて、無始より法性は本隱れたり、今顯るるを、之を名けて證と爲し、本に依りて成ずる所の方便の行德、敎に依りて修生するを、名けて阿含と爲す。下の文の中の、練金の況する所、金體を證に喩へ、鐶等の嚴具を、阿含に喩ふるがごとし。七は體用相對なり。前の體及び德相、從ふを證と爲し、此に依りて所起し、世間に隨順する敎智の用を、名けて阿含と爲す。猶し下の文の中の、珠放光等の所況の法のごとし。是れ珠輪等の淨は、證體に喩へ、珠光炎等は、阿含に喩ふ。八は自分勝進相對なり。自分所成の體德及び用を、皆名けて證と爲し、能く佛敎を受くるを、稱して阿含と曰ふ。猶し下の文の中の、金剛藏を歎ずる、二力のごとき是なり。妙智と及び辯とは名けて證力と爲し、佛の教法に於て、念堅淨

慧を、阿含力と名く。九に詮に約し、實に就きて相對す。眞智の體を說きて、以て證と爲す、即ち此れ證體なり。詮に約して十に分つを、名けて阿含と爲す。猶し下の文の中の、虛空の跡處の、所況の法のごとし。是れ虛空の平等なるは、地の證智に喩ふ。故に下の「論」に云はく「字身の住處は、證智の所攝なり」と。空中の跡は、地の阿含に喩ふるなり。故に下の「論」に云はく「地智名句字身無きに非ず」と。名句字身は、是れ阿含の法なり。此九種は上及び下に通ず。應に準じて之を知るべし。

此中に別して、十句の始終を辨ずる中に、初の三は、地前の思と修と利物となり。次の一は見道、餘の六は修道なり。此十の始終は、前の入より狹し。彼入の中には、前は聞慧を該ね、後は佛を攝し盡すを以てなり。此と同じからざることは、理實には齊しく通ず。但聞慧及び佛は、是れ正地に非ざるを以て、前に已に明すが故に、重ねて辨ぜず。一は攝の始終とは、謂はく、思に稱ひて法を宣ぶるが故に、實說と云ひ、實說は德を成ずるが故に、名けて攝と爲す。彼聞慧は、他に從ひて法を受く、師の義、便ならざるを以ての故に、論ぜざるなり。二は欲の始終とは、是れ、思慧の上品なり。增上の求心、之を名けて欲と爲す。菩薩敎化して、衆生をして、諸地に契合せしめんと欲するが故に、令證一切佛法と云ふ。此は是れ安住の義なり。念は是れ其欲なり、隨順は是れ證せしむるなり。三は行の始終とは、即ち修慧なり。此に於て加行位の中に、正しく意言唯識等の觀を觀ず、之を名けて行と爲す、證位に非ざるを以て、是故に名けて觀分時中と爲す。彼地上の眞無流の法

【下の文】論二の十一丁。

【此中別して以下】十に別して、十句の始終を辨ず。

【一は攝の始終】經の「謂ゆる如實に菩薩一等の下。以下論文を以て經を釋す。

【彼聞慧…論ぜざるなり】前の人に對して聞慧を缺くの所由を示す。

【二に欲の始終】經の「菩薩の十地に一等の一句の下。

【三は行の始終】經の一「分別して無漏の法を」の一句の下。

【證位に非ざる云云】此下經論一致の旨を示す。

【復相覺…爲す】經文に合する中、論は自利、經は利他を主とするも、共に菩薩行なる故に一致す。

【四は證の始終】經の「大智慧の光明」の一句の下。

【又論經云云】論に依りて廣く釋す

【此事の中云云】別して論文を釋す

【今三釋を作る】初二は昔解。

【五は修道の始終】經の「具足の智門」の一句の下。論文に「出世間の智、智力をもて法義に得入すといふ」を釋す。

に於て、帶相觀を作す。是故に彼無流道品に於て、但能く相覺を修し、未だ無相覺を得ざるなり。復、相覺に依りて、前機に授くと說くを、名けて分別と爲す。『攝論』に、「現前に少物を立てて、是れ唯識の性と謂へり」等と。『唯識論』の帶相觀の心等、並に此位の行なり。是れ意言の觀の故に、經の中に說と名け、論經に觀と名くるも、其義一なり。四は證の始終は、即ち見道の位、大智光明は是れ根本智、善分別とは是れ後得智、以自嚴とは、二智の德を成ず。又論經の釋の字は、是れ此分別なり。分別の中の勝を、善分別と名く、勝とは法無我の故に。小に過ぐるを大と名け、惑を治するを明と曰ふ。此事中彼時中皆善知とは、方便の字を釋す。是れ相見道の故に此知有り。『論』に既に顯ならず。今三釋を作る。一に此事とは、是れ此見道の事中なり。彼時中とは、是れ地前觀分の時中なり。正しく此を照し、兼ねて巧に彼を知るを、皆善知と名け、以て方便と爲す。方便は雜し是れ、自嚴の義なるを以てなり。二に此事前に同じきを釋す。彼時は是れ、後の修道位の中の、所有の行相にして、此後智、前を照し後に達するを以て、皆善知と名く。三に此時中とは是れ此後智相見道の中なり。彼時中とは是れ、彼本智眞見道の時中なり。皆善知とは、巧に二智の用を具し、自嚴するを以て、名けて方便と爲す。又釋すらく、眞見道に法るを以て、兼ねて彼を知るが故に、皆善知と云ふなり。五は修道の始終は、謂はく、出世の智は其智體を辨ず。智力とは、入法の功能有ることを明す。法は是れ行法、義は是れ義理にして、是智の所入なり。謂はく、此法義は能く具智を出生するを、具智門と名く。修道の

智力は、能く彼門に入るが故に云ふなり。

後の五の始終は、論主五障を治するに寄せ、翻對して以て釋す。問ふ「此處の五障は、實とや爲ん、虚とや爲ん。」答ふ「亦は實、亦は虚なり。」謂はく、此障有る者は、此位を得ず。此位を得る者は、此障無きが故に。是故に、假に此障に對して、翻じて治行を顯す。即ち十種の釋の中の顯發釋なり。」『論』の中に、先に別して五障を辨じ、後に經を擧げて對顯す。今並に通じて、一一の障を釋する中に、各二有り。先に障の名を擧ぐ。謂はく、正を以て邪を摧くこと能はず。下に障の義を釋して「已に正義を説けども、他の言に能壞せらるとは、自行の失なり。眷屬離散は、化他の行の失なるが故に、障を成ずるなり。」下は經を擧げて治を顯す。彼所著に隨ひて、己が正義を顯し、邪執を對治するが故に。所應住に隨ひて次第に説くが故にと云ふは、此れ標なり。下の句は釋す、無礙藥辯才智慧明を得るを以ての故に、是故に能く他を破するなり。論經には此二を合せて、一句と爲す。

二は、難に答ふること能はずとは、此は名を列ぬ。前には破すること能はざることを明し、此には立つること能はざることを明す。問に於て茫然として自利の行を失ひ、言を設くとも信ぜずば、利他行を失ふ。下は經を擧げて、治を顯す。謂はく、無礙の大智地を證得するが故に、具足等と云ふなり。三に小に於て戀を起し、二利を失ふも大心を忘れざる故に、以て治を成ず。四に生に於て化を怠るは、亦兩利に乖く、物を化して疲れざるが故に、以て治を成ず、故に教化成就等と云ふ。五に化に於て巧ならざるが故に、方便無く、亦二益

【後の五の始終云云】第二に後の五句を明す。

【論の中云云】正しく本文を釋す。論に五障を擧ぐ。論に曰はく一、不能破諸邪論障。二、不能答難障。三、樂著小乘障。四、化衆生懈怠障。五、無方便智障。

【下は經に云云】論に、對治障を説くに五種の始終を擧ぐ。一、能破邪論障始終。二、能善答難始終。三、樂著小乘對治始終。四、化衆生懈怠對治始終。五、無方便智對治始終。

【三に小に於て云云】經の「菩薩の心を忘失」等の一句の下。

【四に生に於て云云】經の「一切衆生界」等の一句の下。

【五に化に於て、云云】經の「一切處に至る、決定智」

等の一句の下。

【又此五障…周し】次に重ねて收めて總釋す。

【二】以下、正しく加の相を明す文を釋す。經の「金剛藏當に此法門」等の下。

【致】一本に彼の字に作る。

【彼】論には故の字に作る。

を失ふ。五明等の一切處の法に、明かに達する巧慧を以て、決定智と名け、能治と爲すなり。又此五障の中に、初の一は、他の邪宗を破すること能はず。二に、能く他を破すと雖も自己の正宗を立つること能はず。三に、能く立破すと雖も而も情に小乘を樂ふ。四に、小乘を樂はずと雖も而も化他に簡らん。五に、化は疲れずと雖も而も化他の方便無し。是故に五に至りて化行略して周し。上の二十句は、總じて加の所爲を明し竟んぬ。

（二）自下第三に、其加相を明す。中に於て三有り。謂はく、口意身の加なり。此三加の次第、其二門有り。一に他方の佛に約せば、先づ口加とは、前の言便に乘じて、說を勸む。先に於て說くは、內智淨覺を因と爲すに由る。是故に、次に意加は、智を與ふることを明す。智を得て說くに堪ふれば、事次に定を起つが故に、後に身加摩頂して起たしむ。二に舍那佛に就かば、先に意、次に身、後に口なり、定を得せしめんと爲すに、定は意力に由る、是故に先に居す。身光照觸は、威德を增すを以て、雲臺は偈を說き、口業に教を加し、方に能く說くこと有り。是故に此三は微より著に至り、說を成ずるのみ。初の口加の內に就きて、十句あり。初の句は是れ總なり。汝當說とは、其をして辯說せしむ、即ち是れ辯才なり。謂はく、所得の法義に隨ひて、憶念して忘れずして說く、後に法門の差別とは、「論」の如く應に知るべし。汎く方便を論ずるに、三種有り。一は發起方便なり。謂はく、加行の、根本を發起するが如し。即ち七方便等なり。二は無住方便なり。謂はく、悲智巧に相導引して、生死及び涅槃に住せざるが故に、方便度等の如し。三は集成方便なり。謂

【下の九句】經の「謂ゆる諸佛の神力…」の下。論意を以て經文を釋す。

【自力の中云云】經に「自の善根清淨なるが故に」の下。

【因中に四義あり】經文の「自の善根…智身に入るが故に」の四句。

【德を成ずる中云云】經文の自利の第四句中、論に三盡を開く。菩薩盡、佛盡、二乘不同盡、これなり。

【十地の終心云云】下は二種の利益を明す中、一に現報利益。經の「一切等の佛に於て受記」の句の下。

【法雲地】菩薩十地の第十。大法の智雲、遍ねく法雨を灑ぐ位なり。

はく、諸の緣起巧相集成して、六相方便等の如し。今此は集成方便に當る、故に、此法善巧等と云ふなり。下の九句は別の中に、二に分つことは、謂はく、自他の二力なり。諸の緣起の法、皆因緣有りて、親疎の二力成ずるを以ての故に。他力の中に二あり。一は如來神力、二は智明加の故に。經の中の二句に、之を顯すなり。自力の中に、四に分つことは、因中に四義有るを以ての故に。一は有力能作の義、二は無力不作の義、三は二義を具するが故に、能く業生を引く。四は二相を泯ずるが故に、理に稱ひて德を成ず。又釋すらく、此四は漸次に疑を釋す。疑ひて云はく、何が故に加を得る。因力有るを以ての故に。若し是れ力有らば、何が復加を須ひん、因は作さざるを以ての故に。若し是れ作さずんば應に用無かるべし、無作に由りて、方に物を益するに、堪ふるを以てなり。若し機に逐ひて物を益せば、應に自體を失ふべし。身淨くして圓備するを以ての故に。又釋すらく、初の二は自利、一は教行、二は證行なり。又一は相、二は體なり。次の一は利他、後の一は二利滿ずる故に德を成ず。德を成ずる中の三義の內に、一は當位に德を顯し、後の二は寄對して勝を辯ず。初は因位窮終の故に、菩薩盡と云ひ、位滿じて、益を成ずるが故に、二利益有りと云ふ。謂はく、法身眞理は、唯是れ無分別智の正證にして依止なり。是れ業心意等の所取に非ざるが故に云ふなり。『楞伽』に云はく「相を取るを識と名け、取らざるを智と名く」と。理智合して依止の義を成ずるが故に法身智身と云ふ。十地の終心に、佛の職相を受くるが故に、受佛位故と云ふ。法雲地の受位分に說くが如し。因位の中に在

【二は此因云云】次に後報の利益。

【五那含天】五淨居天（無煩、無熱、善現、善見、色究竟の五）に同じ、色界第四禪に不還果を證せる聖者の生處。

【十度の行】十波羅蜜の行をいふ。

【智度】智波羅蜜をいふ。

りて、此益相有ること、此位に因を改めざるが故に、現報利益と云ふ。謂はく、一切の佛は一切を益する智光を放ちて、此菩薩の頂に入る。故に於一切佛得受記と云ふ、受記は即ち是れ受位なり。二は此因位を轉じて、成果の處に至るが故に、後報利益と云ふ。此は是れ十地の菩薩、報果を攝する處にして、便ち此處に於て、報身の佛を成ず。理實には闇藏猶未だ成ぜず、此れ當に必ず成ずべきが故に、德、身に在ることを結す。下の佛盡の如きも亦、此に同じて辨ず。摩醯は此に大と云ひ、首羅は此に自在と云ふ。智處に四義有り。一には下の三禪は、慧多定少なるを以て、智をして勝れざらしむ。四無色の中は、定多慧少にして智亦勝れず。此第四禪は、定慧等きが故に、是故に智勝る、故に智處と云ふ。二には、此處に五那含天は、是れ聖人所生の處、聖人智勝るるが故に智處と云ふ。三は、此處に十地の菩薩有りて、報果を攝す、彼菩薩十度の行を攝するに、別して智度を成ず、故に彼處を名けて、以て智處と爲す。四は、此處に報身の佛と成りて、一切智一切種智を得るを以ての故に、此處を名けて、以て智處と爲す。此は是れ世間の中の最高勝處にして、彼に於て現に成佛するが故に、世間高大の身と云ふ。後の二は寄對して、勝を顯すが中に、初の一は下に對して彰出す。彼二乘に於て、少分も同ずること無し、故に不同盡と云ふ。又彼二乘は、世間有りと見て、超過するが故に、此に於て世間は超えて而も盡さず。涅槃有りと見て取證すべし。出世淨に於ても、亦未だ盡すことを得ず。今菩薩は皆、佛果に於て彼彼際を盡すが故に、不同盡と云ふ。後の一は上に望めて同を顯す。謂はく、

【校量…上】論文を出す。

【第二の意加の中云云】經の「卽時、十方の諸佛」等の文の下。

【義慧】一本は智慧に作る。

際を窮盡するが故に、佛盡と云ふ。「經」に此句を略す。謂はく、二力の中に、自力勝るが故に、多義を以て上を顯す。故に校量轉勝上上と云ふなり。又釋すらく、此佛盡は理實には、剛藏猶未だ成就せず、何が故に此中に辨ずるや。以へらく、自力を顯し勝を辨ずるが爲の故に此に說くのみ。

第二の意加の中に二あり。初の十句は、正しく意加を明し、後の十句は、偏加の所以を釋す。何が故に、意加に就きて釋すとならば、意加は是れ本なるを以ての故に。又前の口加は、自他の二力有り。今の意加も亦爾なり。初の十は、他力の正加を明し、後は自力、加に堪ふることを明す。初の十句の內、初の句は亦は總亦は別、餘の九は唯別なり。問ふ、「意加は智を與ふ、何が故に初の句は色身勝を明し、餘の九は名身勝を顯す。名身は是れ語、此は但身と語となり。何ぞ意業に關らんや。」答ふ「此に二義有り。一は義慧勝るが故に、威儀も亦勝るが故に、色身を擧げて、以て彰す。又、其智を觀ぜんと欲すれば、當に其說を觀ずべきが故に、名身を擧げて以て表示するのみ。又、汎く名身を論ずれば、亦意業に通ず。五蘊を分ちて名色と爲すとき、卽ち四蘊を名と名くる等の如し。二に但彼諸佛所與の智を釋するに、略して二種有り。一には、衆に處して、無畏の智を與へて、之を色身に顯す。二には、說法無礙の智を與へて、之を語業に彰す。是故に「論」の中に、皆辯才と名く。初の中に、內德虛からざるを、眞實と名け、衆內に加ふること莫きを、無上と名く。衆中に無上なるに由るが故に、之に處するに無畏の故に、論經に無畏身と名く。

【四無礙】四無礙辯のこと。法無礙、義無礙、辭無礙、樂說無礙の四。

【樂說】衆生の欲する處に自在に說法するをいふ。

【今緣と云ふ云云】下は相攝を明す。

名身の九の內に、初の二句を一對と爲す。謂はく、一は說に於て滯ること無し、後の一は義に於て深く達す。又、初は總じて無礙を知り、後は善く差別に入る。初は是れ四無礙の中に、樂說辯なり。謂はく、智は妙辭を宣べ、理倚礙する所無し、故に無著と云ふ、礙の爲に礙へられ、言中に歇ましめざるが故に不斷と云ふ、此は無障礙を釋す。辭に蹇澁無きが故に、無滯と云ふ、此は樂說を釋す。通釋は知んぬべし。二に法の差別を照すに由り、正しく宣說するに堪ふるが故に、解辯と云ふ。「相續解脫經」に依るに、四種の成有り。一は以有成にして、因緣名相言說の諸法、成ずることを得。二は所依成にして、一切の所作、各成辦すること有り。三は法成にして、一切の諸法、性相成立す。四は助成にして、智言說を以て、諸法を助成す。今緣と言ふは、是れ彼以有成なり。二に法とは、是れ彼法成なり。三に作とは、是れ彼作成なり。四に成とは、是れ彼助成なり。又古德釋して云はく、一に緣とは、山中の草木緣を得て、即ち生じて功力を假らざるが如し。二に法とは、謂はく、法を以て成ずるに、有法は成ずること易く、無法は成ずること難き等の如し。三に作とは、謂はく、功用力を加へ、舍等を造るが如し。四に成とは、謂はく、內外相假りて、成ずることを得る等なり。今更に釋す。緣は是れ作法の緣にして、柱を作らんと欲するに、匠と斧と木は緣なるが如し。作は是れ、緣緣相攝の造作なり。法は是れ所作の柱法なり。成は是れ、識心了別して方に成ず。謂はく、若し識心了別すること無くんば、彼所作の柱は、但是れ無分別の法なり。要ず識心の構畫し、爲に其名を立つるを待ちて、成

【處…云ふ】論文なり。

と說くべし。是の故に、此成は卽ち是れ不成なり、故に成不成と云ふなり。問ふ、「此釋義及び前の經文に准ずるに、法は第三に當る。何が故に『論』の中には、法は第二に居するや。」答ふ、「謂はく、初に能成の緣を擧ぐ。未だ知らず、此緣は是れ誰が緣ぞ。故に次に法を擧げて、緣の所屬を明す。未だ知らず、此緣は如何んが造作する。故に次に作を明す。未だ知らず、作し已りて成不成爲ることを。故に後に智を明し、之を助成す。」『論』は此に約して辨ず、是の故に法は第二に居す。又、此四釋の差別を、經の中に分別と名く。成不成は淸淨を釋す、離相を以ての故に。

三に任放等とは、次の二の一對なり。初に說に於て自在なり、後は機に於て巧に化す。初は任意放縱にして、辯は圓音に溢るるが故に、任放辯才と云ふ。言義超越すと雖も、辭は停擁無きが故に、「說は次を待たず」と云ふ。「言辭斷ぜず」とは、異義多しと雖も、終に本に結歸す。故に處處隨意不忘名義と云ふ。門に隨ひて說を異にすれども、本宗を忘れざるを以ての故に、善く憶念して忘れずと云ふ。意力加故とは、加の字を釋するなり。四に能說の機に應じて、巧に宣ぶるを、能說辯と名く、此は名を列ぬ。下は釋す。隨所應度とは、巧に能く機に應ずるなり。種種譬喩は、巧に能く說くなり。復巧に能く疑を除くが故に、能說と名く。善く能機決定して、疑無きを以ての故に、與善決定意と云ふ。五に不雜等とは、次の三の一對なり。初の一は證理、後の二は起說、理同うして異ること無きが故に、不雜と云ふ。三種同相智は、有が說かく、三空門是なり。有が說かく、所證の三

【九は同化】論には九に同化辯才といふ。
【三輪】身口意の三業。

無性の理是なりと。有が說かく、『金剛仙論』に依るに、無常、苦、無我是なり。有が說かく、助道、證道、不住道なり。謂はく、同相の三道是なりと。有が說かく、別翻の本に依るに、自相、同相、不二相なり。卽ち世諦、眞諦、一實諦是なりと。義は前に通ずと雖も本に依るを勝と爲す、此三に照達するが故に、至一切處智と云ふ。六に敎出等とは、此二の起說、初の一は說きて行を起さしむ。後の一は說きて怯懼無し。又初は熟に於て、出を敎へ、後は生に於て畏れず、並に知んぬべし。八九の二種を一對と爲す。初は佛の敎法を知り、後は知に依りて說くに、敎の多門を知るを、無礙辯と名く。六に正見とは、古德の有が說かく、卽ち總別等の六相の、聖敎を解釋して、正見を成ずるが故に。有が說かく、『金剛仙論』に依るに、一は眞實智正見、能く理法を知る。二は行正見、能く行法を知る。此二は敎旨なり。三は敎正見、能く敎法を知る。四は離二邊正見、前の理法を知る。情取に同じからず。五に不思議正見、前の行法を知り、德を成じ情を出づ。六には俱欲性正見。前の敎法說は、物の心に隨ふを知る。又、相傳へ說く。西國に別に、六正見論有り。一は妄想、二は妄想依、三は亦妄想亦非妄想、四は妄非妄依、五は非妄想、六は非妄想依なり。初は卽ち現行の妄想、二は卽ち所依の染心、三は聞等の三慧、四は淨敎を依と爲す、五は眞を證する正智、六は眞如を依と爲す。又初の二は外凡、次の二は內凡三賢の位、後の二は地上の聖位なり。九は同化とは、三業齊同に、此化事を成ずるが故に。又釋すらく、此三輪の化は、是れ一切の如來同じく、此化を用ふるが故に、同化と云ふ。又釋すらく、

【三種の教】論に三種の教化といふ

【自下は…云ふ】次に加する所以を釋する文。經の「一何を以ての故に」等の下の釋なり。

【微する意に云はく】論に「諸佛、力あり慈悲あり」の文。

【初の一】經の「直心清淨なるが故に」の文をいふ。

【一は證理…不住行】經の二智慧明自等の三句に當る。

此中、金剛藏の三業をして、倶に如來の化事に同ぜしむるを、偏に同化と名く。彼前の八に非ずして、而も是れ、佛の無畏身等に同じからず、口意を等取す。三種の教は、總じて擧げ、隨所度等は、經の中の起の字を釋し、殊勝は莊嚴を釋す、是れ上妙なり。謂はく、身業は神通輪、意業は記心輪、口業は正教輪にして、並に是れ神力をもて各事を成ずるが故に、神化故と云ふなり。

自下は加の所以を釋する中に、先に徴し、後に釋す。徴する意に云はく、有力とは、佛に普加の力有ることを明し、有悲とは、普加の心有ることを明す。自ら普力有りて、普心無きも亦疑を致さず。自ら普心有るも、普力無きも、亦惟むべからず。今明すらく、佛に能普加の力有り、亦平等の悲有り、何が故に唯、剛藏一人に加する。故に問徴を致すが故に何以故と云ふなり。下は釋意を明すに、十句有り。初の一は是れ總、此三昧法を得て、餘は得ざるが故に。復何が故に此三昧を得とは、下は別して顯すに、二因有るが故に。一は、是菩薩、往昔の本願力の、致す所なるを以ての故に。二は、此菩薩、彼三昧の行徳を具するに由るが故に、故に三昧身攝功徳と云ふ。八種有り。中に於て初の四は自利、後の四は利他なり、前の中に、初の一は是れ、起行の本にして、即ち欲樂心の故に、趣盡地と云ふ。盡地は即ち是れ、十地の滿なり。終位に徹至するが故に、深心と云ひ、情に異願無きが故に、直心と云ふも、體は無二なり。餘の三は是れ行徳なり、一は證理行、二は是れ助道行、三は不住行なり。又、初の一は智徳、二は福徳、三は斷徳にして、後智所現の身

【後の四】經の「無量の法を念持」等の四句。

【二に語業云云】經の「善く陀羅尼」等の文を釋す。

は福を增し、成滿せしむるに由るが故に、身轉淨と云ふなり。後智の位に在りと雖も、正證を捨てざるが故に、習氣をして、亦行ぜざらしむるが故に、善修不業と云ふなり。後の四は利他の中に、初の一は、利他の方便、後の三は、利他の行體なり。一は身、二は語、三は意にして、初の身業は神通能く淨信を生ずるが故に、以決定信力攝取通故と云ふ。此文は經論を會釋するなり。光明は是れ、通じて能く、彼信を生ずるを以て、是に依りて信を生ずるが故に、此通を說く。故に、攝取等と云ふなり。二に語業は、巧に說きて、前後違ふこと無きが故に、不壞と云ひ、能く一一の字の中に、一切の字を攝するが故に、總持と云ふ。三に意業は、正智をもつて、衆生を敎授して、照理の平等一相に、異ならざるが故に、不異と云ふ。此れ則ち後得化の慢を離る、故に智印善印と云ふなり。論主次釋すらく、「八德俱に三昧の因を成ず」、此に由りて彼三昧を得るが故に一と。八の中に、前の四因に二釋有り。一は前の四句に配す、次の如く應に知るべし。二は後の四句に配するに、後より前に向ふ。精進の因は是れ離慢、不忘の因は是れ陀羅尼なり。勢力の因は是れ通淨なり。彼不壞の因は、是れ開の攝の淨なり。是故に此四因は、通じて八句を收めて、但自利と爲す。又後の四因は、後の四句に配するに、前より次第す、知るべし。法理を轉ずるの因とは、二有り。一は深を轉じ淺に從ひて說きて、自の深法を失はず。大乘の深理を轉じて、小乘等に從へて說くが如し。『論』に、一は眞實理門、二は隨轉理門と云ふが如し、總持門の中に於て、巧に轉變するを以ての故に。二に眞を轉じ、妄に從ひて說きて、而も亦

【第三に…同じ】身の加被を明す下經の「爾時、十方の諸佛」等を釋す。

【二】第四に起分の文を釋す。

【三】第五に本文の文を釋す。

自の眞法を失はず、外道の位に、佛法行はれざる處に在りて、彼尊言を假りて、自法を誦持するが如し。彼執すらく、諸法は常なり、菩薩も亦云はく常なりと。而るに菩薩の意は、諸法は即ち眞如なるを以ての故に、是れ常と云ひて、彼が計に同じからず。然るに、彼語と同じく、自法を任持すること亦同じ。四は祕密は准じて知るべし。如是化者得自利不忘とは、此に二義有り。一は此四句を以て、逆を自利と爲し、順を利他と爲す。是故に、利他は自利を忘れず。二は此末後の句を以て、他を教授し、照理を礙へず、出離の化事の故に、不忘自利と云ふ。

第三に身加は頂を摩して覺らしむ。下の『論』に、通じて四種有り。一に如意通とは、自身に於て脩短自在なるを得るが故に。此は內根に於てす。二に幻通とは、外事を轉變す、器世界等なり。三に法智通とは、理を照して法に入る。四に聖自在通とは、苦の中に樂を生ずる等なり。此中に不離彼等とは、經に此句を略す。是れ如意通にして、餘の三種に非ざるが故に云ふなり。餘義は前の釋に同じ。

(二)四に起分の中、四義の內に、初の二は是れ、本入の所爲、後の二は是れ、出でしむるの所爲なり。初に事訖とは、審理の故に、儀則の故に。二に得勝力とは、加を受くるが故に。三に說時至とは、機熟するが故に。四に定無言說とは、要ず言聲を須ふるが故に。餘は前の釋に同じ。

(三)五に本分の中に三門を作る。初に釋名とは、略は廣の本と爲るを以ての故に。亦請を

〔一四〕以下、正しく本文を釋す。初に六決定を辨じて地體と爲す。【初の中に云云】論に「一願善決定」等といふ。

興すに本と爲るが故に。二に來意とは、前加を起すに因り、略して地體を說き、後の請分を起し、略して地相を說き、後の說分を起す。若し後を以て前を成ずるに望めば、請分は深を顯すに由り、前の地體を成ず。說分は廣宣して、前地の相を成ず。此は則ち本末互に成ずるなり。

〔一四〕三に文を釋すとは、此文に三有り。初に六決定を辨じて、地體と爲す。二に十名を列ねて、地相を顯す。三に二世同說を擧げて、地の要勝を明す。初の中に此六決定は、既に是れ地體なり。今五門を作りて釋す。一は釋名、二は通じて地體を辨じ、三は『地持』『瑜伽』の六決定と相攝す。四は其行相を分ち、五は文を釋す。初に釋名に二有り。先に總名を釋す。六は是れ數なり、決定は是れ義にして、數義は名を彰す、即ち帶數釋なり。謂はく、聖智は眞を證し、決擇揩定して、理に順じて過を離るるを、復名けて善と爲す。即ち『地持』の三決定の中の、證決定なり。通じて齊するに、六義有り。一は、行體に約しては、決定堅固不退なり。二は、所證に望めては、決定して已に證す。三は、煩惱に約しては、決定して能斷す。四は、所信に約して、決定して壞はず。五は、所化に約しては、決定して能く度す。六は、佛果に望めては、決定して能成す。二に別名とは、一に、觀相善決定とは、謂はく、彼正智は理を照すを觀と名け、一味に契同するを相と名く、此は當體に名を得。二に、眞實とは、即ち實智にして、倒惑の過を離る、證理虛からざるが故に相形して名を立つ。三に、勝とは劣に過るるが故に。勝德を具するが故に。亦當相

及び他に形りて名を立つ。四に因とは、諸の能成の果の故に、功能に從ひて名を立つ。五に大とは、普く群生に被むらしむるに、情に限局無し、體用に名を得。六は不怯弱とは謂はく、因は果德に入り、情は怯懼無し、此は心境に從ひて名を立つ。

第二に此に因りて通じて、十地の體性差別を論ずるに、略して十門を作る。一は、此六決定を以て體と爲す。此正しく是れ、所說の十地の本體なるを以ての故に。二は、前の大乘光明三昧を以て、性と爲す。此定の中に、具に止觀諸法無礙を、含むを以ての故に。『論』に云はく、「此三昧は是れ法體の故に」と。三は教證二行を以て性と爲す。加行緣修は、唯是れ教行、本智契理は、唯是れ證行なり。後智は具に二義を含むを以て、教證に通ず。下の『論』に說くが如し。四は證助不住の三道を以て、體と爲す。亦通釋は知んぬべし。五は唯所證の眞如を性と爲すに約す。能證の智は、緣成の相盡きて、眞理に同ずるを以ての故に。梁の『攝論』に云はく、「出離眞如を十地の體と爲す」と。下の文の「鳥跡は空に同ず」等是なり。六には、唯能證の智を性と爲すに約す。無性の『攝論』に云はく、「法無我智の分位を地と名く」と。此『論』の下の文に亦云はく、「上來の所說は皆智地に依る」と。今此も亦、智地に依る故なり。七に具に境智を含むとは、謂はく、眞理妙智は前の二說の如し。梁の『論』の、後の文に亦云はく、「如如及び智を性と爲す」と。八は通收に約するに、『唯識論』に云はく、「總じて一切の、有爲無爲の功德を攝するを性と爲す」と。九は因果に約するに、下の文の、大海の十相は、別して十地に喩へ、總じて一の大海

【三漸次】所說の法に三を分つ。一、觀漸次。二、證漸次。三、修行漸次。「論」二の六左。

【第三に…知んぬべし】三に當論の六決定と他の論の其れとの相攝を明す。

【四に…相なり】四に行相を分つ。

は、以て佛地に喩ふるが如し。又云はく、地に二分有り。即ち所盡の大容は、以て果分を況し、能盡の十相は、以て因分に喩ふ。是故に能所依に通じて、倶に是れ地體なり。十は通じて諸門に約す。謂はく、信等の十行を、成地の法と爲すが故に、檀等の十行も亦爾なり。又三漸次等の諸門とは、並に下に辨ずるが如し、悉く地法の體と爲す。

第三に、「地持」「瑜伽」の六決定と相攝すとは、「地持」に云はく、「決定に六有り。一には能く有る修起して菩提の願を起し、餘の一切の淨願に超えたり。二には、無等不共果は、餘の一切世間の境界に超えたり。三は、一切の衆生の苦を度するに隨ひて、一切の聲聞緣覺に共せず。四には、一念に願を發し、性自然に無量の淨法及び無量の行を集ふ。五には、無盡の願を得て、常に退轉せず。六には、勝分究竟の大菩提を增長す。是れ賢當の願なり」と。解して云はく、此中の第三は、是れ「地論」の中の第五なり。「地持」の意は、二利を攝して方に因と爲すを以ての故に。餘相は會釋すること知んぬべし。四に行相を分つとは、此六の中に、前の五は、是れ自分の行、後の一は是れ、勝進の行なり。前の中に、初の四は自利の行、後の一は利他の行なり。前の中に、初の三は行の體德を明し、後の一は、行の功能を顯すは謂はく、成果の功有るが故なり。前の中に、初の二は行德圓なり、後の一は行德備れり。前の中に、初の一は行の自體を明し、後の一は、行の離過を顯す。是故に自體は過を離れ、德を攝するを因と爲す。二利の行圓にして、佛果を成就す、是れ此行相なり。

【五に…竟んぬ】五に文を釋す。

【若不自說】論の「何が故に請せずして說く。若し自說せずんば」の句を引釋す。

【一切法…云ふ】論に「一切法は法爾の故に」といふを釋す。

【二に…過ぐ】諸論の「大眞如觀、諸の凡夫二乘の智等に勝る」等の文。

五に文を釋する中に、若不自說とは、前は定に入りて加を受くと雖も、衆人は知らず。定を出づるは、說法の爲と爲んや、餘事の爲と爲んや。是故に自ら說きて、說法の爲なることを顯し、衆をして法を請ぜしむ。設ひ衆をして說法の事を爲すことを知らしむとも、然も復何の法を、說かんと欲することを、知らざる故に、亦所請の分齊を知らず。是故に、自ら十地の名體を說きて、勝を歎じて請ぜしむ。初の句は是れ總なり。菩薩願とは、人を標して法に別す。大菩提に於て、誓を立てて趣求するを、發菩提心と名く、亦則ち是れ願なり、故に會釋して同を顯す、地前の願を簡ぶが故に決定と云ふ。決定とは則ち是れ、證智眞實なり。是故に決定とは即ち是れ善なり。善は即ち是れ決定なり、故に善決定と云ふ。別の中の六の內、一は正智眞證、帶相觀の心に同じからず。無明の過を雜へざるを以ての故に、一味相と名く。二に世間可壞の法に、超出するを以ての故に、眞實と名く、眞實の故に、世智の所見に非ず。三に此智は、彼所證の法界に同じて、諸の勝德を具することを相す。『論』の中に二の釋有り。一は文を案じて釋す。謂はく、大法界の故に勝と名くとは、此は經の中の大の字を釋す。一切佛の根本の故に、勝と名くとは、此は經の中の廣の字を釋す、法界の字は、後に別して釋す。二に義を開きて釋するに、先に四名を標することは、法體異無きことを顯す。但法相に隨ひて、此四義を說きて、即ち四の別と爲す。一は大を釋す。謂はく、一切法は是れ法なり、法爾は是れ界なり。界は是れ眞性なるが故に、法爾と云ふ。下は皆此に準ぜよ。二に勝を釋す。謂はく、淨法界の智は、凡小に

【三に…集む】論の大方便集地等の文。
【四に…出づ】論の「大白法界善法法爾の故に」等の文。
【餘の三】勝、高、廣の三。
【經の中…無し】盡未來際の句無きを簡ぶ。

過ぐ。三に廣を釋す。謂はく、大乘の法界は、廣く大行を集む。四に高を釋す。謂はく、無漏の白法高く世表に出づ。又釋すらく、初は所知の法界を顯す。謂はく、「二論」の中には勝と名け、經には大と名く。廣及び高は、皆是れ異名にして、別の體性無し。此れ並に法の體用を顯し、法の字を釋するなり。一切法法爾とは、界の字を釋するなり。餘の三は、能如の法界の地智を釋す。一は正體智、二は加行智、三は後得智なり。又古德云はく、「一は證道、二は不住道、三は助道なり」と。又釋すらく、初の一は正證智、後の二は是れ後得智なり。後得智の中に、一は功に大行を集め、以て利他を成ず。二は觀の内を遍觀して以て自利を成ず。此三は皆悉く、眞性に稱同するが故に如法界と云ふなり。因は因の義と爲す。一は生因と爲りて、菩提有爲の果を生ず。二は了因と爲りて、涅槃無爲の果を了す。又釋すらく、此一は眞智なり、二の功力有り。一は依因と爲す。依として機に應じ、報化の用を起すを以ての故に。二に攝因と爲す、用を攝して、眞に歸するを以ての故に、又初は則ち機に應じて、影盈有ることを示し、後は則ち相續して、未際を盡窮す。又初は則ち、外に化用を起し、後は則ち内に眞性を證す。又初は卽ち寂にして、常に用なり。後は則ち用にして常に寂なり。「二論」の中に略して、常果の因無し、五は大悲は物を益し、生界に普潤するが故に、遍覆と云ひ、亦は大と名くるなり。次前の普決定は、是れ前の常果の因なり。此願とは、是れ此大善根等くが故に、大善は涅槃に住せず、常因は世間に住せざるが故に、世間と涅槃とのなかに、一向に住するに非ずと云ふなり。六に、上に轉境に

【此六の中云云】論に「中に於て善決定とは總相、餘は是れ別相、同相とは善決定、異相とは別相の故に。成相とは略說、壞相とは廣說の故に」と。

【二に】二に十名を列ねて地相を顯す。經の「何を以て故に。諸の菩薩」の等の文の下。

【初證聖…生ず】歡喜地の釋、

【二は能起…言なり】離垢地の釋。

【故は…亡の言】故は故犯の意。本跡には一念の纔惑なき故に悞起らず、何に況んや故をや」といふ。

【三は…釋す】明地の釋。

入るが故に、不怯と云ふ。文の中に三有り。初に爲一切佛護とは標なり。何以故とは徵責するなり。下は釋す。謂はく、三世の佛の智地に入るが故に、之が爲に護らる。此六の中に、六相圓攝は知んぬべし。地體は竟んぬ。

二五六第二に、地の相の中に四有り。初は問に寄せて發起し、二には數を擧げて勝を歎ず。謂はく、此地法は能く、佛智を生成して、住持するを以ての故に、三世の諸佛同じく證し同じく說く、是故に、今此れ亦彼說に同じ。三には、數に依りて名を列ぬ。四には名を結して勝を顯す。名を列ぬる中に就きて、且く『地論』に依りて、略して別名を釋す。餘論の釋名、及び十障等の義は、並に下に廣く釋する中に、辨ずるが如し。故に『論』に云はく、「無上自利利他の行を成就すとは、初證聖の處に、多く歡喜を生ずるが故に、歡喜地と名く」と。解するに三義有り。一は、二利創めて成ずるが故に。二は、眞理創めて證するが故に。三は、聖位新に得るが故に、本期心を遂ぐるが故に、歡喜を生ず。二は能起の悞心、犯戒を離れ、煩惱の垢淸淨にして、戒具足の故に、離垢地と名く。此に亦三義有り。一は煩惱を離る。即ち因離なり。謂はく、能起の悞心等なり。二は惡業を離る。即ち果行離なり。謂はく、犯戒等なり。三に對治離なり。謂はく、淸深戒具足す。此中に悞犯尙離る、故は即ち亡ずと言ふべし。三は、聞思修等に隨ひて、照法顯現するが故に、明地と名く。此に亦三義有り。一は、此地に四地の智慧光明の相を、得るを以ての故に。明得定等の如し。故に下の『論』に云はく、「彼無行無生の慧は、此を光明と名く、是

【四に…爲すと】焰地の釋。

【五に出生間…得たり】難勝地の釋

れ光明に依るが故に、明地と名く」と。二には、此地の釋に、後地の慧光明を、發起するに依るが故に。大乘光明三昧等の如し、餘の論には發光地と名く。故に『地持』に云はく、「三昧照明の故に、明地と名く」と。『地論』に云はく、「三昧地の故に、定慧合して說く」と。三には、三慧の照法を得るが故に、明地と名く。此は當地の加行等に約して釋す。『地論』は、唯此門に就きて釋す。四に不忘の煩惱の薪を、智火能く燒くが故に、焰地と名く。此に二義有り。一は內證の智、惑薪を焚燒するが故に、名けて焰と爲す。即ち前地の聞持を、名けて不忘と爲し、此を恃んで慢を起すを、名けて煩惱と爲し、是が爲に燒かるるを喩に從へて薪と名く、即ち是れ解法慢障なり。能燒の智を、喩に就きて焰と名く。問ふ、『前後の諸地、豈惑を燒かざらんや。何が故に獨り此を焰と稱するや』。釋に二義有り。一は、寄位に就きて言ふ。此地は出世間の無流に寄當するが故に。二は、三學を以て此地に寄するに、慧初めて得べきが故なり。二は、後智、用を起すに就くが故に。下の『論』に云はく、「彼證智の法明、摩尼寶光の中に、阿含の光明を放ち、無量の法門義光明の智處に入り、普く照して示現す。是義を以ての故に此地の名を釋して焰と爲す」と。

五に出世間智を得。方便善巧して、能く難度を度するが故に、難勝地と名く。此に亦二義あり。一は、得出世等は、勝の義を釋し、能度等は、難の義を釋す。又、前の三地に對するに、出世を得ること難きが故に。下の『論』に「十平等心は、甚だ得難きが故に」と言ふ、故に得出世間智と云ふなり。二は、前の四地に對するに、能く世間の難に隨ふが故

【六は…名くべし】現前地の釋。

【七は…名く】遠行地の釋。

【八は…故に】不動地の釋。

に。下の『論』に言はく「又世間、最も得難きを現すが故に」と。故に方便善巧と云ふなり。即ち下の五地の中の十平等心、及び諦観等は、是れ初の義なり。慈悲利生及び五明處等は、是れ後の義なり。此二相遠りて、以て相到り難し。此地の中に於て、此く相到らしむるが故に、以て難と爲す、故に能度難度と云ふ。度は猶し到のごとし。後の諸地に亦此義有り、何ぞ獨り此のみならんや。』釋すらく「初めて得ること此に在るを以て、是故に名を得たり。』六は、般若波羅蜜の有間に、大智現前するが故に現前地と名く。此に二義有り。一は後に對して劣を彰す。謂はく、證空の實慧を、名けて般若と爲し、七地已上念念常に現ず。今此は未だ能はざるが故に有間と名く。二は、前に對して、勝を顯して即く。前の般若を名けて大智と爲し、此智、現ずるが故に、名けて現前と爲す。此地、後の義に就きて名を立つ。若し前の義ならば、應に有間地と名くべし。七は、善く無相行を修し、功用究竟して、能く世間二乘の出世間道を過ぐ、故に遠行地と名く。此に亦二義有り。一は、此位の中に、善く修行して、有相を離れ無相を離れて行ずるが故に、善修無相行と云ふ。此は行の字を釋するなり。二に、功用究竟等は、遠を釋するなり。中に於て三義有り。一は、有功用の行窮滿に至るを、最も後邊と爲すが故に、究竟と云ふ。二は、前の三地の隨有の行相が、世間に同ずるに望む。今此を彼に望むるに、已に懸遠と爲す。故に、能過世間と云ふなり。三は、四五六地の、道品を修習し、諦觀緣起、二乘の出世間の位に相同するに望む。今此は彼に過ぐるが故に、能過二乘出世間道と云ふ、故に遠行地と名く。八は

【九は…辨ずべし】善慧地の釋。

【十には…名く】法雲地の釋。

【此十地云云】此下、十地の得名を釋するに、四對あることを示す。

報行純熟して、無相無間の故に、不動地と云ふ。此に亦二義有り。一は、報行純熟の故に、功用の爲に動ぜられず。修起に由るを以て、名けて報行成熟と爲す。此無功に在りて、任運に諸の勝行を成ずるが故に、純熟と云ふ。下の經に、名を釋するが中に、無功用地は、善く先導を起すと名く。二は、無相は相の爲に、動ぜられず。無間とは、無相觀常に現前するを以ての故に、煩惱の爲に、動ぜられず。下の經の釋の中に、名けて加地と爲す。他に動ぜざるが故に。九は、無礙力說法成就利他行の故に、善慧地と名く。此に亦二義有り。一は、四十無礙辯を得るを、無礙力と名く、此は慧を釋す。二は、巧に說き生を益するを、說法成利他等と名く、此は善を釋す。此義は下の文の如く、當に辨ずべし。十には、大法身を得、具足自在なるが故に、法雲地と名く。此に亦二義有り。一は、法器の身と爲るを、名けて法身と曰ふ。然も能く法界に普周するが故に、名けて大と爲し、能く諸佛の雲雨說法を受くるを、具足自在と名く。二は、爲に法の身を出すを、名けて、法身と曰ひ、普く一切に遍するを、之を名けて大と爲す。能く法雨を降注し、塵を滅し善を生ずるが故に、自在と云ふ。下の釋名分の中に、具に廣く分釋す、故に法雲地と名く。此十地の得名に四對有り。一は、法喩に約すとは、或は唯法に就きて名を立つ。歡喜等の如し。或は唯喩に約す、焰地の如し。或は法喩合して目く。法雲地の如し。二は、體用に約すとは、歡喜、善慧の如きは、體に約して名を立て、所餘は用に就きて目と爲す。三は無他と自の義とに約す。離垢と不動との如きは、他を無するに約して、名を立てて所餘は

【一六】以下、三世同說を擧げて、地の要勝を明す。

【一七】第六に請分を釋す。

自の義に約して、稱を爲す。四は當位の相形に約すとは、難勝、遠行の如きは、相形に號を爲す、所餘は當位に約して、名を立つ。四は是れ十地の下は、名を結し勝を歎ずること知んぬべし。

(一六)第三に我不見の下は、地の要勝を彰し、諸佛同說の所由を釋顯す。中に於て二有り。初に我不見等とは、盡十方虛空法界諸佛世界は、一世界として、此の如きの十地の法門を、說かざること有ること無きを明す。是に知んぬ、若し此法を說かざるの處有らば、彼は佛土に非ず。二に、何以故の下は釋成す。先に徵責して云はく、諸佛差別す、何が故に同じく此十地を說くや。釋の中に四句有り。初に最上妙道は、是れ共證行にして、是れ諸佛の同じく證入する所、此を離れて更に無きを以て、是故に同じく歎ず。二は、最上明淨は是れ阿含の行にして、是れ諸佛の同じく修行する所、此を離れて亦無きを以て、是故に同じく說けり。三に謂ゆる分別の下は、前の阿含の行相の差別を顯す。四は是事不思の下は、前の證行玄妙にして、測り難きを顯す。上來の三段、總じて本分竟んぬ。

(一七)第六に請分の中に四門を作る。一に釋名とは、法を重んじ、慇懃に啓請して、說かしむるが故に、以て名と爲す。二に來意とは、四の意有り。一は、大衆をして、法を敬重せしめんが爲の故に。二は、說を起すの由と爲すが故に。三は、請に因りて、地法の甚深、離言の相を顯すが故に。四は、衆は既に地法の超情を解す、後に說分寄法の說を聞きて、聲に隨ひて取らず、錯謬を離れしむるが故に。是故に若し請分無くんば、則ち後の說分を

說くことを得ざるが故に。若し請分無くんば、則ち衆は說分を聞きて、正解せざるが故に。三に、請の分齊を明さば、七有り。一は起說に約す。然るに二種有り。一は菩薩の請に就く。謂はく、金剛藏は地法を說かんと欲するも、衆若し請せずして、法重を顯さずんば、則ち說かざるが故に、要ず衆請に須りて方に說を起すことを得。二は佛請に約す。然るに三義有り。一は佛請に就く。謂はく、金剛藏、地法を說かんと欲するも、諸佛請せず、法重を顯さずんば、衆をして尊敬心を生ぜしむることを得ず。徒らに說きて益無し、是故に要ず、佛請を待ちて方に說く。二は佛加に就く。謂はく、剛藏、地法を說かんと欲するも、堪へざること有るを懼れて、宣說することを得ず。佛の威光は聽衆を加被して、其をして聞くに堪へしむるを待ちて、方に宣說することを得。三は佛教に就く。謂はく、金剛藏、衆の爲に說かんと欲するも、衆の信ぜざることを懼れ、默住して說かず。佛の教を待ち已りて、方に乃ち宣說す。大衆は是れ、如來の教ふる所の言、金剛藏の口に寄傳すと雖も、皆是れ佛の教語なりと知りて、信ずべきを示し、方に說くことを得るなり。二は正助に約す。謂はく、解脫月一人は、是れ正請、佛及び衆人は、是れ助請なり。謂はく、解脫月は是れ衆の上首にして、衆の疑有ることを知り、之が爲に啓請す。請の中に云はく、「此衆は聞くに堪へたり」と。若し此大衆、自ら德を彰し、同請を顯示せざるときは、則ち解脫月の言は便ち虛謬と成り。金剛藏をして、何に由りてか說くことを得せしめん。故に大衆は已に聞くに堪ふるを顯し須らく彼が請を助成すべきなり。又解脫月の請の中に、諸佛力

の加すと云ふ、人をして信解せしむ。若し佛加せずんば、脱月の言、復是れ虚妄ならん。金剛藏をして、何に由りてか、說くことを得せしめん。故に佛加請す。三は因果に約す。謂はく、菩薩の四請は、地法を顯さんが爲なり。是れ諸の菩薩、所學の法なるが故に。如來の加請は、此法は諸佛の所證なり、既に佛菩薩同じく、此法に依ることを彰さんが爲の故に。要勝を顯し、人をして敬重せしむるが故に方に說くなり。四は請儀に約す。謂はく、解脱月の、默するを觀て疑を騰げ、衆の爲に先づ請す。一人の意は但だ多人に若かざるが故に、次に第二に大衆の請を明す、同類の倍請を、本に屬すること後なり、故に次に第三に、佛の加請を明す。五は顯法に約す。謂はく、請せざるに自ら說けば、法重を顯さざるが故に。解脱月は法の爲に先づ請す。一人の請は法を顯すこと、勝れざるが故に。次に第二に大衆同請す。菩薩學人、法を顯すこと、未だ極まらざるが故に。次に第三に諸佛加請す。六は、儀式に約するに二有り。先に解脱を明すに、何が故に三び請する。初に二義有り。一は諸經の請法、三に過ぎざるが故に。多は則ち繁廣、少は則ち闕略たらざるが故に。一の化儀に隨ひて、廣を去り略を去る故に、唯三なるのみ。二は、請に就いて三びに至れば、更に請はざるが故に。下に之を說くが如し。二は、何が故に大衆及び佛は、唯一請なるや。釋すらく、是れ助請の故に。前の所請を圓滿ならしむることを顯すが故に。故に三びに至らざるなり。七は所歎に約す。謂はく、諸請の中の請は、人を歎ずるは、法を歎ずるに過ぎず、歎人の中には、說揚に過ぎず。說揚は歎法に過ぐること無し、各有れ

【一八】正しく本文を釋す。

ば方に乃し說くが故に。三請の中、前の二は人を歎じ、後の一は法を歎ず。衆及び佛の請も、亦人法を同じうす。

（一八）第四に文を釋すとは、中に於て二有り。先に剛藏の說已りて、默住することを明し、菩薩及び佛、正しく五請を興すことを明す。二に爾時金剛藏觀察の下は、請旣に滿足して、說の分齊を示し、衆をして正しく知らしむることを明す。前の中に就きて、人に隨ひて三に分つ。一は解脫月の請、二は大衆の請、三は佛の加請なり。初の中に、三請を卽ち三對と爲す。皆初の對は默違、後は啓請を明す。第一對の中に初には說き已りて默住し、後は解脫月、衆の疑を擧げて請す。謂はく「仁者說くに堪へ、大衆は聞くに堪へたり。何が故に說かざる」と、此を怪默請と名く。第二對の中に、初は剛藏、己が默の意を顯す。謂はく、「法は說を難く證信は得難きが故に、我說かず」と。後に解脫月、衆を歎じて重ねて請す。謂はく「旣に證信は得難しと云ふ。今此菩薩衆は證有り信有り、仁者宜しく說くべし」と、此を難詰請と名く。第三對の中に、初は剛藏、損を擧げて以て違す。謂はく「此衆は淨なりと雖も、餘の小を樂ふ者、聞きて疑惑を生ずるが故に我說かず」と。後は解脫月、法を歎じて、重ねて請す。請に謂はく「諸佛護念して、人をして信じ易からしむ。餘の疑を慮ること勿れ」と、此を歎法請と名く。其解脫月の請は、義餘有り。金剛藏、請に違するは、理盡せり。但法を重んずるが爲に、默して餘の請を待つ、卽ち爲に說かず。初對の中に二あり。先に剛藏默住、二に爾時の下は、啓請に因ることを明す。前の中に二

何あり。一は、初に地の名を說き已りて、前を牒し後を起す。二に默して分別せざるは、正しく後の請を待つ。「何が故に默然として住する」と云ふは問なり。謂はく、前は請せざるに自ら說きて、今何が故に默して住する。下は之を對釋するに、通じて默する意を論ずるに、略して五種有り。一は、大衆をして渴仰し、法を請せしめんと欲す。二は諸佛をして、同じく請し、法の尊重を顯し、衆の尊敬を增さしめんが爲に。三は、諸佛をして聽者に加被して、誦に於て能く受けしめんが爲に。四は、諸佛の教をして說かしめ、物をして信を生ぜしめんと欲す。五は、默するに因りて、請ひて地法の寂滅離言絕の相を顯さしめんと欲す。今此論の中には、唯初の二義に就きて釋すること知んぬべし。

二に請の中に就きて二あり。初は大衆、欲を生じ、疑を生ずることを明し、後に時大菩薩の下は、解脫月、衆の爲に正しく請ずることを明す。前の中に二句あり。謂は名を聞きて、義を欲するを明し、前の十地の名を說き已るに對す。二に、各作是念の下は默するを睹て疑を生ずるは、前の默住して復分別せざるに對す。中に於て、何因何緣とは、是れ疑惟の辭なり。是れ金剛藏の說き已りて默住すとは便ち所疑の事なり。何因何緣とは通釋するに、是一なり。蓋し是れ、世人疑惟の常の辭なり。中に於て分別せば、何因は、彼說者に對して疑を生ず。謂はく、金剛藏は說く能はざるやと。何緣は、後聽者に對して疑を生ず。謂はく、我等大衆は聞くに堪へざるやと。二に、解脫の正請を明すが中に、二あり。先に解脫月は、衆の疑念を領することを擧げ、二に偈は、請ずる辭を顯す。前の

【五偈の中】解脱月請問の偈。

解脱

中に『論』に云はく「何が故に解脱月先に請ず」とは、徴問起發して、前の大衆同じく疑ふところを問ふ。何が故に解脱は專ら輙ち獨り請ずる。下の釋は此は是れ衆中の上首たるを以ての故に。況んや是れ衆首、皆須らく衆の爲に所應作を作るべし。餘問則亂とは、餘は上首に非ず、衆の率伏に非ざるが故に、亂を成ずるなり。故に別本に云はく、「餘者は亂を成ず、衆を調伏せんが爲の故に、今解脱の請を顯し、衆をして調伏せしむ」と。今衆を調し衆を亂すことを爲さざらんが爲に、是故に唯解脱月をして請せしむ。二は偈頌の辭とは、頌に二種有り。一は言巧なるが故に少字に多義を攝するなり。二は言美しきが故に、諸の讃嘆する者、多くは偈頌を以てするが故に。又、凡そ文を作るに二事を具するを、巧と名く。一は理を有す。即ち初の少字等是なり。二は文美し。即ち後の讃等是なり。

五偈の中に、二門を作りて釋す。一は徴、請、分別。謂はく、徴とは其默意を徴し、衆の疑を掃遣す。請とは彼に請じて説かしめ、衆の心欲を遂ぐ。初の二頌は其默意を徴す、故に何故と云ふなり。後の三頌は、彼に請して説かしむるが故に、兩偈分別說と云ふなり。二に、所徴の意趣に就きて分別す。謂はく、初の一頌は、説者の説くに堪ふるを歎じ、大衆の何因の疑を遣らんが爲に。後の四頌は、衆の聞くに堪ふるを歎じ、大衆の、何緣の疑を遣らんが爲なり。是故に『論』に云はく「此五偈は説者聽者に、諸過無きことを示す。故に若し過有る者は則ち説くべからず」とは、此は總じて釋するなり。謂はく、反事して過有らば、說くべからざるべし。今既に過無し、正しく應に説くべし。次に別して釋

【淨覺…なり】論に「說者、淨覺過無きを顯示するが故に、復聽者同法決定するを顯すが故に」といへる文を引く。

【常等の四倒】無常、無樂、無我、無淨なるを、常なり樂なり、我なり淨なりと執するなり。

過を顯す。謂はく、淨覺過無きは、是れ初の偈なり。同法決定は是れ、第二の偈なり。同法とは、異生衆を簡ぶなり。末後の二偈に異るなり。決定とは、根器有ることを明し、第三の偈に異るなり。有樂聞とは、是れ第三の偈、同法の衆、樂欲有ることを明すなり。復示餘者淨心とは、是れ第四の偈、異生衆を明して、名けて餘者と爲す。又「此衆は皆法を聞くに堪ふるを顯す」とは、是れ第五の偈、通じて二衆を結す。聞くに堪へざること無きが故に。別本に云はく「又此衆は一人として聞くに堪へざること無きを顯すが故に」と。迭共相贈住とは、偈を擧げて、皆聞くに堪へたることを顯成するなり。初の偈に就きて、說者を歎ずる中、經の偈の慧の字は、是れ『論』の中の覺の字に當れり。聖德無量なり。何が故に、唯淨覺を歎ずる、意は請法に在るを以て、偏に覺因を歎ず。是口言行とは、行は是れ因の義にして、覺に由りて言を起すが故に、覺觀を名けて口言行と爲す。問ふ、「八地已上乃至諸佛は皆不行思と言ふ。何が故に此中の金剛藏は、是れ第十地の菩薩にして、尋伺言說の所因有るや。」釋に三義有り、一は、彼れ爲に法を說くの儀を、示現するが故に過無し。二は、既に是れ淨覺は、即ち是れ無功用の念智、是れ亦過無し。三は、八聖道の中の正思惟は、佛地に通ずるが如し。故に亦此に同じて應に知るべし。下は別釋するに二と爲す。初に攝對治とは、能治の行現前し、所治の障起らざらしむることを明す。二に離諸過とは、諸過久しく離れ、正行光潔なることを明す。所治の障の中に、一は、凡夫語起所因の覺と、常等の四倒と、雜るが故に、名けて雜覺と爲す。二に、二乘發言所因の覺

と、自性等の八種の妄想と、總攝積聚せず。前の雜覺の興に、所依の因と爲るを、雜覺因と名く。法容を見ずして、妄に染淨を取るを、憶想分別と名く。此れ其相を顯すなり。念智二治は、『論』の如く知んぬべし。三過とは、初に慳嫉して說かず、二は慳嫉ならずと雖も、頑鈍にして說かず。三は不慳不頑なりと雖も、說巧妙ならず、人をして樂はざらしむ。初の中に慳とは、自の所知を惜むが故に、其心悋法と云ふ。嫉とは、他の己に過ぐるを嫉むが故に、忌他勝智と云ふ。不嗔等とは、不貪を等取す。不嗔は嫉を離れ、不貪は慳を離るるを以ての故なり。不癡は、前の念智に屬するが故に、此に取らず。此經の中に、略して功德具無し。然も義亦少からず。論に云く、此明藏は既に本分に於て、諸菩薩十種の行を說き、已に三過に於て、皆離れざる無きを明す。

第二に後の四偈は、讃者を歎ずる中に、三に分つ。初の二偈は、同生衆を歎じ、次の一偈は、異生衆を歎じ、末後の一偈は總じて二衆を歎ず。初の中の二偈の、初の一は根を歎じ、後の一は欲を歎ず。根は是れ宿習、欲は是れ現起す。若し單欲にて根無ければ、聞くと雖も解せず、根有りて欲無ければ、縱ひ聞くとも受けず、故に須らく並に歎ずべし。又釋すらく、前の偈は前の大衆の、默するを視て疑を生ずるを述べ、後の偈は、前の大衆の、名を聞きて義を欲するを述ぶること、知んぬべし。初の偈の中に就きて、今諸大菩薩等とは、『論』の中に決定と名く。決定者、黠慧明了故とは、決定は是れ根なり。根の體は是れ智なり。智の中に教を知るを黠と稱し、義に入るを慧と名く。此二に闇無きが故に、

【是の如く…れば】大正藏經の論文に「是の如きの決定の法器、滿足せざるが故に」と作る。

【六濁】次に示す不欲濁より痴濁に至る六をいふ。

明了と曰ふ。下に別して辨ずる中に、一は、是れ上求菩提の根器なるを以てなり。經の菩薩の如きが故に。二に、積行既に久しく、名稱遠く聞ゆ。經の大の如きが故に。三は根器聞くに堪へ、說者をして攝受せしむ。經に是名を說くが如き故に。次の偈に、有欲を明す中『論』に云はく「阿含決定有り」等とは、根欲を料簡するなり。謂はく、唯阿含決定のみ有りて、證決定無くんば、說を爲すべからず。「現前決定に非ざる有り、現前決定無し」とは、阿含及び證の二決定は、是れ根にして、欲に非ざるに約するが故に、非現前と云ふ。此根有りと雖も、若し現前の欲樂無くんば、亦說を爲すことを得ず、故に無現前決定と云ふ。「是の如く根欲闕くること有れば、法を聽くこと能はず」とは結成するなり。大智に二有り。謂はく、證法とは、此同法業、根本智を具することを明す。先に已に法を證す、二に現受とは、後得智を具して、能く證教法を現受するに、堪ふることを明すなり。此二は、非現前決定有ることを明すなり。咸皆欲聞とは、現前決定欲樂の心、有ることを明すなり。次に異法の衆を辨ぜんと欲する中に、菩薩と云うて大と云はざるが故に。清淨とは六濁を離るるが故に。一は不欲濁とは喰採に心無し。二は威儀濁とは、形恭肅せず。三は蓋濁とは、五蓋心を覆ふ。四は異想濁とは、勝を妬みて、人の破壞せんことを望む。法に約す。五は不足功德濁とは、多病等の障なり。六は痴濁とは、愚闇にして解する無し。下は對治を明す。無瑕とは、初の二濁を離る。一は內に不欲聞の瑕無く、二は外に威儀不嚴の瑕無し。無穢とは是れ淨の義、蓋濁を離る。五蓋穢染の心を以ての故に。堅實の中に

【第二對六六】「爾の時に金剛藏菩薩、是を說く」等の下。

安住すとは、異想濁を離る。所說の法に於て、修行堅固にして、餘相を雜へざるを、以ての故なり。具足功德とは、不足功德濁を離る。具足智とは異濁を離る。此六の中に於て、相性に隨ひて分てば、初の二及び第四は欲に約し、餘は根に就くこと、知んぬべし。末後の一頌は、總じて二衆の法を求むること、純至なるを歎す。『論』の中に、二衆相瞻ると、經の中に、法主を瞻ると、何の義有るや。迭互に相瞻るは、同心求法の情、乖異無きことを顯し、法主を瞻仰するは、渴仰尊重の心、[illegible]無きことを明す。自ら法を求めて怠慢を懷く有り。是故に、初に指以恭敬心と言ふなり。心篤くして誠に聽くこと、昔の熟密を欲するが如く、專意求教は、渴して甘露を思ふが如し。經の中に、略して初の唯無し、初の請竟んぬ。

第二對の中に二あり。先に金剛藏は、前の啓請に承じて、己が默する意を斷じ、後に解脫月は、言に因りて重ねて請す。前の中に亦二あり。先に意を序し、後に偈頌なり。意を序する中に、欲令衆悅とは、是れ總じて解答するの相なり。謂はく、前は大衆、默して說かざるを見て、疑を生じ欲を生ず。其心を攝するを以て、解脫月に請す。今此は偈を說き、後備を遣り喜悅を生ぜしめんが爲の故に、云ふなり。頌の中の六偈は、別して喜ばしむるの相を顯す。初に二頌有り、法の難說を明す。次に二頌有り、法の難聞を顯す。次に一頌有り、難說聞に喩ふ。末後の一頌は、難を擧げて默を結す、直に難說と云ひて、自身無智にして、說くこと能はざるを言はざるを以て、前の大衆、何因の疑を去る、故に喜を

【佛とは故に】頌に諸佛とあるを、論に釋する言なり

生ぜしむ。亦直に難聞と云ひて、此樂聞くことを得るに堪へずと云はず、故に大樂、何縁の疑を去りて、悅喜を生ぜしむ。「論」の中に於て、大智と名くるが故に、所畏無きが故に、不堪答を離れ、不正答を離るるなり。二偈の中に就きて、初の偈は、難說の法を顯し、後に難說の義を彰す。又釋すらく、初は正しく難說を顯し、後は難說を辨ず。所以に、初の中の菩薩所行とは、是れ出世間の智の故に、證智を謂ふなり。此は是れ難法の體なり。第一難思と云ふは、其難相を顯す。謂はく、名相を出づるを、說きて最難と爲す、相に名くる所無きに在て、未だ曾て有らず。又此一偈の内に、初の句は證行を明し、次の句は難相を彰じ、次の句は、十地を分別して敎行を顯し、後の句の諸佛根本は、此證敎二行を彰す。是れ佛果を出生する處の故に、根本と爲す。證行最難に約するに由るが故に、證し難きなり。敎行未曾有の難に約するが故に、「信じ」難きなり。「佛とは佛智を覺るが故に」とは、謂はく、佛果の智を覺悟するを、方に佛と名く。第二の頌は難の所以を釋す。「論」の中に、先に生起の内に、「彼菩薩の行事義住、是の如く說くべからず」と。行とは彼前の菩薩の所行なり。事とは彼前の地事分別なり。此行と事とは、理に卽して成ずるを、事義住と名く、並に言表に超ゆるが故に、不可如是說と云ふなり。此偈の中に、難とする所以は、四心の能知する所に非ざるを以ての故に。一は微なるを以ての故に、聞慧の境に非ず。二は思慧は麁に非ず、此は可得なるべきも、見難きを以ての故に、彼が境に非ざるなり。三に修慧は心を行ず。此は可得なるべきも、念を離るるを以ての故に、彼が境に非ざるな

【非心及…攝すべし】頌に「心の能く及ぶ所に非ず」といへる中に攝むべしの意。

【如是甚深…如是可解】論の文を揭げて釋す。

【迷沒】大正藏經には迷悶に作る。

【持心の下の二偈】經の「心を持する…難聞せん」の二

り。經の中には、此句を略す。亦は同じく非心及の中に於て攝すべし。諸の中名世間修とは、地上に備びて、但地前の所知を取らんが爲の故なり。問には、旣に地前の所知に非ざるが故に、地上報生の智は、亦地前に非ざれば、應に彼法を得べし。彼は但是れ因より生ずる所の、變易等の報、異熟の心識なるを以て、是れ照實の智に非ざるが故に、境に非ず。故に『論』に云はく、「心境界とは是れ心地なり」と、故に非心所及と云ふなり。下に心地と云ふは、心に隨ふの所受の報にして、心に隨ふの所行の境も亦心地と名く。旣に四心に非ず。是れ誰が境ぞや。唯智境の故に。是れ何の智境ぞや。唯根本智なり。彼れ實義を見るを以ての故に、何が故に餘の境に非ざる。是れ無流なるを以ての故に。經の中の佛の字は、是れ『論』の中の無流なり。如是甚深とは、上の離言心を結し、如是可解とは、上の從智慧出を結す。是れ智慧照現するを以ての故に、名けて出と爲す。如是不可說とは、上の無流を結す、是れ出世の佛境なるが故に。聞則迷沒とは、謂はく、言を執して法を取り、迷ひて眞理を覆ふが故に、名迷沒と云ふ。『論』の中に、隨聞取著とは、聞を解するなり。謂はく、言の中に沒在するが故に。「聞とは卽聞なれば、是れ不聞に非ず」とは、迷を解するなり。謂はく、言に隨ひて實を取るを、名けて卽聞と爲し、地法は寂滅離言なるを知らざるを、非不聞と名く、離說を解き覺んぬ。

持心の下の二偈は、難聞を明す。中に於て、勝法の心を持ち、堅きこと金剛の如し。此を總句と爲し、信堅證堅を別と爲す。若し堅信無くんば、他分の法に於て、受くる能はざ

偈。

【佛菩提の下】論に「佛菩提無邊」等といふを指す。

【以爲第一妙云云】以下、經文を釋す。

るが故に。若し堅證無くんば、自分の法に於て、入ること能はざるが故に。是故に要ず此二を具して、方に法を聽くに堪へたり。『智論』の中に、「無信は卽ち受けず、無慧は卽ち解せず。信慧を具するが故に、方に能く法に入る」といふが如し、亦此に同じ。先に堅信を釋す。謂はく「深く佛の智慧と信ず」とは、『論』に云はく、「唯佛の知る所にして、我境に非ず」とは、如來を仰推するに自ら更に無知の故に、信の深きを顯すなり。『勝鬘經』に、三種の正智有るが中に、後の仰推の智は、亦此に同じ。佛菩提の下は、深くして信ずることを彰すなり。佛果の德は、法界に等同にして、分量斯に絶することを明す、故に佛菩提無邊と云ふなり。佛の自德無邊なるを顯す。又衆生の機感萬差の爲に、佛爲に法を說くに、祕密顯了、諸乘の差別有り。前後の相違、極めて限齊無きが故に、佛化衆生所說法門種種と云ふなり。此は外化無邊を明す。此二處に於て自己は知らずして、能く信受するが故に、信故と云ふなり。以爲第一妙とは、此所信を以て第一と爲し、微妙尊の所信と爲るなり。心無疑難とは、難信の處にして、能く信ずることを顯すなり。後の偈は證堅を辨ず。『論』の中に何者心地とは、所證の法を問ひ、云何が無我智とは、能證の智を問ふ。隨心の下は所證の法を答ふ。隨心所受三界中報とは、五根の身を明すなり。又隨心所行一切境とは、六塵の境を明すなり。此內外根境の如き、皆是れ心識の所依の故に、心地と名くるなり。無我智とは、下は能證の智に答ふ。通じて之を論ずれば、內外の法の中に、皆二無我を具す。別に寄せて之を言はば、內身に於て我空を得、外境に於て法空を得。『經』の中に離計

我」とは、內根に約して、我空を明すなり。及び離心所行地とは、外境に約して、法空を明すなり。如是菩薩とは、此二堅を具して、方に乃し聞くに堪ふ。則ち此法は只是れ難聞にして、是れ不可聞に非ざることを顯す。寂滅の下の一偈は、第三に難說聞を喩ふるを辨ず。中に二門を作りて釋す。一は經に隨ひ、二は論を會す。『經』の中の虛空とは、虛空の、彩色に畫せらるべからざるが如く。此寂滅智は、名句の所詮に非ず。如執疾風とは、疾風の、執捉すべからざるが如く、此無流智は、音聲の能く說くところに非ず、故に說甚難と云ふなり。

二は『論』を會して意を顯すが中に、亦二あり。先に意を顯し、後に文を釋す。意を顯すに之れ何ん。此中の二の喩事に、三重有り。一は太空の喩。所依は平等の果分を以てす。二は畫風の喩、能詮の言說の敎を以てす。三は畫風住處の喩。說く所は十地の因分を以てす。然も此三義に其四句有り。一は空の如く平等なりと雖も、風畫の遊履に約せば、住處無きに非ず。住處有りと雖も、空を以て體と爲すが故に、相を離れて見難し。此れ則ち風畫に約しては、無にあらず、太空に就きては有ならず。然も此不無は即ち是れ不有なり。故に難說難見なり。此は十地の因分に約して、辨するのみ。二に平等の果分に就かば、亦有無を離る。謂はく、虛空の體淨なるが如きが故に、無ならず。風畫は住處有るに隨ひて、故に不有なり。然も此不無は即ち是れ不有なり。然も此不無は即ち是れ不有なり、故に見るべからず。三は風畫の動作に約す、故に不無なり。自ら相を現ずること能はざるが故に、

【初の畫…相似】論の「空中の畫色の如く壁の如し」の句を釋す。

【三は是中云云】論の「是中に不住の故に見るべからず、空中の風の如く、樹葉の如し」の句を釋す。

不有なり。然も此不無は、即ち是れ不有なり。故に亦見るべからず。四に前の三句を混ず。謂はく、淨空は有ならず、即ち是れ、風畫及び處の、不無の故に。無說無示は說示に異らず、風畫及び處の不有は、即ち是れ淨空の不無の故に。如幻の說と雖も、亦即ち是れ、無說無示なり。問ふ『此と下の鳥跡とは、何の別ぞや。』答ふ『此中の文の意は、言即不言の教を以て、彼有即不有の義を示す。是故に難說難聞は、之を說に況す。下の文の鳥跡の處は、直に所證の十地の宣示すべからざるを辨じ、之を證に況す。此不同有るなり。』

二に文を釋せば、此論釋の中に三有り。先に喩を解し、二に如是佛智の下は、合を解す。三に畫者の下は、重ねて前の中の喩に合す。內に四重の三句有り。一は畫に約し、二は風に約し、三は雙べて辨じ、四は喩に合す。初の畫の中の三句とは、一は空中の畫色の如し。是れ初の句は、總じて喩相を擧げて、動筆の畫を明す。二は如壁は是れ第二の句にして、別して畫處を辨じ、其不無を明す。空中の畫處に相有りて、明し難きを以ての故に。更に轉じて壁上に喩へて顯示す。謂はく、彼空中の畫處の不無は、壁上の畫處の如く相似す。三は是中に不住の故に、見るべからず。是れ第三の句は、別して不有を明す。彼空畫は停住するを、得ざるを以ての故に、不可見なり。二は風に約す。三は空中の風の如きは、是れ初の句、樹葉の如きは是れ第二の句にして、是中の不住等は、第三句と爲す、義は畫の釋に同じ。三に雙べて辨ずるに三とは、一は、此動作は是れ、初の總句、動は是れ風、作は是れ畫なり。二に非不空中有此二事とは、是れ第二の句にして、是は不無を雙べ顯す。

謂はく、空中に於て風畫二種の處、無きに非ず。三に如是虛空處は事、處を說くべからずとは、是れ第三の句にして、雙べて不有を顯す。謂はく、此二處、虛空を體と爲すが故に、此は是れ畫處、此は是れ風處、此は是れ高處、此は是れ下處と分別すべからず。故に不可說處と云ふなり。前には不可見と云ひ、此には不可說と云ふは、境に約し說に約するなり。四には法、合するの三句とは、一は是れ畫風如說とは、初の句に合す。謂はく、說の中に具に、聲、名等有り、故に兩の喩は、同じく說に合するなり。二に以非自性の下は、超えて第三の句、不有の義に合す、相を離れて見難きなり。謂はく、所說の十地は、自ら能詮にあらざるが故に見るべからず、然も三門を出す。一には、風畫處の自性、無なるを以ての故に、虛空に同じきが故に不可見なり。二には、何んが性に非ざる。自住すること能はざるを以ての故に。三には、云何が住せざる。是れ客なるを以ての故に。謂はく、風畫處を虛空に望むるに、不有に非ざるが故に是れ客なり。是客に由るが故に、不住無性なり。不住無性の故に、見るべからず。地法は之に況して知んぬべし。三に非不於中有此言說とは、是れ却つて第二の句に合す。問ふ、此は所說の地法、無ならざることを明す。何が故に乃し非不有言と云ふや。答ふ、十地の差別は、言に由りて異旨を分ち、詮に從ひて目くるが故に、言說と云ふ。彼空中の風畫の、不無に由るが故に、彼風畫の處有りと說く。此中も亦爾なり、知んぬべし。二に所喩の勝妙を顯すが中に、如是佛智とは、是れ十地の智、卽ち是れ、經の中の寂滅無漏智なり。是の如く地智の言說は、謂はく、無說の說等なり。

【此偈…知んぬべし】論に、「此偈に證有り信ありて、說くべく聞くべし世間に證信を得難きが故に、我說かざることを示現す」といふを釋す。

此に由りて、地法の言議を出過することを顯示し、校量するが故に、勝と云ふなり。三は、二喩を立つるの意を明すとは、中に於て、先に畫は名等に合し、次に風は音聲に合し、後に說聽は要ず、此二を藉るを以ての故に、二喩を須ふ。謂はく、若し音聲無くんば、耳識は聞かず。若し名等無くんば、意識は解せず。如是可說とは、前の、二事を以て說くを牒するなり。如是可聞とは、前の、二事を以て聞くを牒するなり。如是難見とは、前の、地の勝を校量し分別し、見難きことを、顯示するを牒するなり。何故不說とは、後の偈を生ずるなり。謂はく、上に說くが如く、只難見とのみ言ひて、難說聞に非ず。何が故に說かざるや。後に偈を擧げて答ふ。證信は得難きを以ての故に、我不說難證とは、第二の句を解し、難信は第三の句を解す。此偈の下は、第四の句を解す。默然の義は「論」の如し。知んぬべし。

華嚴經探玄記卷第九

華嚴經探玄記 卷第十

此れ地品内の勸地說分を盡す。

魏國西寺沙門法藏述す

(一)自下解脫月の、第二の請の中に二あり。先に長行、後に偈頌なり。前の中に三あり。初に總じて告請す。二に是大菩薩の下は、衆の正請を歎じ、後に是故の下は、請を結す。正請の中に就きて十句あり。初に直心清淨とは、是れ總句なり。謂はく、正しく深法を念ずるが故に、直心と云ひ、諸の雜穢を離るるが故に、清淨と云ふ。下の九句は別にして、前の五は是れ阿含淨、後の四は是れ證淨なり。謂はく、教に順じて修行するを、阿含淨と名け、理を證し行を起すを、名けて證淨と爲す。又、地前の所行を、阿含淨と名け、地上の所成を、名けて證淨と爲す。阿含の五の中に、初に欲淨隨所念阿含とは、是れ所求の法は、一に非ざるが故に、隨所と名く。得方便等とは、是れ能求の心なり。『經』に、善修菩薩道と名くとは、所聞の法を念じ、教に順じて修行するなり。二は是れ『論』の中の、第四の生得淨なり。謂はく、出世の勝報を、上上生と名く。地前に助道の行を起し、彼生を得んと願ずるを、名けて念勝と爲す。故に善集助道法と云ふ。三に、是れ求淨は、身口の恭敬を以て、求法の行を起すが故に、敬行と名け、此諸佛に隨順して、法を求むるを以て、名けて隨順と爲すが故に、善能恭敬供養諸佛と云ふ。四に、

【一】以下、解脫月菩薩の第二請の文を釋す。

【初に欲淨云云】論文を牒釋す。即ち論に阿含淨に五種を分つうち、一は欲淨。所念の阿含に隨ひて、方便念覺淨を得」といへる文を引きて釋す。

【二は是れ…云ふ】論文に「上上生勝を得んと願ずる念勝る」といふを引

受持の中に、先に受を釋す。於無量とは聞きて來久しきなり。多聞とは所聞廣なり。下は持を釋す。憶持とは全く忘失するに非ず。不謬と言ふは、少の錯誤も非ず。經の、無量の佛に於て、多く善根を種うるが如きは、多佛に親近し、正法を聞持するの善根を種うるなり。五に行淨の中に、地上の直證の法を求めんが爲の故に、少欲頭陀の、著を離れて五行を習行し、多の功德を積集し、成就するが故に、方に能く地に入るが故に、成就無量、深厚功德と云ふ。下は證淨を明すに、四行り、一に得淨とは、謂はく、初地に實を證するを得と名く。初見道に眞智現觀し、決擇正證するを以ての故に、現智善決定故と云ふ。又釋すらく、法の、心を顯すを、名けて現智と爲し、心の、法に安ずるを、名けて決定と爲す。「經」の中の離疑は、是れ現智なり。離疑悔は是れ善決定なり。二に不行淨は、修道位の中に於て、彼一切の大小の煩惱、永く行ぜざらしむるが故に、無有貪等と云ふ。然るに見道位の中に惑を斷じ理を見るの義、增せざるに非ざるも、修道位に重ねて眞理を觀じ、障を除く義、增するが故に偏に說くなり。三に無厭足淨の中に、下に對して出離を彰すを、不樂小乘と名け、上に望めて入を顯すを、得上勝悕望と名く。重釋の中に、復念持彼功德故とは、謂はく、彼佛果の功德を念じて、憶持して忘れず。經の中の安住を釋するなり。又彼能對治の功德を念じ、常に現前するが故に。四には不隨他敎淨。謂はく、位は究竟道の中に在るを、趣盡道と名く、菩薩道の極なるを以て、之を名けて盡と爲す。所證の自心、開覺顯示するを、自正行と名く、故に不隨他敎と云ふなり。自下第三に請を結

…きて釋す。

【三に是れ…云ふ】論文に「二には求淨、隨順して身口の散行を得」といふを引きて釋す。

【四に受持…非ず】論文に「三には受持淨。無量世に於て、多聞し憶持して、謬らざる故に」といふを引きて釋す。

【五に行淨…云ふ】論文の「少欲頭陀等を習ひて、多功德を成就す」を引きて釋す。

【頭陀】（Dhūta）衣服、飲食、住處の貪着を掃ふ行法。

【見智】正しく煩惱を斷ずる位。之と同時に無分別心眞如法を證す、即ち斷惑證理これなり。

【三に無厭足淨云云】論文に「小乘を樂はずして、上勝悕望の心を得、復彼功德を念持するが故に」といふ。

を引きて釋す。

【四には…云ふ】論文に「趣盡道中自ら正しく行ずる故に一といふを引きて釋す。

【二】以下、第三請の文を釋す。經の「金剛藏菩薩の言はく」の下。

【論釋の中云云】論文に「所法說中に於て、法器を見ず、聞けば疑惑を增す：疑は正行に相違す、猶豫の義の故に。惑は心義に迷ふ故に、能く善法を壞し、善法を遠離する故に」といふ知るべし。

す。中に於て二句あり。初に佛力を承けて、說くことを請し、後に樂の能證知を歎ず。第二の頌の中に就きて、初の頌は、法を擧げて請ず。上半は法を擧げ、說を願じ、下半は說の、益有ることを明す。後の頌は樂の請を歎ず。上半は阿含淨を頌し、下半は證淨を頌すること、知んぬべし。

(三)第三請の中に二あり。初は金剛藏、損を擧げて以て、違することを明し、後は解脫月、益を歎じて、重ねて請ずることを明す。前の中に二あり。先に長行、後に偈頌なり。前の中に二あり。先に前の所歎を領す。德を擧げ、失を兼ぬるが故に雖と云ふ。二は其餘樂小の下は、損を擧げて以て違す。此中の三句は、一は善を敗るの損、二は是人の下は、樂を失ふの損なり。又、前は苦因を成じ、後は苦果を得べし。三は我愍の下は、其默するの意を結す。又彼餘處を指し、後時に小樂を餘と爲す。是れ會の中に、此小樂有るに非ず。又是れ地前の不定種姓なり、一向に菩薩の道を修すること能はず、故に樂小と云ふなり。論釋の中に、三句の內、先に默するの意を釋す。謂はく、樂小の衆生に、此法器有ることを見ず。法器無きが故に、聞けば疑惑を增す。二に初の句を釋す。中に於て、疑は正行を妨げ、心義に迷ふ者は、惑、解を障ふ。次に過失を顯す。謂はく、疑有るを以ての故に、先の所修を敗るを、壞善法と名け、惑有るを以ての故に、一向に行ぜざるを、遠善法と名く。如是の下は、第二の句を釋す。疑ひを以ての故に、正行に於て受けず。惑ひを以ての故に、退行に於て受く。此を以て因と爲すが故に、後生死を感じ、長夜流轉して、

【如是の下】論文に「是の如く、不受行因、受行退因を顯示す」といふを指す。

【第二に解脫月の請】經の「解脫月菩薩の言はく、佛子」等の文を釋す

樂無きが故に衰ふるなり。苦行るが故に惱むなり。二の頌の中に二あり。初の一頌半は、前の領所歎を頌す。謂はく、阿含に隨ひて、信堅きこと須彌の若し。定心、理を證して亂れざること、海の如し。後の一頌半は、前の損を擧げて、以て違することを頌す。中に、初の四句は、敗善の損を頌す。『經』に、取相名識不取相名智と云ふ。又分別を識と名く。言に隨ひて義を取るが故に、分別せざるを智と名く。深く離言の法を解するが故に。次の句は衰惱等を頌し、後の一句は默の意を頌す、知んぬべし。

第二に、解脫月の請の中に、二あり。謂はく、長行と頌となり。前の中に亦二あり。先に正しく請し、後に請を結す。前の中に三有り。初に承力等を願じ、總相をもて說を勸む、前の默の意に翻ず。二に佛所護念の下は、佛力を以て、人をして信解せしむることを明す、前の疑惑に翻ず。三に一切菩薩の下は、地法の要勝を明し、心の多益を說く、前の衰惱に翻ず。初の中に、力を承けて說くことを勸むとは、大衆の力を承けて聞くに堪ふることを、明すが爲の故なり。善分別とは、理に順じて、說かしむるが故に。不思法とは、此地法を明す。縱ひ因に誘れども、聞くことを得れば、猶利益を獲るが故に、難思なり。第二に、文の中に二あり。初に標、後に釋なり。標の中に、此地法、不思議なりと雖も、佛力加護せば、必ず信じ易からしむることを明す。釋の中に、所以に此地の法を名けて、以て佛の護念の事と爲し、十方世界の中に、但十地を說くと釋す。十方諸佛の法爾の護念は、上の加分等の如し。第三の文の中に四有り。初に宗を立つ。謂はく、一切の菩薩、是く

【初章爲本】論文に「佛子、譬へば一切の書字數說、皆初章の所攝にして、初章を本と爲す」といふを指す。
【四に如是の下】論文に「是の如く佛子」等といひ、十地を佛法の根本とすることを合法とする下をいふ。
【故に不可避と云ふ】疑惑避け難しとの意。
【不說多過】論文に「若し說かずんば、多くの過咎あり」と。
【下に疑を釋する中云云】論文を釋す。

の如きの十地の事を護持するが故に勤行精進す。下の他方證成等の如し。二に因を出す。云はく、何が故に菩薩、同じく此法を護るや。是れ菩薩の最上の所行なるを以てとは、上は是れ首の義、首は是れ初の義なり、論經に名けて最初の所行と爲す。是れ阿含行の故に。一切の佛法に至ることを得るが故にとは、是れ證得行の故に。三に喩を擧ぐる中に、初章は是れ、悉曇章の中の、初の啞阿等の十一音なり。或は唎離等を加へて、十四音と爲すは、卽ち字緣なり。及び迦佉等の三十六は字界なり。音を以て字を加へ、一切の諸の名句文等を轉成するが故に、故に初章爲本と云ふ。然るに、此所成の一切の諸字は、皆卽ち本の初章を離れざるが故に、故に皆初章所攝と云ふ。四に如是の下は合せ結す。謂はく、十地を初章に合し、一切の佛法を、一切の字に合するなり。上來請は竟んぬ。二に是故の下は請を結す、知んぬべし。『論』の中に、何故復重請といふは、前に已に重ねて請し、此に更に重ねしむるが故に復重と名く。疑惑に二有り、一に不定の者は則ち避くべし。二に定の者は避くべからず。此は定に約して言と爲す、故に不可避と云ふなり。不說多過とは、略して四の過有り。一は、不定疑惑の衆生は、之を轉じて以て、信解を成ずることを得ず。二に、已に信解を成ずる者は、阿含行を成就することを得ざるが故に。三に、已に阿含行を成就することを得る者は、入證することを得ざるが故に。四に得入證の者は、佛法を得ざるが故に。斯四の失有るが故に、多過と云ふなり。一切の佛法を成ぜざることは、是上の四種、皆成ぜざるが故なり。下に疑を釋する中に、先に問ふ。諸佛

【下は釋の中云云】論に惑報定と作業定、を擧げて、疑の避くべからざるを說くをいふ。

【地行は…智】十地は次の如く、十度の行を修し、十重の障を斷じて十法界を證す。

【十法界】これ十眞如。一、遍行。二、最勝。三、勝流。四、無攝受。五、類無別。六、無染淨。七、法無別。八、不增減。九、自智在所依。十、業自在等の所依の十眞如。

【三】、二に大衆請の文を釋す。

の有力、能く信を生ぜしむ、何が故に猶謗意を起すや。此は前の不可避に依りて問を爲す。下は釋の中に、諸の衆生に、二種の定有るを以ての故に、避くべからず。皆已に決定の業を造作し、受報必然なるを、感報定と名く。宿罪心に熏じ、必ず惡を造らしむるを、作業定と名く。縱ひ佛自在なりとも、彼二定に於て、其緣を差闕せんと欲するも、成就せざらしめ、終に亦攝すべからず。『論』に云はく「梵本の斷の字、師子の躑躅するに似たるが故なり」と。餘義は知んぬべし。

頌の中に、初の一頌半は前の初段の、總じて說を勸むる文を頌す。中に於て、初の二句は說者を歎じ、次の四句は、前の善分別不思法等を頌す。謂はく、十地の行は是れ行なり。所入の十地の法は、是れ所入の位なり、又地行は是れ加行の智、地法は是れ根本智なり。又地行は是れ、施戒等の智なり。所入の地法は是れ、遍滿等の十法界なり。又初は阿含行、後は入證の法なり。下の二句は因圓得果なり。所有十方の下は、前の第二の文の、諸佛法應護念等を頌す。後の二頌は、前の第三の文を頌す。中に於て法喩合有り。法の中に、初の二句は最上所行阿含行を頌し、次の二句は得至佛法證得行を頌す。餘の文は知んぬべし。解脫月の請竟んぬ。

(三)第二に、大衆同請の中に、先は序、後は頌なり。頌の中に、五頌半を二に分つ。初の四半は、人を歎じて請し、後の一は、法を歎じて請す。前の中に二あり。初の二は說者を歎じて請し、餘は聽者を歎ず。前の中に初の五句は、金剛藏の具證の德、阿含の德を歎じ、

後の三句は、剛藏の能く聽者をして證に入り、阿含に入れしむることを歎ず。前の中に初の四句は、證力辯才の成就を歎じ、後の一句は阿含力辯才を歎ず。此二力、方に能く說くこと有るを以ての故に、偏に讚ずるなり。故に『論』に云はく、「證力等を以て、是故に讚歎す」と。初の中に、上とは是れ總なり。總に二義有り。一は寬なり。謂はく、二力を該ね、俱上を顯すが故に。『論』に云はく、「上とは是れ總なり」と。二は狹なり。謂はく、唯證力に就きて以て勝を顯すが故に。『論』に云はく、「又復上とは、證力等を顯す」と。妙智慧とは是れ眞實智、即ち正體智なり。樂說無有量とは、是れ後得智なり。說法の與に本と爲るが故に、體性と云ふ。德重如山王とは、上の二智尊重の相を顯し、哀愍說十地とは、是れ彼後智、緣に對して巧に說くが故に、果と云ふ。此三は皆、前に依りて後を起すこと、知んぬべし。字義に二有り。一は詮表の義、二は莊嚴文辭の義なり。『論』に云はく、「字義成就す」とは是れ初の義なり。彼經を釋する中に、眞實義相應復是滑利等とは、是れ後の義なり、彼經を釋する中に、美妙言也は、謂はく、言辭なり。流澤を名けて滑利と爲し、言辭巧妙の故に、勝上と曰ふ。經に戒念慧清淨とは、此一句は阿含の德を歎ず。謂はく、戒とは禁心なり、守念は是れ論經の念堅なり。能く佛の雲雨說法を受け、之を持して失はざるが故に、受持と云ふ。復他の爲に說きて、分明顯了ならしむるが故に、顯說と云ふ、此れ念堅を釋す。「是菩薩、阿含の中に於て、淨慧疑無し」とは、慧清淨を釋す。自下の三句は、能く聽者をして敎證に入らしむ。中に於て、是十地の義を說くとは、謂はく、聽

【白下は衆云云】經の「戒定慧の功德」等の下。

【相】大正藏經に想に作る。

者をして阿含行を得せしむるが故に。下の二句は其をして入證せしめ。十力根本とは、已入地の者に、佛果を得せしむるなり。無礙智本行とは、未入地の者に、入地の無礙智を得せしむるが故に。十地の智能く、十障を治するを以ての故に、無礙と云ふ。白下は衆の堪聞を歎ず。中に於て、初の一頌半は、衆の有根を歎じ、後の一頌は、衆の有欲を歎ず。前の中に戒とは、善く外の威儀に住して、慢を對治し、定とは取執著を離れて、內心に我を調伏し對治す。謂はく、執我に由るが故に、法に於て恭うせず、慢を起すに由るが故に、師に於て敬はず、戒定は此を除く、阿含を聞くに堪ふるが故に、憍慢已滅と云ふなり。慧とは正見善思の義、邪見を對治するが故に。功德とは、正意に歡喜して、疑惱を對治するが故に。此二行に由りて、能く證することを得るに堪へたり、故に諸邪見已盡と云ふなり。是れ衆に疑無きなり。然るに此大衆の、此の如きの行德は、金剛藏久しく、自ら先に知ることを明す、故に集在仁者心と云ふ。謂はく、仁者は是れ剛藏なり。餘句は知んぬべし。『論』の中に、妄者妄相見中同使故とは、此れ彼經の中の妄の字を釋す。謂はく、妄は是れ妄想の故に。上に云はく、二の妄想有りて得證するに堪へずと。問ふ「妄想は是れ根本なり、見疑に非ず、何ぞ說きて、二の妄想有りと云ふことを得ん。」釋すらく、是れ倒見の中に、同じく是れ使なるを以ての故に、見の中に攝入す。『論』の中に、深者細意善思惟故とは、眞如の理を觀ずるが故に、細意等と云ふ。譬病思良醫の下の一頌は、衆に求法の勝欲有ることを歎ず。論經の四種は、此中に唯二なり、具に釋すること『論』の如

【自下の一頌】「是故に曠大の意」等の一頌。

【四】以下、佛加請の文を釋す。經の「爾時、釋迦牟尼」等の下。十地經論第一終りて、以下第二なり。

し。但し世の甘露に四義有り。一は渇を除くこと水の如し、二は飢を遣ること食の如し、三は病を療すること藥の如し、四は樂を生ずること蜜の如し、是故に所聞の法に況するなり。聞思修の證を謂ふに、論の如く、應に知るべし。自下の一頌は、法を歎じて請を明す。此中に、廣大意とは、是れ論の中の淨慧なり。此は是れ後得智にして、是れ說法の所依なり。下の三句は是れ體性、此は是れ所說の體性なり。三は此所說に依りて、佛の十力菩提を得るを、名けて果と爲すなり。經の中に、略して此句無し、知んぬべし。此中の三義と前と同じからざるは、前は本智、後智、及び所說とに約して三と爲し、此中は後智と所說、並に依法所成とに約して、三と爲すが故に、不同なり。論文は解すべし。

(四)第三に、佛の加請の中に二有り。先に長行は光加を明し、後に偈頌は請說を明す。但し加請を分別するに四句有り。一は是加にして請に非ず、上の加分の如し、二は是請にして加に非ず、上の菩薩の請の如し。三は亦加亦請にして、此段の文の如し。四は請に非ず加に非ず、餘の文の如し。又光明の身は、是れ加にして請に非ず。偈の出音聲は、是れ加にして是れ請なり。若し聽者に望めば、是れ加にして請に非ず。長行の中に就きて、論經の中に準ずるに、五義有り、一は此佛、光を放ちて彼を照し、二は彼佛、光を放ちて此を照す、三は此衆、光を尋ねて彼を見、四は彼衆、光を尋ねて此を見る。五は光臺の偈を說く。此光臺の偈は、應に口加に屬すべし、何が故に此に在るや。所出の聲は是れ口加の攝なれども、能發の聲處を取りて、身に判屬せしむるを以てなり。眉間放光は、中道法

【八業】一、覺業。二、因業。三、卷舒業。四、止業。五、降伏業。六、敬業。七、示現業。八、請業。

界從り流出する教道を表し、白毫は十地是れ無流法なるを表すが故なり。此五段に於て經の中に略して、三四の彼此相見の文無し。又此に於て三門を作る、一は八業を明す。『論』の如く應に知るべし。中に於て、略して卷舒の業、及び降伏の業無し。二は身とは、八業の中の卷舒、敬、示の三種は是れ光體なり。往來を流星身と名く、第八凝停は、空に在るを名けて、日身と爲す。三業と身と相對するに、四句有り。一は是れ業にして身に非ず。謂はく、覺因伏止なり。二は是れ身にして業に非ず。謂はく、空中の光毫なり。三は亦身亦業なり。謂はく、卷舒、敬、示なり。四は身に非ず業に非ず。謂はく、前の五段の中に於て、第三、第四段は、但光相を尋ねて見せしむ、是れ業身に非ず。餘の義は『地論』の釋の中に、說くが如し。

第二に頌中に、七頌半有り、三門を作る。一は教請分別、前の六頌は是れ請說なり、法は是れ勝るる事を彰さんが爲に、人をして敬重せしむ。後の一頌半は、是れ教說なり、說の眞なることを顯さんが爲に、衆をして深信せしむ。二は加請分別なり。六頌の中に就きて、初の二頌半は、說者に望めて、亦は加、亦は請なり。謂はく、與力を加と名け、勸說を請と稱す。後の三頌半の中に、初の一は聽者に望めて、力を與へ聞くに堪ふるは其請を成ぜんが爲なり。後の二頌半、法の利益を擧ぐるは、加請を成ぜんが爲なり。三は文を釋する中に、初の一頌半は、能加を明し、次の一頌は、加の所爲を顯し、次の三頌は、說法利益を彰し、後の二頌は教說の分齊を明す。初の中に二の釋を作る。一は經に隨ひ、二は

【又此四義云云】論に四種勝を明す一に自在勝。二に力勝。三に眷屬勝四に種姓勝なり。

【何が故…故に】これ論文に無等等を釋して後、更に問ふ下の文なり。

『論』に就く。經に隨ふが中に六句あり、佛の六種殊勝を顯す。一は極位勝。無等等の故に。二は無染勝。空の如くに染無きが故に。三は威力勝。十力等を具するが故に。四は眷屬勝。菩薩、世間の佛を尊ぶが爲に、彼主と爲すが故に。五は會主勝。釋迦佛を以て、此會の主と爲し、諸佛は光を放ちて、此佛前に對するは、物化を助くるが故に。六は作加勝。神力を現じて、說聽者に加するが故に。二に論に就くとは、此中の神力は是れ、彼加を作す。此中の現とは、是れ能現にして、即ち天人の上なり。又此中の釋迦佛前現とは、釋迦は是れ姓、現は猶し生のごとし、釋し顯すこと論の如し。又此四義をもて、法主と爲すことは、一は、自在にして、他の爲に屈せられず。二は、力勝れて能く、他を摧伏す、三は眷屬輔弼豪强なり。四は種姓、釋曹尊高なり。初の中に二句あり。一は悲比無く、二は心に礙無し、是故に二障並に習、皆永く盡せり「何が故に但無等と說かざるや。等正覺を示現するが故に」とは、此に二義有り。一は、諸の賢聖を以て、下地に望むるに、皆亦等しきもの無し。然も其は、未だ必ずしも、上佛果に齊しからざるが故に、須らく等と明して以て、上に齊しきことを顯すべし。二は、佛の無等を明すときは、則ち謂はく、餘佛も亦此等に非ざるが故に。佛の齊等、勝劣有ること無きことを顯す、故に無等等と云ふなり。餘の義は『論』の如し、應に知るべし。二は加の所爲の中に、佛力を以て開くとは、佛力を承けしめ、衆の、佛は說くこと能はざるかと謂ふ疑を除く。法王無畏藏とは、文義蘊積の故に、名けて藏と爲す、文義、理に稱へば、能く破る者無きが故に、無畏と名

【字藏】聲名句文をもて諸地の行を說くに、能詮の敎を字藏といひ、所詮の義理に於て、行成じ證入し地智顯現するをもて義藏といふ。

く。此藏は唯し、佛自在の處の故に、法王と云ふ。此上は總じて顯す。下の二句は別して辨ずるが中に、諸地の所行を說くとは、是れ字藏成就なり。諸地の義差別とは、是れ義藏成就なり。下は說法の利益を明すに、三時の益有り。承諸佛神力の下の一頌は、聞時の益を明す。謂はく、法勝を以ての故に、聞く時即ち諸佛の加護を得て、諸の魔事を離る。上半は加の故に能く聞く、能聞決定の故に、無能壞者と云ふ。下半は聞の故に、已に護を得、上に解脫月の、佛所護念の事と云ひ、人をして信解し易からしむるは、是れ此義なり。漸次の下の二句は、修行の時の益を明す。謂はく、漸次に修行し、諸地具足して、必ず無上菩提を、成就することを得るなり。即ち上の句は因圓、下の句は果滿なり。自下の一頌半は、轉生の時の益を明す。初の一頌は正しく益有ることを明し、後の半は、餘の無益を簡ぶ。若し人、聞くに堪任する者は諸有る菩薩の種姓なり。昔此一乘の善根を種うる者此法を聞きて、能く正しく信受するに堪ふるが故に、大海の龍世界に生在して、長壽なりと雖も、亦此經を聞くことを得たり、此は是れ惡道難處長壽の者なり。右膝を地に著け、未だ動かざるの間に、已に賢劫の千佛出世を經と說くが如し。更に一轉の時に、復爾許の時を經たり、但し暫く臥息するに爾許の時有り、況や共一生をや。何ぞ中に在りて佛法を聞かざるが故に、難處と名くることを、計り知るべきや。若し是れ此法器は、彼に生在すと雖も、而も亦聞くことを得るは、法の機に隨ひて捨てず、難處を簡ばざることを、顯さんが爲の故なり。問ふ「若し此を聞くに堪ふれば、何が故に彼に生ずる。」答ふ「餘の宿

【光音】第二禪に三天あり、小光天、無量光天、極光天なり、今は總名を擧ぐ。

【理實には亦聞く】彼天の衆生、業果の色なくとも、定果の色を現じて諸根圓備し聞法す。諸仁王經中に此例あり。

業に由るが故に。龍女の聞法等の如し。又龍宮に、經有るを以ての故に。』問ふ、「若し彼に生じて、聞くことを得ば、何ぞ難處と名くる。」答ふ、「聞かざること多きが故に。聞くことを得ること少きが故に。多に從って難と名くるが故に。『智論』に、「決定して信じて、疑無き者は、聞くことを得」と云ふが故に。此經に、難處は聞くことを得ずと云ふが故に。及劫盡火中とは、此言は兩國の語に通ず。若し此に順ぜば、應に劫火盡中と云ふべきも、此言も足らず。若し具ならば、應に劫火盡の時、光音の中に在りと云ふべし、難處を以て、巧に略するが故なり。光音は是れ第二禪、火災を免るるを以てなり。『論』の中に等と言ふは、三禪は水を免れ、四禪は風を免るるを等取す、此は並に是れ、善道の長壽天の難處なり。」問ふ、「通じて論ぜば、色界は俱に是れ難處なり、何が故に初禪を擧げずして、直に二禪等を擧ぐるや。」答ふ、「彼初禪には、覺觀有るを以ての故に。難淺ければ擧げず。」問ふ、「若し此色界俱に是れ難處ならば、何が故に、「梵網」等の經に、彼處に在りて聞くや。」答ふ、「此れ勝境に據るが故に、說法有り、彼處の衆生をして、亦法を聞くことを得せしむ。此所說の如きは、若し實報に就かば、則ち難の攝と成し、又亦多に從へば、以て難の攝と爲す。」問ふ、「無色も亦難なり、何が故に彼を說かざるや。」答ふ、「菩薩は無色の天に生れざるが故に。又釋す、理實には亦聞けども但相に隨へば、彼は形色無ければ、聽受を絕するが故に、彰に聞かず。」下の二句は、非利益を論ふ。謂はく、人中の難無き處に生在すと雖も、然も慧無く信無ければ、終に聞くことを得ること能はず。問ふ、「人中の聞かざ

【三の漸次】一、觀漸次、證漸次、修行漸次。

【論に觀は】一本に「論に云はく」に作る、これ正し。

るは、何ぞ難に攝せざるや。」答ふ、「亦多に從ふが故に、疑に由るが故に信ぜず、信ぜざるが故に受けず。癡に由るが故に解せず、解せざるが故に、輕んじ棄つるなり。自ら受くる有れども而も解せず、解すれども而も受けず。是故に要ず須らく信を起すべし。此癡疑に翻ずるが故に、聞くことを得るなり。」是故の下の二頌は、教說の中に、初の一頌は、三の漸次に依りて、說くことを教ふ。後の一は、二利を擧げて說を勸む。前の中に、諸地智道とは、此は是れ觀の漸次なり。謂はく、加行智の推求を觀と名け、通じて入證を生ずるが故に、是諸地智之道と云ふなり。『論』に「觀は若は觀、若は依止なり、能く諸地の智を生ず」と。此は觀の中の、漸次の義を釋す、謂はく、觀とは意言の觀察なり。此增上力に依りて、諸地の正證の智を生ず。故に若依止能生等と云ふ。二に入勢力觀法とは、是れ證の漸次なり。謂はく、正體智は正證の眞智なり。此智能く惑を斷じ、理を證す。依として後得を起し、此三力を具するが故に漸次と名く。次第而修行とは、是れ證の中の漸次なり。得至於餘地とは、是れ『論』の中の上の句の展轉なり。各得の下の二句は、修行漸次を明す。是れ後得智なり。更に重ねて前の所證を觀じ、及び上地進修の法を聞受して、自利の行を成ずるが故に、得利益と云ふ。又、他の爲に宣說する等の故に。一切世間を利するが故に『論』に「此行種種の異行の境界」と云ふ。境界とは分齊なり。此三次第に成ずるが故に漸次と云ふ。又此三の中に、一一に各漸次有るが故に亦名く。又、此三隣接して漸次なるを、願說勿令斷と云ふ。

【五】金剛藏其請を容れ、説を許し分齊を顯す下。許經の「爾時、金剛藏菩薩、十方を」等の文を釋す。

【信敬とは四義】初二は金剛藏に就き、三四は義大説大に約して示す。

（五）第二に、説を許す分齊の中に、二行り。先に長行は、説を許すの意を序し、後に偈頌は、所説の分齊を顯す。前の中に、觀察等は其説相を明し、欲令等は、其説意を明す。前の中の『論』に云はく、「何が故に十方を觀察する、我慢無く、偏心無きを示すが故に」とは、別有り通有り。別の中に二あり。一に、十方の佛を觀じ、力を承けて説かんと欲するが故に、示無我慢と云ふ。二に十方の機を察して、同じく十地に入らしめんと欲するが故に、示無偏心と云ふ。二に、通の中に二有り。初に承力に約し、二に授説に約す。初の中に、何故觀十方佛とは、其力を承けんと欲するが故に、慢無きことを示す。隨ひて一佛を觀じて、力を承くれば便ち足る、何ぞ十方を觀るや、偏心無きを示すなり。二は、授説に約する中に、何が故に十方を觀ずる、説の相を示現するを以ての故に。謂はく、前に已に三位に五請し、備に慇懃を盡せり、今若し説かずんば、即ち我慢を成ず。是故に、方を觀じて説を示し、衆をして咸知らしめて、己が慢無きを顯すなり。若し爾らば、一衆を觀察せば、説相を示すに足らん。何ぞ具に十方の衆を觀ずることを須ひんや。偏心無きことを示すが故に。又觀察に二有り。一は內心照察の故に。二は目を擧げて眄視する故に。二に説意を明すが中に、信敬を增益すとは、前の金剛藏は、解脫月の初請に酬ゆる時、已に衆をして悅ばしむ。今更に明かならしむるが故に、增益と云ふなり。信敬とは、四義有るが故に。一は金剛藏、已に能說して、衆の何因の疑を去るが故に、信敬せしむることを示す。二は此剛藏、大衆の聞くに堪へざることを畏れず、衆の何緣の疑を拂ふが故に、

【宗要に六有り】一は本に約し、二は所詮、三四五は法智に約し、六は法に寄せて明す。

【四は…等なり】十地位中の後得智を以て、事に隨ひて行を起すに、大悲利物の、餘偏增するをいふ。

亦信ぜしむることを明す。三に、義大の法深妙にして、言を出して、衆をして深きことを知らしむるが故に、信敬を生ずることを顯す。四は、說大を宣ぶることを許し、其衆人をして聞くことを得しむること、今に在るが故に敬信と云ふなり。

頌の中に十三頌半有り、二に分つ。初の七頌半は義大を明し、後の六頌は說大を明す。此二大の義、略して四門を作る。一は名を定め、二は相を辨じ、三は可說不可說を明し、四は文を釋す。初の中に、所詮の故に、所以の故に、之を名けて義と爲し、深の故に、廣の故に、之を名けて大と爲す。謂はく、義卽大の故に、義大と名く。表義の故に、顯境の故に、之を名けて說と爲す。此說に因りて、彼義を得るが故に、教を所詮に從へて、亦名けて大と爲す。此れ則ち、大の說なるが故に、名けて說大と爲す。二に相を辨ずとは、此十地の宗要に六有り。一は所依の果海は、大虛空の如し。二は地智の所證たる十重法界は、空中所畫の處の如し。三は、根本地智の能く法界を證するは、能依の畫相の如し。四は、諸地の後得、事に隨ひて行を起すに、悲智の不住等なり。五は諸地の加行所起の行解を、趣地方便と爲す。六は法に寄せて諸地の差別を成ずることを顯す。第二地の中には、唯し十善を明して、其正地と爲し、三地は禪支なるが如し。餘地に寄する所、是の如く知んぬべし。此六の中に於て、前の三門は合して義大と爲し、後の三門は、合して說大と爲す。三に可說不可說を明すとは、先に義大に就き、次に說大に約し、後に雙融を辨ず。義の中に三義有り。一は果海に約す。總標を以て、人に有と知らしむべきを、名けて可說と爲し、

指斥して、人に示すべからざるを、不可說と名く。二に詮處に約す。既に此所詮は、相を離れ名を離るるも、還りて此法不可說聞と云ふは、此遣言の言、彼法に當るを以ての故に、名けて可說と爲す。言有らば斯に遣る、故に不可說と名く。三は本智に約す。謂はく、遮詮を以て、解せしむるが故に、可說と名け、直詮述ばざるが故に、不可說なり。『攝論』に云はく、「無分別智は五相を離る」と。謂はく、熟睡昏醉等、直詮到らざるを以ての故に、遮詮に約して、以て彼法を示す。二に說大の中に就きて、亦三あり、後得智に約す。事に隨ふの行相は、言を以て分つべし、是れ則ち可說なり、是れ出世間の故に不可說なり。二に加行智に約す。謂はく、是れ意言觀の故に、是れ則ち可說なり。觀の中の行相は、言至らざるが故に、不可說と名く。又、諸法の自相は、皆不可說なり、諸法の共相は、皆是れ可說なり。此一門は一切の法に通ず、之に準ぜよ。三は所寄の法に約す、之に寄せて表示するを以て、人に十地を解せしむべきが故に、名けて可說と爲し、此を以て即ち、十地と爲すべからざるを、不可說と名く。三は、雙融の中に就きて、此上の六の中に、各說は即ち無說、無說は即ち說なり、無二俱融すること、準思して見つべし。又、果海は緣を離るるが故に、不可說なり、所詮は緣に就かば、是れ即ち可說なり。二に所詮は修に非ず、故に不可說なり。能詮は修起なれば、是れ則ち可說なり。三に、性說は相を離るるが故に、不可說なり。後得は相を帶す、是れ則ち可說なり。四に、後得無分別の相は、俱可說なり、加行は意言有るが故に、是れ則ち可說なり。五は、加行觀無分別の故に、不可說な

【初の中…三のみ】一に總じて地微を顯す。

【上來所說等】論文に「上來の所說は皆智地に依り、後復說く所も亦智地に依る」といへり。

【自體無念…顯す】地智の自體諸の思慮分別を離るるなり。

り、法に寄せて地を表す、是れ則ち可說なり。此上の不可說は、皆各可說に異らず、眞理普遍なるを以ての故に。可說は不可說に異らず、緣修無性なるを以ての故に、是故に下の文に、隨ひて一分を說くに、義も亦少けず。故に『論』に云はく、「實の如くに滿足して、攝取するが故に」と。意此に在り、之を思うて見つべし。

四に、文を釋する中に、義大に就く七頌半の中、五に分つ。初の一頌半は、總じて地微を顯す。二に二頌有り、別して微相を顯す。三に一頌半有り、例を擧げて微を顯す。四に一頌半有り、寄對して微を彰す。五に一頌有り、喩を引きて微を辨ず。初の中に就きて、諸佛聖主道と言ふは、正しく十地の智を出す。謂はく、道は是れ因の義、此十を修行すれば、能く諸佛聖主の處に到る、故に道と云ふなり。『論』に云はく、「此偈は何の義に依りてか說く、智地に依るが故に」と。解して云はく、論主、何が故に此問答を起すや。此頌の中の所明の義理、深玄微妙なるを以て、是佛果に似たり、恐くは人、謬解して、是佛果にして、十地に關するに非ずと謂はん、故に此問答を起す。猶未だ悟らざることを恐れて、更に重ねて彼前後の經文を引き、地知を證成す、故に上來所說等と云ふ。微妙已下は地智の微妙を顯す。微妙甚難解と言ふは、此中の微妙は是れ總句なり。難解とは難知の故に。別の中の微に六種有り。一には、證時微、經の如く聖主道の故に。二には說時微、經の如く甚だ難解の故に。三には離念微、經の如く、思量の所得に非ざるが故に。此は自體無念にして、是れ意言比觀の所得に、非ざることを顯す。四には依止微、經の如く、唯智行處

【非先有染】以下、論文なり。

【六に功德微云云】先づ經文に合して功德の字を釋し、次に無生滅を以て論釋に合す。

【自下第二…別なし】二に別して微相を顯す。

の故に。此は既に比智の境に、非ざることを顯す。是れ誰か能く知る、證智行の故に。『論』に釋する中に、自證知とは智行の義を釋す、謂はく、內に自ら證するが故に、行と名け、遊ぶが故に行と名くと謂はんとには非ず。依彼生とは、行處の義を釋す。謂はく、此眞如は是れ一切の依處、復是れ此智の依生の處なり。實諦の義を見るが故に、智者と名く、此れ智の義を釋す。謂はく、內に實義を照すが故なり。智の中に、三智を開出す、一に善解法とは、是れ加行勝解の故に。二に善寂滅とは、是れ正體智なり。惑をして永く滅し、寂理を證せしむるが故に、三に世間智隨聞明了知とは、是れ後得智なり。上地の勝進を聞くに隨ひて、明了に錯謬無きが故に。此三智、俱に地を起すに堪ふるを以て、智者と爲ることを得るなり。五に清淨微なり、經の如く、共性は本從り來た寂然の故に。自性離煩惱と言ふは寂滅の義を解するなり。非先有染後時離とは、共非性從本來の義を解す。六に功德微なり。經の如く、無性滅の故に。謂はく、寂用の功、無住の德なり。無滅と言ふは、一往の滅に非ず、利益衆生を捨てざるが爲の故に。無生と言ふは、出世間の故なり。知んぬ、是れ此智は、涅槃世間の中に住せざるが故に。又釋すらく、此六の中に於て、『論』に準ずるに、前の三は是れ、二種の微なり。謂はく、說時と證時となり。非思量等は釋成するなり。後の三は是れ、四種の甚微なり。『經』の中に略して、第一の觀行甚微無きが故に、唯三なるのみ。

自下第二に、別して微相を顯す中に二あり。初の二句は、同相を明し、後の六句は、不

【有人】慧遠をいふ。
【地法を…云云】妨難を通釋す。
【若し…攝す】因果相違問答。
【問ふ…說く】何說十地問答。
【問ふ…有り】三乘無果問答。

同相を明す。此二相の中に、略して三門を作る。一は其文を定め、二は相を辨じ、三は文を釋す。文を定むとは、有人、釋して云はく、此は既に卽ち是れ、性淨方便淨の二種の涅槃なりと。故に死んぬ、前の微と此相とは、總じて果法を明す。地法を說かんと欲するに、何が故に果を明して、以て甚深を辨ずるや。果位顯なるが故に、十地甚深の義を擧げ顯す。因と果と、高下天殊なり、云何が相顯然なる、此れ復人に隨ひて高下ありと雖も、法體は別ならず、其れ猶し虛空の、釋に約して異を分つがごとし。異卽是れ空なり、地法は此に像るなり。今明す、此相は總じて是れ地智なり。『論』に釋して、「智相に二種有り」等と云ふ。智は則ち是れ地智の故に、餘に通じて釋せず。若し是れ地智ならば、則ち是れ因位なり、如何が二涅槃有ることを得るや。釋すらく、此は是れ、地中の所依の果分なり、下の文に云ふが如し。大海に因りて十寶山有るが如く、佛智に因りて十地等有り。一一の山の下に、悉く大海有るが如く、一一の地の內に、悉く佛果有り。若し三乘に約せば、佛果は唯第十地の後に在り。若し圓教に就かば、佛果は通じて、一一の地の中に在り。是故に、一地に一切の地を攝す。問ふ、「若し爾らば、一地を證得し已りて、佛果を得ば、何ぞ十と說くことを須ふるや。』答ふ、『漸機を引くが故に、是故に十地多くは、三乘の差別の位に就きて說く。』問ふ、「若し三乘に就くときは、則ち果法無きや。』答ふ、「三乘の十地は、一乘に就きて說くを以ての故に、斯趣き有り。』

文を釋する中に、同相の內に、從本已來空と言ふは、此は總じて同相を明す。『論』の中

【云何同相云云】論文を引きて、同相を釋す。

【空亂意…有り】偏空の執見のみならず、偏有の執見ありといふ。

【不盡と言ふ云云】論經を以て、寶性論の三種の過に合して之を明す。初は第一、次は第三、後は第二亂意なり。

【彼論】寶性論。

【下は不同相を明す】偈に「諸趣を明

に、先に相を釋し、後に同を釋す。前の中に云何相とは問なり。意の云く、色等の法空は、皆同相と名く。今相と言ふは、是れ何等の相ぞ。答ふ、彼知相故とは、今此に說く所は、是れ地智の相なりと。頌を引く中に、自體空は、是れ智自ら空の故に。餘の色等の諸法の空相に非ず。又此は是れ體相にして、是れ標相に非ず。下に同を釋する中に、云何同相とは、問の意は、既に唯局りて智相に在り、云何が同と名くるや。答の中の、一切諸法如說自體空とは、此眞空、一切の法に通ずるを以ての故に、同と名くるなり。滅除諸苦惱とは、此は別して同相を顯す。苦惱とは、惡取空の故に。惡取空とは空亂意の故に。『寶性論』に依るに、空亂意に三種の過有り。彼論に云はく「是の如きの心を起すに、實に法の斷滅すべき有りて、後時に涅槃を得」と。又復有人は、空を以て有物と爲して、我應に空を得べしといふ。又是の如きの心を生ず、「色等の法を離れて、別に更に空有り、我應に修行して、彼空を得せしむべし」と。解して云はく、今此經の中の本來空とは、此三種の亂意の苦惱を離るるが故に滅除と云ふなり。論經に、有不二不盡と名くることは、言は別なれども意同じ。不盡と言ふは、滅の色を離るるが故に。不二とは、色外を離るるが故に。有とは、空を以て有と爲すことを離るるが故に。此義云何。若し妄謂の空を、有物と爲すときは、則ち眞空をして、此に於て不有ならしめ、若し眞空有なれば、情有は則ち無なるを以て、是故に理有は情有を治するなり。彼論は色等に約して簡び、此論は地智に就きて空を明す。下は不同相を明すが中に、淨相解脫とは、是れ總じて顯示す。謂はく、雜染を對治するが

【遠離して一等といふ下。】論文に、淨相解脫に何處解脫と云何解脫の二に分ちて釋す、

【諸道…名く】論に偈の遠離諸趣を釋して、此顯諸道解脫、遠離煩惱業生故といふを引く。

【一は平等相】偈に等同涅槃相と言ふ。

【二乘の背向…あらず】聲聞等の一向に世間に背き、脫を求むるに等しからずといふ。

【問ふ云云】正しく斷の義を彰し、

故に。別して顯す中に二あり。先に何處解脫とは、所脫の處を問ふ、諸道とは則ち六道なり。惑業生とは、煩惱は是れ道の緣、業は是れ道の因、生は是れ道の果なり。六道は此三を出でざるが故に、遠離を解脫と名く。二に云何解脫とは、解脫の體を問ふ、下の五句は能脫の體を顯す。一は平等相なり、既に遠離諸趣と言ふ、云何が離るるや。謂はく、世間は則ち涅槃に同じと見る。是の如きの遠離は、二乘の背向有るが如くに、非ざるが故に、等同涅槃相と云ふなり。無中亦無後とは、第二に斷惑の相なり、今經に、非初非中後と名く。謂はく、三時に於て、皆斷の義無きを、方に斷と爲すなり。此文を釋するに二門有り。一は相翻門に約し、二は相續門に約す。初の中に、謂はく、無間道の智、正しく惑を斷ずるの時、智先に起りて、惑後に滅すと爲んや、惑先に滅して、智復生ずと爲んや。同時と爲んや。此三時の惑智に、各兩失有り、故に斷を成ぜず。謂はく、智は自ら無流を成ずるの過と、滅すること能はざるの過と有り。煩惱は自ら滅する過と、聖道を障へざるの過と有り。三位の中に於て、之を思うて知んぬべし。燈の闇を破るに、三時には破らざるが如し。此れ亦是の如し。「雜集論」の第四に、云ふが如し、「何に從りてか、斷ずることを得べきや。過去に從はず、已に滅無きが故に。未來に從はず、未生無の故に。現在に從はず、道俱ならざるが故に。諸の煩惱の麤重に從りて、斷ずるを得」と、乃至廣說す。「經」に、「毘婆舍那は煩惱を破ること能はず」と云ふが等は、皆是れ此義の故に、非初非中後と云ふなり。問ふ、「唯識論」の第九の中に、「聖道現前すれば、惑種必ず滅す、秤の兩頭の低

性相決判す、初に唯識と當論の相違の問なり。

【即ち此三云云】是性相無礙の法門にして、情識の測知しがたき處なり。

【前中後取故とは云云】論に不斷の斷を示す文なり。

【二に相續門に約す】惑智相對せず一智に就て自ら三智ありといふ。これ無間道斷中の刹那の三時に約するか。

昂の時等しきが如し」と、若し此說に據らば、則ち是れ同時なり、如何が此中の三時は、俱に非なるや。「答ふ『麤に說けば爾るべし、細に實を覈せば難し。何となれば、若し同時ならば、智、自生するの時、惑、自滅するの時にして、相由らざるが故に、何ぞ對治を成ぜん。東家に男生じ、西家に女死するが如し、亦同時なりと雖も、然も相由ること無し、對治を成ぜず。」問ふ『若し爾らば、云何が斷ずるや。」答ふ『即ち此三時に斷を求むるに得ず、方に斷の義を成ず、此れ即ち不斷の斷なり。前中後取故とは、謂はく、前中後の三時の中に於て、彼非初中後を取れば、三時に異るに非ず、彼非、三を取るなり。色等の處に於て、彼眞空を取れば、色等に異にして、別に斷空を取るに非ざるが如し、此れ亦是の如きの故に斷の義を失はず。二に相續門に約すとは、謂はく、此地智は生滅相續す、前中後の三時、何ぞ定んで能く、煩惱を斷ずるや。唯前は斷ずること能はず、落謝するを以ての故に。唯後は斷ずること能はず、未起を以ての故に。中も亦斷ずること能はず、不住を以ての故に。是故に三時に皆斷の義無し。若し爾らば、云何が斷ずるや。「論」に云はく、「燈と炎との如し、唯初中後に非ずして、前中後に取るが故に」と。此れ則ち唯初唯中等は可ならず、前中後相續して取らば、斷の義有るべし。」問ふ「既に三時は、單に取らば各斷を成ぜずんば、縱ひ此れ和合すとも、豈斷を成ぜんや。」答ふ『有人解して云はく、三時を別に取れば、各斷を成ぜず、三時相續するを假に說きて斷と爲す、故に前中後取と云ふ。此れ麤に說かば爾るべし、細に覈すれば然らず。別して三時に就きて、各斷を成ぜざる

【一沙油…如し】十二門論十二丁表沙油の喩。

【轉依】菩提涅槃の二果。煩惱障を斷じて涅槃を轉得し、所知障を斷じて菩提を轉得するをいふ。

を以て、此三時を總じて、豈斷を成ぜんや。一沙油無ければ、多沙も亦無きが如し。今釋すらく、此に前中後取と言ふは、是れ濫を簡ぶの言なり。何となれば、人此智は、前中後の位に、各斷ずること能はずと謂ふ、則ち無取の智の、惡取空に處するに同じと謂ふなり。故に簡びて云はく、此は初の上に於て、非初を取り、中の上に非中を取る、後も亦爾なり。無智に同じからざるが故に、惡取空に非ざるが故に、非初非中、後前中後取故と云ふ。『問ふ「餘處の『論』に說かく、道の初起を取るに、則ち能く惑を滅すと。何が故に此中に、乃し非初と云ふや。』答ふ、『『毘曇』に依るに、「一念燒くこと有らば、始終方に盡く、結を治するも同じく然り」と。『成實』に依らば、「一念燒かざれども、相續して方に盡く、結を治するも亦爾なり」と。若し大乘の初教によらば、初念も亦斷じ、中後も亦然なり。若し終教に依らば、緣起の性の如し、三時俱に斷ずること能はず。卽ち不作に由りて、緣起方に成ず、故に斷無きにあらず。非言辭所說と言ふは、第三に觀行の相なり。謂はく、此無分別の觀智は、世間の言說の及ぶ所に、同じきに非ざるが故に。又小乘の、聲に從ひて悟を得るに、同じからざるが故に。出過於三世と言ふは、第四轉依の相なり。謂はく、此微智、眞如常住の法身に依止す、是れ究竟の轉依を以ての故に。能依所依俱に、悉く常なるが故に、三世遷動の相を出づるなり。問ふ『所依は本有なり、是れ常なることを得べし。能依は修智なり、豈生滅無からんや。』答ふ『初教は相に隨ひて修智生滅す。終教已去は智、境の如くなるが故に。始覺本覺に同ずるが故に。亦無常に非ず。『論』に云はく、

【依止…法】論に「常意識智は、無常因緣法に依止す」といふ文なり。

【諸佛所…說かず】三に例を擧げて、徵を顯す。

「無常なること意識の如くには非ず」とは、未轉依の時の、妄念の意識は、是れ無常なるを簡ぶ、即ち知んぬ、轉依已去の眞智は、是れ常なり、此は能緣を簡ぶなり。依止無常因緣法とは、未轉依の時の、所緣の境を簡ぶ。修多羅中決定說とは、經を引きて、境智の俱に常なることを證成す、處處の大乘經の中に、皆佛果常住と說くが如し。又、此經の十藏品の中の、信藏の內の、佛智の無生滅等を信ずるが如し、具には後に說くが如し、其相如虛空と言ふは、第五に解脫相なり。謂はく、二乘の智の如き、惑障を離ると雖も、猶法執有るが故に、其解脫は猶障礙有り、此は則ち爾らず。二障及び習、一切皆盡くるが故に、如虛空無障礙と云ふなり。又、此は自體淸淨にして、虛空の如く無染なるを明す。又『論』の中に、重ねて此五種を結する中の、後の三は、何が故に重言すとならば、後の三種は皆、妄に對して眞を顯すを、以ての故に、何是眞實等と云ふ。問ふ、「此五句を詳にするに、初の句は世間即涅槃を了し、離にして離無きを明す。二は三時、斷惑無きの義を明す、斷に即して不斷にして、乃至其相空の如し。此等の義に準ずれば、上の同相と何の別ぞや。」答ふ、「實を擧ぐれば別無し、但自體の處に約すれば、同相と名け、智の證入の處に約すれば、不同相と名く。若し彼同相に同じからずんば、此不同相を成ずることを得ず。」是故に、義を以て說くに二有り、法體は別無し。

諸佛所行處と言ふ下の一頌半は、第三に例を擧げて、徵を顯すことを明す。中に於て初の三句は、前の深妙を牒し、下の三句は、地徵を顯す。前の中に初の二句は、佛の所證

【檀等の諸度】波羅蜜行の初を擧げて、他を等取す。
【諸佛…故に】四に寄對して微を顯す。
【彼二】思慧と報生識智。

の二種の涅槃を擧ぐ。中に於て、寂とは是れ同相涅槃にして、自性常に寂なるを以ての故に。滅とは是れ不同相涅槃にして、智、滅を緣ずるを以ての故に。淸淨とは、此二種の自性無染、及び對治離染を顯すが故に。深とは、此二種の甚深微妙を顯すが故に。此二は唯是れ、諸佛所證の故に、佛所行の處と名く。言說所難及とは、正しく此二の深妙にして言を超ゆるを顯す。下の三句は地法を類顯す。彼玄妙に同じきが故に、地行亦如是と言ふ。地と言ふは境界、觀とは謂はく、境を照すの智なり。是れ地の正體なるが故に。行者智眷屬とは、檀等の諸度、智と同行するが故に。亦如是とは、二涅槃の深妙に同じきが故に。說之猶尙難とは、敎ふること尙難きことを顯す、何況示人と言ふは、義の深玄を況す、何の容か示すべき。『論』に云はく「何が故に但無言等と說かず」とは、文を徵して意を顯す。謂はく、何ぞ一向に無言、乃至言說の及び難き所と說かざる。言に依りて以て解を求むることを顯示するが故に無言と說かず。諸佛之智慧の下の一頌半は、第四に寄對して微を彰す。此地智は是れ、諸佛の境なるを以ての故に、佛の智と名く。離諸心數とは、此智、思慧の境に同じからざるが故に。心道を離るとは、報生識智に同じからず。彼二は說くべし、此智は彼境に非ざるが故に、不可說と云ふなり。不可得思議と言ふは、耳識の所知、意識の思量に非ざるを以ての故に。此は不可聞を顯す。非有陰界入と言ふは、陰界入の、色心根境識等の差別有るが如きは、是れ則ち可說なり。證智は爾らず、能所無く平等にして、分別無きが故に、文字を離れて不可說なり。是故に但證智のみ內に契ふべし、分別すべか

【如空迹…知んぬべし】五に喩を擧げて、徴を顯す。

らず、染識の能く了知する所に、非ざるが故に。「兩倶」に云はく、「相を取るを識と名け、相を取らざるを、智と名く」とは、此れ之れ謂なり。「論」に云はく、「智とは是れ地智」とは卽ち根本智なり。「起とは何を以て觀ず」とは加行の觀智を以て、本智を起すが故に。「何を以て同行す」とは、檀等の餘行、亦資けて起すが故に。如空迹と言ふ下の、第五の一頌は、喩を擧げて徴を顯す。上半は喩を擧げ、下半は法を顯す。此中の喩の義に、略して三門を作る。一は前に對して異を辨ず。謂はく、前と別なることとは、太空は果海に喩へ、跡處は地體に喩へ、跡相は地相に喩へ、鳥是は言教に喩ふ。意の同じからざることとは、前は地法の離言離聞に喩へて、默して說かざるを成ず。離聞は衆を誡めて著を捨て、爲に宣說することを許す。二に義意を顯さば、鳥の空を行くに、身過ぎて後の跡處は、說くべからず、相狀も亦見るべからず。然れども鳥の行くこと有れば、無と言ふべからず。鳥の行くこと有るを以ての故に、跡相の取るべきこと有らしむるに非ず、跡相無きを以ての故に、總じて鳥行無きに非ず。鳥行は言教に喩へ、跡相は地法に喩ふ。鳥を尋ねて跡を求むるに、跡は得べからず。言を尋ねて地を求むるに、地は得べからず。但鳥行の十歩に約して、十跡有りと說くは、實は十跡の異無し。言に約して十地を分つは、實には地の異相無し。是故に十地は、空中の十跡の如し、豈諸別有らんや。問ふ、「空中の鳥の、已に行くと未だ行かざると、及び正行の處と、俱に跡有ること無きが如き、豈十地の言下に、所詮の義無かるべけんや。」答ふ、「所行の空處有るが故に、所詮の義有り。」問ふ、「鳥是、空中

【下は釋成す】論の「何を以ての故に」の下。
【空に…卽し】一本に「空に卽する跡は」に作る。
【非無行跡】論文には「非無虛空行跡」に作る。
【下の合の中】論に「是の如く鳥跡の住處名句字身の住處は菩薩地證智の所攝」といふ。

に跡を現ずること能はず、言下に既に理を顯すこと能はず、何ぞ斯言を用ふるや。」答ふ、「鳥、沙土に行けば、足跡を現ずるが如く、鳥、空中に行けば、足現に跡無し。小乘の言教は、言の如く義を顯し、大乘の言教は離言の義を顯す。若し鳥、行無くんば、何を以てか、虛空、跡無しと知るを得ん。故に知んぬ、鳥行は能く無跡を顯す。所詮無きに非ず、所況は知んぬべし。」

三に文を釋せば、『論』の中に二有り。初の三句は喩を解し、後の三句は法に合す。喩の中の鳥行跡處は、是れ第一の句なり、直に喩體を擧ぐ。二に不可說の相も、亦見るべからず、是れ第二の句なり。跡の相を離れて說き難く、見ること難きを顯す。謂はく、其跡數の多少を說くべからず、其跡相の差別を見るべからず。下は釋成す。何故は問ふなり。釋すらく、空無相なるを以ての故に、空に卽し跡に卽し、亦分別すべからず。三に非無行跡とは、是れ第三の句、鳥行有るを以ての故に、跡無きに非ずと。又此三の中に、初は總じて擧ぐ、二は有を離れ、三は無を離る。下の合の中の三句は、次第に合す。如是鳥跡處とは、前の初の句を牒す。名等住處證智攝とは、之に合するに法を以てす。法に準じて喩を驗するに、應に是の如きの鳥行の跡處は、虛空の所攝と言ふべし、文の中は略を存す。名句字身を鳥行に合し、住處證攝を、跡處虛空の所攝に合す。不可說聞は第二の句に合し、離有を明す、說聞し難きなり。下の二は釋成す。非如聲性とは、此地法は、言を出づることを明す。音聲の生は、是れ可聞の法なるが如きには非ず。又釋すらく、地の、言を

【五過】論に云はく、一、不正信。二、退勇猛。三、誑他。四、謗佛。五、輕法と。

【自下第二云云】以下、偈頌の後分說大を明す下、「是事難し」と「一等の文を釋す。

出づること、音聲の性の如く、執取すべきに非ざることを明す。非無地智名句字身とは、第三の句に合して、不無の義を顯す。「地智無きに非ず」とは、所詮離相の法有り「名句字無きに非ず」とは、能詮の教有り。何が故に教有りと言ふや。擬して宣說せんと欲するが故に。何が故に地離相と云ふや。言の如くにして取らしめざるが故に。何が故に我復說此汝等不應隨聲取義と云ふは、此は是れ論主の義をもて、金剛藏の語を作りて、衆を誡め著を離れしむ。五過の中に、前の二は、行に違するの過、次の二は、人に違するの過、後の一は、法に違するの過なり。謂はく、言の如きの義は、都て所有無し、而も實有と謂ふが故に、正信ならず。二は、心を隔し相を捨てて、實を求むること能はざるを、勇猛を退すと名く。三は、法實に然らざるを、他の爲に宣說して、法正に爾りと云ふ。故に誑他と云ふ。四は是れ佛說と言ふが故に、謗佛と云ふ。又佛の意、正しく離言の義に在るを、而も佛有所說の相を緣ずと謂ふが故に、亦謗るなり。五は、法は淺薄にして、世の言に稱するの事に同じと謂ふ、故に輕法と云ふ。又、佛の教旨は、離言の義を示し、諸の衆生をして、凡を超え聖を成ぜしむ。今言の如く取るは、只是れ世諦にして、人をして凡を超え聖を得せしむること能はず、故に輕法の過實に重しと爲すなり。義大を釋し竟んぬ。

自下二に其說大を明す。中に於て、六頌を五に分つ。初の一頌と三句は、所說の分齊を明す。二に三句有り、已が無過を彰し、衆を誡めて失を除く。三に一頌半有り、其所說を顯す、略にして廣に非ず。四に一頌有り、衆の敬聽を勸め、已が善說を彰す。五に一

【此二分の義…正當に非ず】廣く二分を述するに、初に舊說を叙ぶ。

頌有り、己が得力を顯して、物の信を生ぜんとす。前の中に、初の一句は是れ總なり。是事雖爲難と言ふは、是事は謂はく、前の義大の事を牒す。雖とは是れ不定の辭なり。謂はく、此地法に、其二分有り。果分は不可說なりと雖も、然れども因分は可說なり、故に論經に、我但說一分と云ふ。謂はく、因分は果に於て一分と爲すが故に。此二分の義、諸說同じからず。有が說かく、能詮の教を因分と爲し、所詮の義を果分と爲すと。此說は甚だ疎なり。有が說かく、地前の因行を因分と爲し、地上の證智を果分と爲すと。此品豈、地前の法を說かんや。故に知んぬ、然らず。若し諸地の、加行等に約するを因と爲し、正證を果と爲すは、亦少分得たり。有が說かく、十地に二種の門有り。一は、若し漸增の門に約して、因分の十地と名く、是れ則ち可說なり、分齊有るが故に。月の漸く增すが如し、可說の差別なり。二は、若し圓滿時の門に就きて、果分の十地と名く。是れ不可說なり、分齊無きが故に。月の滿つる時、差別無きが如きが故に。此二の十地は、其體別無し。但分と滿とに隨ひて、二分を假立すと。此れ亦未だ然らず、豈未だ法雲に至らざるとき、則ち歡喜は可說にして、十圓滿を待ちて、方に不可說なるべけんや。若し前能く後を起すを因と爲し、後前に依りて起るを果と爲さば、亦少分然るべし、猶文の意に非ず。有が說かく、十地に二種の義有り。一には、教に安立する所の十地の法門、聞者の識上に在りて、義に似て顯現するを、名けて因分と爲す。此は彼離言の義を表すが故に。二には、詮を亡じて十地の正行に證入し、諸の言教を安立する所の相を離るるを、說きて果分と名く。

【今釋すらく云云】後に今家の意を述す。

【道用】用貌相狀に隨順するをいふ。

【問ふ…是なり】因分可說を、究竟果海に對して問ふ。

【二に云はく云云】第二重なり。唯十地に約する文。

竝因分の表す所に由るが故に、是故に因分は可說、果分は不可說なりと。少しく文の意に順ずれども、猶正當には非ず。今釋すらく、兩重有り。一は、此十地に二分有り。一は實の十地とは、唯佛の所知なり。佛智の所行を名けて、果分と爲す。上の偈に云はく、「此智は是れ誰か辨ずる、」偈に云はく、「佛智の所行の故に」と。又上の文に云はく、「智は佛の境界より起るが故に」と。又上の加分の中に、不思議の佛法と云ふ。又、自體所依の大空の如きを、果海と爲す等と。二は隨相の十地は、菩薩の所知なり。菩薩の所行を名けて、因分と爲す。是れ則ち果分は、玄に絕し、不可說に當り、因分は機に約す、是れ則ち可說なり。此義は一部の經の中の、大意に通ず。問ふ、「若し爾らば、菩薩の證智、豈說くべけんや。答ふ、一は證道修の中の、證見修道なり。二には或いは、此地に二分有り。一は、妙智に約す。正智、如の境を證するが故に、證現漸行の故に、果分と名く。則ち不可說なり。後得智の、虛空に同じきが如く、不可說なり。二には、方便行法に約す。地の差別を顯すこと、下の文の如し。初地二三地は、世間に寄同し、四五六地は三乘に同ずる等なり。又、禪支道品の諸諦緣生に寄せて、以て地別を顯し、衆をして此法に因りて、地の義を修せしむるが故に、因分と名く。空中の跡の、鳥に約して、異と說くが如きを、名けて因分と爲し、空に別無きに同じて、名けて果分と爲す。一の跡、二に通ずるが故に、二分と爲す。問ふ、「鳥に約し空に約す、跡は相を離る、云何が可說有りや、不可說有りや」。答ふ、「跡は相を離ると雖も、鳥に就きて、說くことを得。鳥に就きて、說くことを得れども、

【此を總句云云】後に、後の六句を釋す。

【此三大を…名く】初に三大の名を釋す。

【二に處…名く】二に處に就きて以て定む。

【三は文…如し】三に文に就て辨定す。

所說は常に離る。跡の虛空に同じきは、理の不可說なり。所況の地智は、此に準じて知んぬべし。此釋は斯地品に局る、故に踰爲難と云ふ、即ち是れ一分なり。』

此を總句と爲す。下に六句有り、別して三大を顯す。初の一句は因成就大を明す。次に一句有り、因漸成就大を明す。餘に四句有り、教說修成就大を明す。此三大を釋するに、略して四門を作る。一に釋名とは、非願、心に熏ずるを、起行の本と爲し、因成就と名く。說大の中より、之を開出するが故に、之を名けて大と爲す。二に、聞思修等の次第、能く出世の證智を生ずるが故に、因漸成就と名く。三に、實智は眞を證するも、指陳到らず、言を假りて寄顯するが故に、教說修と名く。問ふ、『此三は俱に是れ說大の中より出づ、何が故に前の二を教說と名けざる、又俱に是れ因分の中より出づ。何が故に後の一を因と名けざるや。』答ふ、『前の二は後を生ずる功能、顯なるが故に同じく因と名くることを得、證は玄妙に非ざるが故に、言を待ちて簡ばず、教說と稱せず。後の一は、證智玄妙にして、果分に濫同するが故に、言を以て簡びて、教說修と名く。二に處に就きて、以て定むるに、二有り。先は假處に約す。因成は地前種姓の位に、在ることを寄顯す。彼種子の因、成就するを以ての故に。因漸は、解行位に在る智に寄す。聞思等の行を起して、眞證に趣くが故に。說修は、初地已上に在る智に寄す、實を證するが故に。二は實位に約す。此三は俱に地上に在り、但初地の、前加行修の中の慈悲願等を、名けて因成と爲し、聞思修等を名けて、因漸と爲し、正證後得を教說修と名く。三は文に就きて辨定せば、下の說分の中

【前の二】因及び因滿をいふ。
【別法の相】滿足と教說修とをいふ。
【彼を滿ず】彼地智を滿ずる意。
【知るべし】大正藏經には「見るべし」に作る。

の諸地の內に、皆此三有り。何となれば、曰く菩薩は、何に因りてか此智を求むる。二の所因有り、一は衆生を救はんが爲に、二は菩提を求めんが爲なり。上求菩提下救薩埵に由りて、名けて菩薩と爲す。故に慈悲願と云ふなり。既に二の內に此因有りて、諸地を趣求せんと欲す。何の漸次か有る。謂はく、三慧を修學して漸く初地に入るに、此二は同じく加行智の中に在り。三には、加行既に終りて、必ず眞理に契ふに、前の二の相顯にして、直に陳ることを得べし、故に別に寄せず。證智は地の體なり、直に示すべからず、故に別法の相に寄せて、以て表示を顯す。二地の正地の中に、十善等を說き、三地の正地の中に、四禪等と說き、四地の正地の中に、道品等を說くが如きは、並に是れ此教說修に攝するが如し。

四は文を釋する中に、初の句に慈悲とは、是れ利他の行、願とは是れ自利の行なり。此二文を釋すること、『論』の如く、應に知るべし。因滿成就とは、佛の如く、漸次に諸地を具するが故に。謂はく、三慧の次第して、能く出世の智を生ず、是れ彼因なるを以ての故に、具諸地と名く。教說修とは二有り。滿足修とは、聞思慧等は、但能く彼出世の智の因と爲りて、彼智地を滿ずること能はず、要す出世の淨心、方に能く彼を滿ずるが故に、智者所能及と云ふなり。下には觀修を明す。中に於て、如是諸地行とは、地行を標し擧ぐるなり。微細甚深見とは、觀境は餘の心の、能く見る所に非ざることを明す。不可以心知とは、染心を以て、能く知るべからず。『論』に云はく、「自心清淨にして知るべし」

【一は佛云云】說者の二過。卽ち佛を隨喜せず、不平等の說。

【二は衆を云云】聽者の過、恭敬を生ぜず、法に於て論諍す。

【於…盡】本頌の文なり。

【如威…法】論文なり。此下、論文を引きて釋す。

と。此中の滿足修は、根本智に據り、觀修は後得智に約す。反りて觀內を緣ずるに、倶に不可說の故に、教說修と名く。自下の三句は是れ、第二に已が善說を顯して、衆を誡めて失を除かしむ。先に已が二過を離るることを顯す。一は、佛を隨喜せざるを離るるが故に、當承佛力說と云ふ。二は、不平等の說を離るるが故に、咸聽と云ふ。二は、衆を誡めて二失を離れしむ。一は說者に於て敬はず、是過を離るるが故に、汝等當恭敬と云ふ。二は法に於て見諍す。是過を離るるが故に、共一心聽と云ふなり。自下の一頌半は、第三に、所說の略にして、廣に非ることを明す。初二句は地法を牒擧す、是れ智の通達する所なるが故に、隨順と云ふなり。此智を以て、彼諸地相の中に入るが故に、諸地相入行と云ふ。故に「論」に云はく、「行の如く修するが故に」とは、加行修の如く入ることを得るなり。「行の如く修して滿足す」とは、加行入證して理に契ひ圓滿するが故に、實の如く滿足攝取して、此智に入ると云ふ。之に入るの行は、無量無邊の故に、於無量億劫說之不可盡と云ふ。今但略說とは、要略の故に。如實と云ふは、是れ略說すと雖も、具に實義を攝するが故に、其義無有餘と云ふ。自下の一頌は、第四に、衆の敬ひて聽くことを勸め、已が善說を彰す。一心恭敬待とは二有り。一は身恭敬、如威儀住とは敬を釋するなり。堪受說法とは待を釋す。二は心恭敬、請あるに決意して求法するが故に如心決定と云ふ、此は心敬を釋す。堪能憶持とは待を釋するなり。前は則ち身恭能く受く、此は則ち心敬能く持す。今承佛力說とは、已が力に非ざることを顯す。增上慢を離るるが故に。下半は所說を顯す。謂

【謂はく以何云云】論文に「何事を示現し、何事を以て云何なる事、何事に依止する」といふ釋あり、今これを引く。

【自下の一頌】經の「佛の神力は」等の一頌。

【六】以下第七に說分の文を釋す。經の「金剛藏菩薩此偈を說き」等の下。

【十地即ち十地】十地即ち十段の誤か。

【七】別して初地を釋するに、七門を以てす。

はく、以何事とは、大音を以て唱ふるが故に。云何事とは、因を出して喩を引くが故に。依止何事とは、名字に依止して、義に違はざるが故に。示現何事とは、地の義を示現するが故に。又釋すらく、大音唱因喩は、證成の道理に依りて說き、義名不相違は、法爾の道理に依りて、說くことと知んぬべし。『論』の中の善字とは、是れ善巧の字の故に。二義有り。一は巧に他音に同ず。二は義を益することと周備す。『論』の如く應に知るべし。自下の一頌は、第五に、己が得力を顯して、物をして信を生ぜしむ。初の二句は、廣多の諸佛神力を得と雖も、聚めて我身に在ることを明す。後の二句は、然も己が所說は、海の一滴の如く、說かざる所は猶し大海の如きことを顯し、佛力無くんば、縱ひ此の一滴も、亦能く說かざることを況す。上來、此に至りて請分し竟んぬ。

(六)自下第七に說分を明すに、四門を作る。初に名を釋すとは、十地の差別を演暢し宣陳するが故に、說分と名く。二に來意とは、前に旣に請滿ち、剛藏、衆に告げて、一分を說くことを許すが故に。次に正しく說きて、以て地法を顯す。三に說意とは、前の不請分の中に、已に地體を說き、彼の上機をして、玄旨を悟解せしむ。今は地相を辯じて、中下の流をして、相に隨ひて、開解せしむるが故に、說分を明すなり。又前に已に略して示し、正解を生ぜしむ。今は更に廣く陳べて、行修を起さしむるが故に。說を明すなり。四に文を釋する中に、十地即ち十地と爲すことを說く。

(七)初地の中に就きて、略して七門を作る。一は名を釋し、二は來意、三は斷障、四は證理、

五は成行、六は得果、七は文を釋す。初に釋名とは『唯識論』の第九に云はく、「一は極喜地なり、初に聖性を獲、具に二空を證し、能く自他を益し、大喜を生ずるが故に」と。解して云はく、此に三義有り。一は位を得、二は理を證し、三は行を成ず。昔初めて證得するが故に、歡喜を生ずるなり。『攝論』の中に、唯第三の成行の義に依りて、釋するが故に。無性及び世親の各が、第七卷に云はく、「此れ最初に能く、自他の義利を成辨する勝功能を、得るに由るが故に」と。謂はく、菩薩、現觀に入る時の如し、自他の義利を成辨する、最勝功能を得て、極歡喜を生ず。聲聞等の現觀に入るの時、唯自利を成辨する功能を得て、是の如きの喜を生ずるに非ざるが故に彼を説きて極喜地と名くとせず」『十住毘婆沙論』に依るに、唯證理に約して釋す。彼論に云はく、「始めて法味を得て大歡喜を生ず」と。『瑜伽』の七十八、及び『解深密經』の第四に依るに、同じく二義に約して釋す。彼云はく、「大義を成就し、未曾得の出世間の心を得、大歡喜を生ずるが故に」と。解して云はく、大義は即ち是れ二利の行を成ず、出世間の心は是れ聖位を得るなり。『十地論』に、「二行を成就し、及び聖位を得」といふに同じ。本分の中に釋するが如し。餘義は下の釋の名分に、釋するが如し。二に次第とは、何が故に最初に此地を明すとは、謂はく、先の地前の加行の功力、無間に本性無漏の功能を發起して、現行を生せしめ、初無漏の智は眞理を證見し、惑を滅し、行を成ずるが故に、先に此を明す。三に所斷とは、『唯識論』の第九に云はく、「一は異生性障なり。謂はく、二障の中の分別起とは、彼種に依りて、異生性

【分別の二障】煩惱所知の二障。

【問ふ云云】四番あり。一、二愚唯現非種問答。二、初地聖性非現問答。三、地前聖性不立問答。四、聖性不相應行問答。

【本隨】本惑と隨惑のこと。即ち一は迷の果を感得する根本煩惱、貪嗔癡慢疑惡見の六。一は心に隨逐して惱亂せしむる惑にして、前者を除ける他の一切煩惱をいふ。

を立つるが故に。二乘の見道、現在前の時は、唯一の種を斷ずるを、聖性を得と名く。菩薩の見道現在前の時は、具に二種を斷ずるを、聖性を得と名く」と。解して云はく、異生とは、異見を執して生ずるが故に、異生と曰ふ、即ち舊には凡夫と名く。性とは即ち是れ、分別の二障の種の上に、不相應法を假立す。彼種の上に依りて、此性を立つるが故に、即ち彼種を說きて、異生性障と名く。此は即ち異生の障、依主釋なり。梁の『論』には、凡夫性の無明と名け、『十地論』には、凡夫我相障と名く。解して云はく、此は二執に約して、通じて我相と名く、故に相違せず。又此異生性とは、種に依りて立つと雖も、然も見道の前は、現行の分別も亦、此障に攝するが故に。『唯識』に執著我法愚と云ふ。即ち是れ此障なり、故に知んぬ現に通ずることを。問ふ『若し分別の二障、現種を體と爲せば、如何が二愚は、唯現にして種に非ざるや。』答ふ『障は寛く、愚は狹きが故に、相違せず、又此異生性は、本隨の分別の現種に通ずと雖も、然も執著の所引發に由るが故に、貪嗔等を二執に攝屬す。』問ふ『聖位は凡に翻ず、何が故に初地の聖性は、唯種に依りて立つるや。』答ふ『現行は間斷するを以ての故に、聖性に非ず。』問ふ『若し爾らば、地前に已に、無漏法爾の智種有り、何ぞ彼に於て、立てて聖性と爲さざるや。』答ふ『凡聖の二性、同時相違の過失を以ての故に、種有りと雖も聖性に非ず、滅心定の、種に依りて微微心を假立する時、彼種有りと雖も、滅定に非ざるが如し。有心無心の義、相違するを以ての故に。此は亦彼に同じ。又釋すらく、地前には、未だ彼無漏の種有らざる故に、聖性

【又釋す…故に】難陀等の師によりて、法爾の執情を蕩化す。

【二十四…是なり】二十四不相應行法の中の非得をいふ

【上來は且く…說く】此下、意を取りて二愚の文を引く。

【解して…爲す】別して二愚を示す文意を述す。

【麤重云云】以下前の文を述す。

に非ず。法爾の種子は、許す所に非ざるが故に。問ふ、「既に異生性は、是れ不相應行の攝なり。聖は凡に翻ず、何ぞ不相應を立てざるや。」答ふ「大乘宗に依るに、聖性は亦是れ、不相應の攝なり、卽ち二十四の中の、非得是なり。宗は此れ無漏に通ずと、許すを以ての故に、小乘の、無漏に通ぜざるに、同じからず。又釋すらく、異生は劣の故に、別に不相應を立つ、聖法は力勝るが故に、別に立てず、亦相違せず。又「唯識」に云はく「初地の所斷は、實に二障に通ずと雖も、而も異生性障といふ意は、所知を取る。十無明は、染汚に非ずと說くが故に」と。無明といふは、卽ち是れ十障品の愚なり。上來は且く、煩惱を斷ずるに約して說く、理實には初地も亦、惡趣の諸の業果等を除く。是故に、要ず具に二愚、及び彼麤重を斷ずと說く。一は執著我法愚、卽ち是れ異生性障なり。二は惡趣雜染愚、卽ち是れ惡趣の諸の業果等なり。應に知るべし、愚品を總じて說きて、愚と爲す。解して云はく、上の二愚は、唯無明のみに非ざることを顯す。我法と執する時の、所有る愚及び俱起の法を說きて、初の愚と爲す。愚の品類の惡趣の業果は、體、愚に非ずと雖も、愚の所發の業、及び所感の果を、總じて說きて愚と爲す。彼「論」に又說かく、「利鈍の障品と俱起するを以て、二愚と爲す」と。卽ち五見の利品と、俱起する同時の無明を、名けて初の愚と爲し。貪等の鈍品と俱起するを、名けて後の愚と爲す。麤重と言ふは、彼「論」に二釋あり。「論」に云はく「彼麤重の言は、彼二が種、或は二が起さる無堪任の性を顯す」と。解して云はく、此初の釋は、麤重は卽ち是れ二愚の種子、惡の故に

【汎く斷云云】下は斷に約して、敎位を辨定す。

【彼を緣ずる…爲す】唯識述記に「能く雜彼の煩惱を緣ずる、善無記法を斷ずる、修道所斷なり」といふによる。

【三に不生斷】唯識述記に、因亡果滅、果盡因斷の二義あり、今初は果盡に約し、次には因亡に約す。

【非擇滅】有爲法生緣を缺くによりて生ぜざるをいふ。

麤と名け、沈沒を重と稱す、故に知んぬ、二愚は唯し現行に約す。後の釋は、是れ二愚に引かれて、身心の中の無堪任の性をして、麤にして更に沈重ならしむ、故に麤重と名く、現に非ず、種に非ず。此に準ずるに、二愚は亦種子に通ず、又案ずるに、此二愚は或は分ちて三と爲す。謂はく、惑業報なり。或は分ちて四と爲す。彼麤重を加ふ。或は分ちて五と爲す。謂はく、惑の中に、二障を分つが故に、此等は並に是れ、此中の除く所なり。汎く斷の義を論ずるに、其三種有り、一は自性斷なり。謂はく、諸の煩惱、及び相應の心心所、不善の有覆無記、諸の染汚の法、見修道生の惑種永く斷ず。此中の心王と遍行と別境は、性は染汚に非ず、可斷の法に非ず。煩惱と俱なるを、相應縛と名く。煩惱を斷ずるが故に、說きて名けて斷と爲す。二は離縛斷なり。謂はく、有漏の善、無覆無記なり、色心等に通ず、正しく道に違するに非ず、性は可斷に非ず、六識の、彼を緣ずる煩惱を、斷ずるに由るが故に、說きて斷と爲す、三は不生斷なり。謂はく、此見道に見惑を斷じ已りて、外道の身を捨つ、所依の身無ければ、卽ち無想定及び無想の報、並に永く生ぜず。又三惡道の總報を招くの惡業、皆非擇滅にして、亦不生と名く。三惡道の報たる、無俱、二俱、鬱單越等も、亦皆不生なり。畜生餓鬼の別報、善惡所依の果も無ければ、亦不生なり。此上は且く、初敎に約して之を說く。若し終敎に約せば、初地に亦、三界の分段及び惑業苦を捨て、地上は唯彼所知障と、及び變易の報を斷ず。其煩惱障は、地前に漸く伏し、初地に斷盡す。所知障は地前にも亦伏を學す。初地に一分を斷じ、餘は諸地に在りて各一

【鬱單越】 鬱多羅究留（Uttarakuru）ともいふ、四大洲の一北方に位す、定壽千歲にして、衣食自然に得といふ。

【一法として…故に】眞如は諸法の所依性と見るなり

【解して云はく…故に】初に正しく遍行の義を解し、暗に眞如隨緣の法門に合す。

【檀行】 六度の一布施の行をいふ。

【三性三無性】 遍行所執、依他起、圓成實の三性に對して、相、生、勝義の三無性を立つ

分を斷じ、佛地に方に盡す。此は、梁の『論』及び『寶性論』等の說の如し。四に所詮とは、謂はく、法界眞如遍行の義なり、『唯識論』に云はく、「一は遍行眞如、謂はく、此眞如は二空の所顯にして、一法として在らざること有ること無きが故に」と。解して云はく、遍行は謂はく、有爲の諸行なり。我法二空所顯の眞如、一切有爲の諸行に遍するが故に、遍行と名く。梁の『攝論』の中に、名けて遍滿と爲す、一切の有爲の行に遍滿するが故に。世親の『攝論』の第七に云はく、「少法として、無我に非ざること有ること無きが故に、遍行と名く」と。無性の『攝論』の、第七に亦云はく、「少法として、是れ空に非ざること有ること無きが故に、名けて遍行と爲す」と。理實には、二空は餘の九地に通ず、初位に創めて、證するを以ての故に、以て名と爲す。五に所成の行とは、略して四種有り。一は增勝に約せば、施行を修成す。二は所成に約せば、十大願を起す。三は修成に約す。謂はく、信等の十行なり、四は實行に約す。謂はく、十度等の行、皆修せざること無し。餘の所修の行は、釋文に自ら顯る。六に所得の果とは、略して四種有り。一は、當地の滿ずる時の、調柔等の四果を得。下の如く應に知るべし。二は、檀行所成の大財等の果を得。三は、『攝論』に依るに、障空の義に通達し、一切障滅の果を得、四は、通じて論ぜば、唯識の三性三無性の理智、及び奢摩他毘鉢舍那等の果を得。餘は文に說くが如し。

七に、文を釋すとは、此地の中に就きて、文を別つに二有り。初は長行、後は偈頌なり。前の中に四有り。一は始住地分、二は地の釋名分、三は安住地分、四は校量勝分

【奢摩他】(Śamatha)禪定七名の一。心を一境に止めて散亂せざるをいふ。
【毘鉢舍那】(Vipaśyanā)事理を觀見するをいふ。
【依我身云云】論文を引きて釋す。

【八】別釋するに、初に何身に依る中、初に「一諸の佛子、若し衆生…發さん」といへるを釋する文に依る。

【別して顯す云云】別して九句を釋す。初に論意に依て經文を釋す。

なり。初分の中に就きて、論主分ちて四と爲す。一は依何身とは、謂はく、厚く善根を集むるを、所依の身と爲す。二は爲何義とは、佛果を求めん爲に。三は以何因とは、大悲を以て因と爲す。四は有何相とは、凡を過ぎ聖を得るを、相と爲す。此四に各十門有り、別に名を釋して、創めて菩薩の初地に住すと爲す。又此四義と、「華嚴」の四十八住品の中の、極喜住の内の菩薩の發心に、其四相有ると、文同くして詳少く異なり。意を會して知んぬべし。彼に云はく「一は何の因ぞ、菩薩の發心なり。二は發心何の所緣ぞ。三は發心何の狀、何の相ぞ。四は發心は何の勝利か有る」と。彼論は此經文に依らば、彼は略釋を作りて具ならず。

(一)初に何身に依るが中に、三有り。初は前を結して總じて舉げ、二は正しく行相を顯し、三は如是衆生の下は、行を結して位に入る。正しく行を顯すが中に、初の句に是れ總なり。謂はく、一大僧祇に、善根を積集するが故に。厚集と名く。諸行衆生とは、是れ此初入地の衆生にして、是れ地前に非ず。有人、此十句を地前の發心に屬して、方に初地に入ると判するは、此れ文に順ぜず、設ひ地前を初地の攝に屬すべけんや。此文に初地を言ふを以て、地前を說かざるが故に。應に知るべし此は是れ、初住地の時に、此所依の善根の行相を說く。別して顯すが中に、此集に九種有り。一は行集、普く善根を作りて念を得すとには、慧を以て主と爲す、或は隨ひて助伴なるが故に、眷屬と云ふ。經の如く、諸の善行を修するが故にとは、謂はく、三業は一に非ざるが故に、諸善行と云ふなり。二は定集、謂は

【六は廣集】論文には、六に淨心集あるも、今缺く。

【悲念…故に】此下、論文を引きて釋す。

く、定は智道を助くるを、名けて善作眷屬三昧と爲す。經の、善集助道法の如きが故に。三は親近集。謂はく、諸佛に親近し、供養恭敬して聞慧知を習ふ。經の供養諸佛の如きが故に。四に聚集。謂はく、思慧の智、能く思量し、諸度を積集するが故に、聚と云ふなり。經の「諸の清白の法を集むるが如きが故に。謂はく、六度、垢を治するが故に、清白と云ふなり。五は護集。謂はく、修慧の行は、上は善友に順ずるが故に、攝護と爲す。出世の眞證、修して能く趣入するが故に、修行實證と名く。實に證を行ずるが故に、彼善友、爲に教授し攝護するが故に、善知識の所護と云ふ。六は廣集。謂はく、廣く一切衆生に於て、慇重の深心を以て、利益を作すが故に。七は信心集。謂はく、決定して信樂し、大法を求むるが故に。八は現集。謂はく、所集の善に隨ひて、多く衆生に向ふが故に、心多向慈悲と云ふ。中に於て「慈念は苦苦と壞苦とに依る」とは、慈行麁なるを以ての故に。「悲は行苦に依る」とは、是れ細なるを以ての故に。問ふ「上の文に「慈は樂を與へ、悲は苦を拔く」と云ふ。何が故に、此と同じからざるや。答ふ「此二に通行り別行り。別は前に辨ずるが如し。通じて論ずれば、俱に與樂有り、三地の中の慈に、廣大無量有るが如きは與樂なり。謂はく、廣く欲界の樂を與へ、大いに色界と喜樂を同じうし、無量は色界と喜樂を同じうせず、悲喜捨も亦爾なり。故に知んぬ、與樂に同じ。又三地の如き、苦の衆生の爲に、慈悲に入るが故に、知んぬ、拔苦に同じきなり。此文亦是なり。故に知んぬ同なることを。九は求集。謂はく、衆生の與に一切智智を求む、故に好求佛智慧と云ふ。

【九】これ論意に由りて、經文を釋する二段にして、經の「一切種智を……是の如き心を生ず」といへる文の下なり。

論經に依るに、此句は第七信集の中に攝在す。別に第六の淨心集有り。謂はく、出世の眞諦の心、無垢染の故に、善清淨心と云ふが故に。又此九の中に、初の五は傾倒の行を護る。謂はく、一は戒學、二は定學、餘の三は慧學、即ち聞思修の三慧なり。「論」に依るに四有り。淨心を加ふ、出世の智を集むるが故に。後の四は二乘の行を護る。中に於て、初の二は二乘の心を護る。謂はく、廣は狹心を護り、信は小心を護る。後の二は二乘の行を護る。謂はく、慈は狹行を護り、求めて小行を護る。又此十の中に、初の一は總相なり。謂はく、諸行を統括して、一の厚集を成ずるが故に。餘の九は皆是れ、集の中體より出づるが故に是れ別相なり。九の中に皆集の義有り、是れ同相なり。廣定等の別を、各けて異相と爲す、成壞は前に同じ。知んぬべし。此諸集集成の身に依りて、乃し能く出眞諦の心を發し、初地に住するが故に。此諸集は總じて地中に在り、初分の所攝の故に、如是衆生乃能發阿耨等心と云ふ。即ち是れ本分の中の、顯善決定にして、後文は此を指すなり。

(九)第二に、何の義の爲に、是の如きの心を生ずとならば、經に「一切種智を得んが爲の故に」といふが如し、此は佛の無上智は、知斷證修を具して、究竟して滿ずることを顯すが故に此を總句と爲す。佛智の業用とは、衆生を利益する義、別に九有り。彼を求めんが爲の故に、是の如きの心を生ず。一は力種智、能く聞記業を作す。此は是れ如來の處非處の智、諸の衆生の間に隨ひて、因果等の義を、悉く能く記別す。此義廣くは、餘の修多羅に

【四無畏】大衆中に於て說法するに畏るるなき德。一、我一切智人なりと明言して畏れず。二、我一切煩惱を斷盡せりと明言して畏れず。三、惑業苦の諸障を說きて畏れず。四、戒定慧等の盡苦の正道を說きて畏れず。

【四攝】一、布施攝。二、愛語攝。三、利行攝。四、同事攝。

說くが如し、故に爲得十力故と云ふ。二は無畏佛智、能く破邪の業を作し、四無畏を以て外道の諍を破するが故に、爲得大無畏故と云ふ。三は平等佛智、能く教授の業を作る。謂はく、二空を得て佛法を具足し、轉じて衆生を教へて、同じく證入せしむるが故に、爲得具足佛法故と云ふ。四は救佛智、能く救濟の業を作す。謂はく、四攝を以て、巧に衆生を化するが故に、爲救一切世間故と云ふ。五は淨佛智、能く救攝因業を作し、大慈悲を以て、衆生を救ふの因と爲すが故に、爲淨大慈悲心故と云ふ。六は無餘智佛智、能く普觀の業を作す。謂はく、常に佛眼を以て、普く十方世間の衆生を觀じて、窮盡せざること無きが故に、爲向十方、無餘無礙智故と云ふ、七は無染佛智、能く嚴土を作し、生を攝するを業と爲す。謂はく、一切世界を莊嚴して、障礙無からしめ。雜染有ること無く、功力を待たずして、土を以て機に應じ、信を生じて法に入らしむるが故に、爲淨一切佛國令無餘故と云ふ。『論』の中に、「智心無礙とは、智無礙は前の無障を顯し、心無礙は前の無染を顯す。次初は慧解脫、後は是れ心解脫の故なり。八は覺佛智、能く一念に於て、頓に三世の衆生の心數を覺し、以て業用を爲すが故に、爲於一念中知三世事故と云ふ。九は轉法輪佛智、諸の衆生に於て、能く解脫せしめ、善巧を業と爲すが故に、爲自在轉乃至佛神力故と云ふ。是の如きの心を生ずる者は、卽ち是れ前の阿耨菩提心を發すなり。『論』に云はく、「何が故に、唯生心と言ひて生智と言はざる」を、一問と爲し、乃し「餘の心數の法には、謂はく、念定等を二問と爲す。理實には此時の諸德皆生ず、何ぞ獨心ならんや。釋して云はく、心

【一〇】論釋の第三に依りて釋す。經の「是心は大悲を以て」等の下。

【此悲大に九種】論に悲大に九種を說くに依つて釋す

は是れ總主、此を擧ぐれば即ち智等の心法を攝するが故に、「心中に即ち知斷證修を攝す」と云ふは、初の問を答ふるなり。二に攝一切助道法故とは、後の問を答ふ。

(一〇)第三に「何の因を以て、是の如きの菩提心を生ず」とは、經の、是心の大悲を以て首と爲すが如し。故に前の爲何義を說くが中に所求の果を顯し、今此以何因とは、能成の因を顯す。謂はく、何の因を以て大菩提を求むる、大悲を以て首と爲して、衆生を濟ふが故に、此菩提を求むるは、自安の爲に非ず。何を以ての故に。若し是の如きの大菩提の法に非ずんば、以て究竟して、衆生を救ふこと無きが故に、是故に諸行は、大悲を首と爲す。此悲大いに九種有り。一は增上大、微細の苦を緣じて、增上の智を生ずるが故に智慧增上と云ふ。『論』に、智と慧との二の差別を釋すとは、然るに、此智慧に、通有り、別有り。通じて之を言はば、所知に別無し。別を開くに二門有り。一に、智は俗諦を知り、慧は眞諦を照す、十度の中の第六を、慧と名くるが如し。理を照すを以ての故に、第十を智と名く、事を鑒るを以ての故に。二に、智は能く因果、逆順、染淨の差別を決斷し、慧は能く諸法の假實、體性の有無を照達す。此中は、後の義に約して釋す。又衆生の、十二緣起を觀じて、前は能く後を起すを、皆名けて因と爲し、後は前に依りて起るを、悉く名けて果と爲す。逆順に之を觀ずるに、染有り淨有り。逆順とは、無明は行に緣たり。乃至老死といふは是れを順觀と名く。何んが老死に緣たるや。謂はく、生に由るが故に、乃至無明といふは、是を逆觀と名く。淨順逆とは、無明を滅するが故に行滅す。乃至老死

といふは是を順觀と名く。何んが老死に緣として滅するや。生の滅するに由るが故に。乃至無明といふは是を逆觀と名く。是觀を智と名く、決斷の義の故に。一切の法は、但名のみにして、實無しと觀ずるを、自相觀と名く、一切の法は、眞如一味と觀ずるを、同相觀と名く。是れ觀は慧に名く、照察の義の故に。二は攝大、謂はく、前は旣に苦を知り、今は四攝の方便善巧を以て、苦の衆生を救ふが故に、方便所攝と云ふ。三に淳至大淳は、謂はく、淳厚至は、謂はく、至到慈悲增上の故に、淳至と曰ふ。淳至に二有り。一は直心淳至、謂はく、向の時發心して、衆生界を盡して、利益を作さんと許し、其心一向に改易無きが故に、二は深心淳至、謂はく、愍苦の情懃に、後際に徹するが故に、直心深心淳至と云ふが故に。又直心は理を證せしめ、深心は善を集めしむ、故に「起信論」に云はく、「直心とは、正しく眞如の法を念ずるが故に」と、深心とは、樂ひて一切の諸の善行を、集むるが故に。四に無量大、謂はく、如來の無量の神力を攝取して、物を化して信を生ぜしむるが故に、量同佛力と云ふが故に。五は決定大、上妙決定信深智勝對治とは、決定の信は諸佛の深智を知り、衆生に授けて最勝對治の用を成ぜしむるに堪ふるが故に、善決定衆生力佛力と云ふが故に。謂はく、佛の智力を以て、衆生に授與し、其智力を益するが故に、衆生力と云ふなり。六は、隨順大、謂はく、菩提に隨順し、正覺を得せしむるが故に。趣向無礙智隨順自然智と云ふが故に。七は正受大、謂はく、能く諸佛の大勝教法を領受し、轉じて衆生に受けしむるが故に、能受一切佛法以智慧教化と云ふが故に。八は最

【二二】論釋の第四に依つて釋す。

【第四に是心云云】經の「菩薩是の如き」等の下。

【地前內凡の位】十住以上三賢の位をいふ。

【過の義に八有り】論文に釋するを引用す。

妙大、勝妙の平等功徳を攝受するが故に。廣大如法界と云ふが故に。九は住盡大、謂はく、住は是れ無常愛果の因、盡は是れ涅槃常果の因なるが故に、究竟如虛空盡未來際と云ふが故に。

（二二）第四に、是心生ずる時、何等の相有りと明さば、經の如し、「菩薩、是の如きの心を發さば、即時に凡夫地を過ぐ」とは、此心即ち是れ、出世間道なるを以て、此時凡夫の性を捨離するが故に。又創めて聖位を得て、地前內凡の位に過ぐるが故に、此は是れ總句なり。過の義に八有り、下は別して之を顯す。一は入位過。此時初めて出世間の心を成ず。猶し世人の、初始て胎に住するが如し。法に相似するが故に、入菩薩位故と云ふ。此句は位に約するが故に、『瑜伽』の住品に、入菩薩正性離生と名く。梁の『攝論』の第十に云はく、「一は菩薩の正定位に入る、菩薩初無漏地に入るを以ての故に」と。二は家過。佛の所證の法界の分を得るを以ての故に。生在佛家と云ふが故に。梁の『論』に「二に生在佛家、諸の菩薩は、法王の家に生れ、具足尊勝なるが如きが故に」と。解して云はく、前は胎に住すと雖も、若し下賤の家ならば、過と爲すに足らず、要ず王家に在りて生を受く、方に其勝を顯すが故に。此句は得法に約して家と爲す。『瑜伽』の住品に云はく、「如來家に生ず」と。三は種姓過。大行成立するを以て、佛種を紹ぐに堪ふるが故に、種姓尊貴と云ふ。無機嫌とは、梁の『論』に云はく、「二乘及び世間の種姓に、過ぐるを以ての故に」と。解して云はく、良に以んみれば、二乘も亦生容法界を得。然るに彼は佛果の位を

紹ぐこと能はず。王家に生ずと雖も、然も或は是れ王の僕隷等の如し、貴と爲すに足らざるが故に。今は要ず王の體分を得、王位を紹ぐが故に、子相似たり。四は道過。有漏に非ざるを以ての故に、世道に攝せず、是れ無漏なるが故に、出世の道の攝の故に、過一切乃至出世間道と云ふが故に。大乘を得と雖も、世間に在りて、未だ勝と爲すに足らざるを以て、是れ王種と雖も、若し是れ鬼神の王ならば、貴と爲すに足らざるが如し。要ず是れ人天の王、方に道過を顯すが故に、異道生相似法故と云ふ。梁の『論』に云はく、「四に已に一切世間の行を轉ず、決定して殺生等の邪行を作さざるが故に」と。五は法體過。謂はく、菩薩、正しく大悲を以て體と爲す。他事を作すに於て、即ち是れ己が事とし、以て自身の體性と爲す、法に相似するが故に、住菩薩法中と云ふが故に。『瑜伽』に云はく、「設ひ問ふもの有りて、菩薩何を以て體と爲すと言はば、當に云何が答ふべき、應に正しく答へて言ふべし、大悲を體と爲す」と、此れ之の謂なり。前は道勝ると雖も、若し己が身殘闕せば、未だ勝と爲すに足らざるが故に、大悲を舉げて自體を顯成す。六は住處過。世間を捨てざるを以て、是れ涅槃に住せず、方便に染まず。是れ世間に住せずして、功に二邊を離る。無住處に住するが故に在諸菩薩數と云ふ。論經には、住在菩薩正處と名くるが故なり。王子の諸根備具すれども、若し住處下劣なれば、亦勝と爲すに足らざるが如し。菩薩、大悲有りと雖も、若し二邊に著すれば、亦未だ勝と爲さず。七は生業過。空に順ずるの聖智を以て、等く三世眞如の法の中に入り、無終極無際限の相を顯す、生命相似の故

【二】以下、釋名分を釋す。經の「諸佛の子」等の下。

に、等入三世如と云ふなり。論經には、三世眞如法中と名く。是故に、此中の如の字は、兩處に之を用ふ、應に知るべし。彼王子の、依正倶に勝れたりと雖も、若し壽命短促なれば、勝と爲すに足らざるが如し。八は畢定過。佛種の不斷は因畢定を顯し、究竟涅槃は果畢定を顯す。成就相似とは、王子の依正命勝れたりと雖も、若し志氣立たず、所作を成ぜざれば、紹繼するに堪へざるに似たるが故に如來種中畢定究竟阿耨多羅三藐三菩提故と云ふ。如是住の法等とは、牒して以て總結す。謂はく、前の四義の中に、初に內の所依身を明し、二に外の所求の果を明し、三に求果の所因を顯す。此三は、發心の由致を明す。四は正しく所發心の相を顯す、此れ卽ち是れ初住地の相なり、故に云はく「是の如きの法に住するを、菩薩の歡喜地に住すと名く、不動法を以ての故に」と。不動法とは、住の義を釋成す。謂はく、一に眞理を證すれば、復失はず、故に二乘、異道に動ぜられざる所の故に。已に住の義を說き竟んぬ。

(二)第二に、釋名分の中に三有り。初の十句は多喜を明し、次の十句は當得を念じて、喜を生ず。後の十は、現得を念じて、喜を生ず、各此三を釋する中に、初の一は歡喜の差別を明し、後の二は喜因の差別を明す。又前の一は正しく是れ、此地の行報の喜、後の二は、此地に於て緣を擧げ、方に喜ぶことを明す。又初の一は、前の依何身に對して、喜を生ず、厚く善根を集めて、此位を得るを以ての故に。次は前の、爲何義に對して、喜を生ず、所求の佛果、定んで、當に得べきを以ての故に。後は有何相に對して、喜を生ず。現

に凡を離れ、聖位を得るを以ての故に。何因の中に、喜を對辨せざるは、謂はく、悲心惻愴して、喜相隱るるが故に。初の中に、多喜と言ふは、謂はく、適悅すること、業多なるが故に。『論』の中に三種あり。一に心喜とは、入觀の心、心卽ち適悅するが故に。二に體喜とは、出觀は喜受と相應の故に。三に根喜とは、前の心體の喜に由るが故に、所依の身をして、色根調暢せしむ。輕安適悅なるが故に、多喜と云ふ、此は是れ總句なり、別に九種有り。一は敬喜、三寶の中に於て、不壞信を得るが故に、多信と云ふが故に、此は小乘の、入見道の不壞淨を得るが如し、相似の故に。二は愛喜、樂ひて離染の眞如法を、觀ずるが故に、多淸淨と云ふ。故に論經に、多愛念と名くるが故に。上の二は是れ心喜なり。三は慶喜、自覺の所證、校量するに地前に勝過するが故に、多踊悅と云ふが故に。四は調柔喜、身心安適にして、遍く增益するが故に。五は堪受喜、自ら菩提に至ること、近きを見るとは、已に行成じて、菩提を取ること近きを知るが故に、多堪受故と云ふ。此れ當得を念ずると、何の別ぞ。謂はく、當相を念ずるは、果を念じて預め喜ぶ、今此は因能く、受くることを念ずるが故に喜ぶ。上來は自行の喜なり、下の三は、化他の喜を明す。六は不壞喜、自心に於て、先に已に調伏するに由る。是故に、或は他の論義するに、自ら解說する時、或は自の論義を他解說する時、皆心調ひて諍無し、諸の擾動を離るるが故に、不好鬪諍故と云ふ。七は不惱喜、心の慈悲を以て身口調柔なり。設ひ惡人を見るとも、道を以て漸く化し、他を惱まさざるが故に、不好惱亂衆生故と云ふ。八は不

【第二に當得云云】歡喜地の名を釋する中、當得を念ひて喜ぶ文を釋す。經の「諸の菩薩…諸佛を念ずるが故に」等の下。

瞋喜、謂はく、衆生を見るに、說の如くに行ぜざるは、心法に乖くなり。威儀正しからざるは、身、道に違ふなり。之を見て愍を生ずるが故に、忍びて瞋らざるが故に、不好瞋恨故と云ふ。此前の二句は、他を壞惱せず、此句は能く他の惱を受く。又、前の二は、他をして惱まさしめず、此句は自ら瞋を起さず。

第二に當得を念ずるが故に、歡喜を生ずる中に初の句は總なり。此中に已が當得の義を明さんと欲して、何が故に乃し他佛を念ずるや。『論』に釋すらく、「佛の所得の如く、我も亦當に得べし。是の如く念ずるが故に、心に歡喜を生ず」と。此れ即ち他の成を念じ已るなり。別に九種有り。一に、佛法を念ずとは、正しく是れ法を念ず、但總を以て別を該ね、念佛門に於て餘の九を開出す。是故に、九種は皆念佛と名く、此は是れ佛所得の法、及び所證の法を念ず。已に亦當に成ずべきが故に、念佛法生歡喜心と云ふ。二に佛、菩薩を念ず。有人釋して云はく、此れ佛の過去に、菩薩爲りし時を念じて、我も亦彼に同じと、故に喜を生ず。今釋すらく、佛の成道に、菩薩の眷屬有ることを念じ、我も亦當に有るべしと、故に歡喜を生ず。文の意、此に在るが故に、念諸菩薩等と云ふ。三に佛行を念ず、此中は正しく是れ菩薩の行を念ず、何が故に念佛行と名くるや。釋すらく、「諸の菩薩は、佛の所行の行を行ずるを以ての故に、諸佛行つが故に。四に佛淨を念ず。謂はく、佛の所有の諸度の、染を離るるを念ず、故に念諸波羅蜜清淨故と云ふ。五に佛勝を念ず。謂はく、佛菩薩の勝と、餘衆の殊勝とを念ずるが故に。六は、佛の不退の力を念ずるが故に、

不壞と云ふなり。七は、佛の敎化の法を念ず。八は、佛能く廣く、衆生を利益することを念ず。九は佛所入の門を念ず。謂はく、善巧の智門なり。問ふ、『此十句を看るに、唯初の一句は佛を念じ、餘は別事を念ず。論主、何が故に、總じて念佛と稱する。』答ふ、『此れ一乘無盡の緣起無礙にして相成するに依る。即ち一緣の中、皆一切の諸緣を攝せざること無し。論主、此例に依るが故に、九を廻して一に入れて、俱に念佛と名く。初の句に九を攝するが如く、餘の一一の句も皆亦是の如し、此れ即ち句句の下に、悉く皆無盡なり。此地の法は、是れ陀羅尼法なるを以て、上に悉曇章を擧げて、喩と爲すが如し、是れ此義なり。此例に依るが故に、上の十信を總と爲し、乃至十地及び佛を悉く別と爲す。別を攝して總に入れば、信の中に在りて具足せざること無し。餘の位も亦然り、是れ此義なり。』又此十句、論主は更に一番の解釋を作る。『論』に云はく、中に於て初の二は共を念ずるの念佛とは、謂はく、十の中に於て初の二は共を念ず、同じく是れ所念なり。今還りて、分ちて二と爲す、謂はく、佛を念ずると、佛法を念ずるとの故に、佛、佛法一と云ふが故に。此意は三寶を簡成せんと欲す。佛菩薩の二を念ずと言ふは、還りて將に念佛もて、念佛と菩薩とを簡ぶが故に、二と爲すなり。念諸菩薩と言ふが故に。直に菩薩を擧ぐ。佛を念ずるは、前に法を簡ぶ處に、已に顯すを以ての故に、是故に、佛の中に三寶を具足す。餘の七は皆是れ、佛行を念ずるの攝なり、此を總と爲す。餘の下の六句は、此行を顯すが故に。隨所顯彼菩薩行と言ふは、謂はく、此六句は、彼所顯の菩薩行に隨ふが故に、是故に行の

【如是諸念】論に「何を以て是の如きの諸念を顯す」等といふ。

【第三に現得云云】第三に現得を念うて歡喜を生ずる文を釋す。經の「菩薩は…我轉離一切世間」等の下。

【此轉離に九種有り云云】論文の釋

中に在りて所攝するを得。何を以て是の如きの諸念を顯すと言はば、謂はく、前に所顯に隨ふと言うて、未だ何の法を以て顯すといふことを辨ぜず。下は能顯の行體を出すが故に、如是諸念と云ふ。應に知るべし、此中の菩薩行に二種有り。一は離染行、二は勝進行なり。六の中に、初の句は、別して離染行を顯すが故に、復何顯彼波羅蜜淨顯と云ふ。二に餘の五句は、別して勝進の行を顯すが故に、云何顯彼菩薩行、乃至轉去故と云ふ。中に於て初の二句は、勝と及び不退とは、勝轉去を顯す。後地を以て前に望めて、皆轉勝と名け、前地を後に望めて、不退に赴入するを、皆轉去と名く。後の三句は、其盡去を顯す。十地の位窮まるを、之を名けて盡と爲す、上佛果に入るを、之を稱して去と曰ふ。三句の中に、初の二は盡を顯す。謂はく、法雲地の中に、能く法雨を受け、及び能く雨を注ぎて群生を利益す。後の一句は、受職成佛の故に、上佛地に入る、此は初の念佛の行に、後の六を該攝す、之に因りて總と爲す。初の念佛に歸するを、說きて以て別と爲す、故に亦總亦別と云ふなり。

第三に現得を念じて、歡喜を生ずるが中に、初の總の中に、世境を離る。『論』に釋すらく、凡夫取著の事を離る。此六塵の境は是れ、世凡の所取なり、又未だ初地に入らざれば、所取亡びず。『論』に、現前立少物等と云ふが如きは、入地に非ざるが故に。今出世に入りて、眞如の法を證し、取著する所の世間の境事を離るるが故に、我轉離一切世間境界生歡喜心と云ふ。此轉離に九種有り。一は入轉離。謂はく、諸佛の所行の法の中に、入るが

に由る。一、入轉離。二、遠轉離。三、近至轉離。四、隨轉離。五、依止轉離。六、近見轉離。七、生轉離。八、平等轉離。九、捨轉離。

故に、入一切佛平等中故と云ふ。此九種は、前の八過と與に、既に少しく相似たり、何の別か有る。前を釋する中を取るに、此は正しく顯發の相を擧ぐ。此文に此現得を念じて、歡喜を生ず、理實には初住の所得に別無し。二には、遠く地前凡夫の位を捨つるが故に。三は、近く出世の聖智地に到るが故に。四は分別の煩惱の惡、業果を起すを斷離するが故に。五は、衆生の與に依止と作るに堪ふるが故に。六は自ら行成を念じて、佛に赴くこと遙かならざるが故に、近見と云ふ。七は、佛の諸の受用の土の中の、淨土に生ずることを得、是れ佛の分齊境界なり。八は、平等轉離は、諸の菩薩と同じく、眞如を證す。入れば彼數に在り。九は、勝報自在の故に、捨離恐怖と云ふ。此文に二有り。初は直に說き、後は重ねて分別す。又此十の中に、初の二句は、所行の事、相似せざることを顯し、此は佛法を以て、所行の事と爲す、凡夫の六塵の事を取るに似ず。次の二句は、自身相似せざることを顯す。謂はく、此は聖慧を以て身と爲し、凡地の妄識の身に似ざるが故に。後の六句は六種の不相似を顯す。一に、斷轉得の出世の淨行は、凡夫の習惡道行に似ざるが故に、行不相似と云ふ。二に菩薩の大慈は、衆生に依りて起して、還りて物の依と爲るは、凡夫の自ら濟はずして、依と作ること能はざるに、似ざるが故に。三に、菩薩見佛得力助行は、凡夫非器の、得ざるに似ず。四に、菩薩、淨佛國土に生ずるは、凡夫の五趣に生ずるに似ざるが故に、處不似と云ふ。五に、正智を證習して、以て慧を資くるは、凡夫の雜業所生に似ず。六に、內心純熟して所作怖るること無く、畢定成就して、凡夫の章を

帶びて恆に怖るるに似ず、此不似に由るが故に。轉離と名くるなり。怖畏と言ふは、不愛等とは、謂はく、不活等の五は、心をして惛惡ならしむるを、名けて不愛と爲す。所畏不定は便ち疑慮を起し、所畏定は即ち憂想を生ず。此は是れ心法と心と、俱起するが故に、相應と名く。此は是れ畏の體、心に畏るるを以ての故に、相を身に現ずるが故に、毛豎等の事有り。第二に、重ねて怖を分別する中に、二あり。先に徴問して、二章門を標す。一は怖、二は離、後に前の二門を釋す。先に怖章を釋す。此五怖を釋するに、六門を作る、一は體を出すに四法有り。一は疑、二は慮なり、慮は猶し思のごとし。三は憂、四は想、前の如く知んぬべし。二に說意を明すに、所以者何は其意を徵す。理實には初地に煩惱等の障を斷除す、何が故に此中に、乃し離畏を說くや。論に釋すらく、此五怖畏は、是は初地の障の故に、偏に此に在りて說く。若し爾らば何ぞ唯、釋名の處に在りて說くや。『論』に云はく、「復地の利益勝を說くが故に」と。歡喜の利益と怖畏とは、相反することを明さんと、欲するが故に、此に之を擧ぐ。三は、三業に依りて分別せば、『論』に云はく、「第一、第二、第五は身口意に依る」とは、此に二義有り。一は別、二は通なり。別の中に不活は身に依り、惡名は口に依る。惡名は他の口より發すと雖も、性は是れ、口業なるを以ての故に。衆畏は意に依る、意は智德無きが故に、衆畏を生ず。二には通ず。不活の三業は、衣形を蓋はず、食口に充たず、苦困意に逼る。餘の二は通ずること、知んぬべし。二に唯身に依るとは、善道は愛すべきに、捨つるが故に畏を生ず、此は是れ死の畏、惡道は憎

【一三】以下、第三に安住地分の文を釋す。「經の一諸の佛子、是菩薩は大悲を以て」といふ下。

むべし、得るが故に畏を生ず、此は惡道に墮するの畏なり。捨と得とは身に在り、餘業に非ざるが故に。四に建立とは、『論』に云はく、何が故に、但五怖畏を説くや、打縛等の諸畏、皆五の攝なるが故に」と。五に出因とは、『論』に二因を説く。一には邪智、妄に想を取り、見愛著するが故に。二には善根微少の故に。初は三畏の因と爲る、邪智は是れ不活の因、邪智に由りて、我を計するに、己活ざるかと懼れて、資財を追求し、妄に想を取る、是れ惡名畏の因なり、妄想怖れて美名を取るを以て、遂に此畏を起す。愛著は是れ死畏の因なり、我を見るに由るが故に、自身を愛著して、其死を懼るるなり。此三は同じく是れ、惡法の故に、合して一と爲す。善根少は是れ餘の二因なり。功德の善少きは、惡道に墮することを畏れ、智慧の善少きは、大衆を畏る。又過去の善少きは、今の大衆を畏れ、現在の善少きは、當の惡道を畏る。此二は倶に是れ善少ければ、合して一因と爲す。六に對治とは、此因を離るるが故に、怖畏は隨ひて盡く、並に經の如く知んぬべし。釋名分竟んぬ。

（一三）第三に、安住地分の中に、三有り。初は總じて安住を明し、二は所謂の下の三十句は、別して安住を辨ず。三は、成就の下の一句は、總じて安住を結す。初の中に亦三あり。初の大悲を前と爲す、是れ安住の因なり。菩薩の所行は皆、衆生の爲に、悲を行の本と爲すが故に、悲首と云ふ。二は、衆生に於て、心に嫌恨無き等は、是れ安住觀なり。此中に二有り。一は、衆生の違惱に於て、心嫌恨せずとは、非を見て嫌はず、己に觸れて恨無し。

【此勤修に…心竟んぬ】別して安住を辨ずるに三。初に信の行所依なるを明す。

此煩惱壞すること能はざるが故に、堅固と名く。二に直心とは、深悲物を愍み、菩提を求むるが爲に、小業は壞すること、能はざるが故に、堅固と名く。此二は不壞の故に、自然淨と云ふ。三に、轉復勤修一切善根とは、是れ安住行なり、下の所說の、信等の善根の如きは、一切皆是れ此地の攝なり、故に總修なり。

此勤修に三有り、初の信心は是れ、行の所依なり。二に、修行は是れ、心に依りて行を成ず。三に、廻向は是れ、行を廻して德を成ず。初の十句は、信心成を明す、信心增上と言ふは、所有の事に隨ふ。中に於て、信增上成就す。解して云はく、此は是れ總句なり。下の別句は、所有の三寶等の境事に隨ふ。中に於て、深信して決定するを名けて增上と爲す。別の中に、九種の信增上有り。中に於て初の六は、始めて信心を起し、後の三は信增じて欲を成ず。前の中に、初の二は自行、後の四は利他なり。前の中に初の句は、上は三寶を信ず。謂はく、淨信敬行の故に、多行淨心と云ふ。下の句は、理に於て證信す。謂はく、眞智、神を開くが故に、解心清淨と云ふ。利他の四の中に、初の一は化他の行。謂はく、己が所證を說き、衆生に授與するを、信分別と名く。後の三は化他の心なり。謂はく、慈悲は是れ化心大なり。不疲は化心常なり。後の三の中に、初は行に於て過を離る。謂はく、世に染著せざるは、是れ慚愧の能なり。於慚等の下は、慚愧の相を辨ず、德を擧げて、餘の五藏を等取す、故に深慚愧に由りて、六藏行せざるが故に、莊嚴と云ふ。二に、人に於て將護す。三に、法に於て敬順す。信心竟んぬ。

【第二に修行成就…行竟んぬ】次に修行成就を說く下。經の「日夜常に一切の善根」等の文を釋す。

【第三に廻成就…知んぬべし】三に廻向成就を明す下に經の「一切智地を樂ひ」等の文を釋す。

第二に修行成就の中に、論經は九句、此中は八句なるを『論』に十句と言ふは、成數の十に據りて、名と爲す。初の句は總じて、諸の善根を集めて、休息無きが故に、無休息の故に、是れ常修なり。一切の善根は是れ、頓修なり。別の中の八の內、初の七は阿含行、後の一は證入行なり、前の中に初の二は、攝法の方便なり。一は善友に近づく、略して此句無し。二は法を愛樂す。謂はく、直諮直報に於て、問答設難を爲し、釋通して論義を爲す。本文を分別するを、解釋と爲す。此三時に於て、稱悅して情に適ひ、心に喜を生ずるが故に、常愛樂法と云ふ。次の三は、三慧の正行を成ず。中に於て聞思は、知んぬべし。修は定中に於て、味著せざるが故に。後の二は是れ、緣に隨ひ著を離るる行なり。名に於て利に於て、已に貪らざることを得、是れ知足の行なり。未だ得ずして、求めざるは、是れ少欲の行なり。未受戒の者の此貪求有れば、受くることを得ざるが故に、障菩薩戒と名く。已受戒の者の、此二種を起せば、戒をして退失せしむ。上來は阿含行なり、常生寶心等と言ふは、是れ證行なり。證行は貴ぶべし、喩に從ひて寶と名く。證行は超出し、念念に常に現ずるが故に、厭足無し、修行竟んぬ。

第三に廻成就の中に、『論』の中に四番の釋を作る、一は意を顯すの釋、二は總別の釋、三に隨要の釋、四は就行の釋なり。初の中に、先に問うて以て、此求一切智等は、何等の事を說くと發起す、何を以てか此問の有るとならば、文の中に廻向の言無きが爲に、此間に洎ぶ。示現廻向成就とは、答へて以て顯示す。佛果を求むるは、是れ廻向の義なるを以

【家とは…結す】論文に「此三求とは是れ家依家求を障ふること無し」といふを指す。

ての故に。二に、總別の解釋は、論の如く應に知んぬべし。三に、隨要分別とは、此中に三を分つ、初は何等の事を求む、一切智地を求むるが故にとは、此は是れ初の句の所求の果法、求は猶し樂のごとし。二は何の觀を以て求むる、諸佛の力無畏等を觀ずるが故にとは、此は能求の觀解を顯す、是れ第二の句なり。三に云何が求むる、諸波羅蜜の無著の法を求むるが故にとは、此は何の行を以て求むるや、諸度の、六塵等の著を離るるを用て、求むることを顯す。此は通じて後の十句を攝して、總じて此三求を盡す中に、家とは一切智地を結す。是れ所求の處の故に、家と名く。依家とは能求の觀解を結す。謂はく、所觀の力無畏等は、一切智の中の、別德の故に、依家と名く。無障求とは、經の能求の行、障蓋を離るるが故に。四に、行に就きて解釋する中に、初の二句は是れ、直に中の正所修の行に、非ざるが故に、別して釋す、此は唯前の能求の行を解す。「云何」の中に、云何求等は、總じて前の第三門を標して、此總句と爲す。下は別を開くが故に、著別果求と云ふ。魔の二垢の中に、初に乞を見る、詐說は是れ、語の一諂なり。許し與ふるに心無くんば是れ心曲なり。此を對治するは、經に諂曲を離るるが如きが故に。此は是れ一向に許さず。二は許して與へざるに、三義有り。一は、先に許して後に與へず。二は、多を許して少を與ふ。三は勝を許して劣を與ふ。皆是れ先言に隨はず、此を對治するは、經の、說の如く能く行するが如きが故に。二に僞に一垢有り、實語を護らざるに、二有り、一は犯戒なり、不受の時、能持の言に違ふを以てなり。二は覆藏、妄語等、此を對治するが故に。經の常行

【菩提資糧論】六卷、龍樹造、自在比丘釋、隋の達磨笈多譯。般若波羅蜜等を菩提の資糧となすを說く。

【薩婆若】（Sarvajña）譯して一切智といふ。一切の義理に分て通達せざるなき智慧をいふ。

實語の如し。『菩提資糧論』の經に云はく、「實語に由りて、死して轉輪王、及び諸天の王を、退失すと雖も、唯應に實語を作すべし」と。三には、忍の一垢は、佛家は正しく利他を以て業と爲す、此に反して他を惱ますは即ち佛家を汚す。此を對治するは、經の不汚佛家の如きが故に。四には、精進の一垢なり。謂はく、戒に於て退を生ず、此に三種あり。一は、法廣きが故に退す。『論』に云はく、「菩薩戒は無量なり」と。二は時久きが故に退す。『論』に云はく、「劫數長遠なり」と。三は深細の故に退す。『論』に云はく、「持し難く行じ難し」と。廣を以ての故に、具に持すべきこと難し、時長きが故に、常に持すべきこと難し、深細の故に、善く持すべきこと難し。又、律儀戒の中に、惡として離れざること無きが故に持し難し。餘の二聚の中に、善として攝せざること無く、生として度せざること無きが故に、難行なり。此に由りて便ち、退墮の心を生ず、是れ此垢なり。此を對治するは、經の不捨菩薩戒の如し、故に精進策修し、能く難行を行ずるに由るが故に。五は定垢の二の中に、一は、事中の攀縁を、亂心と名け、內情に妄取するを、憶想と名く。又、初は麤、後は細なり。又、初は止むことを得ざるが故に。後は觀ることを得ざるが故に、對治の中に、不動は亂を治し、生薩婆若は憶想を治す。六は慧に三垢有り。一は不住道行を障ふ。或は一向に世間を現じて、涅槃を現ぜず、凡夫に同じきが故に。或は一向に涅槃を現じて、世間を現ぜず、二乘に同しきが故に、此れ善巧無し、是れ般若の垢なり。對治は經の如く知んぬべし。二は助道行を障ふ。三は證道行を障ふ、並に知んぬべし。菩薩

如是と言ふ下は、安住を總結す。此三十句の行に由りて、此地を淨治し、純熟するが故に、淨法と名くるなり。『論』の中に更に釋す、中に於て分ちて四と爲す。一は信。謂はく、忍受決定の故に。二は欲。謂はく、怖れて彼行に赴くが故に。三は精進。謂はく、緣に對して造修するが故に。四は方便。謂はく、行成じ、巧に求むるが故に。初の十句の中に、後の三句は是れ、此欲の故に四有り。上來の百句の經は、總じて初地の說分を明し竟んぬ。

華嚴經探玄記卷十

【一】以下、歡喜地安住の菩薩の願行果の三相を顯す初に願。

【二】初に願の勝るるを顯すに、初に名を顯す。

華嚴經探玄記　卷第十一　此は第二地を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

〔一〕第四に校量勝分。菩薩は此中に住して、二乘に勝るるが故に。前の初住及び安住は、已に小に過ぐることを說く、何が故に此に至りて方に勝を說くや。釋して云はく、菩薩の諸行は是れ事皆過ぐ、前は是れ初住及び正住過ぎたり。今は地滿じて勝るが故に、亦過を辨ず。小乘の見位の、此勝德無きが如きは、今此に同じからず。故に殊勝を顯す。然も此勝相は略して說くに三種あり。願は志の遐廣なるを標し、行は是れ誓に依りて造修す。果は是れ當位の行成就す。

〔二〕初の願の中に、略して七門を作る。一は、名を顯し、二は、體性、三は、修に約して分別し、四は、行に約して分別し、五は、所求の行に約して亦分別し、六は、因果を分別し、七は文を釋す。初に名とは、願は是れ希求の義なり。『地論』に云はく、「諸の大願を發する者は、心に隨ひて義を求むるが故に」と。次に別名を顯すに、此論の中に但文を釋して、名を顯さず。古來の諸德は、義に依りて名を作る。或は順有り或は不順あり。今梁の『攝論』に依りて、具に十名を列ぬ。彼に云はく、「一は供養願、勝緣の福田師法主を供養せんことを願ず。二は受持願、勝妙の正法を受持せんことを願ず。三は轉法輪願、大集の中に

【三】第二に體性を明すに六門を作りて釋す。

於て、未曾有の法輪を轉ぜんことを願ず。四は修行願、説の如く一切の菩薩の正行を、修行せんことを願ず。五は成就願、此器世界の衆生の、三乘の善根を成就せんことを願ず。六は承事願、諸佛の土に往きて、常に諸佛を見、恆に敬事することを得て、正法を聽受せんことを願ず。七は淨土願、清淨の國土に、正法及び能く修行する衆生を、安立せんことを願ず。八は不離願、一切の生處に於て、恆に諸佛菩薩を離れず、同意行を得んことを願ず。九は利益願、一切の時に於て、恆に利益衆生の事を作して、空しく過すこと有ること、無からんことを願ず。十は正覺願、一切衆生と同じく、無上菩提を得て、恆に佛事を作さんことを願す」と。解して云はく、此十の中に、最初の供養願は、此經の中には、唯供佛に約す。『攝論』には、餘の聞經修等に通ず、第二は同じ、第三は此經の中、是れ轉法輪を請するは、法を攝することを上首と爲す。是れ自身に轉法輪の事を作すに非ず。第四の願は有人の云はく、此は是れ知衆生心の願なりと。此れ亦非なり。文の中に自ら是れ修菩薩行と釋する故に、『攝論』と同じ。第五の成就は、是れ教化の義同じ。第六に此經の中に、知世界願と名け、現前に世界の差別を了知す。『攝論』と同じからず。此二説を會して謂はく、彼承事は必ず世界に往き、此は世界を知り、必ず佛に事ふるが故に、又會すべからず。但此經を定と爲し、彼論の十願は此經より出づ。更に餘處に文無きが故に餘の後の四願の意義、悉く同じく知んぬべし。

（二）第二に體性とは、六門有り。一は體性門に約せば、『唯識論』第九に、欲勝解及び信を以

【四】第三に修に約して分別す。

【五】第四に行に約して分別す。

て性と爲す。願は此三を以て自性と爲す故に。二は相應門に約す、梁の『攝論』の第十に、「清淨の意欲を以て、願體と爲し、般若に依るが故に、清淨なるを得、大悲に依るが故に、意欲有り」と。解して云はく、此に五法有り。一は清淨、是れ信なり。二は眞、是れ意樂なり。三は欲、四は智、五は悲なり。後の二は是れ所依なり。何が故に此二に依るとならば、願に二有るを以ての故に。『唯識』に云はく、「願に二種有り。謂はく、菩提を求むるの願、他を利樂するの願なり」と。三は所依に約す、後得智に依りて、此願を起すを以ての故に、餘の論に說くが如し。十度の中に後の四は、皆是れ後得智なるが故に。四には行に約せば、漸く增するを性と爲す。『地論』に云ふが如し。「何が故に大願と名くる。光明善根轉た勝れて、增廣なる故に」と。五は眷屬に約す、一切の行に通ずるが故に『唯識』に云はく、「若し眷屬を辨ぜば、一一に皆一切俱に、功德を行ずるを性と爲す」と。六に究竟に約す。梁の『攝論』の第十に云はく、「此十願は初地に登るに至りて、乃ち成立することを得。何を以ての故に、此願は眞如を以て體と爲す。初地に能く眞如を見るが故に」と。

(四)第三に修に約して分別せば、初の七は是れ修始、次の二は修熟、後の一は修成得果なり。又地前初發心の時より、即ち此願を起して、初地に登るに至り、修願成ずることを得。梁論等に辨ずるが如し。

(五)第四に、行に約して分別せば二有り。一は別、二は通なり。別して之を言はば、初の二は自利の行なり。『論』に云はく、初は功德の行を滿ぜんことを願ず。第二に智慧の行を滿

【四生】胎、卵、濕、化。

【常に勤に】大正藏經に「常に勤めて」に作る。

【六】第五に所求の行位に約して分別す。

ぜんことを願ず」と。次の五は利他の行なり。中に於て、初に何の身を以てすと云はば、謂はく、法を攝する上首の身は能く他を利する故に。二は何の心を以てすと云はば、修行の心は方に能く生を攝する故に。三に何者衆生とは、謂はく、四生等は是れ所化なる故に。四に衆生の住處とは、世界の差別を知るが故に。五に自身何の處に住し、能く衆生を化すとならば、淨土の處に住す。後の三は三義有り。一は、初は是れ自利の滿、次は是れ利他の滿、後は是れ二利の得果なり。二には、三倶に自利なり。『論』に云はく、「後の三願は自身を顯すが故に」と。三には三倶に利他なり。『論』に云はく、「此三は實の如く、衆生を教化することを示現するが故に」と。二は通に約して而も之を言はば、此十は總じて是れ自利にして、倶に是れ利他なり。故に下の『論』に云はく、此校量菩薩の願勝に二種有りて、聲聞辟支に勝る。一は當に勤に無量の行を修習すべきが故に。二は、一切衆生と同じく、行ずる故に」と。解して云はく、此上の句は自利、後の句は利他なる故にと、知ることを得るなり。

(六)第五に所求の行位に約して分別せば、二有り。一は通、二は別なり。通じて而も之を言はば、或は倶に是れ行なり。並に願に依りて、修する所の行なるを以ての故に。或は並びに是れ位なり、創發は地前に在り、終成は地上に在るを以てなり。前の梁論の如くなる故に、別分の中に、初の七は是れ行なり、已に前に辨ずるが如し。後の三は位に約して顯す。『論』に、後の三は初に地を得る校量勝と名くと說けり。故に知んぬ、初地より乃し第九

【七】第六に因果分別す。

【十度】十波羅蜜の行。

【八】以下、正しく文を釋す。

に至るまで、地地轉勝するが故に。二に菩薩地盡を得て、校量勝るが故に。此れ第十地の菩薩の、位窮るに在りて、故に地盡と云ふ。三は、一切地盡すを得て、究竟するが故に、此れ佛地に在りて、佛果究竟一切地盡を以てす。

(七)第六に因果を分別せば、亦通別有り。通じて說かば、倶に因なり、因位に在るを以ての故に。若し爾らば第十に、何が故に成佛する。釋するに二義有り。一は、此は是れ地上の菩薩、願力をもつて他方の成佛を示現す。理實には佛に非ず。二は地中に願を起して當成を願ず、今亦成ぜず。或は是れ果なり、地前には願を起し、未だ成ぜざるを以て、因と爲して地を得て、成就するを果と爲す。十度の行の、地前を因と爲し、地上を果と爲すが如き等なり。別して說くが中に、二有り。初に顯なるに隨ひて言はば、前の九を因と爲し、後の一を果と爲す。二に具に攝して言はば、前の五は因を成ずる行なり。第六の知世界智は、是れ所求の種智の果なり。第七は是れ、所求の淨土の依果なり。八九は亦因なり。第十は所求の正報の果なり。

(八)第七に、文を釋するに、四有り。初の一句は結前生後にして、願を起す方便なり。二は、正しく十願を顯す。三は、廣く眷屬を攝す。四は十を以て要期を盡して、以て無盡を顯す。初の中に、是の如きの定心を生ずることは、論の大方便大行なり。故に謂はく、巧に大志を起し、所作を期することを標す。大方便と名くるは、是れ願心なり。願に依りて、造修の行の成ずることは必ず然なり、故に大行は、此願行を成ずと名くるなり。此二に於て、

【九】第一願を釋す。

【諸の無量…故に】論文に一切種具足を説きて「無量無量種種にして、復勝事等の供養有るが故に」とあるを引用し來る。

作心決定を成ず。更に二念無き故に、定心と名く。二は正しく十願を顯すに、卽ち十段と爲す。諸の願の中に、皆三義有り。一は、所作の事を擧ぐ、卽ち行體なり。二は、是の如きの大願を發すは、行に對して願を興すことを明す。三に廣大等は、願の分齊を顯す。

(九)此願の中、通じて論ずれば、七種の大有り。一は供心大、清淨心とは、「論」に上深信清淨と名く、增上の敬重を以ての故にとは、上を釋するなり。迴向菩提は、深を釋するなり。決定信は、信を釋するなり。此中の淨心は此三義を具す、又一向に餘念を雜へざるを、亦淨心と名く。二は福田大、謂はく、佛にのみ斯供有る故に、無餘と曰ふ。供養に三種あり。有人は三佛に供するに配す。或は可、或は不可なること、准じて知んぬべし。中に於て香華は但敬を表す、資用無き故に、敬と名くるなり。其行供と行敬と、何ぞ別ならん。但義をもつて別つべくんば、資順の義を供養と爲し、虔仰の義を恭敬と爲す。亦三佛に配すること、前に同じ。「論」は三乘に就きて、三佛を説く、下に准ずるに、別敎は亦十佛なり。三に供養大、「論」に一切供具等とは、此に三義有り。一は事事廣し、「論」の無量の如くなるが故に。二は種別多し、「論」の種種の如くなるが故に。三は皆精妙なり、「論」の復勝事等の供養の如き故に。此三義を具するを、一切具と名くるなり。此上は行體なり。四は願大、謂はく、行に隨ひて願を起す。經の、發如是大願の如き故に。此れ願を興すなり。五は攝功德大、餘の凡小の善根に勝るる故に。故に廣大なること、法界の如しと云ふ。六は因大、無常の愛果を生じ、因盡きざる故に、究竟するに空の如しと云ふ。七は時大、

【二】第二の願を行す。

能く後際を盡して、涅槃の常果を得る故に、盡未來際と云ふ故に。八は誓を立てて、自ら要するが故に、盡供養一切劫の中に乃至無休息と云ふ。故に一切劫中所有佛とは、頓供養なり。無休息とは常供養なり。問ふ、「諸處に多く供養三寶を明す、此中に何が故に唯佛を供するや。」答ふ、「理實には通じて有り。但文の中に影顯す。初の願は、佛に對して供を願じ、第二の願は、法に對して護を願ず、第八の願は、僧に對して同を願ず。又復供養に三義有り。一は唯佛に供するは、行の趣求を顯す。二は佛僧に供養し、之に從ひて法を求む。三は三寶を供養し、具に功徳を攝す。今初の義に據るが故に、唯佛に供す。」

（一の二）第二の願の中に亦三あり。初に所作の行を舉ぐ。中に於て、經に三句有りて、二釋を爲る。一は始修に就き、二は終成に約す。初の中の三とは、先に教法を護る。謂はく、「契經等は、應誦等を等取す。此は是れ所護の法なり。書寫等は能護持の行を辨す。餘の經に、說くに十種有り。無性の『攝論』に云はく、「一は書寫、二は供養、三は轉施、四は聽聞、五は披讀、六は受持、七は開示、八は諷誦、九は思惟、十は修習なり」と。今此論の中には、且く六種を說く。初の五は自行の護、後の一は化他の護なり。二は、一切の諸佛を攝す等とは、證法を攝受することを明す。謂はく、「菩提を證するは、自行の持なり。此を攝して傳授するは、化他の護なり。三は、一切諸佛の教化したまふ所の、法等とは、是れ行法なり。謂はく、修行者は皆是れ、諸佛に教化せらるる故に、彼修行の時若し障難有らば、攝して善に住せしめて、障を離れしむる故に、濟ひて惡を捨てしめ、難を出でしむる

【天女の云ふ云云】註維摩經六、二八丁法華の化城喩品の文。

【二二】第三願文を釋す。

故に。又、未起の障難を護りて、生ぜざらしめ、已起の障難を救濟して免れしむ。上は始めの釋に約し竟んぬ。復三成就と名くる等は、終成に約して釋す。一は、法輪不斷成就を明す。二は、三正覺を證する成就なり。何が故に菩薩、二乘の菩提を證するや。釋するに二義有り。一は所證、二は空、生に空を攝する故に、『勝鬘經』の中に、正法を攝受するに、二乘の世出世の法を具足する如き故に。二は物の爲に現に證す。天女の云ふが如し。若し聲聞の法を以て、衆生を化せんには、我聲聞と爲る等と。又『法華』に云はく、「衆の小法を樂ふを知り、菩薩は二乘を化す」等、皆此義なり。三は、修行成就して、初發心從り乃し因滿に至る故に、如實修行と云ひ、行成じて果を得る故に、正覺成と云ふなり。第二の起願、第三の分齊は、並に前の釋に同じ、知んぬべし。下の諸願の中、此後の二段は、並に更に釋せざること、知んぬべし。

(二二)第三の願の行體の中に、四有り。一は、攝法處を明す。『經』の一切世界等の如き故に。此は是れ一切應化身の佛、彼に往きて感に應じて、道を成する處の故に、一切佛と云ふなり。二は攝法の時を明す。謂はく、彼中の佛、八相を現ずるの時、此八相も亦化佛の具と不具と有り、天王如來の、白衣成道の如きは、則ち出家無し。須扇多佛も亦出世して、衆生の化すべき無ければ、即ち涅槃に入り、化佛を留めて半劫人を度す、是れ則ち轉法輪無し。若し化體を取らば、亦八を具することを得。餘の釋迦等、多く亦之を具す。此等は並に須彌山世界に約す。若し樹形等の世界に就かば、總じて八相無し。彼未だ必ずしも兜率

【亦是れ三請轉】三度請して說法するをいふ。法華經の三請の如きこれなり。
【二三】第四願の文を釋す。
【此二に二有り】世出世の義、初に

天等に行らざるを以てなり。又此八相は『論』の中に、但五相を釋す。並に勝を捨て、劣に就くを以ての故に、須らく釋すべきのみ。餘の三は爾らざる故に、解釋せず。胎に處すれば、必ず生ずるを以ての故に、釋を待たず。出家は、俗に勝るが故に、亦釋せず。轉法は、生を益すること、亦勝るを以て、說かざるが故に、之を釋せず。生兜率を釋するに、二の問答有り。一は、上界を以て問と爲し、難處に來るを答とす。二は、他化等を以て問と爲し、兜率に生ずれば、衆生敬心するを答と爲す。餘の相を釋すること『論』に之を顯すが如し。三は、攝法の行を成ず。『經』の我於爾時等の如し。『論』に釋する中に二あり。一は、彼衆生に隨ふが爲の故に、自ら佛を供養し、他をして己を學せしむる故に、方便と云ふ。此は功德行を成じ、八相に通ず。二は、彼如來、所說有るを以ての故に、啓請攝法して法を請ず、生の爲の故に方便と云ふ。此は智慧行を成じ、唯轉法輪相に約す。此二は總じて、助菩提法と名く。四は其頓成を明すに、『論經』に一切處一時成一時轉と名く『論』に釋すらく「前後に非ざる故に、此を三時轉と名く」とは、是れ一切成佛の處に於て、同時に三轉する故に名く。亦是れ三請轉の故なり。

(二三)第四の願、內行の中に二有り。初に、正しく菩薩の所行を顯し、二には、說きて以て物を化して、心をして增長ならしむ。前の中に『論』に攝して四と爲す。一に種種とは、行義の差別なり、中に於て二有り。先に世間の行、二は、出世間の行なり。此二に二有り。若し位に約して分たば、地前を世と爲し、地上を出と爲す。若し義に隨ひて地を分たば、

地前地上に約し、後に教行證行に約す。今は後義を取る。

【論に…四と爲す】論に菩薩の行を四種とし、一に種種、二に體、三に業、四に方便とせるをいふ。

【二三】以下、第五願の文を釋す。

教行を世と名け、證行を出と名く。今は後の義に就く。初は、第六に至りて、一行の中に一切を修する故に、名けて廣と爲す。二は、第七地の中、一切行の中に一切を修する故に、大と名く。三は、第八已去念念任運にして、深く無量の佛の境に入るが故に、無量と名く。出世の者は正證の眞智、法執を離れざる故に、壞すべからず。妄念を離るるが故に、無分別なり。二に體とは、諸波羅蜜は是れ、菩薩の行體なる故に。三に業とは是れ、諸地の中に修する所の業なる故に、助道法と云ふ故に。四に方便とは、行相集成して一は一切を攝し、要ず六相に由りて方に顯示することを得。何が故に『論』の中の同相異相を、此には有相無相と名くとならば、別類に於て各總を帶ぶるを以て、有と名くれば是れ同じく、然も各互に無きを無と名くれば、是れ異る故に相違せず。二は一切菩薩の下は、前の四の行を說き、用以て人を化す。中に於て菩薩の所行は、前の種種を攝するなり。及び諸の波羅蜜は、前の體を攝するなり。本行は業及び方便を攝するなり。教化の下は、正に人を化するを以て、心をして增長を得せしむ。

（二三）第五の願の內行の中に二有り。先に所化の衆生を明し、後に化所の成益を明す。前の中『論』に攝して六と爲す。初に麤細とは、報相の差別を顯す。色の中に於て細なる者は無想にして、是れ無想天なり。第四禪に在りて、廣果天と同處なり。外道は取りて涅槃と爲し、無想定を修して、彼天に成じ、五百劫無心の報を得。佛弟子は彼天の中に生るること無し。無色の中に就きて、前の三空を非無想と名け、第四の空を非有想と名く。麤想有るに非ざ

【頂生王】布殺陀王の頂上なる皰より生ずといふ。『涅槃經』十二、『增一阿含經』八に出づ。

【毘舍佉母】（Viśākhā-mātā）單に鹿母又は鹿子母といふ、三十二卵を生むといふ。

るを以ての故に、非有想と名く。細想無しと謂ふには非ざる故に、論經に非想非非想と名くるなり。二は、生の依止とは、是れ報の所託なり。四生の差別に三門を作る。一は通局を明し、二は寬狹を顯し、三は文を釋す。初の中に化生は、五趣の中に於て二は全し。謂はく、地獄と及び天となり。餘の三には少分なり。劫初の時の如き、人畜及び鬼は、一切化生なり。餘時は通別の故に、胎は三趣に於て少分なり。謂はく、人と畜と鬼となり。餘は皆無きが故に。卵濕は二趣に於て少分なり。謂はく、人と畜とのみにして、餘には悉く無きが故に。人の中の濕生は、頂生王等の如し。卵生は毘舍佉母の肉卵を生じ、三十二子を出す如き等なり。二に寬狹とは、四生を以て五趣に望むるに、四生は寬く五趣は狹し。『雜心』に云はく「生は趣を攝すと爲んや、趣は生を攝すと爲んや」と。『論』に自ら釋して言はく「生に趣を攝し、趣に生を攝するに非ず。何とならば四生は五趣に攝せず」論に言はく「中陰は是れ化生なり、五趣に收めず」と。此四は所依處に約して、受生を依止と名く。餘の三の如く、胎に依り卵に依り濕に依る。化生の依は何ぞ、論の釋は業に依る。餘の三、惡業に依りて釋せざる。化生は業勝る、外緣に依らず。三は上界淨し、欲界は不淨なり。四は種種身とは受報別なり。謂はく、下の三途の苦、上天を樂と爲し、人及び修羅は苦樂に通ず。五は自業は是れ、受生の所依なるを以ての故に、生處と云ふなり。六は名色を以て報と爲す、自報の體の故に、四蘊を名と爲し、色蘊を色と爲し、色形の覩つべきを以て、當相に之を說く、餘の四は是れ心心法なり。冥漠にして名に非ざれば、辨ぜざ

【二四】以下、第六願の文を釋す。

【二五】二に眞實の義相云云】十玄門を顯すに用ふる、因陀羅網の喩にして、重重無盡の法界緣起を顯す一家相承の喩說なり。

る故に、說きて名と爲す。『楞伽』に云はく、「名を以て無色の四陰を宣說する故に、號けて名と爲す」と、是れ衆生を謂ふなり。二は何の義の爲の故に化すとは、三有り。一は、信じて教法に入る故に、教化成就と云ふ。二は、小果を得る故に、斷世間道と云ふ。道は是れ因の義にして、即ち惑業なり。世間は是れ報にして、即ち苦果なり。三は大菩提を得。此二乘の人に准ずるに、皆大菩提に向はざること無し。

【二四】第六の願の中に、初に所求の行の中に三有り。初は、世界の形類を明す故に。二に、世界の分齊の相、遍することを明す故に。三に、世界數多にして十方無量の故に。初の中に二あり。先に所知を擧げ、後に隨入の下は能知を求む。前の中に四有り。初に總類に約して分別するに、小千を狹と爲し、中千を中と爲し、大千を名けて廣と爲す。二に、義類分別に、初に類多くして數量無し。二に義、分別し難し。三に體は壞すべからず。四に相は動ずべからず。五に事は說くべからず。三に麤細分別す。各何等の世界の意識身に隨ふと云ふは、意識は是れ心、身色は色なり。心、麤なる故に世界も亦麤なり。其細も亦爾なり。又『法華』の中の、天人の、劫盡を見るが如しとは、是れ麤なり。我此土常に安穩とは細なり。四に依住分別す。正住とは是れ仰世界、倒住とは是れ覆世界にして、蜂巢等の如し。平坦と言ふは埠阜等無き故に。方と言ふは四方の故に、斗形の如し。圓と言ふは團圓の故に、珠形の如し。下は能知を明す。是の如きの世界に隨ひて、智を以て中に入りて明了に知る。【二五】二に眞實の義相は、帝釋の妙勝殿上に、寶珠を網と爲すこと有るが如く、

【如理智】眞理に契會する智。また根本智、無分別智、正體智、眞智、實智といふ。

【如量の境】如量智とは、根本智の後に生じ、有爲萬法を照了する俗智をいふ。

【二五】以下、第七願の文を釋す。

【淨土の七】一、同體淨。二、自在淨。三、莊嚴淨。四、受用淨。五、住處衆生淨。六、因淨。七、果淨。

【略して…故に】經には自在淨なきは、同體淨と大差なき故に省略すといふ。

【同體に二義】初

天珠明淨にして一珠の中に一切珠を現ず、一切珠も亦爾なり、互に障礙無し、世間も亦然なり、一處の中に於て、多世界有り、世界塵の中に復多界有り、是の如く重重無障無礙なり。幻の業作の如き故にとは、轉た之を喩顯す。世の幻士の、幻の業用を作すが如し。水處に於て火を見、火處に水を見、大處に小を見、小處に大を見せしむること、皆障礙無し。此れ亦是の如きの世界は、實に爾なり、故に眞實と名く。此は是れ如理智の中、如量の境界の故に、唯智能知と云ふなり。三に無量相とは、前の二相の如し、遍く十方に於て無量の差別に名く。盡十方際の故に入と名くるなり。下に能知を明す、皆現前知とは、比知を取らざるが故に願うて此智を求む。

(二五)第七の願の內、淨土の七義の中に、經の內には略して自在淨無し、以て同體と多く別ならざる故に。六の中に、初の三は當相に淨なるを明す。次の一は人に約して淨を顯し、後の二は因を擧げて果を顯す。前の中に初の一は體淨、次の一は相淨、後の一は用淨なり。體の中に同體に二義有り。一は同じく、法性を以て體と爲す。是故に鎔融相入無礙なり。二は、一は多を以て體と爲し、多は一を以て體と爲す、故に同體と名く。是故に論經に入の字無きは、即ち是を明すが故に、入と言はざるなり。問ふ、「前の帝網と何ぞ別なる。」答ふ、「前は是れ世界海緣起に約して染淨に通じ、互相に變現す。今は是れ國土海なり。理實に就きて言はば、一は本來是れ多なり、多は本來是れ一なり。亦彼此相涉する等に非ず。」二には、具德莊嚴に三有り。一には神莊嚴、謂はく、神變自在なり。或は大小相容る。或

は能く化を起して、法を宣說する故に。二には光明莊嚴、常に光明を放ち、黑闇を照除して、無明を破る故に。三は寶相莊嚴、衆寶集成して、勝德を具する故に、略し此三を具する故に、無量莊嚴と云ふ。三は受用淨、謂はく、此土を受用するに、一は斷德を成ぜしむ、煩惱永く盡くる故に、離諸垢穢と云ふ。二は行德を成ぜしむ、淨妙の行成ずる故に、具足清淨と云ふ。四は住處衆生淨なり。諸大菩薩悉く勝智を具して、共國に充滿する故に、淨と名く。五は因淨、土因に二有り。一には生因、謂はく、施戒等の因を修し、當に淨土の果を得べし、『維摩經』の說の如し。二は依因、此に亦二種あり。一は鏡智の淨識を以て、土の所依と爲す。二は後智通慧を依と爲す。下の第十地に、佛國體性三昧に入りて、淨土を現ずるが如し。今此義に依るが故に、常有等と云ふ。六は果淨、果に二種有り。一には因所生の果、二に示現の果なり。謂はく、果德自在なれば、機に臨みて示現す。今此義に依るが故に、隨衆生心等と云ふ。

(一六)第八の願の中、所求の行の内に十二句有り。一は總、次の十は別、後の一は結なり、總の中に餘乘を念せず、同心同行を釋す。謂はく、此は一切菩薩と與にせんと願ずるなり。同心は是れ見理同なり。同行を與にせんと願ずるは、是れ學行同なり。別の中に、初の五行は修行同じく、後の五は德用同じ。前の中の、初の三は自分行、後の二は勝進行、前の中の初の一は稱行、後の二は慧行なり。慧行の中の、初は正證智、後は是れ後得智なり。又此三句を釋すれば、次の如く卽ち是れ、戒定慧の三學同じきなり。初は起行同修を

は融事相入門に約し、後は全事相卽門に約す。

【二には具德云云】相淨を釋す。

【三は受用淨云云】用淨を釋す。

【四は住處云云】住處衆生淨を釋す

【五は因淨云云】因淨を釋す。

【鏡智の淨識】大圓鏡智をいふ。

【六は果淨云云】果淨を釋す。

【一六】以下、第八の願文を釋す。

【正證智】根本智をいふ。

【一七】以下、第九の頌文を釋す。
【身等の三輪】身口意の三業。

共集善と名け、情に乖異すること無きを、無怨嫉と名く。二に諸菩薩の所證の眞如と、同じく一味の故に、同一境と名く、能く智を證して、心亦異らざる故に、名けて和合と爲す。『論』に住寂と名くとは、所證同なり。等觀とは能證同なり。三には後得智を以て、諸菩薩と共に聚會して、佛法を解説し論ずる故に、常不相離と云ふ。自下は二に勝進の中に、四に利他の行なり。若し衆生の應ずるに佛身を以てして、方に化を受くべき有れば、能く、彼心に隨ひて成佛を現ずる故に、隨共等と云ふ。五に自利の行に二義有り。一には佛果を解し、他の教に由らざるが故に、自心中等と云ふ。二には、佛境を解知する菩提通慧等の法は、並に唯自心なり。心外に有るに非ず。中に於て、神力は外用なり、智力は内に照す。自下は德用を明す。六には、通の體を明す、謂はく、神通上進して退せず、所作心に稱ひて成ずるを、常得隨意神通と名く。下の四は通用を明す。『論』に通業得名と云ふなり。中に於て、前の三は如意通、後の一は法智通なり。七には一身多刹に遊ぶ、八には、多身多處に現ず。九には種種俱生身を得。十には、實智を成就し、甚深不思の法に通達す。下は菩薩の行を具足す、是れ總結なり。

(一七)第九の頌の中に、所求の行の中に二有り。先に不退輪行菩薩の行を明し、後に身口の下は、不空行菩薩の行を明す。前の中に、謂はく、身等の三輪は、是れ起行の所依の故に、名けて乘と爲し、行を成ずること必然なる故に、不退と名く。二に、不空の中に亦二あり。一には作業、二には利益なり。前の中に亦二あり。先の一句は總じて、三業の不空を明し、

【一八】以下、第十の願文を釋す。

【下は作業を明す云云】菩提作業を釋するに七業を示す。初に正覺業。

二に衆生の下は、別して不空を顯す。先に身業の所作、必定して不空なることを明す。謂はく、見る者をして法を得ざること、無からしむる故に、衆生見者等と云ふ。二に、口業の所作必定して、不空なることを明す。謂はく、口に實教を宣べ、物に眞智を生ずる故に、聞我音等と云ふ。三に意業の不空を明す。內心に德を具するを以て、物をして見んことを念ぜしめ、心喜んで法に入りて、惑を離れ障を除く。二に利益の中に二あり。一には、藥樹王の、遍く諸苦を治するが如く、獨り病を治するに非ざる故に。『論』に種種の苦を對治すと云ふ。二には、如意寶の、多く貧病の苦を治するが如く、兼ねて亦餘に通ず。經に略して此句無し、爲得如是と言ふは、總じて所求を結す、知んぬべし。

（一八）第十の願の中の、所求の行の內に、八句有り。初の句は、所成の菩提を明し、後の七は、菩提の作用を顯す。前の中に於一切世界とは、謂はく、平滿して十方處の空法界等、一切世界に遍す。亦樹形等に通じ、唯須彌界のみに非ず。此等の處に於て、現に菩提を得。下は作業を明す中に、初は正覺業を示す。謂はく、於一毛等とは、前の中に總じて、一切世界を說く。此中には別して、一一の世界を辨ずる中に、一一の毛端處に、八相成正覺を示現して等と。論經に凡夫道と名くとは、論に釋すらく、是れ閻浮提とは、且く三乘に約して、須彌山世界に就きて說く。若し一乘に依らば、則ち樹形等及び毛端等に通ず。彼に皆化すべき衆生有るを以ての故に、於一毛端乃至示大涅槃と云ふが故に。二に說實諦業、謂はく、彼化すべき衆生の心に隨ひて、神通力を以て、爲に佛身を現じ、智慧力を以て、

爲に實法を說く故に、現諸如來乃至得佛道と云ふ故に。三には證教化業、謂はく、法無我を觀ずる者は、二我を離るる故に。性淨涅槃は是れ、所顯の眞性の故に。亦此法を知り、衆生をして此法の上に於て、信解を生ぜしめんと欲する故に。又衆生をして、如來の此法を、證得することを知らしめて、言必ず信ずべき故に、知一切法如涅槃相と云ふ故に。四に種種說法業、謂はく、一音を以て異解すとは、釋に二義有り。一には實に約す。謂はく、眞に就ては一と爲し、機感を異と爲す。一の眞身、物に應じて異を現ずるが如し。二には應に就きて復二有り。一には類に約す。或は天衆の爲に、一の天音を現ずるに、能く餘類をして各別に解を得せしむ。人に對して亦爾なり。餘類は皆然る故に、經に言はく、「一音をもて說法すれば、衆生類に隨ひて各解を得」と。二には法に約す。或は衆生の爲に施の一音を說くに、亦餘人をして、戒定等を解せしむ。是の如く一切なり、故に經に云はく、一音をもつて法を說くに、衆生各各解する所に隨ふなりと。機に隨ひて異解して各益を成ずることを得。故に以一音乃至歡喜と云ふ。五には不斷佛種業、謂はく、菩薩の所行を名けて佛種と爲す。佛常に起ることを得るを、名けて不斷と爲すが故に、示大涅槃而不斷菩薩所行と云ふ故に。六に法輪復住業。謂はく、大聖の滅後に、法をして久しく住せしむ。佛智地の理行果法の修多羅等を示し、其敎法を顯し、軌則失せず、住持すること本の如きを明すを、名けて復住と爲す故に、示衆生乃至假僞と云ふ。七に自在業、以大智慧と言ふは、法智通なり。神通自在と言ふは、如意通なり。出生變化と言ふは、是れ幻通

なり。外事を轉變するを以ての故に。充滿法界と言ふは、通じて上の三、皆法界に滿つることを結するなり。又、法智は理を照すを以て、世間に住せず。餘の二は事に隨ひて涅槃に住せず。總じて三を合取して、名けて無住と爲す。上來は別して十願を釋し竟んぬ。第三に眷屬を攝することを明す。此十願の中、一一に各百千萬阿僧祇の諸大願を攝する故に、諸佛子乃至阿僧祇大願と云ふなり。第四に願の無盡を顯すに三有り。初に、十法の無盡を擧げ、二に、願を以て反りて、要ず彼若し盡くること有らば、我が願も乃し盡きんと。三は、願を以て彼無盡に類同するが故に、願も亦盡くること無し。此十法の中に、略して三門を作る。一は、事に隨ひて分別す。此十法に隨ひて、一一に皆無盡なり。之に對して以て願を顯すこと、文に自ら顯なるが如し。二に廣略分別なり。謂はく、前の九は廣散し、後の一は略攝す。謂はく、衆生と世界と空界と心所緣と、此四は是れ世間轉なり。法界と涅槃と起智と、此三は是れ法轉なり。佛の出世と及び佛智慧と、此二は是れ智轉なり。又釋すらく、心所緣は亦是れ智の攝なり。是れ染智を以ての故に、是故に論に、略說三種三轉示現各三と云ふ。是故に第十の句は、略して前の九を攝す。三は體論總別分別なり。謂はく、初の句は是れ總なり。衆生を化せんが爲を以ての故に、衆生を總と爲す。餘の九事を攝し、衆生の中に在くこと、意亦甚だ玄なり。一乘緣起無礙なるに依るべし、准思して見つべし。別の中に於て、一は衆生、何の處に住す。謂はく、世界の故に。二は、世界は何に依る、謂はく、空界の故に。三は何の法を說きて化する、謂はく、法界の故に。

【一九】以下、行の校量を明す、文を釋す。經の「佛子菩薩決定して」等の下。

四は、隨ひて所化の衆生、何の處に安置す、涅槃を得しむるが故に。五は亦大菩提を得しむるが故に、佛出世と云ふ。佛出世とは是れ、世間の成菩提を遠離するが故に、佛の世間に應ずるを、名けて出と爲すと謂はんとには非ず。論に說きて、化所置の處と名くるを以ての故に。六は何の方便を以て巧に化す。【二】謂はく、佛智慧の故に。七は、云何が物の心器に隨ふ。謂はく、心所緣の故に。八は、復何の法を以て化する。謂はく、佛智の所入の境法は、卽ち眞性の理なり、此を起智と爲すことは、智此に依りて起るが故に。今此論主は、餘の前の二門の相顯にして文の如くなれば、別釋を待たず。此は總別相收する圓融の義は、義隱れて文に在り、故に今は別して、願の校量を顯すと竟んぬ。

【一九】第二に、行の校量の中に、二有り。先に大願心に熏じて、心をして調暢ならしめ、能く行を起すに堪ふることを明す。二に、如是則成信者の下は、行を攝して人を成じ、正しく所修を顯す。前の中に二あり。初に決定發願とは、前の大願を牒し、以用て心に熏ず。二に則得の下は、正しく大願心に熏じて、益を成ずることを顯す。十心の中に、初の句は總なり。餘の九は別なり。總の中に、利は是れ增益の義、安は是れ順理の義、又障の動ずること能はざるは、是れ安なり、行をして增長せしむるは、是れ利なり。別の中に、一に柔軟とは、性善の故に。二に調順とは、離惡の故に。三に寂靜とは、不亂の故に。四に下放逸とは、不失念の故に。五に寂滅とは、煩惱を起さざる故に。六に直心とは、正しく眞理に向ふ故に。七に和潤とは、衆生を救護する故に。八に不恚とは、衆生を捨てざる

【三】以下、正しく所修を顯すに七門を以て分別す。初に名を顯す。

【此は信等云云】本經の義相に就かば本即ち十信、三賢地上の三あるも、若し合して言はば、本經の三處共に是れ一乘の見聞の行たり。此を三乘位に置かば居然位別なり。

故に。九に不濁とは、餘心を雜へざる故に。

（三）自下は正しく所成の行相を顯す。此十行に於て、略して七門を作る。一は名を顯し、二は體を辨じ、三は成處を明し、四は心行に約して相を分別し、五は二利に約して分別し、六は次第を明し、七は文を釋す。初に名を顯すに、一は信佛の因果、淨心壞せず。二は慈、生に業を與ふ。三は悲能く苦を救ふ。四は隱して珍財を捨す。五は疲倦すること無き者は、策懃して法を求む。六は諸經論の義を知る者は、慧教法に達す。七は善く世法を解する者は、俗智宜を知る。八は慚愧の者は、惡を離れんじ善を樂む。九は堪受の者は、堅固にして退かず、受法の器に堪ふ。十は佛を供し、說の如く行ずる者は、佛に順じて供を與し、法に順じて行を作す。二に體性とは、二有り。一は所依に約して、總じて後得智を以て、性と爲す。此に依りて起すを以ての故に。二は別の自性を明すれば、初に信は清淨を性と爲し、慈悲は無瞋の善根、及び不害を以て性と爲す。捨は無貪相應の思を以て性と爲し、疲倦せず及び堪受するは、俱に精進を以て性と爲す。經論を知り世法を解するは、俱に慧を以て性と爲し、慚愧は當法を性と爲す。供養佛と說の如く行ずると、通じて論ぜば、三業の善の表無表を性と爲す。是の故に通論して、十法を性と爲すこと有り。一は信、二は思、三は無貪、四は無瞋、五は不害、六は精進、七は慧、八は慚、九は愧、十は色なり。三に處を明すとは、此は信等の行は大いに分ちて三位に之を作す。初は十信位の中に在り、即ち初に修學す。信進念慧等の如き是なり。二は三賢の位に在りて之を修す。漸熟すること、

【地論】同十九左の文。

【地論に云云】以下、十地論文の意を以て述す。

【後の三云云】以下、通じて二利に約して述す。

【六は次第】十行の生起次第なり。

十藏品の信藏等の如き、亦多くは此と同じ。三は初地已上に至りて之を修す。純熟して勝用に堪任し、以て將に諸地を淨治せんとす。今此所説は、是れ後の門なり。故に『地論』に云はく、「此信等の十行は、盡く是れ地の淨法を彰す」と。四は心行に約して分別すとは、通じて論ぜば、此十倶に心を表す、是心は是行に非ざること無し。別に分ちて辨ずれば、前の三は是れ行の方便心、後の七は是れ、造緣正行の故に。『地論』に云はく、「此十種の行は、二種の勝成就を顯す。一は深心成就、謂はく、信慈悲等なり。二は修行成就」と、謂はく、所餘の七行、此と『地持』と相似たり。彼に云はく、「前の三は心淨と名け、後の七は行方便淨と名く」と。五は二利に約して分別すとは、前の七は、別して二利を顯し、後の三は通じて二利に約す。前の中の信は是れ自利なり。『地論』に云はく、中に於て自利の行に依らば、謂はく、信は能く菩薩の行及び諸佛の法を信じ、求むれば必ず、能く得るが故に。利他の行に依らば、謂ゆる慈悲安隱は悲を釋し、與樂は慈を釋し、施は財を以て他を攝するが故に。疲倦せずとは、自ら他の爲に、攝法行を起す。後の二は法を以て、他行を攝する故に。後の三は前の七を攝護す。初の二は護成じ、後の一は攝を成ず。慚愧に由るが故に、護りて惡を離れしめ、能く信等をして、無著行を成せしむ。堅固力に由りて、護りて善に住せしめ、能く信等をして成ぜしめ、動ずべからず。如説の行に由りて、後の信等を起す故に、攝と名け、離垢清淨を依止行と名く。佛を供養するに由りて、亦起信等の善根を攝する故に。六は次第とは、初は自ら既に、成佛の因果を證信す。二は、

【三】以下、正しく文を釋す。初に別して十行を釋するに、十段ある中、今は合して四とす。初に信行。

衆生を傷愍し、苦に處して流轉するが故に、大悲を起す。三は、誓ひて當に彼を救ひ、具に佛果の樂を得せしむべし、故に大悲を起す。四は、他を救はんと欲する爲に、自ら顧戀無き故に、一切悉く施す。五は、他を益する爲の故に、他の爲に彼世出世の法を求めて、疲倦有ること無し。六は、求めて倦むこと無きに由りて、經書を諳解す。七は、善く經論を知るが故に、衆生の上中下類に於て、善能く應作不應作等を籌量するが故に、善を起して世法を解す。八は、時に應じて、量を分つ等の正行に依る故に、慚愧を起す。九は、前の所作に於て、勤めて退轉すること無きが故に、堪受力を起す。十は、堪受力を以て、能く佛を供養し、說の如く行ずるなり。

(三)第七に、文を釋する中に二あり。先に別して十行を釋し、後に佛子是菩薩の下は、共十名を結す。前の中に、十行を卽ち十段と爲す。初の信の中に就きて二あり。初の一句は、德成の人を攝す。故に則成信者と云ふ、餘の句は其信德を顯す。中に於て、初の一句は總、次の諸句は別なり。後に要を擧ぐる下の一句は結なり。初の總の中に、樂以信分別功德と言ふは、佛果の功德に於て、別別に深く信ず。二は、佛の本所行の因道、能く佛果に至る。下の別の中に、初の二句は上の信の因行を廣す。『論』に云はく、「云何が菩薩行」とは、信は六度等の行を行じ、能く增することを得、佛果を成ずるが故に。「二に云何が次第成」とは、十地に入りて、漸く佛果の殊勝功德を得るを信ず。下は所信の果德を明す。『論』に云はく、「此菩提本行入」とは、前の菩薩の本行入に簡ばんが爲の故に、菩提本行入と云ふな

【第二に云云】二に慈悲二心を明す。

【三觀】一に最上第一義の樂を遠離す。二に諸苦を具足す。三に彼二に於て顚倒す。今は意を略述す。

り。前は則ち因を標し果に別す、是は果を標し因に別す。又前は是れ能入を入と名け、此は是れ所入を入と名く。此所入の果の中に『論』に攝して六種の勝と爲す。此境の勝るに由りて、信心をして亦勝れしむるが故に、是故信勝と云ふなり。六の中に、前の五は別して顯し、後の一は總じて結す。良に以れば、此句は是れ末、後は因を結す。果を結する内に、其結果を擧げて、此六に入れて攝する故なり。五の中に、前の四は智德、後の一は斷德なり。前の中に、初の一に寄對して、勝を顯す。謂はく、十力は魔怨を降し、無畏は外道を伏し、不共は二乘に過ぐるが故に、此三句合して一と爲して、皆悉く魔等の爲に、壞せられざるが故に、不可壞と云ふ。下の三は、當相に德を辨ず。一は眞如の難測を信ずる故に、信不思と云ふなり。二は、通慧の深廣を信ずる故に、信神力等と云ふ。三は、種智多門なるを信ずる故に、信如來等と云ふ。下の一は、佛の斷德を信ずるが中に、斷惑の因緣に從ひて、此涅槃の果德を、得ることを信ず、故に信從因等と云ふ。下の一句は總結す、別說すること盡し難きを以ての故に、擧要言と云ふなり。信菩薩普行は、是れ信因を結するなり。諸佛等は、信果を結するなり。威力は是れ加なり、說を等取するなり。第二に慈悲二心を明す。中に於て二有り。先に三觀を明し、二心の方便と爲す。後に即ち大悲を生ずる下は、正しく所起の二心の行相を顯す。前の中に、三觀を即ち三段と爲す。初に眞樂は本有なれども、迷隔を離と名く、慈は此に由りて生ず。二に妄苦は本虛なれども、情取を具と名け、悲は此に由りて起る。三は此得失に於て復了知せざるを、彼二倒の衆生

【初の中に就き云云】以下、別釋するに、初に三觀を明す。初に第一觀なり。

【前の所信に乘ず】經の一、諸佛の正法は是の如く甚深と言ふ意。

【無作】論に無願に作る。

【分別とは云云】分別、相、取捨の三を解脱の三障とす。

と名く。既に爾らば愍むべきこと之れ甚し、雙べて慈悲を結す。又釋すらく、此三に各〻二義有り。一は但他の樂無きを、已に可愍と爲す。況んや復此樂は、本より自ら之れ有れども、反りて遠離す。二は但樂を離れしむ已に是れ愍むべし、況んや更に苦有るをや。設ひ苦は是れ實なるも、亦甚だ愍むべし。況んや本より虛妄にして、枉げて之を受くるをや。三に彼二倒とは、若し樂無くして苦有りと雖も、自ら能覺の知力有れば、苦に反して樂を得るの期有るべし、無明倒に由る故に、體に本有の妙樂を、悕求するの方を知らず。復謗りて都て此事無しと云ふ。虛妄に苦を容れ、厭離の方を知らず、乃し甘んじて妄想輪廻を受く。此に由りて、菩薩は深重の慈悲を起す。

初の中に就きて、是念を作す等とは、前の所信に乘ずるが故に、今法の甚深を念じ、物の悟らざるを傷むが故に、悲愍を起すなり。十の中に、初の一は總なり。謂はく、情を超ゆるを深と曰ひ、深の極を甚と名く。別の中に、一は妄に實有と計する、所取の相を離るる故に、離相と云ふ。此は遠離に約す。二は眞理の體寂なるを、名けて法定と爲し、恆沙の德義寂なるを義定と名く、故に寂滅と云ふ。三は、二我無き故に空と云ふ。四は、根境等無き故に、無相と云ふ。五は、取捨の願求を離るる故に、無作と云ふ。若し治障に約せば、『論』の中に、分別とは卽ち是れ、妄想能取の心なり。相とは卽ち是れ名相所取の相なり。取捨とは、卽ち是れ妄心、妄境に於て處に順じて、願ひて違處に取り、捨を願す、此三に對して、次の如く三句は應に知るべし。又『佛性論』に、此三脫門は、皮肉心の三障

【第二に諸苦云云】以下、三觀の第二具足諸苦觀を明す。經の「而も諸の凡夫の心」等の下。

【釋するに二義】一は法相差別に約し、次は緣起甚深に約して明す。

【初は是れ無明…障ふ】一法界の理に達せざるが故に、法體を迷覆し、流轉するに至る。

【慢愛は癡に由る】枝末の我慢我愛は愚癡の無明を根本として起るをいふ。

【下の二は追求云】以下、諂曲の過を釋す。

を治すと、知んぬべし。又彼論の中に、三無性觀に配す、次第應に知んぬべし。六は性淨不雜の故に、無染と云ふ。七は、生德無窮の故に無量と云ふ。八は、俱に自他を益するが故に、廣大と云ふ。九は、多劫に方に佛果を證すること、堅固なるが故に、難壞と云ふ。

第二に、諸苦を具足する中に、三有り。初は十二緣相を顯す。二に如是の下は、苦聚を結成す。三に是中の下は、緣體空を明し、有は是れ倒なることを彰す。『論』の中に、前の初段の內に於て、前の三支を合して、一分と爲す。二は於三界の下は、後の九支及び後の二段を辨じ、合せて一分と爲す故に、二段と爲すなり。前の中に就きて、亦二あり。初の一句は總、後の九句は別なり。總の中に凡情は理に迷ひ、二執に沒する故に、心隨邪見と云ふ。別の中に、惑業は皆邪見と名く。釋するに二義有り。一は、是れ彼品の故に、惡趣業愚等の如し。二は緣起六相の、相卽無礙なるが如し。上下の文の中に、此釋に例同す。九の中に初の五は、無明支に屬し、次の三は是れ行支、後の一は是れ識支なり。前の中に初の三は、法義妄計に依り、後の二は、追求心に於て過ぐるが故に。前の中に初は是れ、無明住地にして、法體を迷覆して、其慧眼を障ふ。『論』に蔽意と名く、故に無明癡等と云ふ。次の二は、慢愛は癡に由りて、因果の義を迷覆し、妄に內外を計す。初の一は、內に於て我を執し、自ら高ぶり物を陵ぐを、名けて憍慢と爲し、我を建つること幢の如く、恆起するを常と名く、故に常立等と云ふ。後の一は、外に於て貪取し、愛網自ら纏ふが故に、墮在等と云ふ。又上の三句は、初の一は癡使、二は慢使、三は愛使なり。下の二は追求の

【下の三は云云】以下、業支の文を釋す。

【彼能く…持して】現行の第八識種子を持するをいふ。

【四流】欲流とは

時の過にして、一は可得の處に於て、詐きて外相を善くし、諂曲を生ずるの過、二は不可得の處に於て、情妄に內に於て嫉妬を生ずるの過なり。又他の內報を妬み、他の外財を嫉み、此に由りて生生卑賤鄙陋なり。是れ妬心を因と爲し、資生足らざるは、嫉心を因と爲す。此は經の中の、而作後身生處因緣を釋するなり。此經に慳嫉と名くるは、已得に於ては慳を生じ、可得には諂を生じて、嫉を生ずることを得ず。又自ら財を慳むに由るが故に、資生足らず。他身を嫉むに由るが故に、身形賤陋なり。下の三は業支を明す。一は總じて、三毒の造業を明し、後の二は、別して業相を顯す。初の中に、樂受に於て貪を生じ、苦受に瞋を生じ、捨受に癡を生ず。捨は前の二に翻ずるが故に、彼顚倒非迷と云ふ。前の二は名けて顚倒と爲す、此三毒に由りて重業を集起す。下は別の中に、初の句は內心の思業、後の句は身語業を動ず。前の中に、煩惱は風の如く、思心は火の如し、煩惱心を動かすこと、風の火を吹くが如し。此は思の中の始なり。常に熾然に之を思はしむるは終なり。『論』に云はく、「怨恨の時に於て互相に追念す」とは、嫉恨吹心を釋するなり。欲起報惡業とは、熾然を釋するなり。二に起業を明すとは、思より身語業を發動するなり。顚倒は是れ煩惱なり。煩惱は業を起し、業は還りて彼顚倒と相應す。謂はく、惡を作る時迭相に害を加ふとは、殺業に望めて說く。第九の一種は識支を明す。識支は亦是れ所引、亦是れ能引なるを以て、今能引を取る。彼能く惑業の種子を持して、四流をして斷ぜず、諸の善業を染して、悉く有流を成ぜしむるを以てなり。四流とは謂はく、欲界の中の一切の煩

見と無明を除き、欲界の一切の諸惑有流とは上二界の一切の見と無明を除き、諸惑、無明流とは三界の無明見流とは三界の見惑、有情此四の爲に漂流して息まず

【第二段…知るべし】後の九支を辨ず。經の「三界地に於て」の下。
【三相】論主は自相、同相、顛倒相に分ち一往は名色の芽生ずるより有までを自相、老病死等を同相、我我所を執ずるこれ顛倒相なりとす。
【二に隨義に約す】これは正しく經論の正意を明す。
【芽】芽に通ず。
【問…云云】此は初は自相現種問答後は三相同異問答

惱なり。見及び無明を除きて、名けて欲流と爲し、色無色界の一切の煩惱、見及び無明を除きて、有流と名く。三界の無明を無明流と名け、三界の見を見流と名く。流とは流注不斷の義なり。心意識の名に通有り別有り。別して言はば、本識の集起を心と名け、末那の審思を意と爲し、餘の六は了別を識と爲す、通は則ち倶に有ること、知んぬべし。起種子と言ふは、二義有り。一は、流に隨ひて業を造り、本識に熏在するを、彼種を起すと名く。二は、無明行能く識の中の、五果の種子を引くに由りて、業に隨ひて生ぜしむるを、種子を起すと名く。今後の義を取るが故に起と云ふなり。

第二段於三界地の下は、後の九支を辨ず。中に於て論主分ちて三相と爲す。一は自相等とは、釋するに二門有り。一は分位に約し、二は隨義に約す。分位とは、自相は、謂はく、現在の因緣の體狀を明すが故に。同相は謂はく、未來の因緣、現在に同じきが故に。理實には現在も亦生老等有り、未來にも亦識名色等有り、今分位に約して相を分つが故に、二相を立つ。三に顛倒相とは、緣の體は實容を顯し、執有は是れ倒なりと繫す。二は隨義に約すとは、一は因に從ひて生ずる微細の行相に約せば、是れ緣起の自相なり。二は果相の顯彰なるに約せば、緣起の過患遍く果位に通ず、故に同相と云ふ。猶し色法の、礙を自相と爲し、苦無常等を共相と爲すが如し。共は猶し同のごとし。此も亦是の如く名色の芽を生ずるに從り、即ち生の義有り。次第に乃至彼老死有り。過患同じき故に。三は緣は實を無我、妄取を倒と爲す。問ふ、「同相の中に、二支は一向に是れ果なり、一向に現行なり。

蓋し此は暗に新釋慈恩等の説に對抗す。
【前の四】名色、六入、觸、受。
【後の三】愛取有は既に惑業を生ずる種子、復何ぞ所生の果の攝なるといふ。
【此七支の中云云】經文の和合の言を以て、論の共生不離の義に合す。論文に報相因相共に現生果位にあり。
【通じて三義】初二は唯識八の所説集論は異説、次は護法説、識名色を種子とす。

【三に現行云云】唯識三の意。現行を識支とす、今家の取る所たり。
【是故に此中云云】因相に就いて明す
【理實には此中云云】果相を明す。

自相の七支を現果とや爲ん、因種とや爲ん。設し爾らば何の失ぞ。俱に過有るが故に。若し因種を取らば則ち界地生牙と言ふべからず。若し現果を取らば、則ち後前の四は、生等に異らず。後の三は復、所生の果の攝に非ず。答ふ、此等は並に是れ、現生の果の位に、却りて因の名を談じ、以て自相を顯す。自相の七支の内に就きて、此七支の中に和合とは、是れ『論』の中の共生の義にして、亦是れ不離の義なり。『論』に分ちて三と爲す。「一には報相、名色、阿梨耶識と共に生ず」とは、謂はく、名色支の中に有の義は、通じて一切の名言種子を攝す。阿梨耶は即ち識支にして、通じて三義有り。一は『雜集論』の第四に依るに、業種を以て識支と爲すが故に、能引の識種に屬して、名支の攝に入る。是故に此文の前の三支は、一處に稱すとは、俱に是れ能引なるを以ての故に、四流等の、彼業種、及び五果の種を潤すが爲に、轉じて有と爲すが故に、其をして果を生ぜしむ。是故に前に、心意識の種子を起すと言ふ。彼種を起すに由りて、三界の地をして、苦報の牙を生ぜしむ。二は、本識の種を識支と爲すを以ての故に。『唯識』の第八に云はく、「此中の識の種は、謂はく、本識の因なり。是故に此中の識種、及び名色等の種を前と爲す。惑業引潤力の故に、此種子を起して、苦果を生ぜしむ。三に現行の第八は亦是れ識支なり。『唯識』の第三に經を引きて、彼第八は是れ識支なることを證するが故に。是故に此中の因相を、名色と云ふ。本識を離れざるが故に。謂はく、此は識と共に生ずる所、名色、生じ已りて、現行の第八に依りて、彼爲に執持せらるるが故に、因相と名く。理實には、此中の識等の五種、前

【問ふ此三相云云】三相同異の問。

【彼中は云云】別して顯すに、初に攝論を述べ、正しく種子重變の法門に就いて釋す。

【今此は云云】以下、當論を釋する、次に初に初教、終教に約す。

【能依】名色等の七をいひ、本識を所依とす。

【亦本識轉じ云云】名色より六入樂と成るはこれ順轉今は逆轉を示す。

【若し終教云云】眞妄和合するを報妄染、眞に依るを同、其染、眞に異ざる故に果といふ眞妄緣起、究竟するに如來藏とする

の熏發に由りて、同時にして生ず。但當來の現起分位に、次第有るに依るが故に說きて前後と爲す。是故に名けて、彼果次第相と爲すなり。愛取有の三は、所生に非ずと雖も、然も正しく生ずる時、具に此有るが故に。『唯識論』に生引同時と說くは、是れ此義なり。問ふ「此三相は『攝論』の中の本識の三相と何の別ぞ。謂はく、彼に云はく「一は自相、謂はく、本識の自體なり。二は因相、謂はく、種子識なり。三は果相、謂はく、異熟識なり」と。」答ふ「此中の三相は、彼と同じからず。彼中は一の本識の、種より生ずる邊を、名けて果と爲し、能く種を持する邊を、說きて因と爲し、此二無二なるを自相と名く。今此は、一は本識と能依と和合するを、名けて報相と爲すことを明す。二は能依の無體を顯す。所依に依るが故に、此識を說きて名けて、因相と爲す。三は能依の相盡きて、唯所依のみ轉ず。彼位に轉入するを、名けて果相と爲す。亦本識轉じて、此果と爲るを以て、是故に漸略して餘相は皆盡き、唯識のみ有ること有り。此上は始教に約す。若し終教に約せば、即ち此本識は是れ如來藏なり。初には則ち染と和合し、次は則ち染法は眞に依り、後は乃ち染は眞に異らざる故に。唯眞のみ轉ず。二は如是因緣の下は、苦聚を結するなり。是中無我の下は、顚倒の相を顯す。並に論釋の如く、知んぬべし。第三に凡夫可愍の下は、彼二の顚倒を明す。謂はく、樂を失ひて知らず、苦を得て覺らず。第二に菩薩於此の下は、正しく悲愍を起す。先に苦を見て悲を生じ、後に最上の樂を、得しむるが故に慈を生ず。此二は皆後智と倶なるが故に、皆智慧と名くるなり。第四に施行の中に三あり。初に總、次

は論の正意なり。【二は如是因云云】苦樂の文を結す。【第三に菩薩…なり】正しく慈悲を起す。【第四に施行…知んぬべし】三に施行を釋す。【第五に云云】四に無疲等の五行を釋す。

に別、後は結なり。初の總の中に、句別に五有り。一は前の慈悲を牒し、二は深心、地に住し、三は物に於て惜まず。四は佛の妙智を重んじ、五は盡く一切を捨て、彼智を求むるが爲の故に。『論』に云はく、「佛の無上大妙智を求むる故に」と。二に金の下は別して辨ず、九句あり。前の八は外財、後の一は内報なり。外の中に金等は是れ貯積、餘は是れ所用なり。此二の中に内報を攝せず、九に通じて二喜と爲す。一は金等攝益、物をして喜を生ぜしめ、餘の八は身を利するを利益喜と名け、亦内報を攝す。一は嚴飾、二は代步、三は代苦、四は自在、五は戲樂、六は眷屬、七は堅著とは、物未だ必ずしも上ならず。但己が情に愜ふを、所愛著と名く。八は意に稱ふ、並に文の如く知んぬべし。第五に、無疲倦行の中に三あり。初は前を牒して後を起す。二に懃求の下は、正しく不倦の行を顯す。謂はく、前は財施を用て之を攝して未だ具にせず。更に法を求むるが爲に、轉じて大益を成ず。世間の勝事も亦生を益するに堪ふ、是故に世事も亦是れ所求なり。三に是故の下は、行相を結成す。第六に經書を知る行の中に、略して前を牒すること無し。正顯と結と知んぬべし。第七に世智の中に、初は前を牒し、二に善能の下は、正しく行相を顯すが中に、『論』に云はく、隨自己力とは、己が智力を量るなり。隨彼堪受とは、衆生の聞くに堪ふるを量るなり。自に於て他に於て、宜く有らば作すべく、宜く無くんば作さず。如論中說とは『瑜伽』の菩薩地菩提分品に、具に顯すが如し。此に上中下衆生と言ふは、謂はく、勝中劣の衆生なり。其所應に隨ひ、其所宜に隨ひ、利益するが故に。三は是故の下は結なり。

【二六】上來は別して十六其十名を結す

【三】第三に果の校量を明す文を釋す。

第八の慚愧の中に、初は前を牒し後を起す。二は則知時の下は、正しく行相を顯す。謂はく、世智を得と雖も、能く利益衆生を爲す。然るに或は刹那の時、或は晝夜の時、或は所作成就の時に於て、毎に自ら斟量し、自心をして世法に隨逐せしめず。常に慚愧を生じて、自行を失はざる故に、習自他利道と云ふなり。第九に堪受の中一論に堅固力と名くるは、謂はく、是れ精進して、上の八行に於て、遍く能く策進するが故に、如是功德と云ふ、即ち信等なり。然るに精勤に二有り。一は自分成、更に退捨無し。二に勝進分の中に、修息まずして堅なり。心に此を辨ずるを、堪受力と名く。第十に供養修行の中に、利供は是れ財なり、行供は是れ法なり。即ち上の二事は知んぬべし。

上來は別して十行を釋し竟んぬ。下は位を結し名を顯すが中に、初は位を結す。此は是れ當地離障の、所顯の地の淨法なるが故に、起如是淨地法と云ふ。前の安住の中にも、亦淨地法と名くるは、彼は是れ能治の淨行、此は是れ障淨の處なり。二に名を顯すこと知んぬべし。行の校量竟んぬ。

(三)第三に果校量の中に、四果の義は略して十門を作る。一は釋名、二は體性、三は屬田、四は攝果、五は分齊、六は通局、七は同異、八は行相、九は次第、十は文を釋す。初に名とは、調柔に二義有り。一は能調に約す。謂はく、供養攝化及び廻向等、能く信等を練るを、名けて調柔と曰ふ。地滿足するが故に、之を稱して果と爲す。此則ち調柔の果の依主釋なり。二は所調に約す。謂はく、信等の十行は、供養等の爲に調練せらるる故に、離垢

【二は欲勤慧の三法を云云】彼解智を開きて其意を達す、謂ゆる聞思慧智なり。

【三に屬因云云】以下、二科は、今師の加ふる所なり

清淨ならしむ、故に調柔と名く。調柔即果の持業釋なり。二に發趣果とは、謂はく、亦二義あり。一は前地を發して後地に趣向し、行相差別するを、名けて發趣と爲し、地滿し明解するを、之を名けて果と爲す。此は境に從へて名と爲す。二は此地の滿處に在りて、正慧解を發し、求趣して後後の地の中の、所有の義相を解知するを、名けて發趣と爲す。發趣慧解は、即ち是れ果の故に。三に攝報果とは、亦二義あり。一は王位の身、因に酬ゆるを報と名け、此地に從ひて、勝福の所生の故に、名けて攝と爲す。此は則ち因力の果相を名と爲す。二は勝生の身は業感なるを報と名け、此地の收に屬する故に、名けて攝と爲す、攝報即果の故に以て名と爲す。四に願智果とは亦二義あり。一に內證の願成じ、通慧の外用體用、合して擧ぐるが故に、願智と名く。此は地滿に在るが故に、稱して果と爲す。二は、願力を以て智を助け、業用をして無礙ならしむる故に、以て名と爲す。二は體性といは、初に果は、信悲願相應の智を以て性と爲す。信は佛を興し、悲は衆生を化し、迴向願求するを以てなり。謂はく、初地の後得は、此三行と相應して、後障重を斷ずるを、調柔と名くるが故に。二は、欲勤慧の三法を以て性と爲す。謂はく、勝進道の中に、師を尋ねて法を求め、勤めて懈倦無く、正慧をもて明解するを、發趣と名くるが故に。三は、報は五蘊を以て性と爲す、四は、名の如く願智を以て、性と爲す。又初は是れ行なり、二は是れ解なり、三は是れ報體なり。四は是れ業用なり。三に、屬因とは二有り。一は別、二は通なり。別して論ぜば、調柔は是れ前の安住地分、及び行校量家の果なり。二は、

【等流果】等同流類の義にして、因果の性同じきをいふ。
【離繫果】涅槃をいふ、これ智慧に由りて煩惱の繫縛を離れたる處なる故なり。
【異熟果】善惡の二業より生ずる苦樂の果報をいふ。これ性は無記なればなり。
【事用果】士用果ともいふ。これ總て造作せる力用によりて得る果報、即ち行力より道果を得る如きをいふ。
【增上果】一有爲

發趣は是れ、前の釋名分家の果なり。彼當得を念ずる中に、諸地等を解するを以て、此處に顯るるが故に。三は攝報は是れ、前の初住地家の果なり。此王身は是れ、依何身を以ての果なり。此中の、常に佛を念ずることを離れず等は、是れ爲何義の果なり。此中に、一切衆生に於て、首と爲り勝と爲り等は、是れ以何因の果なり。此中の能く百世界等を動かすは、是れ有何相の果なり。四に願智は是れ前の願校量家の果なり。二は通じて論ぜば、四果は遍く、此地に屬すること、知んぬべし。四は攝果とは、此四の中、幾か是れ等流果及び離繫果なる。謂はく、初の二なり。幾か是れ異熟果、及び事用果なる。謂はく、第三なり。幾か唯事用の果なる。謂はく、第四なり。幾か增上果を作る。謂はく、一切なり。五に分齊とは、初の二は是れ、其行修方便にして、後の二は其行報純熟なるを明す、前の二は唯地滿の處に在り、後の二は當地の始終を該ぬ。謂はく、初住地より乃至、地滿の所受の王身を、名けて攝報と爲し、所有の業用を、說きて願智と爲す。六に通局とは、發趣の一種は、文は初地に局り、義は十地に通ず、其餘の三果は、義は初地に局り、文は十地に通ず。何を以てか發趣の義、通ずることを知ることを得る。釋すらく、後の地地の行は、既に漸く增し、解亦明かなるを以ての故に。若し爾らば解行は、何が故に齊からざる。釋すらく、解は懸に解すべく、行は懸に修すること無き故に、類せざるなり。等是懸解は何が故に唯初地に在りて釋する。是れ初首なるを以ての故に。又是れ見道、懸に見るべきが故に。三果の文通ず、何が故に義は局るや。釋すらく、地地に皆有るを以て、

法を餘の一切の有爲法に望めていふ。餘の一切法は之に力を與へ、又は障へざる、みな生は果に力あるをいふ。

【七に同異】前には通門に約し、後には別門に約して釋す。又前は等の下、

是故に文通ず。各各當地に屬す、是故に義は局る。七に同異とは、前の三果は諸地に異有り、願智の一果は、諸地齊同なり。爾る所以は、良に諸地の相、別に分ち難きを以ての故に、前の三を以て其優劣を顯し、實德須らく論ずべきが故に、願智を明して、地の平等を彰す。又前は三乘に約して、地の差別を顯し、後は一乘に約して、地の齊等を明す。謂はく、一地卽一切地、一切地卽一地なるを以て、是れ此義なり。八は行相とは、通じて四果を論ずるに、各二利に通ず。別して其相を顯さば、發趣は自利にして、餘の三は二を具す。九に次第とは、何が故に先に於て、此調柔を說く、前に信等の十行を說くを以て、今此に轉じて、更に練りて精妙ならしむ。義便なれば先に彰す。既に當地の行熟し、必ず後地に趣けば次に發趣を明す。問ふ、「若し爾らば何が故に「瑜伽」の住品に、先に發趣を明し、後に調柔を說くや。」答ふ、「此は是れ本經にして、彼論に此を引くは、計するに應に別ならざるべし。然るに論主は之を會して、別の義の意義に隨ふ。意云何、後論の意は、當地の修行を說く。信等の滿は則ち後の諸地の事を推求す。是故に先に發趣を明し、然して後に方に當地の練行を說く、故に後に調柔を辨ず。此は說時に約して、以て次第を明す。今此本經の中は、行の時に約して說く。是れ先は前行を調し、後は上進を求む。亦法は實に說くに隨いて皆得つべし。三は前の二行、解細の故に先に說く、攝報は是れ麁なり、是故に後に顯す。若し爾らば願智は麁に非ず、何ぞ乃し最後に釋する。前の三は俱に是れ、差別の果なるが故に、同じく先に在りて論ず。願智は是れ其無差別の果なり、是故に後に

【二三】正しく文を釋するに四、初に諸行の果。

【三の供】一、恭敬供養。二、尊重供養。三、奉施供養。

說く。前の中に行は細、解は次、報事は最も麤なり、以て先後と爲すなり。

（二三）十に文を釋せば、文中に四果を卽ち四段と爲す。初の中の三は、謂はく、法喩合なり。法の中の四、初に見佛は是れ練行の緣、二に心大の下は、所練の行體を明し、三に多以の下は、別地の行相を顯し、四に是菩薩隨所の下は、所練の淨を明す。初の中に、此は少見に名け『論』は多見に名く、並に是れ總言なり。是れ數に非ず。數法は長引の聲に讀み、其義相似たり。勝通力を以て他方に飛往し、佛の色身を見、及び正法を聞く、卽ち他受用身なり。又內の正願を以て一處を動ぜず、法身遍滿の義等を見る。又『瑜伽』の住品に、正しく願いて受用土の中に生ずるを得、常に佛を見ると。『地論』の通力願力は、卽ち是れ『瑜伽』の二因緣見佛なり。此中に一は願、二は力、亦彼論に同じき故に、以願力故と云ふ。二に行體の下は所見の廣大を明し、數の漸增に約す。『論』に方便示現多佛等と名くる故に。一は以の中に、三種の行を成ず。一は佛僧を供養するの行、三の供は論の如く之を知れ。二は是の下は、廻向菩提の行、三は是菩薩の下は、敎化衆生の行なり。三に別地の行の中に、『論』に二行有り。二攝は利他、檀度は自利なり。此に略して檀度無きことは、二攝の中の施は、是れ財施、愛語は是れ法施、無畏は二處に通ずるを以て、是故に二攝に檀行を具するを以ての故に、重ねて顯さず。四に是菩薩の下は、所練淨を明す。中に於て、初に前の供佛化生を牒す、二に行を能練と爲すなり。行淨地法は是れ信等の行是れ所練の行なり。如是功德とは所練の信等を牒し、廻向種智は前の廻向を牒す。亦是れ能練は此所練を練り、

【論の數入】論文に「如眞金數數入火」といへるを指す。

【第二に云云】二に發趣果の文を釋す。經の「諸佛子、是菩薩摩訶薩」の下、初地の中」等の下。

障を出でて用を成せしむ。謂はく、前地の滿の時已に清淨を得、今此に更に淨き故に、轉益明顯と云ふ。此は障を出づるなり。堪任有用と言ふは、調柔の德を成じて、勝用を爲すに堪ふ。第二に喩の中に、金師は菩薩に喩へ、金をば信等の行に喩へ、火は所見の佛に喩ふ。數數火に入るをば、供養等の三行に喩へ、此を隨火力と名く。隨火力は是れ『論』の數入なり。調柔等は所練の淨に喩ふ。問ふ「餘の經論に說く佛性は、猶し鑛に在るの金の如く、練出して顯さしむ。此中に復說く、信等は金の如しと、此れ何の義有るや。答ふ、『佛性に二有り。一は理性、二は行性なり。此二は地前に障の爲に纏せられ、金の鑛に在るが如し。一大僧祇に資糧を勤修し、及び加行力は本行性を發し、生じて初地の初無流智を得、及び理性を顯す。一は遍滿の義にして、金の鑛を出るが如し。此中の信等は是れ、行性所發の初無流の法なり。又彼金の鑛に沙鑛を出て、更に火を須ひて、練りて其をして清淨ならしむるが如し。地法も亦爾なり。初の一刹那の所生の無流は、唯行性の力なり。第二は念より去りて、更に重ねて新に重ねて增益し、轉盛するなり。今此地の滿果の位に至るに況す。燒練純熟所況、是の如し、餘の文は知んぬべし。

第二に發趣果の中に二有り。初に正しく發趣行を明し、後に是名の下は、地相を總結す。前の中に四有り。一は法、二は喩、三は合、四は結なり。法の中に亦四あり。一は問、二は知、三は行、四は到なり。問の中に三あり。先に別して初地を問ひ、次に別して二地を問ひ、後に總じて餘地を問ふ。中に於て相貌とは、謂はく、障を立て治を立て、十地を階別

【第二に知を明す】經の「是菩薩は、善く諸地の對治」等の下。

【攝論の如し】梁攝論四十一、十一左、得相章の中四種相を說く一、已得信樂相。二、已得行相。三、已得通達相。四、已得成就相。

し、以て地相と爲りて以て地體に對して、說きて相と爲すのみ。行と言ふは、『論』の中に得と名く、卽ち是れ出世の無分別智は、證する所の眞如を證得す。果と言ふは、因の本智の力に依り、後得智有ることを得。然るに此後得は、通じて俗を緣ずる故に、世間と名く。無分別の故に、亦是れ出世なり。是故に『論』に、世出世智と名く。又、此三の中に、初は是れ無間道なり。惑と相翻ず。二は是れ解脫道にして、彼無爲を證す。三は是れ勝進道にして、後智進修す。何が故に加行を說かざるとならば、地前の加行は、地の攝に非ざるを以ての故に。地上の加行は、勝進の收の故に、此三は並に是れ、諸地の所修なり。成地法と言ふは信等の十行は是れ、諸地の所行にして、能く滿地を成ず、故に須らく此二種の法を問ふべきなり。是菩薩善知の下は、第二に知を明す。中に於て十一句あり。三門を作る。一は散じて十一と爲し、二は攝して五と爲し、三は行體唯三なり。初に十一とは、初に卽ち十障を對治するが故に、梁の『論』の第十に云はく「地は是れ對治の義なり」と。二は成壞とは、行を攝りて位を成ず、集むるが故に、成と名け、諸行各作し散ずるが故に壞と名く。三は行果とは、諸地の正證及び後得智なり。四は得を分別せば、諸地所證の法界は各別なり。又、得の相を分別するに、四種有り。『攝論』の如し。五は清淨行とは、諸地の後得離染の行成ず。六は一地より一地に至る行とは、前に依りて後を起す。地の背捨の相なり。七は處非處とは、所斷の二執を、名けて非處と爲し、所證の二空を、名けて住處と爲す。八は轉住處とは、自地の行滿じて、滯住せざるが故に。九は勝進とは

【二に論…五と爲す】論に五種方便を說く。一、觀方便。二、得方便。三、增上方便。四、不退方便。五、盡至方便。

【三に攝して三と爲す】義に依りて更に攝す。

【第二に喩の中云云】喩を釋するに亦問知行到の四あり。

勝進して後地の位を趣求するが故に。十に不退とは、念念後に趣き、退息せざるが故に。十一に菩薩淨地入如來智とは、善く因圓必ず果に剋するを知るが故に。二に『論』に攝して五と爲す。初の二は觀方便と名くとは、一は障の對治を觀じ、二は地の成壞を觀ず。初は所斷に約して、觀を顯し、後は所知に約して、觀を明す。次の三は得方便と名くとは、得の言證なり。一は始證、二は正證、三は證滿なり。次の三は增上方便と名くとは、後位に修進するを、名けて增上修と爲し、頓に成ぜず。初中後別の故に、三句有るなり。次の二は不退方便と名くとは、一は勝求、二は不息の故に、不退と云ふ。末後の一句を盡至方便と名くとは、菩薩の位の窮まるを盡と名け、佛果の位に至るを至と名く。此五は皆善巧にして成ずれば、同じく方便と名く。三に攝して三と爲すとは、謂はく、此五種は、諸相得果を離れず。初の一は是れ相、次の一は得に名く。第三は是れ果、第四は前の三種の、進修不退を顯す。第五は三門窮まりて果に入ることを明す。是故に唯三なり。諸佛子の下は、第三に能行の中に、既に善く知り已りて未だ初處を發せずと雖も、然も去心決絕し、必定して能く行ずるが故に、乃至無有障礙と云ふ。得諸地と言ふ下は、第四に能至を明す中に、必定して能く後菩薩地、及び佛智地に至るを以ての故に、得諸地乃至佛慧光明と云ふ。第二に喩の中に、亦四商主は菩薩に喩へ、將人は利他に喩ふ。初の問の中に、道路の行處を問ふ、宿處は皆利害有れば、並に須らく問ふべきなり。二は未發初處の下は、前に行路を問ふを知りて、宿處を問はず、今は宿時を知りて、行處を論ぜざるに喩ふ、文綺

【論に云…方便】論に導師に二種の方便ありとて、不迷道方便、資具利益方便を擧げて說明す、今は要約して示すのみ。

【第三に…以下】三に擇報果の文を釋す、經の一一皆歡喜地に住すの下、

【答者…故に】答者の中、初に初教に約するに先づ實報に約して明す。

【彼身を受くる】或はいふ、此次、「彼身を受けざる」に作る、是れ正しきか。

【若し終教…相違せず】次に終教に約して明す。

互す。又、前は處なり。此は時なり。文は互に顯すのみ。三は能以智の下は、能行に喩ふ。既に能善く行處宿處、行時宿時、各利害有ることを知る。是を以て籌量して、諸の資具を辨じ、害を避け利に就き、所至に達せしむ。凡そ導師を論ずるに、要ず此二を具するが故に、『論』に云はく、「一は道に迷はざるの方便、二は資具の利益方便」とは、此謂なり。故に乃至正導衆人と云ふなり。四は得至大城の下は、能到に喩ふ。知んぬべし。第三に合の中に、初に問と及び知と、通じて二を合す。爾時の下は、別して能行せしむ。三は乃至令住の下は、別して能到を合す。第四に是故の下は、彼勤行を結すること、知んぬべし。

上來は別して辨ず。諸佛子の下は、第二に總結、略說す。

第三に擇報果の中に二あり。先に在家の果を明し、二に若欲捨家の下は、出家の果を明す。前の中に亦二あり。先に上勝の身を明し、其報勝を顯す。二に能以大施の下は、上勝の果を明し、其行勝を顯す。又亦前は是れ異熟果、後は是等流果なり。前の中に、問ふ、「此王身は是れ實なるか、是れ權なるか。」答ふ、「若し初教に約せば、未だ分段を離れず應に是れ實報なるべし。然も其所受は唯此身に非ず、故に多作と云ひ純と言はざるなり。淨土に生じて、彼身を受くるを以ての故に。若し終教に約せば、初地以上は分段を捨つる故に。又是れ應化なり。妻子有るを以て、實身に非ざる故に。變易は微細にして、此身に非ざる故に。十王を安立するは十地を別たんが爲にして、十地に實の如く王と爲すと謂ふには非ず。『瓔珞經』の如し。地前の信等の四位は、次の如く已に鐵銅銀金の、四輪王と作

【施の中】或はいふ「中に於て」の誤か。

【二に所作の下】經の一作す所の善業は一等を指す。

【同事】布施、愛語、利益、同事をいふ。

【論に攝して四】本經は八句、論は四句となす。今論意を以て釋す。

【第二に勝進云云】經に「我當に一切…依止者と爲るべし」の十一句。

す。故に、豈十信已に閻浮の王と作すべけんや。今初地に至りて、還りて彼王と作す。故に知んぬ前は四王に寄せて以て四位を別ち、今は十王に寄せて、以て十地を別くるが故に相違せず。二には上勝の果、謂はく、王報に依りて勝行を起すなり。施の中に、二あり。初に自分の行、二に常生是心の下は、勝進の願を明す。前の中に初に行に隨ひて生を攝する行、二に是諸福の下は、智念無染の行を明す。又、前は正しく利他を成じ、後は自利を失はず。前の中に二あり。初に施行を以て物を調す。中に於て二、初に巧施は慳を調し、二は常施して恆に攝す。二に所作の下は、四攝をもて生を攝し、其をして道に入らしむ。二は自利の中に「論」に攝して四と爲す。初の三は上念と名く、三寶を念ずるが故に。次の一は同法念と名く。諸の同行の菩薩を念ずるが故に。此一は兩向に用ふ、經の中に略して、念僧無きを以ての故に。次の三は功德念と名く、自他の行を念ず。是れ所行の道なり。自體は是れ波羅蜜なり。轉勝は是れ十地なり。下の四は求義念と名く、佛力等を念ず。是れ所求の境の義なり、又是れ大義利なり。又此等は、並に行に隨ひて生を攝する時、妄念を起さざる故に、念と云ふなり。「論」に云ふが如し、「是の如きの諸念は、事の中に於て行じ已りて」とは、正しく隨行攝生の時を明すなり。成大恭敬除妄想と云ふは、不失自行を明す。謂はく、上は三寶を念ずるが故に、大敬念を成じ、行は障を離るるが故に、除妄と云ふなり。下の「論」は重ねて釋す。施に約す。中に、三輪及び所求の菩提を離る。二は四攝等に約して、如是作業中等と云ふ。皆四事を離るること、知んぬべし。第二に勝

【第二に出家云云】次に出家の果を明す文を釋す。經の「諸の佛子、是菩薩は、若し家を捨て」等の下。

進の願の中に、初の六は自徳、後の五は他を攝す。前の中に首と爲るは唯總なり。妙等は唯別なり。勝と大との二種は、亦は總なり亦は別なり。後の五は總に非ず別に非ず。此經に略して微妙無し。後の五の中に就きて、初の一は導くに阿含を以てし、後の四は皆證す。一は斷徳を成じ、後の三は智徳を成ず。智徳の初は、教へて出世を得しむるを、師と名く。二は學位をして、窮滿せしむるを、尊と名く。三は佛果の位の種智を得せしむ、並に論釋の如し知んぬべし。第二に、出家の果の中に、三あり。初に出家の方便、二に於佛法中の下は、正しく出家を明す。三に須臾の下は、出家の所得を明す。所得の中に二あり。初に三昧勝自在力を得。是れ用の本なるを以ての故に。「經」の百の三昧を得るが如し。二に三昧に依りて所作勝る。中に於て十有り。初に百佛を見るとは、謂はく、十方に於て各十種の他受用身を見る。彼佛の所に於て、法を聽き智を習ふが故に。又「瑜伽」の住品に云はく「淨天眼を以て、能く種種の諸佛の國土に於て、百如來を見る」と。二に佛力を知るとは、佛の神力所加の、諸の說法の菩薩の所に於て、法を聞き智を習ふが故に、「瑜伽」に云はく「變化住持の菩薩、住持して皆能く解了す」と。上の二は自利の行なり。三に能動とは、神力遙に化し、信を生ぜしむるが故に。後の三は身往きて道を授く。四に飛過とは、往至能入の故に。五に能照とは、正しく彼世界を見るが故に。又是れ身光照して、普く他をして見せしむるが故に。六に能化等とは、正しく教化の故に。上の四は利他の行なり。七に住壽とは、五種の生の中に、攝取勝生の故に「瑜伽」に云はく「若し命を留め

【第四に…說竟んぬ】四に願智の果を明す文を釋す。經の「若し願力を以て」の下。

【二四】以下、重頌の文を釋す。

て、能く住すること百劫ならんと欲す」と。八に過未等を知るとは、衆生を化せんが爲に、離惡の上首と作るが故に、是故に彼過未の善惡業道を說きて用以て諸の衆生を敎化するなり。九に善入とは、自らの智慧を增さんと欲するが爲の故に、蘊界處等の、種種の法門に於て、能く正しく思惟して、義理を簡擇す。十に變身等とは、速疾に身を變じて、以て百と爲す故に。多作利益とは、各百の菩薩を眷屬と爲すが故に、百身を以て彼利他の行を起し、速かに萬業を益するが故に、多作利益速疾行と名くるが故に。然るに初地已上は、佛の境界に入り、所化無量にして此に局限すべきに非ず。但數に寄せて、十地に別つ爲に斯百を辨ずるのみ。下の二地等は、千等の數を明す、皆此に準じて知れ。

第四に願智の果の中に、若以願力とは、內證の正願久しく積成するなり。自在とは、智力の作用なり。願自在なるを以て、諸に示現する所、前の百數に過ぎて、無量無邊なり。縱ひ百千億那由他劫に、計るとも、知るべからず。問ふ、「今經に示現する所の中に、十一事有り。何が故に此中に總じて顯さざるや。答ふ、「大都、前の百數所示の十一種の法と、多く別ならず、故に重ねて辨ぜず。少しく不同有り。一論に之を顯すが如し。長行散說竟んぬ。

(二四)第二に偈頌の中に、四十五頌半有り、分ちて三と爲す。初の二十三頌は說分、次の二十一頌半は、校量勝分、後の二頌は說を結す。前の中に十に分つ。初の一は依何身を頌す。二に四有り。爲何義を頌す。三に二有り。以何因を頌す。四に三有り。有何相を頌す。五

【二五】以下、第二離垢地の文を釋す。

【淨尸羅】尸羅は梵語(Sīla)、正譯は清凉、傍譯は戒、身口意の三業より受くる熱惱を息めしむるをいふ。

【三學の行】戒、定、慧。

に二頌半有り。釋名分の中に多歡喜を頌す。六に一頌有り、當得を念ず。七に二頌有り、現得を念ず。八に一頌半有り、安住の中の、信心成就を頌す。九に一有り、修行成就を頌す。十に三有り、迴向成就を頌す。上來の十門は、前の百句の正地を頌し竟んぬ。下は校量勝分を頌す。中に於て六あり。初の五頌半は、十大願及び十盡の句を頌す。二に六頌有り、行校量信等の十行を頌す、知んぬべし。三に一頌有り、調柔の果なり。四に三有り、發趣果を頌す。五に五頌半有り、攝報果を頌す。六に半頌有り、願智果なり。末後の二頌は、說の分齊を結す、初地竟んぬ。

(二五三) 第二地の中に、七門は前に同じ。初に名を釋すとは、『唯識』の第九に依るに、淨尸羅を具し、微細の犯戒の垢を遠離す。故に『十住論』に云はく、「十善道を行じて、諸の垢を離るるが故に」と。『攝大乘』に云はく、「極めて犯戒の垢を遠離するに由る」と。世親釋して云はく、「性戒成就は、初地の護戒を思擇するが如きには非ず」と。無性も亦同じ。『瑜伽』『深密』『金光明』等並に此說に同じ。『地論』の釋名は、前の本分の如し。二に來意に三有り。一は『地論』に云はく、「是の如く已に正位を證す、出世間道の因清淨戒に依りて、第二菩薩離垢地を說く」と。解して云はく、已に正位を證するは、是れ前の初地なり。此出世に依りて、三學の行を修するに、戒は最も先に居するが故に、此に來れり。二に前地とは、創めて眞如を證して、猶し微細の悞犯戒の障有り。性は自ら思擇を待たずして、淨戒を護持すること能はず。故に此地に斯戒行を成ずること有り。三に前は施、此

【三は所離云云】初に引文して、先づ總じて邪行障を明すに、二愚の意を以て示す。
【唯識】第九、三十右。
【總じて五法を除く】唯識顯了法相差別の談を承けてかくいふ。
【四法を除く】法相差別は上と似たれども、義意全く異る煩惱所知の二

は戒義の次第の故に。三は所離の障とは、『十地論』に依るに、衆生の身に邪行するを、等く障と名く。梁の『攝論』の第十に云はく「身等に依りて、諸の衆生の邪行を起すは、無明なり」と。『唯識』の第九に云はく「二に邪行障とは、謂はく所知障の中の俱生の一分と、及び所起の悞犯の三業と、彼二地の極淨尸羅を障ふ。二地に入り時便ち能く永に斷ず。斯に由りて、二地に二愚及び彼麁重を斷ずと說く。一に微細悞犯愚、即ち是れ此中の、俱生の一分なり。二は種種業趣愚、即ち彼所起の悞犯の三業、或は唯起業して業を了せざるの愚なり」と。解して云はく、此二愚の中に、初は是れ能發、後は是れ所發なり。問ふ「所知障は、業を發すこと能はず、亦潤生するに非ず、如何が此中に能く三業を發すや。」答ふ「『唯識』の第一に云はく「潤生の煩惱は犯戒の罪を發し、所知障に通ず」と。此は悞犯に約するが故に相違せず。又此二愚は、一は是れ能發業の愚、二は是れ不了業の愚なり。若し此釋に依らば、二愚は皆無明を用て性と爲す。『深密經』『瑜伽論』、皆同じく知んぬべし。又、此地の中に准ずるに、總じて五法を除く。一は所知障の一分、二は彼所發の業、三は彼障の麁重、四は及び煩惱の麁重なり。十地の修位に煩惱障を斷せずと雖も、然も必ず彼を伏するを以て、其麁重を斷ず。五は及び報障を離る、相應の心所の離縛不生は、前に准じて之を知れ。此上は始教に約す。若し終教に依らば、梁の『攝論』等の如し、四法を除く。一は其煩惱の種は、初地に永に盡きて、唯習氣のみ有り。二は其所知障一分の麁なる者は、亦初地に盡く、餘分及び習は、諸地の中に於て、各別に正斷す。三は無

各各習氣を取り、また無明所發の無漏業及び變易の報果、前門の分別と倶生別論の義意に同じからず。

【三果は前に同じ】調柔、攝報、願智をいふ。

【云云】以下、文を釋す。初に偈頌讃請分の釋。

【第二正說云云】以下、二に正說本地分の釋。

【謂はく、正地云云】此下、二淨の意を述す。

明を緣と爲して、無流業を發す。四は所感の變易、方便生死の報、並に是れ所離なること前に准じて之を知れ。四に所證とは、『唯識』の第十に依るに、眞如最勝の義を證す。謂はく、此眞如は、無邊の德を具し。一切の法に於て、最も勝と爲すが故に。無性の『攝論』の第七に云はく「第二地の中に最勝義に由るとは、謂はく、此空理一切法の中に、最も殊勝と爲し、離欲を最も殊勝と爲すと說くが如し、此義を了知して、二地に入ることを得」と。五に所成とは、謂はく、滅度を成就し、三聚及び五重十善の行を具足す。又、梁の、『論』の如き、八種の淸淨等を具足す。『莊嚴論』に云はく「第二住に業及び果を證し、能く戒を護るが故に」と。六に所得とは、別果に亦三類あり。一は梁の『論』に云はく、「若し法界の最勝功德に通達すれば、一切衆生、最勝無等菩提の果を得ん」と。二は『金光明』の第三に云はく「二地に心を發さば、可愛三昧の果を得」と。三は、此は當得に約す。若し現得に約せば、三果は前に同じ。

(二六)七に文を釋するに三有り。初に偈頌讃請分、二に正說本地分、三に以偈重頌分なり。初の中に五頌を二に分つ。初の三は大衆慶びて、前地を聞くことを明す。一は法を聞きて心喜び、二は身業花を散じ、三は語業讃歎す。後の二は解脫月、正しく後地を請す。一は衆生を知り、二は正しく請を爲す。第二に正說分の中、『論』に分ちて二と爲す。初に發起淨後に自體淨なり。地果は前に同じければ、更に解釋せず、亦科出せず。謂はく、正地三聚に、悞犯の垢無きを、自體淨と名け、直心彼に趣くを、發起淨と名く。『論』に云はく、「淸

【又の中に三云云】以下、隨科別釋するに三、初に發起淨、次に自體淨、後に位果を明せり。又の字、文の字か。

【前の中に云云】以下、十心を釋す。初に柔軟心の釋なり。

淨戒直心に依る」とは、謂はく、此直心に依りて、持戒純熟するを清淨と名くるなり。性戒成就して自然行に至るとは、直心戒淨に依り、正地の性戒を成就し、思擇を待たずして、性自ら戒を持つが故に、自然行と云ふなり。又の中に三、初に結前標後、二に正しく十心を顯し、三に行を結し位に入る。正しく顯す中に就きて、直心は是れ總なり。別の中、十心の内に、初の六は律儀戒、次の二は攝善戒、後の二は攝生戒なり。前の中に、一は他を惱さざるが故に、柔軟と名く。自ら人の、直心持戒すと雖も、然も心剛獷にして、共に住して他を惱す有り。今此は彼に反する故に共に喜樂等と名くるなり。二に自ら惱を起さざる故に、調和と名く。謂はく、違順に於て任運に戒を持ち、惑の爲に牽れざるが故に、自在力等と名く。又、戒取の煩惱の爲に、雜へられざる故なり。三は能く他の惱を受くるが故に、堪受と名く。『論』の中に此無し。四に能く細惡を除くを、不放逸と名く。謂はく、善く諸根を護りて、慢犯せしめず、慢犯尚ほ離る、況んや故犯有らんや。此と正地と何の別かある。釋すらく、此は意を作して慢らず、正地は性自ら慢らず。五は己が戒を恃みて、自ら高ぶり、彼を輕んぜず、故に寂滅と名く。又釋すらく、戒の骨髓を得、心に所執無きが故に、自ら高ぶらざるを、名けて寂滅と爲す。六は、難に遇うて堅持して、壞せざるを眞と名く。謂はく、難持の戒而も苦を忍びて、之を持すること能はざること有ること無し。世の眞金の、燒打磨等あれども、終に改變せざるが如し。又釋すらく、此は亦攝善法戒に屬す。『瑜伽』の住品に云はく「六は、諸の妙善、菩提分法に於て、常に勤めて

【第二に自體淨云云】以下、二に自

修習す」と。意樂の下は、二に攝善戒を明す。七に善を修して厭ふこと無く、懈怠を雜へざるが故に不雜と名く。『論』の中に「所得の功德は厭足を生ぜず」とは、總じて意を標するなり。「淨戒に依る」とは、前の離戒に依る「更に勝を求む」とは、進修して善を攝するが故に、勝戒と名く。下の『論』に云はく「攝善法戒淨とは、離戒淨に於て、上と爲す」と。故に此を勝と名くるなり「寂靜を樂む」とは、此心を增長するが故に「瑜伽」に云はく、「七は、即ち彼修に於て、隨順の爲の故に、樂ひて遠離意樂に處するなり」と。八は善を修して佛を求め、人天を願はざるが故に不貪と名く。下の二は攝生戒なり。九は悲心、生を益するが故に、名けて勝と爲す。謂はく、願ひて常に世に在りて、衆生を敎化するを、名けて不斷三有の願と爲す。此は此れ大悲をもて涅槃に住せず。『瑜伽』に云はく、「下乘を遠離して、大乘の意樂を趣證す」と。十は智心に染無きが故に、名けて大と爲す。謂はく、諸有に隨順して、生を攝すと雖も、而も其内心常に世に染せず。此は是れ大智、世間に住せず。『瑜伽』に云はく「一切有情の義利意樂を作さんと欲す」と。又『瑜伽』の中に「前地に於て未だ此十心意樂を起さず」と。此經の二地の初、亦相似たり。以是十心入第二地と言ふは、行を結し位に入るなり。『瑜伽』に云はく「即ち是の如きの十種の意樂に由りて上品を成ずるが故に。極圓滿の故に。是れ諸の菩薩は、第二の增上戒住を入證するも、此に同ずるなり」と。

第二に自體淨の中に、論主分ちて三聚と爲す。此三聚戒の義、略して十門を作りて分別

體淨の文を釋す。經の「菩薩、離垢地に住すれば」等の下。

【三聚】論に、一、離戒淨。二、攝善法戒淨。三、利益衆生戒淨といふ。

す。別說するが如し。文の中に、初は離戒淨を明す、離殺等を以ての故に、亦正受戒淨と名け、亦律儀戒と名く。二に作是思惟一切衆生墮惡道より下は、攝善法戒を明す。三に此十不善業道上者地獄より下は、攝衆生戒を明す。初の中に就きて三有り。初は總じて、此地の性戒成就を明し、二に捨棄の下は、別して十惡業等を遠離することを顯し、三に菩薩如是の下は、常行を總結す。初の中に「離垢地に住すれば、自然に遠離す」とは、正しく性戒成就を明す。思擇を待たずして、方に殺等を離るるが故に、自然離と云ふなり。此十惡乃至微細に於て、亦皆遠離するが故に、離一切殺生等と云ふなり。『瑜伽』の住品に云はく、「此住の中に於て、性戒具足す。極少の邪惡、業道所攝の諸惡犯戒、尚ほ現行せず。況んや中上品をや」と。又殺等を遠離するに、汎く論ずるに四有り。一は但三業の愆過を防ぐ、凡夫の麤行の如し。二は甚細犯を止む。三賢の菩薩の如し。上の二は現行に約す。三に種子を除く、謂はく、初地なり。四は悞犯も亦離る。即ち此地なり。上は初教に約して辨ず。又四種有り。一は現起を防ぎ、二は種子を除き、三は習氣を滅し、四は性淨を顯す。後の二は是れ、此地を性淨離彰と爲し、殺等を除くに寄せて、以て彼淨を顯す。上は終教に約して辨ず。又地體超絶の相は、實に分ち難きが爲に、地別に寄顯す、即ち是地に非ず。若し爾らずんば、豈地前の廻向等の位の行相極深なる。今地上に至りて方に殺等を離るべけんや。故に知んぬ、地相の差別に寄顯することを。後に十支等も當に知るべし、亦爾り。上は圓教に約して辨ず。

【二七】次に別顯するに十あり。初に殺を離るる文を釋す。

【別して……三あり】論に円(?)體、對治離果行體を立てて釋するに依る。

（二七）二に別して文を釋する中に、十惡を離る、即ち十段と爲す。初に離殺の中に、別して辨ずる内に三あり。初に因離とは、殺の因を離るる故に。此に二種有り。外具を受畜の因と名く。謂はく、刀斫杖打と、餘の呪藥等となり。二に内に貪等を起すを、起因と名け、實に三毒を具す。『梵網經』には、離殺緣と名くるなり。但此れ能殺の具は、皆悉く遠離す。何が故に『論』の中に但貪瞋を擧ぐるや。釋すらく、癡心邪に求め、祠祀して生を殺し遣り離しと爲すが故に、不離と謂ふには非ず。是故に對治離の中に、別して此離を明す。問ふ「貪瞋倶に因を起すに足れり。何が故に文の中に、瞋を離るる處には、無瞋と言ひて、貪を離るる處には、無貪と言はずして、但慚愧有りと言ふや。」答ふ「殺の業道の中に、瞋を究竟と爲すが故に。『雜集論』の第七に云はく、「殺生の業道、貪瞋癡を方便と爲し、瞋に由りて究竟す。殺生の如く、麤惡語瞋恚の業道も亦爾なり」」と。殺生とは、謂はく、皮肉等の爲にするは是れ貪なり。怨等を除く爲にするは、是れ瞋なり。祠祀等の爲にするは、是れ癡なり。無慈悲を離るれば、必ず他の有情を殺害せざるが故に、是故に瞋に由りて、乃ち究竟するなり。有慚愧と言ふは、謂はく、貪は殺生を利として、命を沒するまで恥無し。此に反すれば愧有る故に無貪なり。『梵網經』の中に、殺の因を離ると名く。二に於一切と言ふ下は、對治離を明す。謂はく、内に慈悲を起し、殺の事を對治す。何ぞ殺の法有りて、成就するを得べけんや。『梵網經』の中に、殺の法を離ると名く。此中の對治は、即ち離の名にして、對治離は因離等に同じからず。治行に二有り。一は世出世の樂因を授與

【四】麤の內の五緣】身、事、想、行、煩惱の五種。

【二八】二に離盜を明すに論に三離を以て釋す。今之を引釋す。

す。二に彼二の樂果を與ふ。此中の悲心は是れ『論』の安隱心なり。常求樂事と言ふは、通じて因果の樂を結するなり。三に果行離とは、正しく殺の業を離る、因を攬りて殺を成ずるが故に名けて果と爲す。此所作を離るるが故に果離と名く。二に有り。細は念に約す、惱は尙ほ曾て有らず、況んや麤は身害に約す、是れ則ち言を亡ず。『論』の中に、麤の內の五緣は殺を成ずと。『雜集』の第七に云はく、「亦五緣有り。一に事とは謂はく、有情數、二に意樂とは、謂はく、此想及び必害の意なり。三に方便とは、謂はく、害を爲すが故に、刀杖等を加ふ。四に煩惱とは、謂はく、貪等なり。五に究竟とは、謂はく、彼衆生は、方便に由るが故に、或は無間に死し、或は後時に死す。『地論』の五の中に、略して煩惱無し、『雜集』の五の中に、略して他有りて、以て自害を簡ぶこと無し。二論合して釋すれば、通じて七緣を具す。一に他は自を簡ぶが故に。二に衆生は非情を簡ぶが故に。三に衆生想は、迷心を簡ぶが故に。四に殺心は錯誤を簡ぶが故に。五に方便と與に刀杖を加ふるが故に。六に貪等を起すは、慈救を簡ぶが故に。菩薩は重罪を救はんが爲に、殺を犯さざるを以ての故に。七は究竟命斷の故に。緣を闕きて罪を辦ずること、思準して知んぬべし。下は諸戒の中に、皆此緣を具す。亦之に準ぜよ。離殺生竟んぬ。

【二八】第二に離盜の中に亦三あり。初の內離の中は、殺に準じて、應に二因有るべし。資生足らざるは、是れ外因なり。貪等を內因と爲す。何が故に內を說かざる。釋すらく、前に同じきを以ての故に重ねて說かざるなり。又釋すらく、內に知足を懷くを、盜の因を離ると

【二九】三に離邪婬を明す。經の「邪婬を離れて」等の下。【梵行余有り】八相を示して、妻子あるが如きをいふ。

爲す。又初地の上に、無盡の財を得るが故に、資生常に足ると說くなり。二に對治離とは、自の資財に於て、常に能く捨施して、當來の大財をして、報果を壞せざらしむべし。故に論經に、不壞他財と名く。謂はく、他の世財なり。此經に略して此句無し。三は果行離とは亦二有り。細は謂はく、草葉、麁は謂はく、資具なり。殺婬の二業は、他の衆生正報の處に於て起る。細は心念に約し、麁は身事に就き、盜は外の財物の、微麁有るに約して以て輕重を分つ。論經に五緣有り、此中に略して三四無し、餘は論に顯すが如し。

(二九)第三に離邪婬の中に、亦三あり。初に因離とは、自ら妻色に足るが故に。初二三地は、相世間に同じきを以ての故に、凡夫に寄同す。故に足妻と云ふなり。又釋すらく、此地の攝報は、輪王と作るに寄す、故に妻色有り。又釋すらく、梵行餘有るが故に自足と云ふなり。二に對治離とは、現在の梵行淨の故に、未來の妻色を求めず、故に不求他妻と云ふ。此經に略して此句無し。三に果行離の中に、亦二あり。初に微細は、心に約するが故に、不生一念と云ふなり。二に麁重は身に約す、身中の邪に三種有り、釋するに二門有り。一は麁に約し、二は細に就く。麁の中に、初の不正に五有り。一は他の女、二は他の妻、三は己が親、四は姓護なり。謂はく、上族は下姓の所配等に非ず。五は護を標すとは、謂はく、己、他に許し、他已に信を下すを、標護所護と爲す。此れ並に『地論』の如し。又『智論』の中、第十五に云はく、「若し女人父母、兄弟姉妹、夫主兒子、世間の法、王法の守護を、若し犯せば邪婬と名く。二は非時に、三有り。一は『智論』に梵行護と名く。二有り、

【三三】四に離妄語を釋す。初の一妄語を離れ常に一等の下。

一は出家、二は一日戒なり。又、自妻の八戒を受くる時、二に孕める有る時、婦人、未所習を厭ふを又、傷胎と爲す、三は兒に乳する時婬すれば、其乳竭くるが故に、皆是れ邪婬なり。三は非處とは、謂はく、非道に二處有り、知んぬべし。一は細に約して顯す中に、不正とは、己が妻妾に非ず。菩薩は自ら、妻妾を受畜せざるが故に、常に邪婬せず。二は非時とは、謂はく、戒を修する時なり。菩薩は時として、戒を修せざること無し。故に究竟して婬せず。三は非處とは、是の過言處なり、永く斷じて犯らず。若し細に辨ぜば、邪正の二婬俱に得べからず。上の三、身業の戒竟んぬ。

（三三）第四に離妄語の中に、初の句は總、後は別なり。別の中に二有り。初は對治離、二に果行離なり、對治離は卽ち是れ、因離なるを以てなり。初の後の中の因に二有り。謂はく、内外なり。後の盜と婬との中に、單に外因を擧ぐ。謂はく、資財是らざると、及び妻色是らざるとなり。其内因は貪等の如し。更に重ねて擧げず。今妄語の中に、既に外因無し、内復別無きが故に。又前に、外事無く、復異因無しと云ふが故に、是故に誑他の思心は、是れ妄語の因なり。此を離るれば卽ち實語、實語を成ぜば卽ち是れ治離の故に、別に對治を說かず。三の中に、初に常實語とは、自心に違はず、想に隨ひて語るが故に。二に諦語とは、審諦思量して、事の如く語るが故に。三に隨時語とは、過を離るる語なり。自ら發語する有れば、心事俱に實なり。言時に合はざれば、自ら惱み他を惱す。菩薩は爾らず、善く時を知りて語るなり。二は果行離の中に、亦二有り。細を擧げて麁を況す、知んぬべ

【三二】五に離兩舌を釋す。經の「兩舌を離れて」等の下。

【三三】六に、離惡口の文を釋す。經の「惡口を離れ」等の下。

し。『論』の中に、覆見忍見とは『大婆沙論』に依るに、覆相の妄語を、名けて覆見と爲し、覆心の妄語を、名けて忍見と爲す。謂はく、本前時を見ては、實に見想を生ぜず、誑りて言ふ、見ずと。此れ己が所見を覆へば、名けて覆見と爲す。又實に前事を見ざるに、妄に見想を生じ、誑りて見ずと言ふ。事に於ては實なりと雖も、見に於て違ふこと有るが故に、忍見と名く。此れ己が見を忍ぶが故なり。

(三二)第五に兩舌を離るる中に、新に翻じて離間語と名く。無破壞心と言ふは、是れ對治離なり。兩頭を破壞するは、是れ所治なるを以ての故に。於闘諍の下は、果行離を明す、二有り。一に細は、心中に共事を憶持す。二に麤は、身異處に往きて說く。『論』に云はく、此二種朋とは、謂はく、兩頭に於て各誑り現じて朋と爲す。此は兩舌を成ずるに由るが故なり。野干の誑りて師子及び虎に親み、其兩處を破る等の如し。又云はく、此に聞き彼に向ひて此を說きて、壞せざるが故にとは、此は經を擧げて、離を顯すことを明すなり。謂はく、彼前人の、此語を聞き已りて、此人の所に於て、惱壞の事を起すことを懼る、是故に說かず。又釋すらく、彼人此人の所に於て、和合の心壞することを恐る、是故に說かず。彼聞も亦爾り。餘は『論』に說くが如し。

(三三)第六に惡口を離るるを亦離麤惡語と名く。『論』の中に、初に果行離、正しく麤惡の語を離る。論經の中に十六語有り。此中に四語有り。一に麤獷とは、是れ他を損する語なり。能く他をして瞋らしむるが故に。二に苦とは、是れ他を苦しむる語なり。三に惡とは、是

【三三】七に無義語の文を釋す。經の「無義の語を離れ」等の下。

【三四】八に離食の文を釋す。經に「他物を貪らず」等の下。

れ鄙惡語なり。四に自ら壞し他を壞すとは、己に同意樂の事有り。自身失壞し、他をして失壞せしむるが故に。餘の語は論の如し。二に對治離とは、謂はく、潤益語等、十二語有り。此經に略して無し、『論』に具に說くが如し。

(三三)第七に無義語を離る、亦離綺語と名け、亦離雜穢語と名く。初に對治離の中に、論經の九句、此中に五有り。中に於て初の二は敎化語、化して信を生せしむるが故に。常自護と言ふは、言理に合して失に合せざるが故に。應作不應作と言ふは、不失の相を顯す。謂はく、若し不善の衆生在るを見ては、不善を捨てて善法に安住せしめ、彼時敎化して、利益を成ずるが故に、方に始めて語るが故に、故に知時語と云ふ。次の一を敎授語と名く、敎へて行を起さしむるが故に。『論』の中に展轉等に依るとは、謂はく、互相に策勵して、勝行を修する時、義を說き法を說くが故に、利益語と名くるなり。次の一は敎誡語と名く。誡めて惡を止めしむるが故に。『論』の中に展轉擧等とは、互相に罪を擧げて、懺悔せしむるの時、諍事有るに及びて、殄滅せしむるの時、如法語及び阿含語を作すが故に、順法語と云ふなり。後の一を攝受語と名く。謂はく、說法して衆生を攝受し、修行せしむる時、威儀の如く住して、語を發するが故に、籌量語と名くるなり。二は果行離の中に、戲笑は是れ細の故に作す。是れ麤は二俱に離るるなり。餘は『論』に辨ずるが如し。

(三四)第八に離食の下の三は、意業の惡を離るることを明す。皆但對治離有りて、餘の二離無し、知んぬべし。『論』の中の不貪に三種有り。一は事財を他に屬する事、此に二有り。謂

【三五】九に離瞋の文を釋す中に二に離害の心を一等の下

はく、已攝の者の財事、現在攝想者の物は、在らずと雖も、遙に所屬有り。彼に護想有り。謂はく、此二を名けて若物屬他と爲すなり。二に體とは謂はく、財體なり。此に亦二有り。謂はく、金等は但是れ所用なるも、喫著するに堪へず。衣食は資身の用有り。此二は是れ所貪の境の故に、他所攝用と云ふなり。三に差別とは、謂はく、貪に下中上の三種有り。故に謂はく、初に希望を起し、二に得て已に屬せんことを願ひ、三は無厭の意を起す、此三貪を離るるが故に、不作是念我當取之と云ふ。

(三五)第九に離瞋の中に、論經の內に三有り。初に攝治、二に離障、三に起行なり。此經に略して後の二無し。攝治の中に就きて、『論』に六心有り、五衆生と爲す。此には唯し四心なり。一は怨に於て瞋を起す。二は貧苦に悲を起す。三は著樂の衆生に於て、潤益の心を起す。法を以て津潤して、放逸を離れしむるが故に。四は著攝心を發し、勞倦の衆生に、愛念心を起して、利益を作すが故に。又『論』に云はく、「此悲心等に六種の障有り」とは、前の六心に、此六障有ることを明す。此は分別に非ずとは、二三等の障同じく、一治を障ふるに非ず。亦二三の治同じく、一障を治するに非ず。此の如く分別すべからず、故に非分別と云ふなり。亦一一に各別に相對するに非ず。但是れ通じて障へ、及び通じて治するなり。六の中に、一は怨に約して生長す。是れ瞋力のみ。二は親に約して生ぜざる等は、是れ恨力なり。三は自害に約して生ぜず等とは、是れ垢力なり。四は不善に約して生長するは、是れ害力なり。五は他の不愛の事等に約す、是れ妄想力なり。六は愛事に約して

【三六】十に離邪見の文を釋す。經の「一古相を離れて正見」等の下。

【三七】第二に攝善法戒の文を釋す。此の下の所明を分つに四門、智、願、觀、行。今は初なり。經の「菩薩は……一切衆生の惡道に……」等の下。

【三八】論の中の乘惡等】論に、一には惡行に乘じて往くが故に。二には自身に

生ぜず等とは、是れ精力なり。故に文句次第說と云ふなり。無量の惡行の根本とは、等の字を釋するなり、餘は論の如く知んぬべし。

(三六)第十に離邪見とは、『論』の中に、七種の見に二門を作る。一は行に約し、二は人に約す。行に約する中に、初の一は顚倒の邪にして、小乘を願ふが故に。次の三は癡の邪なり。顚倒の見の故に。一は邪見、二は戒取、三は見取なり。次の二は行の邪なり。非を藏し善を誹るが故に。一は非を藏し、二は善を誹る。後の一は信の邪なり。世間を信ずるが故に。此の七を對治するを、離邪見と名く。二に人に約する中に、初の四は是れ、梵行に求むる衆生なり。一は是れ佛法の小乘、後の三は邪見の外道、次の二は是れ欲に求むる衆生、後の一は是れ有に求むる衆生なり。今此經に略して、異乘及び戒取見無し。餘の五の中に、深く罪福を信ずるは、是れ不姧欺なり。餘は『論』に准ずるが如く、知んぬべし。菩薩知是常護善道と言ふは、第三に總じて行成を結するなり。初に離戒竟んぬ。

(三七)第二に、攝善法戒の中に四有り。一は智、二は願、三は觀、四は行なり。初に作是思惟衆生墮惡道皆由十不善と言ふは此は是れ智にして、其に三義有り。一は何の作る所ぞ。業生の苦の因果を知る。二に何の因か知る。前に自ら十惡を離るるに因りて、即ち衆生の惡を離るること能はざることを念ず。三に何が故に知る。物に惡有れば、自ら善行を行じ、他を化せんと欲するが爲なりと知る、是れ大悲の故に。『論』の中の乘惡等とは、道を釋するなり。亦趣苦處と名くるは、惡を釋するなり。常隨とは隨を釋するなり。上は苦果を釋

し、下は苦因を釋す。謂はく、十不善業は攝して、一切の惡果數に到る。故に『論』の中に、數を以て經の中の十を攝するなり。惡は不善を攝し、果は三塗を攝し、到は其業を攝す。業は能く果處に到るを以ての故に。受は集の義を解す。謂はく、果を集むるを集と名け、果を納むるを受と名く。義相似たるが故に。行は因の義を解す。謂はく、果を生ずるを因と名け、果に趣くを行と稱す、義相似たるが故なり。

(三八)第二我當自住の下は、願を明す中に、亦三義有り。一は何んが所願なる。自ら善に住し、亦他をして住せしむることを願ず。二に何んが因の願なる。前の生の業に由りて、惡に墮するを知るに因る。三に何が故の願なる。大悲心、捨離せざるを以ての故に。故に自行は皆、衆生の爲なり。文の中に二有り。初には總じて願事を擧げ、二に何以故の下は、徴責釋成すること、知んぬべし。

(三九)『攝論』の頌に云はく、第三に又深思惟の下は觀を明す。謂はく、通じて觀ずるに十善に其れ五重有り、義に亦三有り。一は何んか所觀なる、通じて障を觀ずるに、所治は十惡、能治は五重なり。二は何の因をか觀ずる。前に自ら善に住し、亦他をして住せしめんと願ふに因りて、若し善を識らずんば何の所住をか知らん。三は何が故の觀なる。善を觀じて攝して行を起さんと欲するが爲の故に。文の中に二有り。初に思惟十不善墮惡道とは是れ所治の障なり。二に行十善の下は五重の十善を明す、是れ能治の行なり。問ふ、「此中の十善と、上の律儀戒の十善と何んが別なる。」答ふ、「前は止惡に望め、今は作善に約す。止作同

依止して能く苦惱を生ずる故に。「三には常に種種苦惱處に墮するが故に」といふ。

【三八】以下、第二に願。

【前の生の業云云】前に衆生十不善道に由りて惡道に墮すと云へるを指す

【攝論…云はく】恐くはこれ衍文か

【三九】以下、第三に觀を釋するなり

【文の中に云云】分文體判するに、初に所能治を分ち後に善惡分齊を判ず。

【問ふ云云】四番

問答あり。初に二處十善同異を問答す。

【問ふ…有り】第二に善惡一五不同問答。

【問ふ…攝す】第三に、善五なれば惡も亦五なるべきを問答す。

【答ふ云云】初に一五の別相を明す

【問ふ…如し】第四に、望上望下准擬問答。

【五重の中…覺る】別して五重を釋す

じからざるが故に、二位に分つ。』問ふ、「十善は十惡に翻じ、十惡は既に唯一なり。十善は何んが五重有るを得る。」答ふ、「不善に對翻するに、亦應に是れ一なるべし。但善を以て無智に隨ふが故に世間と名く。智の勝劣に隨ふ。故に、出世の四位有り。」問ふ、「善既に五重なり、所翻の十惡も亦五有るべし。何んとなれば、謂はく、人天の十善は惡道の十惡に翻じ、聲聞の十善は、人天の十惡に翻ず。乃至如來の十善は、菩薩の十惡に翻ぜん。應に是の如くなるべきや。」答ふ、「爾らず。翻善の惡は、理に違ひて物を損じ、不善の用爲にして、上位に通ぜず、故に唯一の反惡の善有り。理に順じて物を益する福は、智に隨ひて、上位に通ずるが故に、五種有り。是故に五位の所離の惡は、齊きが故に、唯一種なり。所成の善は異るが故に、五重有り。此れ則ち止は同にして、作は別なり。是故に、此地は是れ菩薩の十善にして、尚一乘に非ず。況んや凡位に同ぜんや。若し寄言に約せば、亦凡位を攝す。」問ふ、「不善業は一にして、上位に通ぜず。上に約して、五重有りと說くことを得ず。不善は下に望むるに、未だ知らず、亦階降有りや不や。」答ふ、「心に約し境に約するに、亦五種有り。一に極重、『如來祕密藏經』に云ふが如し。父證聖の道を得るに、子父の命を斷ずるが如し。是殺生の中の重なり。餘は上に說くが如し。二に稍重、人を殺す等の如し、『藏經』に說くが如し。三は重、殺畜等の如く、此中の輕の如し。四は輕、『祕密藏經』の如し。後の復次に五無罪を說く。菩薩藏に生の多命を救はんが爲に、及び無間の業を救はんに、前も彼命を斷ちて、犯さず等と說くが如し、並に具に、前の十不善の章に說くが如し。」五重

【五の中】論に、聲聞の相ありといひ、因集、畏苦、捨心、依止、觀の五を擧ぐ。

【三に緣覺十善】經の「若し此十善道を行じ、他に從ひて聞かず」等の下。

の中に、初に人天は知んぬべし。二は聲聞の內、『論』に實相觀と云ふは、總じて十惡及び人天の十善を觀じ、四諦を具するが故に、實相と名くるなり。下は別して、二門の四諦觀を顯す。『論』の如く知んぬべし。此四諦の觀智と和合して、聲聞行を修す。『論』の中の「智慧同じく觀じて修行分別無し」とは、二義有り。一は境に約す、前の善惡二種の四諦に於て、同じく觀察し、修は別異無きが故に、無分別と名く。二は智に約す。謂はく、此聲聞の、諦を觀ずるの智、十善道と和合するが故に、同觀同行無分別と名くるなり。上來の總句は、下に對して勝を彰す。下は別して五句有り。上に對して劣を顯す。『論』の中に、五の內、初の三は、菩薩より劣ることを明し、後の二は緣覺より劣ることを明す。五の中に、初の因集に二義有り。一は性因、二は習因なり。今此論の中に、且く習因を擧ぐ。謂はく、過去の所習は狹劣の善根、之に依りて今の所成の行を集起す。故に因集と名く。亦是れ種性を集成するを、名けて因集と曰ふ。經の若心劣等の如し、知んぬべし。餘の四、論文自ら顯なり、知んぬべし。第三に緣覺十善の中に二有り。初は總、二は不從他の下は、別して顯すに三、有り。初に「他に從ひて聞かずして、自然に知ることを得」とは、『地論』に自覺の義と名く。謂はく、佛說及び菩薩を假らず。故に『瑜伽』の第三十四に、獨覺地の中に、獨覺種姓を明す。三相有り、中に、第三の相に云はく、「本姓獨覺は先に未だ彼菩提を證得せず。時に中根の種姓有り。是れ慢行の類なり。是因緣に由りて、深心希願して、無師無敵にして菩提を證す」と。二に「大悲の方便を具足する能はず」とは、『地論』に、

【五二の因緣】恐くは十二の因緣か

【問ふ此不能云云】今、不能説と聲聞の捨心との同異を問答す。

【麟角喩】獨身にて居住するを麟の一角に喩ふ。

【部行喩】同侶とありて同悟に勵むをいふ、以上共に無佛の出世なり。

是説法する能はざるの義、謂はく、「心を退して説法せず」とは、不具大悲を釋するなり。「説法に堪へざるが故に」とは、不具方便を釋するなり。『瑜伽』に寂靜種姓と名く。是因緣に由りて、正法を説き有情を利する事に於て、心少きに於て、務を思ふを愛樂せざるは寂靜住の中の深心愛樂なり。三に而能深入乃至辟支佛乘と言ふは、『地論』に觀少境界の義と名く。謂はく、微細因緣の境を觀ずる行の故に。此中に少境に二義有り。一は五二の因緣に約す。但菩薩の二法行あるが故に、少と名く。二に是緣生深細なるを少と名く。今は後の義を取る。『瑜伽』に云はく、「薄塵種姓有り、此因緣に由りて、憒鬧の處に於て、心著繫せず」等と、『瑜伽』の中の五相は、一は種姓、二は道、三は習、四は住、五は行にして、廣く釋すること彼の如し。『地論』に云はく、「因果は苦を畏れ衆生を捨つ」等とは、聲聞と同異を辨ずることを明す。謂はく、聲聞の五相の中に、三同二異なり。二異とは此れ歸に依らざるが故に、「依止勝にして能く深細の因緣法を觀ず、故に勝と爲すなり。」問ふ、「其不能説」法と捨衆生と、何んが別なる。答ふ、「聲聞も亦能説の勢力有り、大悲無きが爲に生を捨てて寂に趣く。今獨覺は亦説力無し。『瑜伽』に云はく、「或は他の下劣の愚昧を濟度するに、身を以て濟度して、語言を以てせず。何を以ての故に、唯身相を現じて、彼が爲に説法するも、言を發さず」。故に種種の神通の境界を示現す。乃至心に誹謗せん者に、歸向を生せしめんが爲の故に」と。然るに此に二類有り。一は獨覺を成ずる者を、麟角喩と名け、二は獨勝を成ずる者を、部行喩と名く。餘は『瑜伽』に説くが如し。第四に菩薩の十善の中

【第四に菩薩の十善】經の「若し是十善道を行じて淸淨」等の下。

【第五に佛の十善】經の「則ち能く佛の十力」等の下

に『地論』の四の内に、初の一は行因、次の二は行相、後の一は行位なり。初に行是十善乃至無邊と言ふは、此は是れ因集なり。謂はく、宿習の善根、之に依りて行を起す。『論』の中の三義は、一は、一切の善に依ることを釋するに、行を起すとは、自利の行因を明す。二は、一切衆生等に依るとは、利他の行因を明す。三は大乘心等は、因體を出す。謂はく此廣大心無量等なり。又釋すらく、初は大心を釋し、二は廣心、三は無量心なり、知んぬべし。二に、於衆生と云ふ下は、用を明す。謂はく、利他の心は苦を縁じて能く益するが故に、衆生の習苦の因、受苦の果を見て、慈悲を起す。是れ菩薩の用なり。三に有方便力と言ふは、彼力是れ利他の行なることを明す。即ち四攝方便とは、前の慈に依りて起るが故に、是れ彼力なり。四は志願と言ふ下は、地を明す。謂はく、行所依の位なり。中に於て三に分つ。謂はく、三阿僧祇、各滿處を、一と爲す、故に、三位有るなり。文義は『論』に具に、釋するが如く、應に知んぬべし。淨諸地等と言ふは、諸地を淨め、上上の、淨なるを以ての故に。及び淨波羅蜜は第一淨の故に。彼第三の廣成の行をして、方に圓滿することを得しむ。『論』の中の問答の解釋、知んぬべし。第五に佛の十善の中、論經に總有り別有り。此中は但別にして總無し。別の中に、四の内に初の三は、正しく是れ佛果、後の一は是れ、此地の中の行なり。前の中に、得佛と言ふは、彼十不善の習氣、同じく滅するが故に、得佛と言ふ。二に十力と言ふ下は、佛の別德を顯し、十善業の自在を明す。二乘を捨つることを成ずるが故に。三に集諸佛法と言ふは、謂はく、菩薩乘に依りて、方便

【四〇】第四に行を釋す。

【四一】以下、第三に攝衆生戒淨を釋す。經の「是善菩薩は復是思惟を」等の下。

善巧して諸の佛法を集め、圓滿せしむるが故に。上來、觀竟んぬ。

(四〇)四に是故の下は、是れ第四の行なり。釋に二義有り。一は、近くは佛の善に望めて、以て求心を結するが故に無厭足と名く。『論』は此に依りて釋して、佛の善の中に屬して收む。二は、上は既に通じて善を觀ずるに五重有り。今は乃ち已に、十善を行じて、唯佛善を求むべきを結す。攝善法戒竟んぬ。

(四一)第三に大段攝衆生戒は、亦利益衆生戒と名く、中に於て『論』に分ちて五と爲す。一は智、謂はく、善く衆生の苦の因果を知るが故に。二は智に依りて願を起し、願ひて衆生の爲に、自ら善を修するが故に。三は願に依りて行を起し、誓の如くに、修するが故に。四には行に依りて生を攝するに、悲を益の本と爲すが故に、名けて集と爲す。五は、悲に依りて、正しく攝生の行を成ずるを、名けて集果と爲す。初の中に三有り。初に總じて苦の因を知る。二に從於中の中は、別して苦果を知る。三に佛子の下は、總じて所知を結す。前の中、『論』に、時差別と名くるは、謂はく、果に對して因を明す。果に三塗の不同有り。明かに知る、因の時にも亦、三位の差別有るが故に、上なる者は地獄の因等と云ふ。此上中下に二義有り。一は、境に約するに三品有り。二は、心に約するに亦三品有り。思うて以て之に准ぜよ。問ふ、『雜集』等の論は、皆下は是れ傍生、中は是れ餓鬼等なり。何が故に此と同じからざる。答ふ、『正法念經』に依るに、此に各二有り。謂はく、大海の下、無間等の八大地獄を正地獄と爲す。或は鐵圍山の間等の諸處に在る小地獄を、邊

【劫盜の報果】論に貧窮と、共財自在なるを得ずとの二を擧ぐ。

地獄と名く。又波吒迦餓鬼、鑊脚餓鬼等の如きを、正餓鬼と名く。謂はく、頭は大山の如く、頸は針の如き等、極大苦惱は、餘の人間の坑塹等の處の如し。鬼有りて人の涕唾等を食ふを、邊餓鬼と名く。又畜生の中に、熱沙龍等の如く、大苦を受くるを、正畜生と名け、人間の諸畜を、邊畜生と名く。此三の中に地獄邊は、正しく鬼畜に望むるに、一向苦の故に。更に異說無し。若し邊鬼を以て正畜に望むれば、則ち畜は重く鬼は輕し。此經は此に約して說く。若し正鬼を以て邊畜に望むるときは、則ち鬼は重く畜は輕し。『雜集』等は、此に約して辨ず。是故に相違せざるなり。下は別して顯す中に、『地論』には二果を顯す。一は報果、謂はく、三惡道に苦報を受くるが故に。二は習氣果、人の中に、殘果を受くるが故に。『雜集論』の第七に各三果有り。一は異熟果、二は等流果、三は增上果なり。初に殺生の異熟果は、下中上に隨ひて、三惡趣の苦を受く。二に等流果は、彼論は但一果なり。謂はく、短命なり。此中に二有りとは、謂はく、殺生の命未だ斷ぜざる時、他をして苦ましむるに故に此方便の位に約して、多病の報を得。二は正命斷の故に、短命の報を得。三に增上果とは『雜集』に云はく、「謂ゆる外具は、光澤乏少なり」とは、是れ殺生の增上果なり。二は劫盜の中の報果は知んぬべし。等流の中に、共財不自在とは、亦方便の位に約す。有りと雖も用ふることを得ざるを以ての故に。增上果とは不與取の故に、多くは霜雹に遭ふ。三に邪婬の中に、不隨意の眷屬を得。亦是れ方便に約して果を得。三に增上果とは、欲邪行の故に、諸の塵坌多し。四は妄語の中の等流は、內に謗を被るは、

【九は瞋恚云云】論に二種の果報ありといひ、一に常に他人の爲に其長短を求む、二に常に他の爲に惱害せらると。

【第二に願…故なり】智を明し、次に願を示す文の釋なり。經の「菩薩、復是念を作さく」等といふ下。

【第三に修行…爲なり】第三に修行の文を釋す。

違の境に約して得し、誑を爲すは、違心に約して得す。又誑を爲すには亦是れ方便なり。誑心有るを以ての故に。增上果とは、妄語の故に諸の臭穢多し。五に兩舌の、等流中の弊惡の眷屬は、是れ方便の中に、他の眷屬をして相親見せざらしむるが故に、此報を得。增上果とは雜間語の故に、高下險阻なり。六は惡口の等流の中に、言恆に諍訟有るは、方便に約して得す。又常に惡音を聞くは、語鄙惡に約して得す。等流果は、言恆に諍訟有るは、總の他人に違ふに約して果を得。增上果とは、鹹惡語の故に、其地鹹鹵磽确穢惡なり、七は無義語等流の中に、不明了と言ふは、言威肅ならざるが故に是れ正しく等流果なり。人言を信ぜざるは、是れ方便得果に約するなり。增上果とは綺語の故に、時候乖變す。八は貪欲等流の中に、多欲は方便に約す。厭ふこと無きは、正位に就かば、『集論』に貪轉猛盛と名く、增上果とは、貪欲の故に菓實鮮少なり。九は瞋恚の等流の中に、長短を求むるは、方便得果に約す。正果は知んぬべし。『集論』に、瞋轉猛盛と名く。增上果とは瞋の故に、菓の味辛苦なり。十に邪見の等流の中に、心諂曲なるは、是れ方便果なり。『集論』に癡增上と名くる故に。增上果とは、邪見の故に。菓の味辛苦なり。或は全に菓無し。三に諸佛子と言ふ下は、無量の大苦聚を總結するなり。智は覺んぬ。第二に願の中に、作是念等は、不善を離るることを願ふなり。十善道を行ずとは、善に住することを願ふなり。亦令等は正しく攝生を爲す故なり。第三に修行の中に、作是念已の下は、前の願に依りて、自行を修起することを明す。亦令他の下は、自行に依りて、攝生の行を成ずる

【第四…知んぬべし】第四に集の文を釋す。

【第五に…云云】第五に集果の文を釋す。

【四三】以下、隨科別釋するに初に別して攝生を明すに十段あり、今は顚倒の衆生を化する文を釋す。

ことを明す。『論』の中の遠離障は、是れ十不善道を離るることを釋し、修行對治とは、安住十善道を釋す。第四に集の中に、是菩薩爾時等と言ふは、十種の心を明す。初は惡業を救はんが爲なり。二は苦の衆生の爲なり。三は怨の爲なり。四は貪の爲なり。五は樂の爲なり。六は外道の爲なり。七は入法の衆生の爲なり。八は己と齊き者は、之を推して師と爲す。九は德己に過ぐる者は、尊ぶこと大師の若し。十は初めて菩提を發して、己に劣る者は、攝して己身に同ず。『論』の中に、「大乘に乘じて進趣す」とは、師心を釋し、集具足功德とは、尊心を釋す。餘義は並に論釋の如し、知んぬべし。第五に集果の中に二有り。初は別して攝生を明し、後に諸佛子の下は總結す。前の中に救攝するに、亦十類の衆生有り。文に皆二有り。初に所化を擧げ、後は化益を明す。前の集の中に、十心を分釋して、前の十種の衆生に寄することを爲し、以て差別を釋す。今此十類、一一の生所に、皆前の如く十心の救拔有り。初の一は邪解の衆生、餘の九は邪行の衆生なり。又一の中、『論』に分ちて四と爲す。初の一は顚倒の衆生を化す。謂はく、理に違ひ境に乖くなり。次に五有り。欲求の衆生を化す。謂はく、外の五欲を求むるなり。次の二は、有求の衆生を化す、三有の中の果を求むるなり。後の二は、梵行求衆生を化す。妄に出道を求むるなり。

(四三)初の中に、先に所化を擧げ、後に我應の下は、化益を明す。初の中に、先は總、二に邪心の下は別なり。別の中に、邪心は是れ『論』の中の惡心なり。『論』の中に惡意有り。惡心と言ふは、此は是れ我淨の二倒なり。常樂に望むるに、根本として集起の故に、說きて

【餘は論釋の如し】論の惡道稠林、妙法正念等の文をいふ。

【第二に是諸…住せしむ】二に不共財を受くる文を釋す。

【他】論本は作の字に作る。

【第三に…治す】第三に無厭足財を受くる文を釋す。

心と爲す。我は是れ常の本なり。淨は樂の原爲り。此二性の成ずること、作意して生ずるに非ざるが故に惡心と名く、專念行に非ず。又惡意とは、常樂の二倒、緣を同じうして現起するを、名けて惡意專念行と爲すなり。此經の中に、本を擧げて末を收むるが故に、略して惡意無し。行邪險道と言ふは、此四倒は是れ、惡道の因なることを明すなり。下は能化を明すに、先に悲、後は攝なり。攝の中に、正見に住せしむとは、前の墮邪見を治するなり、如實法中とは、前の險道を治す、餘は論釋の如し。

第二に、是諸衆生の下は、欲求の衆生を化することを明す。此に二種有り。一は現の五欲に於て受用し、過を生ずるを受用時と名く、此は受果の時に約す。二は未得の五欲に於て、追求して過を起すを追求時と名く。此は造因の時に約す。前の中に就きて、三有り。初は不共財を受くとは、謂はく、已得の物は他と共ぜず。費用の時に於て、瞋を起すこと過なり。二は受けて厭足無き財とは、求むる時に厭くこと無く、貪の過を生ずるなり。三は受貯積財とは、貯へて用ひず、順じて三毒を生じ、癡の過を增すなり。初の化不共財の衆生の中に就きて二有り。先は所、後は能、亦は是れ先は過、後は治なり。前の中に、初に鬪諍は言中に於て、後に對怨は心中に於てす。故に分別彼我と名くるなり。「論」の中の思念他報とは瞋恨を解するなり。行熾とは熾然を解するなり。增長とは不息を解するなり。能治の中に、瞋を治するが故に、大悲に住せしむ。

第三に是諸衆生常貪の下は、受無厭足財の衆生を化するなり。先に所化、後は能化に

【斗科】論本に斗秤に作る。

【第四に…故に】第四に貯積財を受くる文を釋す。

【寶翫等】論に、「受用中の多樂の境界を寶翫す」といふを指す。

【數爲の下】論に「數數煩惱の火の燒燃する所の過を爲る」といふ文。

【上來の三門：如し】第五に現報を追求して諸の惡行を習ふ文を釋す。

して、前の中に、初に常貪等とは、內心滿じ難きなり。二に恆以等とは、身口、侵奪するなり。『論』の中に斗科は是れ身、妄語は是れ口言、等とは餘計を等取するなり。此等は並に能く、巧に他の財を侵し、彼をして覺らしめざるを方便奪と名く。下の能化の中に、住せしめて身口を淨むるは、前の邪命を治す、意業を淨むるは、前の貪心を治す。

第四に是諸衆生隨逐の下は、受貯積財の衆生を化す。先に、所化の中に二有り。初に貯に因りて三毒を生ず。二に常爲の下は、過を結して癡に屬す。『論』の中に因體過とは、彼經の中の因の字を釋するなり。謂はく、貯積とは貪等の興に、因と爲るに由るが故に。下は別して釋す。彼染著故とは貪を解するなり。散用起瞋とは瞋を釋するなり。寶翫等は癡を釋するなり。數爲の下は、癡を成ずるの過を釋結す。謂はく、火燒を見ず。對治を求めず。下は能治を明す中に、清涼處は是れ涅槃なり。前の火を治する故なり。

上來の三門は是れ、起煩惱の衆生を化す。下の二門は造業の衆生を化す。謂はく、追求して過を生ず。中に於て二有り。初に現報を追求して、諸の惡業を造り、後に後報を追求して、有流の善業を造る。第五に是諸衆生常爲無明の下は、現報を追求し、諸の惡行を習ふの衆生を化す。先に所化の中に四句有り。初に無明覆心の過。謂はく、無明ありて現在は實に是れ、苦報なりと見ざるを以ての故に、妄に樂想を生じ、此妄樂を求めて大罪を作る。復此罪は未來に、當に大苦の果報有ることを知らず。二は入大黑の下は、增惡遠善の過を明す。謂はく、此異熟に迷ふ愚に由るが故に、惡趣の業を造る。『論』の中の是愚

【第六に…知んぬべし】第六に後報を追求して諸善行を習ふ文を釋す。

癡因等とは、下は此第二の過を釋する文なり。謂はく、癡に依りて貪瞋等を起し、滿足せしむるを癡と名け、使の因と爲す。善行障と言ふは、是れ遠善なり。即ち無流智處を離るるが故に、不善行に順じ是れ惡業を造る。三に入於生死の下は、受苦報の過を明す。『論』の中に、受至大對過の下は、此第三過を釋す。謂はく、此業因、果を納むるを受と名け、果に到るを至と名く。所受の苦果は、多く對礙有るが故に、對と名くるなり。對の極を大と名く。又大對に二有り。一は彼苦身を受く。二は彼苦處に至る。四に隨逐の下は、增邪見の過なり。『論』の中に、多作罪因の下は、此第四過を釋す。謂はく、多く罪を作る因緣に由るが故に。終らんと欲する時に臨みて、地獄の相を見る。心に悔を生ずと雖も、彼正見對治を集むること能はず、故に隨邪見と名くるなり。下は能化の益の中に三有り。初に彼衆生を化して、慧眼を得しむ、前の初句に翻ず。二に慧眼を以て、實の法相を見るは、第二句を治す。三は實を見て便ち無礙の佛智を得るは、後の二句を治す。謂はく、心に從ひて起るを證するを、不隨他等と名くるなり。餘は論釋の如し。

第六に是諸衆生隨生死道の下は、後報を追求して、諸の善行を習ふ衆生を化す。謂はく、出世の勝義に迷ふに由りて、無明は福不動業を造り、未來人天の報を求むるなり。先に所化を明し、後に能化なり。前の中に、句別つに十有り。『論』には分ちて三と爲す。一は險道の自體を、名けて體と爲す。二は之に在りて出で難きが故に、障礙と曰ふ。三は、之に在りて出離の善法を失ふが故に、名けて失と爲す。初の中に、善根は旣に少く、人天

の報色をして、顛墜すべきこと、易からしむるを、名けて險道と爲す。二に障礙の中に八有り。初の二は苦に迷ひ、次の二は集に迷ひ、次の二は道に迷ひ、後の二は滅に迷ふ。初の中に、一は苦有り。二は苦に迷ふ。前の中に將墜等とは、謂はく、三途を厭離し、善を造り樂を求むるを、『論』に求出と名くるなり。然るに世に順ずるに、墜惡は是れ過なり。世の險道の危に臨みて、將に墜ちんとするが如し。二に邪見網に入るとは、世の險道の草葛交り横へ、進渉するに由無きが如く、生死の險道の惡見は出で難し。謂はく、人天の實苦に、妄に樂想を生ず。三に爲種種の下の二句の中に、初は集に迷ひ、後は集を造る。前の中に、世の險道の如き、荒榛の闇曀なる有りて、視眄するに由莫し、生死の險道の、癡闇に覆はれて、苦因を識らず。四に隨逐の下は其造集を明す。世の險道の、諸の狹徑多くして、進まんと欲して返りて廻るが如く生死の險道、邪法世に滿ちて、邪に入り正を失ふ。五は常爲の下の二句は、道に迷ふ。初は道體無く、後は道緣無し。初の中に、人の險に在りて、目を失ひ出で難きが如し。凡そ慧眼無ければ、出づることを得るに由無し。謂はく、人天の果に著して、癡愛は心を覆ふ。六は、導師を遠離すとは、道緣無きことを明す。人の、險に在りて、自ら既に目無く、復將導無ければ、進趣するに由無きが如し。『論』の中に生惡道とは、是れ三惡道なり。放逸等は是れ、北洲長壽世智の三難、亦餘の人天處に通ず。佛世に値ふと雖も、見ず聞かず、是れ生盲生聾なり。七に非出要の下の二句は、滅に迷ふことを明す。初の句は正迷、後の句は障有り、初の中に、人の險に在り

【上來の二門…得せしむ】第七に、有求の衆生を明し受報差別を辨ずる文を釋す。

て、東に迷うて西と謂ひ、南に向ひて北に入るが如し。謂はく、涅槃を欲求して、誤りて、梵天の正報、梵世の依報を求む。此は並に初禪は、上を等取し以て涅槃と爲す。八は隨順魔心とは、滅を障ることを明す。人の險に在りて、怨賊に侵され、出離を得難きが如し。凡夫も亦爾なり、惡魔に侵さる、五欲は是れ魔境、煩惱は是れ魔心、貪著を隨順と名く。已有の功德は却りて盡さしめ、未起の功德は集めしめず。下は失を明すに、論經に三有り。初の一は人を失ひ、後の二は法を失ふ。法を失ふが中に、一は離惡法を失ひ、一は善法を失ふ。今此經の中に、略して初の二無し。謂はく、出世の善法起りて、佛心に順ずるを、名けて佛意と爲し、違背するを離と名く。下は能化を明すが中に、二有り。初は令使等は前の險道の自體を治す。二は令住等は、前の障礙を治す、失に反す、知んぬべし。上來の二門は、造業の差別を明し竟んぬ。

第七に、是諸衆生爲煩惱の下は、有求の衆生を明して、其受報の差別を辨ず。亦二門有り。一に道差別とは、五趣流轉の過、二に界差別とは、三界繫閉の過なり。初の中に二あり。先に所化を明し、後に能化を顯す。前の中に初の句は總、欲有の下は別なり。總の中に、「論」に沒在大河過と名くとは、五趣、煩惱の瀑流に漂溺すること、猶し大河の如し。有を求めて中に沒するが故に、是れ過なり。別の中の句に、十三有り。「論」に攝して三と爲す。初は煩惱、是に五あり、河體を起す。二は、之に處して苦多きを、名けて逆流と爲す。三は、出世の道を離るるを、之を名けて失と爲す。又、初は惑體と名け、二は障道を

明し、三は善友を失ふ。初の中に五あり。一に欲有等とは、深きが故に、世河の深きが如きを名けて大河と爲し、四流盈滿するを無量水と名くることを顯すなり。二に、隨生死流とは、流の故に、河深しと雖も、若し流續すること無ければ、則ち枯渴すべきが如し、今煩惱常に流るるが故に、盡くべからざることを顯す。三に入大の下は、河の名を立てて、大河と名くるが如く、其小に非ざることを顯す。有愛の水に沒せらるるを以ての故に、愛河と爲す。煩惱は一に非ず、何が故に愛獨り名を標す。愛は能く潤し、中に漂溺すること強し。生死の連綿たるは、愛を以て本と爲すを以ての故に偏に號を彰す。理實には餘に通ず。四に、爲諸煩惱の下は、漂ふこと急なるを顯すなり。流の若し緩なれば、人在るも出で易く、急なれば則ち度り難きが如し。煩惱若し緩なれば、聖道生ずべし、現行間無ければ聖道發り難し。『論』に念念不住と云ふは、間斷無きが故に。煩惱の勢を釋するなり。不見岸とは、對治無きが故に、不能求等を釋するなり。五に、常爲欲覺の下は、廣きこと河の如し、若し狹ければ、急なりと雖も度るべし。多く惡覺を起すが故に、越ゆること得難きことを顯す。又、河の毒蟲無きが如く、或は濟ふこと易かるべし。今惡覺の蟲の爲に害せらるるが故に、出づることを得難し。下は起難を明す。四の中に、初の一は見執、次の二は是れ愛、一は種子に約して、不滅の故に還來す。二は現行に約して、染著するが故に泥に溺る。後の一は是れ慢なり。人の河に在るに、四事ありて出で難きが如し。一は執住せらる。二は廻流せらる。三は泥溺の爲に、四は枯洲に滯りて彼岸に到らず。

【第八に…入らしむ】第八に有求の衆生界差別を明す文を釋す。

謂はく、愛は心をして下らしむ。河深く流れて、涅槃の山に登らざるに喩ふ。慢は心をして擧げしむ。陸の燋枯して、法水に沾されざるに況するなり。『論』の中に、我を擧げて三種の我慢を等取すとは、下の三地の中の如し。一は我慢、二は大慢、三は憍慢なり。初は下に於て自ら高ぶり、二は等に於て自大とし、三は上に於て恭うせず。餘は論釋の如し。下は失を明す、三の中に初の一は、惡道救ふこと無きの失、後の二は善道出づること無きの失なり。初の一は、出の因を失ひ、後の一は出の緣を失ふ。又釋すらく、後の二の中に、初の一は人天に在りて、出意無きの失、後の一は、八難の異處に生れて、去るの失なり、餘は『論』に顯すが如し。下は能化の中に二あり。先に化心を起し、二に以善の下は化行を成ず。行に四句在り。一は苦因を離れしむ。二は安穩を得とは、涅槃を得せしむ。三は離恐怖とは、苦果を離れしむ。四は住智洲とは、菩提を得せしむ。

第八に是諸衆生深心の下は、界差別を明すが中に、先に所化、後は能化なり。前の中に初は總なり。謂はく、三界に於て、深心貪著し、之に在りて出で難き事、牢獄の如し。下は別して之を顯す。『論』の中に世の牢獄の如く、五種の過有り。一は打棒徒撻、二は資生に費用し、三は親屬分張し、四は枷鎖身に著く、五は出でんと欲するに由無し。三界の牢獄にも亦斯五有り。一は病苦、二は求不得苦、三は愛別離苦、四は愛貪纏縛、五は無明の闇障なり。前の三は苦報、後の二は煩惱なり。『論』の中の五種の難は、翻對して釋するなり。無病の如きは是れ樂、此を障るを難と名く、餘の四も亦爾なり。此中の、多有憂悲と

【有求…知るべし】第九に邪梵行外道の文を釋ず。

言ふは、是れ『論』の中の第三愛離なり。二は苦惱の患難は、是れ初の苦事なり、餘の三は知んぬべし。下は能化の益を明すが中に、前の繫閉を治するが故に、令住無礙涅槃と云ふなり。有求衆生を化し竟んぬ。下は梵行求を化することを明すが中に、亦二あり。初は邪梵行求を化して、邪を捨て正に歸せしむ。後には正梵行求を化して、小を捨て大に入らしむ。

第九に是諸衆生深著我の下は、邪見の諸の外道等を化す。先に所化の中に、初の句を總と爲す。謂はく、諸の外道、先の俱生の著我は重く、復分別の計執脫し難きが故に、深著等と云ふなり。『論』の中に此餘見根本とは、疑を釋するなり。謂はく、何が故に偏に我見を擧げて過と爲る。是れ餘見の本なるを以ての故に斷常等の見は、皆此に依りて起る。下の別の中に六句あり。初の三は、第一義の樂に遠ざかり、後の三は諸苦を具足す。前の中に、初中後の三あり。初は始發の方便無く、次は造行正しからず、後は終趣眞ならず。初に涅槃を求めて、以て蘊を滅せんと欲す。若しは執我に由るが故に、陰宅を出でず。人天は巢の如く、惡趣は猶し窟のごとし。二に常隨の下は造行正しからず、倒想を以ての故に、謬りて異路に行く。三は、依六入の下は、終趣不眞を明す。虛妄の我を計し、涅槃に趣かんと欲して、此我を安置して、妄に梵天、自在天等の、六入の果報を求め、以て涅槃と爲し、妄我の所居と爲す。妄我は實に無きが故に、空聚と云ふ。下の三は具足苦の中に、初の二は內苦、後の一は外苦なり。內の中に、一は四大相違の苦、二は五陰遷逼の苦

【六入】舊に、眼耳鼻舌身意を內の六入、色聲香味觸法を外の六入といふ。

【第十…明す】第十に正梵行同法の小乘を明す文を釋す。

【諸佛子…竟んぬ】二に總結の文を釋す。

【四三】以下、其地の果を明す文の釋なり。

なり。此經は是れ煩惱、善根を殺す。三は受此等は外苦と爲す、亦是れ多苦を總結す、餘は論釋の如し。下は能化の中に二あり。初は道諦に任せしめ、前の我相を治す。二に所謂の下は、滅諦に任せしめ、後の六句を治すること、知んぬべし。

第十は是諸衆生其心の下は、正梵行同法の小乘を化す。先に所化の中に三あり。初は大因を求めず。謂はく、其心狹劣とは、廣く衆生を度すること能はざるが故なり。小法を樂ふとは、大菩提を求めざるが故に。此二心に翻じて、廣大なるを名けて、菩提薩埵と爲す。二は遠離の下は、大果を願はず。上の二は是れ求心の過なり。三に貪著の下は、行を失ふの過を明す。謂はく、不定聚の中に、實に大乘出離の法有り、而も反て小乘の法行を修することを樂ふが故に、是れ過なり。下は能化を明すが中に二あり。初に廣大心に住せしむとは、前の狹少を治するなり。無量の下は、前の願行を治するなり。上來は廣く攝生戒の相を明す。諸佛子の下は、第二に總結す。隨順持戒力と言ふは、前に律儀、攝善を持するに依りて此攝生の力を起す。『論』に持戒行に依るが故に、此戒力を得と名く。是故に能作の善法善巧にして、諸の攝生善行を起すが故に、能廣生大慈悲心と云ふなり。

上の三戒は地體を明し竟んぬ。

(四三)自下第三に、其地の果を明すが中に、三果は前の地に同じ。初に調柔の果に亦三あり。初に調柔の相、二に菩薩爾時の下は、別地を明す。三に是名の下は結なり。初の中に三、法喩合なり。法の中に、初に諸佛を見て、練行の緣と爲す。二は以衣被の下は、能練行を

【四四】第二に重頌を釋す。二十六頌を六に分つ。

明す。三に是菩薩の下は、所練淨を明す。能練の中に二あり。初に佛に供し、二に於諸佛の下は受法なり。戒地を以ての故に、十善法を受くるなり。『論』の中に有とは、同じく調柔等の三を明すこと、前の地に同じ。無とは應に知るべし、發趣無きことを明し、知ることを勸むるなり。此中の勝事等とは、調柔の中の前地に勝過する故に、今略して顯す。所練淨の中に就きて、多劫に二垢を離るるに由るが故に、施戒をして倶に性を淨と成さしむ。前地の戒は、未だ性淨ならず、施をして亦未だ淨ならざらしむ。若し爾らば何が故に、前に施増上と名くる。釋すらく、彼を前に望めて上と爲し、此に至りて轉た勝る。此に因りて略して諸の地行を論ずるに、共に四義有り。一は別に就きて異を顯すに、初地は唯檀なり。乃至第十は、唯智増上なり。二に勝は劣に過ぐることを辨ず、初地は檀勝、二地は施戒、三地は三度、乃至十地は十度なり。皆後を以て前を兼ぬるが故に、後は前に勝れ、前は後を兼ねず。故に前は後より劣る。三は實行修に約するに、一一の地の中に、皆十度を具す。四は證理行に約するに、唯平等平等にして、多に非ず一に非ず、下の諸地は之に准ぜよ。喩合は知んぬべし。別地の中に、口の四過を離るるが故に愛語を兼ぬるなり。攝報の中に、金輪は前に過ぐ。前は百此は千なることは『瑜伽』に云はく、「當に知るべし、威力前に過ぐること十信なり」と。餘の義は『論』の如し、及び前地に同じく應に知んぬべし。

（四四）第三の大段、重頌の中に、二十六頌有り、六に分つ。初の二頌は、前の十種の直心を頌

す。二に四頌有り、前の律儀戒を頌す。三に四頌有り、攝善法戒を頌す。四に八頌有り、攝生戒を頌す。五に七頌有り、調柔等の果を頌す。六に末後の一頌は、結して所説を歎す。

第二地竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第十一

華嚴經探玄記　卷第十二

此は第五地を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

（一）第三に、明地の中に、亦七門を作る。初に名を釋すとは、『唯識』の第九に云はく、「勝定をもつて、大法の總持を成就して、能く無邊妙慧の光を發すが故に、發光地と名く」と。解して云はく、勝定を得るに由りて、修慧の光を發し、總持を得るに由りて、聞慧の光を發するなり。『金光明經』に云はく、「無量の智慧光明三昧は、傾動すべからず、能く摧伏すること無し、聞持陀羅尼を本と作すが爲の故に、明地と名く」と。『攝論』に云はく、「無退轉の等持等至の、所依止とするに由るが故に、大法光明の所依止なるが故に、發光地と名く」と。世親釋して云はく、「此地の中に、三摩地三摩鉢底とは、常に相離れず、退轉すること無きに由るが故に、大乘の法に於て、能く光明作すを、發光地と名く」と。無性釋して云はく、「靜慮を等持と名け、無色を等至と名く。或は等持とは、心一境の相なり、等至は正受現前す。大法光明の所依止とは、大乘教に於て、智光明を得。此地は是れ彼所依の因の故に、名けて發光と爲す」と。解して云はく、地は所發の果法に從ひて、名を爲す。『解深密經』、及び『瑜伽論』の意は『攝論』に同じ。『顯揚論』に云はく、「靜慮三摩地を證得して、大智光明を蘊むるの所依止なり」と。『智論』の四十九に、名けて光地と

【一】以下、十地の第三明地を釋す。

【勝定】四靜慮、無色界の四空定をいふ。

【聞持陀羅尼】四陀羅尼の一。佛の教法を聞きて忘れざるをいふ、陀羅尼は譯して總持といふ。

【等持等至】梵に三摩地、三摩鉢底といふ、一は有心定にして、定散心と三性心に通じ、他は定位のみ散心に通ぜず。

【三摩地】（Samādhi）舊には三昧等といひ、新には三摩地、三昧地等と

爲す。『十住論』に云はく、「廣博にして、多く學びて衆の爲に說法し、能く照明を作すが故に、明地と名く」と。『仁王經』に明慧地と名く、『地論等』は竝に前に準ずるが如し。

第三に來意とは、三有り。一には前は戒、次は定の義の次第の故に、是故に須らく來るべし。二に、前位は能く微細の戒品を持するも、未だ淨く世間の等持、等至を圓滿し、及び聞法總持を圓滿せず。此因を得せしむるが爲に、此地を說きて勤めて修學せしむ。此は『深密經』に依る。三には、初の三地は、總じて世間の施戒修法に寄す、前の二は施戒なり、今此には修を顯す、是故に來るのみ。第三に、所離の障は、『十地論』に依るに、「闇相は聞思修の諸法に於て、忘るる障を離る」と。解して云はく、此れ所得の地と、敵對相翻の故に、此號を立つ。『唯識論』の第九に、「闇鈍障と名く。謂はく、所知障の中の倶生の一分なり。聞思修の法をして、忘失せしむ。彼三地の勝定總持、及び彼所發の殊勝の三慧を障へ、三地に入るの時、便ち能く永に斷ず。斯三地に由りて、三愚及び彼麤重を斷ずと說く。一に、欲貪愚は則ち是れ、此中に能く勝定及び修慧を障ふるとは、彼昔多く貪欲と倶なるが故に、欲貪愚と名く。今勝定及び修所成を得て、彼旣に永に斷じ、欲貪隨ひて伏す。此れ無始より來、彼に依りて轉ずるが故に。二に、圓滿陀羅尼愚、則ち是れ此中に、能く總持聞思慧を障ふ」とは、解して云はく、此れ實には是れ、所知障と欲貪と同體の故に。欲貪愚と名く。貪の妙欲、掉動し散亂するを以て、定の修慧を發すを障ふ。聞持等とは、所障の因の法に從ひて、以て名を立つ。親く、聞思の二慧を障ふるを以て、是

稱す、定又は等持、一境性と譯す。

【三摩鉢底】（Samāpatti）禪定の一種。玄應音義に「定に入らんと欲する時を、三摩鉢底と名く」といへり。

【第二に…來るのみ】第二に當地の來意を明す。

【第三に…知れ】第三に所離障を明す。

【圓滿…愚】大正藏には圓滿聞持陀羅尼愚に作る、

【第四に…爲すと】第四に所證を明す

【第五に…如し】第五に所成の行を明す。

【忍度の行】忍波羅蜜の行。

【第六に…如し】第六に所得の果を明す。

【二】文を釋するに、初に偈頌を以て、解說を讃請する文を釋す。

れ彼總持所起の果の故に。此は是れ、忘念不正知等と同體の所知障なり。『解深密經』及び『瑜伽』『金光明經』及び梁の『攝論』等に、各二愚有り、大いに此說に同じ。又、業障及び報障を離ること有り、前に準じて之を知れ。第四に所證とは『唯識論』に云はく、「勝流眞如とは謂はく、此眞如所流の教法は、餘の教法に於て、極めて勝と爲すが故に」と。『攝論』の第七に、無性釋して云はく、「謂はく、此所流の教法は最勝なるが故に、身命を捨てて此善說を求むるを以て難と爲さず」と。梁の『論』に釋して云はく、「眞如より正體智を流出し、正體智より後得智を流出し、後得智より大悲を流出し、大悲より十二部經を流出す。是故に名けて勝流法界と爲す」と。第五に所成の行とは、略して三種有り。一には、十度の中に、忍度の行を成ず。二には、禪定の行を成ず。三には、求法の行を成ず。『莊嚴論』に云はく、「第三住に能く欲界に生じて、禪を退せざるが故に」と。餘の行は下に辨ずるが如し。第六に所得の別果とは、亦三種有り。一には梁の『論』に依るに、「勝流法界に通達して、無邊の法音果を得」と。二には當位行果なり。『金光明』に云はく、「三地に發心して、難動三昧の果を得」と。又下の文の四無量、五神通も亦是れ、當位所得の果なり。三には、分位の果を顯す。謂はく、忉利天王等の四果は、下の文に說くが如し。

(二)第七に、文を釋する中に、亦三有り。初に讃請分、二に正說分、三に重頌分なり。初の中に、十頌を二に分つ。初の六は、前地を聞くことを慶び、後地を說かんことを請す。前の中に初の一は、聞くを慶ぶの心喜なり。次の一は身業、華を雨し、餘の四は

【三】二に正說分を釋す。

【初分の中…竟んぬ】初に起厭行分の釋す。

語業をもて讃述す。中に於て、初の一は總じて歎じ、次の一は別して說法の心を歎じ、次の一は別して、所說の法を歎じ、後の一は機の爲なることを歎じ、說を結して請に就く。後の四頌の中に、初の三は大衆の請、後の一は上首の請なり。前の中に初の一は、總じて三地の行を請し、後の二は別して、十度の行を請す。

(三)第二の正說の中に就きて、『論』に四分と爲す。一には起厭行分、二には厭行分、三には厭分、四には厭果分なり。此地に禪を修し、煩惱を厭伏するを、名けて起厭と爲し、初入の行心は、彼厭を修起するを、名けて厭行と爲す。趣地の加行、彼厭行を起すを、起厭行分と名け、所起の地の初を厭行分と名く。正住地の中に、八禪等を修するを、名けて厭分と爲し、地滿足するが故に厭果分と名く。又此四分を釋すること、其次第の如くなるときは、則ち是れ加行道、無間道、解脫道、勝進道なり、知んぬべし。初分の中に就きて、三有り。初に結前起後、二に何等の下は、正しく十心を明し、三に菩薩以是の下は、行を結して地に入る。十心の中に就きて、初の二は一對なり。一には離過心なり。謂はく、前の淨戒に依りて、此深念趣禪の淨心を起す。二には善心に住す。謂はく、自所住の大乘の法に依り、堅心動ぜざるが故に、猛利と名く。次の三の一對は、中に於て、初の二は離過、後の一は造行なり。離過の中に初の一は、當來の欲を厭ふが故に、厭心と名く。二に現在の欲を捨つるが故に、離欲心と名く。當來は未だ起らざれば但應に厭ふべし、現在は交交捨す。『論』に不貪と名く。造行の中に、謂はく、前地を捨てざれば、自分の所修、進んで

【三】則の字か。

【四】二に厭行分を釋す。【論に三に分つ】一、修行護煩惱行、二、修行護小乘行、三、修行方便攝行。【初の中云云】此下、護煩惱行を釋するに、初に無常觀の文を釋す。

此地の勝進の行を起すが故に、不退心と名く。次の三の一對は、中に於て、初の一は離過、後の二は成善なり。離過の中に、謂はく、此加行深く三地所斷の煩惱を伏し、彼惑をして過患を成ぜしめず。『論』に釋して云はく『「自地の煩惱の破壞すること能はざるを、名けて堅心と爲す」と。遠師の釋は、前の二地を自地と爲し、辨師の釋は、四禪四空を自地と爲す。皆恐らくは當らず。後の二は成善の中に、初は成善の體、後は成善の用なり。體成ずるが故に、出入自在なるを、明盛心と名く。謂はく、淨の極なり。三摩跋提は、此には等引と云ふ。出入定の名なり。後は用成ずるが故に、受生自在なれば、下地に生ずと雖も、定用を失せず、此れ淳厚なるに由りて、名けて無足と爲す。此二種の心、下の地滿の中に至りて、究竟成就す。下に云はく「禪に於て能く入り、能く出づ」とは、是明盛心、「成ずれば、禪に隨はずして解脫力生ず」とは、即ち此淳厚心なり。下の『論』に、「彼淳厚心、此處に現成する故に」と云ふ。末後の二心を一對と爲す、初の一は離過なり。『論』に「彼生に依る」と名くとは、欲界の生に依るなり。大智を以ての故に、煩惱をもつて汚さざる故に、勝心と名く。後の一は利生なり、大悲攝化して、諸有を斷ぜざるを以ての故に、大心と名く。加行分竟んぬ。

(四)第二に厭行分の中に、『論』に三に分つ。初に、有爲を厭離するを護煩惱と名く。二に、狹劣の心を捨つるを護小乘行と名く。三に上求廣大を方便攝行と名く、又、善增攝するに由りて、八禪等の行を起すが故に、方便攝行と名く。初の中に就きて、二十句有り。先

【下の二】經の敗壞すること、信ずべき相にあらざることの二句。

の十句は無常觀を明し、後の十は救者有ること無きことを明し、人に約して失を顯す。初の中に就きて、先の一句は總なり。謂はく、如實相とは有爲の法、理實には無常なるが故に、實相と名く。『論』に命行不住と名くとは、有爲の諸法、相續するを命と名け、遷流するを行と稱す。則ち此不住を、名けて無常と曰ふ。別の中に二に分つ。初に云何此無常とは、彼有爲に無常せらるるの法を問ふ。二には、何者是無常とは、彼法の上の、無常の義を問ふ。前の中、經に六句有り。中に於て初の四は、內の正報に約し、後の二は外の依報に約す。前の中、一は苦無常に約すとは、『論』に釋すらく、「依身轉ずる時、力苦を生ず」とは、內報遷流するを身轉時と名く。轉じて能く苦を生ずるを、轉と說き力と爲す。苦は轉に由りて生ずるが故に、名けて依身と爲す。其苦を以ての故に、性は是れ無常なり。二には、無我無常とは、論經に此無し。設し諸緣に逢はば、而も便ち壽を損す、自在ならざるが故に無我なり、無我は則ち無常なり。三には不淨無常とは、欲食好惡の力に依りて其形色をして不淨ならしめ、增有り損有り。增損不定なるは是れ無常なり。四には、不久無常とは、論經に無常と名く、此れ乃ち壽の無常を以て、經の無常を顯す。『論』に「諸惡の力を護らざるに依る」とは、嶮を履み毒を食ふを、名けて不護と爲す。此力に依るが故に、身をして夭壽ならしむ。下の二は、依報に約する中に、初は世界に約し、後は資財に約す。初の中に「世界成力に依る」とは、成ずる力に依りて、此滿壞有るに由るが故に、敗壞無常と名く。後の一は、財に定主の力無きに由りて、一處に住せざるが故に、不可信

【或は生滅…如し】生滅流轉有爲無常の義は大小の通談而もこれ瑜伽唯識等の説をいふ。【或は不生…如し】即空無生の法門は維摩等の説をいふ。【或は三種】初二性無常は相宗共許するところなるも第三性無常は暗に隨緣眞如の義を示せり。【小時無常云云】正しく當文を釋する中、小時無常とは、論の念念生滅と、經の不生不滅とを會合す。【三世の中…說く】三世中に於て法の自性を求むるに不可得なりと、緣起甚深の道理を以て無常を明す。【若し生滅門…せず】生滅門の所明にして、有部の意を以て辨ず。【第二に…竟んぬ】次に救者無きことを明す一段の釋な

相と名く。二に何者是無常とは、無常の義を明す。或は生滅流轉を以て無常の義と爲す。大小乘に通ずること、餘處に說くが如し。或は不生不滅を以て、無常の義と爲す。此れ唯大乘なり、『維摩』に說くが如し。或は二種を說くこと、此文の如し。或は三種と說く。一には無物無常。遍計性に約す。二には生滅無常。依他性に約す。三には離不離無常。圓成性に約す。在纏の時を不離垢と名け、障を出で離るる時を、名けて離垢と爲すを以て、斯不定に約するを、名けて無常と爲す。具には『中邊論』及び『佛性論』等に說くが如し。上の二は、並に大乘の終教の說なり。小時無常と言ふは、念念生滅して、暫時も停ること無きを以ての故に。此中に不生不滅と名くることは、謂はく、定んで生ならざるが故に速滅す。定んで滅ならざるが故に還りて生ず。是故に倶不定に約して、亦不生滅と名くるなり。二には自性不成實無常とは、謂はく、三世の中に、法は自性無きが故に、前際の中より來らざるを、名けて不生と爲し、去りて後際に轉ぜざるを、名けて不轉と爲す。現在にも住まらず。此中の三世は、相續門に約して說く。若し生滅門に約するときは、則ち應に當來を來と名け、過去を去と稱すと說くべし。此二門有るに由るが故に、餘處と相違せざるなり。

第二に救者無しとは、初に前の無常を牒す、是れ實なり。知諸の下は、正しく無救を顯す。初に知無作無起と言ふは、無常の法の中に於て、能く其が爲に起作して、救護すること無し。論經に無有救者と名くるは、此は是れ總句なり。無來と言ふ下は、別して辨ず。

り。經の「菩薩は是の如く…幻化の如し」の下。
【無來無去】助くる者來らず、無常を去離する者なき意。
【生蘊】肉身を生成する五蘊。
【三受】苦受、樂受、不苦不樂受（又捨受ともいふ）樂受に依りて貪、苦受に依りて瞋、捨受に依りて癡あり

中に於て初の四は、死に就きて無救を明す。一には、少壯の時に於ては、無常未だ至らざるも、後の死に望めて、所依の苦を、其をして免るることを得せしむること無し、故に無所依止と名く。此中に無來無去と名くるは、依怙の來りて、能く無常をして、去らしむること、有ることと無きが故に云ふなり。二に、年衰へて將に死んとするに於て、無常至るの時、能く救ふ者無し。無常の死の臨むを以て、多く共に憂ふるが故に、憂と名く。謂はく、憂念相續するを、多と曰ひ、心と俱に起るを、共と曰ふ。三には、生蘊の壞する時、死相現前する中間に於て、憂念轉增すを、悲と名く。四には、四大分るる時に於て、諸の苦惱を生ず。上の四は死なんとする時に、無救の相の顯るるが故に、先に於て辨ず。次の二句は、外に愛求する事の中に於て、過患を救ふこと無し。初に、愉愛繫とは、謂はく、追求するの時、其所欲を貪り、其不欲を憎むを謂ふ。顚違の境に於て、愛憎の妄想、常に轉じて捨てず、對治入らざるが故に無救と名く。二には、論經に、憂惱轉多と名くるは、受用の時に於て、樂は少く苦は多し。謂はく、資財を守護するに於ては、怨心乃至失命を致し、苦惱は貧窮の苦よりも多し。此經は略して此句無し。下の四句は、身苦無救に約す。中に於て、初の無停積とは、身の老たる時、小壯の復、恃むべからざることを明す、故に無救と名く。二に無定生處とは、設ひ命盡くる時にも、定んで何の道に生ずることを、知ること能はず、論經に略して此句無し。三に但儩食等とは、小壯の時、三愛に依りて三毒を起し、自ら善根を燒く、亦是れ自身を衰損するが故に、無救と名くることを明す。四に

【五】二に護小乘行の文を釋す。經の「是の如きを見已り…救ふ」等の下。

【前の中に云云】以下、五大は全く論意によれり。

【義利】義とは安樂、利とは利益のこと。現世の樂を與へ當來の益を與ふるをいふ。

増長後世とは、年衰ふる時に於て、無量の病苦増長する所なり。病は始終に通ずれども、老の時に多きが故に。又釋すらく、病に因りて業を造り、後世の苦を増す。無實如幻とは虚妄を明す。『論』の中に重ねて釋す。「後の三句は、初の四と倶に、是れ身患の事なり、何んが初の一處に在りて、同じく身の數數の過患の事を說示せざる」とは、身の患の多きを顯すが故に。護煩惱の行竟んぬ。

(五)第二に護小乘行の中に、初の十句は小心を護り、後の二十句は狹心を護る。前の中に、初は總、後は別なり。總の中に先づ前を牒す。謂はく、初に無常を觀じ已りて、厭心を生ず。復無救を觀じて、轉じて更に厭を生ず、故に轉復厭離と云ふ。下の趣佛は、謂はく、正しく小乘の小心を護りて、佛の大果を求むるが故に、趣佛智慧と云ふ。下は別して辨ずる中に二有り。初の五句は、佛菩提を求む。『論』に攝功德大と名く。後の四は大涅槃を求む。『論』に清淨大と名く。前の中に、一は通力大。佛の神通測り難きを知るが故に、知不思議と云ふ。智は卽ち是れ神通の體なり。二に無比大。寄對して勝を顯すに、敵對有ること無きが故に、不可稱と云ふ。論經に無等と名く。上の二は、妙用自在なることを明す。三は大義大。謂はく、無量の衆生を義利するが故に、有大勢力と云ふ、此れ利他の德なり。四は無譏嫌大。希有にして得難きが故に、無能勝者と云ふ。『論』に難得と名く、此れ自利の德なり。五は不同大。亦寄對して勝を顯す。理實には外に異なり小を越え、因を超えて勝るるを顯す。今論主は首より說くが故に、不雜外道と云ふなり。上の三は行德の圓備を

【第二に狹心云云】經の「是の如く佛智の無邊」等の下。

【佛の慈…釋す】少くして父なきを孤、老て子なきを獨といふ、對比して知るべし。

顯す。第一に、涅槃の淨果を求むるが中に、論主は、初には總じて釋するに、擇して三義と爲す。一は惑を離れ、二は苦を離れ、三は涅槃を得す。二は別の中に、初は二障及び習を離るるが故に、無累と名く。二は苦の根本盡き、憂悲も亦亡きが故に無惱と名く。三は涅槃を得する中、經に二句有り。一は涅槃安隱の大城に至るを、自利の德と名く。二は彼に至りて還らず、能く廣く利益するが故に、救苦衆生と云ふ。此は是れ無住涅槃なるが故に。第二に狹心を護る中に、初の十は悲を起し、後の十は救度なり。亦是れ先は悲、後は慈なり。初の中に、先に前を牒して後を起し、數を擧げて總標す。謂はく、佛智の勝利を見ては、物の不得を傷み、有爲の苦惱を觀じては、物を愍みて之を憂ふ、是故に殊勝の悲心を轉生す。二に何等の下は、正しく悲行を顯す。中に於て、初の句を總と爲す。諸の衆生は、佛の慈父に遠かるを以て、孤と曰ひ、智悲の男女無きを、獨と稱す。此孤獨の、苦に在りて救ひ無きに由りて、深く可愍を成ず。餘の九は別の中に、初の二に欲求の衆生に依る。一は財を求めて厭くこと無きを、貪無依と名け、二は他の資財に於て、非分に惑を起し、求めて休息無きが故に、三毒等と云ふ。下は三に有求の衆生に約す。中に於て、一は苦果未だ脱せず、三界六道の輪轉絶えざるが故に、閉在等と云ふ。二に苦因は除かず。謂はく、煩惱に覆はるるは、是れ彼苦因の故に、常住等と云ふ。三に無對治力なり。謂はく、難處に生在し、善の導師を離れ、善根の治無きが故に、無正觀力と云ふ。下は因に先行求の衆生に約す。初の三は小乘、後の一は外道なり。前の中に、初は大因を求めざるを、

【懐增上慢】梵行を求むる衆生、大菩提の果を求めざるをいふ。
【無餘涅槃】餘とは、生死の因たる惑業は盡きたるも有漏の依身の苦果猶ほ餘すをいふ、今はそれをも餘すなく命終の時に顯るる果なり。
【變易生死】阿羅漢以上の聖者の受くる生死。
【前地後地】第二地と、第三地以去をいふ。

不起勝念と名くが故に、於善法心薄と云ふ。唯、小善を樂ひ、大善を樂はざるが故に、薄と名くるなり。二に、大菩提の果を求めざるが故に、失佛妙法と云ふ。謂はく、妄に小果を取り、恃みて究竟と爲すを、懐增上慢と名く。三は、大涅槃の果を求めざるが故に、而常隨等と名く。謂はく、縱ひ小乘の無餘涅槃を得れども、常に變易生死の水に隨ひて流る。下の一は外道の過なり。妄に邪道を行じ、眞の涅槃を怖る。第二に正しく救度する中に、初は前を牒して後を起し、總じて救心を發す。此は是れ總句なり。下の九は別の中に、初の三は三障を除き、度處を顯す。次の五は三學を授けて、度行を明すなり。後の一は、苦をして滅せしむ、則ち度果なり。初の三の中に、應に其業結を解きて、其惑染を淨め、其苦報を脫せしむべきが故に云ふなり。次の五は授行の中に、初の二は三學を授く。謂はく、一は勸めて、持戒の處に置くが故に、著善處と云ふ。勸めて定慧の處に、住せしむるが故に、令安住と云ふ。何が故に、定慧合して一句と爲すや。前地は、戒は分戒を成ずるを以て、別に辨ず。後地は明慧の位、未だ至らざるが故に、慧は定に從ひて說きて、合して一句と爲す。『論』に云はく、「三昧地の故に、定慧合して說く」と。下は三に授法利益を明す。初の二句は戒に約す。一は、戒を受けんと欲する者は、戒の疑を除き、戒を信重すれば、大功德有り、受を樂はしむるが故に、名けて歡喜と爲す。二は、已受戒の者には、示すに持犯を以てし、及び戒の德を顯して、心をして住を樂ひ、安固不動ならしむ、故に令知所宜と云ふ。後の一は定慧に約す。謂はく、掉沒は定を障へ、煩惱は慧を障ふ。此二を滅除

【餘無餘】有餘依無餘依涅槃。

【八】三に衆生を攝護する爲の行を修する一段の釋なり。

【有爲の過…因りて】三地の菩薩、衆生有爲有漏の過多く、また其を出離し得ざると、佛智甚深にして利潤多きも、未だ此法を護らざるを觀見する意。

【無生慧】生滅を絶したる涅槃の境を觀照する智慧。

して、定慧成就するが故に、令得度と云ふ。又釋すらく、掉は是れ掉擧にして定を障ふ。沒は是れ惛沈にして、慧を障ふ。煩惱は通じて障ふ、此は是れ細惑なり。行人に隨逐するが故に隨と名く、隨煩惱には非ず。是れ使なるを以ての故に。下の一の救度攻とは、餘、無餘の二種の涅槃を、得せしむるが故に、使滅苦と云ふ。

(八)第三に修方便攝行の中に、先に意を述べ、後に文を釋す。初とは、菩薩、前に、有爲の過多きと、衆の未だ出ざると、佛智の大利を衆生の得ざるとを觀ずるに因りて、復衆生は惑業苦に墮す。何の方便を以てか拔きて得樂せしめんと念ず。即ち知る、佛の無礙智を離れざるの智は、何に由りてか生ずる。即ち知る、八地上の如實智を離れざるの實智は、何に由りてか生ずる。即ち知る、四地已上の無行慧を離れざるの慧は、何に由りてか生ずる。即ち知る、三地の禪定を離れざるの定は、何に由りてか得る。即ち知る、聞法を離れず。是故に、菩薩は先に正法を求め、既に聞法し已りて、靜處に思惟す。思已りて修習して禪無色に入り、定に依りて法を觀じ、無生慧を起す。此に依りて漸增して、無功用の如實智を生ず。此に依りて漸增して、佛の無礙智を生ず。智を得已りて、能く衆生界を盡し、苦を拔き樂を與へ、常に化して絶えず。文の意は此の如し。是故に名けて方便攝行と爲す。二に文を釋せば、此文の方便に其五重有り。一は、起觀方便なり。謂はく、上の三心を牒して、後の觀求を起す。二は、即時欲其の下は、起方便を標す。謂はく、其佛慧を標して、行の所趣を彰す。三は、作是思の下は、觀求方便なり。謂はく、度衆生の法を觀察し推求

【論主は云云】論に依りて起觀の義を述す。

【三種の因】一、遠離妄想因。二、不捨世間因。三、發精進因。

【衆生墮…有り】經に「諸の煩惱の中に墮在す」とあるも論には「煩惱業中」とあるをいふ。

【問ふ云云】次に問答して釋成するに、初に度法已說問答。

【問ふ、若し…なり】次に佛智已說問答。

【小涅槃の…云ふ】畢竟樂を釋す。

す。四は、即時知住の下は、正知方便なり。謂はく、佛智の能く衆生を救ひ、乃至、智は聞法に由ることを知る。五は、菩薩如是知已の下は、攝修方便なり。謂はく、聞法の行を修し、正法を攝取す。初の中に三あり。初は上の護煩惱の行を牒す、故に如是厭等と云ふ。二は、上の護狭心行を牒す、故に深念衆生と云ふ。三は、上の護小心を牒す、故に見一切智等と云ふ。論主は此三心に依りて、能く後の行を起すが故に、此三を說きて三種の因と爲す。初の一は知んぬべし。後の二の中に、精進の因を發すとは、佛智の利する有りて、能く衆生を救ふを見る。是故に、此に因りて大精進を起し、彼因行を修す。『論』に云はく、「能く彼道を修行するが故に」と。深念を因と爲すが故に「能善く衆生と化す」と。二に起方便を標する中に、『論』に云はく、「如來の智慧に依りて衆生を救度す、此を示現發起方便攝行と言ふ」と、故に名くるなり。三に觀求方便の中に、衆生墮苦等は、論經に亦業の字有り。問ふ、『前の救度の十心の中に、惑業苦の處に於て三學を以て救度す。何が故に今何の方便を以てか之を拔濟せんと言ふや。』答ふ、『前に戒等の度法を知りて、未だ何の智慧を用ひて、能く此法を授くることを知らず。』問ふ、『若し爾らば、前の小心を護る中に、已に如來の智慧に大勢力有りて能く衆生を救ふと知る。何が故に今、以何拔濟と言ふや。』答ふ、『前に佛智の能救を見ると雖も、佛果は當に在りて、未だ現に用ふべからず。謂はく、佛智の外に於て、更に餘法有りて、能く救濟せんや不やと。故に以何方便と云ふなり。小涅槃の彼化城に同じきを簡びて、究竟と爲すに非ざるが故に、畢竟之樂と云ふ。』

【淨禪】是れ世善定にて、無貪等の諸淨法と相應して起るなり。

第四に正知方便の中に、若し具にせば五法四對有り。『論』に攝して、三と爲す。五と言ふは、一は無礙解脱の慧、二は如實智、三は無行慧、四は禪定、五は聞慧なり。四對とは、一は聞に依りて禪を得、二は禪に依りて慧を發し、三は慧に依りて實を得、四は實智に依りて無礙慧を得。攝して三と爲すとは、初の一は、佛果を窮盡するを證し畢竟盡と名け、末後の聞慧を名けて、第三の彼起依止行と爲し、中間の三種を起上上證畢竟盡と名く。此三種は皆、下は他に從ひて起り、上は能く他を起し、漸增して佛に至ること、有るを以ての故に、攝して一と爲し、上上等と名く。然も此五の中に、初は唯所起、後は唯能起、中間は二に通ずるが故に、合して一と爲す。此經の中の如實智の內に、略して不離の言無し、無行慧の中に不離禪方便を略す、餘は論釋の如し。應に知るべし、自相は是れ現量の境、同相は是れ比量の境なり。皆緣ずること有りて、造するを行と名け、空を證し此を捨つるを、無行慧と名く。此は是れ四地の法、此地に但彼慧光明を得るが故に、明地と名く。例へば、地前の明得定等の如し。勝進禪と言ふは、小乘の中の淨禪に四有り。一は退分、二は住分、三は勝進分、四は決定分なり。今は則ち是れ、此第三勝進は、前の趣地方便の中の、禪に望めて說くを以て、此を勝と爲すなり。決定と言ふは、是れ決定分なり。謂はく、他の四地に於て、決定して向ふが故に。自智觀と言ふは、所生の慧明に簡異す。是れ此地の菩薩、知觀するが故なり。餘は論の如く知れ。

第五に攝修方便の中に、初は前を牒し、後を起す。謂はく、前は救度を爲し已りて、大

【或は所求の法體に約す】是れ今家の加ふる所、論の如前說の文に依りて、此義を立つ。【未だ教…是なり】或はいふ未の字、末の字か。今現、本に隨ひ釋せんか、求正法の行、法體は前に說くも、教義は未だ說かず、其教義とは今の經の十一句なりの意

精進を發す。今此は、正しく所聞の法要を知りて、勇猛に追求するが故に、求法轉加精勤と名く、此は是れ總句なり。二は、日夜の下は、別して顯す。中に於て二有り。初に求行を明し、二に菩薩如是方便の下は、法を重んずるの心成ずるを顯す。亦は則ち、初に聞慧を顯し、後に聞慧の因を明す。前の中に、此十一法の中に、或は總じて所受を解くに、唯教と義となり。謂はく、初の五は教法を求め、餘は並に義なり。或は所成に約して、具に三慧を成ず。謂はく、初の五は聞慧の法、次の一は思慧の法、餘の五は修慧の法なり。是義に依るが故に、論主は名を釋して云はく、「聞思修に隨ひて、照法顯現するが故に、明地と名く」と。或は所求の法體に約すれば四有り。初の五は教法を求め、次の三は理法を求め、後の三は行法を求む、略して果法無し。彼は是れ正所行に非ざるを以ての故に。『論』の中に、「前に說くが如し」とは、次前の段の論文、未だ教義を說かざる是なり。一に日夜に聽く等は、慢惰の心無きを以ての故に。二に聞法喜悅とは、妬忌の心無きを以ての故に。三に法を愛し、義を問ふ、他心を折伏すること無きが故に。四に依法とは、大乘の教に依りて、自見正しく取りて、忘失せざるが故に。謂はく、自ら悟りて他に由らず。五に法に順ずとは、披讀習誦、聖言に順ずるに依るが故に。六に滿法とは、靜處に思惟し、義圓滿するが故に。七に法を辨ずとは、教に順じて宣明し、他の爲に說くが故に。八に究竟法とは、定に依りて修行するが故に。謂はく、此三地は、定を以て成ずれば、究竟と爲すなり。九に歸法とは、謂はく、四地已上の出世間、無漏の智を求むるの法なるが故に。

十に求法とは、後の諸地を求む、大悲攝生法の故に。論經に此句無し。十一に隨順法とは、八地已上の無功用の行を求め、法に隨順して、能く佛果の解脫無礙智を起すが故に。此十一の中に、初の二は常勤行を示現するが故に。是れ此地の能求の法行なり。歡喜等の下は、正しく修行の故に。是れ所求の法行なり。

第二に重法の中に二あり。先に能求の法因を明し、二に又如所聞の下は、所求の行因を顯す。又亦前は法を求め、後は義を思ふ。前の中に、『論』に云はく、『彼常勤行は何を以て因と爲すとは、能求の法行の因を問ふなり。示敬重等は、略して重法の爲に因と爲り、求法の行を起すと答ふ。敬重の極の故に、畢竟盡と名く。是故に身財等を惜まず。文の中に、重法校量するに、略して十事を擧ぐ、一に寶を輕んじて法を重んず。中に於て、初より不生難想に至つて、法の爲に財を捨つ。二に、但於說等は、人を重んじて寶を輕んず、二に爲求の下は、能く內外を捨つ。中に於て、初に總國土の下は別なり。別の中に初は外なり。前の財は捨て易く、國宅は難きが故に、次に之を辨ず。『論』の中に、財所得の處と名く。妻妾の下は內なり。『論』に、財所爲と名くとは、是れ妻等なり。國は外財にして、捨て易く、妻等は難きが故に、次に辨ず。三に又爲の下は、形を盡して給使す。經に云はく、「乃至身を以て床座と爲す」等と。『論』に及彼所爲と名くとは、是れ前の內外の所爲、謂はく自身なり。餘の物は捨て易く、己身は難きが故に、次に明すなり。四に爲破除の下は、慢を破りて苦を忍ぶ。先は慢を破る。上に於て恭くせざるを憍慢と名け、我を執し、

【三千の重寶】三千大千世界に滿ちたる珍寶の意。

【七】以下、第三に厭分の文を釋す。經の「是菩薩は諸法を聞き已りて」等の下。

【初】恐くは文の字か。

【三に…實を明し】下の隨釋に准ずるに、此文、恐くは衍。

【初の中…故に】隨釋するに五あり初に入意を明す。

下を陵ぐを我慢と名く。等に於て自ら大なりとするを大慢と名く。並に能く法の爲に破除せらる。前の身敬は爲し易く、心慢は遣り難し、故に次に之を辨ず。『論』に云はく、「彼高大の意は、此れ亦能く捨つ」と。五に諸惡の下は、苦を忍び法を求む。情慢は捨て易く、身苦は忍び難し、故に次に之を辨ず。六に若得の下は、重寶を得るに過ぎたり。三千の重寶は離し難きが故に。七に輪王を得るに勝る、人中の上の故に。八に帝釋を得るに勝る、欲天の上の故に。九に梵王を得るに勝る、色天の勝の故に。十に身を捨て火に投ず、具には第六廻向の中に、説くが如し。此は是れ事を以て自ら要とするも、求心の鄭重は、難として能はざること無きことを顯す。悉能正觀とは、是れ繫念思惟して、其義旨を得るなり。『論』の中に、正修行の因を釋す、餘は『論』に辨じ釋するが如し。起厭行分竟んぬ。

(七)第三に厭分とは、則ち是れ修慧なり。又前は正法を聽聞し、及び繫念思惟することを明す。今は如説修行を明す故なり。文の中に三有り。初は前を牒して後を起す。二に菩薩如是の下は、正しく厭の體を顯す。三に順諸法の下は、入禪等の意を明す。初の中に、先に四禪を明し、後に四空を顯す。四禪の中に就きて、略して七門を作る。一に入意を明し、二に體性を顯し、三に支數を立て、四に假實を明し、五に廢立を顯し、六に名を釋し、七に相を辨ず。初の中に通じて論ぜば、何が故に、菩薩禪無色に入り、無量の神通ある。『論』に釋すらく、「五種の衆生の爲なり。一は、禪樂の憍慢の衆生の爲の故に、諸禪に入る」と。解して云はく、世間四禪の樂を得て、恃み著して慢を起し、化するに道を以てすること難

【二に…約す】二に體性を明すに、八門を以てす。

【三は同じく…有り】前の十一法の中、三受は受の心所を開けるもの、今一とするが故に九法となる。

【三には會假門云】上の二門は小乘薩婆多部に依て明す、以下は大乘に依る。會假とは假立の法を融會して實法に從はしむる意。

き有り。菩薩、現に入り、彼所得に過ぎて彼慢心を息め、之に接くるに道を以てす、而も自ら味著せざるが故に、還りて之を捨つ。「二は、無色解脱の憍慢の衆生の爲の故に、無色定に入る」と。解して云はく、無色定を得て、涅槃と謂ふこと有れば、入を示して之を化す。三は、苦惱の衆生の爲に、慈悲無量に入る。四は、解脱を得るの衆生の爲に、喜捨無量に入る。五は、邪歸依の衆生の爲の故に、勝神通力に入り、正信ならしむるが故に。

二に體性とは、八門有り。一には隨事門とは、薩婆多宗に依るに、支は十八と雖も、事は但十一なり。謂はく、初定に五法あり。一は尋、二は伺、三は喜、四は輕安、五は一心なり。二定の中に內信を增し、足して六法と爲ることを成ず。三定の中に、更に捨念正知樂を增す、輙して十法を成ず。四定の中、不苦不樂の故に、十一と爲す。喜樂及び不苦不樂、此三別に說くを以ての故に。二には攝略門とは、喜等の三、別に說くを以ての故に。三は同じく是れ受數の名にして、唯九法のみ有り。一は尋、二は伺、三は定、四は慧、五は受、六は念、七は輕安、八は行捨、九は信なり。論に曰はく、「安捨念は各二、受定は各四に分つ、尋伺と信慧とは、位を守りて支を分たず」と。釋して云はく、輕安を二に分つ。謂はく、初禪二禪に各樂有り。捨念亦二に分つ。謂はく、三禪四禪は、各行捨及び念有り。受は四に分つ。謂はく、初禪二禪の喜、三禪の樂、四禪の不苦不樂なり。定は四に分つ。謂はく、四禪各心一境の性有り、信は是れ內淨、慧は是れ正知なり。三には會假門は、大乘宗に依らば、體は唯七法なり。謂はく、初は二定の樂、亦是れ受數なるを以ての

【捨念…四禪】第三四の二禪、各各行捨正念の二あり。【定は四】四禪各心一境の性あり。【受は六】初禪喜樂、二禪喜樂、三禪樂受、四禪捨受【又不定云云】以下、六位の心所に就て七法を述す。【重攝門】前は小乘の十一、九法を七となし、今は又五とするをいふ。【會相門】此は始教空門の所說、前の二門は始教有門の所說なり。【事盡門】是れ終教にして、一切諸法眞如隨緣の所作其本性を窮めば眞如本覺に還る。【第三に…除く】三に廢立を明す

故に、輕安を除く。二禪の內淨は、捨念正知の上に依りて、假立するが故に、信を除く、是故に唯七なり。頌に曰はく、「捨念は各二に分つ、定は四、受は六有り。尋伺と及び慧とは、位を守りて支を分たず」と。捨念各二に分つとは、謂はく、三禪、四禪なり。定に四とは、謂はく、四禪なり。受に六とは、謂はく、初の二に各喜樂、三に樂、四に不苦不樂なり。又不定の四の中に二、謂はく、尋伺なり。別境の五の中に三、謂はく、念定慧なり。遍行の五の中に一、謂はく、受なり。善の十一の中に、一、謂はく、行捨なり。四には重攝門とは、唯五法を以て性と爲す。尋伺の二法とは、慧を用て性と爲すを以ての故に。此上は初教に約す。五に會相門とは、此上の禪支は當相即空にして皆所有無し、是れ禪支の體なり。『智論』の如し、勘べよ。六には事盡門は、則ち此禪門の內に如來藏眞如の功德を攝す。『勝鬘』等の經の如し勘べよ、此は終教に約す。七には泯絕門とは、無定無不定と謂ふが如し。『文殊巡行經』等の如し、勘べよ。此は頓教に約す。八には融攝門なり。謂はく、此定門は則ち無邊自在法界の相を攝す。即入等は、下の離世間品の如し、勘べよ。此は圓教に約す。

第三に廢立とは、八門有り。一は無爲に約す。問ふ、『無爲は是れ清淨の法なり、何んが禪支を立てざるや。』答ふ、『禪支は是れ有爲の故に。』二は色行に約す。問ふ、『色及び不相應行は、是れ有爲なり、何んが禪支を立てざるや。』答ふ、『禪支は是れ有行有緣相應の法、彼は非行非緣非相應の故に、支と立てず。三は心王に約す。問ふ、『心王は心法の所依爲り、

【四は心法に約す云云】上既に五類中、色心不相應無爲を廢す、今心所の中に廢立あり。以下五番の問答を設けて五十一心所の廢立を辨ず。一に遍行の問。

【對治支】下地の雜染等の障を厭離するをいふ。

【利益支】治斷を成辨し、自地所得の法を潤すをいふ。

【問ふ…立てず】二に別境の問。

【彼二の依止の自性】對治と自益を作す所依。

【問ふ…立てず】三に善の十一に就いて問答す。信の下は廢の所由を辨ず。

是れ相應法なり、何んが禪支を立てざるや。答ふ、『禪の義に隨順す。是れ支の義なり、心王は但依と爲りて、別に心の用に攝すること無し、是故に支と立てず。四は心法に約す。問ふ、『等く是れ心法なり、何が故に、遍行の五の中に、唯受を支と立てて、餘を立てざるや。答ふ、『汎く禪支を論ずるに、要ず三義を具す。一は是れ對治支、二は利益支、三は彼二の依止の自性なり。中に於て、隨つて一數に入らば、隨順の義有り、是れ支の義なり。受は四禪に通じて、利益支なるを以ての故に、是故に支と立つ、作意は心を警め、觸は三和して生ず。想は境の分齊、思は能く心を役す、各起心に順じて靜慮に順ぜざるが故に、支と立てず。問ふ、『別境の五の中に、何が故に念定慧の三を支と立て、餘の二を立てざるや。答ふ、『定は是れ心一境の性、通じて四禪の彼二依止の自性と爲す、念は是れ、三四の對治支の故に、所治の過患相を明記するが故に。慧は是れ三禪の對治支にして、所治を分別して深く過を見るが故に、各隨順すること有るが故に、支と立つることを得。欲と及び勝解とは、境に於て希望し、所縁を印持し、各定に順ずるに非ざるが故に、支と立てず。問ふ、『善の十一の中に、何が故に唯行捨を支と立て、餘の法を立てざるや。答ふ、『捨は是れ三禪四禪の對治の支、能く彼所治の障を捨つるを以ての故に、是故に支と立つ。信は深く忍し樂し欲し、心を淨からしむるを性と爲す。慚とは賢善を崇重し、愧とは、暴惡を輕拒す。無貪とは無著を性と爲し、無瞋とは無恚を性と爲し、無癡とは理事を明かに解す、精進とは勉勵策發し、不放逸とは惡を妨げ、善を修む、不害とは有情を損せず、輕安は靜慮に

【問ふ…立てず】四に不定の煩惱に就いて問答す。

【問ふ…立てず】五に大小煩惱廢捨に就いて問答す。

【五は支分云云】此下、支の當體に就いて明す。初に、對法支を明すに、五番問答あり。

【問ふ、輕安は…立てず】以下、二番の問答は利益支を明す。

於て隨順の義無し。三位に入らざるが故に、支と立てず。輕安は定に在りて、身心を調暢し、喜捨の爲に覆はるれば、亦支と立てず。』問ふ、『不定の四の中に、何が故に尋伺を支と立て、餘の二は支に非ざる。』答ふ、『尋伺は是れ初禪の對治の支、惡作は追悔、睡眠は、昧略にして、皆定に順せざるが故に、支と立てず。』問ふ、『大小の煩惱を、何んが支と立てざるや。』答ふ、『禪は濁染ならざるが故に、彼は立てず。』

五は支分に約すとは、問ふ、『等く是れ隨順の義、是れ支の義なり、何が故に、初定は尋伺を以て對治と爲し、內淨等を立てざる。』答ふ、『此れ定の初と爲すが故に、欲界の過患を尋求伺察して、而も能く彼欲等の尋伺を治するが故に、此支を立つ。內淨は此尋伺の麤相に覆はるる爲の故に、體は顯に現ぜず、是故に立てず。』問ふ、『捨念正知とは、何が故に二禪に、合して內淨と爲し、三禪と四禪とには、方に乃し之を分つや。』答ふ、『二禪の捨等は、喜の麤相に覆はるるが爲の故に、是故に分たず。但し外の尋伺を離るるに約して、名けて內淨と爲す。』問ふ、『等く三法を分つ。何が故に、第四に正知を立てざる。』答ふ、『正知は明顯なり、四定の行捨は其相微隱なり、相違すれば立てず。又勝れたる捨の爲に、覆障せらるるが故に、勝捨受は是れ明分無し。正知は是れ明にして、相違害するを以ての故に、是故に立てず。』問ふ、『輕安は定に在りて一切地に有り、何が故に輕安支を立てざる。』答ふ、『輕安は浮動す、初二靜慮は喜受浮動すれば、所覆に相順ず。三四靜慮は行捨して沈靜なれば、所覆に相違すれば、總じて支と立てず。』問ふ、『若し爾らば、小乘は何が故に、

【五識】眼、耳、身の三。色界に通じて香味の二境なし。故に鼻舌の二識なきなり。

【六に建立…立つ】六に四禪に支を立つに、員數不同なるを問ふ。

【問ふ云云】以下三番問答ありて四句を作る、初禪を以て二、三、四禪に對する別あり。

【初二に非ざる有り】三禪の捨念正知、四禪の捨念捨受。

【第二等を云云】三個の四句あり。卽ち第二禪と四と相對の四句。第三禪と四に通ずる相對の四句。第四禪と、四に通ずる相對の四句とあり。

初の二に輕安支と立つるや。』答ふ、『彼は欲界の五識身、及び初定の三識身を除くに據る。各所引の身の、麤重を除くが故に、輕安を立つ。後に二三定の中には、是の識身、及び所引の身の麤重の、對治すべき無きを以ての故に、三四定には輕安を立てず。今大乘に依るに、是れ樂受の攝の故に、別に立てず。』

六に建立に約すとは、問ふ、『禪に既に四有り、支數應に同なるべし、何が故に、初と三とには各五有り、二と四とには各唯四なるや。』答ふ、『欲界は欲惡を除き難く、二定の喜深くして離れ難きが爲に、牢强の對治を爲さんと欲す。是故に初禪及び三には、各五支を立つ、初定及び三は、此れ遣り難きこと無きを以て、是故に二四には、唯四支を立つ。』

七に決擇に約すとは、問ふ、『若し初定の支ならば、亦二禪なりや。』答ふ、『應に四句を作るべし、是れ初の支にして、第二に非ざる有り。謂はく、尋伺なり。是れ第二にして、初禪に非ざる有り、謂はく、內等淨なり。初二に通ずる有り。謂はく、喜樂定なり。初二に非ざる有り。謂はく、上の說を除く。』又問ふ、『若し是れ初の支なれば、亦第三なりや。』答ふ、『亦四句を作る。是れ初禪にして、第三に非ざる有り。謂はく、尋伺喜なり。是れ第三にして、初禪に非ざる有り、謂はく捨念慧なり。亦は初禪、亦は第三なる有り。謂はく、樂及び心一境の性なり。是れ倶非なる有り。謂はく、上の說を除く。又尋伺喜樂は、是れ初にして四に非ず、捨受捨念は是れ、四にして初に非ず、心一境の性は、亦は初なり亦は四なり。上と相違するは、初に非ず四に非ず。第二等を以て餘に望むるに各四句あり、

【尋伺樂不苦不樂】初禪の尋伺、初二三禪一一の樂受、第四禪中の捨受。

【或は道支…非ず】七覺支是れなり。

【第四に業云云】已に四禪の體を出し、廢立を辨じ體性を顯せしを以て、次に業用を明す。初に發智斷惑に別あるを明す。

【諸の外道…得】有漏の六行觀を以て欲界倶生の惑を伏して初禪定を得。

【無想を…爲す】無想定を修して無想天に生れ、これを涅槃とす。未だ無色の四定を知らず、況んや出世の無漏定あるをや。

【超入…首尾超す】是即ち次第出入に對する四別。

之に準じて見つべし。』八に道品に約すとは、問ふ、『若し是れ禪支も亦道支なりや。』答ふ、『應に四句を作るべし。或は是れ禪支にして道支に非ず。謂はく、尋伺樂及び不苦不樂なり。或は道支にして禪支に非ず、謂はく、精進、信、輕安、正思語業命なり。或は倶なり、謂はく、喜行捨念定慧なり。或は倶非なり、上の所説を除く。』

第四に業用とは四有り。一は發智斷惑に約し、二は發通起用に約し、三は諸定超間に約し、四は定用自在に約す。初の中に、若し諸の外道、四禪を修得すれば、有漏智を起し、欲界の惑を伏して上界に生ることを得。或は無想を取りて、以て涅槃と爲す。若し諸の小乘は、此に依りて、能く無漏の聖智を發し、人我の惑を斷じて阿羅漢を得。若し菩薩の人は、或は衆生の爲に、世定に入ることを示し、而も隨つて生ぜず。或は復此に依りて、無相無生等の觀を成じ、眞の聖智を發して二障を斷除し、佛果を成ずることを得。若し普賢等、及び諸の如來は、此に依りて、百千の三昧に入ることを示す。第二に發通とは、外道は此に依りて、五通を發起し、過未等を見て、諸の邪見を起す。二乘は此に依りて起す所六通あり。然るに限分有り。菩薩は此に依りて、五或は六を發し、分齊小に過ぎ、位に隨ふ。應に知るべし。普賢及び佛は、此に依りて發す所、或は六、或は十、皆、限分無し。第三に諸定超間とは、外道は定に於て自在を得ず。二乘は或は次第出入有り。或は九定に於て、次第を超入し、或は雙超し、或は首尾超す。菩薩は能く一定に依りて、百千の定等を出し、普賢及び佛は、能く塵數の定に入り、一一に復各塵等を生ず。是の如く自

【初敎の…爲す】初敎中、第二禪已上、五識皆無の法相に依りて辨ず、但し一分俱起を許す。

【圓敎ならば…故に】これ三乘一相の所談に異り、一起用無盡、定用相即するをいふ。

【七に相を辨ず】七は五の誤か。以下四に分ち、初に初禪。

【諸障同じからず】異說を敘ぶ、即ち婆沙三十八、四十八等、成實論十五の十五丁、智論八の十八等を擧ぐ。

在にして、限量有ること無し。第四に定用とは、外道は總じて無し、二乘は只定に依りて、用を發す有り、定に即して、用を爲すことを得ず。若し初教の菩薩は、定中に在りて、五識の業用無しと雖も、前の觀力に由りて、餘識を發して、作用有ることを示すを、說きて俱起と爲す。若し終教の菩薩は、能く定に即して則ち用、雙行自在なり、理事無礙なるを以ての故に。若し頓教の菩薩は、定用一と爲り、兩名を雙絶するが故に。若し圓教ならば普賢は則ち定に在りて用を起すことを爲す。而も定相を改めずして、二事相即するを以ての故に。

七に相を辨ずとは、四門を則ち四と爲し、一一の中に、各四義有り。一は障を離る、二は修行對治、三は修の利益、四は彼二依止三昧なり。初禪は離欲等とは、離障を明すに諸障同じからず。毘曇に依るに五欲を離るるが故に、離欲と名け、十惡を斷するが故に、離惡と名け、五蓋を除くが故に、離不善法と名く。成實に依らば、貪欲心を離するを、名けて離欲と爲す、離欲を以ての故に、亦殺等を捨つるを、離惡不善の法と名く。『智論』に依らば、五欲を離るるを離欲と名け、五蓋を除くを、離惡不善と名く。又諸欲覺の惡行の、極下の惡處に墮するを、欲惡と名け、生善品に違ふを、不善と名く。或は總じて、欲界の諸惡不善、俱に皆捨離す。『雜集論』の第八に依るに、云はく、「謂く欲の患害等を離す」と。二に有覺有觀とは、是れ修の對治なり。『智論』に云はく、「譬へば鈴を振るに、麤聲は覺に喩へ、細聲は觀に喩ふるが如し」と。『雜集論』には、名けて尋伺と爲す。謂はく、麤釋を

【遠法師の云はく】是れ十地論義記第四卷の文。

【受數】受の心所

【第二禪…三昧なり】次に第二禪を明す下、經の「覺觀を滅し」等の文を釋す。

【三識】眼、耳、身の三識。

尋と曰ひ、細緣を伺と曰ふ。『唯識論』の第七に說くが如し。欲界の過患を尋求伺察して、能く除滅するを以ての故に」と。『瑜伽』の第十一に「不淨は欲を治し、慈は恚を治し、悲は害を治するを以ての故に、三行を修して三患を對治し、初定に入ると。三に離生喜樂とは、是れ修行の利益なり。遠法師の云はく「欲惡に背くことを慶ふ、是故に喜を生ず、過を離れ、猗息するが故に、名けて樂と爲す」と。又欣悅を喜と名く。薩婆多に依らば、身心調暢するが故に、名けて樂と爲す。體は是れ輕安なり。大乘に依らば、適悅を樂と名く、體は是れ受數なり。又『雜集』の第八に「尋伺支に由りて、所治を治し已りて、離生喜樂を得るが故に」と。解して云はく、所治を離るることを得て、此喜樂を生ずるが故に、利益と爲す。四に入利禪とは、是れ彼二の依止三昧なり、是彼對治、及び利益支の、所依止の定なり。何が故に、所離の障を說かずして、但前の二と云ふ。釋すらく、障は所斷、是れ支に非ざるが爲の故に。『雜集』の第八に云はく「心一境の性は是れ、彼二の所依なる自性支なり、定力に依止して、尋等轉ずるが故に」と。解して云はく、一境に專注し、心をして散ぜざらしむるを、心一境と名く。

第二禪の中に、初に覺觀を滅すとは、是れ離障なり。謂はく、覺觀麁動にして、三識を發生し、二禪を嬈亂すること、淨水の波動の如きを、無所見と名く。二に內清淨等とは、對治行等を明す。小乘は是れ、信は能く心相を淨くす。謂はく、內等淨は、外の鼓動を離れ、定等內流するを、內等淨と名く。大乘の內淨は、則ち三禪の捨念正知の三法を攪り

【心一處…故に】此は三界九地、六識起不起の相を明す。
【舍利弗阿毘曇】三十卷、姚秦曇摩崛多譯。
【六識身】眼、耳、鼻、舌、身、意の六識ある身の意。
【無流】大正藏經には無漏に作る。
【內より生ず】初禪定より上昇して二禪の喜を得。
【第三禪…入る】三に第三禪の文を釋す。
【行捨】行蘊中の善の心所十一の中の一。行の捨にして受蘊中の捨に非ず。
【此三】捨、念、慧の三。

て、性と爲す。『顯揚論』の第十九に云はく、「內等淨は、捨念正知を以て其體と爲す」と。『瑜伽』の六十三も、亦此說に同じ。心一處無覺觀とは、『舍利弗阿毘曇』に「欲界地の中の心は、六處に行ず」と言ふ、六識身を以て、六塵を取るが故に。初禪地の中の心は、四處に行ず、四識身を以て四境を取るが故に。初禪已上は鼻舌識無きを以ての故に。二禪已上は心一處に行ず、唯意識身、法塵を緣ずるが故に。又復相續して、斷ぜざるを、亦一處と名く。『論』に云はく、「無流不斷三昧を修し、一境に行ずるが故に」と。解して云はく、無流は實の修治に約し、不斷等は一處等を釋す。三に定生喜樂とは、是れ修行の利益支なり。前の初禪の中に、創めて欲惡に背き、離生を慶して喜び、此二禪の中には、治、內より生ずれば、生を得ることを慶して喜ぶ。喜樂は前の釋に同じ。四に、二禪に入るとは、是れ彼二依止三昧なり。

第三禪中離喜とは、是れ其離障なり。謂はく、二禪には喜心分別の想より、動亂を生じて過多し、三禪は轉た寂なるが故に、須らく除遣すべし。猶し貧人の寶を得て喜を生じ、失へば則ち深く憂ふ、憂喜俱絕するに若くは莫し、方に快樂と爲すが如し。二は行捨成就念慧とは、是れ修對治支なり。謂はく、捨は是れ捨支、行心調停して、彼喜の過を捨するが故に、名けて捨と爲す。此は是れ、捨數は捨受に簡別す、故に行捨成就と名く。念とは是れ念支なり。謂はく、前の喜の過を念じ、心を一境に守るが故に。慧とは餘の論には、正知支と名く。謂はく、喜の過を分別して、明かに其失を見るが故に、對治を成ず。又此

三は沈細寂靜なり、下地の喜は踴躍浮動なり、動靜相違の故に、治を成ずるなり。『顯揚論』に云はく、「住捨とは、已生の喜に於て、忍可せざるが故に。平等正直にして、動ずること無く安住す。念とは、喜の行ぜざる中に於て、忘れずして明かに記するが故に。正知とは、或時は失念の喜行ず。此に於て分別して、正知にして住す」と。三に身受樂とは、是れ利益支なり。謂はく、喜は意地に在り、樂は五識に在り、故に身受と云ふ。又釋すらく、樂受に二有り。一に、下品の適悅は心に在り、二に、上品は身心に遍し。所遍の處に就きて、末に從ひて名と爲すが故に、身受と曰ふ。諸賢聖能說能捨と言ふは、樂の深勝なるを顯す。唯賢聖有りて、能く說きて過と爲し、能く捨離するに堪へたり。凡の能する所に非ざるが故に、是れ深なり。四に常念樂受入三禪とは、是れ彼一依止三昧なり。謂はく、常に自地の樂受の利益を念じて、此禪に入る。

第四禪の中に、初に斷樂苦等とは、是れ共離障なり。三禪は樂を得る、是れ利益なりと雖も、第四禪に望めては、極めて妨害と爲す。重病人の妙音樂を觀るが如し、四禪を障ふと爲すが故に、須らく除遣すべし。若し爾らば應に但樂を除くべし。何が故に苦を斷ずる。釋して云はく、理實には苦根は前位に已に離る、此に至りて斷ずと云ふは、樂に對して雙び辨ぜんと欲するが爲の故なり。憂喜已滅とは、總じて四受を絕し、禪の不動なるを明す。故に『瑜伽』の第十一に云はく、「初靜慮は憂根を出離し、第二靜慮は苦根を出離し、第三靜慮は喜根を出離し、第四靜慮は樂根を出離す」と。又彼論に云はく、「問ふ、何が故

【三に身…曰ふ】以下、初に正しく支の體を顯すに二義あり、今は後義を取用す。

【諸賢…深なり】次に樂の深勝を顯す。

【第四禪…三昧なり】四に第四禪の文を釋す。

【若し爾らば…故なり】以下、妨難を通釋す。

【四受】憂苦喜樂の四。

【問ふ…故に】此は前揭の文に、憂根を出離すといひ、苦根に及ばず、故に問ふ。

【彼品の麤重】現行の煩惱の麤重をいふ。

【問ふ何に…故に】靜慮に生ずる者に約して問答す。

【答ふ苦を…なり】樂は苦地の所除、今苦樂一境相對して之を擧ぐれば、樂の所引なるに先滅と云はず。

【問ふ此…故に】第四禪は、第三禪の樂を除遣すれば不樂といふべしと。答の意に、不苦不樂は捨受の別名にて、苦樂に異れりといふ。

に苦根、初靜慮の中に、未だ斷ぜずと說くや。答ふ、「彼品の麤重は、猶未だ斷ぜざるが故に。」問ふ、「何に緣りてか初靜慮に生在する者、苦根未だ斷ぜずして、現行せざるや。」答ふ、「其助伴に由りて、憂根に攝せらるる諸苦に相對して、彼已に斷ずるが故に。若は初靜慮は、已に苦根を斷ず、是れ則ち行者、初靜慮及び第二に入るの時、受の所作の差別、應に無かるべし。二俱に喜及び樂有るに由るが故に。」解して云はく、初の二定は俱に喜樂有り、若し齊く苦を離るれば、則ち二受殊らざるが故に。初に苦の麤重を斷ぜず、然も現行すること無きが故に、樂支有り。又小乘は、此樂は但だ是れ輕安にして、樂受に非ざるが故に。又初禪の喜は劣れり、猶苦根と爲す、麤重隨ふが故に、滅苦と名けず。二禪の喜は勝ぐるれば、苦の麤重を滅するを、滅苦根と名く。問ふ、「憂喜は先に除けば、文に已滅と言ふ、苦も亦久しく除く、何ぞ先滅と言はざる。」答ふ、「苦を樂に對するに、樂は未だ亡ぜざるが爲の故に。雙べて言ふは便ならざるが故に言はず。先の憂喜は爾らざるが故に、除とせざるなり。若し爾らば、憂喜は既に樂に對せず、何ぞ須らく之を擧ぐべき。」釋して云はく、樂の盡くる處に、總じて四亡を結して、四の不動を顯すが故に、須らく擧ぐべきのみ。二は、不苦不樂とは、是れ利益支なり。餘禪の中に、皆先に治を明す、下此は先に利益を明す。前の苦を斷じ樂を斷ずるに乘じて、之に對して即ち不苦不樂を明す。益を彰すの義、便の故に、次に之を辨ず、理實は後に在り。問ふ、「此は正しく樂を遣る、何ぞ但不樂と言はずして、不苦不樂と云ふや。」答ふ、「捨受の、苦樂に同じからざることを、明さ

【此は正滅に非ず】憂は初禪、喜は三禪にて正滅するが故にいふ。

【八】第三牒分の中、既に四禪を明し竟り、次に四空を顯すなり。

【經の中…無し】禪に色想を過ぐ等の三句は初の離障、無邊の空を知るは第三の利益、即ち空處に入るとは第四の依止にして、第二の修行對治なし。

【有對を…故に】色等の四は、有對障礙の法、唯だ遠離するのみならず礙の想をも滅す。

【聲は衆緣を籍る】耳根あり、耳識あり、聲は可聞の處に在り、而して意を作して聞くことを要す。

【法處】意識の境を總攝していふ。詳にせば、無表色、四十六心所、十四不相應、三無爲を

んが爲の故に。問ふ、「前の離障に憂喜已滅と云ふ、何ぞ亦不憂不喜と言はざるや。」答ふ、二義有り。一は、此は正滅に非ず、亦樂と相對せざるが故に、苦に類せず。二は、若し五受を攝して、三受と爲すの時、憂喜を攝して苦樂の中に入るるが故に。苦樂は寬きを以ての故に、是故に捨受は彼に對して、但不苦不樂と名く。」三に行捨念淨とは、是れ對治支なり。前の三禪の中には、樂の爲に覆はるるが故に、捨念淨からず。今、此は彼下地の樂貪の念を離るるを、淸淨と云ふ。清淨の捨念は、樂貪と相違するが故に、對治を成ず。四に「四禪に入る」とは、是れ彼に依止三昧なり。

（八）下は四空を釋するに、亦各四有り。然るに此經の中には、略して對治の行無し。論主は義に準じて之を置く。初に所離の中の「色想を過ぐ」とは、「成實論」に依るに、遠離色想とは、香味觸の想を遠離す。「有對を滅す」とは、還りて色香味觸の想を滅す。彼色等は對礙なるを以ての故に。「別異の想を念ぜず」とは、聲を緣ずる想を滅す。聲は衆緣を藉りて、擊發して生ずるを以ての故に、別異と名く、亦大乘に依るに、前の說に同じからず。謂はく、色は多種なりと雖も、總攝して六と爲す。謂はく、五塵、及び法處にして、要略すれば唯三なり。一は可見有對、眼識の所行なり。二は不可見有對、餘の四識の所行なり。三は不可見無對、謂はく、意識所行の無表色等なり。此中に色想を過ぐとは、「眼識所行の、可見の色想を離るるを以ての故に。」「何が故に過色と言はずして、但過色想と言ふや。」「釋すらく、色地に在りて、此定を修起するを以て、未だ色形を捨てざるが故に。」「何が故に

但滅想と言ひて、餘の心法を言はざるや。「釋すらく、理實は通じて有り。想は相を取ること、強きを以ての故に。滅有對とは、餘の四識の所行の、不可見有對の四境の色を離るるが故に、想と心と倶なるを以て、名けて和合と爲す。亦是れ心と境と、合するが故なり。「別異の想を念せず」とは、意識の所緣たる、法處の色想を離る。「一向に、意識分別一切法と言ふが故に。「別異の想を說く」とは、相隱なるを以て重ねて釋す。謂はく、意識は通じて、一切の諸法を緣ずれば、法處の中に於て、色を緣ずる義邊の意識の想を、滅するを簡取す。餘を緣ずるの意識は、此中には遣らず、其所滅を擧げて、所不滅を簡ぶが故に、別異と云ふ。

問ふ、『香味の想は、初禪に已に離れ、色觸の想は、二禪に已に除く、今云何が空定に滅すと言ふや。』答ふ、「遠釋して云はく、治に四種有り。一は、壞對治、謂はく、方便道は下の有流の無常等を觀ずるが故に。二は、斷對治、謂はく、無礙道は、正しく、下の過を斷ず。三は、持對治、謂はく、解脫道を首と爲し、及び、後の一切の無間解脫は、彼無爲を持して、失壞せしめず。四は、遠分對治、謂はく、解脫道を首と爲し、及び後の一切の無礙解脫は、遠く前の障をして、畢竟じて、起らざらしむ。今此空定は、第四治に當るが故に、此離を說く。」今、更に釋すらく、二禪の中に於て、色觸の想無しと雖も、初禪の三識を借りて、之心の見聞覺觸を得。是故に、乃至第四禪の中に、猶此想有り。今空定を得るが故に、之を滅すと說く。「若し爾らば、香味の二想、何が故に、亦說くや。」釋す

いふ。

【可見有對色】顯形二色二十種をいふ。

【不可見有對色】聲香味觸の四。

【無表等】大乘の意に依らば、法處色の餘の四即ち極略色、極迥色、遍計所起色、定所變色を等取す。

【香味の想…除く】色界には都て香味二境なし、入初禪の時香味を滅し、入二禪の時、色緣觀亦除滅す。

【一は壞…故に】加行道の中、無常等の觀解をなして種種の過を損壞し斷治す。

【二は斷…斷ず】無間道の中、下地の諸煩惱を斷ず。

【遠分對治】これ勝進道に當る。前に滅する所の諸雜染法をして、永く生起せしめざるをいふ。

【三色】可見有對色、不可見有對色、不可見無對色。

【三の中云云】經の一切の識相を過ぎて等の文。

らく、二義有り。一は、亦借ること有るが故に。二は、聲觸と同じく、是れ不可見有對の色なるを以ての故に、同じく辨ず。第四禪の、憂苦を滅する等の如し、之に準じて、是を離障と名く。

二に對治とは、『論』に三句有り。過色等境界想とは、空定は彼色等の境想を離るるが故に、過と名く。云何が過なる、分別せざるを以ての故に。云何が分別せざる、無我を見るを以ての故に。此は實治を辨ず。問ふ『此中に既に修行對治有り、有支と爲すや不や。』答ふ『瓔珞本業經』に依るに、四無色定に、各五支有り。謂はく、想護止觀一心なり。今『雜集』等の論に依るに、諸の無色定は、奢摩他一味想の故に、支分建立無し。論主は但所離の障に翻ずるに約して、能治の行を顯し、義を以て之を說く、支分に約するに非ず。「無邊の虛空を知る」とは、是れ修行の利益なり。謂はく、三色の想絕して、廓爾として無邊なり。「卽ち虛空無色定に入る」とは、是れ彼二依止三昧なり。二に「虛空相を過ぐ」とは、是れを離障と名け、外念の麤分別の過患を見るを、是れ修行對治と名く。謂はく、外に虛空を緣じ、心念麤患の故に、能く此失を見て、彼想を除くが故に、對治と云ふなり。「無邊の識を知る」とは、是れ修行の利益なり。謂はく、外を捨て內に住するなり。定の體は知んぬべし。三の中に、過識は是れ離障なり、其麤事の念の分別する、過患を見る。是れ修行對治なり。謂はく、猶住識を見るを、麤患と爲すが故に。「無所有を知る」とは、是れ修行の利益なり。謂はく、前には外を捨てて、內に住するを、猶麤念と爲すも、內外

【四の中…知んぬべし】經の「一切の無所有…入る」の文を釋す。

【下は入意…なり】經の「諸法の行に」等の文を釋す。

【九】以下、第四に厭果分の釋。經の「是菩薩は慈心廣大に」等の下。

【定慧を以て體と爲す】これ總じて體を示す。【又慈は…爲す】此下、別して四無量の體を示す、中に於て前三は、倶舍の意、第四は、雜集論の意。

雙に離れて、倶に所有無きに若くは莫し、方に利益と爲す、定の體は知んぬべし。四の中に、離障は知んぬべし。彼無所有に住し、想の麤念の過を見るが故に、能く彼想を治するを、修對治と名く。「非有想非無想の安隱を知る」とは、麤想既に盡くるを、名けて非有と爲し、細想未だ滅せざるを、名けて非無と曰ふ。此中に非無は、聖智に約して說く。世定、此非無を覺ると謂ふには非ず、定の體は知んぬべし。下は入意を明す。謂はく、但化衆生の法に隨順し、此八定に入る。是れ自行の樂ふ所に非ざるが故に云ふなり。

(九)第四に、厭果分の中に二有り。初に行果、後に調柔等は、位果を明す。初の中に三有り。初は四無量を行方便果と名く。二に五神通は、是れ行の功用の果、三は總じて自在を結す。初の中に、四無量の義は、略して、四門を作る。一は釋名、二は體性、三は建立、四は種類なり。初に名を釋すとは、無量の境を緣じて、無量の行を起すを、四無量と名く、則ち帶數釋なり。二に體性とは『雜集論』の第十四に「定慧を以て體と爲す」と。又慈は能く樂を與へ、無瞋を體と爲す。悲は能く苦を拔く、即ち不害を性と爲す。喜は他の樂を慶び、不嫉を性と爲す。捨は他をして惑を捨てしめ、則ち善捨を體と爲す。三に建立とは、『莊嚴論』及び『瑜伽』の第十二に依るに、四種の作意有りて、四無量を立つ。謂はく、求樂の衆生を緣じて、與樂の作意を起すを、慈無量と立つ、有苦の衆生を緣じて、拔苦の作意を起すを、悲無量と立つ、有喜の衆生を緣じて、隨喜の作意を起すを、喜無量と立つ、有煩惱の衆生を緣じて、不染汚の作意を起すを、捨無量と立つ。此は初教に約す。又一大

【頓圓は之に準ぜよ】頓教に約せば一切衆生本來無樂無苦、樂として與ふべきなく、苦として拔くべきなし、既に苦樂なく、本來平等にして行ずべきものなく、本より樂著なければ放捨すべきなし。圓教に約せば、一與一切與、快樂無盡なると共に拔苦喜捨の上に、一卽一切、重重無盡の緣起を談ずる是れなり。

【一には衆生を緣ず】人我自他實有の見を有しながら度衆生を誓ふ。

【二には法を緣ず】人執を亡ずるも、未だ法體實有の見あり、此心上に拔苦與樂の誓を發すをいふ。

【三には無緣】人法二空の上に濟拔の誓を起す。利潤を作さずして利潤を成じ、寬く濟度

集經』の第九に依るに、云はく、「諸の衆生の心性は、本、淨と知り、是を名けて慈と爲す、一切を觀ずるに、等うして虛空の如し、是を名けて悲と爲す。一切の喜を斷ずる、是を名けて喜と爲す。一切の行を遠ざくる、是を名けて捨と爲す」と。此は終教に約す。頓圓は之に準ぜよ。四に種類とは、諸經論の中に、多く三種を說く。一は衆生を緣じ、二は法を緣じ、三は無緣なり。『智論』の中に二釋有り。一は能起に約す。初の一は是れ、凡夫の慈等なり。次は是れ二乘の法執、三は是れ菩薩の稱眞なり。二は所益に約す。初の一は、人天の益を得せしめ、二は、二乘の益を得せしめ、三は、菩提を得せしむ。『佛地論』の中に、諸佛菩薩は、衆生假者を緣ず。亦彼五蘊の假法を緣じ、及び二空の眞理を緣じて、教化するが故に」と。今『十地論』の中の、衆生念等とは、念は則ち緣念なり。若し圓教に依らば、下の離世間品の如し。各十種有り、具に彼に說くが如し、餘義は別章の如し。文を釋する中に二あり。先に慈を釋し、後の三は類顯す。初の中に三有り。初には衆生念の中に四有り。先に樂を與ふること廣しとは、欲界の樂を與ふるなり。大とは初二禪の樂を與ふ、喜を共にするを以ての故に、名同じきなり。無量とは、三禪の樂を與ふ、苦喜倶ならず、名同じからず。此三の樂を以て、衆生に與ふる時、彼此を簡ぶこと無きが故に。不二と云ふは、亦是れ等しきなり。第二に無瞋恨と言ふは、是れ二障の對治なり。遠の云はく、怨に於て損を加ふるを、不愛を與ふと名け、親に於て樂を與ふるを、名けて與愛と爲す。此二は是れ障なり。經の無瞋の如し、初を治して、後を對治する無し。又釋すらく、

して無相に住す、無緣廣大の慈悲是れなり。四無量心に皆以上の三あり

【凡聖の衆生法】瑜伽の衆生五蘊の法に同じ。

【衆生…法】涅槃の利生の法に同じ

【初は當…無盡】一論に二を分つ。一は自相無盡觀、二は遍至無盡觀なり

【第二に五通の果云云】二に五通の果を明す下。經の「是菩薩は神通力」等の文を釋す。初に釋名。

不愛の者に於て、所愛を授與し、己が瞋嫌に翻ずるを、名けて對治と爲す。三は淸淨なり。謂はく、五蓋を離れ、慈定をして淨ならしむ。此經に略して無し。四に無惱害とは、是れ攝果なり。謂はく、慈定は色界の中に起して、正果を受く、慈行の餘勢なり。後に欲界に於て、習果を受く、故に云はく「欲色界に於て、正果習果を受く、苦惱の事無きが故に」と。二に、以信解力遍とは、法念を明す。『涅槃』の中に利生の法を緣ずと。『瑜伽』の菩薩地に、諸の衆生の五蘊等の法を緣ずと『地論』に二を具す。先は凡聖の衆生、法を知り、二は及衆生の下は、衆生の心所起の、分別の諸法を知り、用以て生を化す。三に滿十方とは、無念を明す。『論』の中に亦二あり。初は當體無念、二は分齊無盡なり。『論』の如く應に知るべし。餘の三は慈に類するが故に、亦復如是と云ふなり。

第二に、五通の果を明す中に、四門を作る。一は名を釋し、二は體を出し、三は諸門、四は文を釋す。初の中に、先に通名を釋す。轉變して擁する無きを、名けて神通と曰ふ。五は是れ數なり。通とは是れ義數の義、名を彰さば則ち依數釋なり。別名の中に、一は神足通と名く。難測を神と曰ひ、履涉を足と稱し、用に從ひ喩に就きて、名と爲す。又釋すらく、神は是れ通の用、足は是れ所依の定なり。定は通の與に、足と爲るが故に、定用は喩に從へて名と爲す。亦如意通と名く。出沒、心に隨ふが故に。亦は身通と名く、通慧は身に依るが故に。亦神境通と名く、是れ通慧の所變の境の故に。二は天耳通、三は天眼通なり。光明の義は是れ天の義、聲を聞くは是れ耳の義、照導は是れ眼の義なり、並に根

【第二に…爲す】二に出體。
【通大地中の慧數】十大地法中の慧の心所。
【等智】舊に等智新に世俗智といふ
【第三に…準ぜよ】三に諸門分別。初に大小乘の通談に依り、次の三門は、本論の意を述し、後一門は智論に依りて所知の分齊を明す。

及び趣に從へて、以て共名を立つ。四は他心通なり、能く他心を了す。境に從へて名と爲す。五は宿命通なり、亦宿住通と名く。往謝を宿と名け、宿時の色心相續するを命と名け、亦名けて住と爲す。通慧彼を照す。亦境に從へて名と爲す。此五は並に是れ、依主に名を立つ。謂はく、宿住の通等、之に準ぜよ。第二に出體とは、薩婆多に依るに、凡夫の五通は、若し總じて體を出さば、通大地の中の、慧數を以て體と爲す。若し別しては、等智を以て性と爲す。若し經部宗には、凡夫の五通は、總じて想智想定を以て體と爲す。若し別しては、則ち十智の中の、名字智を以て性と爲す。若し聖人の得は、同じく以て名けて、無漏の智を用て性と爲す。若し大乘宗ならば、總じて別境の中の、慧數を以て性と爲す。若し別しては、凡夫の五通は、世俗智を性と爲し、聖人の五通は、後得智を性と爲す。若し『雜集論』には、定慧を性と爲す。第三に諸門分別とは、略して五門有り。一に、所依の定を辨ずとは、小乘に依らば、唯四根本定に依る。勝地に依りて、勝通を發すを以ての故に、未至中間は慧多定少、諸無色定は定多慧少なり。復、支の相助くること無ければ、通を發すこと能はず、經部も亦同じ、大乘は『瑜伽』『顯揚』亦前に同じ。若し『雜集論』は、通じて四定に依り、多くは第四に依る、功德勝を以ての故に。二に三業に約すとは、『地論』に依らば、「初の一は身業清淨なり、天耳、他心の二通は口業清淨、宿命生死智の二通は、意業淸淨なり」と。解して云はく、初は則ち轉變色形を身業淨と名く。天耳と他心は能く言說を起すを、口業淨と名く。後の二は、過未は世を隔てて知り難きを以て、唯意

【初に…故にと】此れ地論取意の文

【一千世界】小千界、二千世界とは中千界を指す。

【義は…增す】今大乘の通門に依りて因果隨位差別を明す意。

能く了するを、意業淨と名く。五通は是れ智、理實には皆意なり、但し用相に隨ふが故に、此分を作す。三に業用に約すとは、『地論』は、菩薩の業用に約す。初に身通は、能く衆生の所に到る。次の二は其が爲に說法す。謂はく、天耳は他の言音不同なるを聞き、方に隨ひて說を爲し、他心は他の心器の所業を知る。要ず此二に由りて、方に說法することを得。謂はく、言聲及び義なり。後の二は、盡く衆生の過去未來所應の受化を知るが故にと。解して云はく、宿命は其過去所習の因を知りて、以て法を授く。天眼は其未來の根熟して、方に化を受くるに堪ふるを見る。四に智見に約すとは、『地論』の中に、前の四通は智を明し、第五は見を明すと。解して云はく、理實には、五通の體は、皆是れ智なり。但し天眼の照矚を分明なりと爲し、體を廢し、根に從ひて、說きて名けて見と爲す。若し爾らば、天耳は何んが根に從へて聞と名けざる。釋すらく、理實には應に齊かるべし、但し智は是れ見の性爲り、眼も亦是れ見なり。見の義の、智に順ずれば、偏に眼に就きて說く。五に、所知の分齊に約せば、若し凡夫の五通は、但一四天下を知る。若し小乘の人ならば、『智論』の第六に依るに、云はく、若し小阿羅漢は、小しく用心すれば、天眼は一千世界を見る、大いに用心すれば二千世界を見る。若し大阿羅漢は、小しく用心すれば、二千世界を見る。大いに用心すれば、三千世界を見る。義は菩薩に準じ、位に隨ひて漸く增す。若し佛ならば、總じて限量無し、餘通は之に準ぜよ。

第四に文を釋すとは、五通を則ち五段と爲す。初の神足通の中、『論』に三種の勝自在を

【八種有り】傍行無礙。二、上行。三、上下行。四、涉水。五、其身熾然。六、身能注水。七、身能摩捫。八、自在隨意轉變。

【論に…八】一、隨煩惱。二、使。三、生。四、學三昧行。五、得三昧。六、得解脫。七、妄行正行。八、餘凡夫增上慢。

得と。一に、初句は動世界自在、依報に約す。二は、一句自身自在なり。一は散、二は合、三は隱顯なり。謂はく、現沒還出なり。三に、身作業自在に約するに八種有り、略して注水無し、餘は『論』に辨ずるが如し。若し『智論』の第六に依らば、如意通に三種有り。一は能到、二は轉變、三は聖如意なり。能到に四有り。一は、身能く飛行する等。二は遠を移して近からしめ、往かずして到る。三は此に沒し、彼に出づ。四は一念に能く到る。轉變とは大は能く小と作り、一は多と作る等なり。外道の力、事を轉ずること、極めて久きも七日に過ぎず、佛及び弟子は、久近意の如し。聖如意とは、六塵の中に於て、愛ならず、淨ならざるを、觀じて愛淨ならしむ等なり、之に準ぜよ。是れ自在法なり。唯佛のみ之を得、乃至廣く說く。二は天耳通の中に、天耳は天人に過ぐるが故に、若しは苦、若しは樂、若しは麤、若しは細、若しは近、若しは遠等の聲、聞知せざること無し、餘は『論』に辨ずるが如し。三は他心通の中に、先に總、後は別なり。別の中に十句あり、三に分つ。初の四は煩惱心を知り、次の二は報心を知り、餘の四は作業心を知る。『論』に分ちて八と爲す、『論』の如く應に知るべし。初の中に、前の三は三毒の有無を知る。『論』に隨煩惱と名く。此は是れ、緣に隨ひて現起するが故に、是れ小惑に非ざるも、隨と名く。二は、垢等は其細惑の性を知り、名を成じ使と爲すが故に。次は報心を知る、是れ無記心なり。人は是れ小なり、欲天は廣なり、色天は大なり。無色は二ともに、解脫を無量と名く。此中に狹多く、定の多きを以ての故に。餘は作業を知る。前の三は淨、後の一は染なり。前の中に、

【四は宿…如し】四に宿命通の下を釋す。

【念何等】論に「何等の事をか念ずる」等といふ。

【二に我生等】經に「我彼處に生じ」等とあるを、論文を以て釋す。

【五は…知んぬべし】五に天眼通の下を釋す。

【第三に…竟んぬ】以下、總じて自在を結する文を釋す。經の「是菩薩は諸の禪定…生ず」の下。

亂等は定心を學して、未だ得ざるに約するが故に。或は散非散の二定等は得定に約す。得定の後、或は定に入り、或は定を出で、或は定に在り。三に縛解等は慧に約す。縛に於て脱を得るが故に。後の一は染心を知る。此中に略して、求不求の心無し。有上等は慢に約す。謂はく、有上の處に得の想を起す、是れ麤なり。無上の處に於て得想を起すを、細と爲す。故に『論』に云はく、「麤細習行の故に」と。四は、宿命の中に、先に總、次に別、後に結なり。『論』の中に三に分つ。初に、誰か能く念ずる。謂はく習なりとは、此は總句を釋す。別の中に、一は何等の事をか念ずる。一世界等を念ずるなり。二に我生の下は、云何が因を念ずる。名字等の念なり。此中に種族とは、是れ家の差別なり。謂はく、生家等の姓とは、貴賤等の姓なり。三は本の果の名を知り、四は所食を知り、五は苦樂を知り、六は壽命を知る。經の如く、如是久住するが故に。七は此に死し、彼に生ずと知る、餘は『論』に辨ずるが如し。五は天眼の中に、先は總、後は別なり。『論』の中に、先に能見を釋して總と爲す。初は衆生の死此生彼を見るが故に、死生智通と名く。審に委細を見るが故に、清淨と云ひ、遠く他方を見るが故に、過人と云ふ。二に何等の事をか見るの下は、總じて所見を釋す。三に云何が見るの下は、其見相を明す。則ち別して所見を釋す。則ち是れ諸の衆生等の、善惡因果を明して、二地の説に指同すること、知んぬべし。

第三に是菩薩の下は、自在を總結することを明す。『論』の中に四を具す。一に、禪は四禪を結し、二に、解脱は四無色を結すとは、八解脱の中の四無色は、是れ後の四解脱なる

【心を起して…名く】上に一即ち生心の時、心の用に隨ひて現在前するが故に」といふを釋す。

【一〇】以上、行果を釋し竟りて次に位果を明す下なり

【欲有無明縛】欲縛、有縛、無明縛をいふ。【一切修…故に】欲有無明の煩惱障

を以ての故なり。三に、三昧は是れ四無量定なり。四に、三摩鉢提は是れ五通とは、此には等引と云ふ。謂はく、五通の業用を引起す。能入能出とは、謂はく、心を起して入らんと欲し、心を起して出でんと欲するを、生心時と名く。則ち能く入出するを用現前と名く。生者に隨はず、定等の爲に縛せられざるが故に、前の十種の深念の中の、淳厚心は、此に成就するが故なり。禪等に入ると雖も、願力を以て復た生じて、菩提分を增長する處、則ち佛菩薩と與に生處を共にす。此は自利に約して釋す。『瑜伽』の住品は、利他に約して釋すること、知んぬべし。行果竟んぬ。

（一〇）二に、是菩薩住於明地の下は、位果を明す。中に於て三果を、則ち三と爲す。初は調柔行果の中に四あり。初は調柔行の體、二は忍の行德、三は別地の行、四は地相を結す。初の中に三あり。先に法、次に喩、後に合なり。法の中に、觀一切法不生滅衆緣而有と言ふは、此中の『論』に云はく、「清淨法の中に於て增するを見ず、煩惱染の中に滅するを見ず。因緣集生の故に」と。此故の字に二義有り。一は緣集に由るが故に、無增無滅の故に、不生滅と云ふなり。二は緣集に由るが故に、增有り減有り、故に有生滅と云ふ。此一の緣集の因は、此二義を成ず。是故に常に、因緣對治を起し、離染のために行を成じ、而も恆に生滅の相有ることを見ず。欲、有、無明縛皆微薄とは、一切の修道の欲、色、無色界所有の煩惱と、及び彼因とを斷じ、無明の習氣に同じく、皆悉く微薄にして、遠離するが故に」と。解して云はく、此は是れ貪等の煩惱障の現行、幷に種の故に、及彼因と云ふ。

の三縛の現行と種子、當地の所知障の種子に同じく滅す。

【復…故に】既に麤なる三毒は前前地中に漸斷す、此地中には細の三道を斷ずるをいふ。

【二に是…知んぬべし】二に忍行の德を明す下。經の「是菩薩の忍辱の心」等の文を釋す。

【作惡…具す】美妙心を釋す。

當地所斷の所知障の種と、同じく此位に滅するが故に、同無明習氣皆微薄と云ふ、未だ盡きざるを以ての故に、但薄と云ふなり。「地經」の中にも「諸の見縛は、先に初地に於て、已に斷ず」といふが故なり。復「集めず三毒を斷ず」とは、細を斷じ、麤を斷ぜざるを以ての故に。二に是菩薩忍の下は、忍行の德を明す中に、十心有り。他人の惡を加ふるを辱と名け、心能く忍受するを忍と名け、「善く他心を護る」とは安樂心を釋するなり。此二心を以て、已下の諸心を分別するが故に、分別示現と云ふ。作惡懷疑と言ふは、謂はく、衆生有りて、曾て菩薩を損惱して、自ら己が惡を付り、菩薩の瞋を疑ふが故に云ふなり。然も菩薩、將に身を將護して、彼と同じく愛語誘導す、故に現同作侶愛語等と云ふなり。此釋の同和心柔軟心なり。此中の美妙心は、彼二心を具す。不壞心とは、身に惡を加へらるれども、瞋らざるが故に。不動心とは、口の惡罵に報いざるが故に。不濁心とは、忍時の心、憂惱せざるが故に。不高下心とは、過去より久しく行じて、憍慢ならざるが故に。是故に今能く下り、共善言を與ふ。謂はく、己に於て高ぶらず、他に於て下らず。「地經」に二句有り。一は道を以て他を化して、他の財を求めず。二は恩を施して人に及ぼし、他の報を望まず。若し樣を悕ひ、報を望むこと有る時は、少く意に稱はざれば、則便ち瞋を生ず、今此無きに由るが故に、忍因を成ず。此中に、初は恩を施して念はず、後は小恩に大いに報ゆ。不諂曲とは、「不實に非ず」とは、不諂を釋す、及び無偏心は不曲を釋す。以るに、菩薩謙下して、物に隨ふの相は、諂曲に同じきが故に、今實等を明すなり。不染心とは、

【二二】以下、偈頌を釋す。

【三】以下、第四地を釋す。

【菩提分】（三・三）（三・四）四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道の三十七道品、別しては七覺支をいふ。

【煩惱の薪】第六識と俱生する身邊の二見。

【第二…依る】二に來意を明す。

微細に隱覆する垢染の心、皆悉く離るるが故に、淨なるを顯す。餘の文は知んぬべし。

（二、二）二に偈頌の中に三十五頌有り、五に分つ。初の二は起厭行分を頌し、二に二十四有り、厭行を頌す、三に分つ。初の四は、護煩惱行を頌し、次の六は、護小乘行を頌し、次の十四は、方便攝行を頌す。三に二有り、厭分、及び行果を頌す。四に六有り、位果を頌す。五に末後の一は結說を頌す。

（三、三）第四に、焰地の中に、亦七門有り、前の地に同じ。釋名とは『唯識』の第九に云はく、「最勝の菩提分法に安住して、煩惱の薪を燒く、慧の焰增するが故に、焰慧地と名く」と。『攝論』に云はく、「諸の菩提分法に由りて、一切の障を焚燒するが故に」と。無性釋して云はく、「此地の中に焰慧有るが故に、名けて焰地と爲す」と。世親釋して云はく、「能く一切の根本煩惱、及び隨煩惱を燒きて、皆灰燼と爲すを、焰慧地と名く」と。『莊嚴論』に云はく、「菩提分慧を以て焰の自性と爲し、惑智の二障を以て、薪の自性と云ふ。自地の菩薩、能く焰慧を起し、二障の薪を燒くを、焰慧地と名く」と。『金光明』に云はく、「能く煩惱を燒き、智慧の火を以て光明を增長し、行道品の依を修するが故に、名けて焰と爲す」と。『深密經』の第四、及び『瑜伽』の七十八、及び『顯揚論』は、大いに此說に同じ。『智論』には增妙地と名く。『十住論』に云ふが如し、「施戒多聞、威儀熾盛の故に、焰地と名く」と。第三

二に來意を明すとは、亦三義有り。一に、前地は定を明し、自下の諸地は、所發の慧を明す。定に依りて慧を發す、義の次第の故なり。此は『解深密經』に依る。二に、前の三地は

【第三…に同じ】三に所離障を明す

【微細…名く】第六識と俱なる身邊二見、俱生の法執分別の種子をいふ。

【最初に斷ず】聖位の初なる見道に於て、分別起の惑智二障を斷ず。

【上の論云云】以下身見を明すなり

【彼四地…斷ず】唯識論の文。俱生の身邊二見等を第四地に入る時斷ずといふ。

【彼昔…行ぜず】唯識述記の文。今所知障なるを、煩惱の名を立つる所以を問ひ、論文を以て答釋す。

世間に寄在し、今此は、出世の義の次第の故に、次に來れり。此は『十地論』に依りて辨ず。三に、前地は世定總持を得と雖も、未だ菩提分法を得ること能はず、定愛、及び法愛を捨つるが故に、是故に此地には、彼行を修證するが故に、次に來れり。此は亦『深密經』に依る。

第三に所離の障とは、『十地論』に依るに、解法慢障を離ると。第三地に、勝流の教法を聞くを以て、解を生じ慢を起す。四地は此に翻ずるが故に、以て障と爲す。梁本の『攝論』に依るに、微細の煩惱と、共生の身見等の無明と名く。彼論は法執分別の種子を以て體と爲す。梁の『論』の第十に、具に釋するが如し。又『成唯識論』の第九に、微細煩惱現行障と名く。謂はく、所知障の中の俱生の一分にして、第六識と俱なる、身見等に攝す。最下品の故に、作意して緣ぜざるが故に。遠く隨いて現行の故に、說きて微細と名く。世親の『攝論』に云はく、「我見を分別するに三有り。一は、最初に斷ずるが故に、名けて上品と爲し、二は分別起、三は遠く到ること能はざるが故に、名けて麤と爲す。今此俱生は、最後の所斷の故に、下品と名く、任運起の故に、遠く第四に到りて、方に斷ずべきが故に、是故に此障は、彼麤に異るが故に、微細と名く」と。上の論に、彼四地の菩提分法を障ふ。四地に入る時、便ち能く永に斷ず」と。彼昔多く第六識の中の、任運に生じて執する、我見等と同體にして起るが故に、煩惱の名を說く。今四地の中には、既に無漏の菩提分法を得て、彼便ち永く滅し、此我見等も亦、永に行ぜず。初二三地の、施、戒、修を行ず

る相は、世間に同じ。四地は、菩提分法を修得すれば方に出世と名くるが故に、能く永に二の身見等を害す、下の『論』に釋して云はく、「前の三地は、凡の三行に同ずるを以て、斯に由りて、未だ迷理の我見を斷ぜず。四地の出世に、方に能く永に斷ず。燒薪の焰とは、此に依りて名を立つ」と。二我見の言、或は二障同體の我見なり。正しく所知と煩惱とを斷して、起さざるを以て、同じく永斷と名く。理實には倶に法執の我見を除く。或は法執の中の我我所見を、二身見と爲す。或は分別倶生を、二身見と名く、盡くる處を總說するが故に、四地に二身見を斷ずと說く。此三釋の中に、初の釋を勝と爲す。上の『論』に、寧ぞ此れ即ち第六識と倶なりと知るや。此れ問なり。第七識と倶に執ずる我見等は、無漏道と性相違の故に、八地以去に方に永に行ぜず、七地以來は猶現起するを得。下の論釋に三因有り、是れ第七に非ずとは、此れ即ち初なり。亦餘の煩惱の與に依持と爲るが故に。此は麤、彼は細なり、伏すること前後有るが故に、此は但第六と相應するなり。身見等の言、亦無始の所知障に攝する定愛、法愛を攝す。彼定法の愛、三地に倚增すも、四地に入る時、方に能く永に斷ず。菩提分法は、特に彼に違するが故に、斯に由りて四地に、二愚及び彼麤重を斷ずと說く。一には等至愛愚。即ち是れ、此中の定愛と倶なる者、二には法愛愚。即ち是れ、此中の法愛と倶なる者なり。所知障に攝する二愚を、斷ずるが故に、煩惱の二愛も亦、永に行ぜず。『金光明』に云はく、「禪定の樂を味ひて生ずる、愛の無明と、微細の妙淨法智の愛の無明なり」と。『深密』『瑜伽』は、並に上に辨ずるに同じ。

【二の身見】第六識中の分別、倶生の二身見、初見道にては分別起の身見を、今は倶生起の身見を斷ずればなり。

【前の三地云云】此また所引の論文を解釋す。論の字衍か。

【凡の三行に同じ】施戒修の三福業は世の有情作す所、初二三地に順次に行ずるを以てなり

【二我見云云】二身見に就いて異義の三を敘す。

【上の論に寧ぞ云云】妨難を通釋し六識に相應して、當位の所斷なるを示す。

【身見等の言云云】此下、等の言を釋し、等取する體を示す。

第四に所證を明すとは、梁の『論』に依るに無攝法界と名く。彼論の釋に云はく、「最勝眞如、及び眞如所流の教法に於て、中に於て無攝の義を見る。謂はく、此法の非我は、他の所攝に非ず。何を以ての故に。自他及び法の三義は、不可得の故に。譬へば、北鳩婁越人の如し。外塵に於て、自他攝の想を生ぜず」と。無性、世親の諸本に依るに、多くは同じ。『唯識』の第十に云はく、「四は無攝受眞如なり。謂はく、此眞如は繫屬する所無し、我執等の所依取に非ざるが故に」と。解して云はく、同類の我愛慢等を等取す、彼依止の處、及び所執取の境に非ず。『中邊論』に云はく、「猶此に通達すれば、乃至法愛も亦能く轉滅す」と。解して云はく、我執等と同體の故に。第五に所成の行とは、三種有り。一は、十度の中に、第四の精進波羅蜜を成就し、二は、菩提分增上慧行を成就し、三は、亦悲智の行を成ず。『莊嚴論』に云はく、「第四住に能く生死に入りて、覺分を捨てざるが故に」と。又下の文の不住道行等の如し。文を尋ねて之を知る。第六に、所得の果を明す。別果に略して三種有り。一は梁の『論』に依るに、「四地は無攝法界に通達して、衆生利益の果を得」と。二は、『金光明』に云はく、「四地に發心して、不退三昧の果を得」と。古人釋すらく、四地は相出世に同じ、初證得に由るが故に、不退を標す。三は、調柔等の行なり、十下の攝報、並に準じて知んぬべし。

（二三）七に文を釋すとは、三分は前に同じ。初は讃請分、二は顯地分、三は重頌分なり。初の中の八偈を四に分つ。初の二は、菩薩の聞法歡喜供養を明す。次の一は、天女の妙音をも

【第四に…故に】第四に所證を明す

【自他…故に】自他は人執、法は法執をいひ、一切諸法の自性、解脱すれば繫屬する所なく、自在なるを知る。

【北鳩婁越人】北洲の人。彼土の人我我所なく、財等に於て繫屬なし。

【第五に…知れ】第五に所成の行を明す。

【十度】十波羅蜜

【第六…知んぬべし】第六に所得の果を明す。

【二三】以下、第七に經文を釋す。初に讃請分の釋。

【一四】以下、正説分の釋なり。

【論の…説くと】これ取意の文。

【四分】一、清淨對治修行増長因分。二、清淨分。三、對治修行増長分。四、彼果分。

【初の中…立つ】隨釋する中、四あり、初に因分の釋。

【地前の四定】明得定、明増定、印順定、無間定。

【明得定】見道の前相にて、智明漸く現はれ、正證近きが故にいふ。

【二處順行云云】論文を釋す。

【初の五…至る】第一の衆生界は能依、第二の法界より識界に至る四を所依として明す。

つて、地法を歌頌し、次の四は天王の聞くを慶びて供請す。中に於て、初の三は聞くを慶びて供讃す。後の一は、後地を説くことを請す。後の一は、解脱月の請なり。

(一四)二は正しく地相を説く内に、『論』の中に、先に前地の淨定總持に依りて、此地の如實智をして、淨らかならしむることを明すが故に、焰地を説くと。四分の中に初は是れ、入地の方便の故に、因と云ひ、二は是れ初入地出障行の故に、清淨と云ひ、三は是れ正住地の道品等の行は、能く所除行るが故に、對治進修上上の故に、修行増長と云ふ。四は是地滿ずれば、則ち彼清淨對治修行の増長の果なり。又初の一は是地の因、後の一は是地の果、中の二は、是れ地相なり。又初の一は加行道、次の一は無間道、次の一は解脱道、後の一は勝進道なり。何が故に解脱を、對治と名くるや。障に翻じて地を顯すを以てなり。初の中に就きて三あり。先に前を結して後を標し、二に正しく十門を列ね、三に法の功能を結す。初の中に、十法明門とは、明は謂はく、四地の證智なり。前地には未だ、明相を得ざるを以ての故に、猶地前の四定の中の、明得定の如し。相似の法とは是れ所説の法、即ち衆生界等の法なり。門とは『地經』には入と名く。彼智明に依りて、此法の中に入るに、若し能入を入と名くれば、所入を門と名く。又此に依りて能く四地に至るを、名けて門と爲す。二處順行とは、正觀思量は是れ方便、如實知は是れ正證なり。此二は同じく、所説の法に依るが故に、順行と曰ふなり。十の中に初の五は、能依を推して所依に至る。謂はく、初の一は、正報の假名を觀じ、二は正報所依の心識を觀ず。即ち本

【一は…觀ず】四の中、法界を總として、これを萬法所依の本識として論をなす。

【一五】二、清淨分の釋。經の「菩薩焰地に住す」等の下。

識は是れ、染淨の法の所依處なり。後の五句は、所依に依りて能依を立つ。謂はく、初の三句は、本識の中の所持の染法を明す。處に約して之を辯ずれば、三界唯心なり。後の二は所持の淨法を明す。勝信解とは、猶し是れ勝解なり。謂はく、所解に於て印持し決定して、煩惱をして心を汚さしめず。次の大心は、普く衆生に被らしむ。二乘の小心に同じからざるが故に。又釋すらく、後の五の中に、初の三句は依報を起し、後の二句は正報を立つ。

(一五)第二の清淨分の中に、三有り。初は總、次は別、後は結なり。總の中に亦三あり。初は佛の家に於て、轉た勢力有り。二は內法を得、三は謂はく、中智教化成就す。此三は皆、後を以て前を釋すること、知んぬべし。又初地に即ち佛家に生在す。然るに前の三地は、是れ世間なり。此地は出世の故に、於如來家轉有勢力と云ふなり。又『論』に釋して云はく、依止多聞智究竟とは、此轉有の義を釋す。謂はく、前の三地の、多聞の解に依りて、此四地出世間の慧を得るを、智究竟と名く。理實には、亦前の地の證定に依る。教化の智は、前の所聞の法に依るを以ての故に、偏に之を擧ぐ。『論』に云はく、「智障を除滅し、勝を攝するが故に」とは、此は勢力の義を釋す。謂はく、前の地の、分別の解心を除くを、除智障と名く。亦是れ當地所斷の所知障を滅するなり。此四地證勝の慧を得るが故に、攝勝と云ふ。二に、內法を釋する中に『論』に云はく、此如是淨勝等とは、前を牒し以て釋するなり。謂はく、淨は除障を牒し、勝は攝勝を牒す。並に佛家に於て得るが故に。如

【十の中…四】一、自住處畢竟智。二、同徹三寶畢竟智。三、眞如智。四、分別所說智。

【又初の中云云】經の六句を隨釋す

來自身等とは、當相に釋す。二句有り。初は人に就きて法を顯し名けて內法と爲す、即ち如來自身所具の法なり。二は以て法成の人を辨ずるが故に、此法を名けて如來法と爲す。故に、以是諸法顯示如來と云ふ。三は謂はく、十種の下は、十智の教化を釋す。謂はく、此智は、四地の證智、法明と一體にして異ること無し、得るに前後無きが故に、同時得と云ふ。此と所觀の法明と同時なり、觀察と同時には非ず。十の中に「論」に攝して四と爲す。初心不退とは「論」に釋す、自住處畢竟智なり。謂はく、大乘の法は是れ菩薩の住處なり、大乘に住する心の、退轉せざるを畢竟智と名く。二に、於三寶等とは、同じく三寶を敬することを畢竟せり。謂はく、三寶に於て聞信し、壞せざるが故に、畢竟と云ふ。三に、修習の下の二句は、眞如智を明す、即ち二無我正證智なり。一は、蘊等生滅流轉して本より、人我無しと觀ず。二は蘊等の法、亦本來不生なりと觀ず、是れ法無我なり。四に常修習の下の六句は、是れ所說の智を分別す、即ち後得と世俗智なり。攝して二と爲す。謂はく、染と淨となり。或は三と爲す。謂はく、一は染、二は染淨、三は淨なり。或は四と爲す。初の二句は依正二報、是れ苦諦なり。煩惱に隨ひて、生ずるを以ての故に。次の句の中の、半句は生死なり。「論」に世間と名く、即ち是れ集諦の故に、以何煩惱と云ふ。次の半句は涅槃、即ち是れ滅諦の故に、所有淨と云ふ。後の三句は、是れ道諦の故に、隨所淨と云ふ。又初の中に、煩惱等を以て、順に器世間を感ずるが故に、衆生世間は皆、業等の因より生ずるが故に、同因と云ふなり。次に分別生死涅槃とは、是れ集滅の二諦なり。亦

【二六】三、對治修行增長分の文を釋す。

【四門を作りて別に作す】文意明かならず。

【四念處】三十七道品の內。新には四念住といふ。即ち身念住、受念住、心念住、法念住なり。

是れ染淨雙觀するに、全體不二なりと雖も、而も兩法雜らざるが故に、分別と云ふなり。下の三句は道諦にして、亦涅槃の淨法に隨順するが故に、隨所淨と云ふ。一は、佛世界の中に於て、衆生を敎化し、菩薩の白業、差別を成ずるが故に、修習衆生業差別と云ふ。謂はく、衆生の成じ已る、差別の業に於てす。二に前際は是れ生死の染法、後際は是れ涅槃の淨法の故に、煩惱染及淨と云ふ。三に、前際の染の中に於て、一法の損すべきを見ず、後際の淨の中に、一法の增すべきを見ず、其性滿ずるを以ての故に。又釋すらく、前は前後際平等なりと觀じ、今は現在世常滅無所有なりと觀ず。是十智を行じて、衆生を敎化す。即ち知んぬ、如來の家に於て轉勢力有るなり。

(二六)第三は對治修行增長分の中に二有り。初は煩惱を護る、是れ凡行に異れり、亦自利の行なり。二は小乘を護る。是れ二乘の行に異れり、亦は是れ利他の行なり。前の中に、菩提分法を明すに、略して四門を作りて、別と作す。

四に文を釋する中に、此三十七の種類を七に分つ。謂はく、三四二五單七八なり。初に四念處を釋せば、謂はく、身受心法は是れ、念の所住處の故に云ふなり。新には念住と名く、此四の體は實に是れ慧なり、何が故に念と名くる。慧を以て觀じ、境を守ること、念と相近し、即ち六釋の中の隣近釋なり。身は謂はく、相續なり。受は謂はく、領納なり。心は謂はく、集起なり。法は謂はく、軌持なり。此四は並に是れ、所觀の境なり。若し小乘の中には、身は不淨と觀じ、受は是れ苦と觀じ、心は無常と觀じ、法は無我なりと觀ず。

【四顛倒】無常無樂無我無淨なるを常樂我淨なりと妄執するをいふ。

【龍樹の云はく】智度論四十八の七丁。

是故に此四は四顛倒を除く。若し大乘の中に『諸法無行經』に云ふが如し。身は畢竟空と觀じ、受は內外空と觀じ、心は無所有と觀じ、法は但名のみ有りと觀ず」と。解して云はく、此觀は法無我に入るが故に『勝鬘經』に準ずるに、能く八倒を除く。身念處の中に就かば、先に內を觀ず、謂はく自身なり。次に外を觀ず、謂はく他身なり。後に合して自他を觀ず。何が故に、初に別に觀じ、後に總なるや。釋に二義有り。一は病を破する不同に約するに、人に三類有り。一は人の、內情に著することは多く、外情に著することは少き有り、人の、身の爲に、妻子及び財物等を棄捨するが如し、故に須らく內を觀ずべし。二は、人の、外情に著することは多く、內情に著することは少き有り。人の、財の爲に身を喪し、欲の爲に命を殞すが如し、故に須らく外を觀ずべし。三に人の、內外俱に著すること有るが故に、須らく二を合觀すべし。一は觀行の始終に約し、一人通じて觀ず。謂はく、行人有りて、本より自身に於て、取りて淨相と爲すが故に。先に內を觀じ、內に求めて得ず、則ち外に有りと謂ふが故に。次に外を觀ず。何んとなれば、內を觀じて外に及ぼすこと能はず、外を觀ずるの時、復內を觀ずること能はず、是故に第三に內外合觀す。初の中に、內身を觀ずとは、所觀を標別す。循身觀とは、正しく觀相を顯す。循は謂はく巡歷なり。身の支分に於て、次第に觀察す。精勤一心とは、觀の所儀を顯す。謂はく、行者は自身を破せんと欲すれども、勤むるに非ずんば、辨ぜざるが故に、須らく精勤すべきが故に。龍樹の云はく「常人に離別するは易くして、知識に離別するは難し。知識に離

【又釋す云云】以下、更に凡夫の多起に約して明す。

【二に…爲す】第六識と倶なるを心受、五識相應を身受といふ。

【三に定…爲す】定心修行を內門轉といひ、散心修行を外門と名く。

【三受】內、外、內外受。

【三苦】苦苦、壞苦、行苦の三。

別するは易くして、親戚に離別するは難し、親戚に離別するは易くして、自身に離別するは難し。行者今、己身に離別せんと欲す、必ず須らく精勤すべし」と。勤は專意に由るが故に、一心と云ふなり。除世間貪憂とは、觀の所離を明す。何が故に此中に偏に貪憂を離るる。龍樹の說の如し。行者は此中に、多く貪憂を生ずるが故に、偏に之を除く。何んとならば、謂はく、創めて五欲を棄てて、本所愛を念ず、是故に貪を生ず。未だ道法を得ず、所以に憂を生ず。是故に但し除世貪憂と言ふ。又釋すらく、貪とは凡夫多く、境に著を起して捨て難し、受生の本は、三毒の初の故に、煩惱の中に、偏に貪憂の心を除くことを說く。一向貪欲の者起れば、定を障ふること最も重し。禪の中に、先に離るるが故に、五受の中に、偏に憂を除くことを說く。是故に若し貪を除くことを說けば、餘法は隨ひて遣る、若し憂を除くことを說けば、諸受之に隨ふこと、猶し破竹の如し、初節を難しと爲すがごとし。若し初節を破れば、餘節は皆隨ふ貪憂も亦爾り、故に偏に之を說く。次に外身を觀じ、後に內外身を觀ずるの類、亦同じく然り。受念處の中に就かば、亦內外倶あり。十二處の中に於て受は唯是れ外法處の所攝なり、何が故に此中に內等有りや。釋すらく、多義有り。一に、自受は內の爲にして、他受は外の爲なり。二に、意相應の受を內と爲し、五識相應を外と爲す。三に、定受を內と爲し、散受を外と爲す。此三受は三苦を離れずと觀するが故なり。又『智論』に云はく、「菩薩は、苦、樂、不苦不樂等の三受は、從來する所無く、滅して所至無し、倶に妄想顚倒より生ずと觀ず」等と。三に、心念處の中に就かば、

【五識を外云云】以下、五識は倶に五境を緣じ、第六識は外を緣ずると共に通じて七八二識を緣ず、第七は第八識の見分を緣ずるのみ。

【第二に…修なり】三十七道品中の法の內、四正勤を釋す。

【第三に…知んぬべし】次に四如意足を釋す。

自心を內と爲し、他心を外と爲す。又五識を外と爲し、意識の、外を緣ずるを外と爲し、內を緣ずるを、內と爲す。末那は一向に內を緣ずるを、內心と名く。又定散を內外に分たば、並に此心の剎那無常を觀じ、又如幻無體を觀ずること、知んぬべし。四は法念處の中に就かば、心法を以て內と爲し、不相應行、及び無爲法、並に法處の色等を、總じて外法と爲す。內外合觀は知んぬべし。

第二に四正勤とは、是れ善の十一の中に、精進數を體と爲す。但し止作に就きて、各已未を分つが故に、四種と成る。謂はく、初の二は勤めて二惡を斷せば、是れ止惡の行なり。後の二は、兩善を勤修するは、是れ作善の行なり。初の中に未生の惡は、遏めて生ぜしめず、已生の惡は、斷じて續かしめず。又已生は現行を伏し、未生は種子を除く。後の二善の中に、未生の善法は、之に習ひて起さしめ、已曾習は起して更に增廣せしむ。此れ即ち未だ有ざるを有らしめ、已に有ろを增せしむ。此四は皆、策勵に由りて、方に辨ずるが故に、正勤と名く。新には四正斷と名くることは、二惡に於ては爾るべし。二善は云何。謂はく、彼、不作を斷ずるが故に、即ち是れ勤修なり。第三に、四如意足は、所作、志を遂ぐるが故に、如意と云ふ、此は即ち是れ神なり。足は是れ所依、即ち是れ定なり。初に欲定とは、欲の加行に由りて、能く此定を起す。果を因に從へて稱するが故に、欲定と云ふ。此は是れ行體なり。斷行成とは、行の功能を辨ず。謂はく、此定行は能く諸結を斷ずるを、斷行成と名く、又釋すらく、涅槃を斷と名け、斷家の行成ずるを、斷行

成と名く。如意足を修すとは、前の欲定に就きて、其所修を明すなり。依止厭の下は、前の斷行成を明すなり。諸の煩惱に於て、加行道は厭ひ、無間道は離る。解脫道の中には、彼擇滅を證し、勝進道の中には、彼果を趣求するを、向涅槃と名く。又釋すらく、資糧道の中には隨分に厭を生じ、加行道の中には永く伏するを、離と名く。無間道の中には、正斷を滅と名け、解脫道の中には、彼無爲を證するを向涅槃と名く。又釋すらく、若し位に寄せて言はば、道前の加行の位は厭を生じ、見の位は見惑を斷ずるを、離と名け、修位に修惑を斷ずるを滅と名け、究竟位に彼極果を得るを、向涅槃と名く。此等は並に是れ、諸行治惑次第の相なり、別に覺分の前後を分つべからず。何が故に念勤を明さざる。此は已未得の定の故に、得定に方に此功能有るが故に。二に精進定とは、亦加行に從ひて、以て定の名を立つ。三に心定とは、餘處には亦意定と名く。謂はく、繫意住緣を、名けて意定と爲し、專心に境を守るを、名けて心定と爲す。並に方便に從ひて、以て其名を立つ。四に慧定とは、「地論」に思惟と名け、「瑜伽」には觀と名くるが故に。彼論の中に、此四を說きて、欲勤心觀と名く。謂はく、明慧照察するを觀と名く。或は是れ定の因、或は是れ定の果なり。斷行等は前に類して知んぬべし。第四に五根とは、此五行に依りて、能く見道を生ずるが故に、名けて根と爲す。下の文の離世間品に云はく「一に信根は沮壞すべからず。二に大精進を發して、一切の事を究竟して退轉せず。三に正念に安住して、亂想を除滅す。四に三昧方便決定して了知す。五は智慧の境界を、善巧に分別するが故に」と。

【依止厭等及び】以下、恐くは脱落有るか。

【四聖種】衆聖を生ずる行法をいふ。衣服飲食、臥具に於て所得を以て滿足し、斷惡修善を樂むなり。

【第二に…故なり】二に小乘行を護る文を釋す。經の是菩薩は、衆生を捨てざる等の下。

解して云はく、此は正しく自ら菩薩の道に約して釋す。依止厭等と、及び第五の五力は並に前に準じて知んぬべし。第六に七覺分は、亦下の入法界品の内の如し。勸へ取るべし。第七に八聖道とは、亦離世間品に云ふが如し、八正道は是れ、菩薩の道なり。一は正見。邪見を遠離し、二は正思惟。正しく一切智を念じて、虚妄を遠離す。三は正語。聖教に隨順し、口の四の過を離る。四は正業。一切衆生を、饒益し教化して、未だ曾て時を失はず。五は正命。四聖種に安住して、頭陀の功德を成就し、淨威儀を具足し、一切の思を遠離す。六は正精進。一切の苦行を勤修し、佛の十力を修して、罣礙する所無し。七は正念。悉く能く、一切の音聲を憶持し、世間の一切の亂想を除滅す。八は正定。善巧方便して、一の三昧に於て、菩薩の不可思議の法門一切の三昧を、出生するが故に。解して云はく、此等は並に、菩薩の道に約して、釋すること知んぬべし。

第二に小乘行を護る中の初句は是れ總、餘の九は是れ別なり。初の中に、菩薩此三十七品を行ずるは、但利益して衆生を捨てざるが爲に、是故に修行す。二乘の、自利を成せんが爲に、此道品を行ずるが如きには非ず。別の中に、此不捨衆生を、「論」に攝して四と爲す。中に於て初の三は、小乘の心を護り、後の一は小乘の行を護る。初の一は起行の所依と爲すが故に、本願を以て始と爲す。二は悲慈を以て物を益し、憐愍を心と爲す。上の二は狹心を護る。三は衆生の爲の故に。佛果を悕求するが故に、爲攝一切智と云ふなり。此は小心を護る。後の五句は行に名け、五種の行を修す。一は、淨土の行を起して、佛の

【一七】四に對治修行增上果分の文を釋す。

【前の中に云云】以下、隨釋するに六。今は初に煩惱染生遠離果を明す。

【論に…五】一、本。二、起。三、行。四、護。五、過。

【初に本とは云云】以下、初に本の字を釋す。

【陰入】五陰十二入。

依果を求め、二は、佛法の行を修起して、佛の正報を求む。下の二句は、求めて彼因を行す。三は彼地の方便を修す。無厭足行とは、謂はく、五地を求めて七地に至り、巧便を修習して、厭足すること無し。經の中には、此一句を缺けり。四は修不退とは、謂はく、八地已上を求めて、佛の深解脫に順ずるなり。上は自利の行なり。五は、衆生を化する行とは、是れ利他の行なり、智慧方便をもつて、善く衆生を攝する故なり。

〔一七〕第四の大段に、彼果分の中に二あり。初に行果、後に位果なり。前の中に、『論』の中に六種の果を得。一は煩惱染の生遠離の果、二に業染の生遠離の果、三は勝功德の中に於て增上の欲心を生ずるの果、四は、彼說法の尊の中に報恩の心を起すの果、五は、彼方便の行の中に懃精進を發すの果、六は、彼增上の欲の本心界滿足の果なり。初の二は、是れ離障の果、後の四は成德の果なり。前の中に、先に惑障を離るる中に、『論』に攝して五と爲す。初に本とは身見なり。是は慢を起すの本、亦是れ六十二見の本なるが故に。我知は是れ能知、大知は即ち是れ所知の大法なり。即ち是れ、三地の中の解法慢なり。我修は是れ能修、後に禪定是れ我所修と計す。此は是れ、三地の正受慢なり。中に於て我著等は、是れ人執、陰入等は是れ法執なり。「出は謂はく三昧起」とは、出定有りと計す。「沒は謂はく三昧滅」とは入定有りと計す。又釋すらく、出は謂はく、諸禪を修起し、沒は謂はく、禪定を退失す。又遠公の云はく、「出とは、諸定を修起し、沒とは、定の除滅せらるるなり」と。二に起とは、不正思惟を起し、定慢を起す。推求心とは、是れ邪に推求して、定相を取らん

【己が所得を防ぐ】經に「一歸と爲し洲と爲す」といひ、所歸の洲渚即ち涅槃なりとす。

と欲す。『論』の思惟に同じ。三に行とは、心の行を緣の中に觀じて、己が所得の八禪の劣法に於て、勝相を求覓して、他をして知らしめんと欲するが故に所行と云ふなり。『論』の多觀に同じ。四に過とは、堅く自己の所得の定等を執し、心に諸事を安ずるが故に、愛著と云ふ、即ち定愛なり。五に護とは、數勝相を觀じ、勝を取りて己に屬し、憶持して心に在き、己が所得を防ぐが故に、寶重所見等と云ふなり。皆悉斷滅とは、正しく除斷を彰す。何が故に此中に、此斷惑を說くや。『成唯識論』に準ずるに、此は是れ第六識の中の、俱生の身見等、及び所起の過なり。第四地の出世道品を得て、能く斷じて除滅するが故に、此に之を說く。又釋すらく、若し寄位に約すれば、前地は世間に寄せ、此は出世に當る。世出世を分たんが爲の故に、此に斷除す。若し此義に就かば、亦是分別の所起を得。『仁王經』に四地を說きて、名けて須陀洹の位と爲すを以ての故に、知ることを得。第二に業染の生の遠離の果は『論』の如く應に知んぬべし。經の中に略して無し。上來は是れ、前の護煩惱の家の果なり。

第三に是菩薩轉倍の下は、勝功德を明す中に、生增上の欲心の果なり。中に於て十句あり。初は總の中に、前を牒して後を起す。謂はく、前の護小乘家の智慧方便を牒す、故に此道品等を行ず。二に隨所修行の下は、別して前に依りて起る所の心を顯し、正しく欲樂心を明す。謂はく、前の策動の、所修の力に由るが故に、上の功德に於て、其實利を見る。是故に殊勝の意樂を轉起して、心をして柔和に、彼上法を求めしむ。中に於て「潤

【下の別釋云云】別の九心を釋す。論に潤益心に樂三相を擧げ、一心に樂行勝、二に三昧自在勝、三に離過對治勝とし、今以て經を釋す。

【第四に…爲す】經の「是菩薩は爾時、恩を知り」等の下。

益心を成ず」とは、勝德能潤の益を、見るを以ての故に、深欲心を起すが故に、深欲愛敬故と云ふなり。下の別釋の中に、柔は是れ柔軟なり。謂はく、法を證し、神に適ふを、樂行勝と名く。二に和は是れ調和なり。謂はく、三昧心を調ふ、緣の中に無礙なるを、自在勝と名く。此二は是れ行體なり。下の七を一と爲し、對治勝と名く、是れ行の功能なり。一は總じて離過を明す。謂はく、堪任有用の下は、別して六種の過を離る。一は、惡を離るること能はざるの過を對治す。謂はく、對治の法を求めて、疲るること無く、貪の利の爲にせず、名を妬む爲にせず、此過を離る。次の二は善を攝すること能はざるの過を對治す。二は、功德を攝せざるの行を治す。三は智慧を攝せざるの行を治す。四は衆生を攝せざるの過を治す。上の四は是れ、自分對治、下の二は勝進對治なり。一は解、二は行なり。五に自の見取の過とは、其解に違ふなり。尊教に順ぜずとは、其過相を顯す。對治は經の如く知んぬべし。六に捨爲首とは、說の如く修行す、聞思に望めて、勝と爲し首と爲す。今彼首を捨つるが故に、是れ過なり、餘文は見つべし。

第四に是菩薩爾時の下は、說法尊中、報恩の果を明す。謂はく、前の地の中に、師に從ひて法を聞くは、即ち彼師と名け、說法尊と爲す。前地從り來りて、法に依りて修行して、今成辨するを得。彼化意に稱ふが故に、報恩と名く。中に於て初の一は、恩を知りて報ずるの心なり。後の九は報恩の行なり。初の中に、「論」に釋すらく「彼知恩心を成ずとは、隨順して報恩の行を行ず」とは知恩を釋し、報恩を爲すが故に、須らく知るべきなり。下

【第五に知んぬべし】經の「是菩薩は、爾時、不轉の精進」等の下。
【共染者云云】論に「雜染とは、共懈怠共染若は過、若は不及の故に」とあるを釋す。

の九は、別して報恩の行を顯す。一は、報恩心を明し、二は、能將護同法とは、說者の心に順ふを、名けて報恩と爲す。謂はく、內心和善にして、同止し安樂なり。三は、法に依りて行を起し、以て報恩と爲す。謂はく、隨順して敎を受け、師命に違はざるを、名けて直心と曰ふ。四は、修行の事を發して、苦に逢ひて能く忍ぶを、名けて軟心と爲す。五は、修行に於て過を離るるを、師恩を報ずと爲す。謂はく、己が德を說かざるを、邪曲無しと名く。六は自過を覆はざるを、行正行と名く。七は實德行成じて、亦自ら高ぶらず。故に無憍慢と云ふ。上來は行に約し、下は二に解に就く。八は、敎に依りて語を受け、師の言を得ることを明す。九は、顚倒せずして受け、師意を得ることを明す。如是の下は、行成就を結す。中に於て、是の如く善心軟心を具足する者は、『論』に釋すらく、是は前の對治修行增長なりと。謂はく、彼は此を對治して、成就するが故に、具足と云ふ。具足寂滅心を、對治修行增長力と名くとは、前の二を具する遠離果を、寂滅心と爲す。是れ前の護煩惱對治力なり。具足忍辱心等は、『論』に彼果と名く、即ち是れ此報恩行の果なり。「前の二句は是等を顯す」とは、謂はく、初の句は善心成じ、次の句は寂滅心成ず。此二句を合して、第三と爲し、善寂滅心成と名け、以て彼果と爲す。

第五に是菩薩爾時成の下は、發勤精進果を明す。不轉とは休息せざるが故に。此を總句と爲す。下は別して九句を顯す。一は、自乘動せざるが故に、不捨と云ふ。二に『論』の中に、共雜染若過とは、謂はく、精進に耽著す。共懈怠若不及とは、此二種の平等勝

【第六に…竟んぬ】經の「是菩薩は、是の如き精進を」等の下。

【一八】以下、位果の文を釋す。經の「菩薩第四焔地に住す」等の下。

進を、離るるが故に、不染と云ふなり。三は、一切の魔煩惱行の、破壞すること能ざるが故に、不壞と云ふ。四は、常に至心に、順行するが故に、無厭惓と云ふ。五は、廣く利他を念ずるが故に、廣大と云ふ、此は是れ利心なり。六は、無量の衆生の爲に、利益の願を作して、攝化するが故に無邊と云ふ、此は是れ、利他の行なり。七は、勇悍にして當り難きが故に、猛利と云ふ。論經に此無し。八は、修習して餘に過ぐるが故に、無等等と云ふ。九は、衆生を攝化するが故に、救一切衆生と云ふ。『論』の中に更に一句有り、知んぬべし。第六に、是菩薩修習の下は、本心界滿足を明すとは、菩提分の樂欲心、滿するに依るが故に、直心清淨と云ふ。下は別に顯すが中に、一は彼道品を求むるの心、前の精進に由りて、修行增益するが故に、不失深心と云ふなり。二は、勝上證の中に於て、轉た決定心を生ずるが故に、信解明利と云ふ。三は彼上證の因、過を治し行增するが故に、善根增長と云ふ。四は、諸障を除滅するが故に、遠離世垢と云ふ。五は、此地の祕密疑事を除くが故に、不信皆滅と云ふ。六は、疑を除くを以ての故に、餘處に於て決定するが故に、無疑無悔等と云ふ。七は、化衆生の力に依る。謂はく、佛力能く衆生を化するが故に、於一切佛等と云ふ。八は勝樂行に依りて、內證相應するが故に、自然習樂と云ふ。九は、現無量の三昧心に依りて、智の障清淨の故に、無量之心等と云ふ。上來行果竟んぬ。

〔一八〕第二に、菩薩住是第四の下は、位果を明す。三果を卽ち三段と爲す。初の調柔果の中に就きて、四有り。一は調柔行、二は教智淨、三は別地行、四は說を結す。初の中に、先に

【出家の者】恐くは衍字、二の字を置くべきか。

【一九】以下、第三に重頌を釋す。

【二〇】以下、第五に難勝地を釋するに七門あり、初に名を釋す。

法、次に喩、後に合なり。法の中に、先に佛を見、練行の緣と爲す。二に恭敬等は、能練の行と爲す。三に是菩薩の下は、所練の淨を明す。能練の中に、出家の者有りて、初に佛を供するは福行、後に佛に近づくは慧行なり。一は佛に近づき、二は法を聽き、三は內教を信奉し、等しく思ふ。四は出家修行す。初二地は、仁王の報に寄するが故に、出家有り。三地は天王出家便ならず。今此四地は、出世に寄當す、須らく出家を辨ずべし。攝報便ならず。調柔の中に、五地も亦爾り、知んぬべし。金作莊嚴具とは、『論』に云はく、「阿含現作の證智の莊嚴に喩ふ、證智を得るを示現するが故に」と。二に摩尼珠は、教智淨に喩ふ。前の諸地に無きことは、是れ世間と爲すが故に。此は出世の故に是用有り。又、經の中に略して、別地の行相無し、餘は並に『論』の如く、應に知んぬべし。

(一九)第三に重頌の中に、六に分つ。初の二は、前の初の增長因分を頌す。二に三有り、前の清淨分を頌す。三に七有り、對治修行增長分を頌す。中に於て初の四は、護煩惱行を頌し、後の三は護小乘行を頌す。四に九有り、前の彼果分を頌す。中に於て細に分別すること、應に知んぬべし。五に七有り、前の調柔果等の三を頌す。六に末後の一頌は名を顯し、說を結す。第四地を釋し竟んぬ。

(二〇)第五に難勝地の七門は、前に同じ。初に釋名とは、『唯識』に云はく、「眞俗兩智の行相、互に違するを、合して相應せしむること、極めて難勝なるが故に」と。『攝大乘』に云はく、「眞諦智と世間智と、更互に相違す、此に合し難きを合し、相應せしむるに由るが故に」

【見思の煩惱】見惑思惑の煩惱のこと、三界の煩惱を概括していふ。

【三藏】玄弉三藏

【第二に…來る】二に次第を明す。

と。世親釋して云はく「此地の中に、眞諦を知るの智は、是れ無分別なり、世間の工巧等を知るの智は、是れ有分別なり。此二相違するを、應に修して合せしむべし。能く合し難きを合し、相應せしむるに由るが故に、故に極難勝と名く」と。無性の釋、及び梁の『論』は、並に此に同じ。『瑜伽論』に云はく「今此地の中に、菩薩諸の聖諦に於て、決定して妙智極めて勝るべきこと、難きを顯示するを、難勝地と名く」と。「深密」に云はく、「即ち彼菩提分法に於て、方便修習して、最極艱難なるに由りて、極難勝地と名く」と。『金光明』に云はく「是修行の方便勝智、自在に得難きが故に、見思の煩惱、伏すること能はざるが故に、難勝地と名く」と。『莊嚴論』に云はく「五地に於て、二種の難有り。一は、化を勸めて惱無きの難、二は、生心に從はず、惱無きの難なり。此地の菩薩は、能く二難を退し、難に於て勝を得るが故に、難勝と名く」と。『顯揚論』に云はく「極淨の緣諦所知の諸法微妙の慧練を證得し、極めて成じ難きを成じ、流轉と寂靜の聖道とに住せざるを、極難勝と名く」と。『十住論』に云はく「第五地の中の功德力成じて、一切の諸魔、壞すること能はざるが故に、難勝地と名く」と。『仁王經』には勝慧地と名く、諸の餘の經論も、多分皆同じ。問ふ、『仁王經』に、初地の菩薩は四天王たり、雙照二諦平等の道なり。如何が諸論は、唯五地を說くや。答ふ、「三藏の云はく、實に據らば、初地に二智雙照す、而も任運に約するが故に、五地と說く。」今釋すらく、此は是れ法に寄せて位を顯す、前地は出世なり、此地は卻りて、實に入るを難しと爲すが故に。第二に次第とは、

【第三に…斷んぬべし】三に所離障を明す。

【下乘般涅槃障云云】此は第六識相應俱生の所知障の種に約していふ。

亦三義有り。一に、四五六地は、總じて二乘に寄せ、第四は初果に寄當し、第五は羅漢に寄當し、第六は獨覺なり。前地預流は此れ羅漢と名く、義の次第の故に、是故に次に來る。預流は劣なるを以ての故に、羅漢は終の故に。用て四五の二地の差別に寄す。中間の二果は、略して寄顯せず、此は『地論』等に依る。問ふ、「若し爾らば、何が故に『仁王經』に、第七地に羅漢果を得るや。」答ふ、「此二文は各別なり。『地論』は所觀の行相に約して、以て二乘に配す。道品四諦は、俱に聲聞の行なり。第六の緣生は是れ緣覺の行なり。第七の十度は、是れ菩薩の行の故に、二乘に非ず。『仁王』の下卷。『瓔珞』の上卷は、人に約して位に配す。前の三地は、相凡夫に同ずるが故に。後の四地は四果に配し、以て地別なるを顯す。良に第七は、未だ分段を離れざるに由るが故に、下位に寄同す。二には二乘の行の中に、道品は先に居し、四諦は後に居す、義の次第の故に。三には、前地は出世を得と雖も、而も未だ世間の五明に隨順して攝化すること能はず、今此地の中は、俗智を修習す、是故に次に來る。

第三に斷障とは、『十地論』に依るに、身淨我慢障を離る。解して云はく、前の地は、出世を、以て身淨と爲し、取りて以て慢を起すを以て、便ち五地の不捨世道を障るが故に、五地に入りて、此障を對治す。此等は並に是地に攝相捨す、增微を顯すが故に。『唯識』に云はく、「下乘般涅槃に於ける障なり。謂はく、所知障の中の俱生の一分なり。生死を厭ひ涅槃を樂趣せしむる、下の二乘の、苦を厭ひ滅を欣ふに同じ。彼五地の無差別道を障へ、

【此地に…名く】これ性相通融無礙の法門を以て無差別道を釋す。

【第四に…得と】四に所證を明す。【相續】身をいふ。今、眞如の體を證得す。

【解して云はく云云】新舊の論を合會す。正しく是れ、當品の所說たり。

五地に入る時、便ち能く永斷す、斯に由りて、五地に二愚を斷ずと說く。一は純作意背生死愚。即ち是れ、此中の生死を厭ふ者なり。二は純作意向涅槃愚。即ち是れ、此中の涅槃を樂ふ者なり『瑜伽』『深密』は、此に同じく知んぬべし。解して云はく、前に世を捨て、出世間に向ひ、染に背きて、淨に向ふを以ての故に、斯障有り。此地に四諦の、染淨因果平等を觀ずるを、無差別道と名く、三地、世間の染に同じからず、四地、出世の淨に同じからず。世間に於て、能出能入雙べて、現前するを以ての故に、故に背向無く、斯障を斷ず。『金光明經』に云はく、「一意は入涅槃、一意は入生死思惟の無明と、生死涅槃不平等の心の、思惟の無明となり」と。梁の『攝論』に云はく、「一は生死涅槃一向背趣思惟の無明なり。二は方便所攝修習道品の無明なり」と。解して云はく、此は彼經論に、意を會して知んぬべし。第四に所證とは『攝論』に依るに、「相續無差別法界を證得す」と。世親釋して云はく、「謂はく、此中に於て、體に異有ること無し、眼等の、諸の有情の相續差別に隨ひて、各各異有るが如きには非ず。若し是の如く知らば、五地に入ることを得」と、無性の意に同じ。梁の『論』は少しく別なり。謂はく、彼論の中に釋すらく、「此法界は能く、三世諸佛の相續身をして、異ならざらしむ」と。『唯識』には五類無別眞如と云ふ「謂はく、此眞如は類無差別なり。眼等の類の、異有るが如きには非ざるが故に」と。解して云はく、謂はく、此地の中に、生死涅槃無差別の道を修得す、此に由りて、自他に非ざる如を了知す。平等を得るの意を、『中邊論』に云はく、「此に通達するに由りて、十意

【第五に…成ず】五に所行を明す。別の字、恐くは所の字か、今初は十度門、次に三學門、次に教化門に約し、後に成行門に約して明す。

【第六に…知んぬべし。】六に得果を明す。初に梁論の四十一の九、有の取意の文、事理不二を明す。

【三二】以下、正しく文を釋す。初に讃請分を釋す。

【三三】次に正說分の釋なり。經の「金剛藏菩薩偈說月」等の下。

樂の平等の淨心を得」と。第五に、別行とは、亦四種有り、一は、十度の中の、禪定行に當る。二は、地中に、諦觀を得、增上の慧行に當る。三は『莊嚴論』に云はく、「第五住に、教化して恆に怯れざる心を得るを以てなり、無我を以ての故に」と。四は、下の文に亦五明處の行を成ず。第六に得果とは、三種あること前に同じ。一は梁の『論』に依るに、五地に相續不異法界に通達して、無差別法身の果を得と。二は『金光明』に云はく、「五地に發心し、寶花三昧を得」と。三に調柔等は知んぬべし。

(三二)第七に、文を釋する中に、三分は前に同じ。初に讃請分の中に、十五頌有り、四に分つ。初の二頌は、菩薩衆の、三業を以て供養することを明す。次に二頌有り、天王眷屬の三業供養を明す。次に十頌有り、天女佛を歎ず。中に於て、初の一は事を叙し、次の八は佛を歎ず。初の二は、因深果現を歎じ、次の二は、體極りて用希なり。謂はく、此一類の所化の根器は、久しきより來、未だ熟せざるが故に、今佛海は彼一類に於て、常恆湛然にして、未だ曾て用を起さず。今既に根熟し、佛を感ず、機に應じて體より用を起す、故に從久遠來大海相始動と云ふ。如來久遠從り來、一切の處に、未だ用あらず今始めて方に用有りと謂ふには非ず。次の二は、此れ遇ふこと希なるを慶ぶを頌し、次の二は、歎佛德勝を頌す、後の一は總じて、天女歎じ已りて、默して住するを結す。末後の一は、衆首の正請を頌す。

(三三)第二に正說の中に、『論』に分ちて三と爲す。初に勝慢對治、二は不住道行勝、三は彼果

【初の中…故なり】別釋三段ある中、初に勝慢對治の文を釋す。

【六地の平等】本經二十六の二右、第六現前地の正說分初に明す。

勝なり。中に於て、加行道及び初住地無間道を以て、合して初分と爲す。二に、正住地分解脱道を以て、第二分と爲す。三に、地滿勝進道を以て、第三分と爲す。初の中に就きて、勝慢對治とは、遠公の云はく、慢に二種有り。一は他地慢なり。謂はく、前の四地の中に、出世の智を得、彼勝相を取るを、名けて勝慢と爲す。下は十平等心を以て、彼に翻じて治と名く。二に自地慢なり。謂はく、此十心に於て、勝相を悕求するを、復以て慢と爲す。下は如道行を以て對治す。今釋すらく、前地は解法慢障なり、正地の中に對治す。此地の所治は、身淨我慢障なり。是れ前地の中に、出世淨を得るを、取りて以て慢と爲す。此地の加行に、十平等を觀じ、正しく彼障を伏し、初入地の時、無間道の中に、正しく彼種を斷す。是故に此二を、倶に勝慢對治と名く。前地に勝るを以てなり。初は治障を說き、正住地に至りて、但勝行を修す。世出世間に於て、偏に住著すること無きが故に、能く世に隨ひて、以て衆生を攝す。初分の中に於て二あり。先に地の加行、二は初て地に住す。前の中に三あり。初に前を結して後を擧げ、二は正しく十心を顯し、三は能入の地を結す。正しく顯す內に就きて、平等の中に於て、心に清淨を得るが故に、平等心と云ふ。問ふ、『此十平等は後の六地の平等と、何の別ある。釋すらく、前地の中に、淨法を取るを、慢と爲すを以ての故に。此地の中に、偏に淨法平等を觀じ、後地は通じて、染淨平等を觀ず。此等は並に是地背に、修捨する差別の法なり。十の中に『論』に分ちて二と爲す。初の三は諸佛法と名く、即ち果法なり。謂はく、三世の十力は　悉く皆平等なり。又釋

【戒定に依りて…發す】見道初無漏に生起する無漏智は、必ず戒定修治の功能に由りてあるなり。
【次の三】見淨、度疑淨、道非道淨。
【見道…斷ず】身見、疑使、戒禁取見を斷ずるなり。

すらく、力を擧げて餘の功德の法を等取す、後の七は、隨佛法と名く、卽ち因法なり。中に於て前の六は自利、後の一は利他なり。前の六の中に、行に就きて、合して三學と爲す。初の一は戒行、次の一は定行、餘の四は慧行、離して七淨と爲す。一は戒淨、二は定淨、三は見淨、四は度疑淨、上の二は同一句なり。五は道非道淨、此前の五種は大小名同じ、後の二は名、小乘の中に異にす。六は行淨と名け、七は行斷淨と名く。彼宗は盡滅に趣くが故に。大乘の中は、六に行斷と名け、七は思量菩提分法上上淨と名く。此宗は其行斷に依りて、勝求を起すを以ての故に。二に位に就きて辨ずとは、若し小乘は、初の二は見道前に在り、次の三は見道に在り、行淨は修道に在り、行斷は無學道なり。若し大乘の中には、行斷、思量、菩提分、倶に修道に在り、餘は悉く前に同じ。何が故に、初の二は、見道の前に在る。謂はく、要ず戒定に依りて、方に能く彼無漏の聖慧を發す。何が故に次の三は、見道に在る。見道の中に於て、身見を斷ずるが故に、見淨を得て疑を斷ずるが故に、度疑淨を得、戒取を斷ずるが故に、道非道淨を得、入見道の時、十使倶に斷ず。何が故に三と言ふや。『涅槃經』に說かく、此三、重きが故に。謂はく、十使の中に、五見及び疑は、局りて見道を障へ、餘の四は見修に通ず。六の中に就きて、三は本、三は隨なり。謂はく、身見を本と爲し、邊見は隨なり。戒取を本と爲し、見取は隨なり。疑を本と爲し、邪見は隨なり。是故に三結三隨轉なり。此三結を斷じて、三淨を立つ。後の二修道に在ることは、修道の中に、障を斷じ德を成ずるを以ての故に、二有るなり、餘の文

【菩薩住五地】經には菩薩住難勝地とあり、今は論に出る。

【三慧】念意去智力といふ、卽ち勝聞慧力、勝思慧力、勝修慧力なり。

【三】二に不住道行勝の文を釋す。經の「實の如く是れ苦」等の下。

は『論』の如く知んぬべし。

第二に、菩薩住五地の下は、初住地を明す。『論』に如道行と名く。初に總顯の中に、菩修菩提分とは、前の四地所修の覺分を牒す。此地を起すに、十深淨心に依り、後に此心に依りて、此地を希求す。不住道行勝るるときは、則ち能く佛を得とは、則ち能く佛所證の眞如を證す。論經に隨順如道行と名く。又『論』に云はく、「是の如く不住道行勝れて、彼慢を破す」とは、謂はく、前四地は道を取りて慢を生ず、卽ち淨心は彼治を爲す。又淨心此勝道を希ふを、復以て慢と爲し、如道を治と爲す。如道行は、如法の中に於て、取著せざるを以ての故に、亦不住道行勝と名く。二に是菩薩の下は別に辨ず。中に八句あり。初の二は起行心なり。一は大願力、菩提心を習ふ、是れ自利行の心を起す。二は慈心疲れず、是れ利他行の心を起す。餘の六は所起の行なり。前の三は自分、後の三は勝進なり。三に福慧善根力を得るが故に、得念等と云ふなり。又釋すらく、念等の三慧の力を得るが故に。四に福智を修して常に休息せざるが故に、不捨と云ふ。五は正しく、善巧方便の行を修するが故に、出生等と云ふ。六は勝進の始、上求して厭ふこと無きが故に、欲得轉勝等と云ふ。七は行修轉た勝れて、他の佛力加持を得るが故に云ふなり。八は德成、已に在るを、自身得勝力と名く、故に生定不退と云ふ。『論』の中に三慧有り、知んぬべし。又、平等眞如を緣じて、心をして、退せざらしむるを、以ての故なり。

第二に如實知の下は、不住道行勝を明す。二有り。一は所知の中に、法智淸淨を、

【後に…知んぬべし】以下、十諦を釋す。
【合】捜玄に合に作る、善し。
【菩薩…四…遺す】窮照して無遺なるは、普賢果に在り、この所知に就かば、三一權實等の別あり。
【且く一周云云】正しく十諦制立を述す。

即ち自利と爲す、護煩惱行は世間に住せず。二に利益衆生勤方便を、即ち利他と爲す、護小乘行は涅槃に住せず。此說に前後有るも、理實には合行の故に、不住と名く。若し爾らずんば、初は應に涅槃に住すべく、後は應に世間に著すべし。故に知んぬ、倶なることを。初の中に就きて、先に四諦の實法を、分別するを明し、後に十諦の、化衆生差別を明す。又此十種は即ち是れ、前の四諦に於て、十門觀察を作すこと、亦同じ。下の文の十一門觀察は、十二因緣相似せり。故に『瑜伽』の住品に、此地の中に云はく、「四聖諦に於て、十行相に由りて、如實に了知するが故なり」と。前の中に、苦集二諦は有佛無佛體、是れ世間の雜染の因果なり。滅道二諦は、性是れ出世清淨因果の故に、實法と名く。後に十諦の中に就きて、『地論』及び遠公に依りて、四句分別を作る。一に制立とは、謂はく、四諦門の中の義は、法界を合す。菩薩は中に於て窮照して、遺すこと無く、智に隨ひて貫會すれば、廣く別つこと窮め難し、且く一周の圓數に就きて、以て十門を辨ず。然るに竝に是れ菩薩、自ら知るも、知相は明め難し、故に所化に寄せて、以て其異を顯す。此れ乃ち化に約して、自の所知を顯すが故に、『論』に、所知の法の中に、智清淨と名くるなり。二に開合とは、或は總じて一と爲す。謂はく、衆生を化して分別す。或は所化の大小に隨ひて、二に分つ。初の九は小を化し、後の一は大を化す。或は化の所起に隨ひて、分ちて以て三と爲す。前の五は生を化し、其をして解を生ぜしめ、次の四は、化して行を起さしめ、後の一は、化して證に入らしむ。或は人の不同に約して、離して以て七と爲す。初の

【實相】相は寫誤實法の意か。
【一に世諦…觀じ】苦集等の四諦は世出世に分ると雖も共に因果の差別ありと觀ず。
【二に四諦の空を觀じ】第一義中の四諦は、即空無性なればなり。
【四に文を釋す云云】以下、正しく經文を解釋す。
【四重二諦】瑜伽の四重世俗と、唯識の四重勝義を合して成立す。

一は、根の未だ熟せざるを化し、二は、根の凡そ熟するを化し、三は、深法を疑ふ者を化し、四は、謬ちて法を解する者を化し、五は正念を離るる者を化し、六七八九は、正見の者を化し、十は、大乘に於て化すべき、衆生を化す。或は法の不同に隨ひて、分ちて以て十と爲す、文の如し。若し廣く分別せば、數別無量なり。三に、實相に對して、通別を辨ぜば、此十門は、前の四諦に於て、一一に皆通ず。一に世諦とは、通じて四諦の法相差別を觀じ、二に、四體の空を觀じ、三に、通じて四諦の、非有非無を觀じ、四は通じて四諦の有無各異を觀じ、五は、通じて四諦の、縁起集成を觀じ、六は、通じて四諦に、迷ふに由りて、苦事を成ずることを觀じ、七は、四諦に迷ふに由りて、作事を起すなり。八は、四諦に通達して、滅を證することを得。九は、通じて四諦を解し、道智を成ずることを得。十は、四諦に窮達し、縁起實性、淸淨法界の故に、大乘の菩薩の因果を成ず。

四に、文を釋する中に二あり。先に十名を列ね、後に次第に釋す。『論』の中に、小乘可化衆生とは、是れ衆生を化して、小乘に入らしむるに非ず。謂はく、小乘の衆生を化して大に入らしむるが故に云ふなり。初の一は、根未だ熟せず、大に入るに堪へざれば、爲に四諦十六行等を說くを、世諦を知ると名く。此は是れ、四重二諦の中の、第三重の内の世諦なり。『瑜伽』に云はく、「他を曉悟するに依るが故に」と。解して云はく、經及び『瑜伽』は、諸の根器に通ず。『地論』は偏に未熟に約すること、知んぬべし。二は根熟の小乘の大に入るに堪ふるが爲の故に、爲に第一義の法空を說く。經に云はく、「一乘とは、小をし

【四に爲謬解等】論に「謬解迷惑深法衆生の爲の故に」とあるを指す。

て大に入らしむ、更に餘乘無きが故に。又理に二無きが故に、亦一相と名く」と。『瑜伽』に云はく、「自の內智に依る」と。解して云はく、此釋は所化に約せず。三は人有りて、第一義諦を解せず。謂はく、一向に斷滅すと。名けて深法を疑惑する衆生と爲す。相諦を知るとは、諸法の非有非無一實相を知るに爲く、故に相諦と云ふ。又釋すらく、既に眞諦を聞き、將に俗を斷滅すと謂へり、故に疑惑深法と名く。今、諸法の自相、歷然たることを、分別するが爲の故に、相諦と云ふ。『瑜伽』は俱處所に依りて、名けて此說を爲す。解して云はく、卽ち前の眞俗を、俱處所と名く。四に、爲謬解等とは、一實諦を聞きて、定んで是れ一なりと謂ふを、謬解等と名く。今は二諦の差別、一に非ずと知る。前は則ち一を疑ひ、此は則ち異に迷ふ。五は、既に差別を聞きて、各體有りと謂ひ、正道に乖違するを、名けて離正念の者と爲す。說成諦を知るとは、前の差別の四諦の諸法は、但言說に隨ひて、因緣集成して、自性有ること無しと知るが故に、說成と云ふ。『瑜伽』に云はく、「一切經」に依るに、調伏本母の名は、此に由りて說く」と。六に、正見の衆生の爲にとは、苦を知りて集を斷じ、滅を證して道を修することを得せしむ。『瑜伽』に云はく、「現在の衆苦の自性に依り、未來の苦因の生性に依り、因盡くるに依りて、彼無生性を盡し、修習に依りて、彼方便を斷ず」と。經に、「不二法に至る」と云ふは、謂はく、道諦の智、能く無二の滅理に至るが故なり。七に、大乘の可化と爲すとは、謂はく、直進の菩薩、二乘從り來らざる者は、菩薩の因果を知る。果位に於て知る者は但是れ信解力なり。影像の觀行は、是

【二四】二に勸方便を明す下。經の「菩薩は是の如く、此諸の諦智」の文を釋す。

【妄想云云】以下論文を以て述す。

【若】苦の字か。

【凡夫…名く】論に重釋する文を出し、新譯と對照す

れ佛果の無盡智の知に非ず、此れ分齊を簡定す、下の離世間品も亦是の如し。彼行に約するに簡ぶ。此中は解に就く、餘文は知んぬべし。

(二四)第二に菩薩如是の下は、利益衆生勸方便を明す。中に於て亦二あり。先は總、後は別なり。初の總の中に、亦二あり、先に有爲の過を觀ず。謂はく、虛僞とは、內の五蘊を觀ず。謂はく「妄想常等は、相似ず、無の故に虛なり」と。此は所取の非實を明すなり。「常に我想慢の事を、作すが故に僞なり」とは、此れ能取の不眞を顯す、是れ妄、是れ僞なり。謂はく、前の虛想に於て、妄に取りて我等と爲す。二に誑詐とは、外の六塵を觀ず。謂はく、「世法盡壞の故に誑なり」とは、此れ所取の不實を明し、但是れ誑なり。世法は續に似、若に似て、利有れども、而も實には速滅す。利の得べきこと無くして、而も有と言ふは、是れ誑なり。「世法は、愚癡の凡夫を牽取するが故に詐なり」とは、此れ能取、眞に迷ふを顯す。謂はく、妄取するに由りて、彼世法をして虛を隱して實と詐らしめ、其をして貪取せしむ。假住須臾誑惑凡夫と言ふは、總じて內外を結し、人に就きて過を彰す。謂はく、妄境心を引くを、之を名けて誑と爲し、心前境に迷ふを、之を目けて惑と爲す。前の有爲內外の中に於て、各境を誑と爲し、心を其惑と爲す。『論』の中に牒釋す、知んぬべし。凡夫彼に依止して、正しく我慢身を取る、新には異生と名く、舊釋は知んぬべし。下は正しく慈悲を起すを明す。中に於て、悲とは、彼衆生を憐愍するが故に。大とは、前地の悲に勝るが故に。轉勝とは、道行勝に住せざるが故に。慈とは、勝利益示現の故に。光

【二に得如是六六】以下、別して辨ず

明とは、衆生を救ふ方便智、成就の故に。

二に、得如是智慧力の下は、別して辨ずる中に、二あり。先は前を牒して後を起す。智力は前の有爲の過を、知るを牒し、不捨は前を牒し、悲慈轉た勝ろ。佛智慧を求むるは、正しく物の爲に、大義利を求むることを明す。下は正しく顯す中に、先は悲、後は慈なり。悲觀の中に就きて、二有り。先は緣集の苦を觀じ、二に又是念の下は、深重の苦を觀ず。前の中に、有爲の先後際を觀ずと言ふは、總じて先際の因、後際の果を觀ずるなり。知衆生等の下は、別の中に、先に先際を觀ず。中に於て、初に流轉を觀じ、後に無我を顯す。前の中に、但無明有愛と言ふは、流轉の因は是れ凡にして、聖に非ざることを顯す。理實には亦業等の餘緣有り、何が故に說かざる。無明は業を發し、愛は能く業を潤し、業は報を感ずるを以て、此癡愛を本と爲すに由るが故に、偏に之を舉ぐ。三は、後有を求むるが故に、生と云ふ。即ち先際の果なり。流轉生死とは、是れ欲求衆生なり。於五陰等とは、是れ妄梵行求なり。是は外道にして小乘に非ず、故に妄と云ふなり。增苦惱樂とは、是れ有求衆生なり。下は無我を顯す。中に無我、無我所と言ふは、是中の自身の無我、及び彼無我の事は、第一義の故に無なり。然るに、世俗假立の、命根力に依りて住すとは、命者を釋するなり。數數受生は、衆生を釋するなり。謂はく、衆多の生死は是れ衆生の義、數數は即ち是れ、衆多の義なり。又釋すらく、數數は受生にして、人を釋するなり。梵名の補特伽羅を以て、此には數取趣と云ふ、即ち數數諸趣の受生を取るが故なり。衆生の身心

【能取等…遠離す】論文に「能取所取我慢の意を遠離するが故に、離我我所前際と說く」とあるを引釋す。

相續して常に非ず斷に非ざるが故に、有命有衆生と說く。此釋は世俗の假有を明すなり。彼慢取の意を破するが故に、無命無衆生と說く。此釋は、病を破するに就きて無と說く。假法は破するを待たざるなり。能取等を遠離す。我我所を離るることを釋す。

下は後際を顯顯する中に、謂はく、前際の如し。以何因は彼癡愛を牒し、隨所有衆生は、前の果を牒し、隨所有苦行は、前の無我を牒す。謂はく、但苦果及び苦因有りて、行は本より我無き等なり。經の中の究竟は、是れ『論』の中の盡の字。不知究竟有出とは、滅道を離るるなり。不知無出とは、苦集有ることを、知らざることを明す。二に又作是念の下は、深重の苦を、觀ずることを明す。謂はく、無量世隨逐は、是れ共深苦なり、種種の苦事は、是れ共重苦なり。初に觀ずるに、衆生苦を受くるも厭離せざるが故に可怪と云ふ。又、無所有の中に於て、貪著を生ずるが故に、可怪と云ふ。下は可怪の所由を明す。謂はく、無明癡の故に。已今當滅の者は、是れ無量世隨逐の苦なり。二に、如是生死の下は、前を牒し後を明し、種種の苦を明すなり。謂はく、厭を生ぜざるすら已に怪むべし、況んや更に造集して、苦をして轉た增せしむるをや。「五道の苦輪」とは、是身に苦を生ず。生死水漂等とは、是れ集愛なり。歸五陰等とは、彼滅道を離るることを明す。不知不畏等とは、將苦有るを明す。謂はく、四大相違するが故に、毒蛇の如し。拔出すること能はずとは、彼集を具することを明す故に。釋に四句有り。一は、妄梵行求の衆生は、憍慢見の箭を、拔出すること能はず。二は、欲求衆生受欲とは、貪恚癡の火を滅除せず。三は、欲求

衆生行惡行とは、無明の黒闇を、破壞すること能はず。謂はく、爲に少利を見て、大惡行を行じ、後に大苦を受くるを、名けて黒闇と爲す。四は、有求衆生は、愛河を竭さず。十力等を求めざる者、滅諦を遠離すとは、謂はく、佛果の大涅槃を稱して滅と爲す。下は道諦を離るることを明す。「應の意に隨ふ」とは、道緣を失ふなり。惡覺轉とは、道因に乖くなり。悲の觀竟んぬ。第一に如是苦の下は、大慈觀を明す。中に於て二あり。初は物を愍みて、善を修す。二は發願益生なり。前の中に、先に前の苦の衆生の、之に處して孤獨にして、救ふこと無きを牒す。謂はく、已現の受苦に於て、能救有ること無く、未受の苦に於て、所依として免るることを、得ること無し。此れ苦に在りて、救ふこと無きことを明す。經に無依を缺く。下は惡に於て治無きことを明す。此經に二句有り、論經に四句有り。謂はく、善友の聞法思惟修行なり。初に善友の、人を陰す事等は、舍の如し、親近すること能はざるが故に無と云ふなり、二に、聞法は洲の如し、之に依れば則ち、四流の水に漂はさるることを免る。聽聞すること能はざるが故に、無州と云ふ。三は、思を靜めて義を窮むるを、名けて究竟と爲し、思ふこと能はざるが故に、無究竟と名く。四に、修慧正見の事等は、目の修すること能はざるが如し、故に無目と名く。唯我一人等とは、諸佛菩薩、法界に充滿したまへり。何が故に獨と言ふや。彼を待ちて、己が度生を助くることを欲せず、勇猛勝事を、顯示するが故なり。增長福智は、所化に向ふに依りて、近く人天の因と成り、遠くは涅槃の因と作さしむ。畢竟淨の者には、涅槃の果を得せしめ、無礙

【二五】以下、第三段に彼果の勝れたるを明す下。經の「是菩薩難勝地に住す」等の文を釋す。
【彼果…二有り】一に行果、二に位果。
【初の中云云】以下隨釋するに、初の中に四あり、初に攝功德勝を釋す。
【三慧】聞思修慧。
【二巧】法善巧、義善巧。
【二持】聞持、義持。

智力の者には、菩提の果を得せしむ、餘は『論』に釋するが如し。二に、如是思惟の下は、發願益生を明す。初の句は總なり。謂はく、上の文は、苦に於て救ふこと無し、今は善を與へ、皆拔苦を爲すことを明すが故に、皆爲度故と云ふ。下は別して九種を辨す。一に已住善とは、退を生じて、樂果を失はしめず。二に、不善の衆生には、修善を得せしむ。又此利樂の同じからざること、前に具に釋するが如し。三に貧乏を濟ふ、是れ順緣不足の苦なり、經に此句を缺く。四は、繫閉を救ふ、是れ違緣所逼の苦なり。中に於て、先は外緣所繫の苦なり。五に、病等は是れ、內因所發の苦なり。六は、化して正信ならしめ。七は、疑を斷じて解せしめ。八は三學を行ぜしめ。九は滅果を得せしむ。不住道行勝竟んぬ。

（二五）第三大段に、彼果分の中に二有り。先づ行に四種有り。一は攝功德勝、二は修行勝なり。此二は自利なり。是前の所知の法の中に智は淸淨の果なり、初は自分、後に勝進なり。三は敎化衆生勝、四は起隨順世間智勝なり。此二は利他なり。是前は勤方便の果なり。初は化他の行、後は化他の智なり。初の中に、初の三句は、『論』に二釋有り。先に三慧に配す、知んぬべし。次に二巧に配す。謂はく、初の句は總擧なり。二は別して法を知り、三は別して義を知る。亦是れ二持なること、知んぬべし。總を以て別を攝す。是故に『論』の中に、名けて攝聞勝と爲すなり。次の二句は戒勝を明す。初は微犯能悔す、後に堅持して犯さず。前の中に、內に慚愧有り、折伏柔和發露して、人に向ふを名けて、自

【下の五句】經の「善く是處と非處」等の五句。

【五に佛果法行を起し】十力、四無所畏、十八不共法を起す。

【住處…智德なり】論に「煩惱の染無く堅固の智慧を得」といふを釋す。

護と爲す。又化を被りて罪を擧げ、亦慚愧に由りて、能く斯を忍辱するを、名けて護他と爲す。二は、戒に於て微缺無きを、堅心不捨と名く。下の五句は智を明す。一は因緣を知るの智なり。謂はく、果は因に由るを、是處と名け、由らざるを、非處と名く。此は無因を治す。又善惡の因は、樂と苦報とを得るを、名けて是處と爲し、此に反するを、非處と爲す。此は倒因を治するなり。此智に達するを、名けて覺者と爲す。二は證理智なり。謂はく、理外の分別を、名けて魔事と爲し、證智の能治を、不隨他と名く。三は敎を知るの智なり。謂はく、正說を是と爲し、邪說を非と爲し、交參するを雜と爲し、邪を簡び正を得るを、名けて隨慧と爲す。四は神通智なり。謂はく、神通を現じて、能く邪を治し、衆生をして、歸して正に向はしむるが故に。五は、衆生を化するの智なり、知んぬべし。二に善集福德の下は、修行勝を明す。中に於て十一種あり。一は、無厭を因と爲し、福を集めて增長す。二は、進に依りて因と爲し、智を求めて捨てず。三は、釋は「論」の如し、知んぬべし。四は、邪思を起さず、戒をして光潔ならしむ。論經に此句を缺く。上の四は是れ、自分の行、下の七は勝進の行なり。五に、佛果法行を起し、六は、佛の依報の、淨土行を起す。論釋の中に、二種の嚴と名く。一は人に約す。謂はく、住處業生淨。煩惱無きは、是れ斷の德、堅智は是れ智德なり。二は法に約す。謂はく、佛果の位、諸の功德の法を以て、嚴と爲す。七は、佛の正報相好法身に依りて、彼行を起して求む。八は、佛三業の作用に依りて、行を起す。九は法を徹重するの行なり。行は法に依りて、成ずる

【行成に四句】經の「菩薩は是の如く修習して」等の文の下、四句あり

を以ての故に、敬求するなり。十は願ひて三有を取り、巧に衆生を攝す。染に在るも汚れざるを、心無礙と名く。十一は、日夜常に念じて、衆生を攝取す。小乘の心を離るるを、離餘心と名く。

第三に、菩薩如是行時の下は、敎化衆生勝を明す。中に於て初の一句は、總じて攝生を明す。二は色身等を以てするは、同事隨機を明す。三は說法斷疑を以てするは、別して愛語を顯す。下は別して、利行攝生を明す。四は、菩提に於て、方便無き衆生は、菩薩所行の道等を、解せざるが故に、行事を示して、修行を解せしむ。五は、修行を解すと雖も然も疲倦して、進まざるが故に、佛果の大利益の事を示して、以て之を勸進す。此二は、大乘の衆生を化す。六は、欲求有求の衆生の爲に、世の過患を示して、樂はざらしむ。下の二句は、梵行求の衆生を化す。七は、小乘の正見行求の大を信ぜざる者の爲に、佛の大智、廣く衆生を、益することを示す。八は、外道無智邪梵求の衆生の爲に、身業を以て通を現じ、語業に道を敎へ、邪を捨て正に入らしむ。九は總結す。行成に四句有り。一は、四緣方便。前の四攝攝生を結す。二は心常在佛とは、衆生を化するが爲に、佛の勝力を求むるが故に。三は、善根を失はざる者の、所得の德智は、皆遂失せず、四は、又復常求等とは、彼所修の行を、增勝して懃修し、行ぜしめんと欲す。

第四に、是菩薩利益衆生の下は、隨順世智染障對治を明す。中に、十句有り。一は經書等を知り、二は金石等、三は治病等、四は伎樂等、五は日月等、六は施藏等なり。此六は

【或は但…爲す】論に「病因及び死因」といふ。【五星】東方歲星、西方太白、南方熒惑、北方辰星、中方鎭星。【二十八宿】大集月藏分第十二を參照。

正しく是れ、隨世間智なり。七は不惱事、八は安成事、九は哀愍生、十は佛法に入らしむ。此四は是れ、意を結す。前の中に就きて、初の五は是れ障治、後の一は是れ、染治なり。戒等を以て、染を離るるが故に。前の中に就きて、初の句は、內に四種の障を治す。一に、書は所作の事の中に忘るる障を治す。取與等の事の中の障なり。聞法等の解の中の障たる作不作等は、行業の中の障なり。一に、作不作とは、善を作し惡を作さず。二は、善中に於て、已作未作有り。三は、未作の中に於て、時に隨ひて生を益するに、應作不應作有り。聲論二に經とは、論經に論と名く、論に因りて邪見を治し、以て正理を格量するが故に。聲論は軟智を治す、以て文章聲字を解了し、勝智を生ずるが故に。三に論經に印とは、印記分明にして、守護を假らざるが故に、彼障を治す。又伎藝は印に當る。又是六藝等の文章も亦是れ聲論なり。四は、數を以て多少を知り、記して其位を算へて、疑を生ぜざらしむるが故に、彼障を治す。上は總じて、是れ因聲なり。二は論なり、二は金石等は是れ、工巧の敎論を以て、能く貧を治す。三に治病の下は、是れ醫方なり。『論』に病に三種有り、謂はく、乾消等は內の四大の不調の相、鬼著等は是れ、外の衆生の相なり、蠱毒等は內外に通ず。亦四大は是れ草毒なり。亦衆生相は是れ毒蛇なり。此等は或は但病を成じ、或は命死を致すが故に、因と爲す。呪藥の二種は、通別して其四を治す、妓樂等は憂惱障を治し、國土等は不喜樂障を治し、金銀等は、世間繫因等の障を治す。五に、日月等は能く、報分過を治す。作惡因障は、謂はく、災相を視て、善を修し惡を排するが故に、治を說くなり。曜

等の攝とは、謂はく、日月五星を七曜と爲す。五星は謂はく、東方の歳星等、二十八宿は、謂はく、角亢等、日月五星、中に於て宿るが故に。『論』の中に、入八業果とは、一は日、二は月、三は星、四は宿、五は吉凶、六は動地、七は夢、八は相なり、此中の怪なり。「身中の諸相」とは、愛不愛の果行の故に。謂はく、過去の愛果の、因行有るに由りて、好相有らしむ、不愛も亦爾り。六に、布施等は是れ、內明なり。『論』に是染對治に、六句有り。一に、施は慳染を治し、二に、戒は破戒染を治し、三に、禪は貪欲染を治し、四に、神通は邪歸染を治し、五に、四無量心は、妄行の功德染を治す。謂はく、殺生祭祀して、福を求むる者を、妄行德修と名け、四無量能く治すればなり。六に、四無色定は、妄修解脫染を治す。外道等は、妄に無色を取りて、以て解脫と爲すを以ての故に。下は後の四、世間智を起すことを明す。四種の相有り。一は、諸不惱等は、是れ異障中の無障なり。謂はく、捕獵等の、衆生を惱ますの障無し。二は、安衆生は是れ、過無き樂を與ふ。謂はく、樂は罪を生ぜざるが故に、過無し。三に、哀愍等は是れ、發起清淨にして、衆生をして、苦無く、樂有らしむと雖も、而も著欲放逸ならしむ。是故に、彼衆生を愍むが故に、放逸を離れしむるが故に、發起淨と云ふなり。四は、令入等は、所用清淨なり。謂はく、放逸ならずと雖も、出道を求めず、是故に佛法に入りて、受用淨ならしむ。又釋すらく、此四句は、後より前に向ひ、前の六句を結す。謂はく、此は佛法に入らしむとは、前の第六施戒を結す。二は哀愍等は、前の第五を結す、日等の災怪を示し、放逸を離れしむるを以て

【二六】上は行果を釋し竟れるを以て次に位果を釋す。經の「菩薩難勝地に住すれば」等の下。

【得轉…頌す】以下、得勝多聞三昧を釋するに、論意による。

【二七】以下、重頌を釋す。

の故に。三は、安樂生事は、初の四句を結す。同じく樂を與ふるを以ての故に。四は、諸の衆生の事を惱亂せずとは、前の於衆生の六の中に、初は三、後は二を結す。此五門は即ち五明の所攝なるを以て、能く闇障を除き、倶に能く智を生ず。是故に、「論」の中に、前の三句を釋して、後の二を超擧するは、良に此が爲なり。其第四句は、但與樂の爲にして生智に非ざるが故に、此れ餘を結するに非ず、遠の疏の如く、應に知るべし。

〔二六〕第二に地果の中に就きて、三果の科釋は前に同じ、得轉勝多聞三昧と言ふは、論經に、「多聞陀羅尼と名くとは、義陀羅尼を得るに非ず」と。謂はく、勝に對して、劣を彰すなり。「平等の淨心は、得難きを以て」等とは、劣に對して勝を顯すなり。能其の二難を以ての故に、聞持するを得。一は地初平等心は得難し、二は出世間を樂ひて、世間に現ずること難し、此は是れ不住道行勝なり。此地の智光を以て、是眞如の事を證するが故に、金器、車渠、瑪瑙等と說き、日月等は教智淨に喩ふ。阿含增長に依るに、智慧光明は、前地の智に勝るるが故に。謂はく、前地の珠光に勝るるが故なり。餘は並に知んぬべし。

〔二七〕第三に、重頌の中に、三十九頌有り。初の十一は、前の勝慢對治を頌す。中に於て初の二は、十平等を頌し、次の二は道品を頌す。鐵杖は喩なり。次の二は勝行、嚴身の喩、次の二は師子吼法の喩、次の三は、前の初住地の、得念不退心を頌す。「論」には如道行と名く。第二の常爲の下の十三は、不住道行勝を頌す。中に於て初の四は、前の所知法の中の、智清淨を頌す。二に如是觀の下の九は、教化衆生勤方便を頌す。中に於て初の一頌

半は、總じて虚僞を觀じて、悲慈の二心を、生ずることを頌す。次の三頌半は、悲中の觀の、集苦を緣ずることを頌し、次の三は、觀深重苦を頌し、次の一は、大悲觀の事を頌す。第三に、常住正念の下の七頌は、彼果勝の中に、初の一頌は功德勝を攝し、次の一頌半は修行勝、次の半頌は敎化衆生勝、次の四は起世智勝を頌す。下の七は地果を頌す。初の三は調柔、次の三半は攝報、次の半は願智、後の一は、究竟難勝地を、說き竟りぬることを結す。五地竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第十二

【一】以下、第六現前地を七門を以て釋す。初に釋名。

【緣起智】これ十二緣起の大法を觀じ、無性の空に入るもの所觀の境に約して、立名せる能觀の智。

【無分別智】根本智、實智ともいふ。斷障證理の功能を有す。

【無性の釋】無性の攝大乘論釋第七をいふ。

【第二…來るべし】二に說次を明す。

華嚴經探玄記　卷第十三 下第七地を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

(一)第六現前地。亦七門あり前に同じ。初に釋名とは、『攝大乘』に云はく、「緣起智に由りて、能く般若波羅蜜多をして、能く現在前せしむるが故に現前地と名く」と。世親釋して云はく、「謂はく、此地の中には、緣起智に住し、此智力に由りて、無分別智をして、現前することを得て、一切の法の無染無淨を悟らしむ」と。無性の釋の意、及び梁の『論』等、並に此說に同じ。解して云はく、加行智は、根本智を引くに由りて、眞如の無染淨法界を證して、現前せしむ。故に『解深密經』に、「現前に諸行の流轉を觀察し、又無相に於て、多く作意を修して、方に現前するを得るを、現前地と名く」と。解して云はく、此れ皆二義あり。一には、現前に諸行の流轉を觀察し、二には、多の作意に由りて、無相觀をして、方に現前することを得せしむ。『莊嚴論』に云はく、「生死涅槃に住せざれば、觀慧現前するを、現前地と名く」と。『十住論』に云はく、「魔事を除き已りて、菩薩の道法皆現在前す」と。『仁王經』には、名けて法現と爲し、『成唯識』は『攝論』に同じ。『瑜伽』は『深密』『金光明』等に同じく、更に異說無し。『十地論』等は、前に已に辨ずるが如し。第二に次第とは、亦三義有り。一には、前の位は聲聞に寄せ、此は緣覺を明す。法に寄すること前に過ぎたり。

【第三に…同じ】三に所離障を明す

【五地は…盡きず】第五地に眞俗雙觀するをいふ。

【唯識論】同論卷九の文。

【淨相を…能はず】別牒別釋す。

【苦集の流轉門】十二因緣の初、無明より次第相生して老死に到る、これ流轉門なり。

【滅道の淨相門】無明滅より老死滅を觀ずる還滅門に就いていふ。

是故に須らく來るべし。二には、四地には世を出づと雖も、世に隨ふ能はず。五地には能く、世間に隨へども、而も染淨の見を、破すること能はず。此地には、無染淨法界を觀察して、彼見を破するが故に、是故に來るなり。三には、『唯識論』に云はく「第五地の中には、有相觀は多く、無相觀は少し。第六地の中には、無相觀は多く、有相觀は少し。第七地已去は、純無相觀なり」と。今此地は、無相觀に於て、退くこと少く、入ること多し、是故に須らく來るべし。第三に所離障とは、『十地論』に依るに、微煩惱習障なり。解して云はく、此位の中に、無相觀を修すること多きを以て、障は此と違するが故に微習と說く。又前地の障に形らへて、此を說くを微と爲す。理實には即ち是れ、所知障の中には、倶生の一分の、細の染淨を執するなり。六地の無染淨法界に違するが故に以て障と爲す。良に以れば五地は、三門の染淨の別位を超えて、合して同處ならしむ。而も一相未だ盡きず、此に至りて方に除くが故に、微細と說く。『唯識論』に云はく、「麤相現行障と名く。謂はく、所知障の中の、倶生の一分、染淨の麤相現行すること有りと執し、彼六地の、無染淨の道を障ふ、六地に入る時便ち能く、永に斷ず。斯に由りて六地に、二愚と及び彼の麤重とを斷すと說く。一には、現觀察行流轉愚。即ち是れ此中の、染有りと執する者、諸行流轉は染分の攝なるが故に。二には、相多現行愚。即ち是れ此中の、淨有りと執する者、淨相を取るが故に、相觀多く、行ず。未だ多時に、無相觀に住すること能はず」と。解して云はく、初の愚は苦集の流轉門を執し、後の愚は滅道の淨相門を執す。『金光明』に云はく、

【第四…入ると】四に所證を明す。

【世親の釋】攝大乘論釋三十七の十五左。

【唯識】同第十。

【此に了達…知る】淨用の釋に依りて證す。

【第五に…尋ねよ】五に別行を明す。

【第六に…知んぬべし】六に別果を明す。

【二】以下、正しく本文を釋す。初に讃請分の文。

「一は諸行相續了了顯現の無明なり。二は諸相數數行じて、心に至る無明」と。釋して云はく、此後の無明は、還滅の淨相、數數心に於て現じて、彼長時の多無相觀に、違するが故に、以て障と爲す。梁の『論』『深密』『瑜伽』は、『唯識』に辨ずるに同じ。第四に所證とは、『攝論』に依るに、無染淨法界を證すと。世親の釋に云はく、「本より雜染無し、性は染無きが故に。既に雜染無ければ、即ち清淨も無し」と。『唯識』に云はく、「亦は無染淨眞如なり。謂はく、此眞如は、本性無染なり。亦後に方に淨なるが故に、無染なりと說くべからず」と。『中邊』並に此釋に同じ。又『中邊論』に云はく、「此に了達するに由りて、緣起の法の無染無淨を知る」と。『攝論』に云はく、「此義を了知して、第六地に入る」と。第五に明行とは、十度の中には般若の行に當り、地の中には緣起觀增上慧の行に當る。『莊嚴論』に「第六住に染心を起さずして、緣起に依りて受生するが故に」と。下の文を尋ねよ。第六に別果とは、梁の『論』に無染淨法界に通達し、自他相續、無染淨果を得。『金光明』に六地に發心して、光焰三昧を得」と。地の行果及び位果に當る、文を尋ねて知んぬべし。

(二)第七に文を釋する中に、三分は前に同じ。初は讃請分の中に、十八頌あり、五に分つ。初の二は、菩薩、法を聞きて供養し讃歎す。次の二は、諸天歡喜し供養す。次の二は、天王の眷屬供養す。次の十一は、天女歌樂して、佛の功德を歎ず。中に於て初の二は、總じて說の益を歎ず。次の三は、大智證空を歎ず。次の一は、大悲攝物を歎ず。次の四は理行無礙を歎ず。次の一は天女の靜默、下の一に、上首の說を請ず。

【三】次に正說分を釋す。「經の金剛藏菩薩の言はく」一等の下。

【初に勝慢云云】以下、隨釋するに三分ある中、初に勝慢對治の法を說くの下。

【前の中、一切法…攝ず】論に一切法を十二入とする所以を釋す。

【根塵境識】根は六根、塵境は六境、識は六識。十二處十八界をいふ。

【塵境】舊に六塵新に六境といふ。塵は境に同じ。

【三無性】相無性、生無性、勝義無性。

【念の展轉の行相】虛妄分別に由りて諸入則の上に相あり、今能生の妄想旣に無體、所生の諸相隨ひて無きの意。

（三）第二は、正說分の中、『論』は前地に同じて、科して三分と爲す。但し前却するを異と爲す。謂はく、前地は赴地の方便、及び初住地は、同じく勝慢對治と名く。此中に初住地は、不住道行勝の攝に入る。漸く勝るるを以ての故に。初に勝慢對治とは、前の五地には、四諦の法、染淨の相を、觀ずるを以ての故に、取染淨障と名く。是故に十平等通じて、一切法平等と觀ずるなり。文の中に三有り。初には、前を牒して後を起す。二には、何等の下は、正しく十行を顯す。三には、如是の下は、行を結して地に入る。正しく顯す中に就きて、此十平等を、分ちて三と爲す。初の八は、無を以て有を破し、次の一は有を以て無を破し、後の一は有無雙べて破す。又初の一は是れ總、餘の九を別と爲す。前の中に、一切法と云ふは、『論』に、十二入を名けて、一切と爲す。蘊の中には、無爲の法を攝せざるを以ての故に、界と處には攝し盡す故に。初の十二處は、一切法を辯ず。根塵境識此れ皆、三無性を離れざるを以ての故に、是故に無性故平等と云ふ。論經に無相と名くることは、無性の相の故に。『論』に「十二入の一切法は、自性無相平等の故に」と。下の九は別の中に、論主九種の相對治を立てて、無相を顯す。初の一句は、十二入の自相を明す。但是れ妄想の所作のみにして、實に所有無きが故に無相と云ふ。論經に、無想と名くることとは、彼相即ち是れ想なりと明さんが爲の故に、無想と云ふなり。二には外、疑ひて云はく、旣に所取は唯想なれば、相空と說くべし。想は能く相を現ず、想は應に是れ有なるべし。『論』に云はく、「念の展轉の行相」と。謂はく、念は猶し想のごとし。釋の意は、此想念は遷りて、

【三に疑ひて云云】前は想を遣り今は相を除遣す。想に依りて相を成ず、想既に無體、所成また無性の意。

妄想に依りて、展轉に體無きを明すが故に、無生平等と云ふなり。餘經に「一心より相生じて、心が與に相を作り、和合して有り、共生共滅して、同じく性有ること無し」と云ふは、此れ之謂なり。三に疑ひて云はく、既に想相展轉して、互に依ると說く。是れ則ち、諸法の生成建立、豈是れ空ならんや。釋すらく、相は想に依るが故に、所取は成ぜず、想は還りて相に依れば、能取、立せず、互に依りて、兩ながら壞することを明すが故に、無成平等と云ふなり。此上は迷苦諦の執を破す。四に疑ひて云はく、苦は是れ所生にして、說きて空と爲すべし。集諦は能生なり、豈是れ有に非ずや。『論』に染相の故にと云ふ。釋すらく、惑業本寂にして自性離ることを明す、故に平等と云ふなり。此文は第八句に在りて、『論』に準ずれば、此處に在るべきが故に、此に辨ずるのみ。五に疑ひて云はく、苦集は、染法は說きて空と爲すべし。滅道は淨法なり、豈是れ有に非ずや。『論』に淨相の故にと云ふ。釋すらく、染法は既に空にして、染に翻ずべき無しと名けば、淨と說くべからざるが故に本來淨と云ふなり。上來は相を遣る。六に疑ひて云はく、若し染淨俱に空なるときは、則ち種種の言說を起すべからず。既に名言有り、明に知んぬ、卽ち目くる所の義有ることを。『論』に云はく、「相を分別することは、名言分別なり」と。釋して云はく、但名は義に依りて立つ。義は名に由りて顯る。彼義因を觀じて、名の果を見す、又、名の果を觀じて義因を見す。此世間に、名を得るも、義を得ざる有り、義を得るも、名を得ざる有りと爲す。故に知んぬ、名を尋ねて義を取るは、但し是れ妄想戲論の故に、無戲平等と

【維摩に云はく云云】中卷末、不二法門品にあり、今は取意の文。
【取らず捨てず】維摩經には、無縛無解といへり。

云ふ。七に疑ひて云はく、若し染淨の名義、一切皆空ならば、何が故に菩薩、染を捨てて淨を求むる。既に取捨有り、豈諸法無からんや。又云はく、妄法は既に空ならば、即ち驗らん、眞理は是れ證取すべし。『論』に云はく、「出沒相とは、淨法の取るべきを出と名け、染法の捨つべきを、沒と名く」と。釋すらく、妄法は即ち空にして、捨離すべき無しと明す。眞理は念を離れ、取得すべからず、故に無取捨故平等と云ふなり。『攝論』に云はく、「若し生死に於ては、捨に非ず不捨に非ず。若し涅槃に於ては、得に非ず不得に非ず」と。又『維摩』に云はく、「若し生死の性、即ち是れ涅槃なりと達して、其中に於て取らず捨てざる者、是を入不二法門と爲す」と、是れ此義なり。八に疑ひて云はく、上に眞妄の有の見を起すが故に、無を以て之を破す。若し爾らば、二諦を斷無する、應に正理に當るべし。『論』に云はく、「我有相に非ず」と。問ふ、「此れ我、有に非ざる、豈正理に非ざらんや。何が故に、以て所治の相と爲すや。」答ふ、「此我非有の相を取るを以て、斷滅の無に同ずるが故に、是れ失なり。」釋すらく、如幻の緣起は、存するを礙へざるが故に、斷滅に同じからず。故に以幻等故平等と云ふなり。九に疑ひて云はく、我先に有を取らば、即ち破して無と爲す。我復無を取らば、復幻有と說く。是故に我今、亦有亦無を取る、應に正道理なるべし。『論』に云はく、成壞相と、成は是れ有相、壞は是れ無相なり。釋するに二途有り。云はく、我前に汝が有と謂ふを、破するが故に、無と說くも、法體實に是れ、無なりと謂ふには非ず。汝が無と執するを、破するが故に、有と說く、法體情の如く有と謂ふには非

【但し是れ…見つべし】不二の正義を結ぶなり。

【三に行を結す】以下、方便の行滿じて第六地に入るを結示す。

【四地に除く…得】四五六地に、次の如く麁中細障の三品を除斷し、軟中上品の順忍を獲得す。

【下品は能く…故に】九品の有漏智九品の煩惱を伏する如き、下下品の智上上品の惑を伏し、乃至上上品の智は下下品の惑を伏す。無漏の九品の智、九品の修惑を斷ずる又同じ。

ず。是故に正理は是れ、有無に非ず、故に有無不二故平等と云ふなり。一は云はく、我前に無と說くは、是れ有に異ならざるの、無なるが故に、無に非ず。又我前に有と說くは、是れ無に異らざるの、有なるが故に、有に非ず。是故に無を離れて、別に有の、無と與に二と爲べき無く、有を離れて別に無の、有と與に二と爲べき無し、故に有無不二故平等と云ふなり。此中は是れ、有無互に遣るを、名けて不二と爲すに非ず、亦有無合するを、名けて不二と爲すに非ず。亦總じて有無無きを、不二と名くるに非ず。但是れ有即是れ無なり、無即是れ有なり、故に不二と名く、之を思うて見つべし。三に行を結す。地に入る中に、初は總じて入位を結す。二に菩薩如是の下は、別して結するなり。別して結する中に、如是觀等は、前に觀ずる所の、十平等法の觀を牒す。能忍と言ふは、正理を忍受し、障垢を遠離するが故に。又深理を忍證して、分別の想無きが故に忍と名くるなり。隨順とは、謂はく、此觀智は、平等眞如の法に、隨順するが故に。明利とは、能く微細の障を對治するが故に。前の四五六地にも、亦同じく順忍を得、障を除けども、未だ細ならざれば、明利と名けず。四地に除く所の解法慢障は、最も麁なるを以ての故に、軟品の順忍を得。軟は麁し、下のごとし。五地には、身淨慢を除くは中の故に、中品忍を得。此は染淨の法の分別の慢、最も細なるを取るが故に、上品忍を得。故に明利と名く。下品は能く、上品の所治を對治し、乃至上品は能く、下品の所治を對治す。障と治とは相翻すること、理必然の故に。無生忍未現前と言ふは、七八地上は是れ、無生忍の位なるを以て、此地は彼に非ざる

【四】以下、第二に不住道行勝を明す下。經の「是菩薩は一切法の一」等の文を釋す。

【論の中に…故に】論文に一勝の大悲を以て首と爲すが故に一といふ意。以下三をは、取意の文なり。

が故に、未現と云ふ。然ども複忍に順ずるが故に、順と名くるなり。理實には初地にも、亦無生を得。五忍に寄せて、以て諸地に配せんが爲の故に、是說を作す。謂はく、地前を伏忍と名け、初二三地は、世間に寄在して、名けて信忍と爲し、四五六地は、二乘の位に寄せて、名けて順忍と爲し、七八九地は是れ菩薩の位にして、無生忍と名く。十地及び佛は、因果の究竟なれば、寂滅忍と名く。此地は是れ順忍にして、中上品の故に、明利と名く。勝慢對治竟んぬ。

(日)第二に是菩薩の下は、不住道行勝を明す。中に於て二有り。先づ初住地に就きて、以て不住行を明す。二は、作是念の下は、正住地に就きて、以て不住を明す。前地は劣なるが故に、唯正住地を方に不住と名く。此地勝るるが故に、初住地を即ち不住と明す。初住の中に就きて二あり。初の觀一切等といは、前を牒して後を起す。二に大悲等といは、正しく不住を顯す。論經に四句あり。初の三は、能觀の心を明し、後の一は所觀の生滅なり。此經に略して、大悲滿足無し。然るに此三心釋に、六重を作る。一は相を辨ずとは、愍心創めて起るが故に、悲首と云ふ。『論』の中に、殊勝の大悲は、三世の衆生を、攝するを以ての故にと。二には、果を求むること慇重なるを稱して増長と爲す。又上は佛果を求むるを、名けて增長と爲す。『論』の中に、所知の緣起に於て、智をして淸淨ならしむと。即ち此淨智を、佛果の本と爲すを以ての故なり。三に有爲の心を厭離す。『論』の中に、「一切の種、微細の因緣を觀じて、以て厭離を生ず」と。細極を緣觀するが故に、滿足と云ふ。

【五】二に、正住地を明す下。
【初の…如し】初に總じて法界緣起を明す。
【初】或はいふ、門の字か。
【別說】捜玄記を指す。
【本有】緣起の本實體は諸情を離れ

二に次第を明さば、前の、空を觀じて、便ち衆生の虚妄所纏を、念ずるに乘ずるが故に、先づ悲を起す。悲念を以ての故に、佛果の智を求め、以て衆生を益す。次に增長の佛智を起せば、必ず離過に由りて成ず。是故に末後に智を起して、緣生の過患、終に極ることを觀ず。三に二利に約すとは、初の一は利他、後の二は自利なり。四に二護に約すとは、前の二は小乘を護る。一は狹心を護り、二は小心を護り、後の一は煩惱を護る。五に因果に約すとは、初と後と因を攝し、中の一は果を求む。六に不住に約すとは、初の一は不住涅槃、後の一は不住生死、中の一は俱に所住無し。所觀の生滅の中に就きて、十二緣生の順は生、逆は滅の故に、觀世間生滅と云ふ。此は是れ總觀なり、下は十門を以て、別して彼法を觀ず、知んぬべし。

（五）二に正住地の中に、廣く緣起の義を顯すに、略して四門を作る。一には、總じて法界緣起を明し、二には別して、十二有支を辨ず。三には分齊を料簡し、四には正しく本文を釋す。初の法界緣起に、略して三義有り。一は染法の緣起に約し、二は淨法に約し、三は染淨合して說く。初の中に四門有り。一は緣集一心門、二は攝本從末門、三は攝末從本門、四は本末依持門なり。初門は並に、別に說くが如し。二に淨法緣起とは、亦四門有り。一には本有、二には修生、三には本有の修生、四には修生の本有なり。下の性起の處に說くが如し。三に染淨合說とは、亦四門あり。一は翻染顯淨門、二は以淨應染門、三は會染卽淨門、四は染盡淨泯門なり。亦別說の如し　第二に別して、十二有支を明すとは、其には別章の

て、三世不動にして存す。

【修生】信等の善根、淨教に對し緣に賴りて始發するをいふ。

【本有の修生】諸の淨品本より性を同うす。即ち新善を修生する諸緣は妄法なるも、所發の眞智はこれ普賢の理に合致する故に性體無分別なると共に修智も亦無分別にしてかくて修生本有、同性にして發るといふべし。

【修生の本有】如來藏性諸染の中に隱沒す、凡夫迷うて本有なるを知らざるのみ。

【一には隨染云云】初二は起信論の隨染本覺の下の智淨相、不思議業相なり。

【三に會染即淨】無明之相、覺性を離れざるをいふ。

【四に染盡淨現】本覺をいふ。

如し。第三に料簡分齊とは、三門を作る。一は本經に就き、二は釋論に約し、三は經論對攝す。初の中の、本經の内に二重有り。先づ別して十觀を明し、後に名を顯して重ねて結攝す。何んが十觀なる。一には因緣分の次第、二には一心の所攝、三には自業助成、四には不相捨離、五には三道不斷、六には先後際、七には三苦集、八には因緣起、九には生滅縛、十には隨順無所有盡觀なり。中に於て各順觀逆觀有り、故に二十門有るなり。謂はく、順觀は大悲不住涅槃、逆觀は大智不住生死の故に、不住道と名く。前の五地の中に、四諦染淨を觀じ、不住を明すに、此地勝るるを以ての故に、唯染法に於て、順逆觀を起して、以て不住を明すが故なり。二に釋論の科とは、此十番の緣生に於て、三門分別を作す。一には、厭離有爲心の中に就きて、此十番を釋す。此れ即ち是れ前の悲滿足觀なり。二には、深念衆生心の中に就きて、此十番を釋するを、大悲隨順觀と名く。此は即ち是れ、前の大悲を首と爲すなり。三は求佛心の中に約して、此十番を釋するを、一切相智分別觀と名く。之は即ち是れ、前の大悲增上なり。此三と前の三と、次第不同なることは、前は生心の次第に約し、今は正行の次第に約す。謂はく、先は自ら過を離れ、次は衆生を念じ、後は大果を求む。前と別なり。此三門の中に、各十番を觀す、即ち三十門有り。復各逆順有り、故に六十門分別緣起觀有り。三に經論對攝とは、二門有り。一は相對、二は相攝なり。先づ相對とは、上は論主但經の中の、初住地の處の三心を取りて、十門緣起を分別して、各逆順を具して、六十門と爲す。今は下の文の、後果分の中を

【二に別して云云】以下、二に別して十二支を辨じ、三に十門の分齊を料簡するなり。

【中に於て各順逆觀あり】十二支に約き、染緣起にも淨緣起にも各各順逆の二觀あるをいふ。

【大悲下化衆生】十二支生死衆苦を觀見し生死流に入りて化益す、

【大智不住生死】生死流轉の根源を除きて迷界より脫せしむ。大智斷障の功能をいふ、

尋ねて、更に三解脫門を以て、因緣集を觀ず。即ち驗するに、前に通じて一百八十門の分別緣生觀と成る。次に釋すらく、論主は經の中の、十門の次第に依りて、解釋せずして、自ら乃し更に改轉して、後三門を作りて、別に解釋する所以は、意許の經の中の十門に、十二緣生の義を釋して、已に顯現すれば、釋を待たざるが故に。初住の三心は、此十門を隱ること、意隱れて知り難し、須らく釋して方に顯すべし。是故に別して此三門を作り、此に由りて釋す。當に知るべし、經論合して擧げ、總じて四重と爲し、此緣生を釋することとを。一一に各十あり、即ち四十門と爲す。各逆順有り、即ち八十門と爲す。三空を以て之を融じ、總じて二百四十門と成し、緣生の法を分別す、應に此意を知るべし。二に雜攝とは、「第二の初門の內に、開いて三段と爲す。一は成答相差別と名く。此は經の中の、初の一の門緣分次第觀を攝す。二は、第一義諦差別と名く。此は經の中の、第二の心所攝の中の、半門を攝す。三は、世諦差別と名く。此は經の中の、後の八門半を攝す。此三の中に於て、初の一は妄我非有を顯し、後の二は眞俗非無を顯す。義理周く備るが故に。第二に大悲隨順觀の中、十に分ちて四と爲す。一は、觀衆生愚癡顚倒と名け、十が中の第一の門を攝す。二は、除癡求解脫と名け、第二の門を攝す。三は、異道求解脫と名け、其次の四門を攝す。四は、求異解脫と名け、後の四門を攝す。第三に、一切相智分別の中に、十に分ちて九と爲す。一は、染淨分別觀と名け、初の半門を攝す。二は、依止觀と名け、初の中の後の半門と、及び第二門とを攝す。三は、方便觀と名け、第三門を攝す。

四は、因緣相觀と名け、第四門を攝す。五は、入諦觀にして、第五門を攝す。六は、力無力信入依觀にして、第六門を攝す。七は、增上慢非增上慢信入觀にして、第七門を攝す。八は、無始觀にして、第八第九の二門を攝す。九は、種種觀にして、第十門を攝す。釋相は逆に、准思して知んぬべし。

(六)第四に文を釋すとは、此十門を釋するに、卽ち十段と爲し、一一の門の中に、皆四門の解釋を作す。一は經に依りて別釋し、二は論に依りて、初に厭離行爲に約して釋し、三は大悲隨順に約して釋し、四は、一切相智分別に約して釋す。是の如きの四重は、經及び論に依りて、收攝すること方に盡せり。第一段の中の、四門の內に就きて、先に經文に約して、因緣分次第觀と名くとは、此中に正しく、有支無我觀を顯す。中に於て二有り。初は倒惑有我妄起緣分を明し、二は又作是念の下は、諸諦の理に迷ひて、緣を起す次第を明す。初の中に三有り。一は無我を辨定し、二は緣起を述成し、三は、位に依りて行ずることを結す。初の中の二句は、初に世間受身由著我と言ふは、惑情を反擧して、我は理に非ざることを明す。若し我は理有にして、著我、理に順ぜば、應に出世を得べし。旣に世間に生ず、明けし我は理に非ざることを。二に、若離著我則無生とは、觧心を順擧して、理は我に非ざることを明す。若し理が我に有らば、離我は理に違し、應に世間に生じて、旣に出世を得べし、明けし理は我無きことを。二に一切凡夫の下は、此無我に迷ひて、彼有支を起すことを明す。中に於て、先に順に緣起を觀じ、後は逆に無我を觀ず。前の中に隨

【六】以下、正しく經文を釋す。

【經及び…盡せり】下は此段の意趣を述す。

【第一段の中云云】以下別釋する中十あり。初に因緣分次第の中、第一に經に依りて因緣分次第觀と名くることを明す。

【因緣分次第觀】有支相續觀卽ち十二支次第相生するを觀ずるなり。

【二に一切凡夫云云】緣起を建立する文。先づ順逆を分つ。

【前の中云云】以下順逆を釋するに初に順觀を釋

し、後に略して通縁を指す。今は無明支を擧げて得す【餘經の中】罪業經、瑜伽論をいふ。

【本識】第八識。

【有漏…對なり】總じて愛取有の三支、生老死の二支を感ずるを明す。

【四に所謂云云】以下、六緣あり、總じて能生を明す【二は無明覆云云】中有の末後、將に受生せんとする時に起る潤業の無明にして、發業の無明に非ず。

邪念等とは、是れ餘經の中の不正思惟を、無明の因と爲す。愚癡著我とは、正しく是れ、初の無明支なり。習起等とは、行支を明す。彼無明に由りて、世の因果に迷ひて、罪行を造り、出世の因果に迷ひて、福及び不動を造る。謂はく、三惡趣を感ずる業、及於び人天の別報の苦の業は、皆是れ罪行なり。欲界の人天を感ずる業を、福行と名け、色無色果を感ずる業を、不動行と名く。三に、以是行の下は、識支を明す。然るに識支を、餘の論に說くに二義有り。一は是れ所引なり。謂はく、本識の中の異熟識種なり。此は種子を取る。二は是れ能引なり。謂はく、五果の種子の、所依の本識を名けて、識支と爲す。此は是れ現行の第八なり。今此文の中には、後の義に約して說く。是れ行支を能引と爲すを以ての故に、識の中の五果の種子を引起し、熟して有に至らしむるが故に、以是行故起有漏心種子と云ふなり。此は能引所引の一對と爲す。有漏有取心故起生死と言ふは、愛、取、有に由るが故に、生、老、死を生ず。此は是れ能生所生の一對なり。五果は是れ、名言種子無漏の位に通ずるを以て、今の行の所引は、無漏に非ざることを明すが故に、有漏と云ふなり。此中に愛の字無きは、是れ略なり。四に、所謂の下は、識の、名色を生ずる等を辨ず。然るに六緣有り。世の種植の如し。一は、業を地と爲すとは、所生の報に望むるに、增上緣と爲すが故に、地の如し。二は、識を種と爲すとは、五果の種子は、彼親因と爲すが故に、種子の如し。但し能依の種子は、所依の識を、離れざるを以ての故に、識如種子と云ふ。此は則ち所依を擧げて、通じて能依を取るが故なり。三は、無明覆とは、生を受

【識胎に入る云云】生有に約して、起生次第を明す。

【餘も亦…べし】經の「諸根合するが故に」等の文を會す。

【二に又作…竟んぬ】二に諸の諦理に迷ふ緣起次第を明す下。

くる時、無明は父母等に迷ふ。世の種の植うる下に、地有りと雖も、中に種子有るには、要ず上に土の覆ふこと、有ることを須つが如し。四は愛水潤とは、父母に於て、染愛等の心を起し、其に潤して受生す。土覆ふと雖も、要ず濕潤を須つが如し。五に、我心漑とは、己が身有りと計す、能く所作有り。濕潤すと雖も、人の漑灌するを須つが如し。六は、種種の見とは、異の見の網を以て、覆ひて無漏法をして、壞すること能はざらしめ、生ずることを得しむ。世の種植うるとき、網羅を須ひて、護りて鳥雀をして、損する所あらしめざるが如し。生、名色芽と言ふは、所生の果を明す。謂はく、識、胎に入るの時、五果の種子は、無明と業と、愛と取の潤を引發することを爲すが故に、倶に熟して果を生ず。但し之を現ずるに、前後有り。皆前は後を引きて起すが故に、因名色故生諸根等と云ふ。名色は是れ諸根の親因と謂ふには非ず。餘も亦是の如く知んぬべし。三は、是十二の下は、逆觀無我を明す。四に菩薩の下は、位の所行を結すること、竝に知んぬべし。二に又作是念の下は、諸の諦理に迷ふ、緣起の次第を明す。中に於て亦二あり。初は順、後は逆なり。前の中に、「實の如く第一義を知らず」とは、此に二義有り。一は、通じて第一義諦を擧ぐ。是れ十二有支の、所依の本なり。眞に依りて、妄を起すことを明し、有支の無體を顯し、無明は最初なるを以ての故に、先づ依として、餘支の類を起すことを明す。此は皆眞に依りて起る。二は、別して此は是れ、無明の所迷なることを顯す。謂はく、此無明は、二諦に迷ふによりて、三行を造る。是故に論經に、諸諦第一義と名くるなり。前段は所造

【逆觀の中云云】經の「是十二因緣には我無く」等の下に、以上の支に依りて明し竟り、次に論の所明を擧げて三觀を建立し、十門十二因緣を釋す。

【三段の內】論に依れば、一、成答相差別觀、二、第一義諦差別觀、三、世諦差別觀をいふ。

【論に五道云云】以下、文に隨ひて述釋す。

【初の釋成の中】論に「云何求成差別」といへる下。

の三行を明し、此中には所迷の二諦を顯す、文綺互するのみ。各增上緣力と爲るに由りて、前を引きて後を起し、相續成立せしむる故なり。「四取陰有り」とは、但し識支に二義有り。一は、若し賴耶を識支と爲れば、餘識は即ち、名色支の中の、名支の攝に屬す。二に、若し第六識も通じて、亦識支に入るれば、即ち色受想行、此四陰を、名色支と爲す。今は後の義に約するが故に是說を作す。餘の文は見つべし。逆觀の中に作者無きは、是れ人空なり。作事無きは、是れ法空なり。經に依りて釋し竟んぬ。

第二に「論」に依りて、相諦に約して分別し釋する中に、三段の內に初門は成答相差別と名く。中に於て門別に四有り。相從して三と爲し、要攝して二と爲し、之を總じて一と爲す。四とは、一は彼解惑を擧げて、無我門を顯成す。二は、論經愚癡の下は經本の一切凡夫の下は、貪情顯理門を明す。三は、論經の無智の下に依り、經本の癡首等に依りて、攝有顯實門と名く。四は、不知第一義の下は、依實辨相門を明す。二は相從して三と爲すとは、四の中に、初の一は成と名く。謂はく、無我を釋成す。次の二は答と名け、答へて無我を顯す。後の一は相と名く。謂はく、諸諦の理に依りて、緣生の相を立つ。要攝して二と爲すとは、前の三門は宗として、無我を顯すが故に、一處に擧げて釋す。後の一門は宗として、緣生を顯し、眞に依りて相を起すが故に、別に擧げて別に釋す。總じて一と爲すとは、謂はく、第一の成答相差別なり。「論」に、五道中所有生死等と云ふは、世間所有の生處等を釋するなり。下は三門を開く。初の釋成の中に就きて、四句あり。一は、總

【二句有り云云】以下、總じて二過を擧げ、次に之を釋す。初に凡夫と成らざるの過。

【又聖は凡…失なり】以下、聖人と成らざるの過を明す。

じて無我を釋成し、二に、一切世間の下は、經を牒し擧ぐるなり。卽ち無我義成とは、但經を案ずるに、卽ち是れ無我の義を顯成す。三に、若第一義の下は、事に卽して無我の義を顯成す。二句有り。一は、若し實に我有らば、凡夫と成らざるの過あり。二は、若し我實に有らば、聖人と成らざるの過あり。何とならば、若第一義の中に實有我とは共所取を定め、著我心卽第一義智とは能取を辨定するなり。不應世間生とは、正しく過を出すなり。謂はく、若し第一義の中に、實に我相有らば、凡は應に是れ聖なるべし。此を立宗と爲す。能證の第一義の中に、實我智有るを以ての故に此を出因と爲す。諸の聖者の如きを、同法の喩と爲す。此れ則ち凡の聖智に同ずるの過なり。應に凡夫無かるべし。現に見るに爾らず。明かに知んぬ、我無し。又聖は凡に同なるべし、宗なり。因に云はく、理實には我有るを、聖證して無と爲すを以て、違理の倒惑は、聖智に非ざるが故に。諸の凡夫の、應に世間に生ずべきが如し、同喩なり。此れ則ち聖、凡の倒に同ずるの過あり。應に聖人無かるべし、理既に爾らず。明かに知んぬ、無我なり。此は聖を壞するの失なり。前に准せば、此文に一句を缺く。應に離著我の心は、卽ち是れ、第一義智に非ざるべしと、云ふべし。無我は既に第一義諦に非ず、離我の心、豈第一義智と名くることを得べけんや。應常生世間と言ふは、理を以て正しく徵す。若し離我の心、勝義智に非ずんば、應に涅槃を證せざるべし、常に世間に生ずるが故に。前の句の中、凡夫は既に第一義智有りて、應に涅槃を得、世間に在らざるべし。此文は無我の眞理を顯す、前に准

【第二に答…故に】二に答を釋するに二問二答あり。論の「云何が答の差別」といふ下。

【中に於て…如し】釋文の中、初に顯癡の文を釋す。

【次に行云云】論に「常に邪念に隨ひ妄りに邪道を行ず」等の下。

【報體】前業により招きたる果報の體の意、

じて見つべし。四に、顯示の下は、經を擧げて、對顯すること、知りぬべし。第二に答を釋する中に、謂はく、難は文の外に在り、故に答と云ふなり。兩難一答有り。初は執情微理の難にして、情乖正理の答なり。難じて云はく、若し理實に我無くば、應に無我に著すべし、云何が我に著する。既に我に著して、無我に著せず。明かに知んぬ、無我は虛空に人無きが如し、豈人を計すること有んや。立量は知んぬべし。下は答なり。癡に盲ぜらるるを以ての故に、無我の處に於て、而も執して我と爲す。目に翳有れば、空中に華を見るが如し、豈空中に此華有るべけんや。比量は知んぬべし。二に、如是實無有我の下は、執相徵實の難にして、相不依我は答なり。難じて云はく、若し當に我有らば、無明をして、緣行の次第を、作さしむべし。既に無我と云ふ、誰れか次第して、乃至老死と爲さん。此示現の下は、經を擧げて正しく答ふ。癡は業を造り、行は、識を起すに由りて、乃至老死す。世間の種植、相生する次第の如し。何ぞ我を用ひんや。答の意は此の如し。中に於て、常を悕ふを有と爲し、斷を求むるを無と爲す。希求は是れ愛、無智は是れ癡なり。煩惱無量なり、何が故に偏に此二種を擧ぐるや。是れ有支の、根本なるを以ての故に。次に行を釋する中に、三句あり。一は邪念を釋し、二は邪道、三は妄行なり。菩薩の行を以ては、妄行と名けざるが故に。次に識支等を釋す。先に經文を併擧す。是中の下は釋す。異熟の賴耶は、正しく是れ報體なるを以ての故に、示生老死體と云ふ。又釋すらく、種子識を彼因と爲すが故に、體と云ふなり。又釋すらく、如來藏は賴耶の體なり。又釋すらく、生死

【下は…名く】以上順觀の文釋竟り次に逆觀の文を釋す。論に「自然にして滅せば性自滅の故に」等の下。

【下は第三に相云云】以下第三に相差別を明す。論に「云何が相差別、若し因緣無我」等の下。

の性と爲すが故にと。謂はく、此識種は復能く隨順して、餘支の種子を攝持し、能所引生を成就することを、得しむるが故に、隨順攝取等と云ふなり。罪福等の業を地と爲す。遠の釋に云はく、「如是住とは、是れ色支なり。如是生心とは、是れ名支なり。所生の名色を結するなり」と。今更に釋すらく、如是住とは、是れ識種業地なり、如是生心とは、是れ癡覆愛潤なり。此は上の四文を結するなり。又釋すらく、此は總じて、經の中に我心灌等を標す。謂はく、是の如きの安住を作し、是の如きの心を生ず。我是我所等は、謂はく、己を見て我と爲す。男子の受生し、父の精を見て、己が有と爲すが如きが故に、我所と爲す。又母を見て、己が妻と爲すは、亦是れ我所なり。女人は此に反す。我我想是慢と言ふは、前の我及び我所の二想を牒して慢と爲す。自ら見て父と共に女色を競ひ、己が勝を得と謂はば、便ち想慢を起す。女人も亦爾なり。我生等と言ふは、見網を釋す。謂はく、遠の云はく、「己を見るに、唯此處に在りて。生じて、餘處に生ぜず、故に我生不生と云ふ」と。又云はく、「見は常に我の爲に生ず、見斷を不生と爲す」と。今釋すらく、己が正報を見て、以て我生と爲し、所遊の依報を見るを、名けて不生と爲す。受胎の時、或は華林に遊ぶと見、或は殿堂に居す等と。異見一に非ざるを以ての故に、種種と云ふ。見網は捨て難きを以て、網の覆ふが如し。下は逆觀を釋す。緣起の法、無性なるを以ての故に滅す。是れ智力斷に非ざるが故に滅と名く。下は第三に相、前を結し後を生ず。若し緣無我ならば、更に何の法に依りてか、緣相住することを得る。下は經を擧げて對顯し、緣起の

【論の中に…稱す】論文に「無明所作の業果とは謂ゆる名色」といふを牒して、遠の釋を引く。

【是名は前を結し】此下は前を結び後を問ふ文を釋するもの、『論』の「一是有分次第因緣集觀と名く」等の文なり。

【第三に…曰ふ】以下第三に大悲隨順觀を明す下。論に「復二種の異あり、一には大悲隨順觀」等といふを釋す。

【是の如…倒】論の取意の文なり。

相は、眞に依りて起ることを明す。『論』の中に無明は業を作る、名色と稱すとは、遠公、『婆沙』を引く。名色に二種有り。一は方便の名色、二は報の名色なり。若し名色は識を緣ずと言はば、是れ方便の名色なり。若し識は、名色を緣ずと說かば、是れ報の名色なり」と。今既に行を說きて、以て名色と爲す。故に知んぬ、是れ彼方便の名色なることを。彼依正と言ふは、阿賴耶識は、是れ彼名色等の、所依止の故に。此は依持門に約して說く。二は、名色與識共生とは、是れ相生の義なり。三は相依の義なり。謂はく、識は名色に由りて、起ることを得、名色は識に由りて存することを得。下は逆觀を釋するに、作者作事人法は、皆空なり。是名は前を結す。云何が、後に此眞諦を證して、解脫を得んと問ふ。答ふ。今緣生を擧げて、彼觀を辨ずるを、以ての故なり。

第三に論の大悲隨順に約する中に、四段の內、此に第一愚癡顚倒と名くるは、無我を解せざるを、名けて愚癡と爲し、謬りて有我を執するを、稱して顚倒と曰ふ。『論』の中に、初に總じて釋す。謂はく、菩薩此第一門の十二有支は、總じて是れ癡倒と觀ず。菩薩、大悲心に隨順するが故に、此事觀故と云ふなり。下は別して釋する中に、先に愚癡を解し、後に一切凡夫の下は、顚倒を釋す。前の中に、先に癡相を釋す。謂はく、著我の故に生ず。離我は不生なりと。離の不生を擧げて、著は是れ癡なることを顯す。次に癡の名を釋す。云何は問なり。無明闇とは、慧明無きを以て、體是れ闇の故に、名けて愚癡と爲す、經怙は知んぬべし。二に倒を釋する中に、癡盲は我に著す。「是の如き倒」とは、是れ取我の倒

【第四に…竟んぬ】第四に一切相智觀を明す下。論の「一切相智分別觀とは是中九種有り」等の文を釋す。

【七】十觀の中、第十一觀竟りて、次に十二支一心より流出し、一心に還歸することを明す。

【此義は…有り】以下別して十門を釋するに、初に正しく十門を示す。一に相見俱存の唯識を明す。

【本影具足す】八識自體の相分たる

の相なり。「有支の中の疑惑倒」とは是れ我の所倒を取る。此は經の中の無智求等を釋す。乃至此一門に盡すは、皆是れ顚倒なり。菩薩は此を觀じ諸の衆生に於て深く大悲を起す。第四に、一切相智に約して分別せば、此十二有支は、總じて是れ一切種智の、所知の法なることを明す。十を攝して九と爲す。此初門の中に、前半を一と爲し、染淨分別觀と名く。謂はく、著我を染と爲し、離我を淨と爲す。然も此一文は具に多意を含む。且らく四を擧げて釋せば、謂はく、經の中は是れ、妄取の我を明すが故に、此緣生次第の相を起す。二に、論家の初の意は、此解惑を擧げて、以て無我を顯し、無我觀を成ず。三は離我不生を擧げて、我は是れ眞なることを顯し、悲觀を順成す。四は此解惑を取りて、以て所知の染淨の法と爲す。下の半門は、是れ眞に依りて、起るを以ての故に、後の依止觀の攝に屬す。初門を釋すること竟んぬ。

(七)第二に、一心所攝の中に就きて、亦門門あり、前に同じ。初に經に約して二に分つ。先に心は三界を作ることを明す。是は集起門に約す。後に心は十二を持つことを明す、是は依持門に約す。前の中に、三界虛妄但一心作と言ふは、此一文、諸論に同じく引きて、唯識を證す。今此所說は、是れ何等の心ぞ。云何が作と名くる。今釋すらく、此義は諸の聖教に依るに、說くに多門有り。一は、相見俱に存す、故に唯識と說く。謂はく、八識及び諸の心所、幷に所變の相分に通じて、本影具足す。有支等の熏習力に由るが故に、三界の依正等の報を變現す。『攝大乘』及び『唯識』等の諸論に、廣く說くが如し。二は、相を

攝し見に歸するが故に、唯識と說く。謂はく、亦八識の王數に通じて、差別所緣の相分は、別種より生ずる無し、能見の識生ずるとき、彼影を帶して起る。『解深密經』と『二十唯識』と『觀所緣論』とに、具に斯義を說くが如し。三は、攝數歸王の故に唯識と說く。謂はく、亦通じて八識の心王を具す。彼心所は、心王に依りて、自體無きを以ての故に、彼も亦是れ、心の所變と許すが故に。『莊嚴論』の說の如し。四は、末を以て本に歸するが故に、唯識と說く。謂はく、七轉識は皆是れ、本識の差別功能にして、別體無きが故に。『楞伽』に云はく、「藏識海常住なれども、境界の風に動せられて、種種の諸識の浪騰躍して、而も轉生す」と。又云はく、「譬へば巨海の浪の、若干の相有ること無きが如く、諸識の心も是の如し、異ること亦不可得なり」と。解して云はく、既に水を離れて、別に浪有ること無し。明けし本識を離れて、別の六七無きことを。廣くは彼に說くが如し。五には、攝相歸性の故に、唯識と說く。謂はく、此八識は皆自體無し。唯是れ如來藏平等に顯現し、餘相皆盡く。經に云はく、「一切衆生即涅槃の相、復更に滅せず」等と。『楞伽』に云はく、「不壞の相に八有り、無相も亦無相なり」と。是の如き等の文、誠證一に非ず。六には、眞を轉じて事を成す、故に唯識と說く。謂はく、如來藏は自性を守らず、隨緣して八識の王數、相見の種現を顯現す。故に『楞伽』に云はく、「如來藏を、無始惡習の爲に、薰習せらるる故に、名けて識藏と爲す」と。『密嚴經』に云はく、「佛如來藏を說きて、以て阿賴耶と爲す、惡慧は、藏は即ち賴耶識なりと、知ること能はず」と。又云はく、「如來淸淨藏と、世間

種、根、器の三は、諸識これを以て本質とし自らこれに似たる相分を浮べてこれを緣ず、これを影像といふ。

【二は…如し】二に攝相歸見とは一切の相分別種なしとなし見分に歸す。

【三は…如し】三に攝數歸王とは、內法の中、心所を攝して心王に歸するを明す。

【四は…如し】四に以末歸本とは、七轉識を主とし第八を本として明す。以下四門は終教頓教の說。

【五に…非ず】五に攝相歸性とは、有爲の事相を攝して無爲の性に歸するを明す。

【如來藏】眞如の妙體をいふ。起信論に自性淸淨心と名くるもの。

【六は…非ず】六に轉眞成事とは、眞如の外に諸法な

の阿賴耶とは、金をもつて指環を作るが如し、展轉して差別無し」と。又『勝鬘經』、『寶性論』、『起信論』は、皆此義を說く、誠證一に非ず。七は、理事俱融の故に、唯識と說く。謂はく、如來藏は舉體隨緣し、諸事を成辨して、而も其自性は本より不生滅なり。卽ち此れ理事混融無礙なり。是故に一心二諦皆障礙無し。『起信論』に云はく、一心の法に依りて、二種の門有り。一は心眞如門、二は心生滅門なり。然るに此二門は、皆各總じて、一切の法を攝す」と。『勝鬘經』に云はく、「自性清淨心は、不染にして染なり、了知すべきこと難し。染にして不染なり、亦了知すべきこと難し」と。解して云はく、不染にして染とは、性淨、染に隨ひて、舉體俗を成ずることを明す、卽ち生滅門なり。染にして不染とは、染に卽して常に淨、本來眞諦なることを明す、卽ち眞如門なり。此は淨に卽するの染は、眞を礙へず、而も恆に俗なり。染に卽するの淨は、俗を礙へずして、恆に眞なることを明す。是故に、一心に雙べて、二諦を存することを礙へず。此中に味有り、深く思ひて當に見つべし。經に云はく、「諦に於ては常に自ら二なれども、解に於ては常に自ら一なり」と。論に云はく、「智障極めて盲闇なる、眞俗の別執と謂ふ」と、皆此義なりと。八は、融事相入の故に、唯識と說く。謂はく、理性の圓融無礙なるに由りて、理を以て事を成ずれば、事亦鎔融して、互に相礙へず。或は一は一切に入り、一切は一に入り、障礙する所無し。上の文に、一中解無量、無量中解一等と云ふは、舍那品に云はく、「此蓮華藏世界海の內の、一一の微塵の中に、一切の法界を見る」と。又此品の下に云はく、「一

しとする所明なり

【如來藏…守らず】眞如の舉體、隨緣して事相差別を顯現するをいふ。

【七は…義なりと】七に理事俱融とは一切の事相と眞如の理との融會を談ずるなり。

【是故に…無し】一心門二諦門皆無礙を含む故に、理事無礙に自ら二重あり。

【經に云はく】仁王經二諦品の文。

【諦に…一】眞俗二諦あれども、眞を離れて俗なく、俗を離れて眞なし體性是れ一なりと證す。

【論】梁の攝論第一の初文。

【八は…如し】以下は事事無礙を明す。初に無礙の所由、次に事と相入を明す。

【九は…如し】九に全事相卽とは、前は用に約し今は體に約して相卽を談ず。

【十に…說く】十に帝網無礙とは、前は何れも一重の無礙、今は重重無盡の義を示す。

【第二…見つべし】以上集起門の下竟りて、今依持門を明す、釋の「又是念…十二緣分は是れ皆心一等」の下。

【本識…識に】一念の心に頓に十二支を具すといふ、此は俱舍第九に刹那十二因緣を明すに同じ。

微塵の中に於て、現じて三惡道、天人、阿修羅各の受業報有り」と。是の如き等の文、廣多無量なり、上下の經に說くが如し。九は、全事相卽の故に、唯識と說く。謂はく、理に依るの事は、事に別事無し、理は旣に此彼の異無し。事をして亦、一卽一切ならしむ。上の經に云はく、「一世界は卽ち是れ一切世界なりと知り、一切世界は卽ち是れ一世界なりと知る」と。又云はく、「一卽多、多卽一と知る」等と、廣くは經文の如し。十には、帝網無礙の故に、唯識と說く。謂はく、一の中に一切有り、彼一切の中の一に、復一切有り。旣に一門の中に、是の如く重重にして、窮盡すべからず。餘の一一の門は、皆各是の如く思准して、知んぬべし。因陀羅網の、重重影現するが如し、皆是れ心識如來藏、法性圓融の故に、彼事相をして、是の如く無礙ならしむ。廣くは上下の文に說くが如し。上來の十門唯識の道理は、中に於て初の三門は、初教に約して說き、次の四門は終教頓教に約して說き、後の三門は、圓中の別教に約して說き、總じて十門を具するは、同教に約して說く。上來明す所は一部の經に通じて、此地に局るに非ず。又是は教に約し、解に就きて說く。若し觀行に就かば、亦十重有り。一卷の「華嚴三昧」の中に說くが如し。第二に依持門の中に三有り。初に宗を標し、二に所以者何は徵責す。謂はく、小乘の中の十二有支は三世に次第して前後に引生す、如何んが說きて、皆依一心と言ふや。下に釋して云はく、「本識の心を離れては、一切成ぜざるが故に」と。中に於て、初には總じて、三支を釋す。俱に唯是れ識なり。後に別して、餘の九も亦、唯是識なることを辨ず。前の中に、隨事と

【歌邏羅】父母の兩精和合して凝結せしもの。胎內五位の一。

【第六識…故に】求生の欲心は第六識にありとし、正しく受生識を第八識とす。

【彼所造云云】誑心無明を釋す。

【第二に…等なり】一心所攝門の第二厭離有爲に約して明す。

言ふは、共行業に隨ひて、何の趣の中に於ても、中陰の內より、求生の愛心を起すが故に、欲心を生ずと云ふ。此心起る時、本識の中の識支の種子と、同時に起り、生陰に至るの時、此求生の心滅し、唯本識は歌邏羅等に託す。種壞して牙生する等の如し、故に是心即ち是れ識なりと云ふ。論經に、貪欲共心生とは、謂はく、第六識の中に生を求むる時、貪欲は阿賴耶識と共に、同時に起るが故に。中陰未生の時、貪滅し心續くを、名けて受生と爲す。彼所造の行は、境界を變爲し、殿堂等と謂ふを、名けて誑心と爲す。知らざるを以ての故に、之を取りて實と爲すを、名けて無明と曰ふ。此は是れ受生の無明にして、是れ發行の無明に非ず。此中の大意は、受生の時、行事は是れ能引、欲心は是れ能潤なることを明す。此二は識支の前に於て、誑心を說く。無明も亦是れ能引にして、誑を以ての故に、取をして亦是れ能く潤せしむ。此二は後に居して、本識の中の、五果等の種を引潤して、所生の果を生ず。現起の分位に、次第有るが故に、名色等と說く。是故に十二有支は、皆唯是れ識にして、識の外に物無し。文の意此の如し、餘文は見つべし。

第二に「厭離有爲に約せば、相諦分別に就くとは、『論』に釋すらく、「此は是れ染の依止觀なり」と。二諦の差別と言ふは、論主の意にして、所依の心體は是れ眞諦、能依の有支は、是れ俗諦なるを將ての故に、此一文を名けて、二諦と爲す、此は總標の文を釋するなり。一心雜染和合因緣集觀と言ふは、所以者何の下の文を釋す。謂はく、一心は是れ眞、雜染は是れ俗なり。即ち此心は隨染和合なるを明し、雙べて二諦を辨ず。是れ『勝鬘』の中の、

【第三に…明んぬべし】一心所攝門の第三、大悲隨順に約して分別す。

【第四…明す】一心所攝門の第四、一切相智分別に約して明す。

【八】第三に自業助成を明す下。これ十二支各二業ありて餘法を起成するを說く。

【無明の業】唯識論は無明の時業に作る。

不染にして染等なり。第三に、大悲隨順に約して分別すとは、「論」に、「餘處求解脫と名く。是れ諸の凡夫は、是の如く愚癡顚倒にして、常に應に阿梨耶識及び、阿陀那識の中に於て、解脫を求むべし」とは、此は是れ正を擧げて邪を顯す。乃於餘處我我所中求解脫と言ふは、此れは邪の正に乖くことを顯す。諸の愚夫は正に背き、邪に從ふを以て、深く悲愍すべきが故に。此對治の下は、經を擧げて治を顯すこと、知んぬべし。第四に、一切相智に約して分別すとは、「論」に依止觀と名く。謂はく、有支の依止を分別するに、二有り。謂はく、眞性に依り、及び心識に依る。此中に二諦は、是れ二依に通ず、是れ大智所了の法なることを明す。

(八)第三に自助成の中に、亦四門あり、前に同じ。初は相用に約して分別す。此十二支に皆二義有り。一は、自行の相を明し、二は、後を助成する用なり。謂はく、緣中の癡惑は、是れ無明の自相なり。行の與に因と作るは、此れ業を助成するの用なり。論經に自業成と名く。問ふ、「因緣の中に於て、此十二支に、具に幾くの緣有りや。」答ふ、「成唯識論」第八に云はく、前支相望するに、增上は定んで有り、餘の三緣は有無不定なり。「契經」は定に依りて唯し一有りと說き、愛を取に望め、有を生に望めては、因緣の義有り。若し識支是業種と說くとは、行を識に望めても亦因緣と作る。餘支相望するに因緣の義無し。「集論」に、無明を行に望めて、因緣有りと說くは、無明の、業の習氣を持つに依りて說く。無明と倶なるが故に、親に無明と說けり。實には是れ行の種なり。「瑜伽論」に、諸支相望する

【餘の二緣】等無間緣、所緣緣。

【二に厭…故なり】二に厭離有爲に約して分別す。

【不見知…せしむ】論第八の七右に、「不見知を以て相續して絕えざらしむ」と。不見知とは無明をいふ。

【三は…知んぬべし】三に大悲に約して分別す。

に、因緣無しと說くとは現の愛取と、唯業有とに依りて說く。無明を行に望め、愛を取に望め、生を老死に望めては、餘の二緣有り。有を生に望め、受を愛に望めては、等無間緣無く、所緣緣は有り。餘支相望するに、二ながら倶に有るに非ず。此中には、且く隣近せると、順次せると、相雜亂せざる實の緣起とに依りて說く。此に異にして相望しては、緣を爲すこと、定らざるなり。諸の聰慧の者、理の如く應に思ふべし」と。解して云はく、『緣起經』に說かく、唯增上緣は、一切に定んで有り。因緣は四位あり。謂はく、二には是れ實有なり。一には但愛を增して取と爲すは、別の種無きが故に。二は、謂はく、有支の中に、五果の種を具するを、生に望むれば、親生の義有り。若し唯業を說きて、以て有支と爲すときは、則ち因緣無し。二は是れ假說なり。謂はく、無明の、行の種を持する識を、業の種と爲す。其等無間緣に三位有り。一は、無明を行に望め、二は、愛を取に望め、三は生を老死に望む。其所緣緣に五位有り。前の三位に於て、有を生に望め、受を愛に望むるを加ふ。餘の六支に、總じて所緣及び等無間無し、餘義は別に說くが如し。二に厭離有爲に約して分別すとは、染因觀の內に於て、他因觀と名く。前支を後に望めて、異するを以ての故に、他と名け、前は能く後を起し、他の與に因と爲るが故に、他因と云ふ。各行相を辨ずるは、他の義を顯し、各能く後を生ずるは、因の義を顯す。『論』に死支を釋して、「不見知を以て、相續せしむ」とは、此は是れ無明なり。何が故に死に屬する。釋すらく、此は是れ、死の時の無明は、死に因りて起るが故なり。三は、大悲に約して分別する

【倒因の三種】性因自在天因、苦行因及び無因。

【九】十觀の中、第四に不相捨離觀十二有支の、前に由りて後を起し相繫屬して離れざるを明す。

【有人此子果云云】子に、無明に一子時、二果時の二種ありといふを指す

中、四門の内に、此は第三の、異道求解脫に當る。顚倒の因の中に於て、解脫を求む。倒因の三種の中に、此文は彼自性因を治するが故に、不應如是求と云ふ。何以故とは、將に廣く釋せんと欲す、故に、徵するなり。謂はく、我佛法の中には前支に因りて、後支を起す。前因を斷ずるが故に、後果生ぜず、即ち解脫を得るなり。汝冥性を說きて、因と爲すと、縱ひ之を知るとも、何に由りてか脫すべき、故に不應と云ふなり。因緣有支等と言ふは、總じて經文を擧げて、正を顯し邪を治す、知んぬべし。四は一切相智に約して分別する中、九門の内に、此は第三の方便觀と名くるに當る。因緣有支一種業能起因緣事とは、略釋して之を顯す。謂はく、前は巧に後を起すを、方便等と名く。餘文は知んぬべし。

(九)第四に不相捨離觀の中に、亦四門あり、前に同じ。初に不相離に約すとは、謂はく、前は能く後を起し、後を離れて前無し。後は前に依りて起り、前を離れて後無し。相離れざるが故に、各自性無く、無性緣起して幻の如く現前す、此を順觀と爲す。逆にありては一眞理平等觀と成る、經文知んぬべし。二は厭有爲分別に約す『論』に、「自因觀とは、無明等の、自生因觀の緣事に名くるが故に」とは、謂はく、無明は行を生ず是れ自生の因なり。問ふ、「無明と行と異れり、云何が自と名くる。答ふ、「行は無明に賴りて、自體無きを以ての故に。緣力全く攝む、是れ分に非ざるが故に。前は不卽を明すが故に他因と說き、此は不離を顯すを、名けて自因と爲す。有人、此子果の文を引きて、無明支に種子現行有ることを明すとは此文の意に非ず。又、遠公は左義を以て、此文を釋す。子の時は是は前

【二義】　子果の二時。

【初に…】　論の意を以て述す。

の無明、能く後の無明を生じて、行をして斷ぜざらしめ、行と別の時なり。果の時は、是は後の無明、前に從りて生じて、行を助成するが故に、行と同時等と明す。今此文を尋ぬるに、意は只發行の無明を、子時と爲し、所發の行を果時と爲す。行は是れ、無明の果なるを以ての故に、無明に二時有りと說く。問ふ、『無明を行に望むるに、親因の義無し、云何が行は卽ち是れ、無明の果時と說くや。』答ふ、『無明は是れ、行の增上緣の故に、名けて子時と爲す。行は是れ、無明の增上果の故に、名けて果時と爲す。』文の中に四有り。初は義門を開き、二は不離を明し、三は不卽を顯し、四は總じて同を結す。『初の中に、先に開き、後の是中の下は釋なり。子時令行不斷と言ふは、無明を行の因と爲すを以ての故に。二種の義有り。緣事示現とは、子時を緣と爲し、果時を事と爲すを以ての故に。餘支の二義は、此に類して應に知るべし、故に餘因緣分等と云ふ。二に自因者の下は、不相離を釋す、三句有りて展轉釋成す。初に自因とは、不相離の故に。二に云何が不離なる、現見するに、前支を離れて、後支無きを以ての故にと。此は子を離れて、果無きことを顯す。故に、果を說きて子果と爲す。三に無明を離れずして、則ち行を成ずとは、此れ順釋にして、子の無明を離れずして、則ち果を成ずるが故に、不離と名くるなり。三に若不離の下は、不卽の義を釋す。先に二の過失を顯し、後に『中觀論』の頌を引きて釋成す。不卽因と言ふは、是れ所生にして、能生に非ざるを以ての故に。不異因とは、能生に從ひて、所生を生ずるが故に。果は卽ち因ならざるを以ての故に、果は斷ならず、因は常ならず。

【三に…なり】三に大悲に約して分別す。

【四に…なり】四に一切相智に約して分別す。

【一】十觀の第五に三道不斷なり。十二因緣はこれまた煩惱業苦の三道に過ぎず、無始以來相由相藉して、輪迴絕えざるを明す。

果は因に異らざるを以ての故に、果は常ならず、因は斷ならず。又、不即を以ての故に、因果俱に斷せず、不異の故に、因果俱に常ならず。又、亦此に反して之を思へ。又、不離に即して、是れ不即なるを以ての故に、不常に即して不斷と爲すなり、亦之を思うて見つべし。四に自生の下は、總類して同を結す、知んぬべし。三に大悲に約して分別すとは、謂はく、邪見の衆生の、顚倒の因に執する內に、自在天を衆生の因と爲すは、甚だ愍むべしと爲す。今此文の中に、無明は行を作る等と顯すが故に、彼執を對治するが故に、因觀と爲すなり。四に一切相智に約して分別すとは、第四の因緣相觀に當る。有支無作故とは、此有支は直に後は前に依るに非ざることを明すが故に。後の無性も、亦乃し前能く後を作り、前も亦作ること無きことを明すのみ。故に、諸の緣起は是れ種智の境界なり。

第五に三道不斷とは、四門は前に同じ。初は經に約す。三道不斷と爲すとは、煩惱に二有り。謂はく、能發能潤は諸の煩惱皆能く發潤すと雖も、然も發業の位は、無明の力增せり、潤業受生は、愛取の力勝るが故に、偏に說くなり。重發無きを以て、一の無明を立て、數數潤灌するが故に愛取を分つ。業に亦二有り。謂はく、未潤已潤の業なり。引因に在りて愛取未だ潤さざれば初起造作の相顯にして行と名け、業の、生因に在りて、愛取已に潤せば、近く當果を生じて、立てて名けて有と爲す。此は唯、業有に約して說く。苦に亦、二有り。謂はく、因に在りて果を與ふる識等の五種は、唯、是れ報因なり。生等の二位は、但是れ報果なり。所引の因の位に就くに、業別の相を知り難きを以ての故に、當

【初と八と九】無明、愛、取。
【二及び十】行と有。
【三に…生じ】愛取有の三、生老死を生ず。
【二に從…生ず】生老死によりて、無明等の七を生ず
【七に…生ず】無明等の七より愛取有を生ず。
【三道】煩惱業苦

果の位に依りて、別に五支を顯す。謂はく、續生の時の、因の識の相顯なり。次に根未だ滿ぜず、名色の相增す。次に根、滿ずるの時、六處明盛なり。斯に依りて觸を發し、觸に因りて受を起す。爾時を乃し受果究竟と名く。此位に依りて、立因を五支と爲す、果位は差別の相を了し易きが故に、總じて二支と立て、以て三苦を顯す。然も所生の果、若し未來に在るをば、厭を生ずるが爲の故に、生老死と說き、若し現在に至るをば、分位の相生を了知せしめんが爲に、識等の五と說く。具には『唯識論』の第八の中に、辨ずるが如し。又此惑業苦の三を、流轉の相と爲す。淨意菩薩所造の『十二緣論』の頌に云ふが如し。「煩惱は初と八と九となり。業は二及び十と、餘の七を說きて苦と爲す。三に十二の法を攝す。三によるが故に二を生じ、二に從るが故に七を生ず。七從り復三を生ず。是故に輪轉の如し。一切世間の法は唯因果のみにして人無し。但し諸の空法從り還りて空法を生ず」と。解して云はく、此は三道の相生を辨じ、二無我を顯す、廣くは彼釋の如し。二に厭離有爲分別に約すとは、『論』に攝過觀と名く。謂ゆる三道は、苦因と苦果とを攝し、深く厭離するが故なり。三は大悲分別に約すとは、『論』に、「異道にして解脫を求む」と名け、內に苦行の因を對治す。謂はく、邪苦行は、但是れ煩惱業、妄想の因の故に、樂因に非ざるが故に。『經』の是中の無明愛等の如し。四は大智分別に約すとは、『論』に入諦觀と名く。三道は是れ苦集諦の故に、是れ大智の所知の法なり。『瑜伽』の第五に云はく、『幾くの支か苦諦の攝、及び現行を苦と爲す。』答ふ、『二は謂はく、生及び老死なり。』問ふ、『幾くの

【二】十觀の第六に先後際を分別す。十二因緣に三世分別を式むる一段なり。經の一、又無明及び行一等の下。
【初の二】無明と行。
【次の五】識等の五。
【次の三】愛取有
【後の二】生老死
【引】能所引。
【生】能所生。
【前の十】無明等の十。
【二は…知んぬべし】二に厭離有爲に約して明す。
【論】第八の九右の文。

支か苦諦の攝、當成を苦と爲す。」答ふ、「五なり。謂はく、識乃至受の種子性なり。」問ふ、「幾くの支か集諦の攝なる。」答ふ、「所餘の支なり。」「解して云はく、當の五因二果、倶に是れ苦諦なり、惑業の五は是れ、集諦の攝なり。」又「唯識論」の第八に云はく、「皆苦諦の攝、取縕の性の故に。五は集諦の攝、業煩惱の性の故に」と。解して云はく、此は則ち苦に十二を攝す、是れ取縕の性なるを以てなり。集は唯五を攝すること、知んぬべし。

(二)第六に先後際を分別する中に、亦四門あり、前に同じ。初は經に約す。分別先後際とは、此十二支の、初の二は是れ能引、次の五は是れ所引、次の三は是れ能生、後の二は是れ所生なり。中に於て三際を分別す。諸の聖教の中に、略して三説有り。一は此經に依れば、能所引を開きて、先際中際を分ち、能所生を合して、總じて後際と爲す。引は遠きを以ての故に、之を開き、生は近きが故に合するなり。二は「唯識論」に依るに、能所生を開きて、能所引を合す。是故に前の十は現在、後の二は未來なり。十因二果を以て、二世に分つが故に。三は生も引も倶に開く。「智論」の如し。初の二は過去、次の八は現在、後の二は未來の故に、三世を成ず。「唯識論」等の十因二果は、定んで同世ならず。因の中に、前の七は次の三と、或は同或は異なり。若し二三七は、各定んで同世なり。是の如きの十二一重の因果は、輪轉及び斷常を離るるを顯すに足れり。又此三際因果の輪廻に由りて、人法二我永に所有無し。

二は厭離有爲に約せば、「論」には護過觀と名く。謂はく、外人、此緣生の道理の與に、

【一には云云】論に「一には一切身一時生の過。何を以ての故に。無異因の故に」と。
【二の中に云云】論に「二には自業無受報の過。何を以ての故に。作者無きが故に」と。
【三の中に云云】論に「三には失業の過。何を以ての故に。未受業の過已に滅するが故に」と。
【此三の下】論に「此三種過、過去世等の異因を見るを以て答ふ」と。
【亦通じて云云】以下、別護に就いて釋するに初は受生差別、次は生差別、後は等の字に依るの釋なり。
【下は云云】論第八の九左。
【無明緣行是見過去】經の「無明及び行は是れ過去世の事なり」の文を指す。

三種の過を出す。「一には一切の身一時に生ず」とは、過の名を列ぬ。何以故とは、外人自ら過を立つる所以を徴す。無異因とは、過を立つる相を釋す。我の異因無きを以て、何ぞ五道の身、一時に並生することを得ざると爲ん。二の中に名を列ぬ、徴立は知んぬべし。無作者故とは、過を立つる相を釋す。若し我の作業無くんば誰か來報を受けん。三の中に列徴知んぬべし。釋の中に、既に我有ること無くんば、誰か是業を持して、便をして果に至らしめん、是故に應に失なるべし。前の不受報は、前を後に望むるに據りて說く、此中の失業は、後を前に望むるに據りて說く。此三の下は、總牒して護を彰す。謂はく、過現の因なる、別に名けて異因と爲す。此れ前の三種の難を、答ふるを以ての故に、名けて答と爲す。亦通じて下の句を取らば、現未の果異れり、彼異因に由りて、云何が、一時に生ずること有るの過を得る。又差別の因は、差別の報を得、云何が乃し不受報有りと言ふや。差別の報は、異因に由りて生ぜば、云何が業を失ふこと、有るの過を得る。下は文を釋する中、先に過去を釋する內に、無明緣行是見過去とは、經文を牒擧す。下は釋の中に二句あり。初は過の因能く、現を作ることを明す。二は現の果は、過の因に由る、現識等を說きて、以て當來と爲す。此中に但過去の因を說かば即ち足れり、何んが須らく復現を說きて、其當と爲すべき。因果相屬を以て、三の過を防がんと欲するが故に。卽是見の下は、釋し已りて過去是因の義を總結す。二に現在を釋する中に、識乃至見現在と云ふは、經文を牒して釋する中に、二句あり。初に現果は、過の因に由ることを明し、二に復能の下は、

【一は現の果云云】論に「現在の果は即ち是れ當來、即ち是れ過去世因の義を見る」といへる文の釋。
【二に復能の下】論に「復能く未來の果を得」と。
【下は展轉云云】經の「三世の轉ずる有り」の文を釋する論文なり。
【前の中に云云】以下、隨釋するに三、初に汎く業の果を得ざるを明す。
【一は或有…得ず】別して初未作を述す。
【或有…得ず】已作に就いて明す。
【或は對治…しむ】對治斷を得る者に就いて釋す。

過の因、現の果を得ることを明す。現在は是れ、彼過去の未來なるが故に、得未來果と云ふ。三は愛取の下は、未來を釋する中に、先に文を牒す。復有生と言ふは、愛取に從りて、等しく有生死を起すを、有生と名くることを釋するなり。問ふ、「前に釋すらく、過現は皆二世相對なりと。今未來を解するに、何が故に然らざる。」答ふ、「彼過現は、經の中に自ら分ちて兩と爲すを以てなり。故に須らく相屬すべく、以て護過を成ず。經の中に自ら、愛取有の三は、果に從へば未來と爲すと說く。論主、相屬を假らざるが故に、論せざるなり。」一往定と言ふは、結して前の文に別つ。上來の所成は是れ、一分の三世を以て、一往と名く。理數是の如くなるを、之を稱して定と爲す。下は展轉三世相生無盡を釋す、故に復有後世生轉故と云ふなり。此說何義の下は、前の護過を釋す、三義有り。一は汎く業の、果を得ざることを明す。二は經を擧げて得を明す。三は雙べて得不を結す。前の中に先に總擧す、三義に由るが故に、過去の業をして、報を得ること能はざらしむ。一は或有未作とは、過去に就いて愛取有等を求むるに、爾時に未だ作らざるが故に、現在に於て生老死の果を得ず。問ふ、『此文を觀ずるに、意は過去の無明、未だ業を作らざる行を說くに似たり、何の因をか乃し愛等未作と云ふや。』答ふ、『若し無明は未だ業を作らず、何の因をか乃し、過去の業と言ふ。三義の故に報を得ず。』或有已作未得報と言ふは、現に就きて以て、愛取有等を求むるに、已に作し竟ると雖も、未熟を以ての故に、現在生老死の果を得ず。或は對治を得る者の、若し已潤の業は熟せり、計するに應に此に次きて、未來に生老死の

【下は正しく云云】論に「若し是の如くんば、則ち一切身一時生の過無からん等」の文。

【若爾云云】論に「若し爾らば、一切の業は當來受に非ず」等の文。

【三には…云ふなり】三に大悲に約して分別す。

果を得べし。或は此生に於て、若し聖果を得る者は、愛取を斷ずるが故に、已熟の業をして則便ち燋亡して、報を得ざらしむ。二に是中無明の下は、經を擧げて、三義、報を得ることを明す。謂はく、過去に既に無明緣行有り、明かに知んぬ、已作は愛等に同じからず。現在は既に識等の五果を得たり、明かに知んぬ、即ち是れ業は已得の果なり。現在の愛取に由りて、聖道をもて斷ずること無くんば、未來の生死をして、相續して絕えざらしむ。三に是故の下は、雙べて結する中に、有已作は是れ行支、未作は是れ有支なり。已得の果は是れ識支等なり、未得の果は是れ生死等なり。聖人は已に斷じ、凡夫は未だ斷ぜず。下は、正しく護業を結す。既に是の如きの差別有り、何んが一切の身、一時に生ずるの過有るべきと。謂はく、作未作有り何に緣りてか一時に得ること有らん、報は未だ得ず、云何が一時ならん。斷未斷有り、如何が一時ならん。若斷の下は、重ねて牒して、一切の業は、當に受くべき者に、非ざることを顯示す、是れ前の已斷なり。亦受けざる者に非ずとは、是れ前の未斷なり。亦一時に非ずとは、前の作未作、得不得を顯すこと、知んぬべし。若自作の下は、第二の不受報の過を護る。謂はく、自ら作し自ら受く、何んが他受けざらん。他は作さざるを以ての故に。三は彼三事を離れて、第三の失業の過を護る。謂はく、前の三種の不得を離るるに由り、是故に諸業は果を得ざること無し、故に、失業の過無し。下もは結す、知んぬべし。

三には大悲分別に約すとは、菩薩は諸の外道の異道を行じて、解脫を求むる中に、無

【若し…無し】論意を述する文なり
【四に…故なり】四に一切相智に約し分別す。

【二三】十觀の第七三苦分別を明す。三とは苦苦、壞苦、行苦をいふ。經の一又十二因緣を說きて三苦等の下。
【瑜伽】第十の十四右の文。

因等を計するを見て、大悲心を起し、此緣生を觀じ、彼邪執を救ふ。『論』に、先中際因と言ふは、過去の二支は、是れ先際にして、現在の識等の中際の與に、因と爲るが故に。及中後際因と言ふは、中際の愛取有と、未來の後際の與に因と爲る。中際前後二際故と言ふは、中際の內に於て、識等の五果を分つて前果に屬し、愛等の三因は、分ちて後際に屬す。既に此因有り、云何が無と言ふ。是故に結して、「若し是の如きの因事無ければ、則ち種種の衆生の果事も、亦無し」と云ふなり。四に一切有智に約して分別すとは、力無力信入依觀と名く。過去の二支を現に望めては、有力、後に望めては無力、愛等の三支を、後に望めては有力、前に望めては無力なり。次釋すらく、過の二は有力、現の五は無力、現の三は有力、後の二は無力なり。皆能生を有力と爲し、所生を無力と爲すを以てなり。菩薩は此を舉げて、人を化して邪を離れしめ、正に入らしむ、故に信入と云ひ、菩薩の智に依りて、照すが故に觀と云ふなり。先中後化勝と言ふは、重ねて先中後を釋成す、是れ力無力化勝れ是れ信入す。謂はく、三際を照して、以て衆生を化するは、種智の爲の故なり。

(二三)第七に三苦分別の中に、亦四門あり。初の經に明せり。此有支は皆是れ苦集なりと。將に三苦を釋せんとするに、因に受俱分別を辨ず。『瑜伽』に云はく、「幾くか業受俱行する。謂はく、二を除きて所餘なり」と。解して云はく、受及び老死を除きて、餘の十は業受有り。受は受と俱ならざるを以ての故に。老死の位の中には、多くは業無きが故に。「幾くか苦受俱行する。謂はく、即ち彼及び所除の中の一なり」と。解して云はく、唯愛支を除き

【次に三苦云云】受俱分別竟りて、次に三苦分別す。

【增題】增減なるを、音同じきを以て誤るか。

【二は…故に】二に厭離有爲に約して分別す。

て餘の十一は、是れ苦受なり。「幾くか是れ捨受俱行する。樂受に說くが如し。老死の位は、多く捨つべき無きを以ての故に。幾くか受と俱行せざる。謂はく、所除の中の一は、卽ち受支なり。受は受と俱ならざるを以ての故に」と。『唯識論』も亦同じ。次に三苦分別に二門有り。一は理實遍通門、『瑜伽』の中の如し。壞苦は十支の全と、及び受支の中の一分を攝す。謂はく、樂受なり。受支の中の苦受、及び老死支を除く。苦苦には十一支の全と、及び受支の中の一分を攝す。謂はく、苦受なり。行苦に壞苦と苦苦とを攝す、皆是れ行苦なればなり。或は行苦の、二支の所攝に非ざる有り。謂はく、不苦不樂受なり。是故に行苦は、通じて、十二を攝す。『唯識』の第八、亦此說に同じ。二は隨相增顯門、此經の說の如し。謂はく、初の五支は、遷流の相顯なるが故に、行苦と稱す。觸と受との二種觸對して、苦を生ずるが故に、苦苦と云ふ。餘を壞苦と爲すとは、但樂を壞すを、壞苦と名く。老死支は既に、樂の壞すべき無し、何が故に壞苦と名くるや、釋すらく、壞苦に二有り。一は樂の壞を苦と爲す、所壞に望めて說く。二は壞是れ苦なるを以ての故に、壞苦と云ふ。此老死支は、能く壞生するが故に、壞苦に屬す。餘の文は知んぬべし。二は厭離有爲に約するに、論主の世諦觀の六種の中に、此は第五に當り、不厭厭觀と名く。謂はく、凡夫は厭はず、菩薩は能く厭ふが故に、不厭厭と云ふ、此は麤苦に約す。又二乘は厭はず、菩薩は能く厭ふ、此は細苦に約するが故に。種種微苦と云ふなり。此等は皆是れ、苦なりと分別するを以ての故に。及厭種種麤苦とは、二乘の厭ふ所、菩薩も亦厭ふ。又亦前は細

【三は…愍む】三に大悲隨順に約して明す。

【眞脫に四】論に眞解脫に四種を擧ぐ、一、離一切苦相。二、無爲相。三、遠離染相。四、出世間相。

【四は…故なり】四に一切相智に約して明す。

【一三】十觀の第八に因緣生を明す。これ十二因緣は初生終滅して出沒相積し、衰斷の相なきを示す。經の一又無明に依りて一等の下。

にして、是れ行苦なり。此は麤にして、是れ彼餘の二苦なることを得る故に。三は大悲隨順に約して分別すとは、諸の外道の、眞理に達せず、異解脫を求むるを愍む。眞脫に四有り、正を擧げて邪を顯す。一は、「一切の苦相を離る」とは、涅槃は樂の德なり。二は無爲相とは、是れ常の德なり。三は染相を離るとは、是れ淨の德なり。四は出世の相とは、是れ我の德なり。『涅槃經』に云はく、「世間の法に於て、自在に遠離するを、名けて我と爲す」と。彼諸行苦と言ふ下は、邪の正に異ることを揀ず。下の四段の經文に於て、各一義に配すれば、今此は初に當る。苦事隨逐乃至無色有縛と言ふは、此三苦を擧げて、彼外道の、非想等を求めて、涅槃と爲す者を顯す。菩薩は之を觀ずるに、皆是れ十二緣生なり。三苦の法は、何んが涅槃の淨德の義有らん、故に願じて悲を起す。四は一切相智に約して分別すとは、此は第七の、增上慢非增上慢信入觀に當る者、聲聞の人は細苦を覺らず、自ら苦無しと謂ふを、增上慢と名く。然るに麤苦を覺るは、非增上慢なり。此を擧げて彼二乘をして、大乘緣生の微細の苦事に信入せしむ、菩薩此を照すが故に、名けて觀と爲す。不如實知の下は、慢の相を釋成す。此一門は、前に大悲に約して、外道を化するを以て、今は大智に就きて、以て二乘を攝す。文に多意を含むを以て、論主善取する故なり。

(一三)第八に因緣生とは、亦四門あり。初は經に約す。理實には、無明を行に望むるに、因緣の義無し。而るに因緣生行と言ふは、二義有り。一は自體を因と爲し、無明を緣と爲す、合說するが故に因緣と云ふ。然も彼親種を隱して、此勝緣を顯すが故に、無明因緣と云ふ

【逆觀は…非ず】これ頓敎の泯絕無寄に當る所明なり

【二は…爲す】二に厭離有爲に約して明す。

【略して五說あり云云】五說を敍するに、初は、小乘以上の通談なり。

【二は二乘…離る】第二說は、始敎以上の說。

【三は…如し】第三說は終敎以上の法門なり。

なり。二は但彼增上緣を、自の增上果に望むれば、還りて是れ親因の故に、無明を行の因緣と爲すと說く、餘も亦是の如しとは、果は自ら起らず、要ず因緣による、因緣形奪すれば復各無性なることを明さんと欲す。是故に因緣生と言うて、乃し無生を顯す。此は猶頓觀なり、逆觀は一は泯じて、生不生に非ず、知んぬべし。二は厭離有爲の中の、世諦觀に約す。六門の中には、此は第六に當る、深觀と名く。此深觀の中に、後の三門を攝し、合して四句を成ず。一は自より生ぜず。二は他より生ぜず。三は共より生ぜず。四は無因より生ぜず。此四句を釋するに、諸論同じからず。略して五說有り。一は外道を破するに約す。謂はく、諸法は冥諦自性より生ぜざるが故に、不自生と云ふ。二は梵天自在天等より生ぜざるが故に、不他生と云ふ。三は亦微塵大種和合生に非ざるが故に、不共生と云ふ。四は亦無因自然にして起るに非ざるが故に、不無因生と云ふ。二は二乘を破するに約す。一は謂はく、諸法は定んで、自の同類因より生ぜざるが故に、不自生と云ふ。二は定んで、彼異熟因より生ぜざるが故に、不他生と云ふ。三は又亦彼俱有因より、生ずるに非ざるが故に、不共生と云ふ。四は小乘の中には、無明支を、前の不正思惟、虛に託して起ると許すは、無因に似若たり。今、亦爾らざるが故に、無因を離る。三は法に約して容を顯す。一は果自ら起らざるを、不自生と名く。二は自ら既に立たず。誰に對して他を辨ぜん。又他も亦自に名く、皆自を成ぜず、云何が他生なる、故に不他生と云ふ。三は自他の因果、既に各成ぜざるが故に、不共生と云ふ。四は因緣を離れて、外に別の果法無

【四は…甚深なり】第四說は三乘中、最極甚深の說なり

【五は…緣起云云】第五說は、緣起無礙門に約す。これ一乘不共の妙說なり。

【全に生ぜず】因に就いていふ。

【亦全に生ぜず】緣に就いていふ。

【二力】二有力の意。

【此門に二云云】是は前の全有力全無力を承けて、事事無礙を成ず。

【因力を緣…爾り】緣有力を明す、亦他生自生あることと思ふべし。

【二力二無力云云】以下二句を合して明す。

【相障…無し】是れ法界緣起一多相入の法門を顯す。

きが故に、不無因生と云ふ。此上の三重は、『般若燈論』等に說くが如し。四は因緣形奪に約す。『對法論』に云はく、「自種有なるが故に、他に從はず。衆緣を待つが故に、自作に非ず。作用無きが故に、共生せず。功能有るが故に、無因に非ず」と。凡そ諸の緣起は、但雙句を亡ずるを、已に甚深と爲す、況んや四句を總亡するをや。是故に緣起最も極めて甚深なり。五は緣起無礙門に約す。但因緣生の果をもつて、因と緣とに相望するに、各二義有り。一は全有力、二は全無力なり。謂はく、因を果に望むるに、全に生ぜざる有るも、緣は必ず全に生ずるが故に、「因より生ぜず。緣生の故に」といふ。二は緣を果に望むるに、亦全に生ぜず、因は必ず全生するが故に、「緣より生ぜず自の因より生ずるの故に」と云ふ。三は二力倶ならざるが故に、共より生ぜず。四は二の無力、亦倶ならざるが故に、無因より生ぜず。此門に二義有り。一は、力に有不有の義を具するに異るが故に、相入せしむ。謂はく、因有力の時は、緣は必ず無力なり。是故に因の有力に由るが故に能く他を攝し、緣の無力に由るが故に、能く他に入る。彼緣力を會し、總じて因力に歸して、不他生と名く。不他と言ふと雖も、反りて自生を顯す。因力を緣に歸して、自より生ぜざるも亦爾り、前に反じて之を思へ。二力二無力を以て、各倶ならざるが故に、彼相入せざること無く、一力一無力相歸するが故に、恆時に相入す。相障礙せず、增上緣寛きを以ての故に、一切の諸法は、相入せざること無し。十忍品に云はく、「菩薩は善く緣起の法を觀じて、一法の中に於て、衆多の法を解し、衆多の法の中に、一法を解了す」と。良に此門に

【二に歸に云云】以下、相即を顯すなり。

【謂はく、直に云云】別して述するに、初に緣有因空を明す。

【餘の因…べし】因有緣空を例同し更に因を能攝、緣を所攝とする義を明す。

【三は…起すなり】三に大悲に約して明す。

【四は…謂ふ】四に一切相智に約して明す。

由る故なり。二は體に據るに、空不空の義有る故に、相即有り。謂はく、直に因の力を緣に歸するに非ず、共相入を明すも、亦乃し因の體、緣に由り、因の性空を顯し、緣に攝同す。何となれば謂はく、若し緣無きときは、則ち因無きが故に。果を生ずるを以て因と名く、緣無ければ果生ぜず。是時を因と名けず。明かに知んぬ、此因は彼緣に會歸するを、不自生と爲す。是故に緣は是れ有の義にして、能く攝せざること無し。因は是れ空の義にして、攝せられざること無し。因は所攝の故に、己を廢して緣に同じ、緣は能攝の故に、因を攝して己に同ず。餘の、因は緣を攝する所等、並に準思して、知んぬべし。此義に由るが故に、諸法の相は即ち障礙する所無し。上の文に、知一即多多即一等と云ふは、皆此義なり。是故に、無盡大緣起法の無礙自在、皆此門より開現す。此中に「無明を因として、諸行生ず」と言ひ、論經に「無明の因、行を緣として生ず」と言ふは、因、果を起すことを彰し、他作に非ざることを明す。「因緣能く行を生ず」と言ふは、果、因に由りて顯るるは、自作に非ざることを明す。又無明は是れ、行の自因なるを以ての故に、他作に非ず。亦先に行體無く、無明の中に在りて、後に還りて行を生ずるが故に、自作に非ず。餘も亦是の如く準思して見つべし。此一門の中に、論主は開いて、不自と不他の二句と爲す。

三は大悲に約して分別すとは、諸の外道、異の解脫を求むることを明す中に、彼が所求は、非想天等を以て、涅槃と爲すことを顯す。菩薩之を觀ずるに、但是れ有支緣生の法にして、是れ無爲涅槃の常德に非ずと。是故に菩薩隨ひて大悲を起すなり。四は一切相智に

【一四】以下、十觀の中、第九に因緣縛說を明す。十二有支連續して離れず、互に緊縛して解脫に背くをいふ。經の「無明の因緣にて一等の下。
【此門は云云】以下結嘆するなり。
【緣起…向ひ】第十觀に對していふ。
【極めて…現ぜんとす】第十觀を指す。
【二に…知んぬべし】二に厭離有爲に約して明す。
【第三の不共作】他作に非ず、自作に非ざるを、論に非二作といふを指す。

約して分別すとは、九門の內に於て、第八第九の二門を以て、合して一無始觀と爲す。遠公の云はく、「是れ眞諦觀なり。法の緣集を見るに、本性無きが故に、名けて無始と爲す」と。今謂はく、因緣より起る法は、的に元本ありて、之に依りて始めて、起ること無きが故に、無始と云ふ。「維摩」の中に、「無住の本に依りて、一切の法を立つ」といふは、此義に同じ。「中際生の故に、後際生ず」とは、法を擧げて釋成す。謂はく、此緣生は即ち是れ、不生の故に、無始と名く。是を大智所知の法と謂ふ。

第九に因緣縛說とは、亦四門あり。初は經に約す。是因緣生縛とは、謂はく、此緣起互相に縛住して、是れ生ずることを得ず。是縛を以ての故に、復是れ滅に非ず。一の縛の字、此法體は、諸の分別を離るるを、印するを以て、然も是れ緣起の縛相、亦離るるが故に、言に寄せて以て顯すが故に、縛說と云ひ、此縛は但し說の中に、在ることを明さんと爲るなり。此門緣起の法の事相、盡理の性に向ひて、將に極めて微妙處を現ぜんとするを顯すが故に、「論」に「隨順して世諦を觀ずるに、即ち第一義諦に入る」と云ふは、是れ此門なり。釋文は知んぬべし。二は厭離有爲に約すとは、深觀の四門の中に、此は是れ第三の不共作なり。非二作と言ふは、或は因を自と爲し、緣を以て他と爲し、或は果を自と爲し、因緣を以て他と爲す。此二の自他俱に、作さざるが故に。若し自他俱に作さざれば、何んが緣生と爲すことを得ん。此疑を釋せんが爲の故に、但隨順生と云ふ。謂はく、俗に隨ひて生を說くも、理實には無生なり。無知者故と言ふは、遠公釋すらく、「此は別して非他を

【三に…云ふなり】三に大悲隨順に約して明す。

【四は…故なり】四に一切相智に約して明す。

【一五】十觀の中、第十無所有盡觀を明す。「經に乃ち又無明の因緣にて諸行生ず」等の下。

釋す。我知者の能造作無きを以ての故に」と。作時不住とは、別して自に非ざることを釋す。彼無明は行と作るの時、行の自性無きことを明す。彼作に住する時、還りて後の行を起すが故に、作時不住と云ふなり。今更に釋せば、因の正しく有力の時は、緣は必ず無力の故に、相知ることを得ず、故に無知者故と云ふなり。此は是れ因緣、果に共せずして起る時を、名けて作時と曰ひ、因に於て緣に於て、的に所住無きか故に不住と云ふ。此は是れ因果共ぜずして、正しく果を作る時、此作は因に住せず、緣に住せず、亦果に住せざるが故に、作時不住と云ふ。此義は正しく是れ、經の中の縛の義なり。知んぬべし。三に順大悲分別とは、謂はく、諸の外道は異解脫を求め、非想等を以て涅槃と爲す。菩薩之を觀ずるに、但是れ有支にして染縛を離るるに非ず、涅槃眞淨の德を失ふが故に、大悲を生ず、故に如是復染生縛と云ふなり。四は一切相智に約して分別する內、無始觀の中に、隨順縛と名くるが故に。謂はく、生滅は唯縛なり、無本に隨順するが故なり。

(一五)第十無所有盡觀の中に、亦四門あり。初は經に約す。此有支の眞相既に盡き、無所有に隨順して、第一義に徹到することを明す。此は俗を壞せずして、恆に眞なることを顯すなり、故に無明因緣諸行生と云ふ、是は無所有に隨順す。問ふ、『無明は行を生ずる、是れ所有に順ず、何が故に乃し無所有に順ずと言ふや。』答ふ、『前の諸門に乘じ、次第して此に至る、彼無明正しく行を生ずる時、即ち無生に順じて、理に入ることを顯す故なり。經の意は此の如し。』問ふ、『順觀は既に爾り、逆復云何。』答ふ、『生既に性盡くれば、則ち所

【二に…差別なり】二に厭離有爲に約して明す。
【第四に…と名く】論第八、深觀を明す第四の文なり。
【下は別に…差別なり】論第八の深觀の下、無因を破する文を釋す。
【三…起す】三に順大悲に約して明す。
【四は…爲す】一切相智分別に約して明す。
【九に種種觀】論第八に、一切相智分別觀の中、九種を說くうちの一。
【二如是云云】總じて十章を結す。經の「是の如く逆觀に」等の下。

有は所有無し。俱に離るるが故に隨順無所有盡觀說と云ふ。說の義は前に同じく、思うて、其意を取れ。二に厭離有爲に約する中、第四に、「無因の作に非ず、有に隨順するが故に」と名く。何が故に經の中は無に順じ、『論』は有に順ずと名くる。釋すらく、經の意は、緣を以て理に歸して說き、『論』の意は性を以て、相に從へて說く、各別義を顯すが故に、是說を作す。又釋すらく、『論』の中は、有に順じて、意は無生を顯す、是故に經と意亦別ならず。下は別に無因を破す。一は縱破なり。謂はく、應に常に生ずべきが故に。二は奪破なり。謂はく、恆に生ぜざるが故に。三は此非佛法の下は、呵して詰破す。謂はく、無因と說くは最大の邪見なり。若爾の下は非無因を結す。是名の下は、說を釋して總結す。相諦と言ふは、相は是れ、前の成答の相なり、諦は是れ、前の二諦の差別なり。三に順大悲に約して分つとは、謂はく、諸の外道、異解脫を求めて、以て涅槃と爲す。菩薩之を觀ずるに、是十二支は三有の法なり。有求に隨順して、妄に無色を取りて、以て解脫と爲し、出世の涅槃の我德を失ふ。菩薩此を愍みて、順じて大悲を起す。四は一切相智分別に約す。此は是れ、第九に種種觀と名く。謂はく、三有の相、別に各多種狀の故に、種種と云ふなり。隨順の下は、其相を釋し顯す。此は是れ三有世俗の境、大智此を照すが故に、以て門と爲す。上來は別して十門を釋し竟んぬ。

二に如是逆順の下は、總じて十章を結す。既に逆順十種と云ふ、明かに知んぬ。前の十門の中に、皆逆順有ることを。前の文の中に、有は、逆觀無きことは、是れ略なり。

【一六二】次に第三大段に彼果勝を明す。經の「是菩薩は十二因緣」等の下初に行果なり。

【三脫】三解脫門

【下は別して云云】別して五段を以て隨釋するに、初に對治行及び離障を得るを明す下。

【先に云云】以下治勝を別釋する中三あり、初に空門を明す下。

一は有支行列、二は一心に攝歸し、三は力用相生、四は前後相屬、五は三道輪還、六は三際因果、七は三苦の過失、八は從因無性、九は有に似て無の若し、十は泯同平等なり。結前の十支を配する、皆見つべし。不住道行を釋し竟んぬ。

(一六二)第三大段に、彼果勝の中に、文別くるに二有り。初は行果、後は位果なり。前の中に、(二)『論』に分ちて五有り。初は對治行及び離障を得、是れ前の勝慢對治の果なり。二は勝行を得、是れ前の不住道行の果なり。三は三昧を得、前の治勝に望めて、以て果を說く。謂はく、前には三脫を修して、以て對治を說き、彼治轉た增するを、三昧勝と名く。四に不壞心とは、前の離障に望めて、以て果を說く。滅障に由るが故に、三昧の心破壞すべからざるを、不壞心と名く。五は自在力とは、前の修行に望めて、以て果を說く。謂はく、前の修行に依りて、上進無礙なるを、自在力と名く。下は別して釋する中に、此五を釋して、即ち五段と爲す。初の文の中に就きて、二あり。先に治勝を明し、後に離障を顯す。前の中に三解脫門の義を釋するに、略して五門を作る。一は名體、二は行相、三は治障、四は攝行、五は差別なり、別に說くが如し。是菩薩隨十二因緣と言ふ下は、正しく前の十門の有支に於て、皆此の如きの三空觀門有ることを顯す。先に空門を明さば、『論』の中に三に分つ。初に衆生の無我を見る。二は自性空とは、法無我を見る。經の中に略して此句無し。三は彼二作無なり。作者無きを見るを以ての故に。謂はく、前の二句は二我の體空たるを顯し、後の一句は二我の用空なるを顯す。亦即ち前は是れ我無く、後は我所無し。如是と

【一に滅…同じからず】一に無相門を明す下。

【三は…云ふなり】三に無願門を明す下。

【二に菩薩…云ふなり】上は治障の文を釋し、今は離勝を釋す。

言ふ下は結なり、知んぬべし。二に滅此事と言ふ下は、無相門を明すに、亦三義あり。一に滅障とは、彼有支を觀じて、自性滅するが故に、滅此事と云ふなり。問ふ、『此と前の無我と、何の別ぞや。』答ふ、『前は諸法に就きて、以て無我を明し、此中は能取の相を、遣らんと欲する心の故に、同じからず。』二に對治を得る者は、常に解脫現前す。經の中に略して此句無し。三に念相行ぜざる者は、因緣處を見るに、少法の相の生ずべき無きが故に餘不相續と云ふ。遠公の云はく、「此三の中に初の滅障とは、性心亡するを取る」と。二に理を得るを治と爲す。三は取相心滅にして、少法の生ずるを見ず、故に分別取相の心を離る。前に取性を滅すれば、凡夫に同じからず、今は取相を離るれば、二乘に同じからず。三は知此二の下は、無願門を明すに、亦三あり。一に前の二に即ち是れ、無願の所依の故に、依止と云ふ。二は更に有を樂はずとは、無願の體を顯すが故に、體性と云ふ。三に唯大悲等は、二乘に勝出するが故に、勝と云ふなり。二に菩薩修行の下は、離障勝を明す。初に彼我等を離る、是れ空門の所離なり。二に有相を離るとは、是れ無相の所離なり。三に無相を離るとは、是れ無願の所離の故に、離有無相と云ふなり。無相も取らざるを以ての故に、無願と說く。餘經に云はく、「無相を以ての故に、願求する所無し」とは、此謂なり。『論』の中に是の如く次第して、五地の下に於て劣を擧げて勝を顯す。初に五地を擧げて、此空門離我の勝を顯す。此文は是れ倒せり。若し正しくは應に、十平等深淨の心を以ての故に、遠離と言ふべし。即ち四地の身淨我慢を遠離す。今深空を以て、彼二我を

【第二…云ふ】第二段に修行勝の文を釋す。初に正修行の文の下。

【與大慈等】經の「大悲と和合して」等の文なり。

【二に即得…云ふ】二に修行勝の文を釋す。經に「即ち無障礙」といひ、論に修行勝者といへる下。

滅するが故に、此れ勝れたり。二は四地の離障を擧げて、此文の中の離作受の勝を顯す。三は此六地等、此地の初の十平等處に、有無を破する等を擧ぐ。今の地の滿の無相無願は、有無を破遣し、一切蕩盡することを顯すが故に、勝と云ふなり。

第二に悲心の下は、修行勝を明すに二有り。初に正修行、後に修勝を顯す。前の中に亦二あり。初に發勇猛修行とは、謂はく、始に修決絕す。二に菩薩如是知の下は、丈夫の志をも修行する者は、謂はく、果決して修成ずることを明す。前の中に亦二あり。先に修行の心。謂はく、三空を以て彼有支を觀じ、諸の衆生は、處して覺らざることを愍むが故に、悲行轉增と云ふ。悲に由りて增進するは、是れ利他の心にして、未だ菩提等を滿ぜざるは、是れ自利の心なり。下は修行勝を明す。中に於て二あり。先に智を修して、有爲に著せず、後に化衆生の下は、悲を修して無爲に住せざるなり。前の中に亦二あり。先は知、後は厭なり。知の中に就きて、煩惱業の生は、合散具鬪、增有り滅有り。二に旣に此法の有は、是れ過患なりと知りて、則ち厭離を生じ、合せしむべからざるが故に我知有爲等と云ふなり。是故に『論』に云はく、「有爲の法の多過なるを知り、生業煩惱等を遠離す」と。下は悲を修して、衆生を化す、知んぬべし。二に丈夫志行の中に、亦二あり。先は智、後は悲なり。智の中『論』に、厭對觀と名くるは、有爲を對と名く。見多過觀とは、重ねて釋成するなり。滅對とは、有爲の性滅するを明すが故に、無性等と云ふなり。與大慈等は、悲を修することを明す、知んぬべし。二に即得無礙の下は、修行勝を明す。

【而亦不住】經の「而も有爲法に住せず」の句を指す。

【第三に…明かんぬ（一）】第三段に、三昧勝を明す下、經の一萬三昧、十空三昧の文を指す。

【餘の二】無相、無願の二三昧。

【前の十空云云】十空を指す。

【論に攝して四】一、觀。二、不放逸。三、得增上。四、因事。

中に於て二あり。先に勝相現前す。『論』に、「智及び大悲勝れて隨順す」と云ふは、前の二行を牒する中に、各悲智有りて、能く上に順ず。「不住の道無礙に依りて、般若、現前す」とは、前の悲智不住の道に依りて、佛地をして無礙の智光を、現前せしむることを明す。「有爲涅槃平等と知る」とは、智悲、不住の所爲を解するなり。不共住とは、不住の義を解す。謂はく、智は有爲の法に共せずして、住するが故に、而亦不住等と云ふ。又、悲は無爲の法に共せずして住するが故に、亦不住其中等と云ふ。彼助道行不滿故とは、不住の所爲を釋す。智を滿さんが爲の助道は、有爲に住せず。功德を聚めん爲の助道は、無爲に住せず、故に欲具足等と云ふ。

、第三に菩薩住現前地の下は、三昧勝を明す。中に於て二あり。先に空定を明し、後に餘の二を顯す。前の中に、先に十空の上首を擧げ、後に多門を結す。此中の一萬は、『論』經に百千萬と名くるなり。前の十空の中、『論』に攝して四と爲す。一に觀は是れ觀解なり。二に不放逸とは、解に依りて行を起し、過を離るるを名と爲す。三に得增上とは、後に因りて德を成じ、上功德を得。四に因事とは、德に依りて用を起す。三昧は是れ、大用の本なるが故に、因事と名く。初の中は、第四の三昧を除き、餘の五を觀と名く。一は生空觀、二は法空觀、三は合して二空を取りて、第一義と名く。四は本識に依りて、二種の如來藏を觀ずる中に、是れ空如來藏なり、故に大空と云ふ。五は七轉識を觀ずるに、如來藏を離れず、和合して起り、皆自體無しと、故に合空と云ふ。『楞伽』に云はく、「七識も亦是の如

【第四に…化す】以下、第四に不壞心の文を釋す。經文は尋るべし。

【四は自分失せず】經に不轉心といひ、論に自乘不動不壞といふ。

【第五に…知んぬべし】以下第五に自在力勝の文を釋す。經の「是の如き等の心尊た」等の下。

【勝力の九】一、無降伏他力。二、能斷疑力。三、自乘不退力。四、寄處治定信力。五、不散壞力。六、依煩惱障淨對治堅固力。七、實對治力。八、化衆生力。九、智障淨力。

く、心と倶に和合して生ず」と。又云はく、「不壞の相に八行り。無相も亦無相なり」とは、此謂なり。二に不放逸とは、分別善修は是れ自分なり、修行無厭は是れ勝進なり。二に修滿足の故に、究竟と云ふ。三は得增上功德とは、勝德、空に依りて生起し、現前するが故に、生空と云ふ。四は因事とは、餘の三三昧なり。一は此空定に依りて、智障をして淨ならしむ、是事に因るが故に、如實離妄と名くるなり。二は空に依りて悲を起し、衆生を捨てず。是故に論經に、不捨空と名く。三は空三昧に依りて、願じて諸有に在りて、染著を遠離するを、無分別と名く。然も有に隨順して、不分別を離る、餘の文は知んぬべし。第四に是菩薩住現前の下は、不壞心の果を、得ることを明す。十句の中、初の一は總なり。深心とは深く徹して動じ難し。論經に「不壞心は、謂はく、堅固不退なり」と。餘の九を別と爲す。一は理に於て信觀し、二は行、受調に堪へ、三は甚深秘密の處に於て、能く驚怖せず。四は自分失せず。五は勝進猒むこと無し。六は他の德を嫉まず、己が德を破らず。二は行普淨なるが故に、實心と云ふ。七は慈普く生を益す。八は上地の智を求む。九は巧に衆生を化す。第五に如是等心の下は、自在力勝を明す。中に於て三あり。初は總、次は別、後は結なり。總の中に如是等心とは、般若を得るなり。轉勝增長とは、行力勝なり。隨順菩提とは能く深入するなり。勝力に九有り。總に就きて別を開く。一は下伏の力、二は上偏の力、三は捨小の力、四は信深の力、五は摧魔の力、六は治惑の力、七は道治の力、八は巧化の力、九は治障の力なり、並に論に辨ずるが如し。三に是菩薩の下は結

【一七】以上、行果を釋し、今は位果を釋す。

【一八】第三段に重頌を釋す。

なり、知んぬべし。

（一七）第二に菩薩住現前の下は、位果を明す。中に於て、三果は前に同じ。調柔の中に就きて、三あり。初は調柔行の内に、「正法を聽受し、說の如く行ず」とは、論經に「三昧慧光を得」と。釋すらく、義を得る時、能く說の如く行ずるを以てなり。因彼事とは、彼義、事を持つに因る、是故に此を說く。依勝三昧得奢摩他とは、是れ前の如實三昧なり。毘婆舍那は是れ、前の智慧光明勝なり。行行已憶持とは、能く彼行を持するが故に。所練淨の中に、是人乃至明淨と言ふは、彼障を解脫し、所練淨を釋するなり。證彼義故とは、知佛法藏を釋す。喩を釋する中に、出世間智增上とは、證智體淨を顯すなり。光明轉勝とは、用勝を示現して、以て體を顯すなり。教智光勝を以て、證智亦增上することを顯すなり。乃至方便智等を以てとは、合喩の文を釋するなり。無礙般若は是れ、佛智の光明なり。方便は是れ前の不住道の智なり。二に教智淨を釋する中に、前地は、月輪の喩を取るが故に小なり。此地は月光の喩を取りて、寬大の故に前に勝る。四流に隨順する、是れ魔の所行の故に魔道と云ふ、此を惡魔と名く、是れ彼魔道なり。三は是名の下は、說相を結す。攝報願智は、並に前に准じて知んぬべし。

（一八）第三大段に重頌分の中に、三十九頌あり、五に分つ。初の三は、前の十平等法勝慢對治を頌す。二に二十有り、不住道行勝を頌す。中に於て初の一は、前の初住地の心を頌し、總じて緣起を觀ず。二に五有り。初の因緣分次第觀を頌す。三に二有り。一心所攝觀

【一九】以下、第七遠行地を釋す。先づ名を釋す。

を頌す。四に二有り、自の助成を頌す。五に一有り、不相捨離を頌す。六に一有り、三道不斷を頌す。七に一は、三際差別を頌す。八に一は、三苦差別を頌す。九に一頌は、超えて第九の、生縛觀を頌す。十に一頌有り、却つて第八の緣起觀を頌す。十一に一頌半有り、第十の隨順有盡觀を頌す。十二に二頌半有り、結十門の名を頌す。三に菩薩如是の下の六頌半は、彼果勝を頌す。中に於て初の三は、對治勝を頌し、次の一頌半は、修行勝を頌し、次の半は、三昧勝を頌し、次の半は不壞心勝を頌し、次の一は自在力勝を頌す。四に供養の下の八半は、位果を頌す。中に於て初の四半は、調柔果を頌し、次の四は攝報果を頌す。略して願智果を頌せず。五に末後の一頌は、深を歎じ說を結す。第六地を釋し竟んぬ。

(一九)七に遠行とは、釋するに三有り。一は功用の後邊に約す。『攝大乘』に云はく「功用の行最後の邊に至る故に」と。世親釋して云はく「謂はく、此地の中に功用の行に於て、究竟に至ることを得。一切の相動搖する能はずと雖も、而も無相に於て、猶有行と名く」と。二は二義に約す。『解深密』に云はく「能く遠ざかり、缺くこと無く、間無く、無相の作意なるに證入し、淸淨地と共に相隣接するが故に、遠行と名く」と。解して云はく「缺くこと無く間無く」とは、前の六に遠く、淨地に相隣接し、後の第八に近し。三は三義に約す。『成唯識論』に「無相住の功用の後邊に至り、世間と二乘との道に、出過するが故に、故に遠行地と名く」と。此は『十地論』に同じ。『金光明』に云はく「無漏を無間無相に

思惟し、解脫三昧、遠く修行するが故に、是地淸淨にして無障無礙なるを、遠行地と名く」と。『莊嚴論』に云はく「菩薩は七地の中に於て、一乘の道に近づくを名けて遠行と爲す」と。問ふ、『誰か是れ遠く去る。』答ふ、「功用方便究竟して、此に遠ざかり能く去る。此遠去に由るが故に、遠行地と名く。」『十住論』に云はく「三界を去ること遠く、法王の位に近きが故に、身遠地と名く」と。『仁王經』には遠達地と名く。二に來意とは、亦三義有り。一に、前は二乘に寄せ、合して菩薩の次第轉勝を明す、是故に次に來る。二に無相觀に於て、前地未だ純ならず、今此は純無相に進入す、是故に次に來る。三に前は功用未だ滿ぜず、此地の中には滿ず、是故に來れり。三に所治の障とは、『地論』に依るに「細相の習障を離る」と。解して云はく、第六地には有相觀少きを以て、名けて細相礙と爲し。第七に於ては、純無相觀の故に、以て障と爲す。『唯識論』に云はく、「細相現行障は、謂はく、所知障の中の倶生の一分、生滅細相の現行有りと執す。彼は七地の妙無相道を障ふ。七地に入る時、便ち能く永に斷ず。斯に由りて、七地に、二愚及び彼の麁重を斷ずと說く。一は細相現行愚、即ち是れ此中の、生有りと執する者、猶流轉細生の相を取るが故に。二は純作意求無相愚、即ち是れ此中の、滅有りと執する者、尚還滅の細滅の相を取るが故に、純ら無相に於て、作意し勤求して、未だ空の中に有の勝行を起すこと能はず」と。解して云はく、所知障を以て、緣起流轉の生、還滅の滅を執し、前地所證の四諦を の麁相より、細なるが故に、以て名と爲す。問ふ、『此後の一愚は、正しく還りて還滅の細

【二に…來れり】二に當地の來意を明すに、初に寄位、次に無相、三に功用に約す。

【合して】今の字か。

【三に…滿すべし】三に所治障を明す。

【唯識論】同論九の三十五右。

【解して云はく云云】但し二愚を略し、後に重愚に就いて問答す。

【四に…同じ】四に所證を明す。

【解して云はく云云】解するに三義あり。初は名體に約し、次は本末に約し、後は機教に約す。

【五は…得と】五に所成行を示すに、初に十度門、次に三學門、後に行德門に約す。

相に迷ふ、何を以てか細還滅の愚と名けざる。答ふ、『此愚に二用有り。一に還滅の相を執し、二に純作意に無相を求む。』且く後の義に依りて名を立つ。『又釋すらく、「相に二種有り。一は有、二は無なり。無の相を取るを、名けて細相と爲す」と。若し此釋に依らば、無相を求むる即ち是れ愚なり。』梁の『論』に、一向無相思惟方便無明と名く。『金光明』に云はく、「一味執して思惟して、斷せんと欲して未だ方便の無明を得ず」と。諸餘の聖教は准じて通釋すべし。四に所證とは、『攝論』に依るに、「種種の法無差別法界を證得す」と。世親釋して云はく、「謂はく、此中に於て『契經』等の法は、種種の差別安立有りと雖も、異ること有ること無し」と。無性釋して云はく、「『契經』等の如し、種種の法別なり。此は是の如くにはあらず」と。『唯識』に云はく、「法無差別眞如は、謂はく、此眞如は多の教法に、種種に安立すと雖も、而も異ること無きが故に」と。解して云はく、謂はく、此眞如は教法の中には、名けて法界及び實際等と爲し、多名を安立すと雖も、體に別異無し、故に斯名を立つと。又釋すらく、本を以て末に從へば、眞如は種種の教法を流出す。末を以て本に從へば、種種の教法は、皆眞如に歸すと。此は三地と各一義を證す。又釋すらく、教法は機に隨ひて、種種に安立すれども、平等一味の法たるを失はず、是れ此所證の法なりと。『中邊論』に云はく、「第七地の中に、所證の法界を、種種法無差別義と名く。此知法無相に通達するに由りて、『契經』等の種種の法相の中に行せず」と。諸本の攝論同じ。五は所成の行に、亦三種あり。謂はく、一は十度の中には、方便善巧行に當り、二は地成

〔三〕以下、釋文を釋す。初に讚請分の釋。

〔第二に云云〕以下、正說分を釋す。經の「金剛藏菩薩の言はく」の下。

雙倶行無相行に當る。謂はく、即ち空方便智は、有の中の殊勝の行を發起す。三は無功用行を舉す。此下の文に說くが如し。及び『莊嚴論』に、「第七住從り、功用を行ずと雖も上は一道に登り、純ら無相に住す、故に六地の別果なり」と。梁の『論』に、「種種の法無別法界に通達して、一切法無相の果を得」と。『金剛仙論』に、「七地に發心して、如意三昧を得」と。當地の行果位果は文の如し。

〔三〕第七に文を釋せば、亦三分は前に同じ。初に讚請分の中に、十四頌有り、左に分つ。初の三は天衆供讚、二に一頌有りて、天王供養なり。三に一頌半有り、餘の天王等、法を歎じ雲を作す。四に七頌半有り、天女德を讚ず。中に於て初の二頌半は、佛の身業の利益を歎じ、次の一は佛の語業の利益を歎じ、次の三は佛の意業の利益を歎ず。次の一は已還往を歎じて、後地を聞くことを悕ひ、下の一は、衆首に請を結す。

第二に正しく地體を顯す中に、『論』に分ちて五と爲す。初の一は趣地の方便、是れ加行道なり。次の一は初住地、是れ無間道なり。次の一は正住地、是れ解脫道なり。次の一は、義は餘修を護れ、謂は、正地に在り。後の一は、地滿、是れ勝進道なり。初に樂無作行對治と言ふは、前の六地の中に、空は猶空に著するを、樂無作と名く。此地は有に隨ひて、空に著せず、故に對治と名く。此れ是地に行く、修治の法なり。二に雙障對治とは、前の加行の中には、前地の有無の心を治すと雖も、具有量有功用を以ての故に、即ち復是れ障なり。是故に今住地の中に、無量無功用の行を作して、以て對治と爲すが故に、以て名と

【下は廣く云云】別釋の中五、初に樂無作行對治を釋す。
【方便…發起す】論の「一方便智とは衆生を捨てず」等の文を釋す。
【此中の初句云云】別して十行を釋す
【如是と…名く】論に、護惡行因事を釋して「是の如く勝無量修行を得て一切衆生中に於て妄行を起さず」といふを指す。
【二に…故なり】二に財及び身勝因

爲す。三に雙行勝とは、垢障旣に除き、止觀倶に運ぶ。四に前上地勝とは、此地の功用、前の六地に過ぎ、後の三地に勝るるが故に、斯名を立つ。五地に滿足するが故に、雙行果と名く。下は廣く釋する中に、初分の内に就きて三有り。初に前を結し後を擧げて、趣入を勸修し、二に正しく行相を顯し、三に行の功能を結す。初の中に『論』に云はく、彼菩薩乃至非起增上行とは、總じて前地の染無作障を擧げ、下は能治を明す。謂はく、方便とは衆生を捨てず。法無我の智は對治し攝取して、增上行は此れ無作の行の中の、生樂心を治するなり。十妙行を起すとは、殊勝の行を發起す。此殊勝の行、出世間及び世間の增上行に於て、更に勝るるもの無し。卽ち初二三地は、是れ世間、四五六地を出世間と名く。彼行は此より劣るが故に、勝と云ふ、勝は猶し妙のごとし。下は別して十行を釋す。一一に皆空に卽する方便の慧、有の中の勝妙の行を發起すること有り。此中の十行を『論』には攝して四と爲す。初の三は各一なり、後の七を一と爲すが故に、四と爲るなり。此中の初の句は、論經の第二の句に同じ。謂はく、三空に卽して、四等を起すが故なり。『論』に護惡行因事と言ふは、方便智を擧ぐ。謂はく、慈は生を惱さざるを、名けて護惡の方便と爲し、此が與に因と爲るが故に名く。如是と言ふ下は、發起妙行を明す。空に卽して、悲を起すを以ての故に、不妄行と名く。二に隨諸佛の下は、財及び身勝を明す。因事とは、方便智を擧ぐ。謂はく、菩薩の無盡の財の果、無礙の身の報は、願行に薫發せずして、成せらるるに由るが故に、方便を彼勝因と爲すと說く。隨所須とは是れ財なり。

事の文を釋す。

【隨意取云云】 以下論文を釋す。

【三に…云ふなり】 三に護善因事の文を釋す。

【論主云云】 四に攝衆生因事を釋す。

【初の中云云】 以下別して初の七句を釋するに、論意を以てせり。

【五地の中…如し】 本記卷十二の六十三右にあり。

【淨經】 維摩を指すか。

隨意取とは是れ身なり。謂はく、意に隨ひて生を受くるが故に。財身は重ねて、因集の功德を騰する故なり。三に常樂思惟の下は、護善因事を明かすとは、方便智を以て、善根を攝護し、生長することを得しむるが故に、以て因と爲す。下は發起勝行を明かす。得彼勝因增上と言ふは、前を騰し後を起す。功德增上等と言ふは、正しく勝相を顯す、故に廣集等と云ふなり。論主の牒意は、前の三句を以て自利の行に屬し、後の七は合して、利他の行と爲し、同じく攝衆生因事と名く。倶に方便智を以て、攝生の因と爲す。七の中に初の一は、物に隨ひて生を受け、次の二は、化して障を離れしめ、下の四は、攝して善に住せしむ。初の中に、願力受生を彼上首と作すと。何が故に唯上首と作すや。衆生隨逐して化を受くるを得るを以ての故に、遠離三界等と云ふ。二に畢竟の下は、「煩惱障を離れしむ。對治を說くが故に」とは、性滅を照すと雖も、而も治を說くことを礙へず、能く大小の二惑を滅するが故に、煩惱隨煩惱等と名く。常自滅とは、性滅を礙へざるを明かすなり。三に隨順諸法の下は、智障を離れしむるが故に、爲滅四障と云ふ。五地の中、隨世智の處に、書論等の四障を說くが如し、應に知んぬべし。四は知一切佛國の下は、物の爲に土を取り、法會を興起することを明かす。淨經に、諸佛國及與衆生の空を知ると雖も、常に淨土を修し、諸の衆生を教化すと云ふは、此の意なり。五は知一切佛法身の下は、物の爲に正報の三業を、現ずることを明かし、先づ身業を辨ず。既に法身は相を離る、何が故に色を現ずる。衆生の與に五緣の生福を作さんが爲なり。一は見、二は聞、三は親近、四は供養、五は受法修

【共に】論に共に作るは善し。

【第二に…非ざるのみ】第二段に障對治の法を釋す、

【先に修云云】以下、進行するに二、初に修行無量の下、經に二十八あり。

【初の二云云】以下、論の六門を述釋す。

行の故なり。六は知諸佛音聲の下は、語業を明し、生の爲に、法輪を轉ずるが故に。七は知諸佛の下は、意業窮照して、諸の衆生の爲に間に隨ひて、能く釋することを明す故なり。三に是名の下は、總じて勝能を結す。上來は妙を釋し、下は方便智を釋す。「論」に云はく「此十發起の勝行と共に對す」とは、方便智と共なる對を明す。謂はく、空に於て著せざるを、方便智と名け、空に即するの有を、勝妙行と名く。今明けし、方便智を釋するなり。攝取對治とは、空を礙へずして、有行を起すことを明すが故に。此有行は方に能く、樂空の心を對治し、還りて方便智の所攝と爲すが故に、攝取と云ふなり。下は略して、初の二句の經を擧げ、對して以て之を顯す、餘は類して知んぬべし。

第二に是菩薩住七地の下は、彼障對治を明す、二種の相有り。一は修行無量とは、前は樂對治有量を障と爲すが故に、無量を修して、以て對治と爲す。二は修無功用行とは、前の樂對治は作意修習功用を障と爲すが故に、無功用を修して、以て治と爲す。先に修無量を明す中に、二十句有り、攝して十對と爲す。一一の對の中に、皆先に境界無量を明し、後に佛の德業無量を明す。或は要攝して五と爲す。初の一は衆生界無量、二は世界無量、三に兩對有りて、法界無量を明す。四に三對有り、調伏界無量を明す。五に後の三對は調伏方便界無量を明すこと、亦上の文の五海に同じ、知んぬべし。「論」に此十を判じて、總じて攝生と爲すが故に、隨所作利益と云ふ。調伏界の中に、二門を分つを以ての故に、十を攝して六門と爲す。初の二は知んぬべし。三に以何等慧とは、法界の中の二句を以て、

【以此差別六云】以下、菩薩の文を會す。

【四に以何心】論には以何等心に作る。

別開すべきこと難きが故に、能知の智に就きて、以て之を問ふ。四に以何心とは、調伏界の欲樂心を問ふなり。五に以何行とは、調伏の中の所起の志行を問ふ。六に置何乘とは、調伏の方便無量を問ふ。以此差別の下は總釋、是中の下は別釋なり。於無量衆生は初の句を釋し、無量化業は後の句を釋す。入所化無量なるを以ての故に、能化の無量の化業を作す。能化の中には、佛最勝なるを以ての故に、偏に之を擧ぐ。菩薩、入佛の廣化業を修するを、修無量行と名く。二に衆生住何處とは、無量の世界の中に於て、清淨の國土に依らしむるが故に、入無量世界等と云ふ。又、諸の世界の中に、佛土最淨なるを以て、菩薩修入し、物をして之に依らしむるが故に、修無量行と名く。下は並びに此に准ぜよ。三に以何等智の中に、二句あり。一は善惡三性等の法を知る。謂はく、無量種種法界は、差別の法を釋するなり。智慧覺は佛智得道を釋す。二に三世差別の法を知る。謂はく、無量劫數は上の句を釋し、通達三世は下の句を釋す。亦入智覺は前の句に會同し、合して一門と爲す。四に以何心に三種の事有り。一は欲を知り、二は根を知り、三は起行心を知る。若し能化に約せば、次の如く身口意を現ず。初に有衆生信種種天と云ふは、衆生の欲樂差別を釋す。身心隨同行と言ふは、入佛色身を釋す。若は正しくは應に、身は彼心に隨ひ彼行に同じ、法を說きて、其をして佛法に信入せしむと言ふべし、故に入無量衆生歡喜等と云ふ。二に知過去心習軟中利根とは、上の句を釋す。謂はく、根器宿修を過去習と名け、三品同じからざるを、軟中利と名く。如應說法とは、下の句の佛音聲等を釋するが故に、

【三に以何行】論に以何等行に作る。

【置何乘】論に置何等乘に作る。

【二に菩薩云云】以下、修行無功用行を釋す。

入無量諸佛知衆生等と云ふ。三に以何行とは、此一文も亦是れ六の中に入り、第五の攝なり。亦是れ第四の中の、後の一の攝なり。此は同じく是れ、化衆生の事なるを以ての故に、二處に攝するなり。隨衆生心と言ふは、上の句を釋するなり。說對治とは、下の句を釋す。謂はく、佛智を能治と爲すが故に、入無量衆生心心等と云ふ。六に置何乘とは、三乘の中に於て次の如く、三句各一を顯示す。皆上の句は所化、下の句は能化なること、並びに知んぬべし。二に菩薩作是念の下は、無功用の行を、修行することを顯す。中に於て二あり。先に觀解の方便を明し、二に如是智慧の下は、正しく修行を顯す。前の中に亦二あり。先に修行無量を擧ぐる中に、諸佛如來は無量の境なり。二に如是勢力の下は、趣求の意を起す。不以分別と言ふは、論經に「自然にして分別を以てせず」等と。『論』に釋すらく、「自然とは、自性勝れて無分別の故に」と。謂はく、八地已上の無功用の心を、自然等と名け、純熟して性に任せて、能く善行を起すを以ての故に、自性と名く。彼に依りて能く佛境の勢力を起す、是故に修習す。分別心は、緣を亡ずること能はざるを以て、等く法界を照す、所以に成ぜず。要ず無分別にして、相を取らざるを以ての故に、無分別を成ず、卽ち是れ無功用なり。正修行の中に、大方便慧を修すとは、是れ前の十種の方便智なり。何が故に前には以て障と爲し、今は復治と爲すや。釋すらく、汎く障治を論ずるに、二有り。一は是れ染障に翻離するを治と名く。二は是れ生障の修熟を治と名く。今は後に約して說く。但し前には始に修力勸みて、功用を起すが故に障なり。今此には數數修して、

【第三に…圓滿ならしむ】常修僧祇に止觀を修するを明す。下「常」に種種に現ずる等の義を指す。

【中に於て四有り】論に依れる分に四種の相を分つ。一、二行雙無間。二、信勝。三、能作大義。四、趣地分差別。

【初門の中…なり】初門を[illegible]する中に三あり、初に二行雙[illegible]を指す。

【本分色】[illegible]して、[illegible]、又[illegible]の[illegible]ことを指す。

【世俗智】[illegible]

純熟するが故に、而なり。若し爾らば、八地は何の別ぞ。釋すらく、此中に、有學無功用は、八地に同じからず。安住等とは、修行に由りて、立つることを明し、以不動故とは得成す。行堅にして動かざるを以ての故に不動と名く。是八地は功用の爲に動せざるに非ざるのみ。

第三に常修僧祇の下は、雙行分を明す。中に於て四有り。一に二行雙無間とは、內證の行果にして、內智觀に現ずるを、二行雙と名け、作常に續くを、名けて無間と爲す。上は是れ自分、下の三は、是れ勝進なり。二に始て信心を起し、上に於て興盛するを、信勝と名く。三に信に依りて行を起す。行に義利有り、適際なるを大と名け、作を起して作に勝るが故に、能作大義と名く。四に行の熟成するを差別分と名く。初門の内に於て三あり。初に常修乃至無間とは、總じて二行雙現無間を明す。故に「論」に、一念相續倶、他受會相に行理觀攝と云ふ。行作等と言ふは、正しく二行無間に、常に現ることを明す。「論」に云はく、一切行の中に、或は修行の時、無間に修せず息あずして行ずるが故に」と。不息とは全く修練するに非ず。不息とは、暫くも休廢するに非ざる故に無間と云ふなり。三に常行時等とは、常に現前を修するなり。二に常不違愛の下は、信勝を明す。常無著智の中の殊異の義、能現の相現前し、專念するが故にと。謂はく、無功の依止に於て、勇必に信向するが故に、常不違愛等と云ふなり。三に世智等の下は、能作の大義を明す。中に於て三有り。先に總標、二に何以の下は別釋なり。釋の中に、先に能具の智を釋し、後

【二に十云云】以下、所具の十行を釋す。

【八に後の四】方便、願、力、智の四波羅蜜をいふ。

【以是の下】論に「一是智を以ての故に、布施等を起す」等の文。

【二に上上智…故なり】願波羅蜜の釋文を明す。

【三に魔…能なり】力波羅蜜の釋文を解す。

【四は如是念云云】四に菩提分差別を釋するに、論意を以てす。

に所具の十度を釋す。前の中に二あり。先に徴責して、「十度の行廣し、何が故に念念能く具足するを得」と云ふ。釋すらく、大悲を以てとは、廣心なり。修習等は大心なり。廣大の心、念念に現前するを以て、是故に能く具す。二に十波羅蜜者の下は、別して所具の十行を釋す。謂はく、一念の中に已が善根を捨て、諸の衆生に與ふるを、名けて檀度と爲す。卽ち此念の中に、能く煩惱を息むるを、之を名けて戒と爲し、慈悲相應して損せざるを、忍と名け、進求して厭ふ心無く、異念無きは忍法なり。無生巧に此行を起し、大願轉た增し異論に壞せられず、妙に所宜に達す、是故に一念に、一施を起す時、卽ち此十を具し、餘の念念の中に、相續して絕えず。前の諸地には、皆此を修せんと欲すと雖も、七地の中に到り、方に成就することを得。『云云』に後の四を釋し、方便を釋する中に、無量智事を起すとは、方便の體相を釋し、以是の下は方便の功能を釋す。謂はく、方便を以て能く、施等の無量の行を起すの時、能く願力具足して攝するを以ての故に。二に上上智を起すとは、願の體相を釋す。以是の下は、願の功能を釋す。謂はく、願の功能は、上上智を起すを以て、此智能く彼施等を起すを以て、上上の行をして生ぜしむるは、皆攝取殊勝の故なり。三に魔等不壞は、力の體相を顯し、「是れ能く施等の障を離るるを以て」とは、是れ力の功能なり。四に如實知法とは、智の體相を顯し、以是の下は智の功能を明す。謂はく、智力に由りて、施等の差別を顯すは、衆生を化するを以ての故なり。四は如是念念の下は、菩提分の差別を明す、四種有り。一は大乘行に依るとは、謂はく、十度は自利の故なり。

【四家】般若家、諦家、捨煩惱家、菩提淨家。

【第四に…るなり】第四段に、前地と上地に勝ることを明す下の「解脫月」等の文を釋す。

二は化衆生に依るとは、謂はく、四攝をもつて生を攝するが故に。上の二は攝善の行、下の二は離過の行なり。三は、煩惱障增上淨の故に、實に依る。菩提分解脫門とは、何處住とは、實に對して問ふなり。以何等門とは、解脫門を問ひ、何等修行得淨は菩提分を問ふなり。經の中に略して、四家の句無し。一は般若能照、二は諦是所照、三は惑滅、四は菩提なり。一切助の下は、智障淨に依りて、以て無明を離れて、覺分をして圓滿ならしむ。

第四に解脫月の下は、前上地勝の差別を明す。中に於て二有り。初に前の六地に勝ることを明し、後に後の三地に勝ることを明す。前の中に就きて二有り。先は問、後は答なり。答の中に先は總、後は別なり。總の中に先に標、次に何以故の下は釋なり。謂はく、既に諸地皆しく具す、何が故に第七に、獨り名けて勝と爲す。下は釋する中に、此地の中功用の行滿ずるを以ての故に、功行具足と云ふなり。能く第八無功用の道に入るなり。前は謂はく在前にして、後地の業用を明し、智は是れ八地の證智なり、前の無功用の行を修する處に、說くが如し。道は是れ後因にして、即ち此地なり。下は別に勝相を顯する中に、二有り。先は總じて問起す「云何が此地の中、方便行滿足す」とは、方便の行は是れ功用の行なり。後答の下は、總じて舉げて以て釋す。謂はく、世出世は前の六地を舉げて、更に殊勝の行を起すに、此第七を顯す。是故の下は勝は劣に過ぐるることを結す。初地は願力、證願成辦を修するを、名けて大願と爲し、二地は戒、心惡を除き、三地は禪定を求めて、

以て衆生を益するを、轉增長得と名く。四地は智光を得法明と名け、四地は出世の道に入る。五地は還りて能く世に隨ひ、六地は深緣起に入る。上の六は各是れ一行の中に一切を具す。今此地の中には、一切の中に一切を具するが故に、前に過ぎたり。『論』の中、下地增上等は、是れ前を結するなり。云何の下は後を生ず。修行の下は略して顯すなり。智方便は是れ前の方便慧なり。菩提分は是れ前の所起の菩提分の行にして、此地に於て功用の行滿ずとは、總じて滿を結するなり。二に何以故の下は、正しく後地に勝ることを顯す。中に於て二有り。先に此勝過を明し、二に解脫月の下は、因に諸地の染淨の義を辨ず。前の中に、先に責むる意は、旣に此地菩提分勝と云ふが故に、勝と名くることを得ん。此勝は後に於て何の業用か有る。下は釋の中に、先に法、次に喩、後に合なり。初の中に慧所行の道は、是れ雙行の道なり。以是力の下は、正しく勝相を顯す。謂はく、此勢力を以て八地上の任運の行をして、自然に成就せしめて、更に加行無し。二に世界とは、無功用の位、淨世界の如く、有功用の位は、染世界の如し。隔位は超え難きが故に、以て喩と爲す。次に釋すらく、前の六地は之を喩ふるに染を以てし、後の三地は之を喩ふるに淨を以てす。唯第七地をば、染淨の位と名くることは、能く染を越えて、此淨處に到るを以てなり。旣に染は此に由りて越え、淨は此に由りて到る、是故に此地は、極めて要勝と爲す。合の中に、行雜道と言ふは、是れ染淨の道なり。論經に、染淨世界と名くるは、此義に據るなり。二に解脫月の下は、因に諸地の染淨の相を辨ず。中に於て先は問、後は答なり。答の中に

【第五に云云】第五段に、雙果分の下。經の「菩薩七地に住すれば」等の文を釋す。

二あり。先に通じて諸地染淨の相を明し、後に佛子の下は、別して七地に約して、以て染淨を明す。前の中に、法喩合有り。法の中に、先に總標、次に微責して云はく「前には是れ染と言ひ、今は後に淨と云ふ、此れ何の義か有る」と。下は廻向菩提を以て、離罪と名くることを釋す。論經の中に、二句有りて釋す。一は向菩提、是れ大心の故に、離染業と名く。二は隨道行、是の如く深心の故に、離煩惱と名く。喩の中に二あり。先に輪王の喩を擧げ、七地を未だ純淨と名けず。後に梵王の喩を擧げ、後の三地を、乃ち名けて淨と爲す。輪王に合する中の五句は、一に菩薩如是は、以て輪王に合す。二に從初地來乘等は、乘寶象に合す。三に知心煩惱は知貧苦に合す。四に不爲所汚は、王雖無苦に合す。五に不名爲過は、未離人に合す。梵王の喩に合すること、准釋して知んぬべし。二に諸佛子の下は、別して此地の染淨の相を明す。中に於て亦二あり。初は此地の離障の、前に勝ることを明すが故に、過貪欲等と云ふ。二に此地を前に形へ、後に望めて名を得ること、不定なることを明す。常に純無漏觀に、在ること能はざるを以て、是故に將に出觀して、佛を求めんとするを、以て煩惱と爲すなり。

第五に菩薩住七地より下は、雙果分を明す。理實には、此果は前の諸分に通ず。彼雙行は是れ、正地の相なるを以ての故に、彼果と名け、『論』には分ちて四と爲す。一は業清淨とは、是れ前の彼障對治家の果、二に勝三昧を得とは、是れ雙行家の果、三に過地とは、是れ前の上地の勝果、四に得勝果とは、是れ前の樂無作行の對治果なり。彼に方便及び勝

【業淸淨…四有り】論に四を擧ぐ。一、戒淨勝。二、世間智淸淨勝。三、得自身勝。心行、二平等無與等。四、得勝力禪等現前勝。

【三摩拔提】(Samāpatti)玄應音義に「定に入らんと欲する時を、三摩鉢底と名く」と、これ此意なり。

【二に能入…名くるなり】二に三昧勝を明す下。經の「能く菩提善伏三昧」等の文を釋す。

【後の四の智障】論に智障淨の下、四種の障淨を明すをいふ。

行を起すを以て、滿足すること此に在る故なり。初の業淸淨の中に就きて、四有り。一は戒淨に二有り。一は具戒に就きて明す、故に成深淨身業等と云ふ。二は行に約して戒を明す。謂はく、惡を斷じて善を修するが故に、所有不善等と云ふ。二に又世間の下は、世間智淸淨勝を明す。三に於三千の下は、得自身勝心行を明す。二平等無與等とは、謂はく、深心及び妙行を、二と爲すなり。四に是菩薩所有の下は、得勝力を明す。禪等現前勝と言ふは、略標なり。謂はく、神通等を等取するなり。禪は是れ四禪、定は是れ滅定の故に、寂滅樂行と言ふ、故に滅定なり。三摩拔提は、此には等引と云ふ。謂はく、平等に諸の功德を引生するが故に。餘の文は知んぬべし。二に能入の下は、三昧勝を明すに、二有り。初に別に十門を列ね、二に總じて多類を結す。前の中に初の五は、解を起して分別し、後の五は、行を成じて分別す。前の中に、一は未觀の義に依りて、心を伏して觀ぜしむ。二は已觀の義に依りて、重ねて更に審思す。上の二は理法を知り、三は義持力に由り一句に依りて無量の義を解し、進んで心慧を益す。四は文持の力に由り、一義に依りて、無量の名を說くが故に、能く義を分別するなり。上の二は教法を知る。五は一切の五明處に通ずるの智に依る。此は事法を知るが故に、如實分別と云ふ。後の五の中に、初の一は煩惱障淨にして、其行深きことを顯し、後の四は智障淨にして、其行廣きことを顯す。初の中に、眞如觀、堅固不壞なるを以ての故に、惑障を治し、後の四の智障の中、一に勝功德障を治すとは、謂はく、智通勝德を發起すること能はざるが故に、以て障と爲

【三に…知んぬべし】三に過地を明す下。經の「是菩薩三昧を得れば」等の文を釋す。

【二に是菩薩住是の下】二に作業廣大過を明す下。經の「是菩薩是地に住すれば」等の文を釋す。

【二に是菩薩清淨行の下】經の「是菩薩は清淨行の故に」等の文。

【無生忍】無生法忍の略。無生無滅の眞如の理に安住して動ぜざるをいふ。

【脱月は…答なり】「佛子、菩薩初地に住す」等といふ文なり。

す。對治は知んぬべし。二に具に無礙法界自在の業行を、起すこと能はざるが故に、以て障と爲し、定に依りて、此を起すが故に、以て治と爲す。三に於深上佛法怯弱障とは、謂はく、如來所說の深玄の法に、情礙へて入らざるが故に以て障と爲す。對治は知んぬべし。四に不住行障とは、寂用無礙なれども俱行すること能はざるが故に以て障と爲す。經の對治の中に、二種生死に背き、無住涅槃に向ふが故に名くるなり。

三に是菩薩の下は、過地を明す。中に於て三有り。初は行修善巧過、二に作業廣大過、三に行修勝入過なり。初の中に就きて四句あり。一は巧智、二は深悲、三は過聲聞等は、下に對して出を彰す。四は趣佛智地は、上に對して入を彰す。謂はく、此れ能く八地已上の法流水の中に入りて、止觀俱現し、任運に流注して、佛の果海に入るが故に名くるなり。二に是菩薩住是の下は、作業廣大過を明す。中に於て二有り。先に正しく過相を顯し、二に其分齊を彰す。前の中に亦二あり、先に下に對して出を彰す。二乘に過ぐるが故に、『論』に無量三業と云ふ。無相行とは『論』に、入定遠離相無量と云ひ、聲聞緣覺も、亦淨業遠離行れども、相は無量に非ずして、一切衆生を利益すること能はざる故に。此は二乘に過ぐることを釋す。復次此無量勝餘下地とは、此は前の六地等に過ぐることを顯すなり。二に是菩薩清淨行の下は、上に對して入を明す。謂はく、八地に無生忍を得れば、先相の故に能く照明するなり。二に過の分齊を彰す中に、先は問、後は答なり。脱月は前を執し、後に同じて難じ、剛藏は後を簡びて、前に異するの答なり。答の中に法喩合

【三に佛子の下】三に行修勝入過を明す下。經の「佛子菩薩七地に住す」等の文を釋す。

【四に…名く】四に勝行を得ることを明す下。經の「解脫月の言はく、佛子、菩薩は何の地」等の文を釋す。

あり。法の中に「大法に緣る」とは、佛果の大法を觀察し攀緣するなり。四五六地は、二乘の位に寄するを以て、此地は彼を出づるが故に、說きて過と爲す。理實には已に前に、過ぎざるには非ず。『論』に、方便行盡念觀住故と云ふは、方便慧及び殊勝の行滿足するを、盡と名け、上の境界に於て念觀相應するが故に、名けて住と爲す。三に佛子の下は、行修勝入過を明す。中に於て甚深行遠入故とは、能上入なり。遠離者彼障滅とは、前の障を離るるなり。無行を釋すること、知んぬべし。身口等と言ふは、『論』に云はく、「聲聞辟支佛は、彼相業を離ると雖も、是の如くにはあらず。少を得て足れりと爲し、上行を求めざるが故に」と。謂はく、二乘も亦離相の業用、菩薩に如かずと雖も、少を以て足れりと爲し、上求せざるが故に。餘の文は知んぬべし。

四に解脫月の下は、勝行を得ることを明す。中に於て二あり。先に三摩拔提の勝行を明す。謂はく、空に在りて住せざるが故に。二に發起勝行とは、謂はく、殊勝の行を起すが故に。前の中に、先に問、後に答ふ。答の中に、從六地等は、得法の分齊を明す。今住此地等は、劣に勝過することを辨ず。中に於て法喩合有り。法の中に、先に總じて、得て證せざることを明し、後に是菩薩成就の下は別して顯す。衆生を捨てずして寂に即して、用を起すを以ての故に、成就不思身等と云ふ、喩合は知んぬべし。二に菩薩知是以大願力の下は、發起勝行を明す。經の中の十句を、『論』に攝して八と爲す。後の三句を以て、合して一と爲すが故に、八種の行有り。共對治攝とは、謂はく、此八行は皆所治と共

四【願力を以て有を取る】願力を以て三界に生を受くるをいふ。

に、倶にして而も汚れず。又障は能治と共にして、治行常に立つ。深く涅槃を樂ひて、身を生死に現ずるが如し。能所治倶なるを以て、共對治と名け、二門互に收むるが故に、復攝と云ふなり。初の中に、願力智力は、是れ能發起なり、從禪等は所起の行緣を明す。雖深愛等は、正しく所發の行相を明す。一は功德の行を起し、世間門に隨順す。謂はく、世間に現じて、德行を增修す。二は既に世間に現ず、何等の身を以てする。謂はく、上首の身は方に能く攝するが故に。三には既に世間に在り、豈染せられざらんや。願力を以て有を取るが故に、所染無し。四は既に世に在りて、染せず、世行に同ぜざるが故に、染せずと爲んや。釋して云はく、爾らず、妻子有ることを示すを、家不斷と名く。此に在りて熾然たれども、而も燒ると爲さざるなり。五に直上の如く凡に同じて、攝化するのみに非ず、亦乃し能く二乘を轉じて、上佛智に入るが故に、入行と名くるなり。六は資生の行を示す。謂はく、飮食は身を資け、睡能は神を資く、皆生死に順ずるに、是れ魔の境界なり。七は衰退有ることを示すに、老病死の三は是れ魔の所行なり。上の二は魔行を轉ず。八は轉行とは、諸の凡夫の煩惱の行を轉ずるに、所轉の煩惱は三種を出でず。諸の恩愛無明の故に、三句有り。初は化して、諸見を轉ず。謂はく、外道の著見を、名けて見貪と爲し、化して離るるを轉と名く。二に化して無明を轉ず。謂はく、智は世及び出世に、達することと能はざるを、名けて障礙と爲し、化して離るるを轉と名く。三に化して貪結を轉ず。菩薩は現に勝妙の樂具を受けて、天龍等の處に過ぐれども、而も著せず、彼をして見已りて

【下は…知んぬべし】以下、位果を明す下。經の「菩薩は是の如き智慧」等の文を釋す。

【日光…如し】論には、「日光の喩と言ふは、前地の說の如し」といふ、今は取意の文。

【三】以下、第三に、重頌を釋す。

著重心を生ぜしめ、各己が所貪の五欲を捨てしむるが故に、攝取して彼が貪心を轉ずと名く。又釋すらく、此三亦是れ、菩薩の自行は常に正し。謂はく、菩薩は邪に處して恆に正なり、塵に居して染へず、貪に在りて貪らざることを明す、倶に菩提と名く。下は位果を明す中に、三果の釋讃は、皆前の說に同じ。能讃行の中に、護持佛法と言ふは、「論」に云はく、「三千界に於て、大師と爲ることを得るが故に、能く法を護る」と。次の二句は師の義を釋す。方便行滿とは、功用の行なり。自行を修すること、勝るるが故に、衆生の上首、利他の行勝るるが故に、師と爲るに堪へたり。所練淨の中に、慈悲生旣法忍淨と言ふは、利益衆生は法忍に依た顯す。此地釋名應知とは、謂はく、利益は是れ有の中の殊勝行、法忍は是れ空の中の方便智なり。此二を雙べ行ずるを、善修無相行と名くるなり。善根轉勝と言ふは、修行の功用盡至の故に、遠行と名く。盡至と言ふは是れ、功用究竟の義なり。教喩の中に、衆寶嚴金とは、一切菩提分法の、方便行の功用、滿足するを示現するなり。今智淨を頌する中に、「日光は前地の說の如し」とは、前地は月光、月明に勝るを取り、今は日光を取りて、轉の義を取らず。前地の月に同じきが故に、義を指すなり。此地の勝は日の月に勝ることを指すが故に。餘の文は準じて知んぬべし。

【三】第三に重頌の中に、四十四頌有り、七に分つ。初の九は前の十地行差無作行對治分を頌す。二に三有り。彼の對治分の中の、無量行を頌し、略して無功用行を頌せず。三に八有り。便行無間分を頌す。四に十一有り、前の上地勝分を頌す。五に八有り、雙行果分を頌

す。六に四有り、位中の三果を頌す。七に末後の一頌は、勝を歎じ説を結す。

華嚴經探玄記卷第十三

昭和五年十二月一日印刷
昭和五年十二月十日發行

昭和新纂國譯大藏經宗典部第十五卷

不許複製

編纂者　昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者　三井晶史

發行者　東京市神田區一ツ橋通二番地
株式會社東方書院
代表者　三井晶史

印刷者　東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者　井波康三郎

發行所　東京市神田區一ツ橋通二
株式會社東方書院
電話九段三八四二
振替東京六八六一一

印刷所　西村由太郎・製本所　眞貝定次郎

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3308